

幅・津留遺跡

熊本県文化財調査報告第三三六集

一〇一九

熊本県教育委員会

発行者：熊本県教育委員会
所屬：教育総務局文化課
発行年度：平成30年度

幅・津留遺跡
熊本県道28号熊本高森線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
第2分冊

31 March 2019
熊本県教育委員会



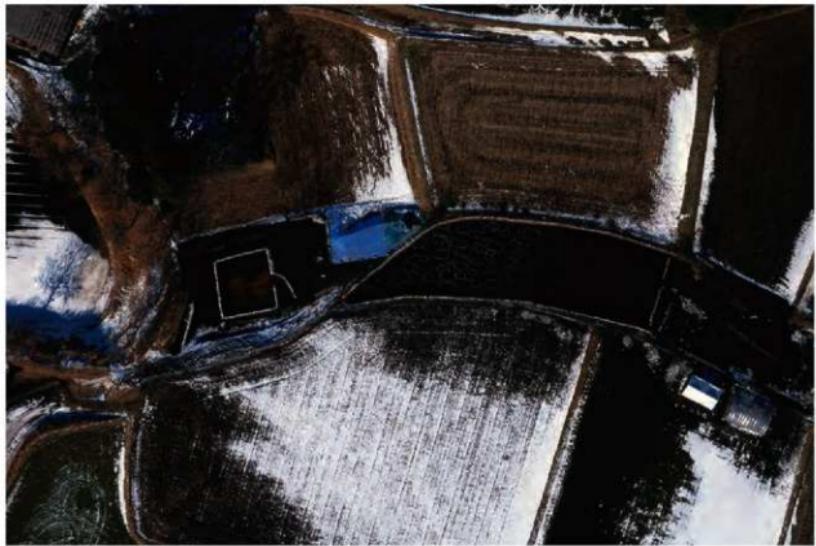
南郷谷全景



中央火口丘群と南郷谷 W → E



津留地区（9～20区）の調査範囲



津留地区 9・10 区 S→N

図絵 2



津留地区 11・12区 S→N



津留地区 13区 S→N



津留地区 14 区 S→N



津留地区 15 区 S→N



津留地区 16 区 S→N



津留地区 17 区 S→N



津留地区 19区 S→N



津留地区 20区 S→N



幅・津留遺跡出土鉄斧・鑿



幅・津留遺跡出土攻玉関連遺物 1



幅・津留遺跡出土攻玉関連遺物 2



玉類（勾玉・管玉）



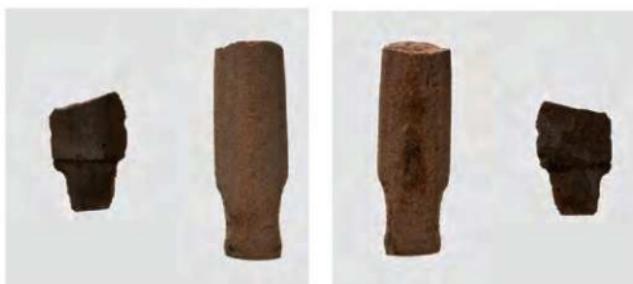
石砍丁（再利用品、製品）



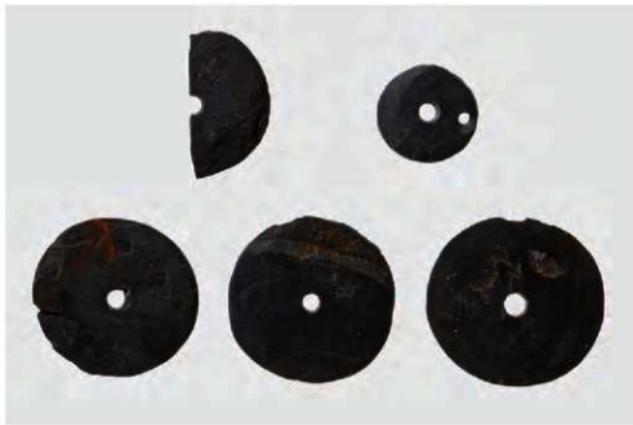
磨製石斧（破片）



イノシシ形石製品



石劍（破片）



円盤形石製品（破片、
再利用品、製品）



12区 SI20 出土土器(壺、鉢、盃)



12区 SI20 出土土器(壺)



12区 SI30 出土土器（壺、鉢、甕）



14区 SI48 出土土器（甕）



14区 SI48 出土土器（壺、ジョッキ形土器）



15区 SI43 出土土器（壺、甕）



13区 SI42 出土土器（壺、鉢、甕）



17区 SI69 出土土器（壺、高環、甕）



17区 SI72 出土土器(壺、鉢、ジョッキ形土器)



17区 SI72 出土土器(壺)



17区 SI72 出土土器（瓶）



17区 SI73 出土土器（線刻画）

幅・津留遺跡

熊本県道 28 号熊本高森線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

31 March 2019
熊本県教育委員会

例言

- 1 本書は、熊本県道 28 号熊本高森線道路整備事業に伴い記録保存を目的として実施した熊本県阿蘇郡南阿蘇村大字両併字幅並びに阿蘇郡高森町大字高森字津留に所在する幅・津留遺跡の発掘調査報告である。
- 2 本書は 3 分冊をもって構成し、本分冊はその第 2 分冊である。
- 3 この発掘調査は、熊本県教育委員会が調査主体となり、熊本県教育委員会教育総務局文化課が調査を担当した。
- 4 発掘調査の成果は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目 1667）で整理し、調査記録及び出土文化財は、熊本県文化財資料室が保管している。
- 5 本書の編集は、宮崎敬士が担当し、坂田美智子、堀章子がこれを補佐した。

Excavation and Research for Settlements in The Yayoi Period, located in Aso Caldera, Japan.

幅・津留遺跡 第2分冊 目次

口絵

目次

幅・津留遺跡の玉類とその製作技術

大坪 志子 305

はじめに

1 形態的特徴

2 石材

3 推定される製作工具と製作工程

4 まとめ

幅・津留遺跡出土鉄製品の検討

鄭 宗鎧・村上 基通 317

はじめに

1 出土した鉄製品

2 弥生時代の鉄器

3 弥生時代の副産物

4 古代以降の鉄製品

5 弥生時代の鉄器の検討

津留地区の調査

1 弥生時代の調査	3
1-1 土壙墓 (ST)	3
1-2 溝 (SD、SX)	44
1-3 突穴建物 (SI)	61
1-4 挖立柱建物 (SB)	241
1-5 土壙 (SK)	244
2 古墳時代以降の調査	247
2-1 突穴建物 (SI)	247
2-2 土壙 (SK)	257
2-3 包含層	269

分析と考察

幅地区における墓域の土器廃棄遺構と出土土器

石田 智子 277

はじめに

1 幅地区的墓域における土器廃棄遺構の特徴

2 幅地区的墓域から出土した土器の特徴

3 考察

おわりに

幅・津留遺跡出土紙石の検討

森 貴教 289

はじめに

1 資料と方法

2 分析

3 考察

おわりに

抄録

奥付

幅・津留遺跡出土のガラス製品

谷澤 並里 295

はじめに

1 資料の概要

2 ガラスの材質分析

3 資料の分類的位置づけ

4 弥生時代後期の阿蘇カルデラ地域とガラス製品

第1分冊 目次

調査の目的と方法

1 目的と経緯	3
1-1 調査の目的	3
1-2 調査に至る経緯	3
1-3 発掘調査の実施	5
2 遺跡の概要	9
2-1 自然	9
2-2 人文	11
3 調査の方法	17
3-1 調査区と基本土層	17
3-2 発掘作業の方法	27
3-3 整理作業の方法	27
3-4 報告書の記述方法	28
3-5 遺構の構造	29

幅地区の調査

1 縄文時代の調査	35
1-1 石器 (RQ)	35
1-2 土器 (RP)	37
2 弥生時代の調査	43
2-1 土壙墓 (ST)	43
2-2 溝 (SD, SX) と柵 (SA)	105
2-3 竪穴建物 (SI)	152
2-4 掘立柱建物 (SB)	193
2-5 土壙 (SK)	197
2-6 包含層	202

付表

縄文石器観察表	209
縄文土器観察表	209
縄文時代微細石片観察表	210
弥生石器観察表	215
弥生土器観察表	240

第3分冊 目次

幅地区的遺構

墓葬 (ST)	3
条溝 (SD, SX)	26
竪穴建物 (SI)	48
掘立柱建物 (SB)	63

幅地区的遺物

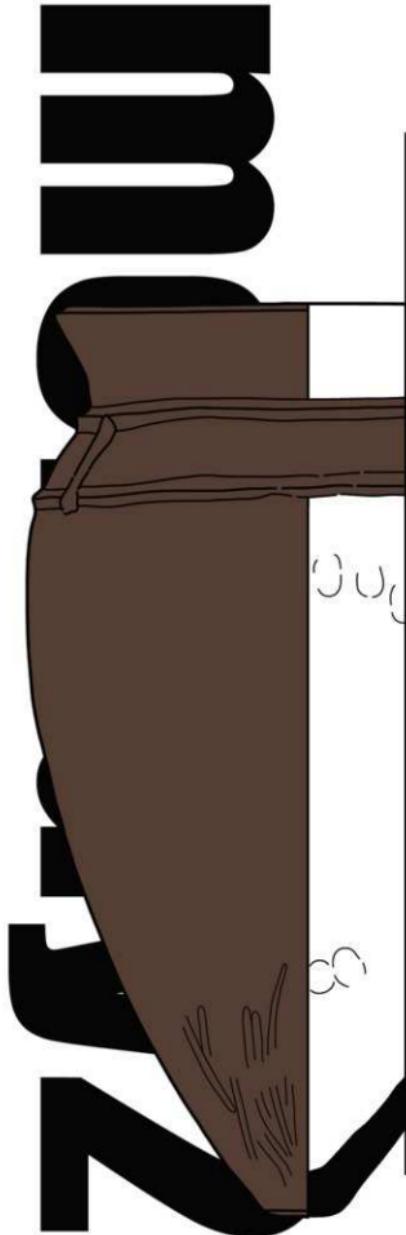
石器 (RQ)	69
土器 (RP)	75

津留地区的遺構

墓葬 (ST)	91
竪穴建物 (SI)	111
掘立柱建物 (SB)	179
条溝 (SD, SX)	181

津留地区的遺物

石器 (RQ)	189
土器 (RP)	200



幅・津留遺跡

津留地区 の調査

弥生時代の調査

土壌墓 (ST)

溝 (SD、SX)

竪穴建物 (SI)

掘立柱建物 (SB)

土壌 (SK)

古墳時代以降の調査

竪穴建物 (SI)

幅・津留遺跡の9区から20区までの調査区を、
津留地区としてまとめる。

津留地区では、弥生時代の集落、古墳時代以降の
遺構と遺物が発掘された。

9区から20区までの調査区とグリッドは、次図
のとおり設置された。

各調査区の面積は、9区 563m²、10区 499m²、
11区 238m²、12区 698m²、13区 180m²、14区
526m²、15区 300m²、16区 195m²、17区 310m²、
18区 19m²、19区 108m²、20区 203m²、合計 3,839
m²である。

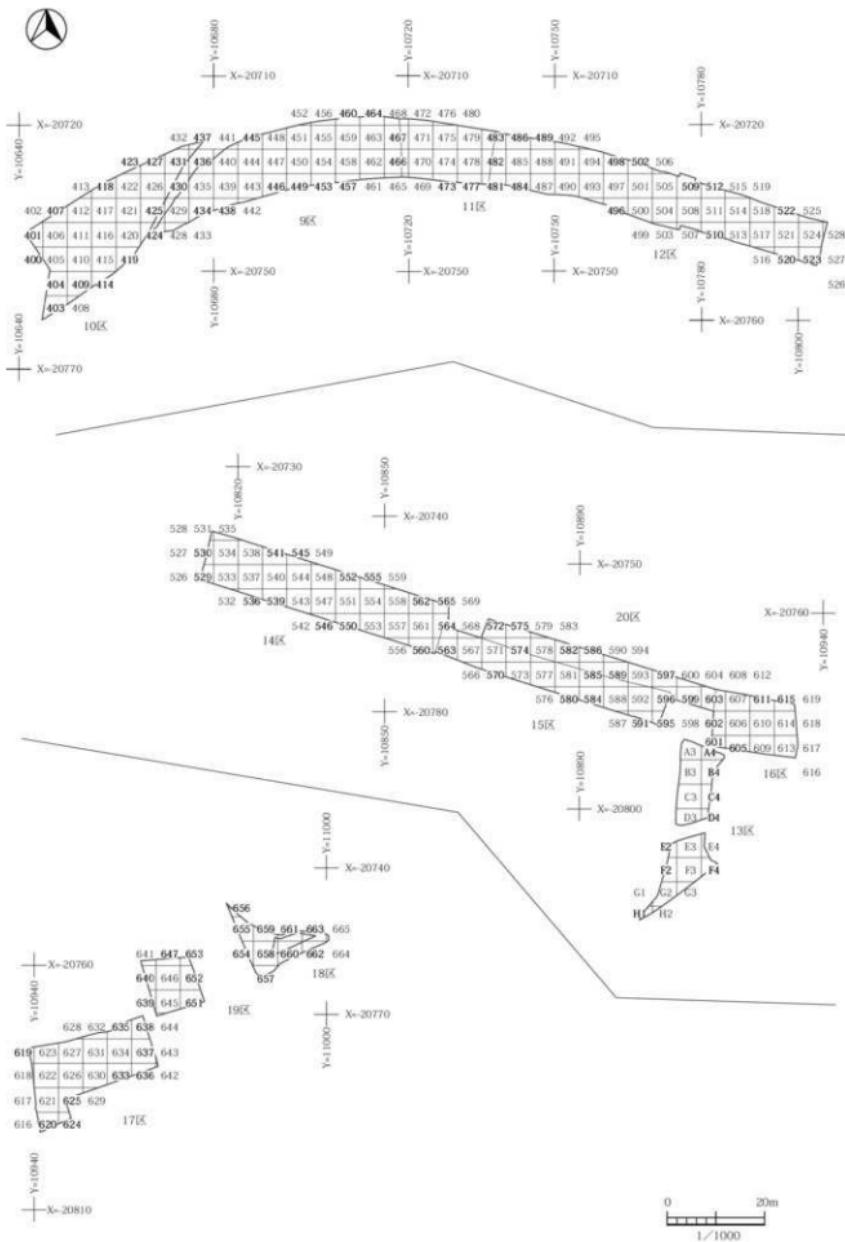


図144 津留地区全調査区グリッド図

1 弥生時代の調査

津留地区では9～20区までの調査区全体を対象として弥生時代の調査を実施した。弥生時代の調査終了後に弥生時代までの遺構を埋め戻し、道路整備事業の施工範囲が弥生時代調査面より上位となるよう設計変更したため、弥生時代の遺構は現地保存されている。

津留地区的弥生時代の調査では、土塙墓が形成する墓域、竪穴建物、掘立柱建物が組成する居住域、並びに両域を区画する条溝が確認された。居住域の竪穴建物には鍛冶工房、攻玉遺構が含まれる。遺物は、石器、土器、鉄器等が出土している。

1-1 土塙墓 (ST)

土塙墓は、108基を確認した。これには、木棺土塙墓9基が含まれる。

各土塙墓からは鉄器、石器、土器等の遺物が検出された。鉄器の出土例は2基(ST243、ST317)、石器の出土例は9基(ST204、ST210、ST218、ST239、ST241、ST249、ST253、ST291、ST295)、土器の出土例は22基(ST198、ST200、ST201、ST206、ST219、ST238、ST242、ST243、ST246、ST248、ST254、ST256、ST263、ST287、ST289、ST290、ST296、ST301、ST309、ST314、ST319、ST321)である。ST239からは勾玉が出土している。

なお、側面に横穴をそなえる例1基(ST198)、標柱穴をそなえる例4基(ST228、ST229、ST230、ST240)、赤色顔料を検出した例8基(ST228、ST243、ST247、ST277、ST280、ST290、ST294、ST316)がある。

また、調査時に17番号(225、233、234、250、251、252、257、258、259、264、270、273、274、275、285、299、317)は欠番となっている。そして、調査記録から墓葬であると判断できない規模、検出範囲、構造の6例(ST197、ST271、ST283、ST284、ST298、ST300)は、墓葬から除外した。

ST193

ST193は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土塙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色(10YR2/2)土。
- 2：埋2層：黒褐色(10YR2/3)土。
- 3：埋3層：未注記
- 4：埋4層：黒色(10YR2/1)土。

ST194

ST194は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土塙墓である。ST231、ST249を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色(7.5YR3/2)土。きめ細かな土。2層～7層土を含む。4層は少ない。2b層プロック大きめ。7a層土は微量。
- 2：埋2層：黒色(7.5YR2/1)土。2層～7層土を含む。2層のプロックが目立つ。7a層の土3%くらい含む。
- 3：埋3層：黒褐色(7.5YR2/2)土。2層～7層土を含む。各層細かに混じる。
- 4：埋4層：黒褐色(7.5YR3/1)土。2層～7層土を含む。7a層の土が4割。小石大の大きさの土。
- 5：埋5層：黒褐色(7.5YR3/1)土。2層～7層の土を含む。4層と7a層の土が目立つ。底部に地山あり。
- 6：埋6層：黒褐色(7.5YR3/1)土。7a層の土を除き土は細かい。屍床部。

ST195

ST195は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土塙墓である。

また、層序は記録されていない。

ST196

ST196は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土塙墓である。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色(7.5YR2/2)土。2層～5層の土を含む。各土のプロック。小石大。
- 2：埋2層：黒色(7.5YR1.7/1)土。2層～5層の土を含む。4層土の上が多く黒っぽい。
- 3：埋3層：黒色(7.5YR2/1)土。2層～5層の土を含む。粒は細かめ。
- 4：埋4層：黒色(10YR2/1)土。小口穴の埋土。黒色土(6)とアカホヤ火山灰(7a)が混在する。アカホヤは直径4～5cmのプロック。

ST198

ST198は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた一

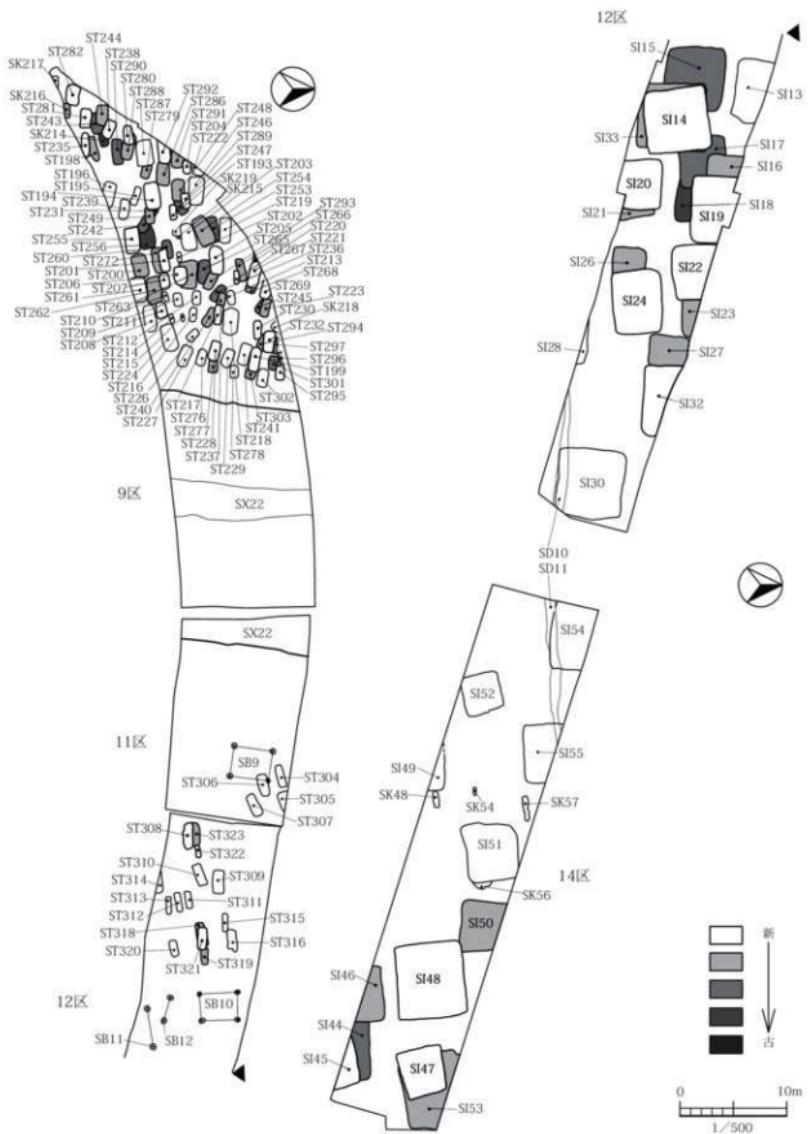


図 145 津留地区遺構配置図（弥生時代）

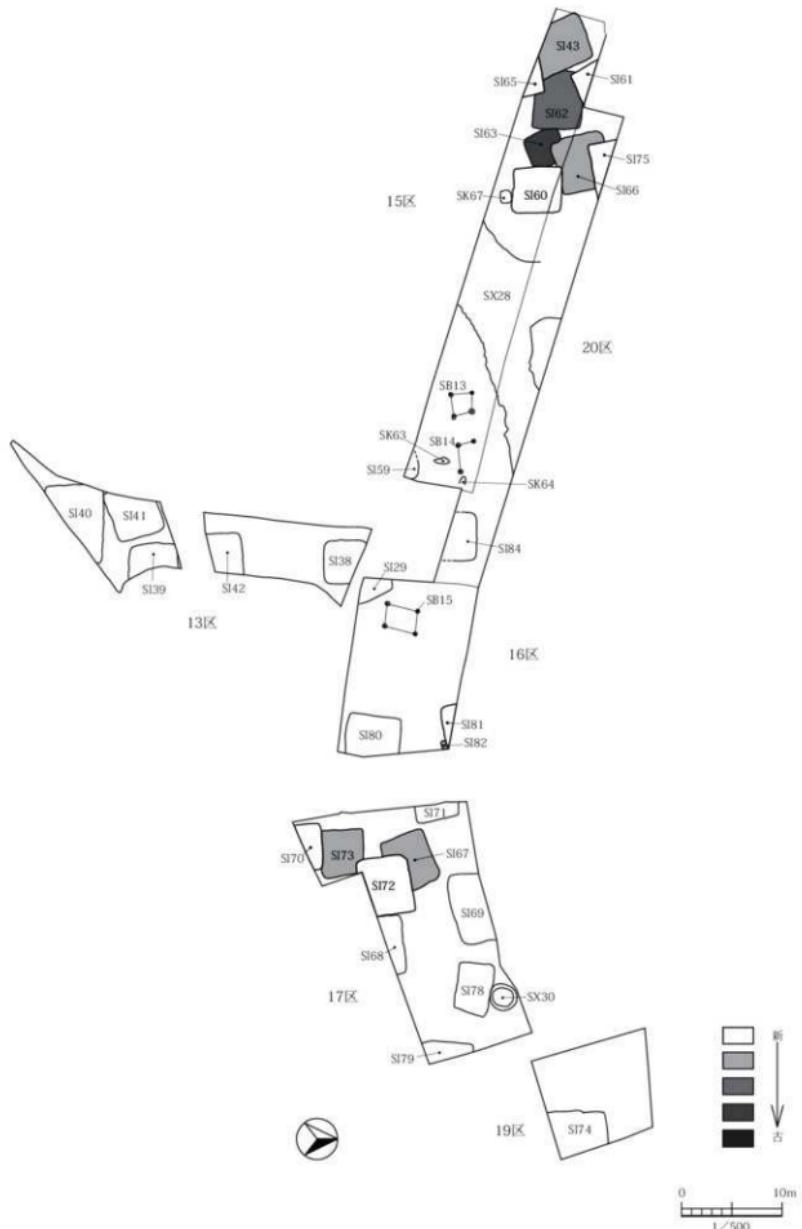


図 146 津留地区遺構配置図（弥生時代）

段掘りの直葬土壙墓である。ST235に切られる。

なお、側面に横穴が付設している。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。2b～3層より構成される。覆土。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2b～4層より構成される。覆土。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。4～6層より構成される。主体部埋土。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。5～6層より構成される。

ST199

ST199は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST241に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。5層を母材とする。
- 2：埋2層：褐色（10YR4/4）シルト。5層、6層、7層を母材とする。各層の土を径5cmまでの大きさでまだらにブロック状に入る。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）シルト。3層～7層を母材とする。2よりブロックが小さく7層、6層の量も少ない。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）シルト。3層～7層を母材とする。3によく似るがよくしまっている。少ないが径5～7cmのブロック（3層）が入る。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）シルト。5層～7層を母材とする。5層、6層の径5～8cmのブロックをやや含むが7層は細かく碎いた状態。主体部埋土。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）シルト。5層～7層を母材とする。全体に細かく碎いた状態。わずかにベンガラを検出。屍床部埋土。

ST200

ST200は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。ST261に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）シルト。3層～4層

より構成される。

- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）シルト。3層～4層より構成されるが、4層が多く含まれる分、黒色がやや強くなる。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より構成される。埋土の粒度が小さくなる。他の墓の傾向からすると主体部埋土である。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～4層より構成されるが、ブロックで埋められ、直径が5cm程度である。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。5層が中心。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。5層が中心。5とほぼ同じ土質。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成され、屍床部と小口穴両方とも同じ土で埋めている。

ST201

ST201は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST260, ST272を切る。また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成される。直径5cmを超えるブロックが入る。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。6層～7a層より構成され、細粒化する。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）土。6層～7a層より構成される。

ST202

ST202は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）土。3層～7層から成る。大きなブロックはなく各層の土を細かく混ぜた様な土。アカホヤ（7層）はわずかしか入っていない。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。5層～7層から成る。細かく碎いて混ぜた土を入れている。7層（アカホヤ）は下部に径5cmのブロックで入る。

ST203

ST203は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（2.5Y3/2）シルト。2層～4層から構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～4層から構成される。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～4層から構成されるが、4層が多い。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。2層～7a層から構成される。
- 5：埋5層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。6層～7a層から構成される。

ST204

ST204は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST291を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～4層より構成される。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。3層～6層より構成される。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。3層～7a層より構成される。7a層のアカホヤのブロック（直径1cm未満）が混じるようになる。

ST205

ST205は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST265、ST267を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（7.5YR2/2）シルト。7層～4層の土が母材。7層土は少なめ。ブロックは大きい。
- 2：埋2層：黒褐色（7.5YR2/2）土。7層～4層の土が母材。色は1より少しだが灰がかる。
- 3：埋3層：黒褐色～黒色（7.5YR2/1）土。7層～4層の土が母材。
- 4：埋4層：黒褐色（7.5YR2/2）土。7層～4層の土が母材。7層の土がブロック状に分布。

5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。7層～4層の土が母材。

6：埋6層：黒褐色（7.5YR2/1）土。7層～4層の土が母材。7層土のブロック大きめ。

7：埋7層：黒褐色（7.5YR3/2）シルト。7層の土が50%程。5層～7層の土が母材。4層土はブロック状に少量。他の層より土がきめ細かい。

ST206

ST206は、不定形の墓壙で一段掘りの直葬土壤墓である。ST263を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。2層～6b層を母材とする。
- 2：埋2層：暗褐色（10YR3/3）土。2層～7層を母材とする。4層、3層をこぶし大のブロック状に含む。7層アカホヤは径2cmまでの小ブロックをわずかに含む。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）シルト。7層～4層を母材とする。7層アカホヤを細粒と径5cm大のブロックで多く含む。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/3）シルト。7層～3層を母材とする。3層の硬い土、4層の黒、7層のアカホヤと径3～4cmのブロック状にまんべんなく含む。またアカホヤは細粒でも多く含まれる。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/3）シルト。7層～3層を母材とする。3層を直径3cmのブロックで含む。4層、7層は径2cm以下で含む。
- 6：埋6層：暗褐色（7.5YR3/4）シルト。7層～5層を母材とする。5層、6層を径5cm大のブロックで含み、7a層のアカホヤを多量に含む。

ST207

ST207は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST200、ST262を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（7.5YR3/2）土。7層～2層を母材とする。径1cm～3cmのブロックを含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。7層～3a層を母材とする。ブロックの径は小さくなり7層は細粒。

3：埋3層　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。7層～5層を母材とする。7層のブロックは径5cm大で6b層に似る。

4：埋4層：黒褐色（7.5YR3/2）シルト。7層～5層を母材とする。5層、6層を径3cm大のブロックで含み、7層は細粒で多く含まれる。

5：埋5層：褐色（10YR4/4）シルト。7層～5層を母材とする。7a層はこぶし大で含まれ（量が多い）、5層、6層を径3cm大で含む。

ST208

ST208は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）シルト。3層～5層を母材とする。よくしまっており、硬い灰黄褐色（10YR4/2）の3層を径5cmのブロックで含む。覆土。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。3層～7層を母材とする。1よりややカフカしており、3層の硬い土を径5cmのブロックでやや含むが、6層、7層の土は小さく碎いている。覆土。

3：埋3層：黒（10YR2/1）褐色（10YR4/6）土。6層～7層を母材とする。7層を多く含みやわらかい。屍床内埋土。

4：埋4層：未注記

ST209

ST209は、不定形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST262を切る。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）シルト。4層～6層の土が母材。7層土はごくわずか。

2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。4層～7層の土が母材。7層土は少ない。

3：埋3層：黒色（7.5YR2/1）土。4層～7層の土が母材。7層土が多少ほぐれた状態で混じる。

4：埋4層：黒色（7.5YR2/1）土。5層～7層の土が母材。7層土の割合が大きい。各土はきめ細かい。

5：埋5層：黒色（7.5YR1/1）土。主として4層土。

ST210

ST210は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）シルト。2b層～3層が母材。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2b層～7a層が母材。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2b層～7a層が母材であるが、7a層の量が増す。

4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。4層～7a層が母材となり、7a層のブロック（径1～5cm）が多量に含まれる。

ST211

ST211は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。2層～4層から構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）シルト。2層～4層から構成される。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/3）シルト。2層～7a層から構成される。

4：埋4層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト。2層～7a層から構成される。細粒化しているので、遺体にかぶせた土は粉碎して入れたようである。

ST212

ST212は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（2.5Y3/2）シルト。2層～7a層から構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2層～7a層から構成される。

3：埋3層：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト。4層～7a層から構成される。

4：埋4層：褐色（10YR4/4）シルト。4層～7a層

から構成される。細粒。

ST213

ST213は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～7a層により構成される。主体部をバックするものである。西側は凹んでいる。上半身は西側にあつたのではないか。
- 2：埋2層：暗褐色（10YR3/3）土。4層～7a層より構成される。主体部を埋めた埋土である。粒度は小さくなり、あえて細かく碎いて入れたと考えられる。

ST214

ST214は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（7.5YR3/2）シルト。2b層～4層を母材とする。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2b層～5層を母材とする。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。4層を母材とする。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層を母材とする。

ST215

ST215は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。2b層～5層が母材となる。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。5層～6層が母材となる。

ST216

ST216は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2層～7層を母材とし構成される。径1cm～5cmのブロックを多く含み、7層のアカホヤはわずかに含まれる。

2：埋2層：暗褐色（10YR3/3）シルト。主体部埋土。3層～7層を母材とする。硬い3a層が径2cm大のブロックでやや含まれる。7a層のアカホヤは細粒として多く含まれる。

ST217

ST217は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST237、ST240を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）シルト。3層～7a層の土から構成され、かなりしまっている。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層から構成されるが4層の量が多いようである。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。4層～7a層から構成される。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。4層～7a層から構成されるが細粒化する。
- 5：埋5層：暗褐色（10YR3/3）土。4層～7a層から構成される。
- 6：埋6層：褐色（10YR4/4）シルト。7a層が均一に混じり粘土化する。

ST218

ST218は、隅丸方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）シルト。7層～4層を母材とする。
- 2：埋2層：黒褐色（7.5YR2/2）土。7層～4層を母材とする。
- 3：埋3層：黒褐色（7.5YR2/2）土。7層～2層を母材とする。ブロックもやや粒径が大きくなる。径2～3cmが中心となる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。7層～4層を母材とするが、4層と7層が径5cm大のブロックで混入する。

- 5：埋 5 層：黒褐色（10YR2/2）シルト。7 層～4 層を母材とする。7 層は細粒のものが多く混じる。
- 6：埋 6 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。7 層～5 層を母材とする。
- 7：埋 7 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。7 層～6 層を母材とする。
- 8：埋 8 層：褐色（10YR4/4）シルト。7 層を母材とする。袖を構築する際、最後に掘り上げた土で造っている。上から押しているようでブロックが扁平化している。

ST219

ST219 は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/1）土。2b 層～7a 層から構成されるが、2b 層や 3 層が多い。7a 層はブロック（直径 1cm 程度）で少量含まれる。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR3/1）土。2b 層～7a 層より構成されるが、3 層のブロックが 4 割程度占める。ブロックも大きく、直径 4～5cm 程度であろう。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR3/1）土。2b 層～6 層より構成されるが、かなりしまっている。
- 4：埋 4 層：黒褐色（10YR3/1）土。2b 層～7a 層より構成されるが、4 層の量が多く、やや黒味が強い。
- 5：埋 5 層：黒色（10YR2/1）土。2b 層～7a 層より構成されるが、7a 層の量が増す。粒度は細かくなる。主体部埋土。
- 6：埋 6 層：黒褐色（10YR3/2）土。4 層～7a 層より構成されるが、5 層の量が多い。
- 7：埋 7 層：黒色（10YR2/1）土。マトリクスは 6 層。これに 7a 層が混じっている。屍床部埋土である。
- 8：埋 8 層：黒褐色（10YR3/2）。袖埋土。3 層～7 層より構成される。3 層は直径 5cm のブロックで入る。6 層が多く 7 層はわずか。
- 9：埋 9 層：黒褐色（10YR3/2）。袖埋土。3 層～7 層より構成される。3 层は直径 3cm のブロックで入る。5 層の量が多く、7 層はわずか。
- 10：埋 10 層：黒褐色（10YR3/2）。袖埋土。4 層～7 層より構成される。5 層の量が多く、7 層は少ない。

ST220

ST220 は、長方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST266 を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。5 層～7a 層より構成される。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。4 層～6 層より構成され細粒。
- 3：埋 3 層：黒色（10YR2/1）土。5 層～6 層より構成される。
- 4：埋 4 層：黒褐色（10YR3/2）土。主体部。5 層～7 層より構成される。細粒。

ST221

ST221 は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST267, ST268 を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/2）シルト。7a～2b 層が母材となる。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）シルト。7a～2b 層が母材となる。主体部。
- 3：埋 3 層：にぶい黄褐色（10YR3/3）シルト。7a～2b 層が母材となる。

ST222

ST222 は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）土。3 層～5 層より構成される。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。3 層～5 層より構成される。
- 3：埋 3 層：黒色（10YR2/1）土。6 層が主である。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。6 層が主であるが、7a 層が混じっている。

ST223

ST223 は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設

えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST269に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（2.5Y3/2）土。3～7a層より構成される。マトリクスは5層で、ブロックで、6、3、7a層が直径3～5cmの大きさで含まれる。
- 2：埋2層：黒褐色（2.5Y3/1）土。3～7a層より構成される。6層と7層はブロックで多量に含まれる。粒度も5cm以上と大きい。
- 3：埋3層：黒褐色（7.5YR2/2）土。3～7a層より構成される。6層のブロックは1～2cm大とやや大きいがあとは1cm以下の細粒である。主体部埋土。

ST224

ST224は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（2.5Y3/2）シルト。3～2層が母材となる。
- 2：埋2層：黒褐色（2.5Y3/1）シルト。7a～2層までを母材とするが、3a層と7a層が直径10cm程度あるブロックが混在する。
- 3：埋3層：黒褐色（2.5Y3/1）シルト。7a～2層が母材となる。
- 4：埋4層：黒褐色（2.5Y3/1）シルト。4～2層が母材となる。
- 5：埋5層：黒褐色（2.5Y3/1）シルト。7a～3層が母材とするが、アカホヤの7a層の量が多い。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/3）シルト。ブロックが少くなり、やや粗粒化する。屍床部直上であり腐植の量が多くなっている。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/3）土。屍床部構築土。4～7層が母材となる。
- 8：埋8層：黒褐色（10YR2/2）土。屍床部構築土。5～7a層が母材とするが、アカホヤの7a層の量が多い多量に含まれる。

ST226

ST226は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。2～3層より構成。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）シルト。3～7a層より構成。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。3～7a層より構成。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。3～7a層より構成。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。4～7a層より構成。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成。7a層はブロックで多量に含む。
- 7：埋7層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。6～7層より構成。ほとんどが7a層である。

ST227

ST227は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。2～7a層から構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2～7a層から構成される。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2～7a層から構成される。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）シルト。主体部。2～7a層から構成される。

ST228

ST228は、隅丸方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

なお、主体部外に標柱穴をそなえる。埋4層で赤色顔料が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）シルト。2～7b層から構成。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7a層から構成。
- 3：埋3層：暗褐色（10YR2/3）土。4～7a層から構成されるが、1と2と比べて粘度が小さくカフカの感触。主体部埋土である。遺体を埋める時、土を細かく碎いてふりかけるように埋めているように感じる。
- 4：埋4層：黒褐色（7.5YR3/2）土。4～7層の土

より構成されるが、3より7層の割合が多い。ベンガラ検出。

ST229

ST229は、隅丸方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

なお、主体部外に4×2列の標柱穴をそなえる。
また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（2.5YR1/3）土。3～7b層までの土で構成。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2b～7a層までの土で構成。1よりアカホヤの7a層が少ない。主体部を直接バックする埋土。
- 3：埋3層：黒色（10YR1/2）土。3～7a層までの土で構成。庭植が多いためカフカした感触。

ST230

ST230は、隅丸長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST294を切る。

なお、主体部外に標柱穴をそなえる。
また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2b層～7a層までを母材とする。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層までを母材とする。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層までを母材とする。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。4層～7a層までを母材とする。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。4層～7a層までを母材とする。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。4層～7a層までを母材とする。

ST231

ST231は、不明の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST194、ST249に切られる。

また、層序は記録されていない。

ST232

ST232は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの木棺土壙墓である。

なお、側板穴の痕跡が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。5～7a層より構成され、マトリクスは5層を中心とする。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。3～5層より構成される。3層は直径5cm以上の大きさのブロックとして入る。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。2b～7a層より構成され、土がブロックの状態で混じって埋土となっている。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。2b～7a層より構成される。マトリクス部分は粒度が細粒化する。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層および7a層より下の土（9層か、暗褐色10YR3/4、粘性大）により構成される。細粒化されている。
- 6：埋6層：暗褐色（10YR3/4）土。6層7層9層から構成される。7層はわずか。9層は大きなブロックで入る。6層（黒）は細粒。側板部分。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）土。6層7層9層からなる。ブロック状のものはなく細かい。側板部分。
- 8：埋8層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。屍床部埋土。7a～9層からなり、8層と9層がほとんど。

ST235

ST235は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST198を切る。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。3～6層を母材とする。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3～6層を母材とする。1より3層のブロックが大きい。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層よりなる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層よりなり、アカホヤの7a層が散在。

ST236

ST236は、隅丸方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST237に切られる。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。3～7a層より構成される。主体部覆土。

2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）土。5～7a層より構成される。粒径が大きく、直径5cm程度ある。主体部埋土。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層より構成され、細粒。直径が1cm未満。屍床部埋土。

ST237

ST237は、方形の墓壙で二段掘りの直葬土壙墓である。ST236を切り、ST217に切られる。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。4～7a層から構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。4～7a層から構成される。

3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。4～7a層から構成されるが、7a層の量が2より多い。

4：埋4層：暗褐色（10YR3/2）シルト。5～7a層から構成されるが、7a層がほとんどである。

ST238

ST238は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST243, ST244を切る。

なお、屍床部が7a層上層まで掘削された土壙墓である。屍床部は7層だが床がわずかに湾曲している。また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。3～6層の土を含む。各層とともにブロック状で粗い。

2：埋2層：黒色（10YR1.7/1）土。3～7a層の土を含む。3層上はブロック状だが4～7a層の土は細かい。7a層土はわずか、大きさ半粒大。

ST239

ST239は、隅丸方形の墓壙に楕円形の主体部を設

えた一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（7.5YR2/2）土。きめ細かな土。2～5層の土含む。7a層の土はわからない程。

2：埋2層：黒色（7.5YR1.7/1）土。きめ細かい土。2～7層の土含む。7a層の土は細かく入り、1よりすこし茶がかる。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。屍床部の土。4～7層の土含む。2より多少粘性がある。

4：埋4層：黒色（7.5YR2/1）土。3～7層の土を含む。各層土は3～4cmのブロック状が目立つが、7層土は細かい。

ST240

ST240は、隅丸方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST217に切られる。

なお、主体部外に標柱穴をそなえる。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）シルト。3～7a層より構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。4～7a層より構成される。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）シルト。4～7a層より構成される。粒度は小さくなり、ブロックは直径で1cmを超えるものはない。

4：埋4層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。5～7a層より構成される。

5：埋5a層：黒褐色（10YR3/2）シルト。4～7a層より構成される。

6：埋5b層：黒褐色（10YR2/3）土。6～7a層より構成される。

7：埋5c層：黒褐色（10YR2/2）土。6～7a層より構成される。

ST241

ST241は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST199を切る。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）シルト。3～7a層

- まで構成されるが、3層の割合が多い。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。4～7a層により構成される。アカホヤ火山灰の7a層のブロック（直径10cm超）が多く含まれる。径の大きさから小さい道具による掘削ではなく、やや大型のものを使用していたのであろう。
 - 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。4～7a層により構成される。7a層は2よりは細粒となっており、かなり細かく掘削される。
 - 4：埋4層：褐色（10YR2/1）土。4～7a層により構成され、7a層の割合が高い。

ST242

ST242は、隅丸方形の墓壙に椭円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST249、ST255に切られる。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。2～4層で構成される。
 - 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。4～7層で構成される。3層4層を頭大のブロックで含む。7層はわずか。
 - 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。2～7a層で構成される。3層のブロックが大きく、直径10cm程度。粒は細粒化せず、単に埋め戻したようである。
 - 4：埋4層：黒褐色（10YR2/3）土。5～7a層で構成される。ブロックは含まず細粒化されており、7a層を多く含む。
 - 5：埋5層：黒褐色（10YR2/3）シルト。5～7a層で構成される。7a層は直径2cm大的ブロックで含まれる。
 - 6：埋6層：暗褐色（10YR2/4）シルト。5～7a層で構成される。7a層が多量に入る。

ST243

ST243は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。

- なお、埋6層で赤色顔料が検出された。
- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層よりな

- る。弥生土器片が含まれる。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層からなるが、3層のブロック（直径3～5cm）が増す。
 - 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。4層からなる。
 - 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。4層からなるが、他の層の混じりがほとんどなく、黒色土が中心。
 - 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。直径10cmを超える3層のブロックが含まれている。
 - 6：埋6層：黒褐色（7.5YR2/2）土。4層からなる。ベンガラを多量に含む。

ST244

ST244は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST243を切り、ST238に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層から構成される。ブロックは小さい。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層から構成される。直径5cm以下のブロックを多く含む。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/3）土。ほぼ3～6層より構成され、7a層がわずかに含まれる。直径5cm大的のブロックを多く含み、細粒化はされていない。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。5～7a層より構成され、細粒化されている。東側上面にベンガラ検出。
- 5：埋5層：暗褐色（10YR3/3）土。6～7a層より構成されている。7a層が多い。

ST245

ST245は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST223に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。2～7a層から構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）シルト。5～7a層から構成される。
- 3：埋3層：暗褐色（10YR3/3）シルト。2～7a層から構成されるが、細かく砕いて埋めている。

ST246

ST246は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2～5層土含む。
ブロック状の土は見られない。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。2～5層土含む。
ブロック状の2～3層土が目立つ。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7層土含む。
土はほぐして入っている感じ。7aの土が細かく混じる。
- 4：埋4層：黒色（7.5YR2/1）土。4～7層土含む。
土は細かくほぐしている。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。4～7層土含む。
7層土の割合が4より多い。屍床部にあたり、下の7層土にかなり混じり込んでいる。
- 6：埋6層：黒色（10YR2/1）土。2～5層土含む。
ブロック状の2～3層土、4層土が主体。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7層土含む。
粗いブロック状の各層土が混じり袖部を形成している。
- 8：埋8層：黒色（10YR2/1）土。5層と6層より構成されており、かなりしめられている。
- 9：埋9層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層より構成されており、7a層のアカホヤは直径5mm以下の細粒。

ST247

ST247は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST193、ST248、ST289に切られる。

なお、埋3層で赤色顔料が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。3～5層より構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。3～7a層より構成される。7a層はわずか。5cm大のブロックが多い。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。3～7a層から構成される。6層と7a層が細かく混ざった中に硬

い3層5層の10cm大のブロックが入る。

- 4：埋4層：暗褐色（10YR3/4）土。6層7層が細かく碎かれている。
- 5：埋5層：明黄褐色（10YR6/8）土。7a層。ブロック状に入る。黒（10YR2/1）土。6層。ブロック状に入る。

ST248

ST248は、隅丸方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST247を切り、ST289に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。3～7a層より構成される。ブロックの粒径は1～5cm範囲内。粒度は粗い。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。3～7a層より構成されるが、腐植が多く含まれる。4層の量が多い。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。4～7a層より構成される。4層の量がさらに多くなる。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。4～7a層より構成され、かなりしまり、粒度も小さくなる。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。4～7a層より構成され、かなりしまりっている。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成されるが、主に5層から構成される。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層から構成されるが、7a層は非常に少ない。
- 8：埋8層：黒褐色（10YR2/2）土。6層と7層が細粒化して埋積している。
- 9：埋9層：黒色（10YR2/1）土。6層と7a層で構成され、7a層のブロック直徑3cm超が含まれる。
- 10：埋10層：黒褐色（10YR2/2）土。6層と7a層で構成される。
- 11：埋11層：黒褐色（10YR2/3）土。6層と7層から構成される。細かい。
- 12：埋12層：黒褐色（10YR2/1）土。6層と7層から構成される。きめ細かい。
- 13：埋13層：黒褐色（10YR3/1）土。5.6.7層に構成される。それぞれ直徑3cm以下のブロック状が多く7a層が多く含まれる。

ST249

ST249は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST231、ST242を切り、ST194に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色（10YR2/3）土。5層と6層から構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。5～7a層から構成される。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。5～7a層から構成されるが、6層の黒ボク土が多く含まれるところから、黒味が増し、粘性が高くなる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層から構成されるが、5層のブロックが多く含まれる。直径は5cm程度。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/3）土。5～7a層から構成され、直径は1～2cm程度のブロックが含まれている。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層から構成されるが、上記の覆土と比べて細粒。
- 7：埋7層：黒色（10YR2/1）土。6～7a層から構成され、細粒でアカボヤの7a層の量も多くなる。

ST253

ST253は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST254に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。4～2層から構成。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。4～2層から構成。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/3）土。7～2層から構成。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。7～3層から構成。主体部埋土。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。7～4層から構成。主体部埋土。
- 6：埋6層：黒色（10YR2/1）土。7～4層から構成。袖部。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR3/2）シルト。7～4層から構成。主体部埋土。
- 8：埋8層：黒褐色（10YR3/2）シルト。7～5層か

ら構成。7より7層が少ない。袖部。

- 9：埋9層：黒褐色（10YR2/2）土。7～4層から構成。黒色土が多い。（4層または6層）

ST254

ST254は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST253を切り、ST203に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。2～7a層から構成されるが、2～3層が大部分。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）土。2～7a層から構成されるが、7a層のブロック（直径5cm）が多く見られる。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層から構成。ブロックが太く、直径が1～2cmである。細粒。主体部埋土。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）シルト。6～7a層から構成。袖部である。構築土。
- 5：埋5層：褐色（10YR4/4）シルト。7～4層から構成されるが7a層が中心。
- 6：埋6層：暗褐色（10YR3/3）土。6層7層9層から構成。袖部である。

ST255

ST255は、方形の墓壙に梢円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST242、ST256を切り。なお、中央部は未掘である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2～4層の土を含むが4層は少ない。各土層ともブロックが5～6cmの塊状。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。1よりは暗め。2～4層の土を含むが1より4層土の割合が多い。ブロックは1より小さい。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7層の土を含む。各層土はブロック状にはなっていないが斑状になっており、完全には混ざっていない。
- 4：埋4層：褐色（7.5YR4/4）土。屍床部。4～7層の土を含む。7層土の割合が半分を超える。斑

- 状で混じりあってはないが土は細かい。
- 5：埋 5 層：黒色（10YR2/1）土。3～7 層の土を含む。4 層土が多く黒っぽい土。多少ブロック状。
- 6：埋 6 層：黒色（10YR2/1）土。3～7 層の土を含む。4 層土が多く黒っぽい土。多少ブロック状。主体部に近いため 5 より粘性あり。

ST256

ST256 は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。ST242、ST255 に切られる。

なお、中央部は未掘である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：オリーブ黒色（5Y3/2）土。2～5 層より構成される。
- 2：埋 2 層：オリーブ黒色（5Y2/2）土。2～7a 層より構成される。
- 3：埋 3 層：黒色（5Y2/1）土。2～7a 層より構成されるが、黒色土の比率が最も高い。

ST260

ST260 は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST201、ST272 に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a 層より構成され、5cm 程度のブロック。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR3/1）土。4～7a 層より構成され、細粒化する。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。6～7a 層より構成される。7a 層が多量に含まれる。

ST261

ST261 は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）土。2b～4 層から構成され、かなりしまりがあり、掘る時にかなり硬さが感じられる。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。2b～7a 層から

構成され、7a 層は直径 1cm 以下の粒として認められる。

- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。6～7a 層が主である。粒は細かく意識して小さく碎いたような土である。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。6～7a 層を母材とするが、6 層が多い為、粘性が大きい。
- 5：埋 5 層：黒色（10YR2/1）土。4～7a 層を母材とする。6 よりも黒色が目立つ。7 層土は少ない。
- 6：埋 6 層：黒褐色（10YR2/2～2/3）土。4～7a 層を母材とする。屍床部。土がふかふかしている。7a 層の土が多い。

ST262

ST262 は、方形の墓壙に梢円形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。ST207、ST209 に切られる。

なお、小口板穴痕がある。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）土。5～6 層から構成されるが、ほとんど 5 層である。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/3）土。5～7a 層から構成され、ブロックが多い。ブロックの直径は 5cm 程度。
- 3：埋 3 层：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a 層から構成されるが、ほとんど 5 層と 6 層である。ブロックが多く、直径は 5cm 程度。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。5～6 層で、5 層がほとんど。
- 5：埋 5 層：黒褐色（10YR2/2）土。5 層から構成される。
- 6：埋 6 層：黒色（10YR2/1）土。主に 6 層からなり、細粒。
- 7：埋 7 層：黒褐色（10YR2/2）土。6 層と 7 層からなり、6 と比べてブロックが非常に多い。いかにも土を入れたという層である。屍床部埋土であろう。
- 8：埋 8 層：黒褐色（10YR2/3）土。5 層と褐色（10YR4/6）7 層がまだらに混じる。5～7 層、6 層もやや入る。
- 9：埋 9 層：黒色（7.5YR1.7/1）土。5、6、7 層土を含み、5、6 層上のブロックは大きく、7 層土は 5%

- 程度含む。
- 10：埋10層：黒褐色（7.5YR3/1）土。5層土50%、6層土10%、7層土40%の割合。
- 11：埋11層：黒褐色（7.5YR3/1）土。10と基本的に同じだが7層土の塊が細かい。

ST263

ST263は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST206に切られる。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成される。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成される。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。4～7a層より構成される。粒度が細粒化する。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成される。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。6～7a層より構成される。
- 7：未注記
- 8：未注記

ST265

ST265は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST205、ST293に切られる。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。5層～7a層より構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成される。やや粒度が細粒化。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）土。6層～7a層より構成される。細粒。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/3）土。5層～7a層より構成される。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成される。

6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成される。細粒。意識的に粉碎。

7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）シルト。5層～7a層より構成されるが、アカホヤの7a層の細粒が多く含まれる。

8：埋8層：暗褐色（10YR3/3）シルト。5層～7a層より構成されるが、粒度はやや大きくなる。

ST266

ST266は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST220に切られる。また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）シルト。3層～7層を母材とする。7層の混入はわずかである。最大直径5cmのブロックが多い。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）シルト。6層を母材とする。7層をわずかに含む。ブロック状の塊はない。
- 3：埋3層：暗褐色（10YR3/3）シルト。5層～7層を母材とする。7層を多くまだらに含む。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）シルト。5層～7層を母材とする。7層をブロック状に含む。
- 5：埋5a層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。小口板の痕跡なし。6層～7a層からなる。地山でなく理土で袖を造っている。
- 6：埋5b層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。6層～7a層から構成される。炭化物を含む。

ST267

ST267は、不明の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。ST221に切られる。

- なお、遺構は調査区外に伸びている。
- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2b層～7a層より構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2b層～7a層より構成されるが、1よりやや黒色が強いて4層が多いのか。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。2b層～7a層より構成されるが、マトリクスとなる土は、細粒化しており、意識的に砕かれて埋められる。

4：埋4層：黒褐色（10YR3/1）土。2b層～7a層より構成されるが、7a層の量が他と比べて多い。

ST268

ST268は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST221に切られる。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）シルト。6～2b層が母材となる。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。7～2b層が母材となる。7層はわずか。

3：埋3層：暗褐色（10YR3/3）土。7～2層が母材となる。7層が多い。細かく碎いてる。主体部。

4：埋4層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。7～2層が母材となる。さらに細粒化している。屍床部。

ST269

ST269は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST223を切る。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。3～7a層から構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）シルト。3～7a層から構成されるが、1より7a層の量が多い。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層から構成され、ブロック（10cm以上）が他の層より大きい。

4：埋4層：黒褐色（10YR3/1）シルト。3～7a層から構成されるが、直径は1cm以内の細粒となる。

5：埋5層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト。5～7a層より構成され、7a層の量が多い。

ST272

ST272は、隅丸方形の墓壙に梯形の主体部を設えた一段掘りの木棺土壤墓である。ST260を切り、ST201に切られる。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（7.5YR2/2）シルト。4～7層が母材。7層土はかなり少ない。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。4～7層土が母材。7層土は3～4cmのブロック状。

3：埋3層：黒褐色（7.5YR2/2）土。4～7層土が母材。7層土は3～6cmと粒が大きい。

4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。4～6層土が母材。各層の土が細かい。

5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。5層。地山。

6：埋6層：黒褐色（10YR3/1）土。4～7層土が母材。7層土の割合が多い。ほどよく混じった土。

7：埋7層：黒褐色（7.5YR3/2）シルト。4～7層土が母材。7層土が広く混じりかつ細かい。

8：埋8層：黒色（10YR2/1）土。6層と7a層より構成される。小口板横に入れた土。

9：埋9層：黒色（10YR1.7/1）土。小口板が差し込まれた部分。腐植からできている。

ST276

ST276は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）シルト。2～7a層から構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。2～7a層から構成される。

3：埋3層：黒色（10YR2/3）土。2～7a層から構成される。

4：埋4層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。6～7a層から構成される。

ST277

ST277は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST228に切られる。

なお、埋5層から赤色顔料が検出された。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2b～7a層から構成される。

2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）シルト。5～7a層から構成される。アカホヤである7a層の量が増える。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層から構成される。

- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層から構成され、粒度は細かい。5mm程度。最下部より赤色顔料がまとまって検出される。
- 5：埋5層：暗褐色（10YR3/4）シルト。この埋土上面にベンガラが散布。構成物は粒度が小さく、意識的に細かく砕いている。

ST278

ST278は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2b～7a層より構成される。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。2b～6層より構成され、7a層が含まれない。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。5～6層より構成され、黒色が強い。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層より構成され、土の粒子が細かい。意識的に細かく粉碎している。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。アカホヤのブロック（直径5cm）が多く含まれ、6を入れて埋めた後、地山の崩落によってできた部分と考えられる。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/1）土。6層と7a層より構成され、4より粒度が大きい。

ST279

ST279は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST287に切られる。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。2b～4層から構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2b～4層から構成される。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。2b～7層から構成される。

ST280

ST280は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST288を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）シルト。3～7a層からなる。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層からなる細粒。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7a層からなる。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。6～7a層からなる細粒。主体部埋土。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。4に似るが、7a層の5cm大のブロックを含む。
- 6：埋6層：黒色（10YR2/1）土。6～7a層からなる細粒。上部にベンガラが集中している所がある。屍床である。

ST281

ST281は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST243を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～6層までの土を含む。3層の土がブロック状、4,7層土はわずか。
- 2：埋2層：黒色（7.5YR2/1）土。3～6層までの土を含む。4層あたりから袖部を形成している関係もあり1より少し黒っぽくなる。7a層土はわずか。4層土が1より少し多い。
- 3：埋3層：黒色（10YR1.7/1）土。3～7層までの土を含む。1よりも土は細かにほぐしてある。7a層土は米粒大。底部は少し黄色め（10YR4/2）。

ST282

ST282は、隅丸方形の墓壙に梢円形の主体部を設えた一段掘りの木棺土壙墓である。

なお、側板痕が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）シルト。3～7層を母材とする。5層よりやや明るい暗褐色の硬い土を直径5cmのブロックで多く含む。6層、7層はわずかに含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）シルト。3～7層を母材とする。3層のブロックは直径2cm、6層のブロックは直径5cm以下をやや含む。

- 埋 3 層：黒褐色（10YR3/1）シルト。3～7 層ブロックが直径 2cm 以下と小さい。
- 埋 4 層：暗褐色（10YR3/3）シルト。5～7 層を母材とする。7 層を多く含む。
- 埋 5 層：黒褐色（10YR2/3）シルト。3～7 層を母材とする。直径 5cm 大の 3 層土のブロックを多く含む。6 層、7 層の混入はわずか。袖部。
- 埋 6 層：黒褐色（10YR2/2）シルト。3～7 層を母材とする。直径 5cm 大のブロックを多く含み、6 層の混入も多い。袖部。

ST286

ST286 は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壤墓である。ST194、ST292 に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 埋 1 層：黒褐色（10YR3/2）土。3～6 層より構成され、ブロックが多量に含まれる。ブロックの粒度は 1～5cm 程度。
- 埋 2 層：黒色（10YR2/1）土。4～7a 層より構成され、細粒。
- 埋 3 層：黒色（10YR2/1）土。4 層より構成され、かなりしまっている。
- 埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。6～7a 層より構成される。
- 埋 5 層：黒色（10YR2/1）土。6～7a 層より構成される。
- 埋 6 層：黒色（10YR2/1）土。6～7a 層より構成される。
- 埋 7 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a 層より構成される。
- 埋 8 層：暗褐色（10YR3/2）シルト。6 層と 7a 層より構成され、アカホヤが多い分砂っぽい。
- 埋 9a 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）土。6～7 層で構成され 7 層が多量に入る。
- 埋 10 層：褐色（10YR4/4）土。6～7 層より構成され 7 層が多い。
- 埋 10 層：黒色（10YR2/1）土。4 より 7 層土が細かくなっているものとブロック状のものが混じる。

- 埋 11 層：黒色（10YR2/1）土。側板痕と思われる所。6、7a 層土が程良く混じり合った状態。
- 埋 12 層：褐色（10YR4/6）土。7a 層土に 6 層土が 1 割程度混じる。

ST287

ST287 は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。ST279 を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）土。5 層が中心。
- 埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～4 層を母材とする。
- 埋 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7a 層を母材とする。
- 埋 4 層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7a 層を母材とする。
- 埋 5 層：黒色（10YR2/1）土。4～7a 層を母材とする。
- 埋 6 層：黒色（10YR2/1）土。4～7a 層を母材とする。
- 埋 7 層：暗褐色（10YR3/3）土。4～7a 層を母材とする。全体的に細かな土で構成されている。
- 埋 8 層：黒褐色（10YR2/3）シルト。4～7a 層を母材とする。

ST288

ST288 は、楕円形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの木棺土壤墓である。ST290 を切り、ST280 に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）土。2b～4 層から構成される。
- 埋 2 層：黒褐色（10YR2/3）土。2b～5 层から構成される。
- 埋 3 層：黒色（10YR2/1）土。4～6 層から構成されるが、黒色土の 4 層や 6 層の比が多い。主体部。
- 埋 4 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7 層より構成される。3 層は直径 5cm のブロックで入る。袖埋土。

ST289

ST289 は、隅丸方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST247、ST248 を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/2）土。3～6 層により構成される。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～6 層により構成される。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR3/2）土。3～7a 層により構成される。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。3～7a 層により構成されるが、4 層と 6 層の黒色土の比が高い。主体部埋土。
- 5：埋 5 層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト。6～7a 層が中心であり、7a 層のためやや砂っぽい。主体部埋土。

ST290

ST290 は、長方形の墓壙に長方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。ST288 に切られる。

なお、埋 7 層から赤色顔料が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）土。3～5 層を母材とする。直径 5cm 大のブロックを多く含む。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7 層を母材とする。直径 5cm 大で 3 層を含むがわずかである。他は故意に碎いた様に細かい。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR3/2）土。5～7 層を母材とする。7 層の混入も多い。しまっており、造った袖。
- 4：埋 4 层：黒色（10YR2/1）土。5 層 6 層を母材とする。7 層をわずかに含む。
- 5：埋 5 層：黒褐色（10YR2/2）土。6 層と 7a 層より構成され、6 層が主。
- 6：埋 6 層：黒色（10YR2/1）土。6 層と 7a 層から構成される。
- 7：埋 7 層：黒褐色（10YR2/2）土。6 層と 7a 層から構成される。ベンガラ、炭化物を含む。部分的に 7a 層の直径 5cm 大のブロックを含む。

ST291

ST291 は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST204 に切られる。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/3）シルト。3 層～5 層から構成される。直径 5cm 大のブロックを含む。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）シルト。3 層～5 層から構成される。ブロックは小さい。
- 3：埋 3 層：黒褐色（7.5YR2/2）シルト。5 層～7a 層から構成される。7a 層はわずかに細粒化され、5 層、6 層がきれいに混じっている。主体部にしてしまっている。主体部埋土。
- 4：埋 4 層：黒褐色（10YR2/2）シルト。5 層～7a 層から構成される。細粒化されているが、直径 2cm 以下の 6 層土、直径 3cm 以下の 7a 層土のブロックが目立つ。主体部埋土。
- 5：埋 5 層：黒色（10YR2/1）シルト。5 層～7a 層から構成される。7a 層はわずか。3 よりしまっている。直径 3cm 以下の 5 層のブロックが目立つ。
- 6：埋 6 層：黒褐色（10YR3/2）シルト。5 層～7a 層から構成される。直径 1cm より大きなブロックはない。

ST292

ST292 は、方形の墓壙に梢円形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。ST286 を切る。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a 層により構成される。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a 層により構成されるが、7a 層はごく少量。3 層のブロックは直径 10cm 程度あるものもある。
- 3：埋 3 層：にぶい灰褐色（10YR4/3）シルト。6 層と 7a 層が中心であり、粒が細かい。主体部埋土。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。6 層と 7 層が混じって使っている。袖構築土。

ST293

ST293は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの木棺土壙墓である。ST265を切り、ST205に切られる。

なお、側板痕が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）シルト。主に5層6層とするが3層のブロックもやや含む。7層（アカホヤ）の粒子をわずかに含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）シルト。1に似るが、ブロックがごく小さい。6層7層の粒子がやや多い。
- 3：埋3層：暗褐色（10YR3/4）シルト。5～7層が母材とする。7層の量も多い。全体に故意に土を細かくしてある。
- 4：埋4層：暗褐色（10YR3/4）シルト。6層と7層の細粒のものが混じる。小口板の痕跡なし。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。

ST294

ST294は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST232、ST199、ST230に切られる。

なお、埋2層から赤色顔料が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。3層～7層より構成され、ブロックの径は直径5cm以内。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）土。5層～7a層より構成される。ブロックの径が小さくなり細粒化する。主体部は同じ傾向。

ST295

ST295は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた一段掘りの木棺土壙墓である。ST296、ST301を切る。なお、側板痕が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。2～3層より構成する。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2～4層より構成する。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。2～7a層と7a層と腐植が混じった土。

4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。5～7a層より構成され、かなりしめられている。袖埋土。

5：埋5層：黒褐色（10YR3/1）土。6層と7a層と腐植が混じった土。小口穴。

6：埋6層：暗褐色（10YR3/4）土。6層7層9層より構成され、細かい7層はわずか。側板。

ST296

ST296は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST301を切り、ST295に切られる。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。3層～7a層より構成されるが、粒度は粗く、直径2～3cm程度のブロックが混じる。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～6層より構成され、アカホヤの7a層はほとんど含まず。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。3層～7a層より構成され、ブロックの大きさも他の層より大きく、直径5cm程度になる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～7a層より構成され、細かく碎かれている。主体部埋土。

ST297

ST297は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

なお、ST232とST296に切られ、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（2.5Y3/2）土。5～7a層より構成される。右端に、マウンドが1c層によってバッカされているのが、観察される。
- 2：埋2層：黒褐色（2.5Y3/2）土。5～7a層より構成される。ブロックが混潤している状態で、ブロックの直径は5cm以下。
- 3：埋3層：黒褐色（2.5Y3/1）土。5～6層より構成され、7a層のアカホヤがない分黒色化する。

- 4: 埋4層: 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。5~7a層より構成され細粒。5mm程度。
- 5: 埋5層: 黒褐色(10YR2/2)シルト。5~7a層より構成され、5mm以下の細粒。主体部埋土。
- 6: 埋6層: 黒褐色(10YR2/3)シルト。5~7a層より構成され、細粒化されている中に、直径2cm以下の6層7層をブロック状に含む。主体部埋土。
- 7: 埋7層: 黒褐色(10YR2/3)シルト。5~7a層より構成され細粒化されている中に、直径3cm以下の6層7層(7a層は6より多い)をブロック状に含む。主体部埋土。
- 8: 埋8層: 黒褐色(10YR2/2)シルト。5~7a層より構成され、細粒化されやわらかい。主体部埋土。

ST301

ST301は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST295、ST296に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)シルト。3~7a層の土を含む。各層の土がブロック状にまだらに混じっている。
- 2: 埋2層: 黒褐色(7.5YR2/2)シルト。3~7a層の土を含む。各層の土は細かくしてある。主体部の土。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR2/2)土。4~7a層の土を含む。2より7層土の割合が多い。屍床部の土。

ST302

ST302は、隅丸方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒色(7.5YR2/1)シルト。3~7層の土を含む。ブロック状の土が粗く重なっている。
- 2: 埋2層: 黒色(7.5YR2/1)シルト。3~7層の土を含むが、7層土の量が多い。7層土以外は土が細かい。
- 3: 埋3層: 黒色(7.5YR2/1)シルト~土。3~7層の土を含むが、全体的に細かく碎いている。そのせいか粒が大きく、粘性が足りない感じになる。

ST303

ST303は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST199に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層~7a層より構成されブロックの粒径は大きく1~5cmの範囲で粗い。
- 2: 埋2層: 黒色(10YR2/1)土。3層~7a層より構成されるが1より黒味が強くなる。
- 3: 埋3層: 黒色(10YR2/1)土。5層~7a層より構成され、直径3cm程度のブロックとして混在。
- 4: 埋4層: 暗褐色(10YR3/3)土。5層~7層より構成され、細かく砕かれている。

ST304

ST304は、長方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの木棺土壙墓である。

なお、小口板痕が検出された。

また、層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)土。2層~5層土を含むが主として2層~3層土。その他は少ない。ブロックは3~5cm大。
- 2: 埋2層: 黒褐色(10YR2/2)土。2層~5層土を含む。2層~3層土がほとんどだが4層土も程よく混じる。ブロックは3~5cm大。1の土より多少粗め。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層~7a層より構成される。3層が主であるようである。直径5cm程度のブロックが混在しており、区画溝より西の墓とは埋土の性質が異なる。完全に振り上げたものを埋め戻したようだ。細粒化するのは完全になくなってしまっている。
- 4: 埋4層: 黒褐色(10YR3/1)土。6層~7a層より構成される。きめ細かい。小口。

ST305

ST305は、方形の墓壙に方形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。

なお、遺構は調査区外に伸びている。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より成る。7a層はごくわずか。ブロック状に入るが全体につき固めた様にしっかりとしまっている。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より成る。1より7a層はやや多い。こぶし大のブロック状に入るが1と違ってしまうはない。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。6層～7a層より成る。主体部埋土。

ST306

ST306は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。5層と6層より構成される。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より構成されアカホヤ火山灰の7a層が微量に混じる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より構成されるが、7a層はごく少量。大きなブロック（直径3～10cm）がある。
- 5：埋5層：暗褐色（10YR3/3）土。6層～7層より構成される。きめ細かい。7層が多い。

ST307

ST307は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。2層～7層の土を含む。7層土は非常に少ない。3～4cm大のブロック混入。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。2層～7層の土を含む。1より土は少しスカスカしている感じ。7層土は1より多め。ブロックは小さいが少ない。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～7a層から構成され、細かく碎いて埋め戻したと思われる細粒化している。ブロックの大きいものでも固結度が高い3層の土で約5cm程度。主体部埋土。

4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。6層と7a層から構成され、7a層の比率が最も高い層である。屍床部埋土。

ST308

ST308は、楕円形の墓壙に楕円形の主体部を設えた一段掘りの直葬土壙墓である。ST323を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）土。5層～7a層より構成されるが、7a層は微量。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～7a層より構成される。7a層がかなり多い。
- 3：埋3層：暗褐色（10YR3/3）土。3層～7a層より構成される。7a層は微量。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。6層がブロック状（直径2cm）になり混じる。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。6層中に5層のブロックが混じる。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層から構成され、粒度は小さくなり細かく碎いて入れている。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR3/2）土。6層、7a層より構成され、やや7a層が多い。
- 8：埋8層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成される。

ST309

ST309は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。3層～7a層より構成される。ブロックの大きさは直径10cm程度のものもあり粗い。主体部上の覆土。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より構成されるが、粒度が細かくなり、ブロックも直径2cm以内。主体部上の覆土。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～7a層より構成され、ブロックの直径も5cm以内。やや粗い。主体部上の覆土。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層よ

- り構成されている。直径が5cm程度のブロックが混在している。主体部埋土。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/3）土。3層～7a層より構成されている。直径3cm程のブロックを含む。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より構成される。細かく碎かれている。7a層の直径3cm程のブロックを含む。
- 7：埋7層：暗褐色（10YR3/3）土。5層～7層より構成される。細粒化されている。

ST310

ST310は、方形の墓壙に梢円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壤墓である。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～3層で構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～3層で構成され、粒度が小さい。
- 3：理3層：黒褐色（10YR3/1）土。2層～4層から構成され、4層が入ったことで黒みが強くなる。
- 4：理4層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～3層より構成され、粒度が小さい。ブロックは目立たなくなる。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/2）土。5層～7a層より構成され、7a層のアカホヤが直径1cm未満の大きさで散る。屍床部であろう。

ST311

ST311は、長方形の墓壙で一段掘りの直葬土壤墓である。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～5層より構成される。土器片は本層からのみ。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～4層より構成され、3層が量的に多い。
- 3：理3層：黒褐色（10YR2/2）土。4層～5層より構成され、4層が多い。
- 4：理4層：黒色（10YR2/1）土。4層～5層より構成され、3よりさらに4層の量が多い。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。6層が母材となる。屍床部としたようなつくり。

ST312

ST312は、長方形の墓壙で一段掘りの直葬土壤墓である。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2層～5層土を含む。全体的に各層土のばらつきでムラがある。ブロック1～2cm。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。3層～5層土を含む。ブロック1～2cmわずかに認める。全体的に細かな土。
- 3：埋3層：褐色（10YR4/6）シルト。6層と7a層より構成される。

ST313

ST313は、梢円形の墓壙に梢円形の主体部を設えた一段掘りの木棺土壤墓である。

- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層より構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。3～7a層より構成され、1より粒度的に細粒。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。6～7a層より構成され、粒度は細かくなる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。6～7a層より構成され、細粒。

ST314

ST314は、方形の墓壙に梯形の主体部を設えた一段掘りの木棺土壤墓である。

- なお、遺構は調査区外に伸びている。
- また、層序は次のとおりである。
- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。1c～3a層より構成され、1c層が多い。
- 2：埋2層：黒褐色（7.5YR3/1）土。3～4層より構成され、3層のブロックは直径が5～10cmあり粗い。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）シルト。2～4層より構成され、2層が量的に多い。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3～4層より

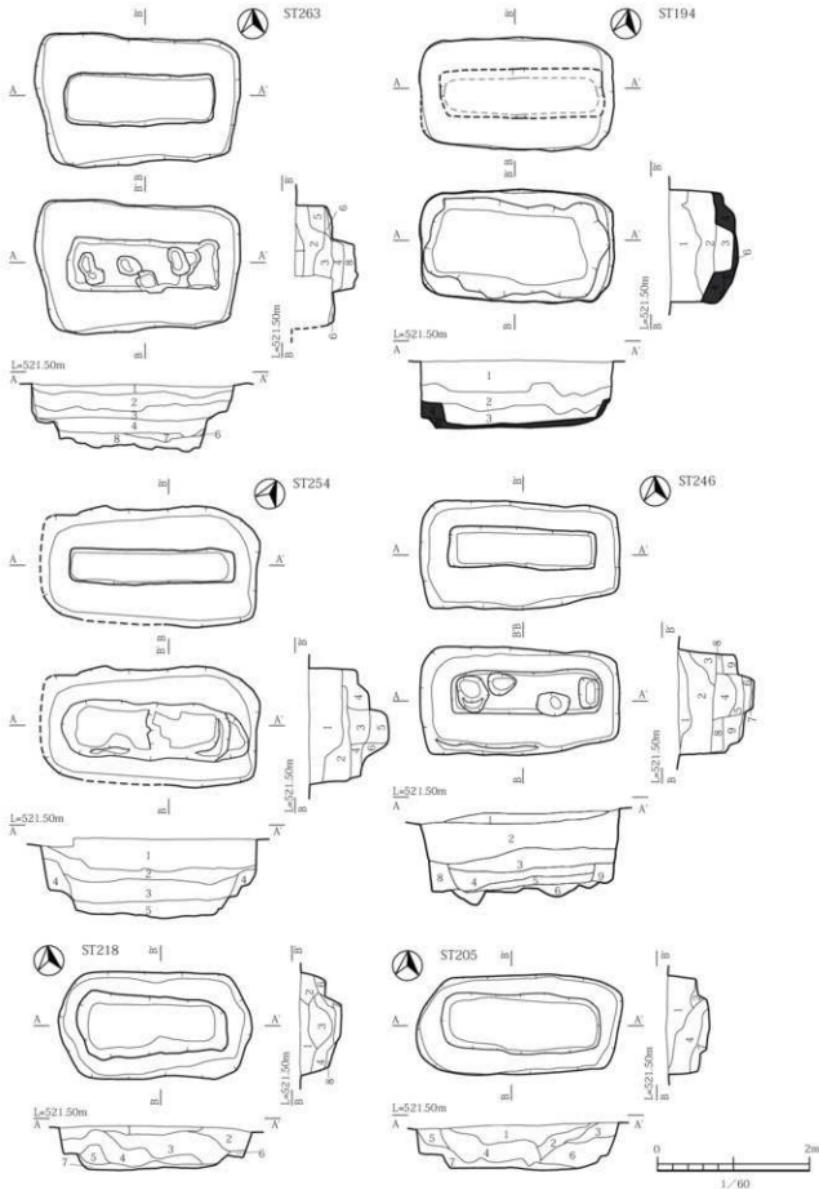


図 147 土壌基(ST) 実測図(1)

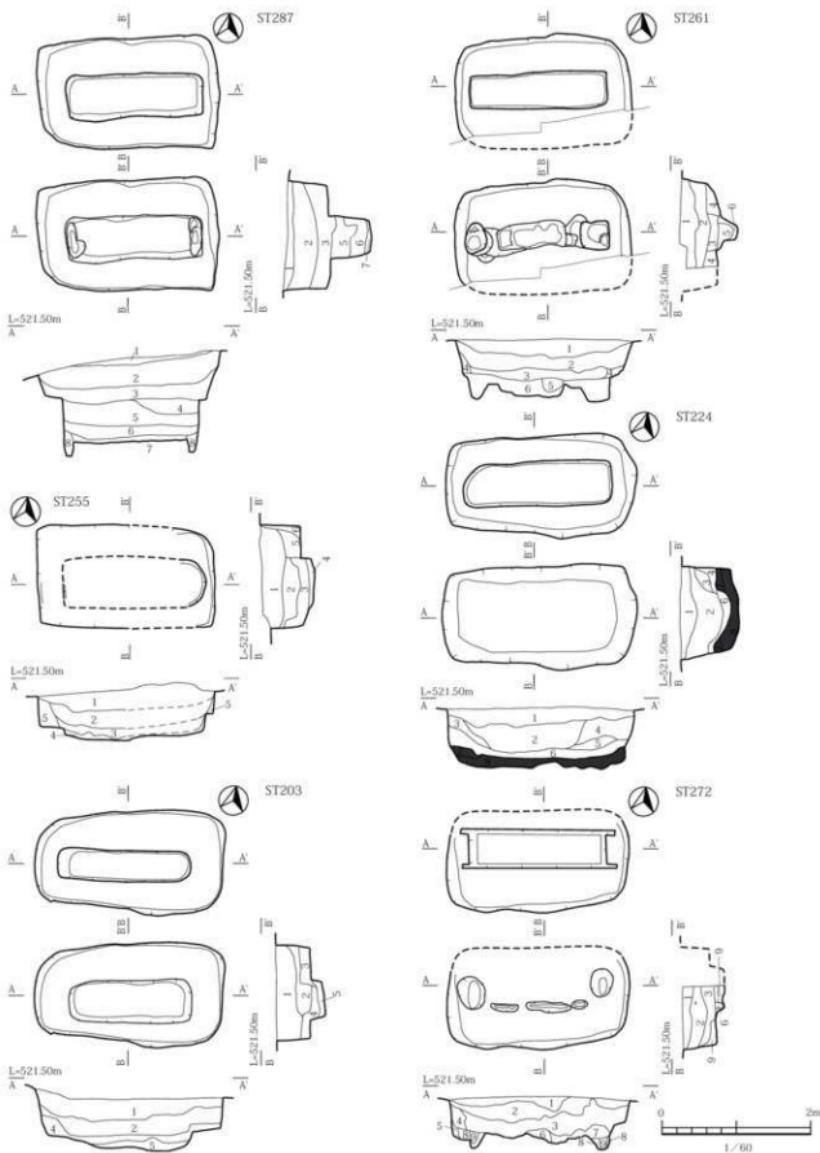


図 148 土壌墓 (ST) 実測図 (2)

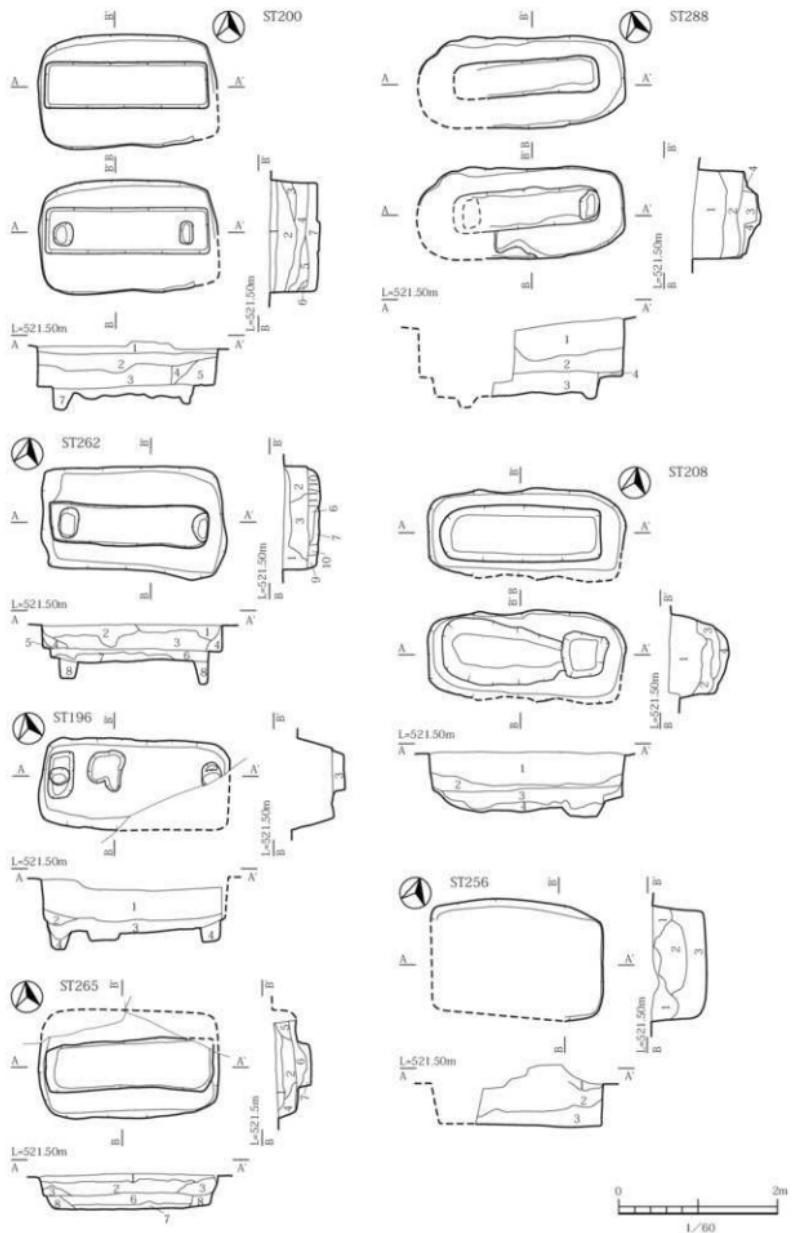


図 149 土壇墓 (ST) 実測図 (3)

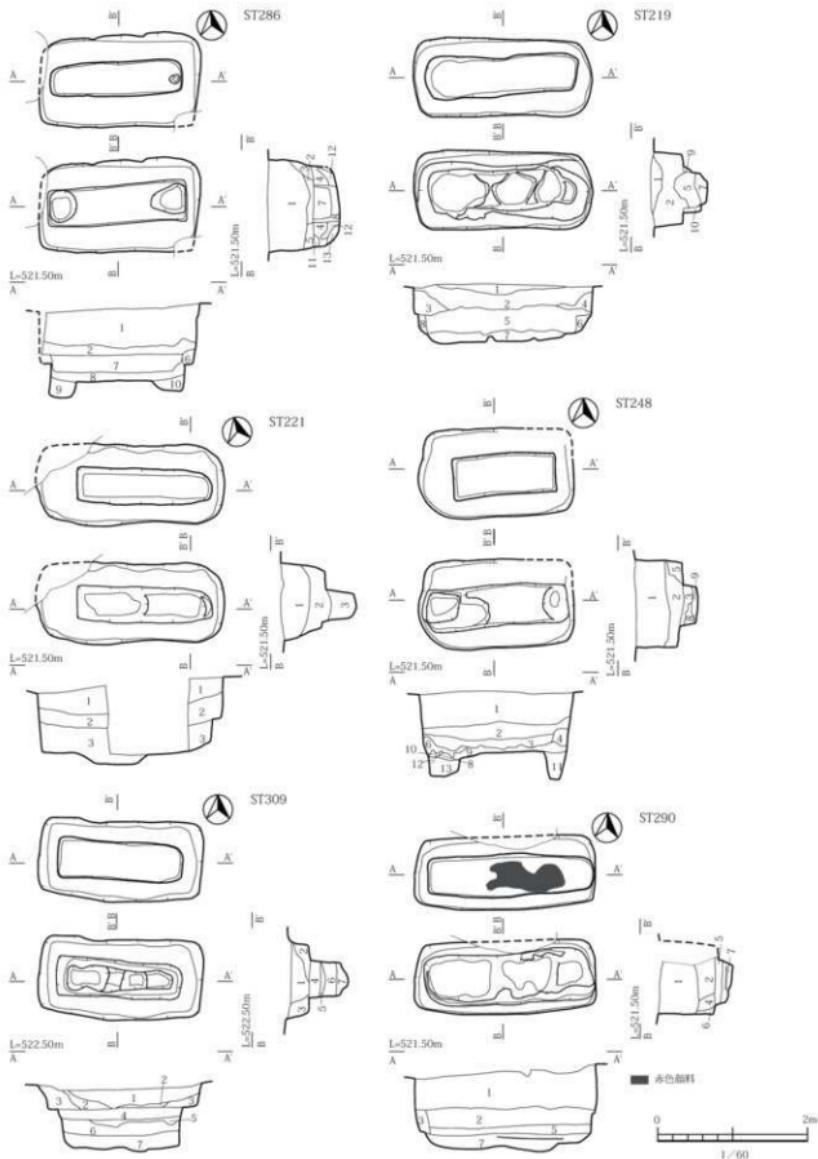


図 150 土壌基 (ST) 実測図 (4)

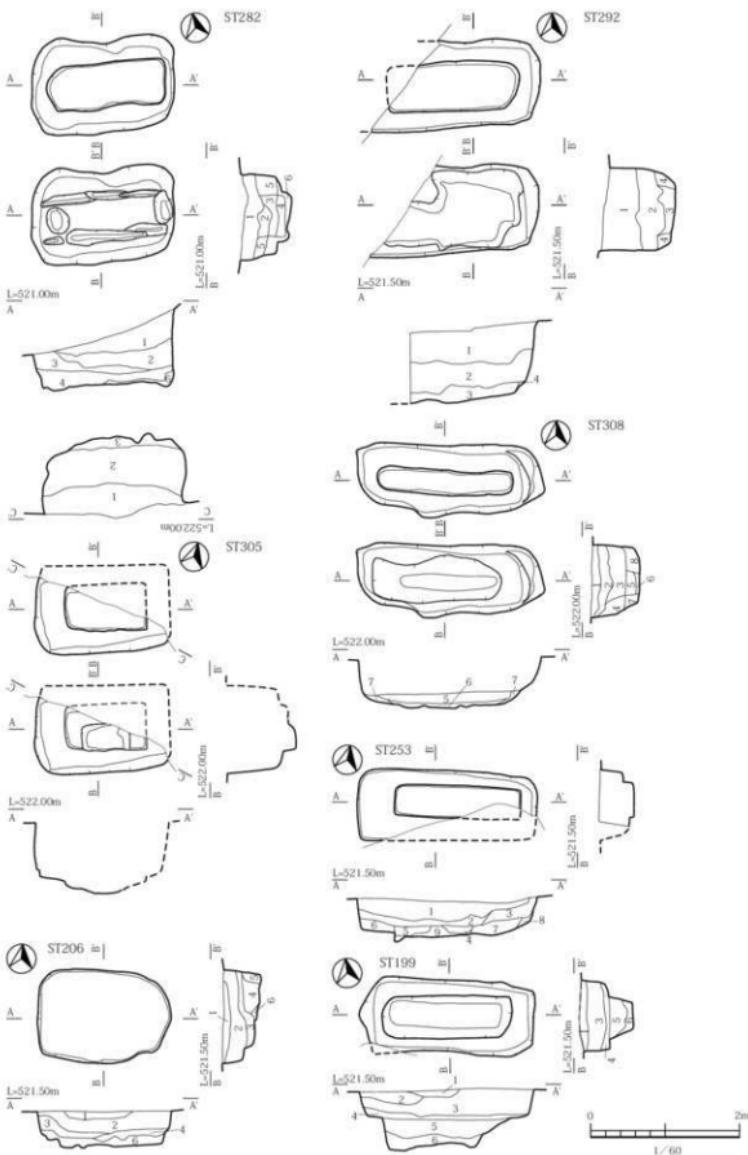


図 151 土壌基 (ST) 実測図 (5)

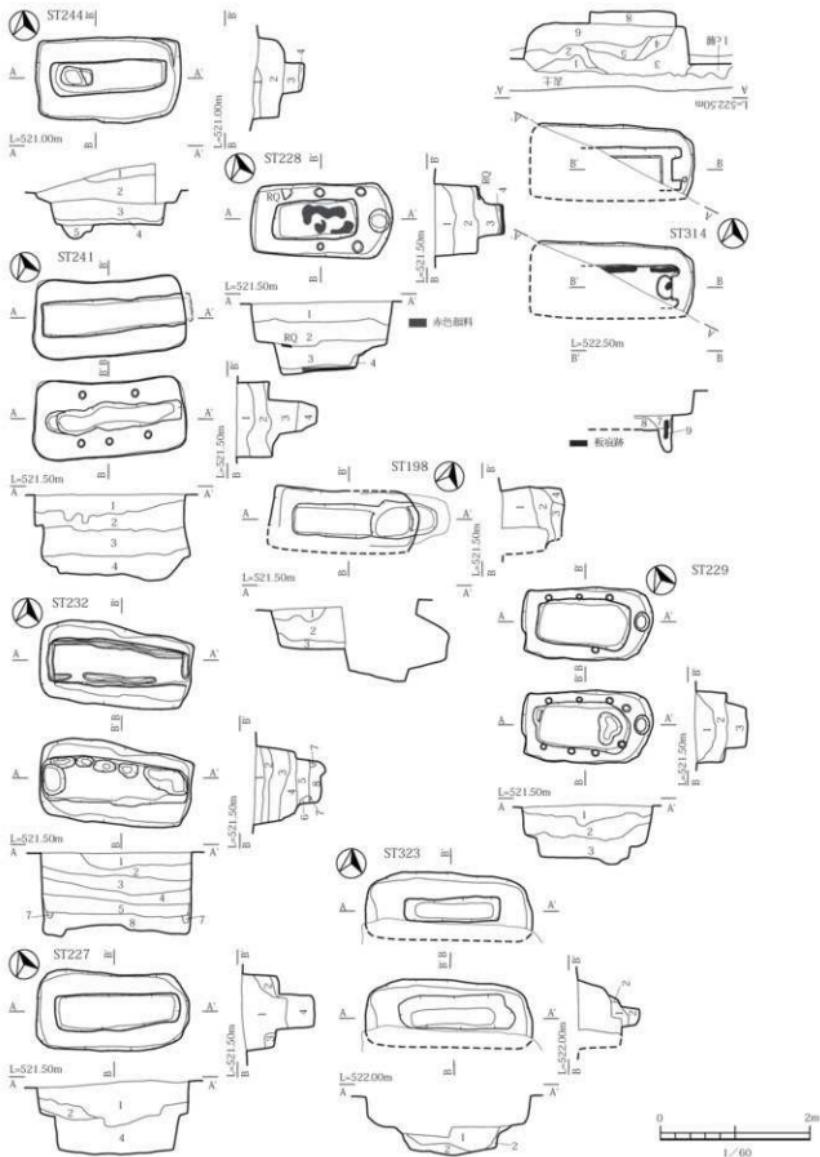


図 152 土壌基 (ST) 実測図 (6)

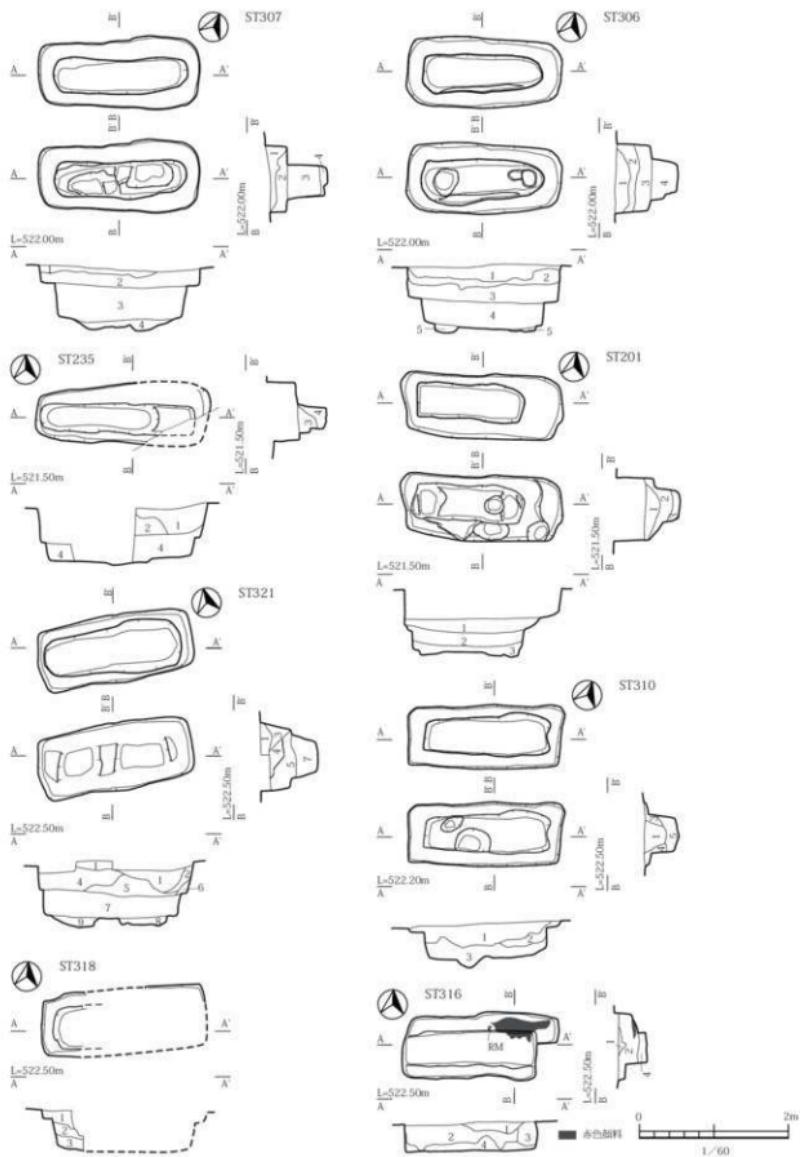


図 153 土壌基(ST)実測図(7)

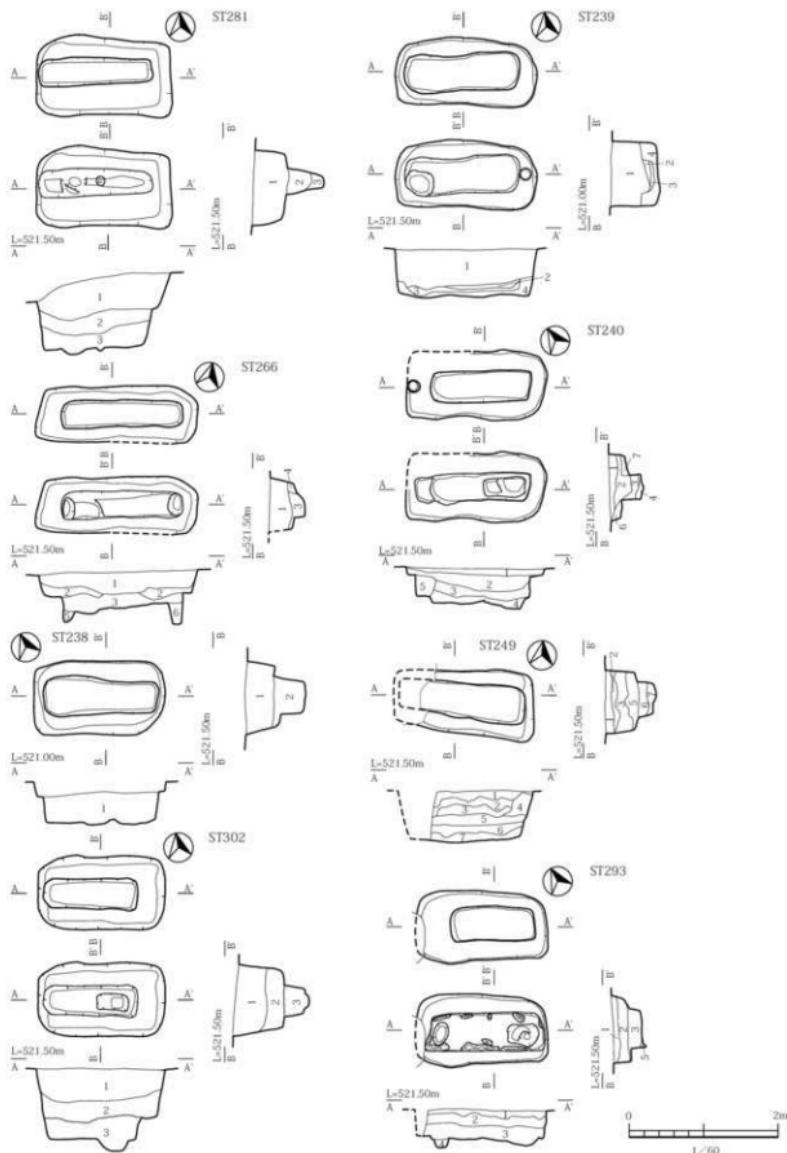


図 154 土壇墓 (ST) 実測図 (8)

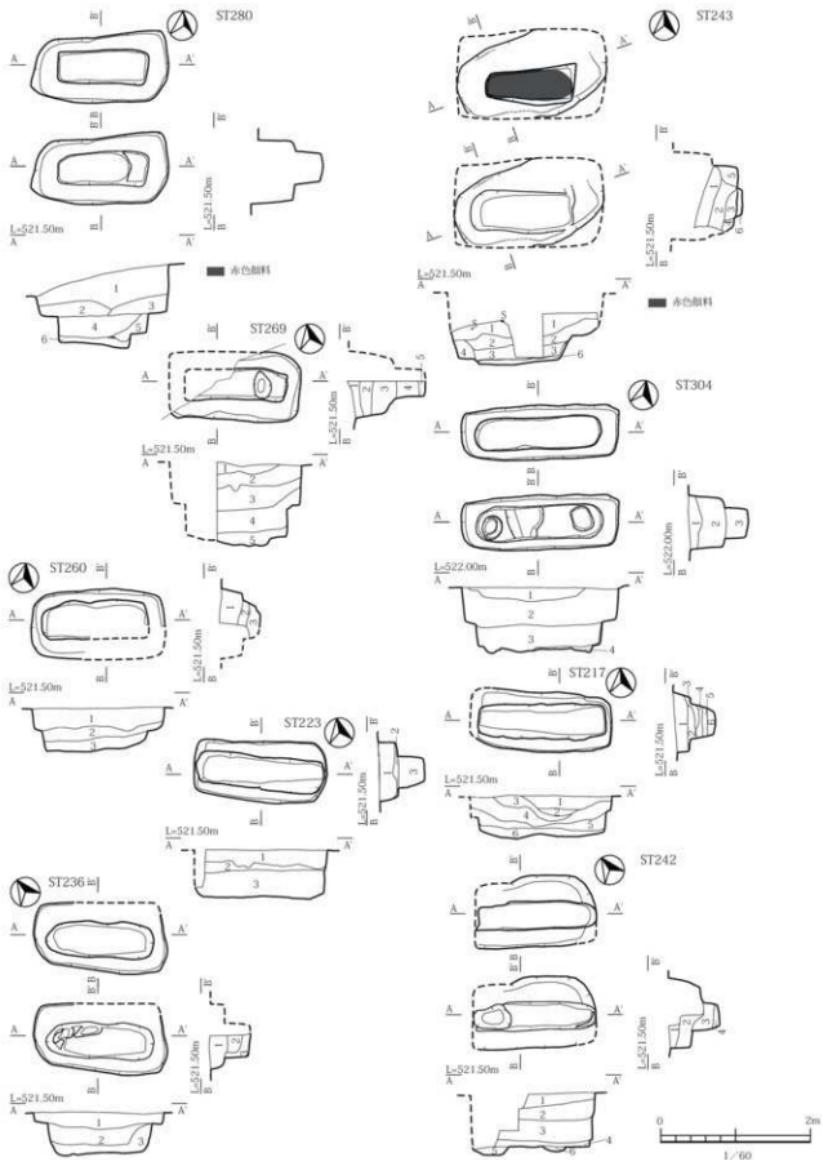


図 155 土壌基 (ST) 実測図 (9)

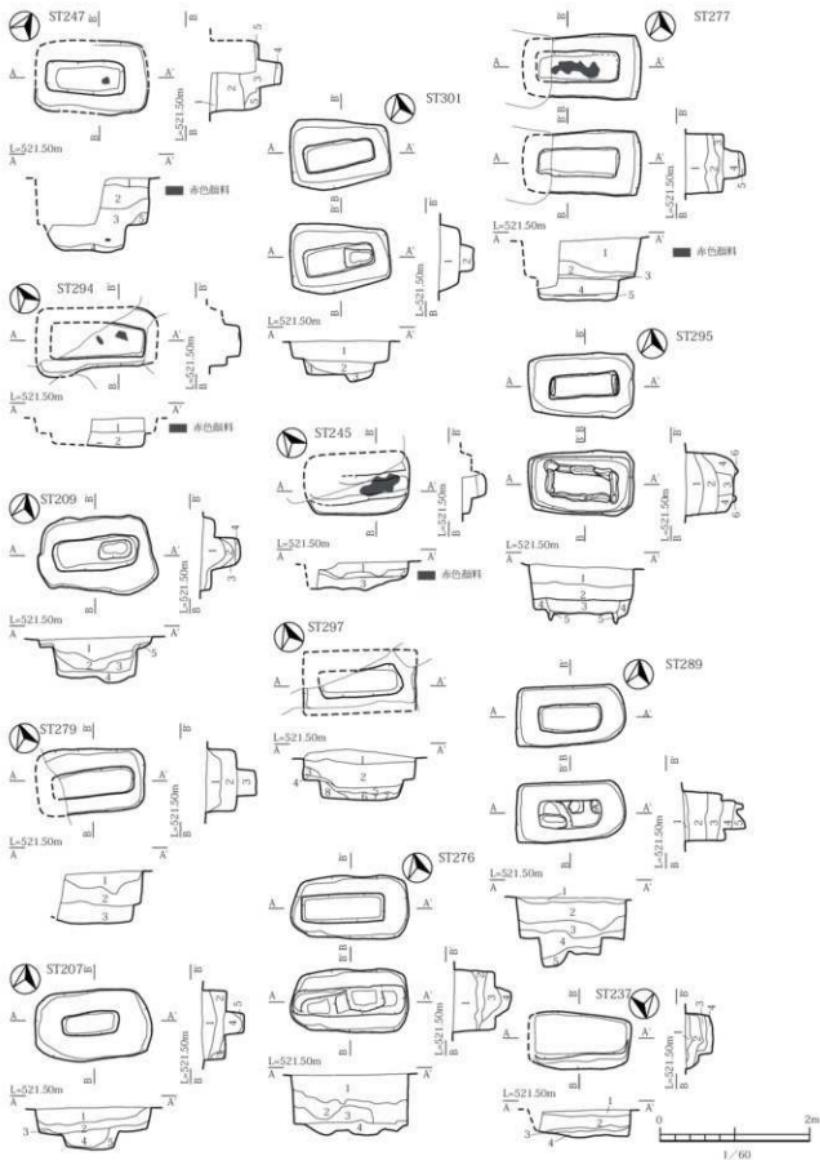


図 156 土壌基 (ST) 実測図 (10)

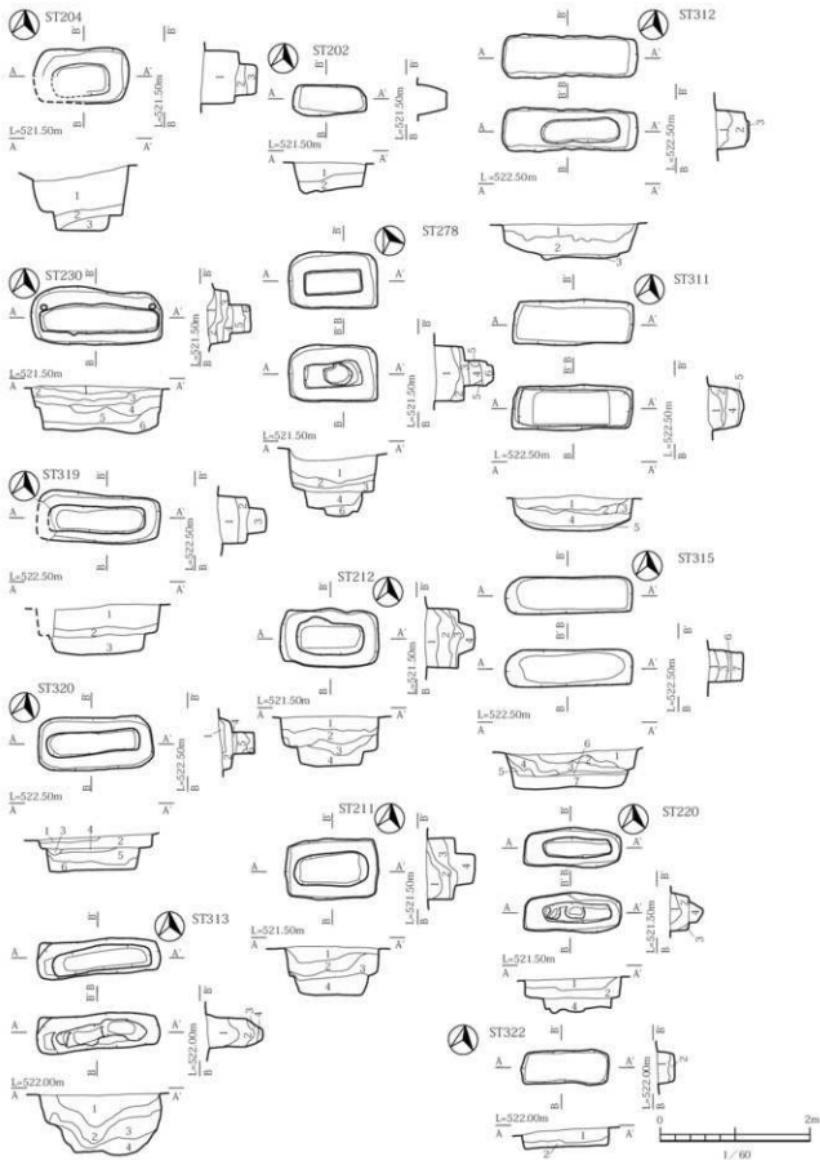


図 157 土壌基 (ST) 実測図 (11)

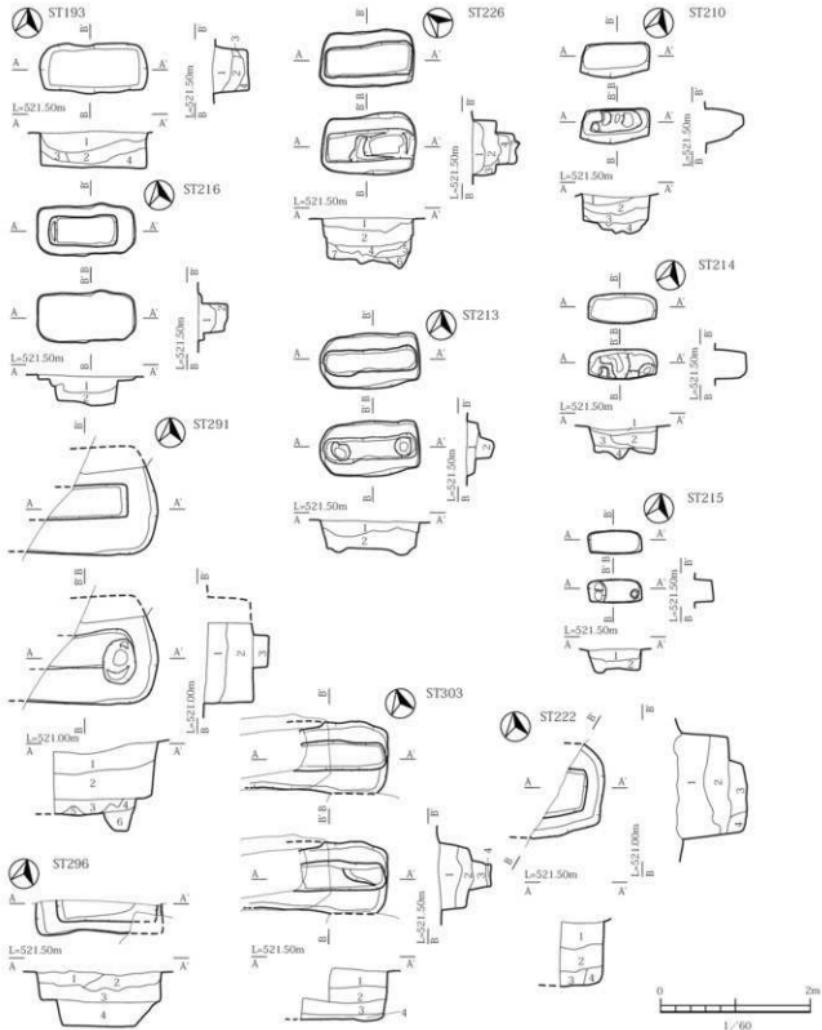


図 158 土壌基 (ST) 実測図 (12)

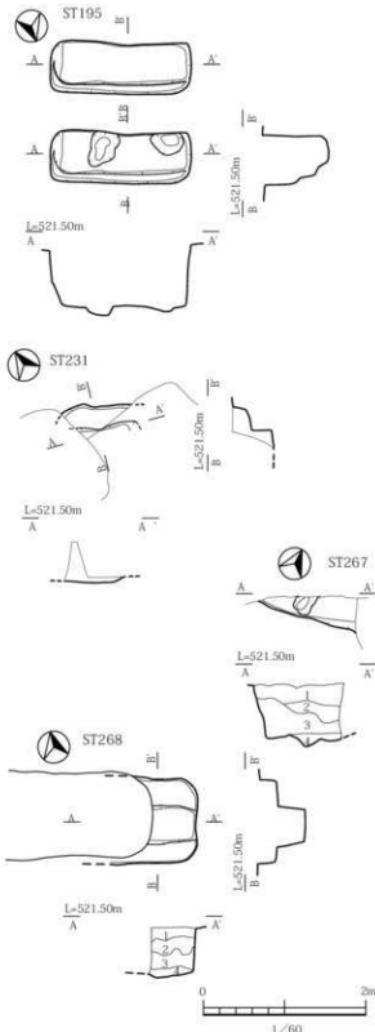


図 159 土壙墓 (ST) 実測図 (13)

構成され、3層のブロックは目立つ。直径は3～5cmからなる。

- 5：埋5層：黒褐色（10YR3/1）土。3～4層より構成され、炭化物が検出される。
- 6：埋6層：黒色（10YR2/1）土。3～7a層より構成され、それぞれの層のブロックが均一に混じる。ある程度均一になるように混ぜたのであろう。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）土。6～7a層より構成され、粒が小さい。6層が多く含まれる。
- 8：埋8層：黒色（10YR2/1）土。6～7a層より構成され、7とは逆に7a層がやや多く含まれる。
- 9：埋9層：黒色（10YR2/1）土。木が腐って周りから流れ込んだ土で置換される。腐植は多い方ではない。

ST315

ST315は、椭円形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と4層から構成される。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と4層から構成され、3層のブロックが非常に大きい。直径が15cmを超える。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と4層から構成されるが、やや4層の量が多くなり、粘性が増し、3層のブロックも小さくなり、直径も1cm程度。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/3）土。3層と4層から構成されるが、3層の量が増す。ブロックも10cmを超える。
- 5：埋5層：黒色（10YR2/1）土。4層と5層から構成され、粒度も小さい。
- 6：埋6層：黒色（10YR2/1）土。4層と5層から構成され、4層が多く、ブロックも少ない。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層から構成され、5層が主。かなりしまっている。粒度は細かく、ブロックは少なく、直径3cm程度。

ST316

ST316は、不定形の墓壙に長方形の主体部を設え

た二段掘りの直葬土壙墓である。

なお、赤色顔料が検出された。

また、層序は次のとおりである。

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～4層から成る。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。3層～5層から成る。5層は直径5cm程のブロックで入る。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。2に似るが5層

ブロックは小さい。

4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。4～6層から成る。

5層は直径2cm程のブロックで入る。ベンガラをわずかに検出する。

ST318

ST318は、方形の墓壙に梢円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST321に切られる。

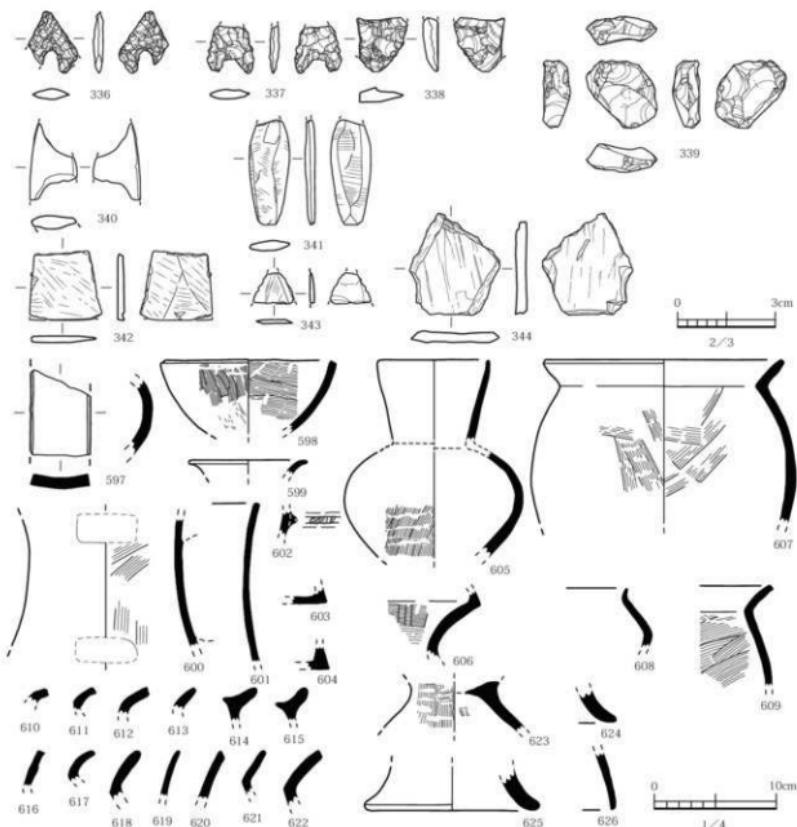


図160 土壙墓(ST)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層～7a層より成る。各層の土をブロック状に含む。7a層はわずか。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。3層～7a層より構成される。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/3）土。3層～7a層より構成される。2よりブロックが小さく、7a層もやや多い。

ST319

ST319は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST321に切られる。
また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～6層より構成される。3層を直径5cm大のブロックで含む。6層も直径3cmのブロックで入る。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。3～6層より構成される。3層の直径1cm程のブロックはあるが大きなブロックはない。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。5～6層より構成される。きめ細かく細粒化されている。主体部。

ST320

ST320は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。3～5層土を含む。ブロックは3～5cmと大きめ。
- 2：埋2層：黒色（7.5YR2/1）土。3～5層土を含む。1よりはブロックは小さめ、1～2cm程度。
- 3：埋3層：暗赤褐色（10YR3/2）土。ベンガラが混じる。
- 4：埋4層：暗褐色（10YR2/2）土。5層が主。
- 5：埋5層：黒褐色（5YR2/2）土。4～5層から構成され、土がやや赤っぽい。ベンガラが含まれるのか？
- 6：埋6層：黒色（10YR2/1）土。4層が主。

ST321

ST321は、方形の墓壙に楕円形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。ST318, ST319を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と4層から構成される。直径5cm大のブロックを多く含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と4層から構成されるが、ブロックは小さく、少ない。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と4層から構成される。粒度は小さい。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3～7a層から構成される。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層より構成されるが、7a層のアカホヤは4より少ない。
- 6：埋6層：黒褐色（10YR2/3）土。5～7a層より構成される。
- 7：埋7層：黒褐色（10YR3/2）土。3～7a層より構成される。
- 8：埋8層：黒褐色（10YR2/2）土。6層と7a層が細かく混じり合った土に7a層が3cm大のブロックで入る。
- 9：埋9層：黒褐色（10YR2/2）土。8に似るが7a層のブロックが少ない。

ST322

ST322は、方形の墓壙で一段掘りの直葬土壙墓である。ST323を切る。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。3～7層土を含む。ブロックは3cm程度。
- 2：埋2層：黒色（7.5YR2/1）土。3～5層土を含む。全体的に土は細かい。1より若干黒っぽい土。

ST323

ST323は、方形の墓壙に長方形の主体部を設えた二段掘りの直葬土壙墓である。

なお、ST308, ST322に切られる。

また、層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層から成る。ほぼ全体が細かく碎かれているが6層を直径5cmのブロックで含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。5～7a層から成る。6層、7a層は直径5cm程のブロックで入る。

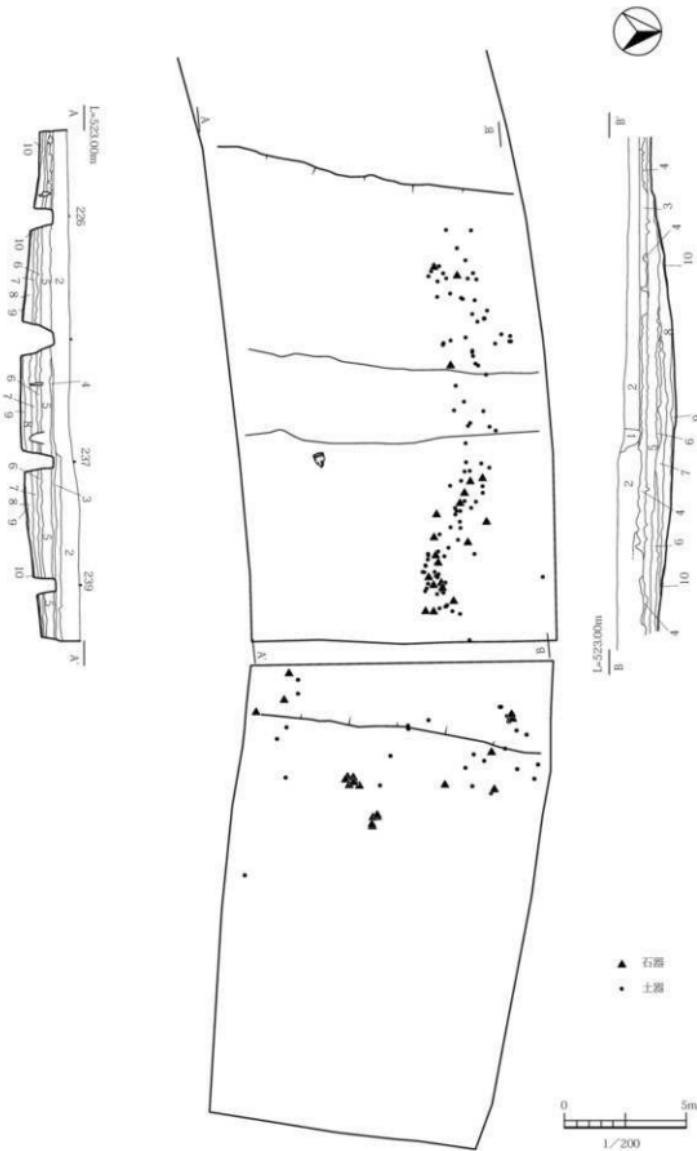


図 161 溝 (SX22) 実測図・遺物分布図

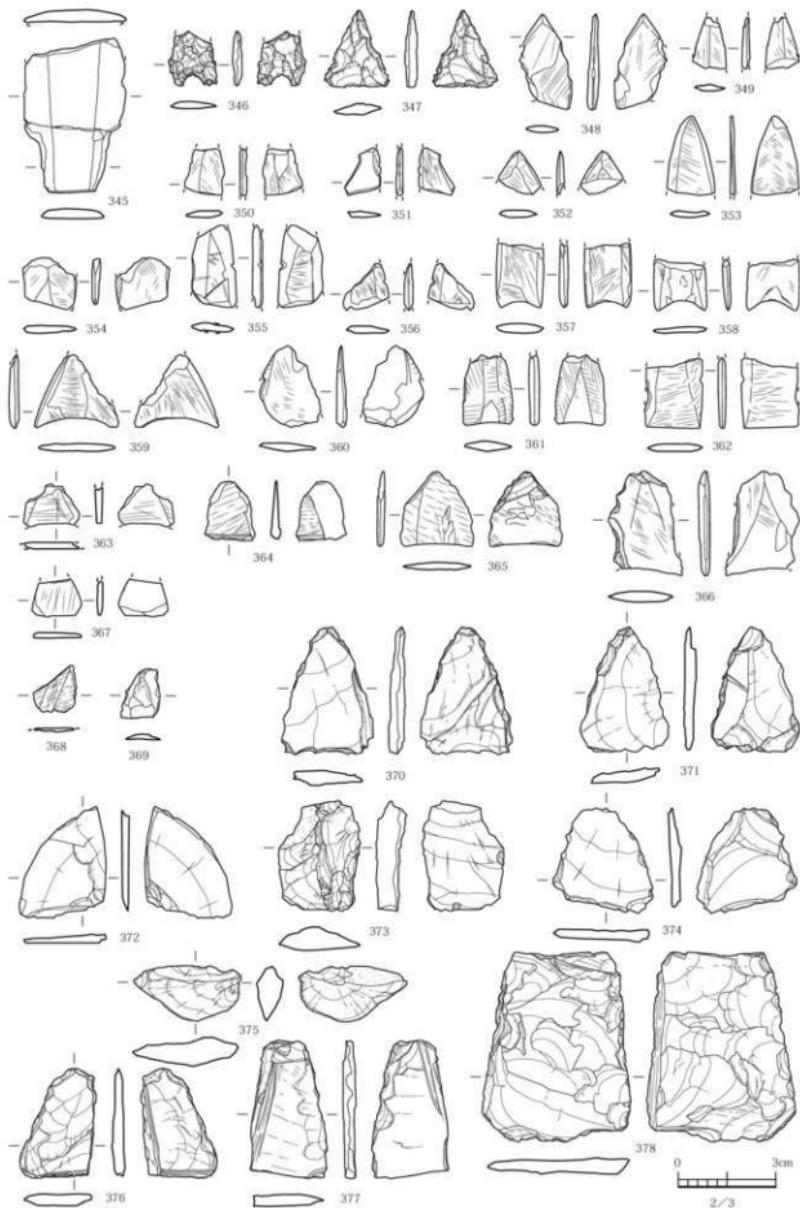


図 162 溝 (SX22) 出土石器 (RQ) 実測図 (1)

1-2 溝 (SD、SX)

津留地区では条溝3条、周溝1条が発掘された。

条溝は、豎穴建物群を囲繞する条溝である。豎穴建物群を囲繞する条溝は、大規模なSX22と小規模なSX28、SD10に弁別できる。SX22は土壌墓群と掘立柱建物4棟、SX28は掘立柱建物3棟を近傍に作っている。大規模なSX22は居住域の西辺、小規模なSX28居住域内を区画する条溝である。

周溝は、円形周溝SX30が居住域内に位置する。

SX22（溝）

SX22は、調査区9区と11区に位置し、幅20m、長さ12mを測る溝である。津留地区的豎穴建物群を囲繞し、台地西端の墓域と居住域を区画する。南北方向に走り、両端は調査区外に伸びている。

SX22は、ほぼ直線状に伸びる条溝で、断面形は台形を呈する。深さ2m、底部幅3mを測り、側壁は緩やかな傾斜をとる。

SX22には、鉄器、石器、土器が包含されていた。

SX22の層序は次のとおりである。

- 1：表土：現在の水田。
 - 2：表土：調査区周辺の土手
 - 3：表土：現在の水田の旧耕作土（最下部に床土に褐鉄鉱の沈着）
 - 4：表土：1a層
 - 5：表土：1c層
 - 6：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。包含層の1c層よりはやや黄色味を帯びる。
 - 7：埋2層：黒色（10YR2/1）土。6より黒色が強く、粘性が低い。
 - 8：埋3層：黒色（10YR2/1）土。粘性がやや強くなりべたつく。
 - 9：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。8よりやや黄味が強くなる。
 - 10：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。
- なお、発掘作業担当者は、7：埋2層を次のとおり解釈している。「最下層に3mm以下の小石を含む。小石は長石やスコリアを含んでおり、弥生時代後期に中央火口丘の火山噴火があったのかもしれない。」報告者は、この解釈を探らない。

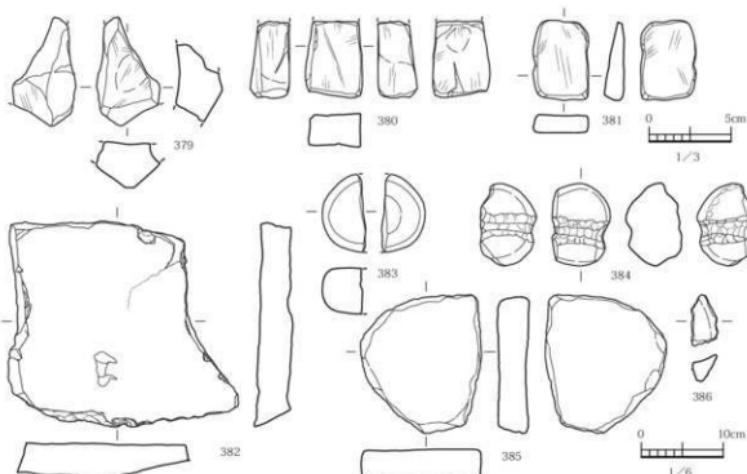


図163 溝 (SX22) 出土石器 (RQ) 実測図 (2)

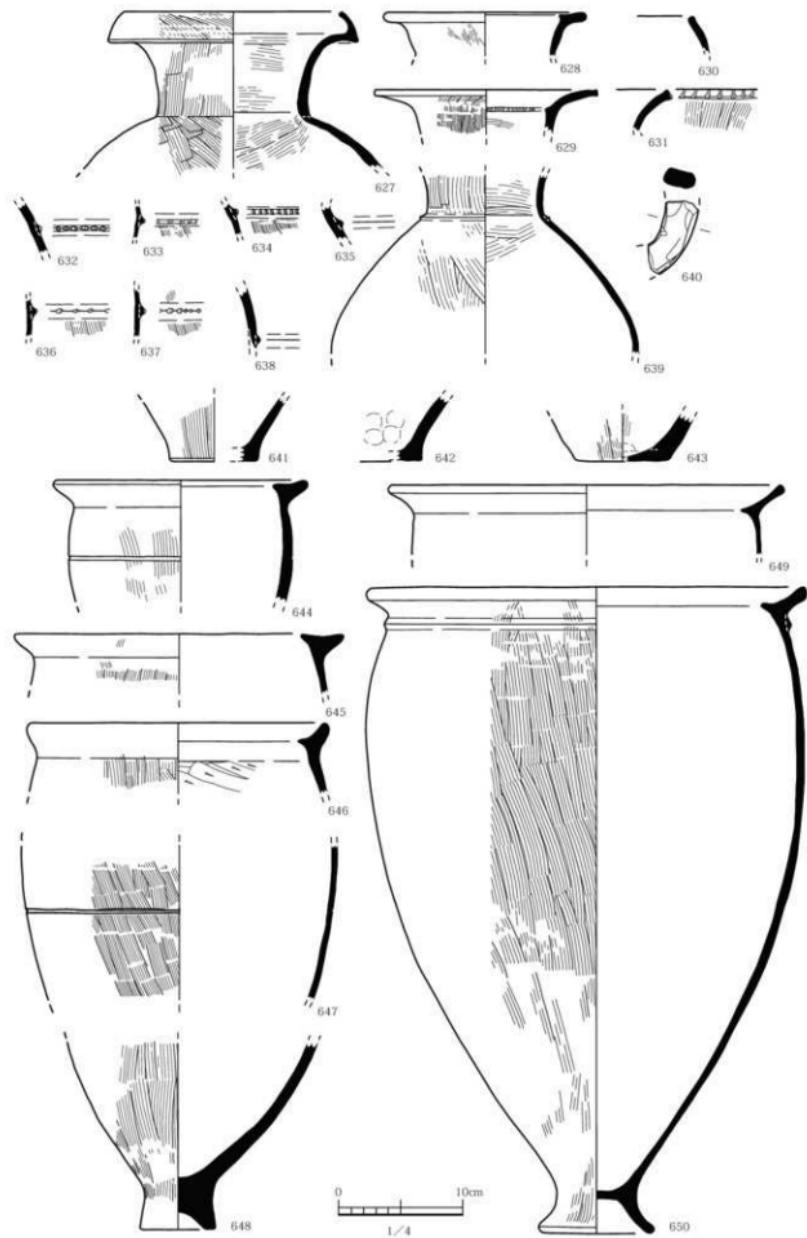


図 164 溝 (SX22) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

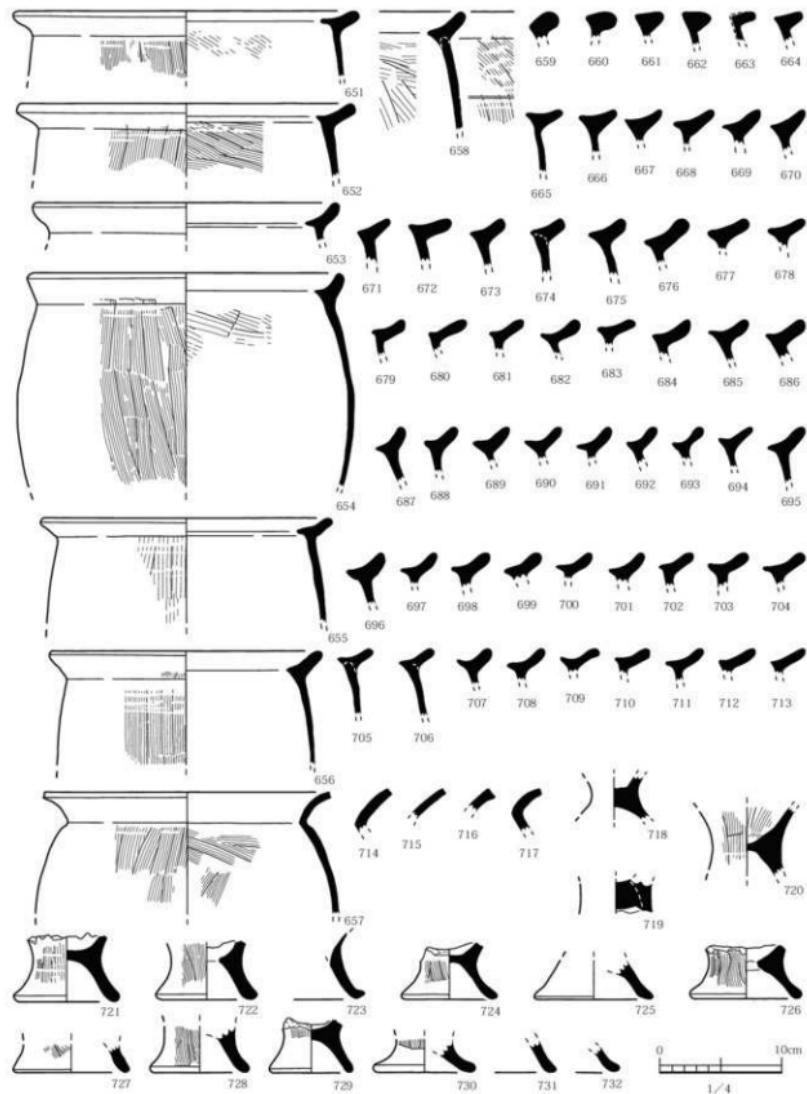


図 165 溝 (SX22) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

SX28（溝）

SX28 は、調査区 15 区・20 区に位置し、幅 5m、長さ 16m を測る溝である。津留地区の居住域を区画する。東西方向に走り、両端は調査区外に伸びている。

SX28 は、直線的な条溝で、断面形は台形を呈する。条溝は、底幅 3m、深さは 30cm 程を測り、検出範囲中央部では幅 1.2m、深さ 20cm 程の支線が北接して調査区外に伸びている。この支線接合部付近には $2.2 \times 1.2m$ の方形土壌が位置する。方形土壌は深さ 20cm 程であり、縁辺部内側には側溝、小穴群が列をなしている。

SX28 には、鉄器、石器、土器が包含されていた。

SX28 の層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋 a 層：黒褐色（10YR2/2）土。長さ 5mm 程度の炭化物が含まれる。
- 2：埋 b 層：暗褐色（10YR3/3）土。直径 1～2mm のスコリア粒が混入する。炭化物も含まれ、1 より粒度が大きくなり、長さが 1cm 程度である。
- 3：埋 c 層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト。直径 1～2mm のスコリア粒が $1cm^2$ あたり 4～5 個含まれる。
- 4：埋 d 層：黄褐色（10YR5/6）砂。直径 1～2mm のスコリア粒の砂である。
- 5：埋 e 層：暗褐色（10YR3/3）砂・礫。砂は火山灰、礫は安山岩礫で直径 1cm 程度の円礫。
- 6：埋 f 層：暗褐色（10YR3/2）シルト。砂の直径は 1～2mm。
- 7：埋 g 層：褐色（10YR4/4）砂。
- 8：埋 h 層：黒褐色（10YR2/2）土。1mm 程度の砂が混じる。
- 9：埋 i 層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト。1mm 程度の砂が混じる。
- 10：埋 j 層：黒褐色（10YR3/1）土。1mm 程度の砂や炭化物粒を含む。量的には $1cm^2$ あたり 2～3 個、均一に混入。
- 11：埋 k 層：黒褐色（10YR3/2）砂を主体とする砂礫層。礫は全て 3～5cm 程度の円礫。
- 12：埋 l 層：黒色（10YR2/1）土。1mm 程度の砂を

少量含む。

- 13：埋 m 層：暗褐色（10YR3/3）土。
- 14：埋 n 層：褐色（10YR4/4）砂。7 に似ている。
- 15：埋 o 層：暗褐色（10YR3/3）土。直径 1～2mm のスコリア粒が混入する。炭化物も含まれ、1 より粒度が大きくなる。2 に似ている。
- 16：埋 p 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物をやや含む。直径 8mm 以下のスコリアを含む。
- 17：埋 q 層：暗褐色（10YR3/3）土。
- 18：埋 r 層：黄褐色（10YR5/6）砂。1mm 以下の粒子の細かい砂が凹地を埋めている。砂、黒色土が混じる。

なお、発掘作業担当者は SX28 を次のとおり解釈している。「SX28 の中層～下層にかけ、砂礫や砂など流水によって流れてきた堆積物が認められる。かなりの頻度で流している。故意に溝状に形成して、意図的に水を流している。台地に水を引いた水路と判断する。内濠ではない。水源は別所水源。」そして、支線接合部付近の方形土壌を「祭祀の場としても利用された水場遺構」として取り扱った。その一方「SX28 内の遺物は、ほとんど細片ばかりであり、まとまったものは出土していない。どちらかというとゴミ捨て場的な意味合いがある。」とも解釈している。報告者は、今後の調査により遺構の広がりが把握されるまで結論を留保する。

SD10

SD10 と SD11 は同一遺構である。SD10 は、調査区 12 区から 14 区に位置し、幅 1.4m、長さ 30m を測る。東西方向に走り、東端、西端は調査区外に伸びている。

SD10 は、断面は台形または V 字形を呈している。溝幅には広狭があり一定しない。底面には、複数の段が存在し、土壌が複合して検出された。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 a 層：黒褐色（10YR3/1）土。ややシルトが混じる。炭化物を少量含む。
- 2：埋 b 層：黒褐色（10YR2/2）シルト。1 より炭化物が大きく、多い。
- 3：埋 c 層：黒褐色（10YR3/2）シルト。最下部に砂・

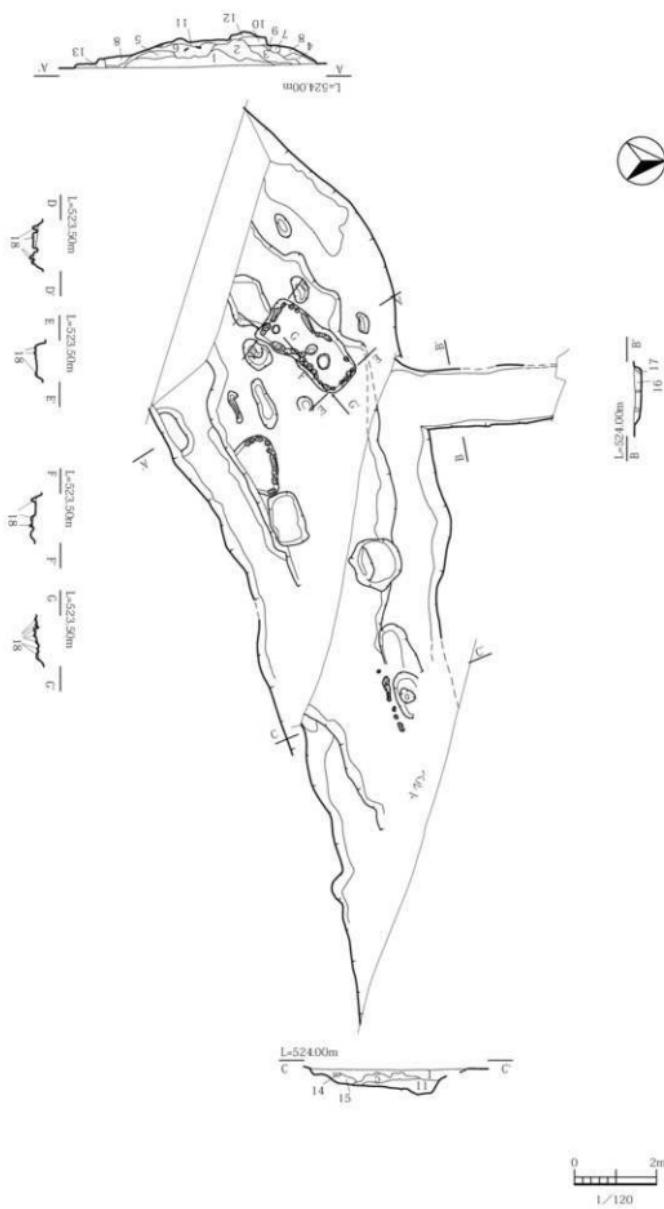


図 166 溝 (SX28) 実測図

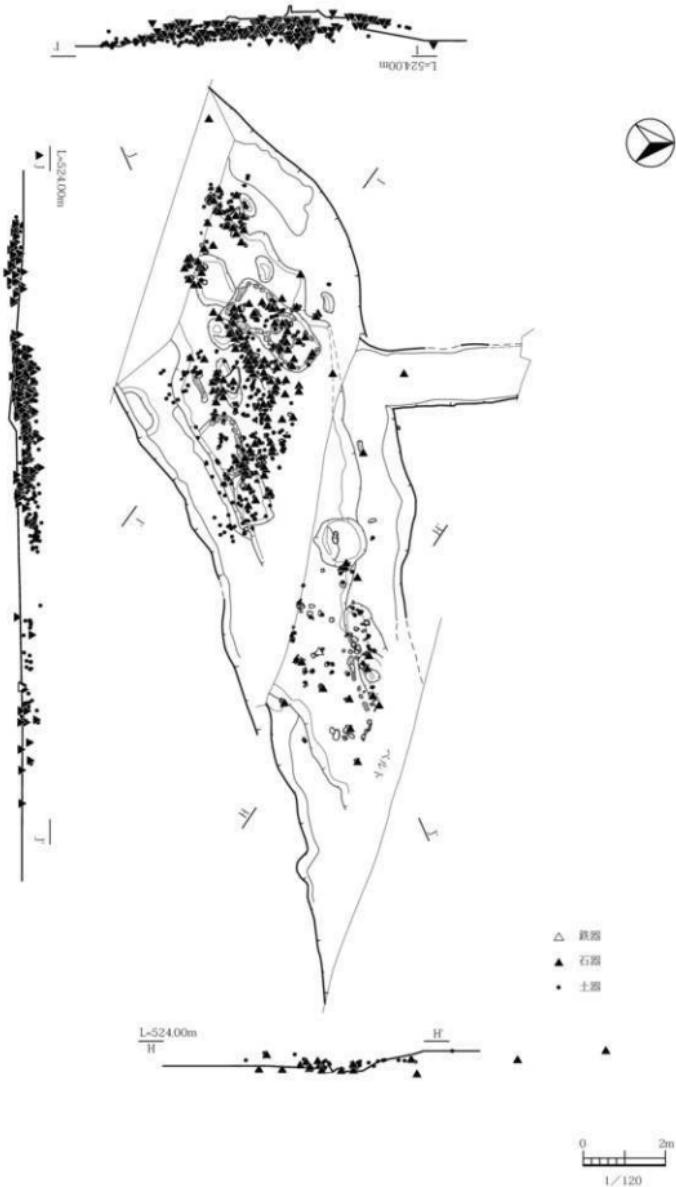


図 167 溝 (SX28) 遺物分布図

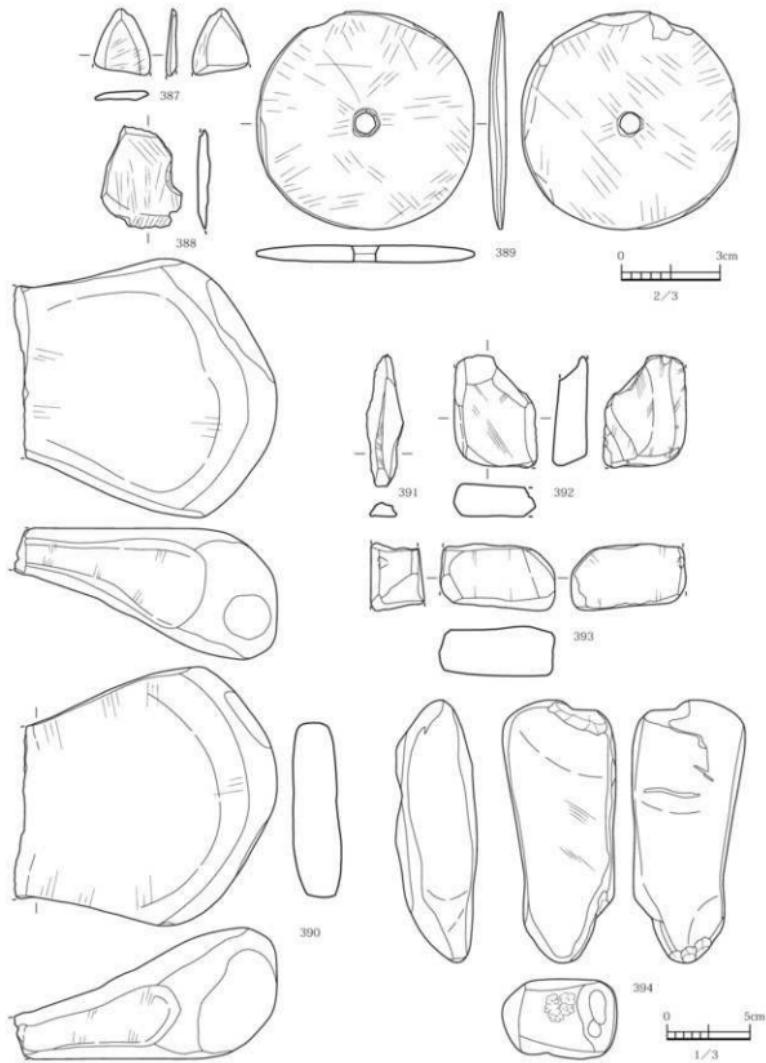


図 168 溝 (SX28) 出土石器 (RQ) 実測図 (1)

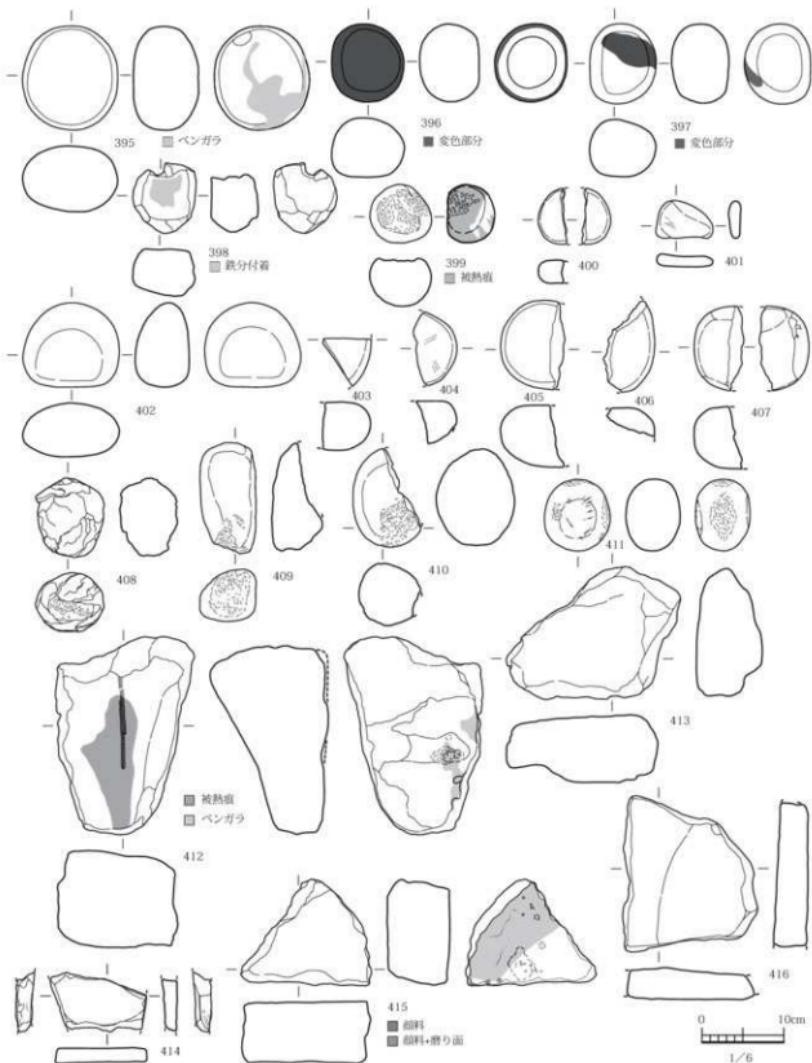


図 169 溝 (SX28) 出土石器 (RQ) 実測図 (2)

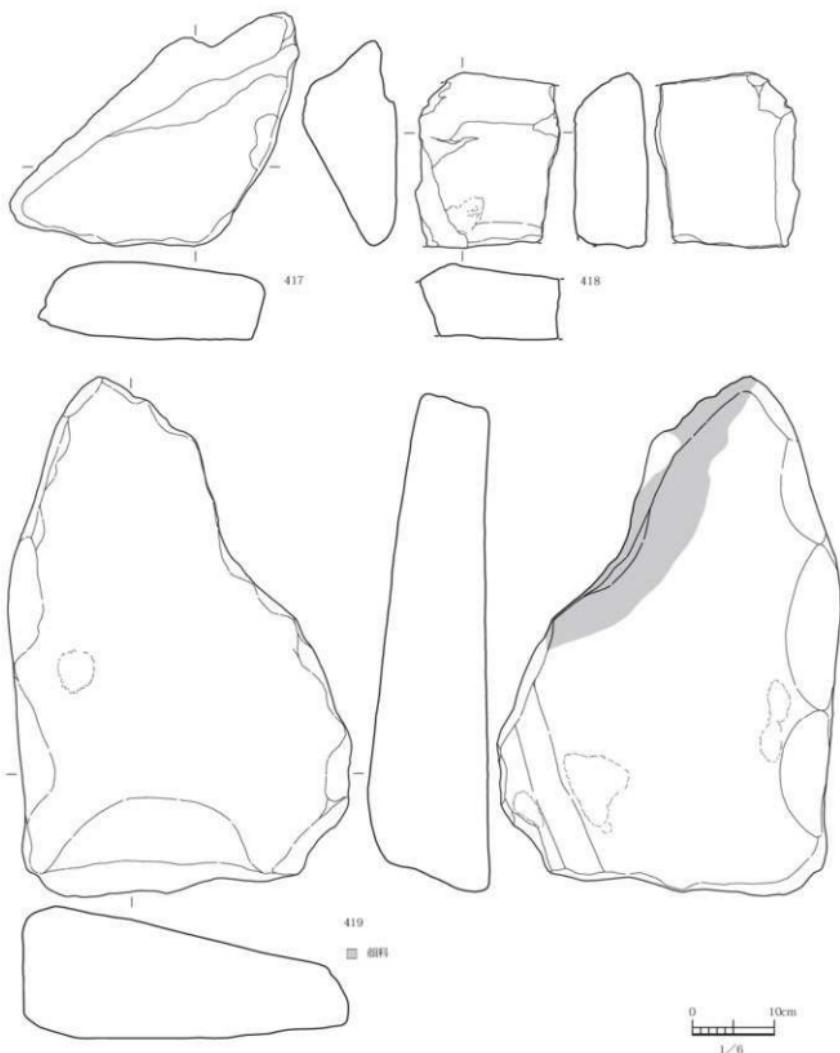


図 170 溝 (SX28) 出土石器 (RQ) 実測図 (3)

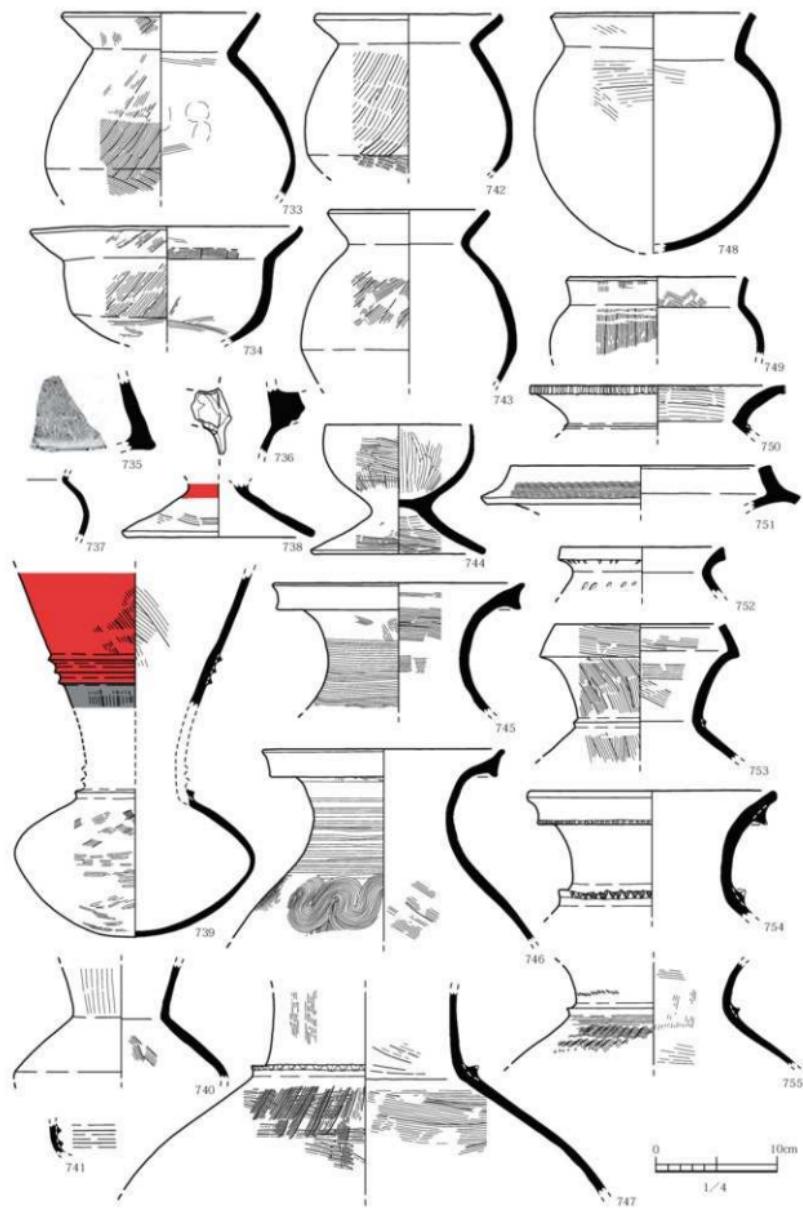


図 171 溝 (SX28) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

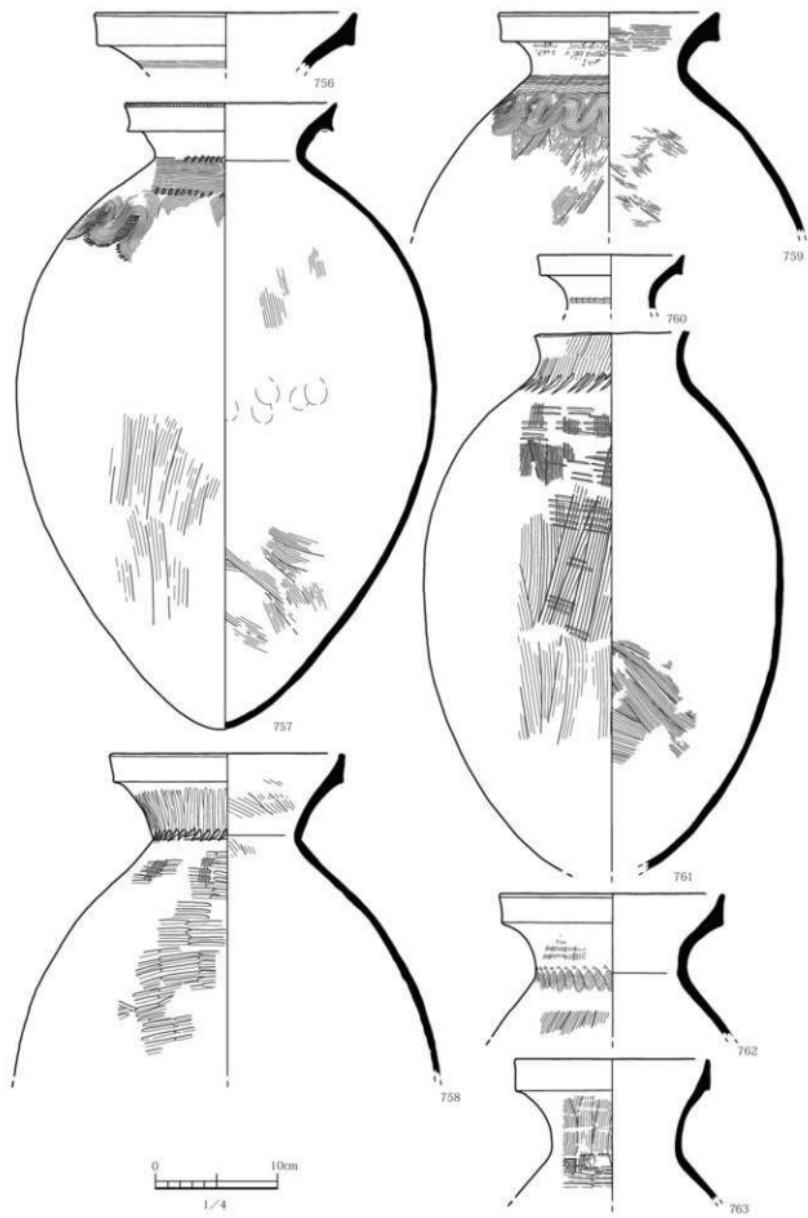


図 172 溝 (SX28) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

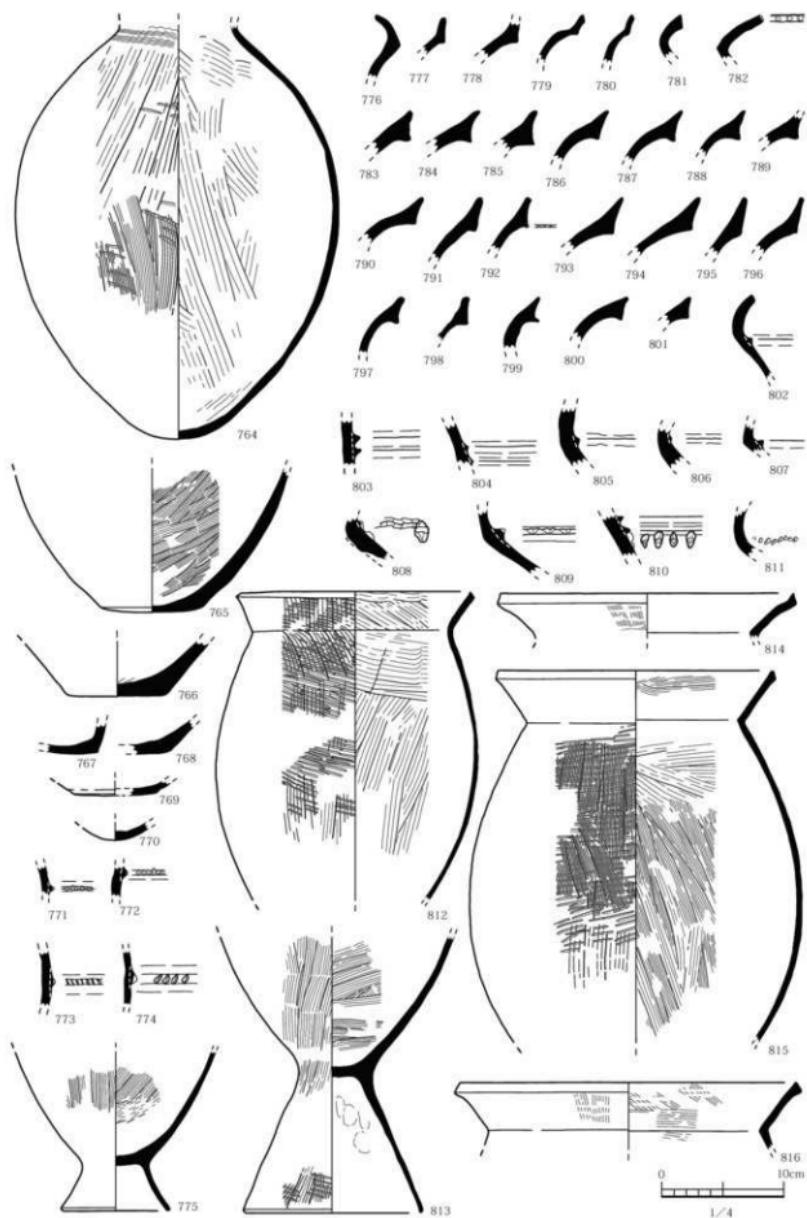


図 173 溝 (SX28) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

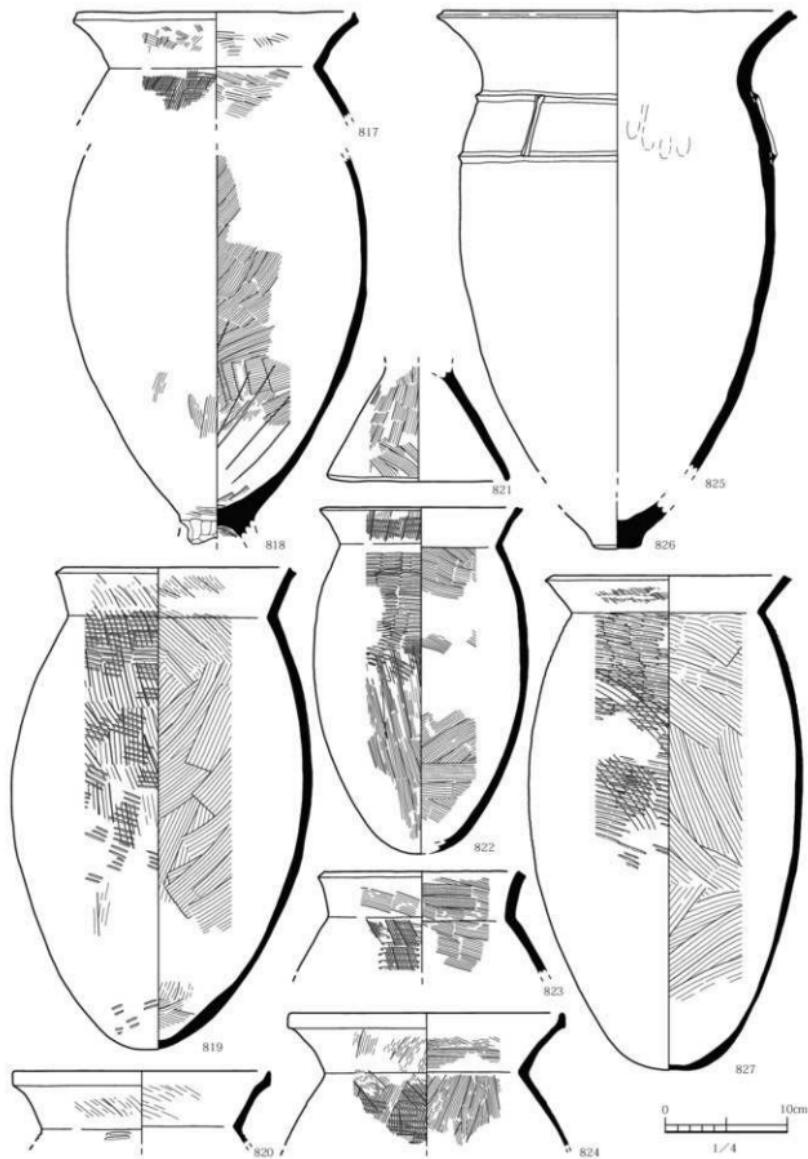


図 174 溝 (SX28) 出土土器 (RP) 実測図 (4)

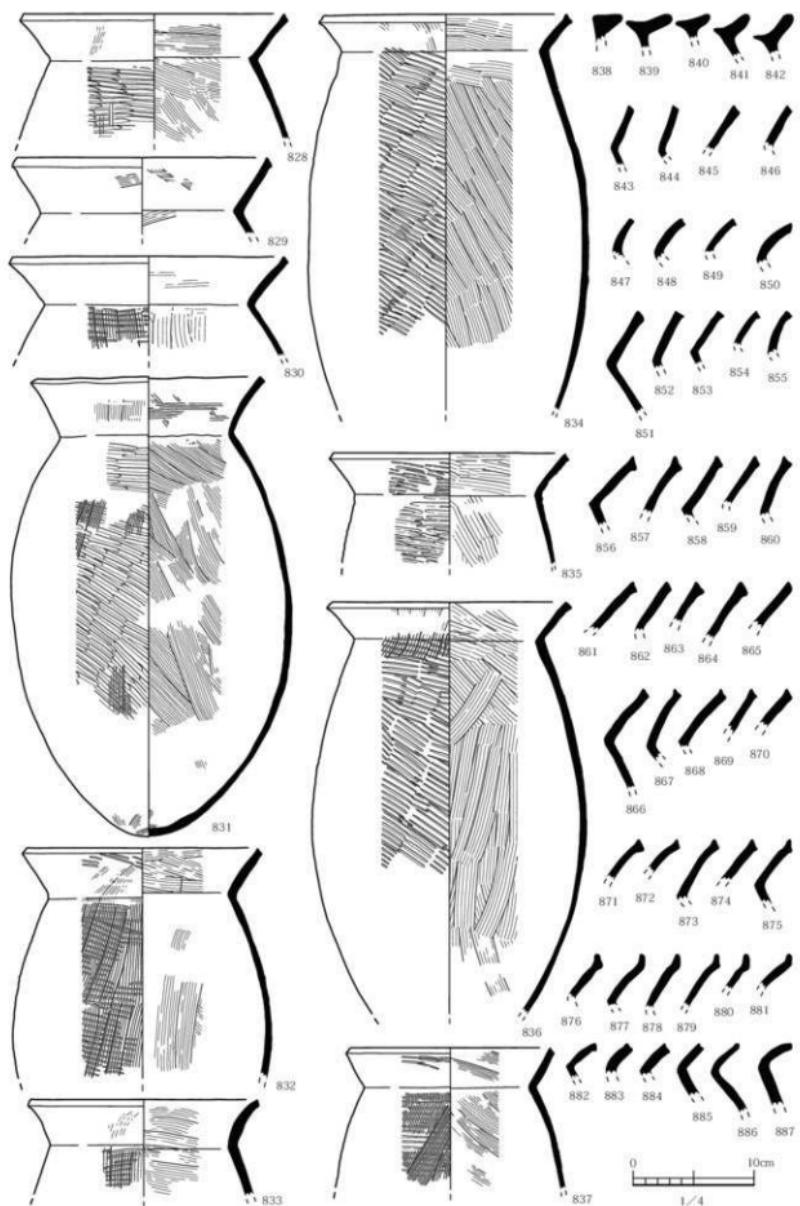


図 175 溝 (SX28) 出土土器 (RP) 実測図 (5)

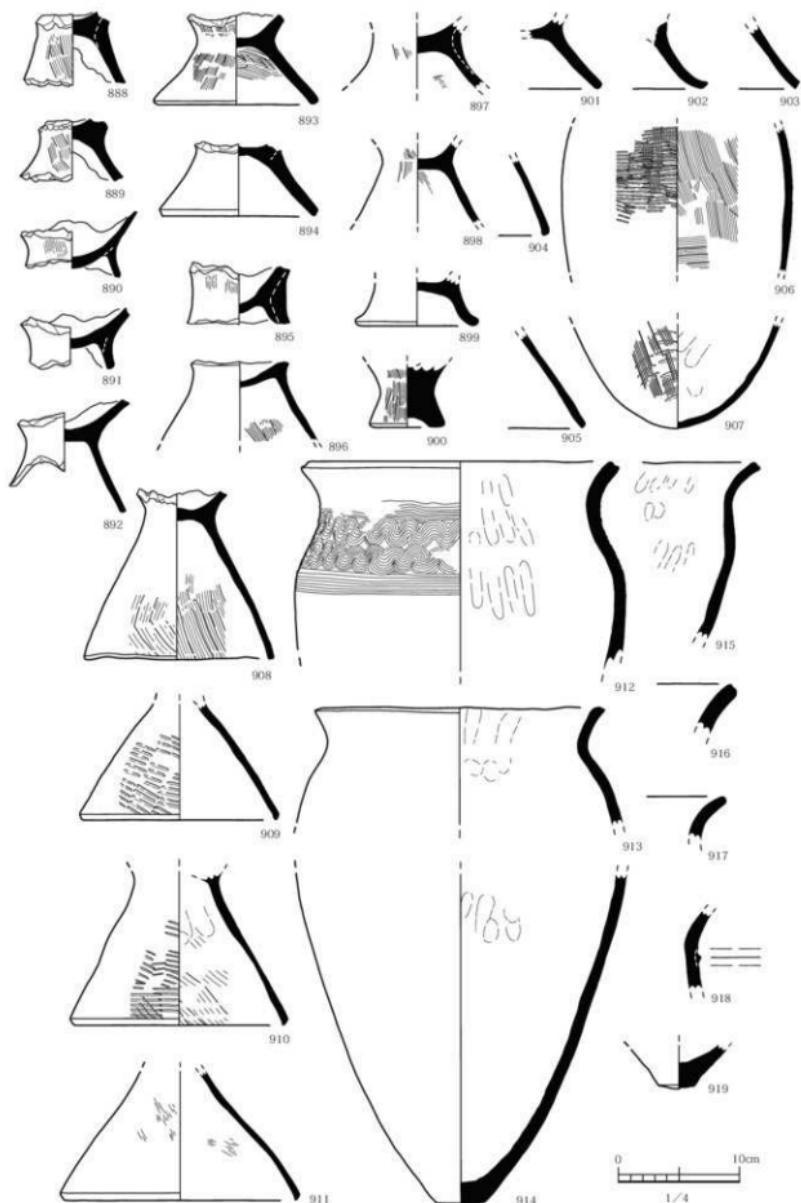


図 176 溝 (SX28) 出土土器 (RP) 実測図 (6)

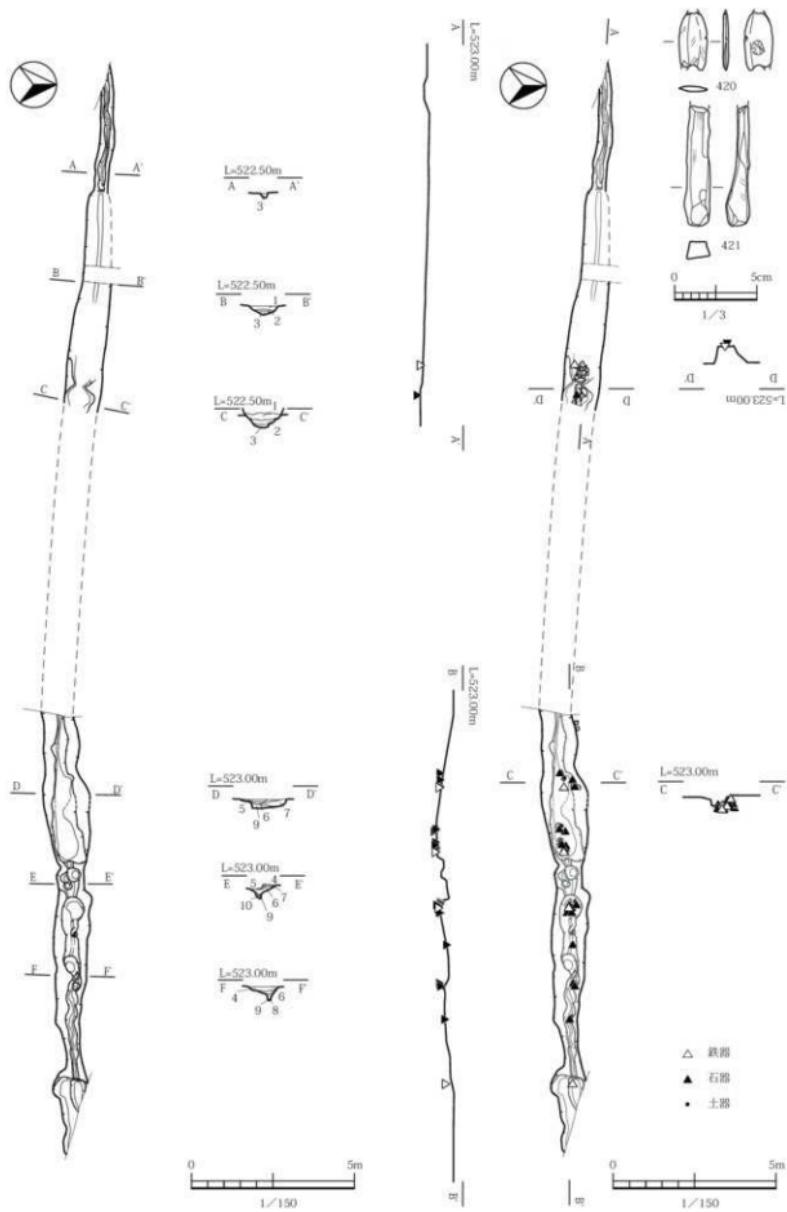


図 177 溝 (SD10) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

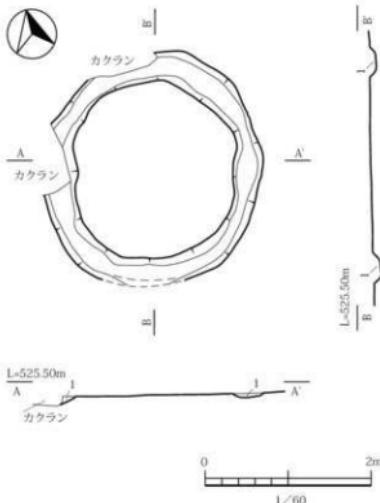


図 178 円形周溝 (SX30) 実測図

礫をやや多く含む。

- 4 : 埋 d 層 : 黒褐色(10YR2/2)土。わずかに砂が入る。
 - 5 : 埋 e 層 : 黒褐色(10YR2/3)土。褐色の 7a 層をまだらに多く含む。わずかに砂が入る。
 - 6 : 埋 f 層 : 黒褐色(10YR2/2)土。7a 層をわずかに含む。わずかに砂が入る。
 - 7 : 埋 g 層 : 黒褐色(10YR3/2)土。3 層を多く含み、砂は入らない。
 - 8 : 埋 h 層 : 黒色(10YR2/1)土。3 層を直径 3cm のブロックで含む。
 - 9 : 埋 i 層 : 暗褐色(7.5YR3/4)砂礫層。
 - 10 : 埋 j 層 : 黒褐色(10YR2/2)シルト。3 層をプロックで含む。
- なお、発掘作業担当者は、「3：埋 c 層を次のように解釈している。「砂礫が含まれることから、水が一時に流れたことがわかる。弥生時代後期～終末にかけ、上流域で土石流のようなものが起こり、その先端部が砂礫。自然堆積中には砂礫の痕跡なし。よって一時的なイベントあり。」報告者は、この解釈を探らない。

SX30 (円形周溝)

SX30 は、調査区 17 区、635 グリッドに位置し、幅 0.4m を測る溝が直径 2.6m の円形を呈する周溝である。SI78 に北接している。

SX30 は、断面形が台形を呈し、底幅 0.2m、深さ 10cm 程を測る。SI78 との切り合い関係は不明である。SI78 の 3：埋 3 層には「SX30 の埋土が入り込んでいる。」との記載があるが、当該層と上下層との弁別が炭化物の有無によりなされていることに留意すべきであろう。付帯施設は検出されていない。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層 : 黒褐色(10YR2/2)土。直径 1cm 以下の 3 層を含む。

1-3 穴穴建物 (SI)

津留地区では穴穴建物 63 棟が検出され、うち 58 棟が弥生時代の穴穴建物として発掘された。各穴穴建物は条溝 SX22 から 40m 以上東に離れて位置している。条溝 SX22 と穴穴建物群の間には、土壌墓 19 基、掘立柱建物 4 棟が位置している。穴穴建物群は条溝 SX28 により二分され、条溝 SX28 より東の穴穴建物群には掘立柱建物 3 基が混在する。いずれの穴穴建物も主軸を東西に採り、切り合ひ関係は 20 例 33 棟を数える。

SI13

SI13 は、調査区 12 区、499 グリッドに位置し、5.8m × 3.2m の方形を呈する 4 本柱建て穴穴建物である。検出面からの深さ 0.7m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。

主柱穴は、南列の 2 基を掘削し、直径 0.4m、深さ 0.5m を測る。主柱穴は、南列の 2 基を掘削し、直径 0.4m、深さ 0.5m を測る。南西主柱穴と南東主柱穴の南側には深さ 0.5m の柱穴が各 1 基配置されており、2 基 1 対となってベッド状遺構間に掘削されている (Pit1, Pit2)。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.9m、深さ 0.2m のボウル形を呈している。

K ピットは、南側壁中央に位置し、方形土壌が深さ 0.6m 程に二段掘りされている。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は南東隅、南西隅に設置され、幅 1.2m、高さ 0.2m を測る。

硬化面は、ベッド状遺構を除く床面から検出された。層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。オレンジ色の焼土粒、炭化物をやや含む。
- 2：埋 2 層：黒色（10YR2/1）土。基本土層 3 層の土を直径 3cm 以下でブロック状に含む。焼土粒、炭化物を多く含む遺物が集中している。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR3/1）土。基本土層 3 層の土を直径 1cm 以下で含む。焼土粒、炭化物を含む。
- 4：炉 1 層：黒色（7.5YR2/2）土。3 層～5 層より

構成する。炭化物、焼土粒を多く含む。

- 5：炉 2 層：黒色（10YR2/1）土。地山の土と少量の炭化物が混じる。
- 6：炉 3 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）土。暗褐色（10YR3/4）土に黄褐色（10YR5/6）が粒状あるいはブロック状に入る。
- 7：K ピット 1 层：黒色（10YR2/1）土。5mm 程度の炭化物。2mm 以内の焼土粒が点在する。
- 8：K ピット 2 層：黒色（10YR2/1）土。
- 9：K ピット 3 層：黒色（10YR2/1）土。ややシルトに近く、サラサラとしている。
- 10：柱 a 層：黒色（10YR2/1）土。3 層～4 層から構成される。
- 11：柱 b 層：黒褐色（10YR2/2）土。5 層～6 層から構成される。炭化物、焼土粒をやや含む。
- 12：柱 c 層：黒褐色（10YR2/3）土。7a 層を直径 1cm 大に含む。炭化物をやや含む。ベンガラをわずかに検出。
- 13：柱 d 層：黒褐色（10YR2/2）土。基本土層 3 層と思われるブロック直径 2cm を含む。ベンガラをわずかに検出する。
- 14：柱 e 層：黒褐色（10YR2/2）土。基本土層 7a 層をわずかに含む。
- 15：柱 f 層：黒褐色（10YR2/2）土。5 層～6 層から構成される。炭化物、焼土粒、ベンガラを含む。
- 16：柱 g 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物、焼土粒を含む。
- 17：柱 h 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物、焼土粒をやや含む。
- 18：床 a 層：黒褐色（10YR2/3）土。3 層～5 層が直径 3cm 未満のブロックでまだらに入る。ベンガラを検出する。焼土粒、炭化物粒も含む。
- 19：床 b 層：黒褐色（10YR2/3）土。18 に似る。ベンガラ焼土、炭化物は含まない。
- 20：床 c 層：黒褐色（10YR2/2）土。3 层～5 層が直径 2cm 未満のブロックでまだらに入る。18 に似るがやや暗い。
- 21：床 d 層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭化物粒をやや含む。

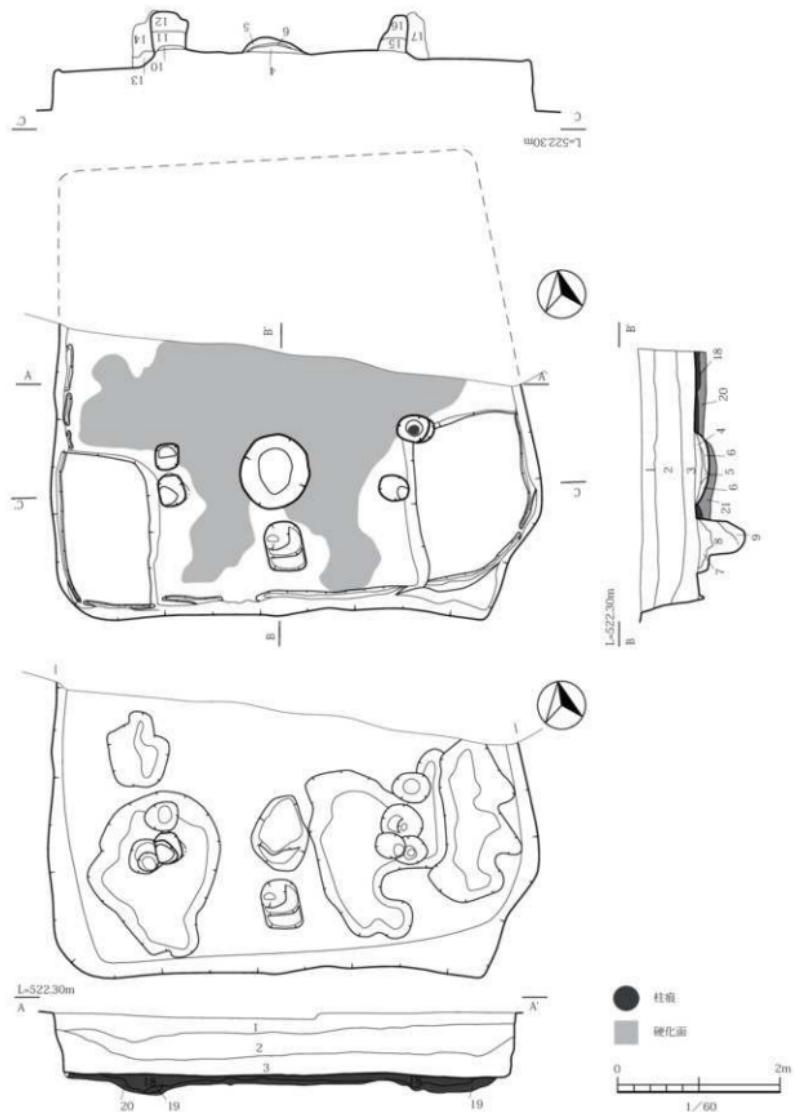


図 179 豊穴建物 (SI13) 実測図

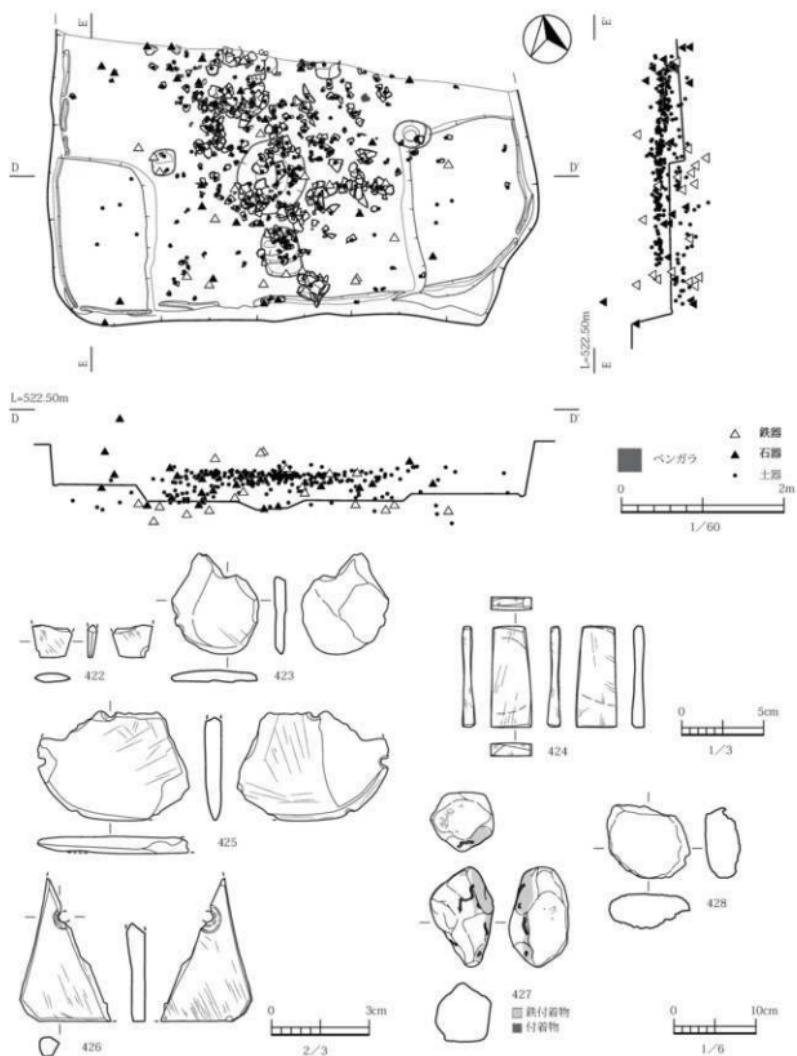


図 180 穂穴建物 (S113) 遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

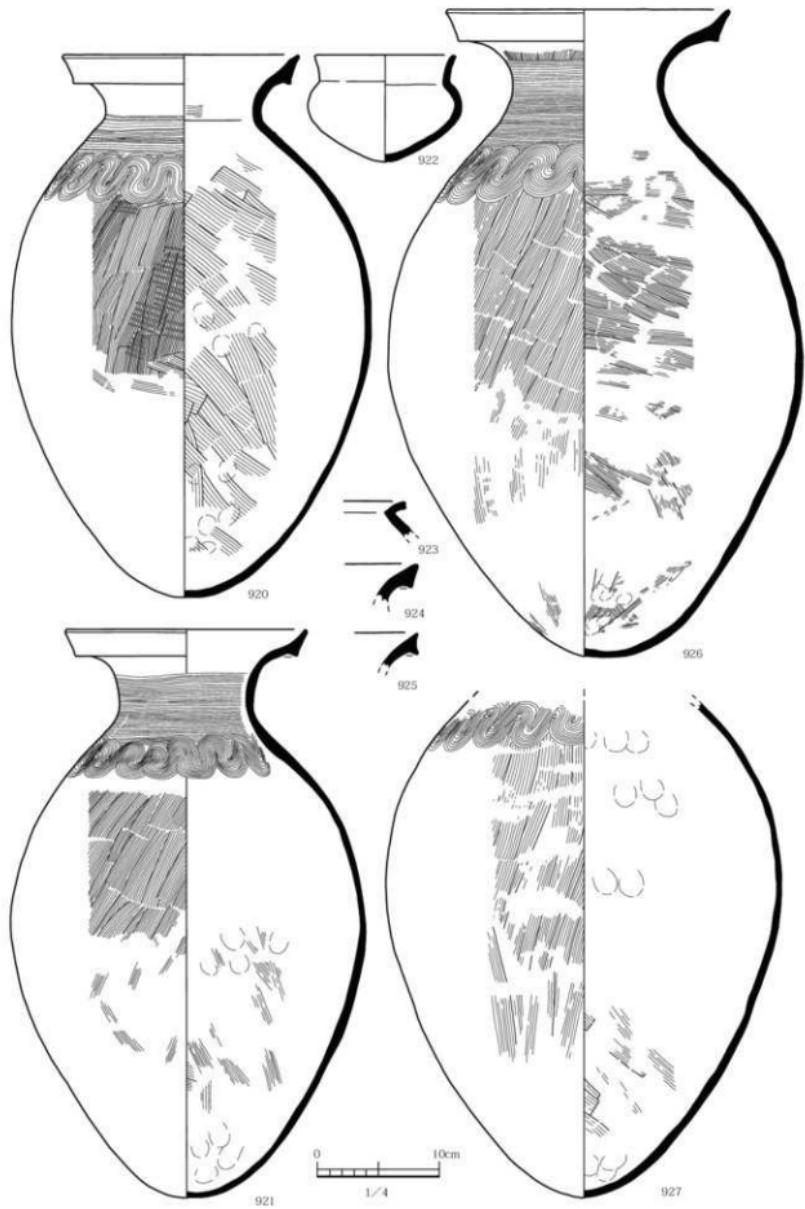


図 181 穹穴建物 (SI13) 出土土器 (RP) 実測図 (1)



図 182 穹穴建物 (SI13) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

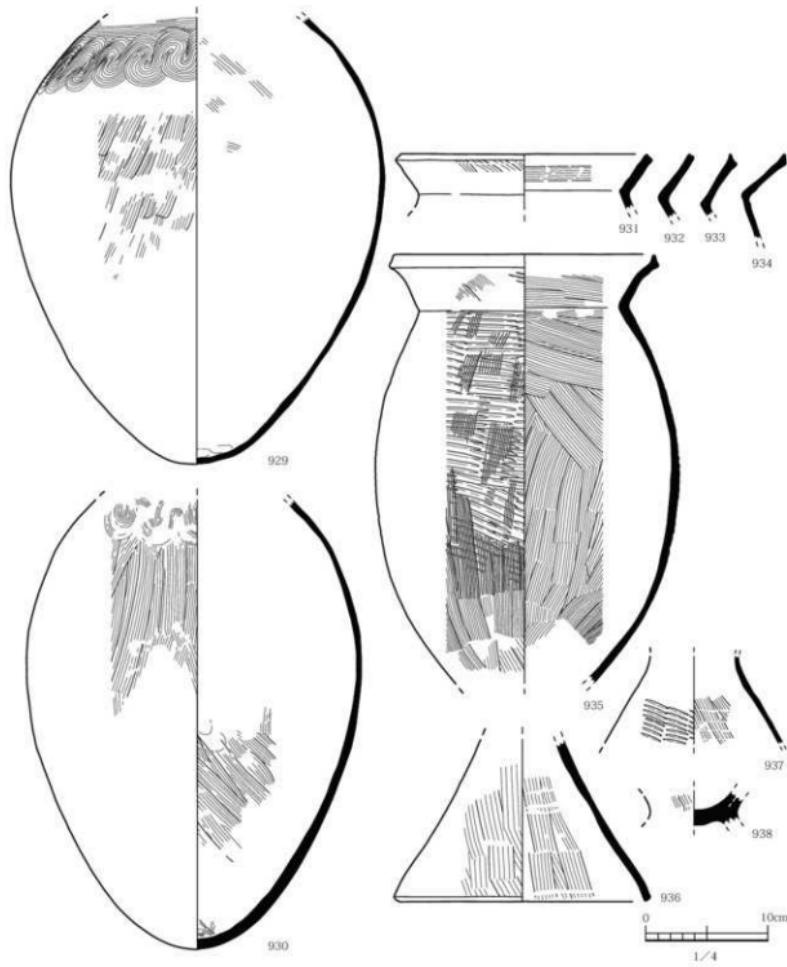


図 183 穫穴建物 (SI13) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

SI14

SI14 は、調査区 12 区、500 グリッドに位置し、5.8m × 5.9m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI15、SI17、SI33、SI34 を切る。

なお、SI14 の北側壁際には、礫群が掘え置かれて

いた。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.6m を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.7m、深さ 0.1m の皿形を呈している。

K ピットは、南側壁中央に接して、深さ 20cm 程の円形土壙が位置している。その北端に支柱穴 1 基が検出されている。炉と K ピットは南北軸が一致して

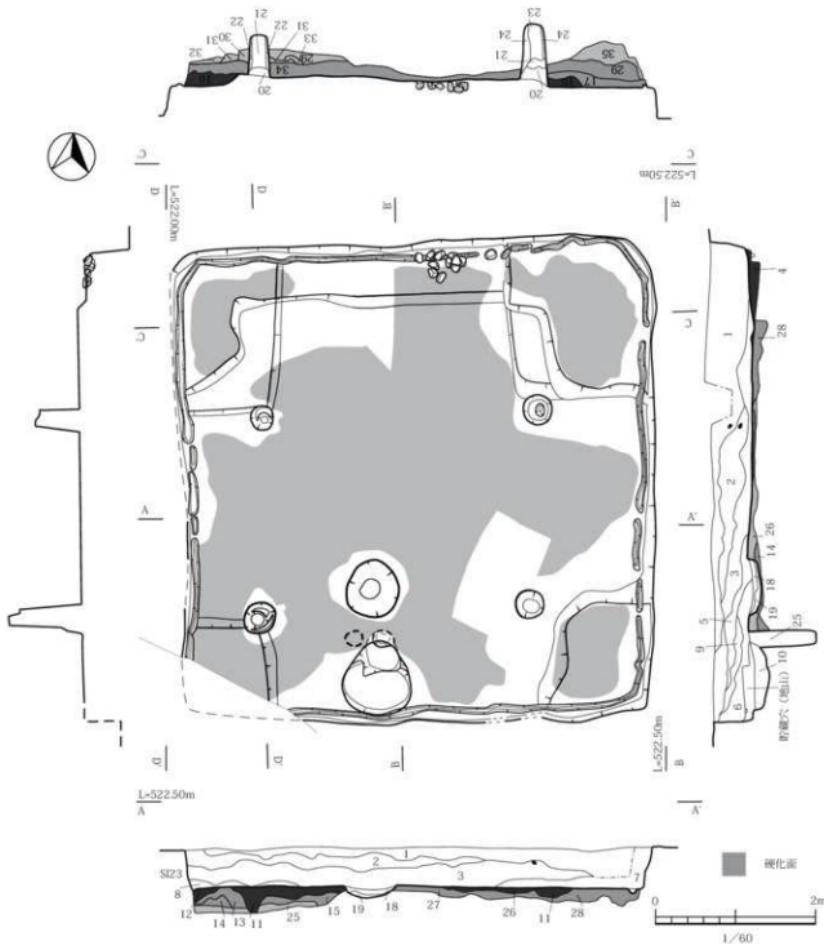


図 184 穫穴建物 (SI14) 実測図

いる。

ベッド状遺構は竪穴建物の四隅に設置され、幅1.1m、高さ0.1mを測る。北側壁沿いには一段低いベッド状遺構が設置され、北西隅ベッド状遺構を建物中央部まで伸長している。

硬化面は、ベッド状遺構を含む床面すべてで検出された。

北側壁の中央部では、拳大の礫11点が側壁際に2

段積みの状態で据え置かれていた。礫群は、東側に5点が固め置かれ、西側には集積が崩れた6点で構成されていた。この礫群の出土地点は、北西隅から北側壁沿いに伸長するベッド状遺構と北東隅ベッド状遺構との間であり、硬化面が検出された範囲の中央にあたる。

層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒色(10YR1.7/1)土。3層～5層を含む。
- 3層は2～3cmのブロック状。小粒状のカーボン

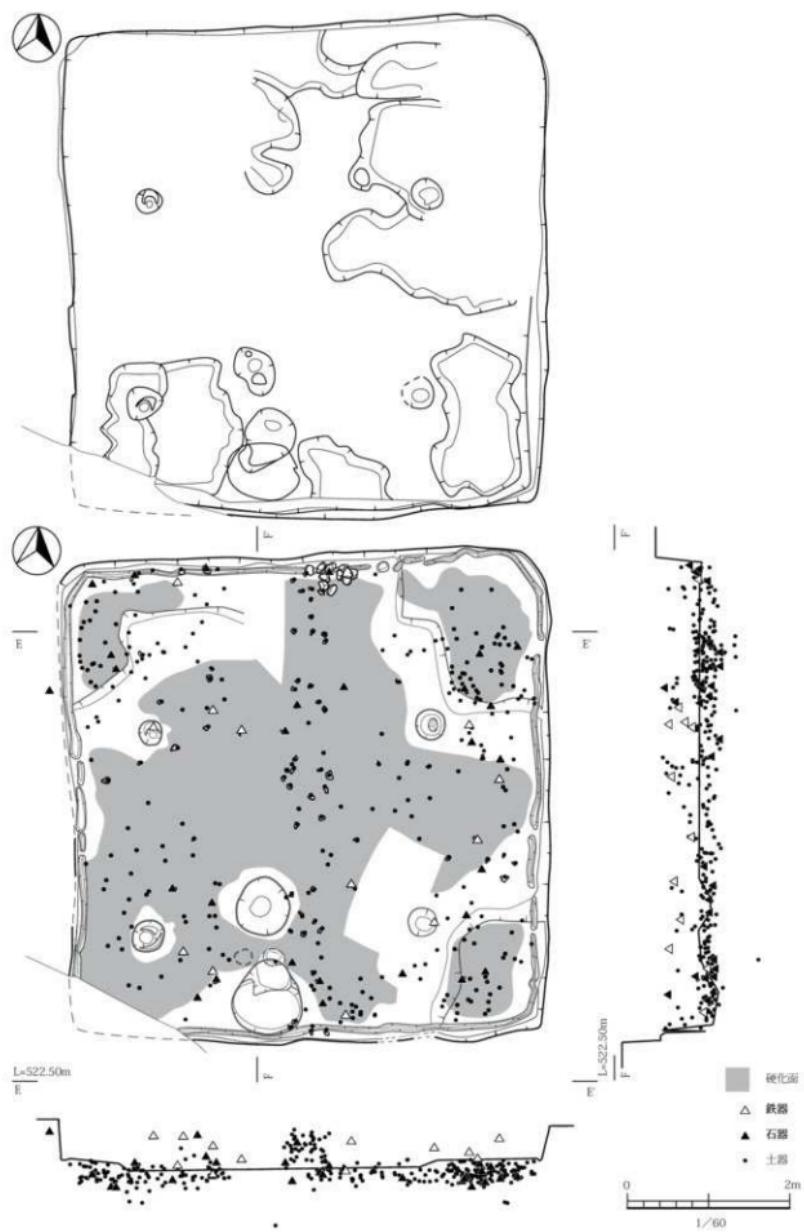


図 185 穹穴建物 (SI14) 実測図・遺物分布図

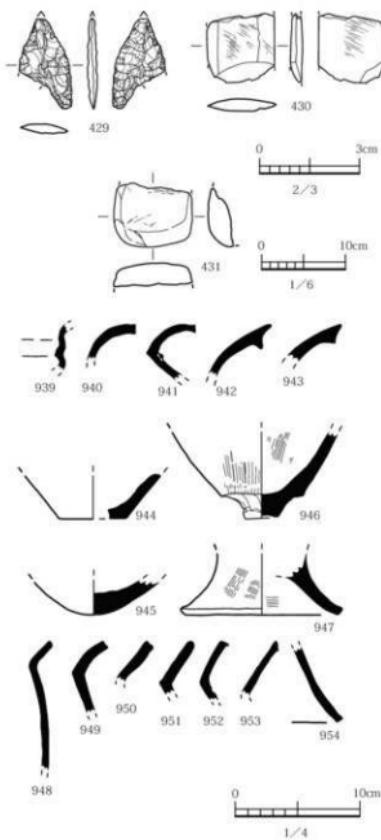


図 186 積穴建物 (SI14) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図
あり。

- 2: 埋 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層～5 層を含む。3 層は 3～4cm のブロック状。小粒状のカーボンあり。
- 3: 埋 3 層: 黒色 (10YR2/1) 土。1・2 よりきめ細かい。3 層～5 層土のいずれも細かくなかった土。
- 4: 埋 4 層: 黒色 (10YR2/1) 土。3 と似ているが、しまっている。ベッド状遺構。
- 5: 埋 5 層: 黒色 (10YR1.7/1) 土。1 の色よりさらに黒い土。3 層～5 層土を含むが 3 層土のブロックが大きい。カーボン多し。
- 6: 埋 6 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層～5 層土を含むが、3 層の割合が大きい。3 層土の塊が特に大きい。
- 7: 埋 7 層: 黒色 (10YR2/1) 土。焼土粒が混ざっており、ザリザリしている。3 層～5 層の土を含む。
- 8: 埋 8 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。焼土粒が入りにくしまった土。3 層～5 層土を含むが 3 層土が目立つ。
- 9: 埋 9 層: 黒色 (10YR2/1) 土。暗褐色 (10YR3/3) 土。カーボンをよく含む。黒色土中に暗褐色土の 10cm 大の塊状を含む。
- 10: 埋 10 層: 貯藏穴土: 黒色 (10YR1.7/1) 土。褐色粒をわずかに含む。カーボンは微粒状で非常に少ない。
- 11: 埋 11 層: 黒色 (10YR2/1) 土。4～7 層土を混ぜ込んでいるような土。ブロックはほとんど見られない。
- 12: 埋 12 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。4～6 層が混ざる土。5mm 程度の長さのカーボンが混入する。
- 13: 埋 13 層: 黒色 (10YR1.7/1) 土。9 の土に似て暗褐色並びに黒色土のブロック塊が混入する粗い土。
- 14: 埋 14 層: 黒色 (2.5YR1.7/1) 土。3～5 層土が粗く混ざった土。
- 15: 埋 15 層: 黒色 (10YR2/1) 土。3～5 層土が粗く混ざった土。11 に似ているが、暗褐色のブロックが入る。
- 16: 埋 16 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。ベッド状遺構の土。灰黄褐色土のブロックが目立つ。
- 17: 埋 17 層: 黒色 (10YR2/1) 土。ベッド状遺構の土。3～5 層の土が細かく混ざった土。ブロックなし。
- 18: 焼 1 層: 黒色 (10YR2/1)。炭化物を少量含む。
- 19: 焼 2 層: 黒色 (10YR1.7/1)。炭化物を多量に含む。50～70%
- 20: 柱穴 1 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。
- 21: 柱穴 2 層: 黒褐色 (10YR2/1) 土。

- 22：柱穴 3 層：黒褐色（10YR3/1）土。
- 23：柱穴 3 層：黒色（10YR2/1）土。あまり腐植が多いわけではない。
- 24：柱穴 4 層：黒色（2.5YR2/1）土。5 層～6 層が混じっている。ブロックはない。
- 25：K ピット 支柱穴 1 層：黒色（2.5YR2/1）土。3～5 層土が混じった土。13 に似ているが暗褐色のブロックが無く、黒色土のブロックが混じる。
- 26：床 1 層：黒褐色（10YR2/1）土。モザイク状に、各層の土が小ブロックごとに混じり合っている。
- 27：床 2 層：黒褐色（10YR2/3）土。3～5 層の土を含み、程よく混じっている。
- 28：床 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。27 の土に似るが、3～5 層の土が混じる中に暗褐色土のブロックが入る。
- 29：床 4 層：黒色（10YR2/1）土。灰黄褐色のブロックを含むが、16 の色よりは暗めである。
- 30：床 5 層：黒色（10YR2/1）土。黒色、暗褐色のブロックを含む。
- 31：床 6 層：黒褐色（10YR3/2）土。にぶい黄褐色のブロックが大半を占める。
- 32：床 7 層：黒色（10YR2/2）土。3～5 層の土を含む。ブロックなし。
- 33：床 8 層：黒褐色（10YR3/2）土。26 と 27 の土を混ぜた感じの土。ブロックは 26 より小さい。
- 34：床 9 層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5 層の土が混じった土。ブロックは小さめ。
- 35：床 10 層：黒色（10YR2/1）土。3～7 層の土を含む。黄褐色のブロック塊状になっている。7 層土もブロック状である。
- SI15**
- SI15 は、調査区 12 区、498 グリッドに位置し、5.9m × 5.6m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.6m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI14、SI33 に切られる。なお、SI15 の K ピットには、礫群が据え置かれていた。
- 主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.4m、深さ 0.9m を測る。いずれの主柱穴においても直径 0.2m ほどの柱痕が検出されている。
- 炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.5m、深さ 0.3m の漏斗形を呈している。
- K ピットは、南側壁中央に接して位置し、深さ 20cm 程の長方形土壤の北端に支柱穴 2 基が付設されている。炉と K ピットは南北軸が一致している。K ピットには拳大の礫 5 点が据え置かれていた。
- ベッド状遺構は竪穴建物の四隅に設置され、幅 1m、高さ 0.1m を測る。
- 硬化面は、炉の周辺と内陣で検出された。
- 層序は次のとおりである。
- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。直径 1～2mm の炭化物が 10cm² 中に 2 点ほどある。
 - 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。5 層の直径 5cm のブロックが多量に含まれる。
 - 3：埋 3 層：黒色（10YR2/1）土。炭は直径 2mm 程度で、10cm²あたり 1 点ほど。
 - 4：床 1 層：黒色（10YR2/1）土。上面に多量の炭化物がのっている。
 - 5：床 2 層：黒褐色（10YR2/3）土。
 - 6：床 3 層：暗褐色（10YR3/3）土。3 層～5 層から構成され、直径 2cm 以下のブロックに碎いてある。
 - 7：床 4 層：黒褐色（10YR3/2）土。3 層～6 層がまだらに入る。こぶし大のブロックが入る。上面は硬化している所もある。ベンガラを検出した。
 - 8：床 5 層：黒褐色（10YR2/2）土。6 層に 5 層がやや混じる程度。
 - 9：K ピット 1 层：黒褐色（10YR3/1）土。3 層～5 層が直径 3cm 以下のブロックで入る。炭化物もやや入る。
 - 10：K ピット 2 層：黒褐色（10YR3/1）土。9 に似る。ブロックは 1cm 以下。
 - 11：床 6 層：黒褐色（10YR3/1）土。3 層～6 層が直径 2cm 大に入る。
 - 12：床 7 層：黒色（10YR2/1）土。5 層 6 層からなる。
 - 13：炉 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物を多く含む。
 - 14：炉 2 層：黒色（10YR2/1）土。多量の炭化物から成る。
 - 15：柱 1 層：黒褐色（10YR3/1）土。柱痕。

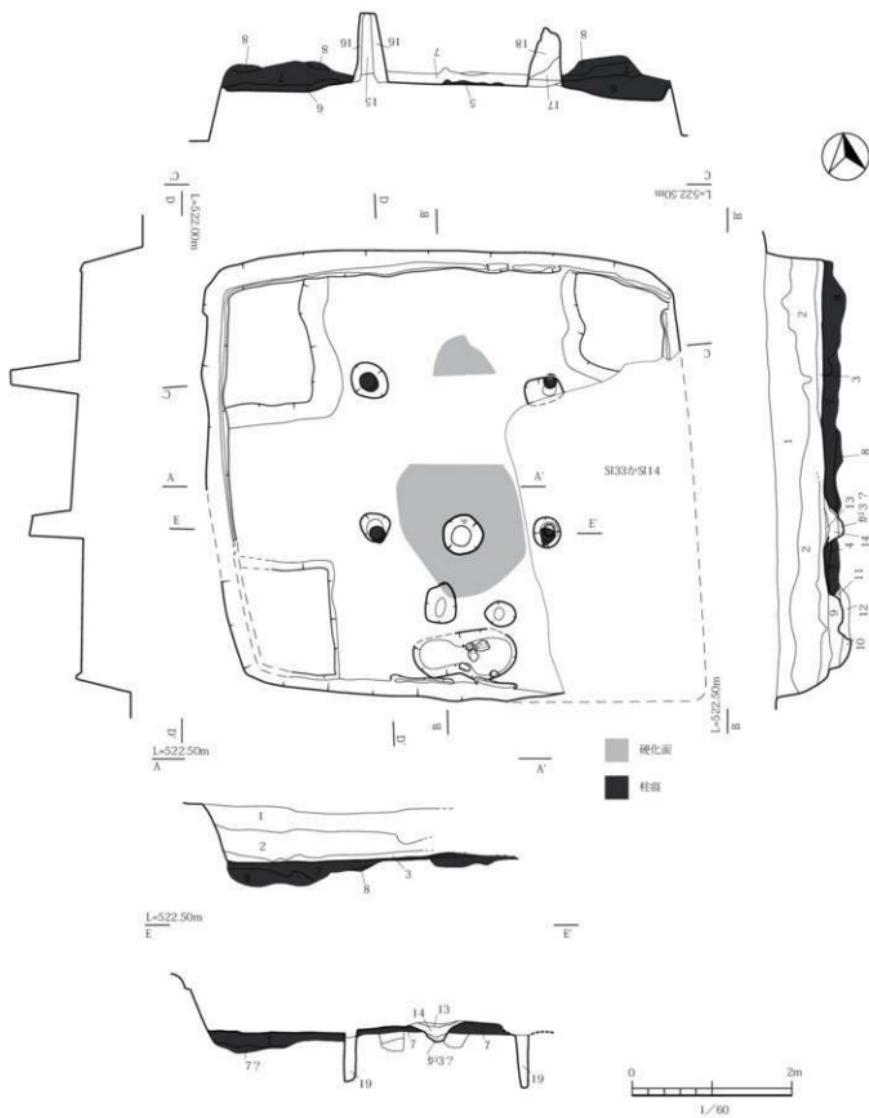


図 187 肩穴建物 (SI15) 実測図



図 188 穂穴建物 (SI15) 実測図・遺物分布図

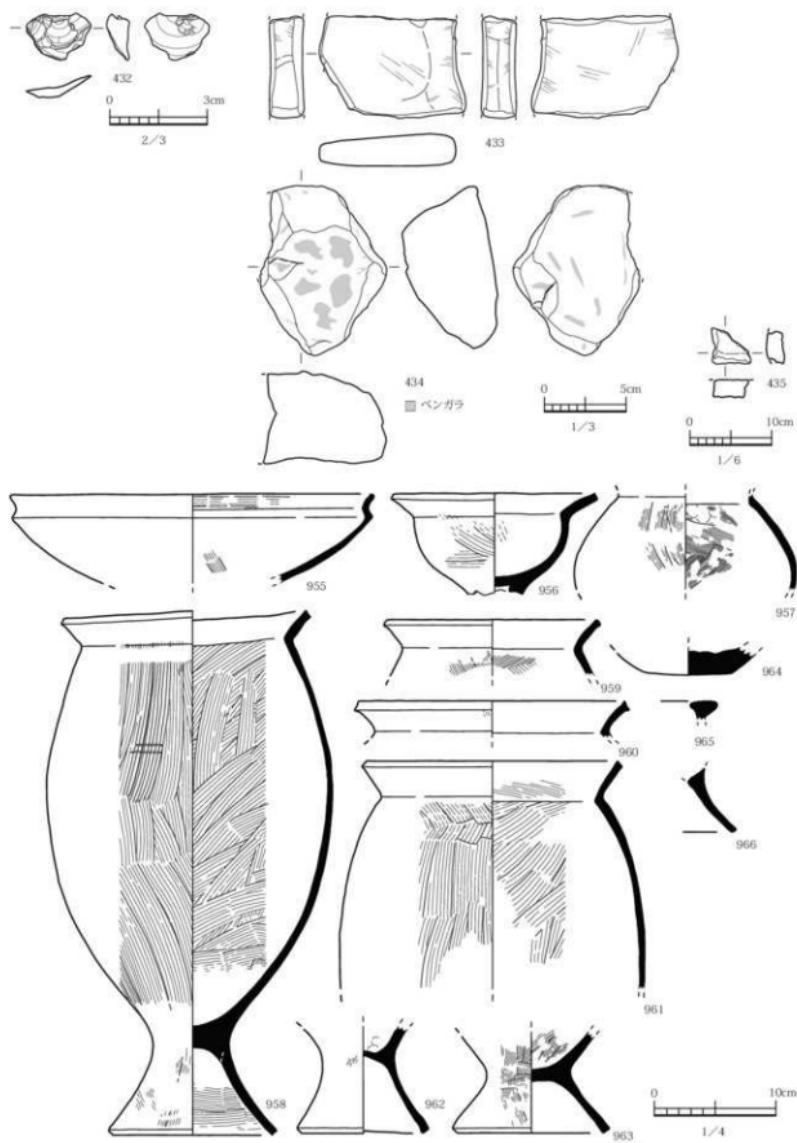


図189 窪穴建物(SI15)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

- 16: 柱2層: 黒褐色(10YR3/2)土。硬くしまって
いる。3層~7a層までブロック状に含む。
- 17: 柱3層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層~5層。
硬くしまっている。
- 18: 柱4層: 黒褐色(10YR3/2)土。5層~7a層か
ら成り、ブロック状に入る。
- 19: 柱5層: 黒褐色(10YR2/2)土。柱痕。

SI16

SI16は、調査区12区、505グリッドに位置し、
2m×3.6mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物であ

る。検出面からの深さ0.7mを測り、ベッド状遺構が
検出された。SI17、SI18を切り、SI19に切られる。

ベッド状遺構は、南西隅のベッド状遺構が発掘され、
幅1.4m、高さ0.3mを測る。

その他の付帯施設は、調査範囲外に存在する遺構部
分に含まれている。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)土。1~2mmの長
さの炭化物や焼土が少量含まれる。
- 2: 埋2層: 黒色(10YR2/1)土。4層を基本として、
中に3層のブロック(直径3cm程度)が点在。赤
褐色(5YR4/8)の焼土粒が多量に含まれる。

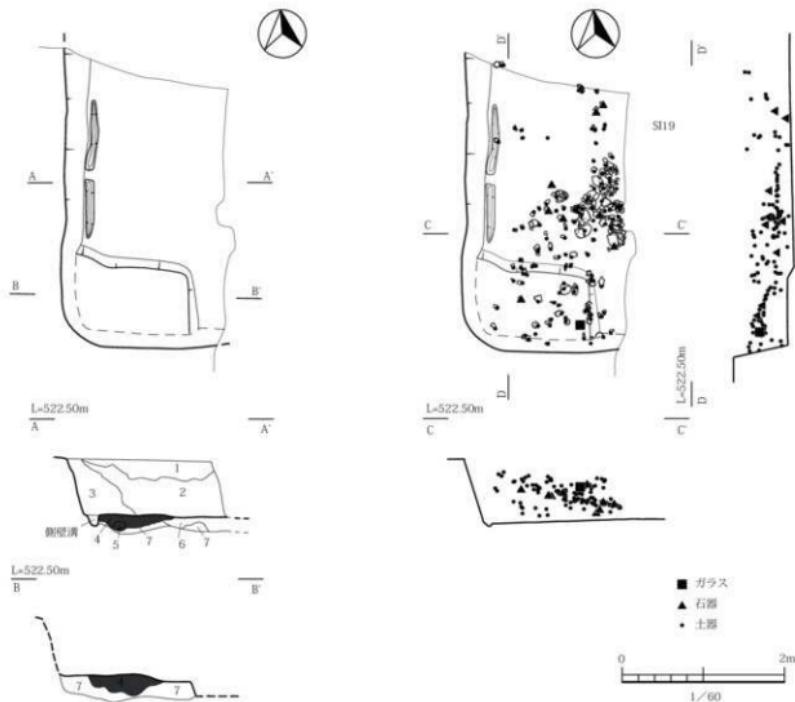


図190 竪穴建物(SI16)実測図・遺物分布図

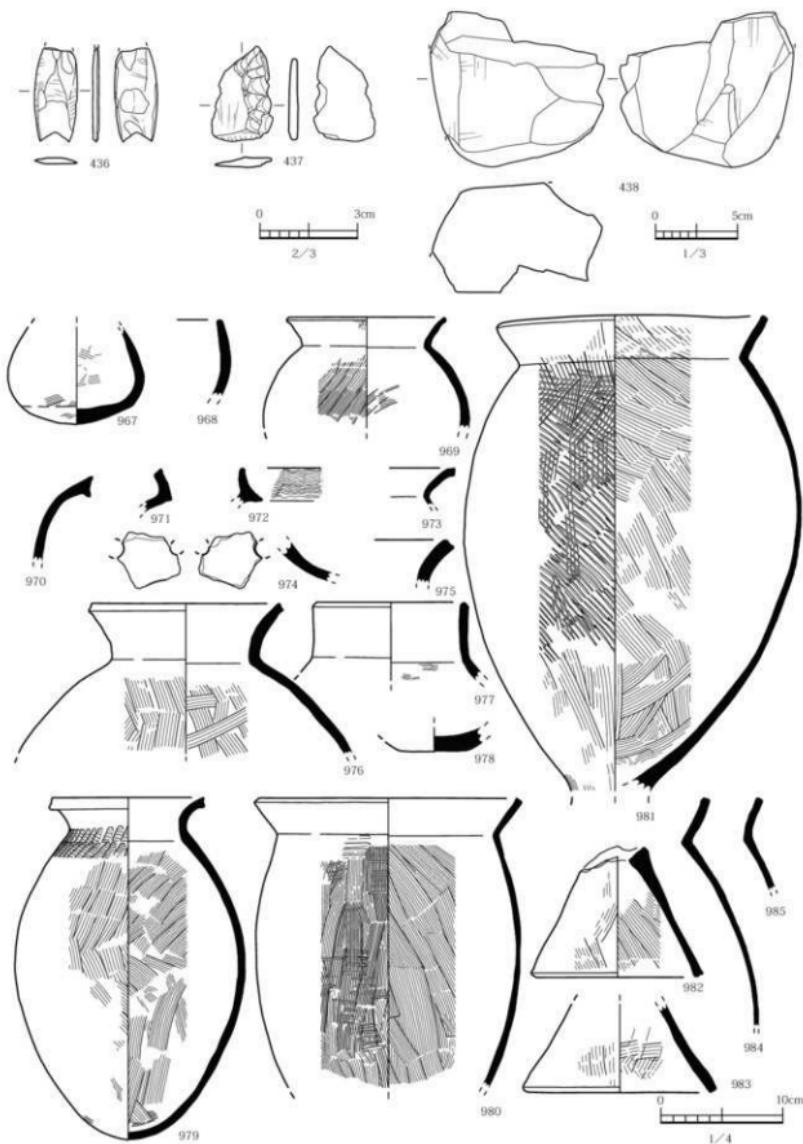


図 191 穹穴建物 (SI16) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図 (1)

3: 埋3層: 黒色(10YR2/1)土。4層をベースに、
3層のブロックが点在し、2mm程度の炭化物粒も
少量含まれる。

4: 床1層: 暗褐色(10YR3/3)土。2層~4層まで
を直径3cm以下のブロックで含む。硬くしまって

おり、上部にベンガラを多量に検出した。

5: 床2層: 黒褐色(10YR3/1)土。4層のブロック。

6: 床3層: 黒褐色(10YR2/3)土。4に似るが、や
やしまりが弱く、鉄分の沈着が多く見られる。

7: 床4層: 黒褐色(10YR3/1)土。3層がやや入るが、

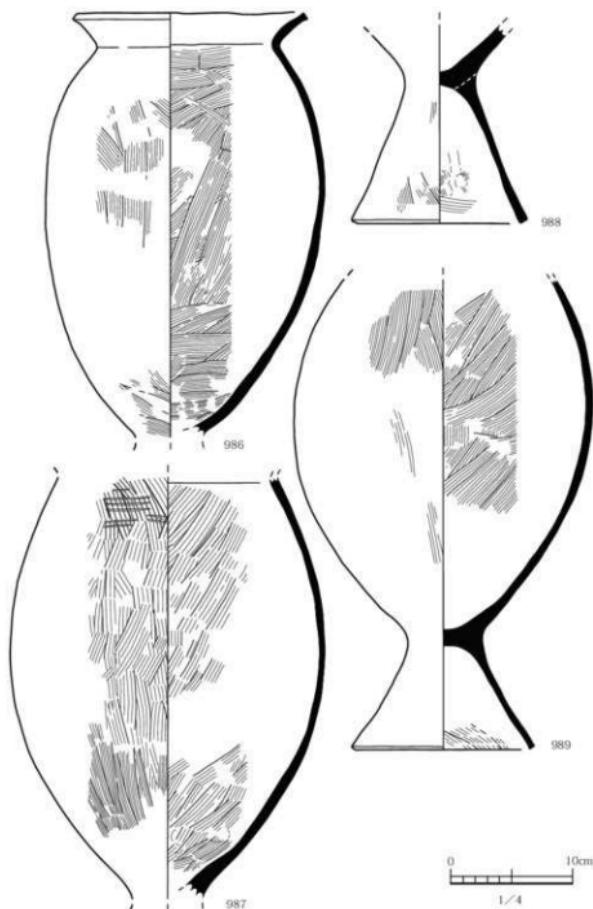


図192 積穴建物(SI16)出土土器(RP)実測図

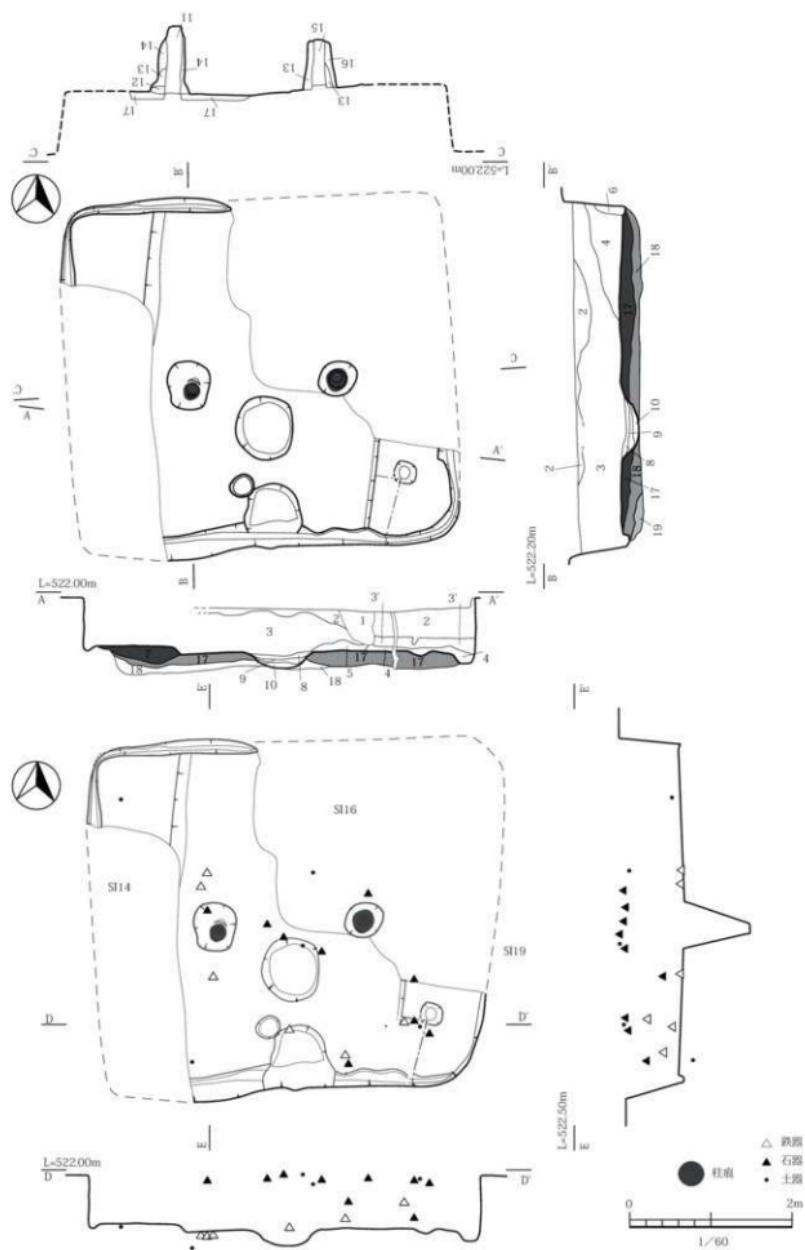


图 193 穹穴建物 (SI17) 実測図・遺物分布図

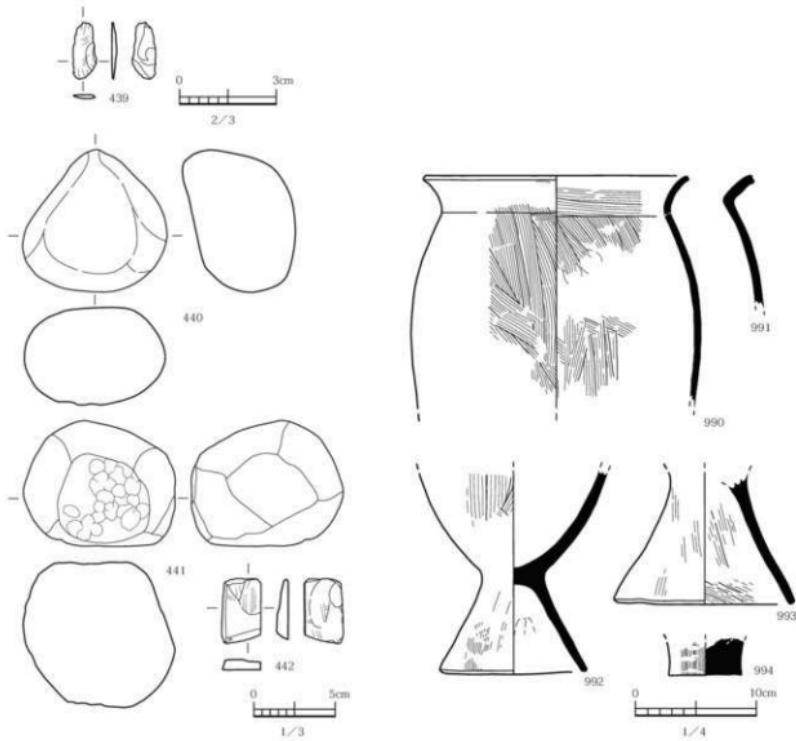


図194 穫穴建物(SI17)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

ほとんどが4層。

SI17

SI17は、調査区12区、505グリッドに位置し、3.6m×4.5mの長方形を呈する2本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.6mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。SI18を切り、SI14、SI16、SI19、SI33に切られる。

主柱穴は、2基を掘削し、直径0.4m、深さ0.8mを測る。いずれの主柱穴でも直径0.2mほどの柱痕が検出されている。

炉は、主柱穴間に位置し、直径0.7m、深さ0.2mのボウル形を呈している。

Kピットは、南側壁中央に位置し、深さ20cm程の方形土壙の北端に支柱穴1基が検出された。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は東西側壁に沿って設置され、幅0.9m、高さ0.1mを測る。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：擾乱：黒褐色(10YR3/1)土。別遺構の埋土。
- 2：埋a層：黒褐色(10YR2/2)土。流れこんだ土。
- 3：埋b層：黒褐色(10YR2/3)土。3層をブロック(直径2cm以下)状に含む。西の方から一気に埋めたものか、炭化物、ベンガラを含む。3'は、よくしまっている。
- 4：埋c層：黒褐色(10YR2/2)土。3層を直径1cm以下のブロックで含む。炭化物もやや含む。
- 5：埋d層：黒褐色(10YR3/1)土。炭化物を多く含む。
- 6：埋e層：黒褐色(10YR2/2)土。
- 7：床a層：暗褐色(10YR3/4)土。3層～5層の土が直径3cm程のブロック状に入る。ベッド状遺構。

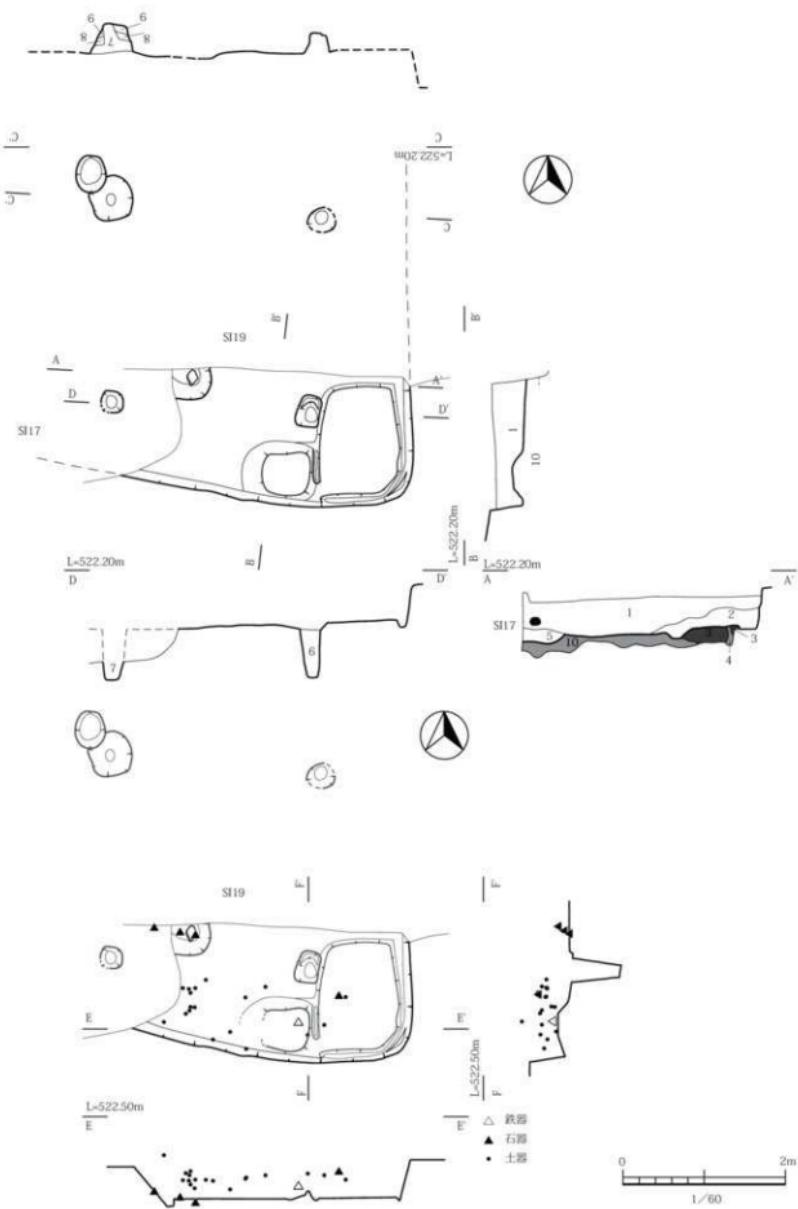


図 195 壁穴建物 (SI18) 実測図・遺物分布図

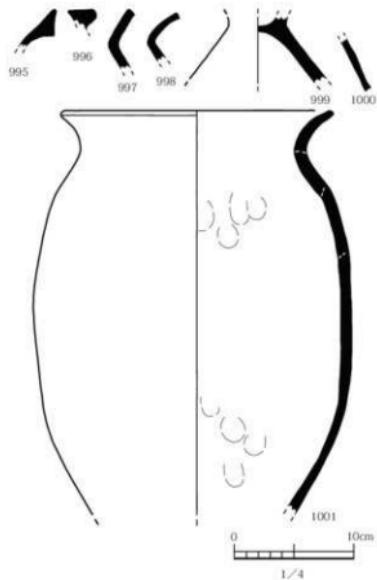


図 196 穫穴建物 (SI18) 出土土器 (RP) 実測図

- 8: 炉 a 層: 黒色 (10YR2/1) 土。直径 2cm より小さい 3 層をブロックで含む。全体に炭化物粒を含む。
- 9: 炉 b 層: 黒色 (10YR2/1) 土。ほとんど炭化物。
- 10: 炉 c 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。明褐色の焼土粒、炭化物を多く含む。
- 11: 柱 a 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。柱痕。炭化物を含む。
- 12: 柱 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。5 層～7a 層から成る。
- 13: 柱 c 層: 暗褐色 (10YR3/4) 土。5 層～7a 層から成る。7a 層を多く含む。
- 14: 柱 d 層: 暗褐色 (10YR2/2) 土。6 層 7a 層。7a 層は細かく少ない。
- 15: 柱 e 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。柱痕。
- 16: 柱 f 層: 暗褐色 (10YR3/4) 土。5 層～7a 層から成る。7a 層は少なく、5 層を 5cm 大のブロックで含む。
- 17: 床 b 層: 黒褐色 (10YR3/2) 土。3 層 5 層 6 層をブロック状に含む。上面が硬化している。
- 18: 床 c 層: 黒色 (10YR2/1) 土。5 層 6 層より成る。
- 19: 床 d 層: 黒色 (10YR2/1) 土。18 に似るがほとんどの 6 層。

んど 6 層。

SI18

SI18 は、調査区 12 区、508 グリッドに位置し、方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。南西隅が残存し、検出面からの深さ 0.4m を測り、ベッド状遺構をそなえている。SI17、SI16、SI19 に切られる。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.6m を測る。

炉は、発掘作業では確認されていない。しかし、南列の柱穴間に位置する「炭化物をわずかに含む」皿形の土壤が炉であろう。

ベッド状遺構は南西隅に残存し、幅 1m、高さ 0.1m を測る。南側壁沿いにはベッド状遺構の西に 0.5 × 0.6m 方形を呈した高さ 0.1m の台が接続している。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋 1 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。
- 2: 埋 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層を直径 1cm 以下でブロック状に含む。炭化物を含む。
- 3: 床 a 層: 黒褐色 (10YR3/2) 土。3 層～5 層をブロック状に含む。ベッド状遺構。
- 4: 床 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。
- 5: 埋 3 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層～6 層より成る。炭化物をわずかに含む。
- 6: 柱 a 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。7a 層は含まない。
- 7: 柱 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。5 層 6 層に 7a 層がわずかに入る。
- 8: 柱 c 層: 暗褐色 (10YR3/3) 土。7a 層が多く入る。
- 9: 柱 d 層: 暗褐色 (10YR3/4) 土。7a 層がブロックで多量に入る。
- 10: 床 c 層: 黒褐色 (10YR3/2) 土。3 層～6 層から成る。

SI19

SI19 は、調査区 12 区、509 グリッドに位置し、6.3m × 4.3m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.6m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI16、SI17、SI18 を切る。

主柱穴は、北東主柱穴以外の 3 基を掘削し、直径 0.4m、深さ 0.8m を測る。

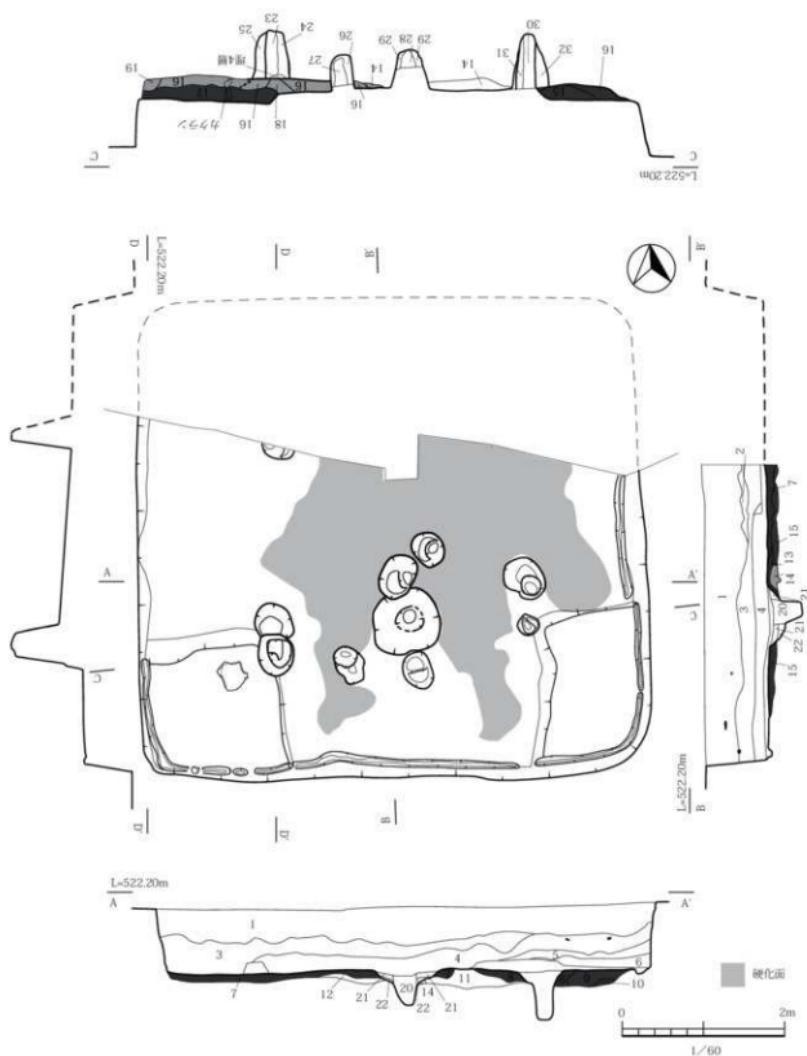


図 197 穹穴建物 (SI19) 実測図

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.8m、深さ 0.2m の漏斗形を呈している。

K ピットは、炉の南に支柱穴 2 基 1 対が位置している。この支柱穴と南側壁との間に浅い方形土壙が設置されていた可能性が高い。

ベッド状遺構は、竪穴建物の四隅に設置されたうち南東隅、南西隅の 2 基が残存していた。南東隅のベッド状遺構は幅 1.1m、高さ 0.2m、南西隅のベッド状遺構は幅 1.6m、高さ 0.2m を測る。

硬化面は内陣、K ピットの両脇、東側壁の床面で検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋 a 層：黒色（10YR2/1）土。直径 1cm 未満の炭化物が 100cm^2 あたりに 3 ~ 4 個。

2：埋 b 層：黒色（10YR2/1）土。直径 5cm 未満の 3 層のブロックが点在。炭化物は、 100cm^2 あたり 7 ~ 8 個。

3：埋 c 層：黒色（10YR2/1）土。直径 1cm 未満の炭化物が 100cm^2 中に 1 ~ 2 個。

4：埋 d 層：黒色（10YR2/1）土。直径 3cm 未満の 3 层のブロックが点在。炭化物は、直径 5mm 程度のものが、 100cm^2 あたり 7 ~ 8 個と多い。

5：埋 e 層：黒色（10YR2/1）土。ほとんど炭化物を含まない。

6：埋 f 層：黒色（10YR2/1）土。ベッド状遺構。直



図 198 竪穴建物 (SI19) 遺物分布図

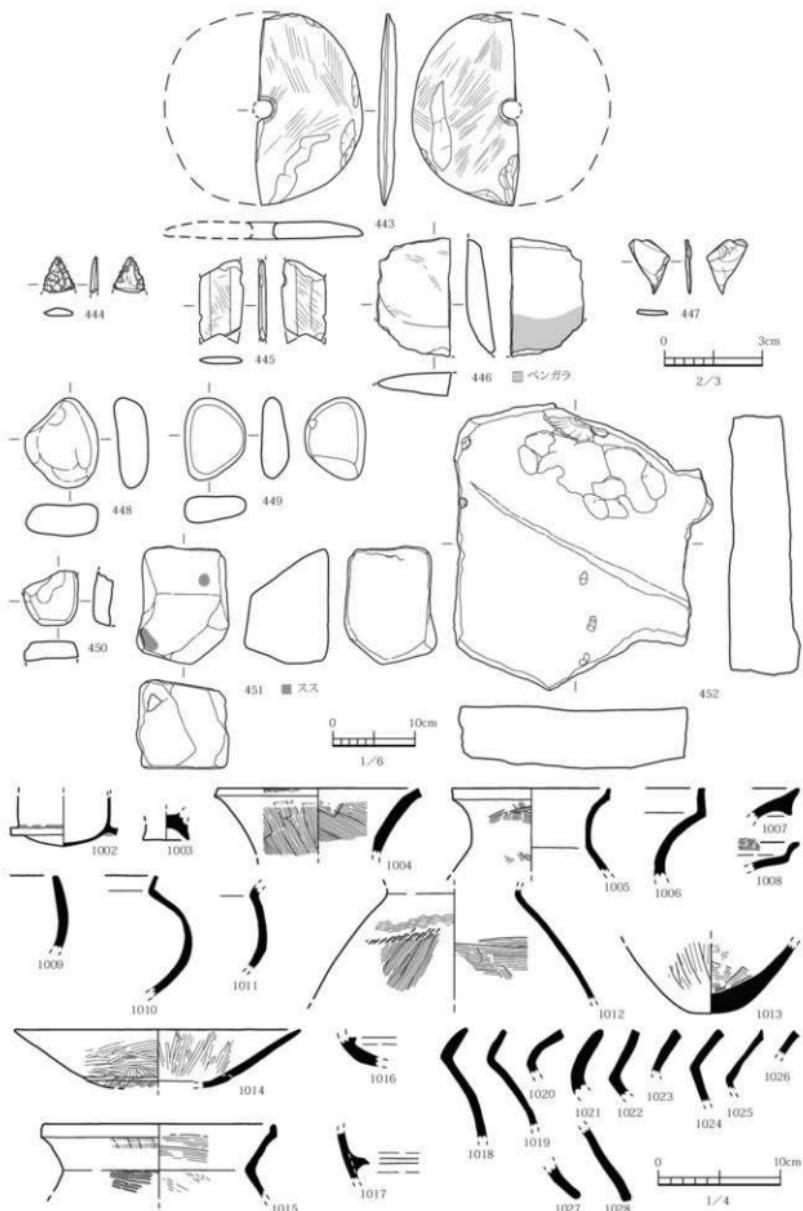


図199 窪穴建物(SI19)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

- 径5mm以下の炭化物が100cm²あたりに3～4個。
- 7：埋g層：黒褐色（10YR2/2）土。黄橙色の焼土、炭化物をやや含む。
- 8：床a層：黒褐色（10YR3/1）土。3層～6層の細かな混ざり、ベンガラを検出する。
- 9：床b層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～6層を直径5cm大で含む。ブロック状に入る。
- 10：床c層：黒褐色（10YR2/2）土。5層、6層より成る。
- 11：床d層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～6層よりなり、3層は直径2cm程、5層は拳大のブロックもある。焼土、炭化物をわずかに含む。
- 12：床e層：黒褐色（10YR3/2）土。7a層をわずかに含む。焼土、炭化物をわずかに含む。
- 13：床f層：黒褐色（10YR2/3）土。7a層を多く含む。焼土、炭化物をわずかに含む。
- 14：床g層：黒褐色（10YR2/2）土。
- 15：床h層：黒褐色（10YR3/2）土。3層～7a層。直径2cmより小さなブロック状。7a層はわずか。
- 16：床i層：黒褐色（10YR2/2）土。5層6層より成る。
- 17：床j層：黒褐色（10YR2/3）土。3層～6層より成る。焼土をわずかに含むベッド。
- 18：床k層：黒褐色（10YR2/3）土。3層～7a層。7a層はわずか。
- 19：床l層：黒褐色（10YR2/2）土。5層6層が直径5cm大のブロックに入る。16に似る。
- 20：炉a層：黒褐色（10YR2/2）土。直径1cm未満の3層をブロック状に含む。炭化粒、焼土粒をやや含む。
- 21：炉b層：黒色（10YR2/1）土。多量の炭化物と赤褐色の焼土をやや含む。
- 22：炉c層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物をやや含む。
- 23：柱a層：黒色（10YR2/2）土。黒色土にアカホヤがブロック状に混じる。
- 24：柱b層：黒色（10YR2/2）土。黒色土にアカホヤがブロック状に混じる。23より多い。
- 25：柱c層：暗褐色（10YR3/4）土。5層～7a層から成る。7a層を多く含む。
- 26：柱d層：褐色（10YR4/4）土。7a層を多量に含む。5層6層は直径2～3cmのブロックで入る。
- 27：柱e層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層をやや含む。
- 28：柱f層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭粒をわずかに含む。7a層が入る。
- 29：柱g層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層が入る。
- 30：柱h層：黒色（10YR2/1）土。腐葉土のようにサラサラした土。アカホヤはほとんど含まない。
- 31：柱i層：黒色（10YR2/1）土。アカホヤが混じる。柱を埋めた埋土。
- 32：柱j層：黒褐色（10YR3/1）土。5層～7a層から成る。7a層を多く含む。

SI20

SI20は、調査区12区、504グリッドに位置し、4.7m×3.7mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出土面からの深さ0.4mを測り、炉、ベッド状遺構を検出している。SI21を切る。

主柱穴は、南西主柱穴以外の3基を掘削し、直径0.3m、深さ0.8mを測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.8m、深さ0.3mの漏斗形を呈している。

ベッド状遺構は東西北側壁に沿って設置され、幅0.9m、高さ0.1mを測る。

硬化面は、内陣、北側壁付近の床面に検出された。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名などを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。長さ1cm以内の炭化物が100cm²あたり5～6個ほど含まれている。ブロックをほとんど含まない。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物の長さは5mm程度となり小さく、1よりは密度的に高くなる。ブロックをほとんど含まない。
- 3：埋a層：注記不明
- 4：埋b層：黒褐色（10YR2/2）土。1～2mm程度の3層の土が混じる。側壁溝埋土。
- 5：埋c層：黒色（10YR2/1）土。3層を直径2cm未満のブロックで含み、焼土粒、炭化物粒を含む。
- 6：炉a層：黒色（10YR2/1）土。炭化物をやや含む。
- 7：炉b層：黒色（10YR2/1）土。多量の炭化物を含む。
- 8：炉c層：黒褐色（10YR2/3）土。3層を直径1cm



図 200 壁穴建物 (Si20) 実測図・遺物分布図

- ほどのブロックで含む。炭化物をわずかに含む。
- 9：柱a層：黒褐色（10YR2/2）土。焼土粒をわずかに含む。
- 10：柱b層：黒褐色（10YR2/2）土。
- 11：柱c層：黒褐色（10YR3/2）土。3層が直径3cm以下のブロックで入る。
- 12：柱d層：黒色（10YR2/1）土。柱痕。
- 13：柱e層：黒褐色（10YR2/3）土。黄橙色の焼土を含む。
- 14：柱f層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭化物粒をやや含む。
- 15：柱g層：黒褐色（10YR2/3）土。
- 16：床a層：黒褐色（10YR2/3）土。直径3cm未満の3層の土を多く含む。上面は硬化している。
- 17：床b層：黒褐色（10YR2/2）土。3層の土が直径1cm以下の大きさで混じる。
- 18：埋d層：黒色（10YR2/1）土。側壁溝の埋土。

SI21

SI21は、調査区12区、508グリッドに位置し、

4.4m×3mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.7mを測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。SI20に切られる。

主柱穴は、南西主柱穴以外の3基を掘削し、直径0.3m、深さ0.7mを測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.6m、深さ0.2mのボウル形を呈している。

Kピットは、南側壁中央に位置し、深さ20cm程の方形土壙の北端に支柱穴2基が付設されている。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は東西北側壁に沿って設置され、幅1m、高さ0.1mを測る。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5層で構成され、5mm程の炭化物と焼土粒を10cm²に2個程度含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。1に似るが3層のブロックが1cm程あり、明るく見える。
- 3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。

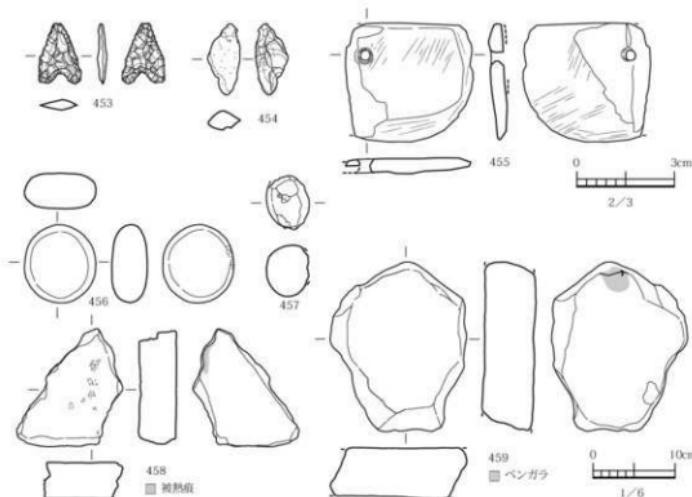


図201 竪穴建物(SI20)出土石器(RQ)実測図

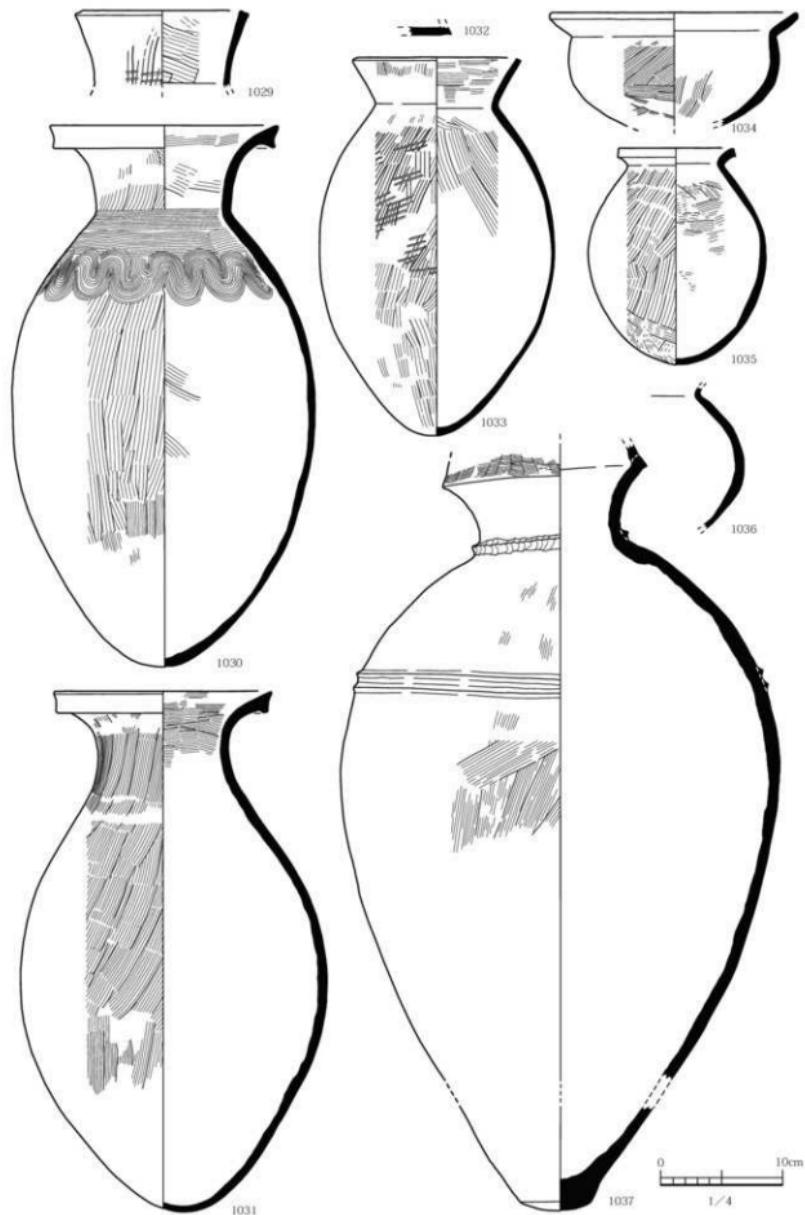
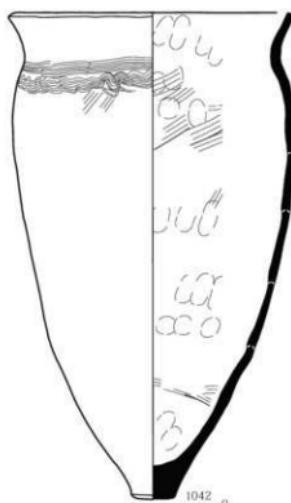
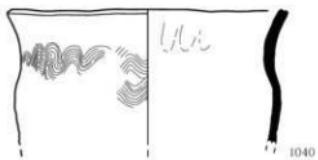
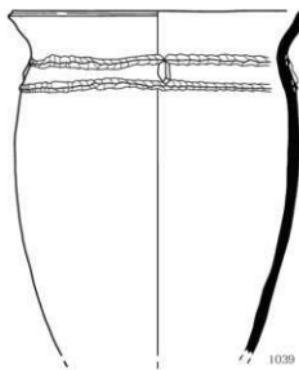
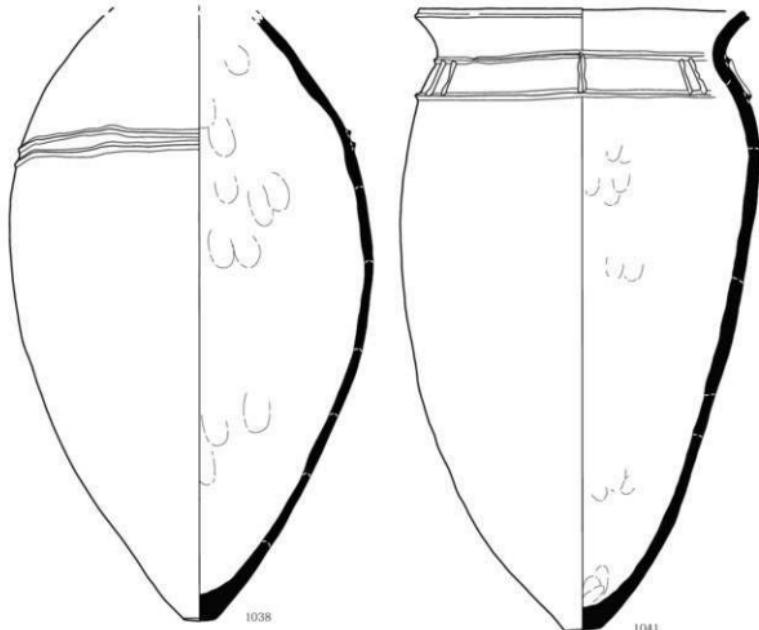


図 202 穹穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (1)



0 10cm
1/4

図 203 穹穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

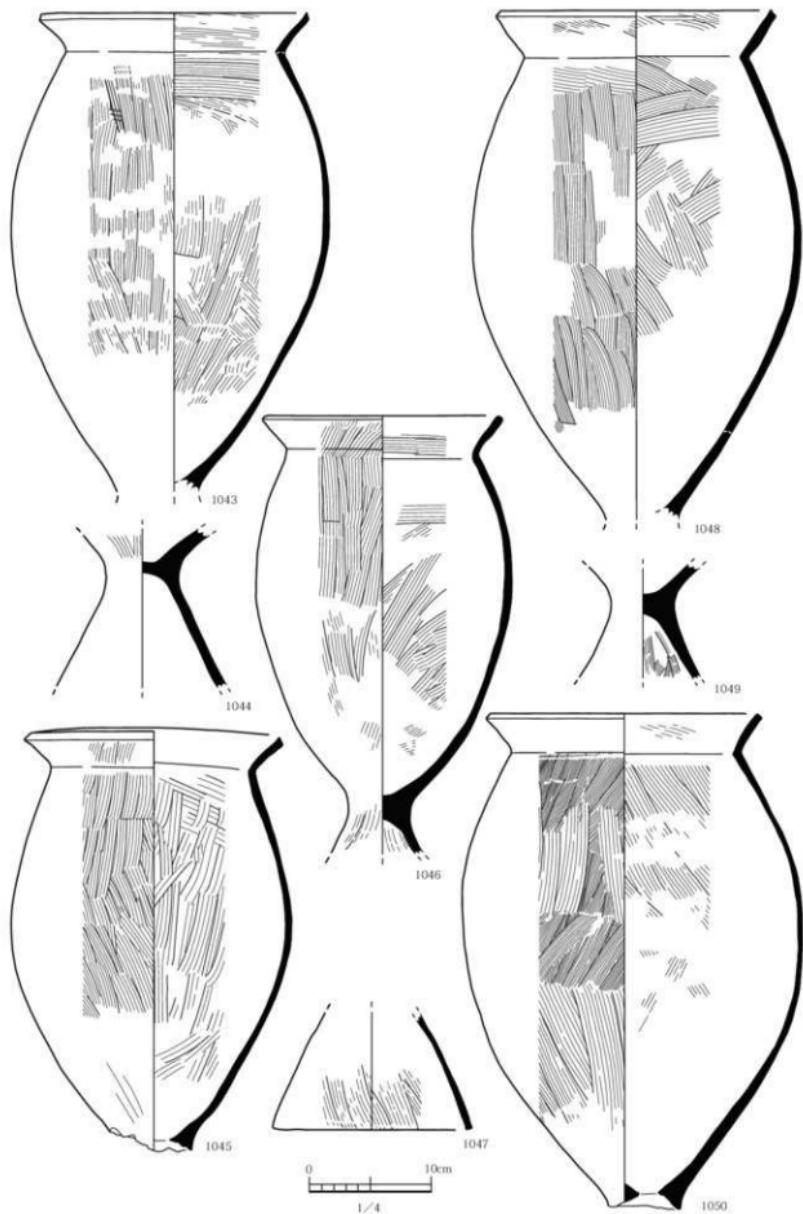


图 204 竪穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

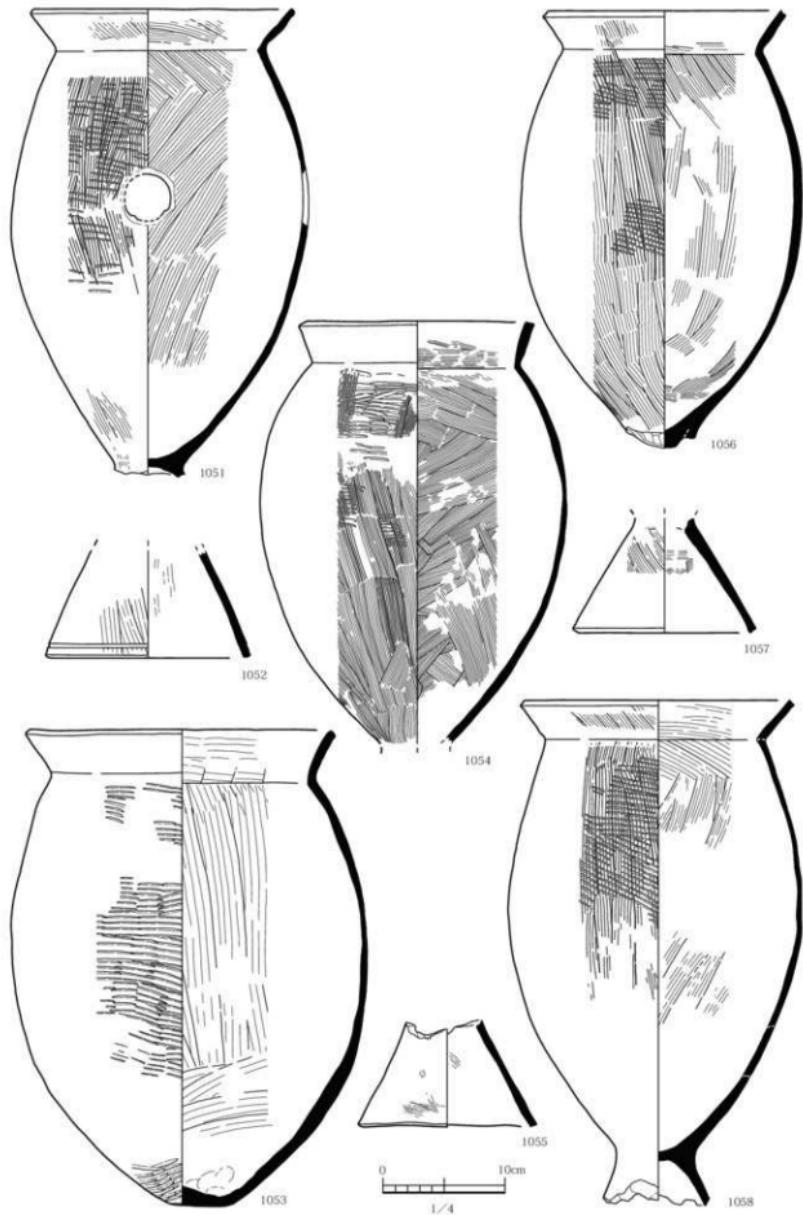


图 205 突穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (4)

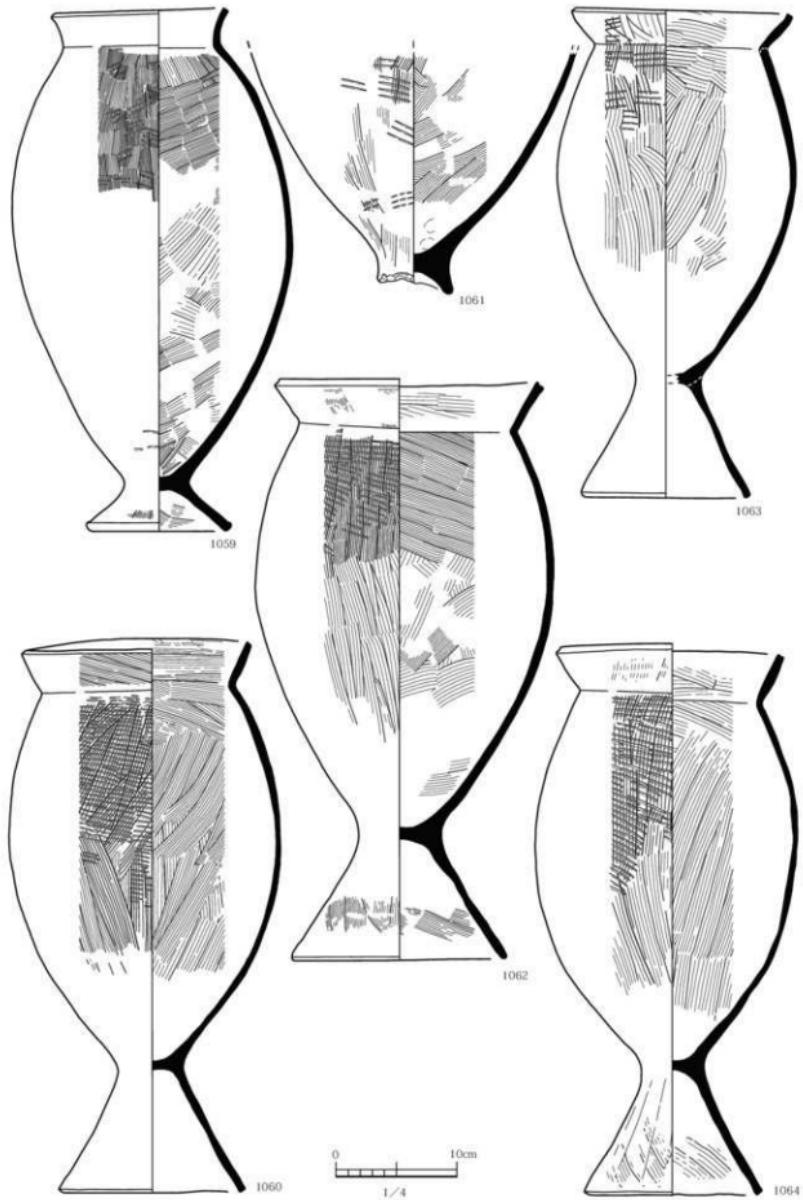


图 206 窪穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (5)

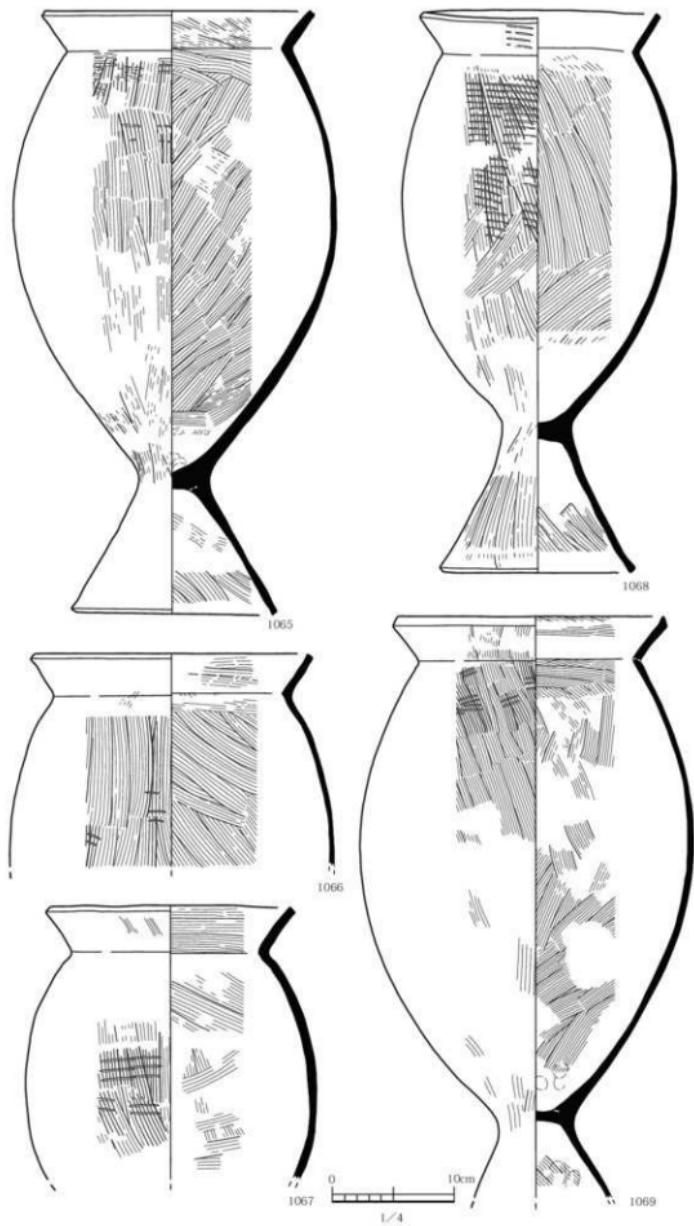


図 207 穹穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (6)

- 4: 埋4層: 黒色(10YR2/1)土。側壁溝の埋土。3
~6層までが細かく入っている。
5: 床a層: 黒褐色(10YR2/3)土。3~6層が直径
5cm未満のブロックで入る。
- 6: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。
7: 柱b層: 黒褐色(10YR2/3)土。7a層をプロッ
ク状に多く含んでいる。
8: 柱c層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物をわずかに

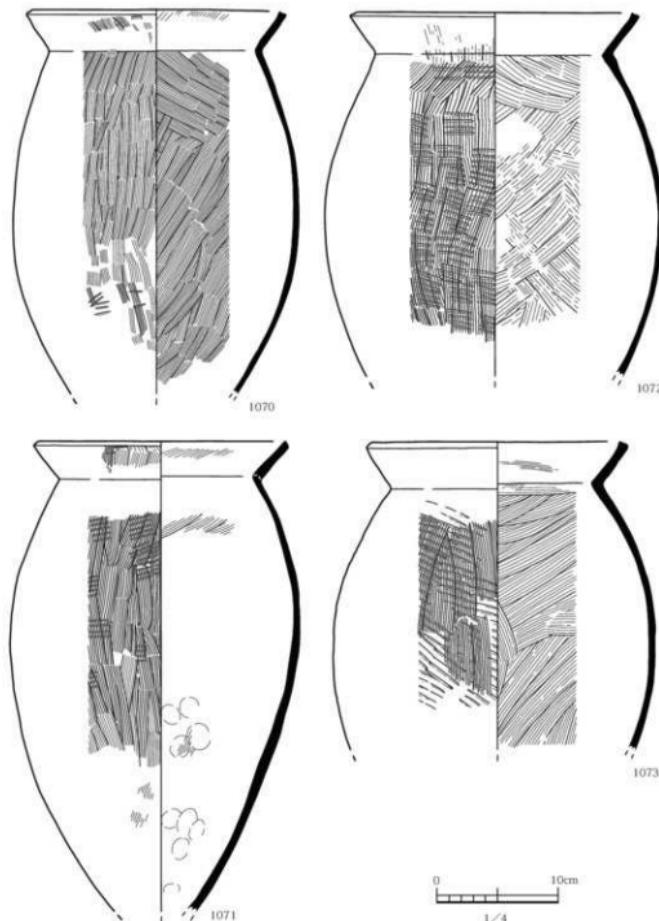


図208 穹穴建物(SI20)出土土器(RP)実測図(7)

- 含む。
- 9: 柱 d 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。7a 層を多く含み、しまっている。
- 10: 床 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。5 ~ 6 層が直径 5cm 未満のブロックで入る。

SI22

SI22 は、調査区 12 区、512 グリッドに位置し、5.2m × 3.5m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.4m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI23 を切る。

主柱穴は、北東主柱穴を除く 3 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.7m を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.9m、深さ 0.2m

のボウル形を呈している。

K ピットは、南側壁中央に深さ 10cm 程の楕円形土壙が設置されている。掘方からは、K ピットの北端に支柱穴 1 基が付設されていることが判明する。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は竪穴建物の四隅に設置され、南東隅、南西隅のベッド状遺構が検出されている。双方とも L 字状に屈折し、幅 1m、高さ 0.1m を測る。

硬化面は、内陣の床面からベッド状遺構の上面にかけて検出された。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1: 埋 1 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。

2: 埋 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層 (基本土層)

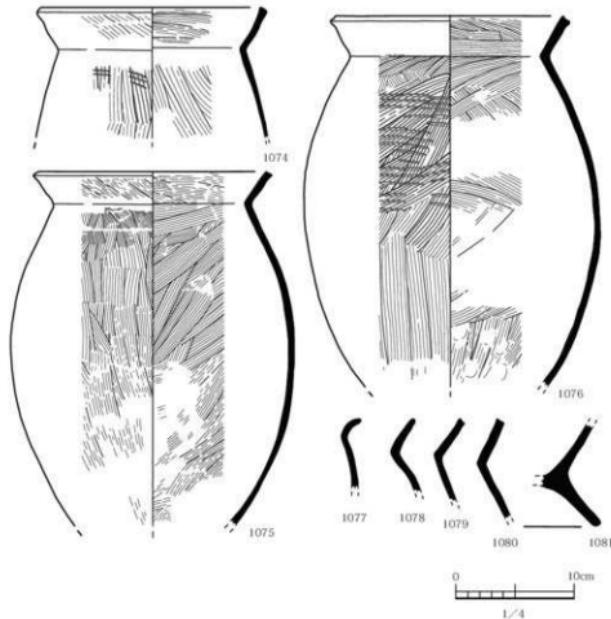


図 209 竪穴建物 (SI20) 出土土器 (RP) 実測図 (8)

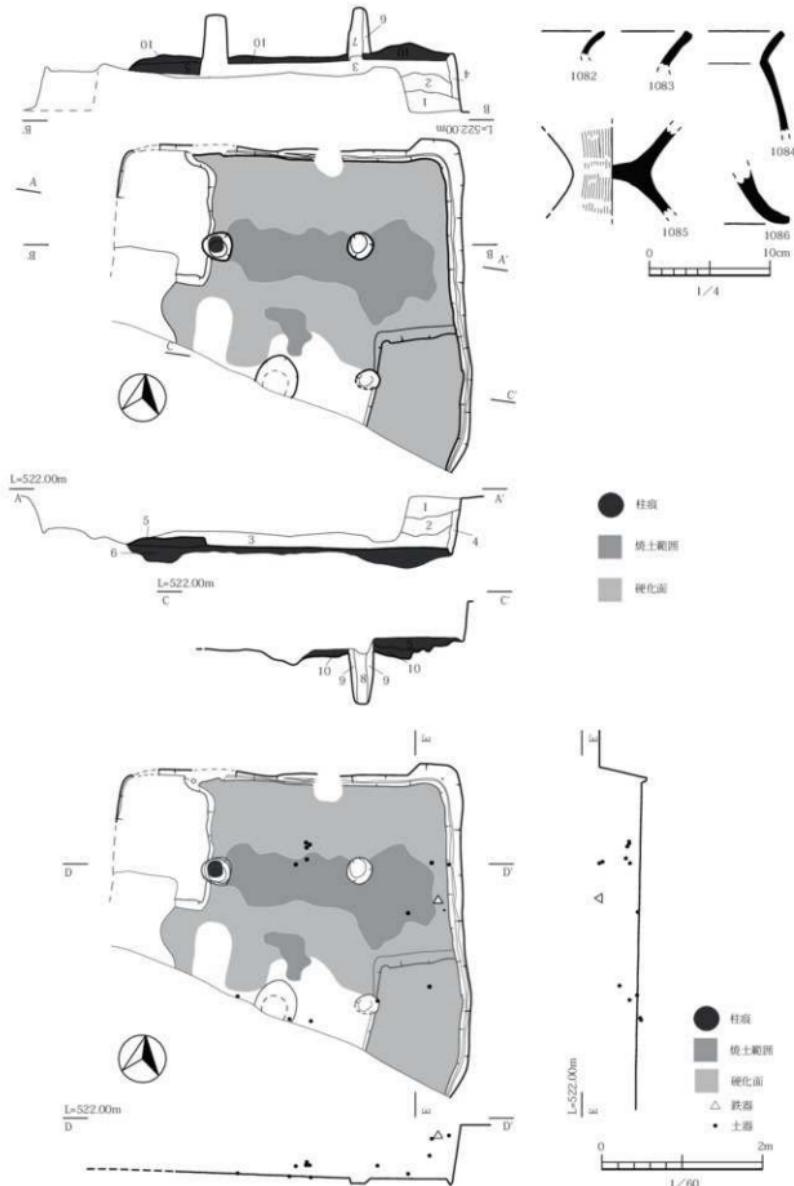


図 210 穫穴建物 (SI21) 実測図・遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

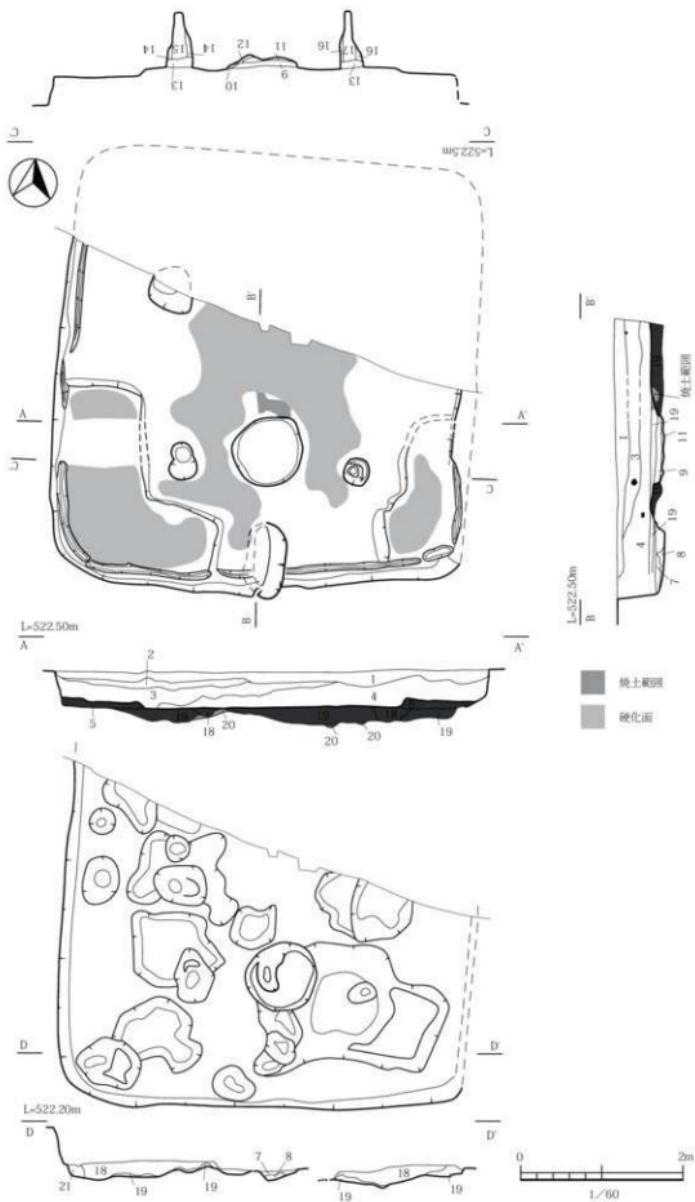


図 211 豊穴建物 (SII2) 実測図

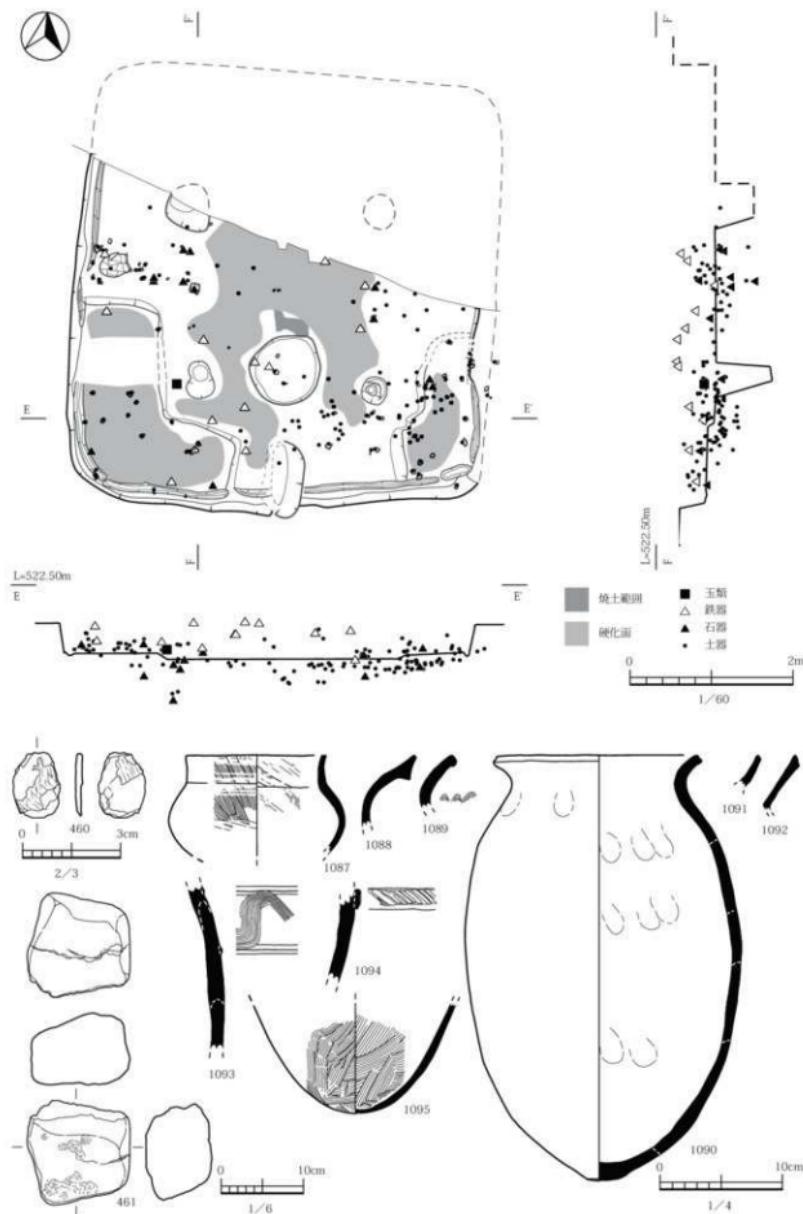


図 212 穫穴建物 (SI22) 遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

- の直径5cmのブロックが点在。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。焼土粒が点在。
- 4：埋4層：黒色（10YR2/1）土。長さ1cm以内の炭化物が多量に含まれる。
- 5：床a層：黒褐色（10YR2/3）土。1c層と2b層、3層が混濁したもの。故意に混ぜて入れている。
- 6：床b層：黒色（10YR2/1）土。1c層が主で、3層のブロックが混じる。
- 7：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。基本土層3層の明るく硬い土を直径2cmのブロックで含む。炭化物粒をやや含む。
- 8：埋6層：黒褐色（10YR2/3）土。7より3層を多く含む。
- 9：炉a層：黒褐色（10YR3/1）土。厚さが1cm程度の帯状に炭化物が挟まる。明赤褐色（5YR5/6）の焼土ブロックが直径2～3mmの大きさで少量混じる。
- 10：炉b層：黒色（10YR2/1）土。4層と5層からなる。焼土は含まらない。
- 11：炉c層：褐灰色（10YR4/1）土。黒色土に灰が混入している。
- 12：炉d層：黒色（10YR2/1）土。11の褐灰色土に炭化物粒と焼土ブロックが混入している。
- 13：柱a層：黒褐色（10YR3/1）土。ややシルトに近い。
- 14：柱b層：黒褐色（10YR2/2）土。腐植が入って、土がカフカした状態である。
- 15：柱c層：黒褐色（10YR3/1）土。3層ブロック（直径3～5cm）が混じっている。4～5層よりなる。
- 16：柱d層：黒色（10YR2/1）土。
- 17：柱e層：黒色（10YR2/1）土。
- 18：床c層：黒褐色（2.5YR3/1）土。黄褐色土ブロックを含む。
- 19：床d層：暗褐色（10YR3/3）土。黄褐色土ブロックと炭化物を含む。
- 20：床e層褐灰色（10YR4/1）土。混入物はほとんどなし。
- 21：床f層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒を含む。
- SI23**
- SI23は、調査区12区、515グリッドに位置し、方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.5mを測り、南東隅の3.6m×2.3mの範囲から、炉が検出した。SI22に切られる。
- 主柱穴は、南東主柱穴1基を掘削し、直径0.4m、深さ0.7mを測る。
- 炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.9m、深さ0.3mの漏斗形を呈している。なお、炉には幅20cm程の周堤が巡っていることが、A-A'土層断面図から判明する。また、漏斗形を呈し周堤をそなえた大型の炉は、方形を呈する4本柱建てで四隅にベッド状遺構をそなえた竪穴建物だけで検出されている。したがって、SI23は、南東隅部分だけを検出した例であるが、建物の概要を記述することができた。
- 層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。
- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。長さ1cm以内の炭化物が点在。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。直径5mm程度の焼土粒がやや多く含まれる。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。長さ1cm未満の炭化物が含まれる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。焼土と炭化物が非常に多い。
- 5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。4のようなブロックがなくなり、炭化物も細粒化し、2～3mmの粒になる。
- 6：炉1層：黒褐色（10YR2/3）土。赤褐色の焼土、炭化物を多く含む。
- 7：炉2層：黒褐色（10YR2/2）土。赤褐色の焼土、炭化物をより多く含む。
- 8：炉3層：黒褐色（10YR2/1）土。多量の炭化物、灰、焼土から成る。
- 9：炉4層：黒褐色（5YR2/2）土。焼土を多く含む。
- 10：柱a層：黒褐色（10YR2/2）。炭化物を含む。柱痕。
- 11：柱b層：黒褐色（10YR2/3）。炭化物を含む。3層～5層からなる。
- 12：床1層：黒褐色（10YR2/2）土。2～4層の土が混じって埋め戻している（ブロック1～4cm）。

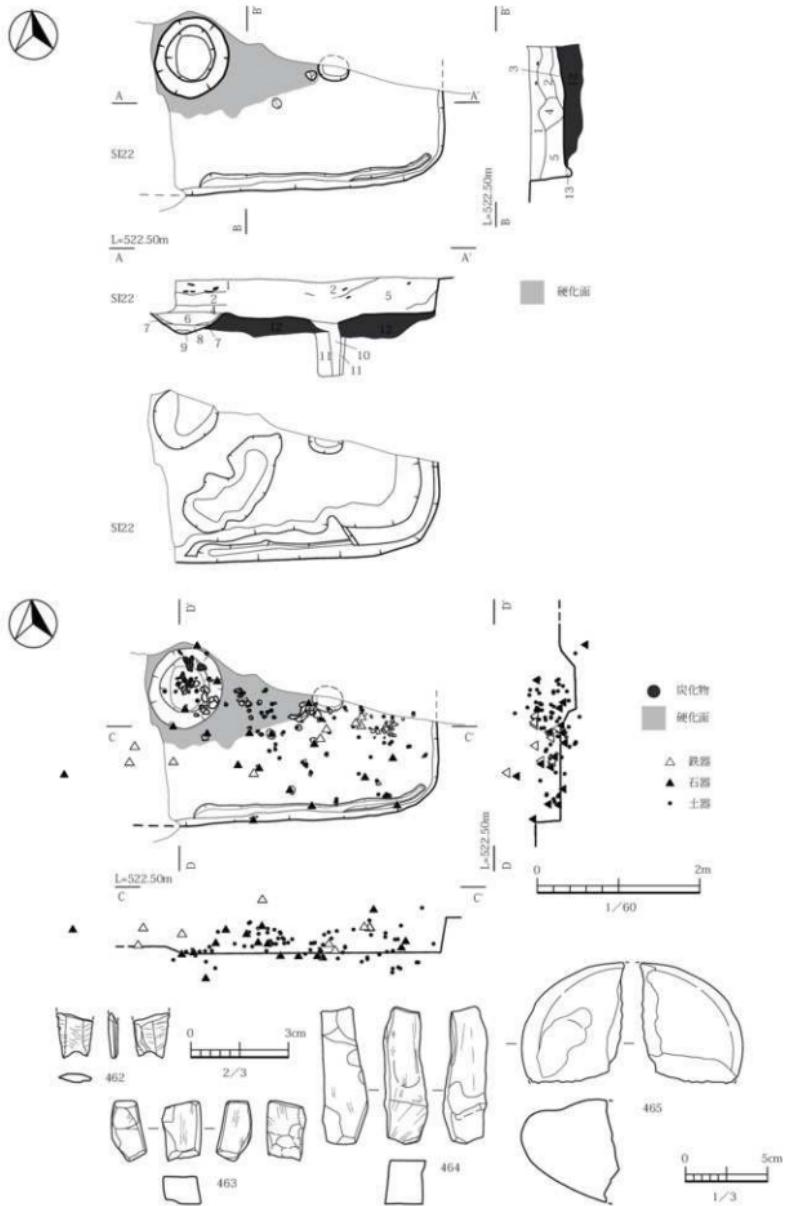


図 213 壁穴建物 (SI23) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

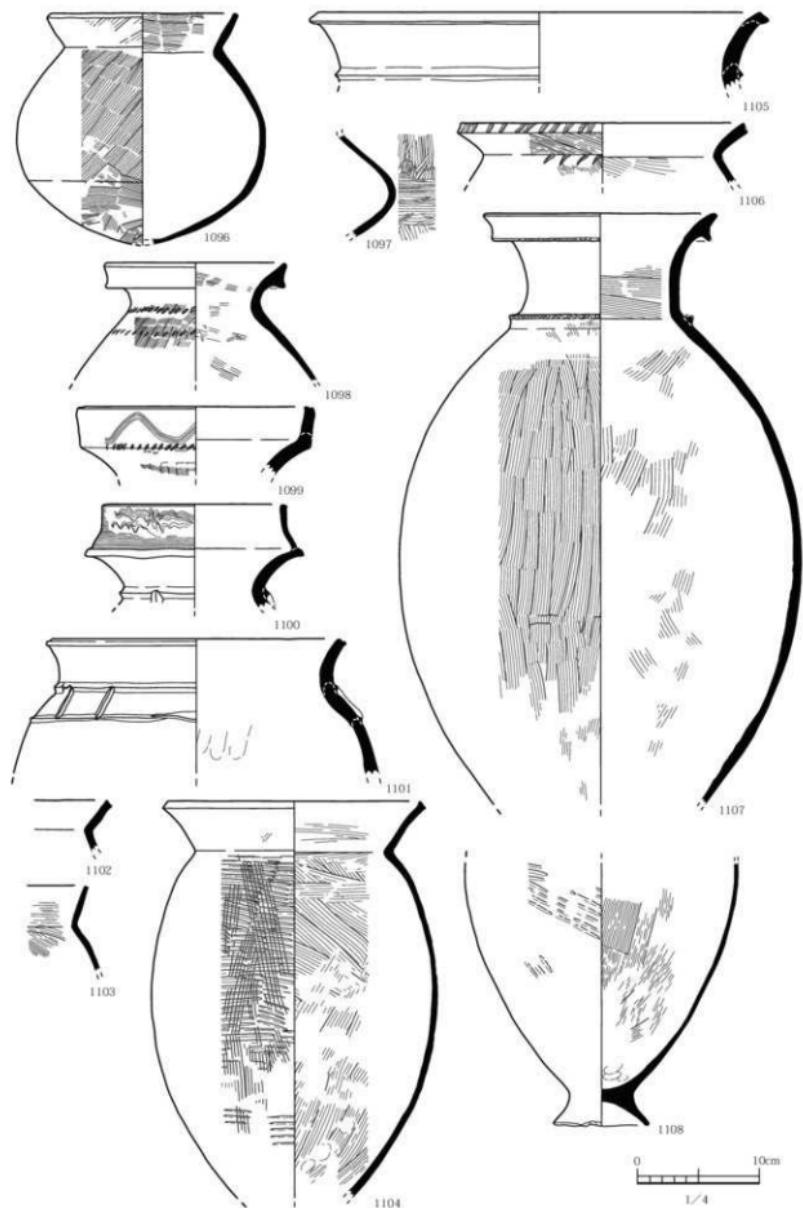


図 214 積穴建物 (SI23) 出土土器 (RP) 実測図

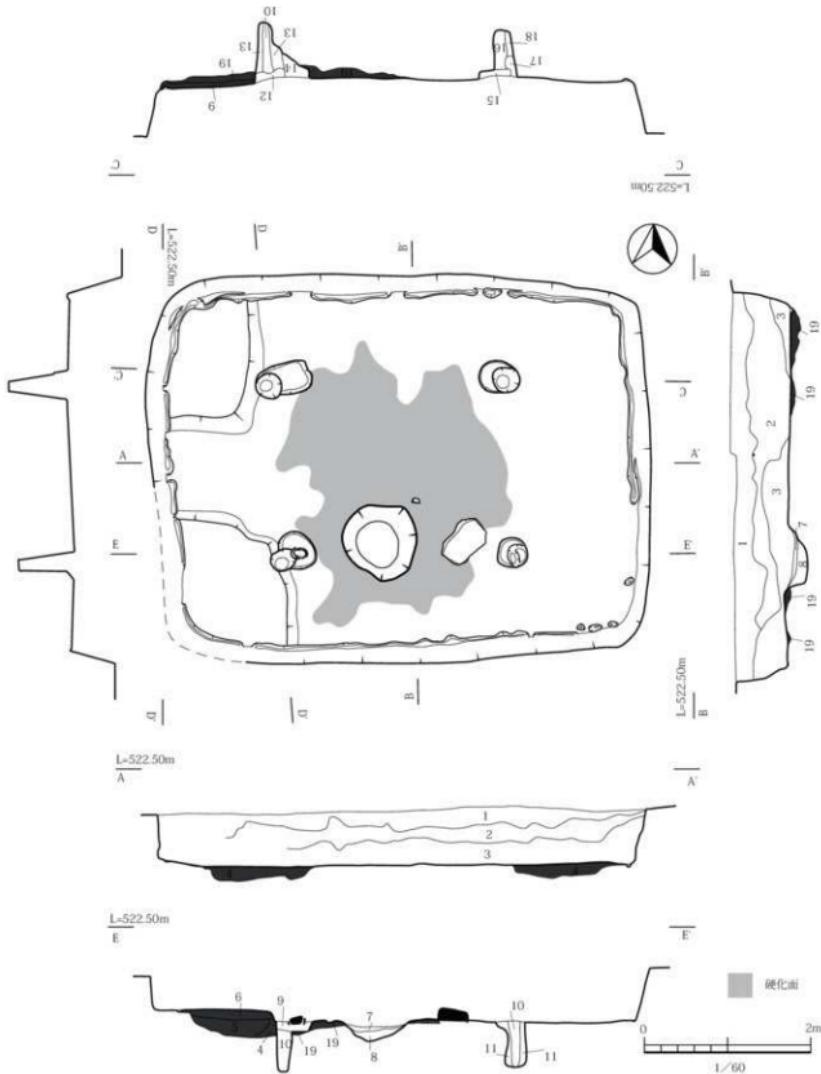


図 215 豊穴建物 (SI24) 実測図

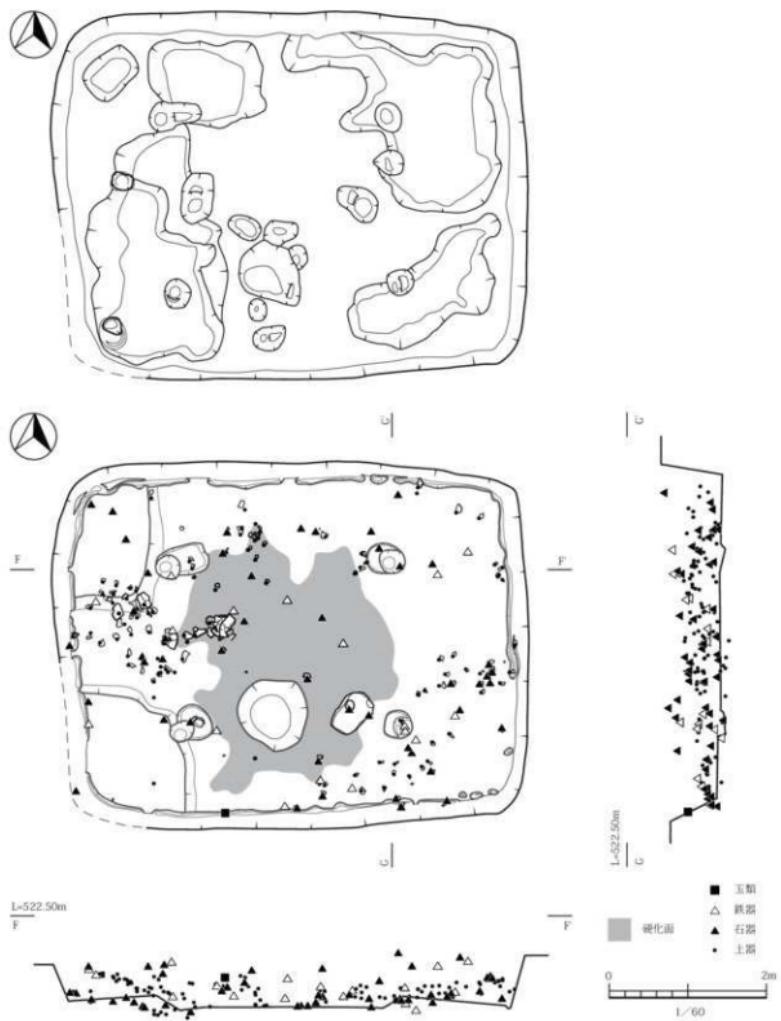


図 216 壁穴建物 (SI24) 実測図・遺物分布図



図 217 穂穴建物 (SI24) 出土石器 (RQ) 実測図

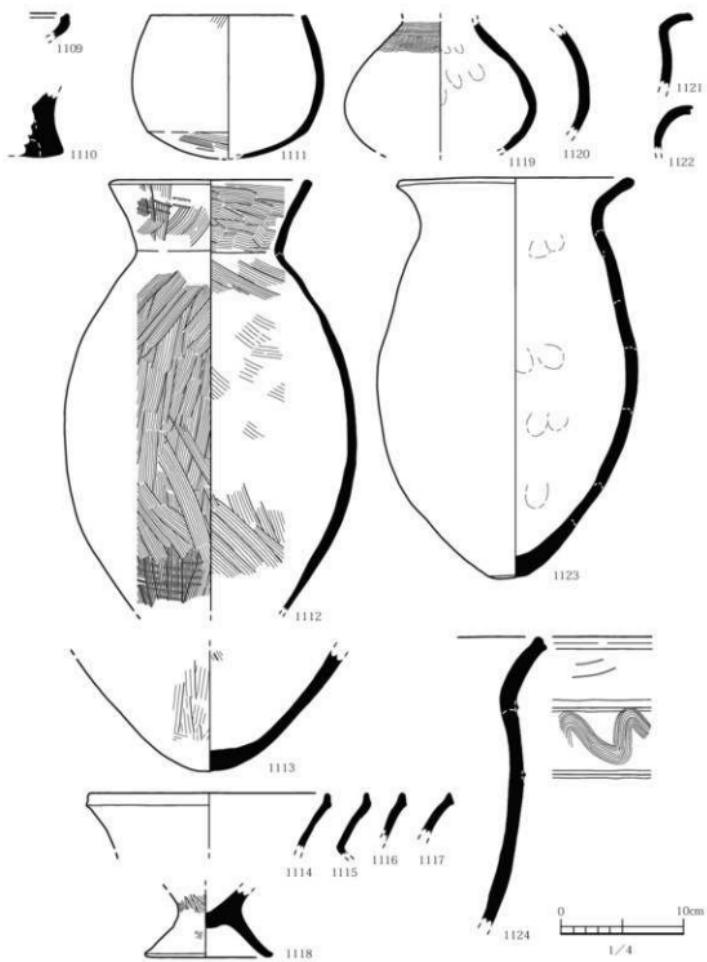


図 218 穫穴建物 (SI24) 出土土器 (RP) 実測図

13：埋a層：黒褐色（10YR3/1）土。側壁溝の埋土。

SI24

SI24は、調査区12区、511グリッドに位置し、6m×4.7mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.7mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。SI26を切る。

主柱穴は、4基を掘削し、直径0.3m、深さ0.7m

を測る。北東主柱、北西主柱の2本は抜き取られており、南東主柱、南西主柱もその可能性が高い。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.9m、深さ0.2mのボウル形を呈している。なお、炉には幅20cm程の周堤があることが、使用時完掘状況写真から判明している。炉と南東主柱穴との間では、石畳が検出された。

Kピットは、検出されていない。しかし、掘方からは、炉の南側に円形土壙1基と支柱穴1基が位置し

ている。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は竪穴建物の北西隅、南西隅で検出され、幅0.9m、高さ0.1mを測る。なお、北東隅、南東隅にもベッド状遺構が設置されていることが、C-C'土層断面図、硬化面範囲検出状況写真から判明する。この東列のベッド状遺構は、西列のベッド状遺構に比して高さが低く、縁辺が鈍っているため平面図に記載されなかったのであろう。

硬化面は、内陣、炉の周辺で検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。基本土層の3層がブロック状（直径1cm程度）に混じる。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。基本土層の3層がブロック（直径5～10cm）状に混じる。長さ1cm以内の炭化物がやや多く含まれる。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。基本土層の3層がブロック（直径5cm以内）状に混じる。長さ1cm以内の炭化物と焼土粒が多く含まれる。
- 4：床a層：黒褐色（10YR2/2）土。4層と3層から構成され、4層がやや多く3層はブロックの大きさも小さく、少ない。
- 5：床b層：黒褐色（10YR3/1）土。3層～5層より構成され、3層のブロックが直径5cm程度で多く含まれる。よって全体としての固さは高い。
- 6：床c層：黒褐色（10YR2/2）土。2b層と3層から構成され、ほとんど2b層である。
- 7：炉a層：黒色（10YR2/1）土。層状に炭化物が含まれる。
- 8：炉b層：黒色（10YR2/1）土。
- 9：柱a層：黒色（10YR2/1）土。
- 10：柱b層：黒色（10YR2/1）土。柱痕と思われる。
- 11：柱c層：黒褐色（10YR3/1）土。3～4層からなり、3層のブロック（直径1～2cm）がやや多く含まれる。埋め土。
- 12：柱d層：黒褐色（10YR2/2）土。3～4層からなる。
- 13：柱e層：黒色（10YR2/1）土。5～7a層よりなる。
- 14：柱f層：黒褐色（10YR3/1）土。5～7a層よりなる。
- 15：柱g層：黒褐色（10YR2/2）土。5～7a層より

なる。

- 16：柱h層：黒色（10YR2/1）土。腐植が多い。
- 17：柱i層：黒褐色（10YR2/2）土。5層と6層からなる。
- 18：柱j層：黒褐色（10YR3/1）土。5～7a層よりなる。
- 19：床d層：黒褐色（10YR3/1）土。貼床は1層のみ、貼り替えはない。基本土層の3～6層より構成され、掘方まで掘削後すぐに貼り床が構築されている。

SI26

SI26は、調査区12区、510グリッドに位置し、2.4m×3.1mが調査範囲の方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.4mを測り、がが検出され、ベッド状遺構をそなえていると考えられる。SI24に切られる。

主柱穴は、4基を掘削し、直径0.3m、深さ0.6mを測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.6m、深さ0.2mのボウル形を呈している。なお、炉には、幅20cm程の周堤が付設していることが、硬化面範囲検出状況写真から判明した。この周堤上には、炭化物が分布している。また、炉と南西主柱穴の間では、石皿が検出された。

ベッド状遺構は、発掘作業では検出されていない。なお、竪穴建物の南西隅には幅0.8m程のベッド状遺構が存在し、北西隅にも幅0.7m程の低いベッド状遺構が設置されている可能性が高いことが、硬化面範囲検出状況写真から判明した。

硬化面は、内陣で検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。
- 2：埋2層：黒褐色（7.5YR3/1）土。明赤褐色（5YR5/8）焼土粒を多く含む。炭化物もわずかに含む。
- 3：埋3層：黒褐色（7.5YR3/1）土。直径1～3cmの基本土層3層をブロックで含む。炭化物をわずかに含む。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。直径1cmの3

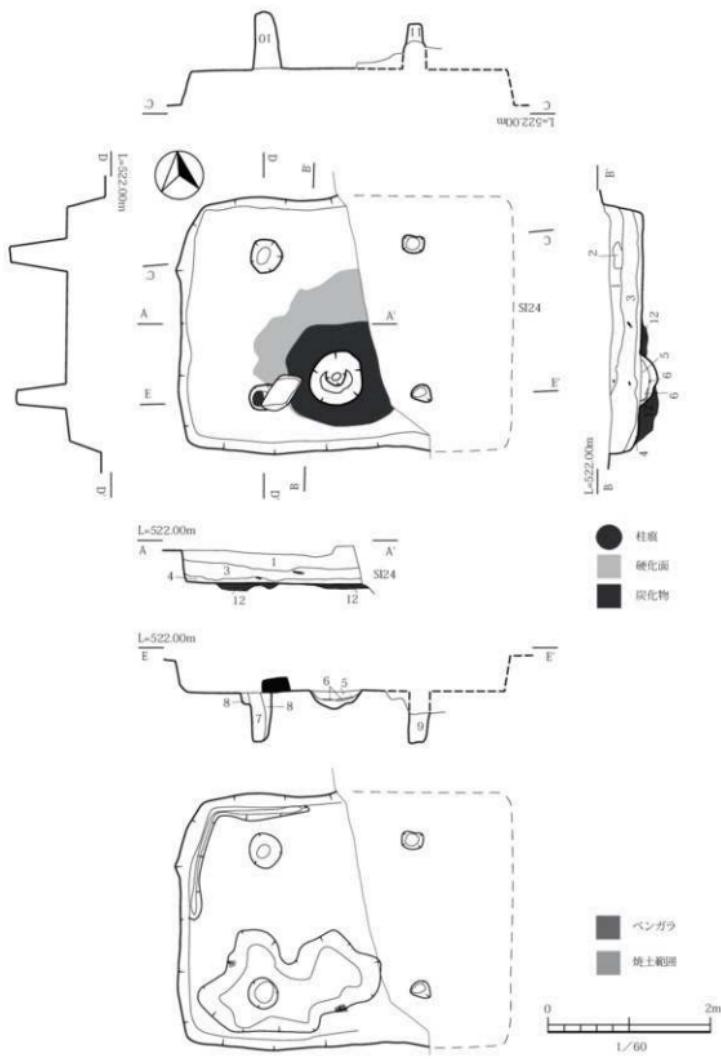


図 219 豊穴建物 (SI26) 実測図

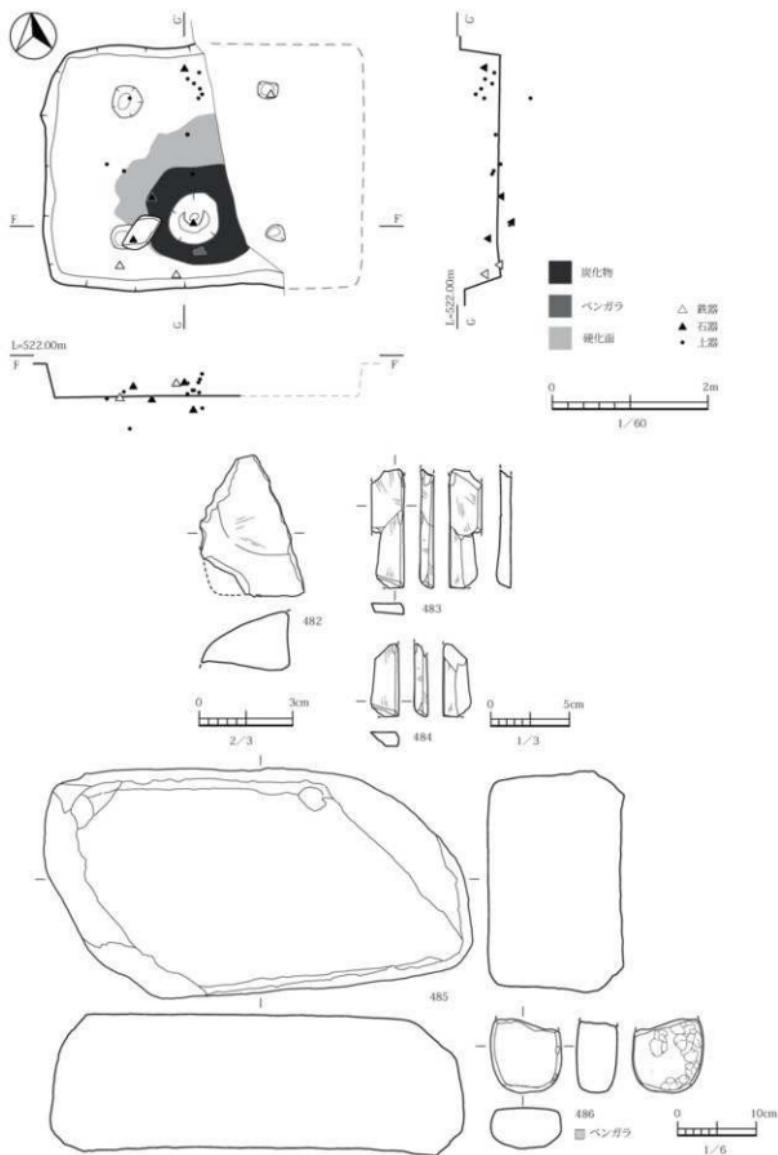


図 220 穂穴建物 (SI26) 遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

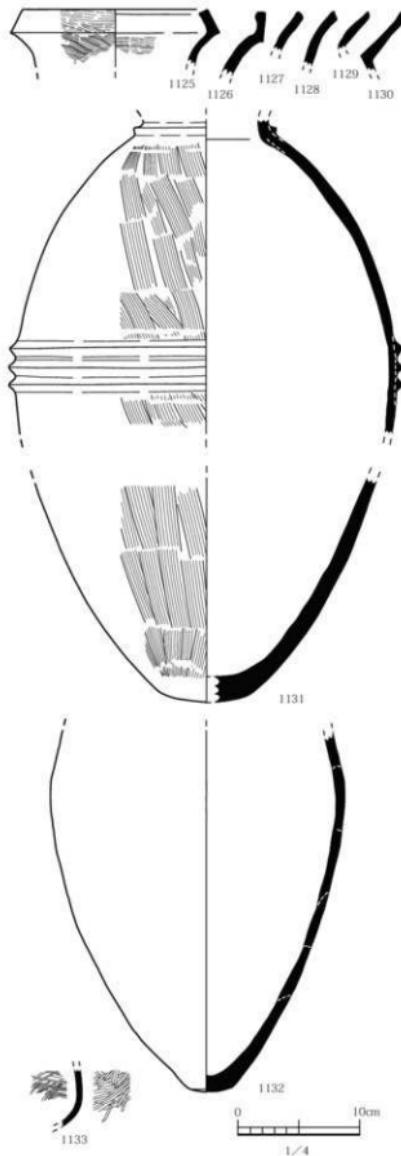


図 221 穴穴建物 (SI26) 出土土器 (RP) 実測図

層をブロック状に含む。

- 5: 炉 a 層: 黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 5 層土を含む。黄褐色のブロックが目立つ。カーボン片含む。
- 6: 炉 b 層: 黒色 (10YR1.7/1) 土。炉底部の土。カーボンの粉末と褐色に変色した灰が混ざった土で、所々黄褐色の高師小僧が見られる。
- 7: 柱 a 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 ~ 5 層の土を含む。3 ~ 4mm のカーボンを含む。
- 8: 柱 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。4 層 5 層から成る。
- 9: 柱 c 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。5 層から成る。炭化物粒、焼土粒をわずかに含む。
- 10: 柱 d 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。3 ~ 5 層の土が混じる。2 ~ 3mm の粒状の明黄褐色土を含む。
- 11: 柱 e 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。5 層から成る。焼土粒をやや含む。
- 12: 床 a 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。3 層 ~ 5 層を直径 3cm 以下のブロックで含む。炭化物を含む。

SI27

SI27 は、調査区 12 区、514 グリッドに位置し、2.8m × 3.7m の長方形を呈する 2 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.1m を測り、炉をそなえている。SI32 に切られる。

主柱穴は、2 基を掘削し、直径 0.2m、深さ 0.6m を測る。竪穴建物の中央には、0.4 × 0.2m の楕円形土壤が穿たれている。

炉は、竪穴建物の中央にある楕円形土壤と北主柱穴との間に位置し、直径 0.4m、深さ 0.1m の皿形を呈している。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名を整合させる記録はない。

- 1: 埋 1 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物粒と焼土粒がごくわずかに含まれる。
- 2: 埋 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。2 ~ 5 層の土が混じる。
- 3: 埋 3 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。
- 4: 埋 4 層: 黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 5 層土から成るが、3 ~ 4cm 大の黄褐色土ブロックが目立つ。
- 5: 埋 5 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層土が多く 2 より褐色が目立つ。

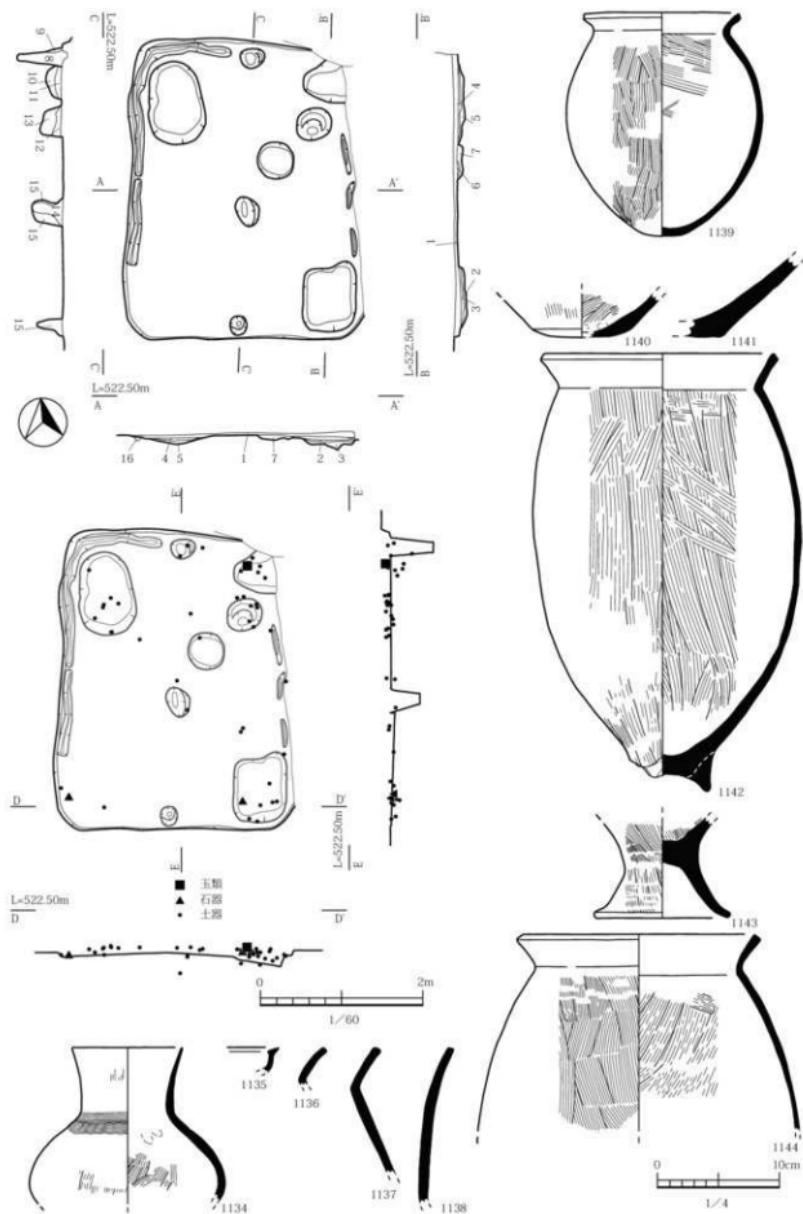


図 222 積穴建物 (SI27) 実測図・遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

- 6: 焼1層: 黒褐色(10YR3/2)土。カーボンと変色した灰を含む。カーボンの大きさは1cm程度。
- 7: 焼2層: 黒褐色(10YR3/1)土。2~3層の土とカーボン、変色した灰を含む。カーボンは粉末状、3層多し。
- 8: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。
- 9: 柱b層: 黒色(10YR2/1)土。
- 10: 柱c層: 柱6黒色(10YR2/1)土。3層~5層土が混じる。4~5mmの粒状のカーボンが少量含む。
- 11: 柱d層: 黒色(10YR2/1)土。3~5層土から成るが、黄褐色土のブロックが目立つ。1cm角近いカーボンを少量含む。
- 12: 柱e層: 黒色(10YR2/1)土。3~5層土が混じる。
- 13: 柱f層: 黒色(10YR2/1)土。3~5層土から成るが、3~4cm大の黄褐色ブロックが目立つ。
- 14: 柱g層: 黒褐色(10YR2/2)土。長さ1cm未満の炭化物が少量含まれる。
- 15: 柱h層: 黒褐色(10YR2/2)土。
- 16: 理6層: 黑褐色(10YR2/3)土。炭化物粒をわずかに含む。側壁溝の埋土。

SI28

SI28は、調査区12区、517グリッドに位置する。遺構配置図にその位置が記録され、平成24年2月27日付け調査日誌1枚に「SI28出土の免田式土器は、その文様が今まで見たことのない独特なものだった。(北原)」と記述されている。

SI28の記録は、以上がすべてである。

SI29

SI29は、調査区16区、601グリッドに位置し、

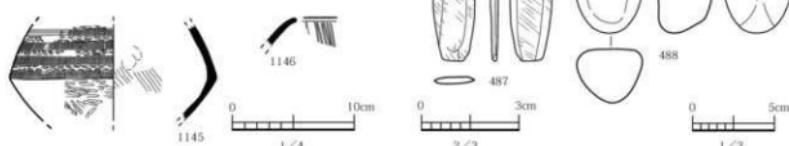


図223 窪穴建物(SI28)出土土器(RP)実測図及び窪穴建物(SI29)実測図・遺物分布図・出土石器(RQ)実測図

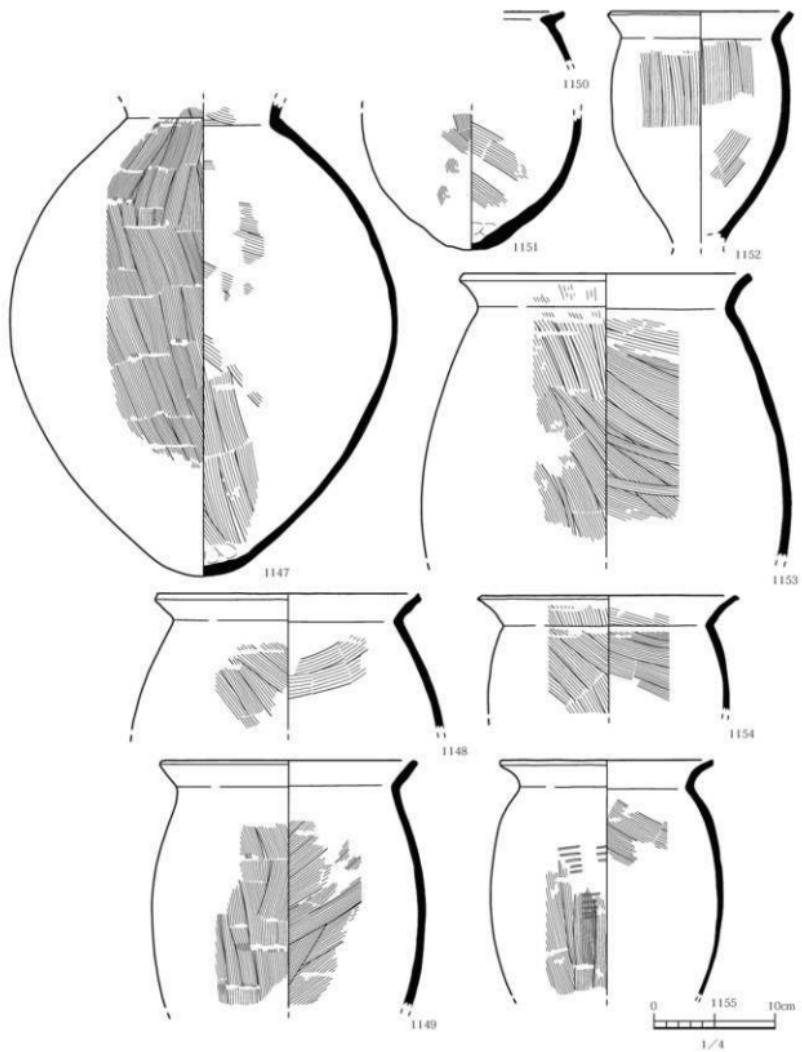


図 224 積穴建物 (SI29) 出土土器 (RP) 実測図

方形を呈する竪穴建物である。北東隅が $2m \times 3.5m$ の範囲で検出され、検出面からの深さ $0.9m$ を測り、北側壁に幅 $0.4m$ 程の張出し部をそなえる。

硬化面は、竪穴建物中央部で検出された。なお、硬化面が分布しない範囲の形状、側壁溝の切れ目の位置から、幅 $1.0m$ 程のベッド状遺構が北東隅、南東隅にある可能性が高い。

炉は、完掘状況写真において16区南西隅(A-A'土層断面の基点A)で炉の一部分が掘削されたような状況が記録されている。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物を多く含む。
- 2: 埋2層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を含まない。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR2/3)土。3層ブロックを含む。
- 4: 埋4層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を多く含む。褐鉄鉱(高師小僧)が多く入る。
- 5: 埋5層: 黒褐色(10YR3/1)土。炭化物を含み、高師小僧が入る。暗灰黄(2.5YR4/2)シルトが $10cm$ 程のブロックで2ヶ所入る。

SI30

SI30は、調査区12区、524グリッドに位置し、 $6.5m \times 6.2m$ の方形を呈する4本柱建竪穴建物である。検出面からの深さ $0.6m$ を測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。なお、北側と東側に向かい増築されている。SD10に切られる。

主柱穴は、4基を掘削し、直径 $0.2m$ 、深さ $0.8m$ を測る。いずれの主柱穴においても直径 $20cm$ 程の柱痕が検出された。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 $0.8m$ 、深さ $0.2m$ のボウル形を呈している。なお、炉には、幅 $20cm$ 程の周堤が付設していることが、硬化面範囲検出状況写真から判明した。炉の周囲には炭化物が分布している。

Kピットは、南側壁中央に位置し、深さ $10cm$ 程の三角形に近似した楕円形土壤が設置されている。なお、Kピットの北端には支柱穴1対2基が付設していることが、住居周辺Pit群写真から判明している。SI30は、掘方が実測されていないため図示できない。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、竪穴建物の四隅に設置され、幅 $1.1m$ 、高さ $0.1m$ を測る。北東隅、南東隅のベッド状遺構の間には、東側壁に沿った一段低いベッド状遺構があり、その上端面北半部には $0.4 \times 0.2m$ 程の長方形を呈する深さ $5cm$ 程度の土壤が穿たれている。この一段低いベッド状遺構の西辺には側壁溝があり、南端は南東隅のベッド状遺構の北端に接し、北端は北東隅のベッド状遺構を切って北側壁手前まで伸びている。なお、側壁溝は東側壁にも沿って検出されているが、一段低いベッド状遺構の東辺には設置されていない。一方、北西隅のベッド状遺構の東辺と西辺は南端から $1.2m$ 程北で西に屈曲し、西辺に付設する側壁溝も同地点で途切れる。また、北側壁に沿った側壁溝は2条あり、溝幅や走向が乱れている。このように竪穴建物の北辺と東辺においてベッド状遺構と側壁溝が二重になった状況は、次のとおりまとめることができる。SI30では、内側の側壁溝と北西隅のベッド状遺構西辺の屈曲点(側壁溝の途切れる点)を結ぶと、正方形を呈する竪穴建物プランが成立する。この正方形プラン竪穴建物の北西角を北に、北東角を東に最大幅 $0.7m$ 程掘削し、北西隅、北東隅のベッド状遺構を広げ、東辺中央に一段低いベッド状遺構が新設された。この時、主柱、炉、Kピット等、他の建物構造は変更されていない。つまり、SI30には床面積を増すための工事である増築が行われたのである。

硬化面は、内陣と四方の床面で検出されている。

なお、SI30は竪穴建物の南辺部をSD10に切られている。このSD10からは「集石」が検出されたが、次の理由からSI30の集石である可能性が高い。第1に、「集石」はSD10土層断面図に記録された底面より下位で検出された。第2に、「集石」の西半部分がSI30の南東隅ベッド状遺構の上面に位置している状況が、SI30使用時完掘状況写真、側壁溝検出状況写真、遺物出土状況写真に記録されている。第3に、「集石」を竪穴建物側壁に穿った横穴に埋納する例(下扇原遺跡SB29)があるため、「集石」東半部分は横穴に埋納されていた可能性がある。第4に、「集石」がSD10に包含されていても、組成する礫、角礫、板石は弥生時代後期竪穴建物出土遺物に含まれるものであるため、SI30の遺物がSD10掘削の際に移動した結果

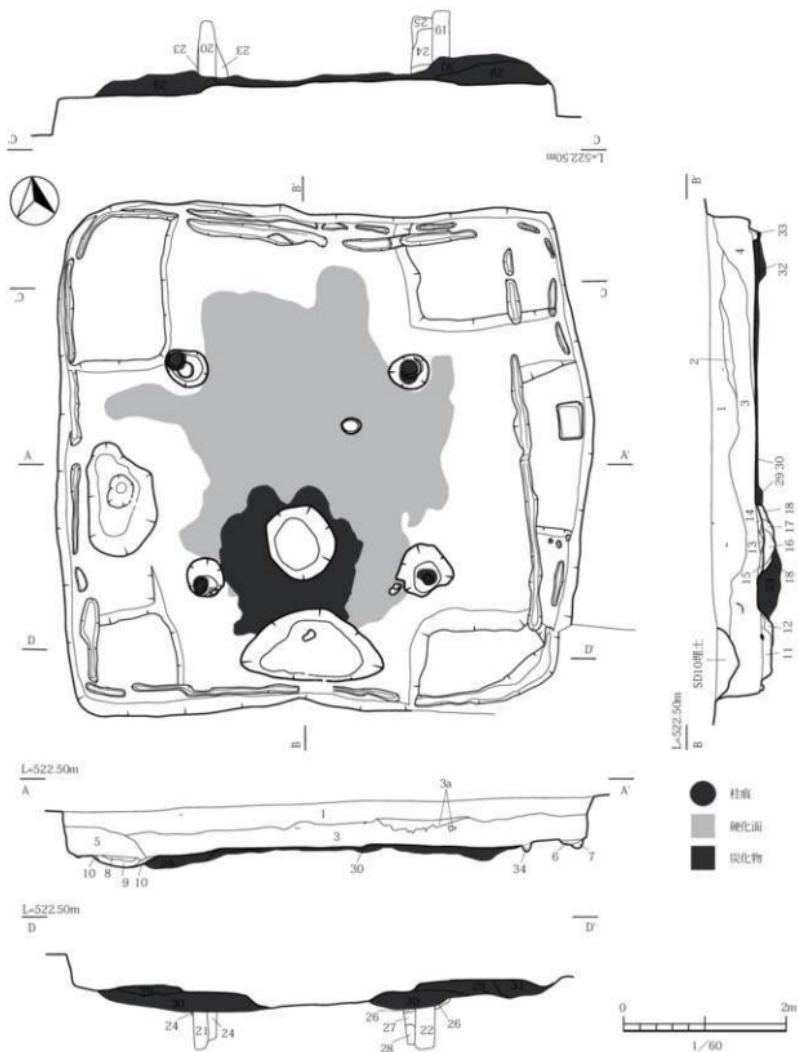


図 225 豊穴建物 (S130) 実測図

果である可能性が高いのである。以上の第1～3は「集石」が原位置を保って出土していることを、第4は「集石」がSI30が攪乱された結果であることを示唆しているのである。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。直径1cm程度の炭化物を含み、出土遺物はこの層に集中している。

2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。炭化物は1と同じ程度であるが、焼土粒が多く含まれている。

3：埋3層：黒褐色（10YR3/1）土。直径1cm程度の炭化物を多量に含み、5層のブロック（直径3～4cm）が他の層より多く含む。3aは3に赤褐色（5YR4/6）の焼土を多量に含む。炭化物も多く含む。

4：埋4層：黒褐色（10YR3/1）土。炭化物、焼土等の混合物を含まない。

5：埋5層：黒褐色（10YR3/1）土。直径5mm程度の炭化物が含まれ、直径が1cm～2cmの5層のブロックがやや多めに含まれる。

6：埋a層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物をわずか



図 226 積穴建物（SI30）遺物分布図

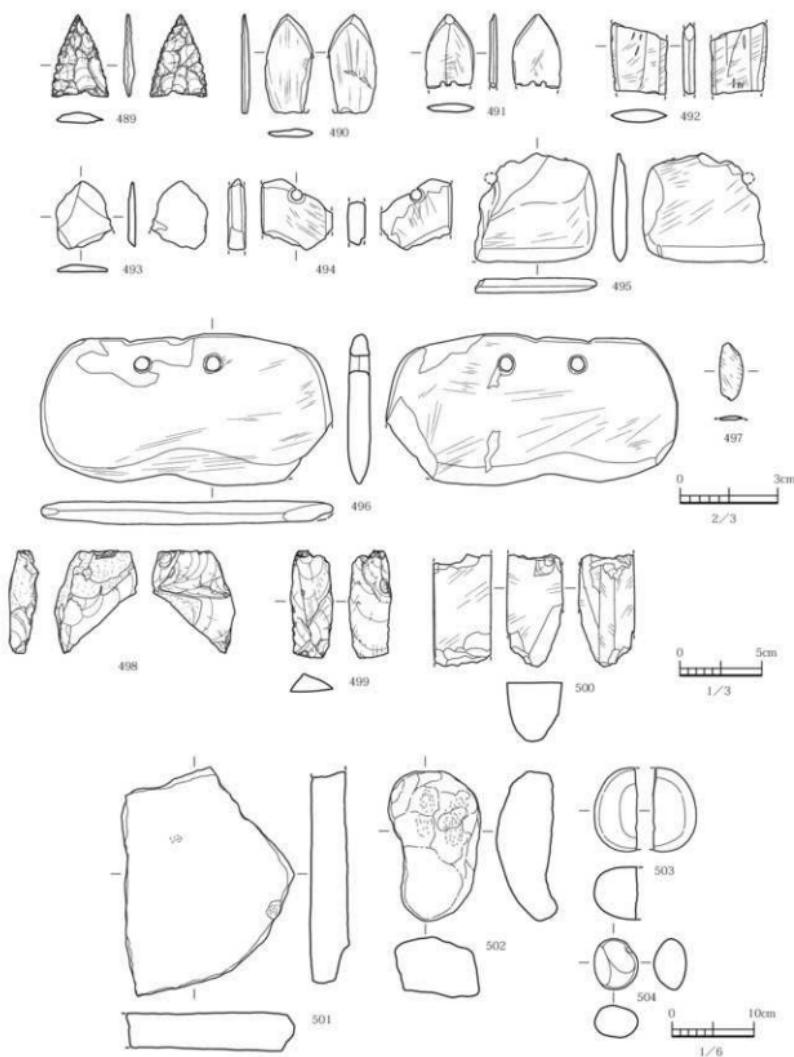


图 227 竖穴建物 (SI30) 出土石器 (RQ) 実測図

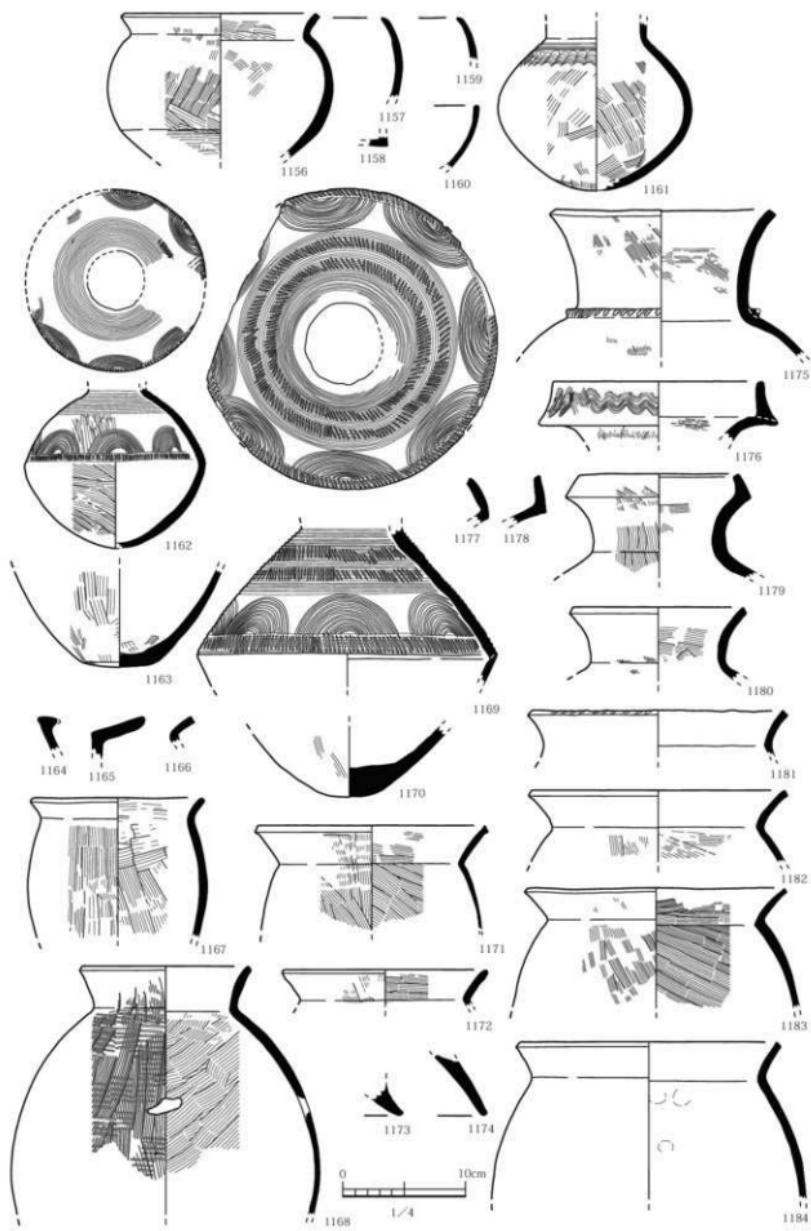


図 228 積穴建物 (SI30) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

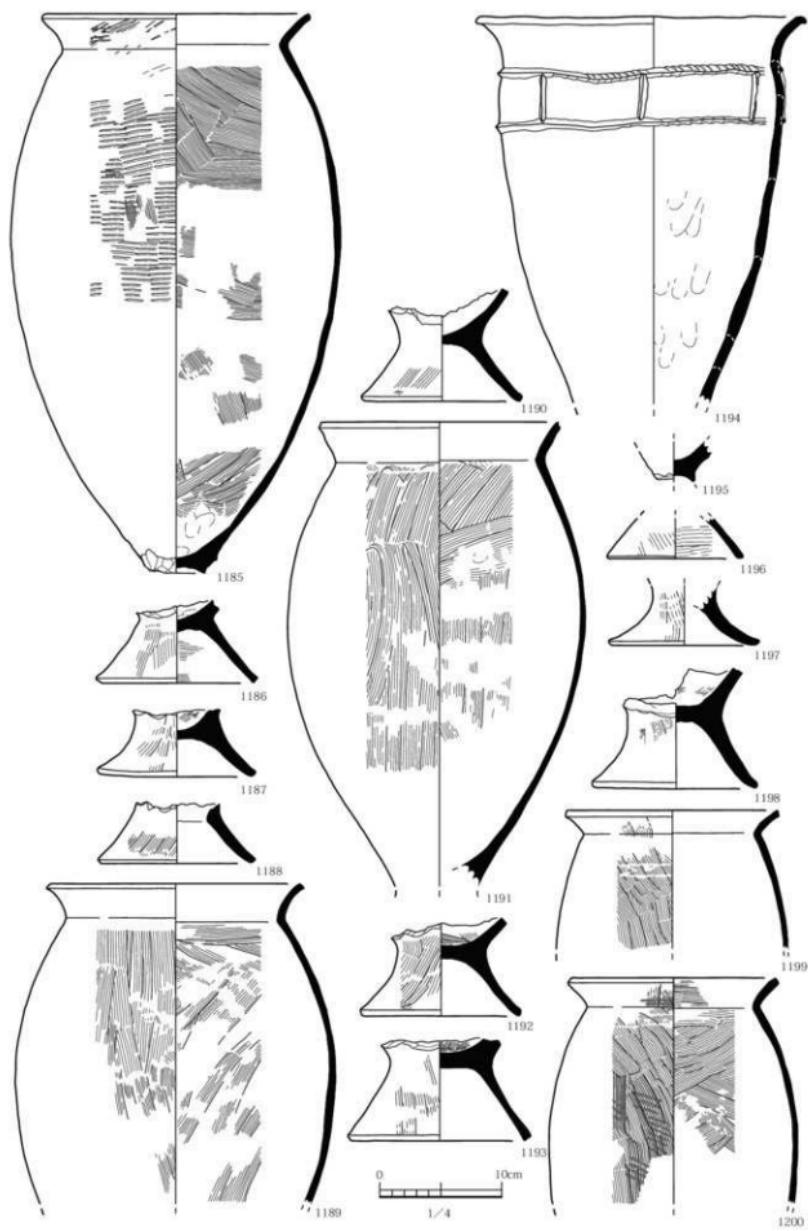


図 229 積穴建物 (SI30) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

- に含む。
- 7: 埋b層: 黒褐色(10YR2/3)土。3層、4層から成る。
 - 8: 埋c層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層ブロック(直径1cm~2cm)が含まれ、炭化物片(長さ3cm程度)を少量含む。
 - 9: 埋d層: 黒褐色(10YR3/1)土。3層ブロック(直径2cm程度)が含まれる。
 - 10: 埋e層: 黒色(10YR2/1)土。
 - 11: 埋f層: 黒色(10YR2/1)土。黒色土の中に3層のブロック(1cm未満)が点在する。
 - 12: 埋g層: 黒色(10YR2/1)土。腐葉土が多く含まれ、11より3層ブロックが多い。
 - 13: 炉a層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物が少量。
 - 14: 炉b層: 黒色(10YR2/1)土。長さ1cm未満の炭化物が多量に含まれる。
 - 15: 炉c層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物が高密度で大量に含む。
 - 16: 炉d層: 黒色(10YR2/1)土。多量の炭化物を含む。
 - 17: 炉e層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を多く含み、3層の硬い土をブロック状に含む。
 - 18: 炉f層: 黒褐色(10YR2/3)土。直径2cm以下の3層を含み、炭化物、焼土粒を含む。
 - 19: 柱a層: 黒褐色(10YR3/4)土。
 - 20: 柱b層: 黒褐色(10YR2/2)土。長さ1cm程度の炭化物が含まれる。
 - 21: 柱c層: 黒褐色(10YR2/2)土。
 - 22: 柱d層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径5mm程度の炭化物が点在。焼土粒(直径2~3mm)も少量ではあるが含まれる。
 - 23: 柱e層: 暗褐色(10YR3/3)土。3層~7a層より構成される。7a層はごくわずか。
 - 24: 柱f層: 黒色(10YR2/1)土。3~7層土が混じる。4層土は少ない。
 - 25: 柱g層: 黒褐色(10YR3/1)土。5~7層土含む。7層土ブロックが目立つ。
 - 26: 柱h層: 黒色(10YR2/1)土。3~7層土が細かく混じっている。
 - 27: 柱i層: 黒褐色(10YR3/1)土。3~7層の土を含む。4、7層土、親指大のブロックが目立つ。
 - 28: 柱j層: 黒色(10YR2/1)土。3~7層の土が混じる。4、7層土は少ない。
- 29: 床a層: 黒褐色(10YR3/2)土。3層~5層から成り各層直径5cm以下のブロックに入る。焼土、炭化物をわずかに含む。ベッド状遺構を構築している。
- 30: 床b層: 黒褐色(10YR3/2)土。4層5層から成り上面は硬化している。
- 31: 床c層: 黒褐色(10YR3/1)土。3層~5層ブロックは2cm未満で小さい炭化物、焼土をやや含む。
- 32: 床d層: 黒色(10YR2/1)土。4層~6層から成り黒い6層が直径5cm未満でブロック状に入れる。
- 33: 床e層: 黒褐色(10YR2/2)土。焼土粒をわずかに含む。外側の側壁溝の埋土。
- 34: 床f層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物粒、焼土粒をやや含む。内側の側壁溝の埋土。

SI32

SI32は、調査区12区、518グリッドに位置し、6.6m×2.5mが調査対象の、方形を呈する2本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ1mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。SI27を切る。

なお、SI32の南側壁中央部際には、礫群が据え置かれていた。

主柱穴は、南西主柱穴と南東主柱穴の2基を掘削し、直径0.3m、深さ1mを測る。

炉は、南別の柱穴間に位置し、直径0.6m、深さ0.2mのボウル形を呈している。なお、炉には、幅20cm程の周堤が付設していることが、硬化面範囲検出状況写真から判明した。周堤の高さは数cmと低く、緩やかな起伏で床面へと続いている。また、この写真には、周堤付近に炭化物が分布していることも記録されている。

Kピットは、南側壁中央に位置し、深さ20cm程の方形土壙の北端に支柱穴2対4基が付設されている。2対の支柱穴群は新群の深度は浅く西寄りに、古群の平面プランは長方形を呈し深度は深く東寄りに位置している。Kピットの形態も東端部が乱れているため、本来は新古の支柱穴群とそれぞれセットとなる新古のKピット2基があつたと推定できる。炉と新古のKピットは、いずれも南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、東南隅、西南隅のものが検出され、

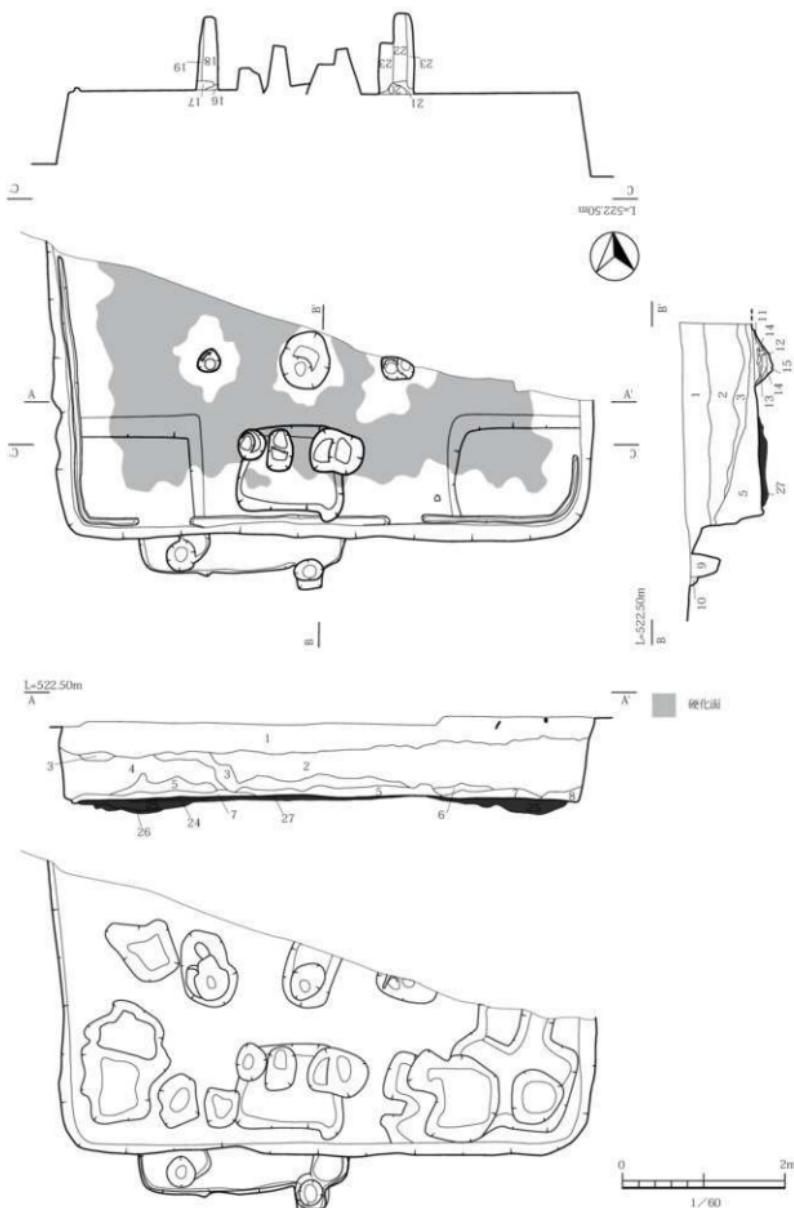


図 230 穹穴建物 (Si32) 実測図

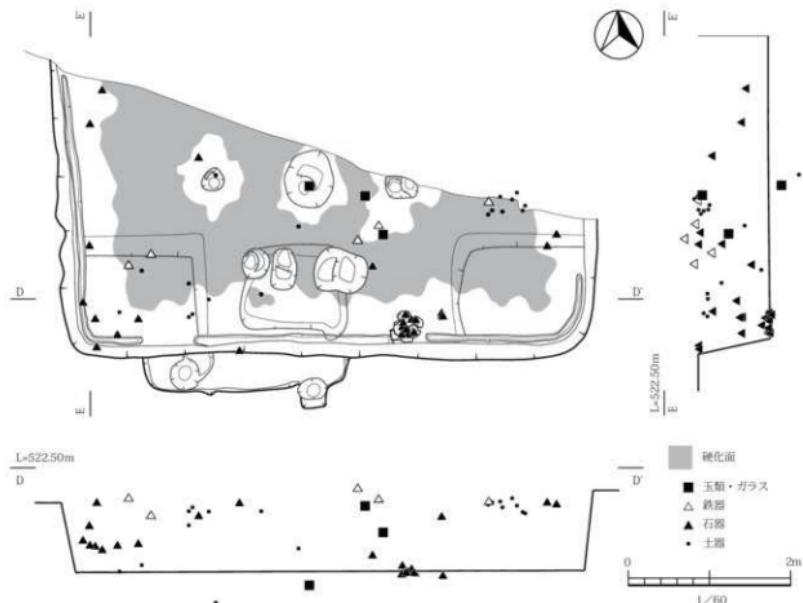


図 231 残穴建物 (SI32) 遺物分布図

幅 1.4m、高さ 0.1m を測る。

硬化面は、側壁際を 0.4m 程の建物内周辺部分を除き、床、ベッド状遺構、内陣、外陣を問わず、全面で検出された。

K ピットと南東隅ベッド状遺構との間の南側壁際では、拳大の礫 9 点が側壁に向かい 2段積みの状態で据え置かれていた。この礫群の出土地点は、K ピットとベッド状遺構との間隔が広く空いた部分であり、南東主柱穴の南にある。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋 a 層：黒色 (10YR2/1) 土。炭化物（直径 1cm 未満）がやや多めに含まれる。

2：埋 b 層：黒色 (10YR2/1) 土。炭化物（直径 1cm 未満）が多めに含まれ、焼土（直径 5mm 未満）も最下層ほどではないが多く含まれる。

3：埋 c 層：黒褐色 (10YR3/1) 土。基本土層の 5 層がブロック（直径 10cm 超）として含まれる。焼土、炭化物は少ない。

4：埋 d 層：黒色 (10YR2/1) 土。炭化物（直径 1cm 未満）が含まれ、基本土層 5 层がブロック（直径

5cm 程度）が点在。

5：埋 e 層：黒色 (10YR2/1) 土。直径 1cm 未満の炭化物、焼土を含む。

6：埋 f 層：黒色 (10YR2/1) 土。焼土 (10YR5/6：黄褐色) を多量に含む。炭化物は少ない。

7：埋 g 層：黒色 (10YR2/1) 土。炭化物（直径 1cm 未満）と上層のブロックが多く含まれる（直径 1cm）。

8：埋 h 層：黒色 (10YR2/1) 土。2mm 程度の焼土と 5 層のブロック（直径 1cm 未満）が含まれる。

9：埋 i 層：黒色 (10YR2/1) 土。1c 層～3 層からなる。3 層はブロック状に含む。張出し部で検出したビットの埋土。

10：埋 j 層：黒褐色 (10YR3/2) 土。1c 層～3 層からなる。3 層が多い。張出し部の埋土。

11：炉 a 層：黒色 (7.5YR2/1) 土。

12：炉 b 層：黒色 (10YR1.7/1) 土。炭化物を多量に含む。木片の繊維状の組織が見えるほど（炭）。

13：炉 c 層：黒色 (2.5YR2/1) 土。

14：炉 d 層：黒色 (10YR1.7/1) 土。炭化物を多量に含む。

15：炉 e 層：黒色 (7.5YR2/1) 土。ややべちゃつく土。

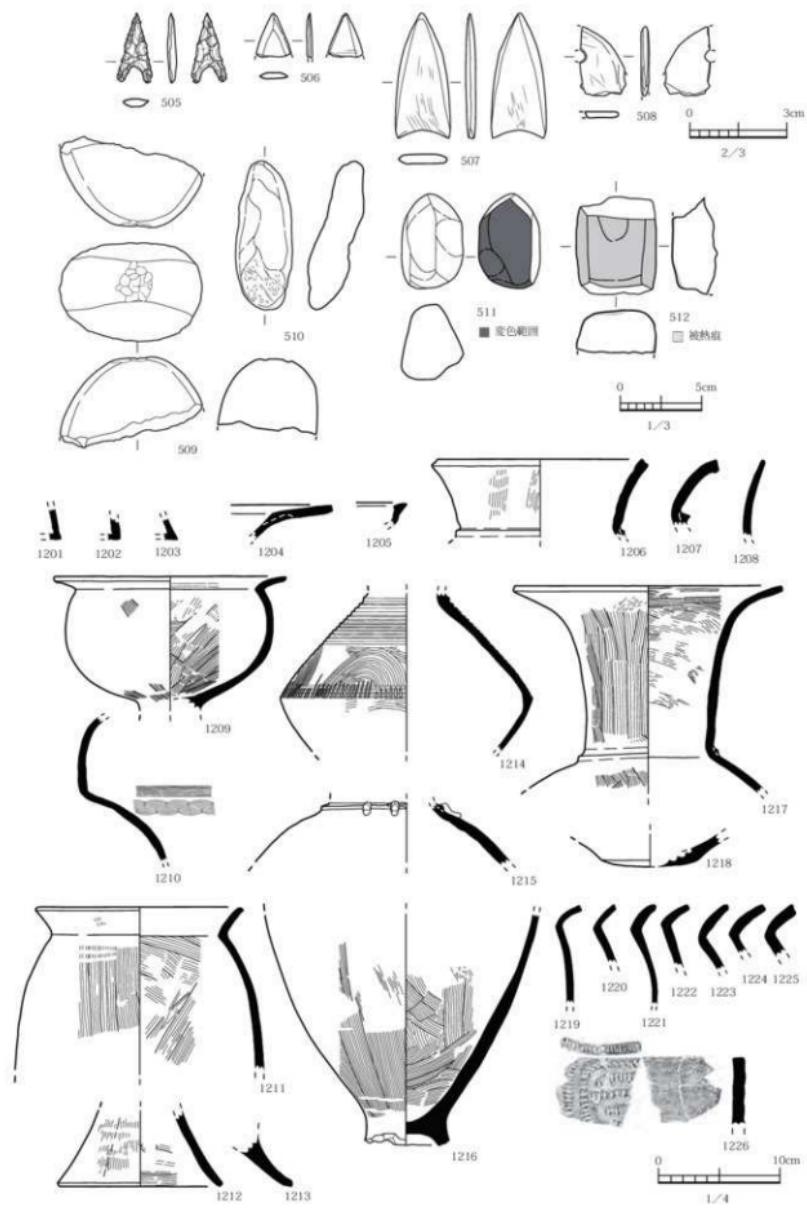


図 232 穂穴建物 (Si32) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

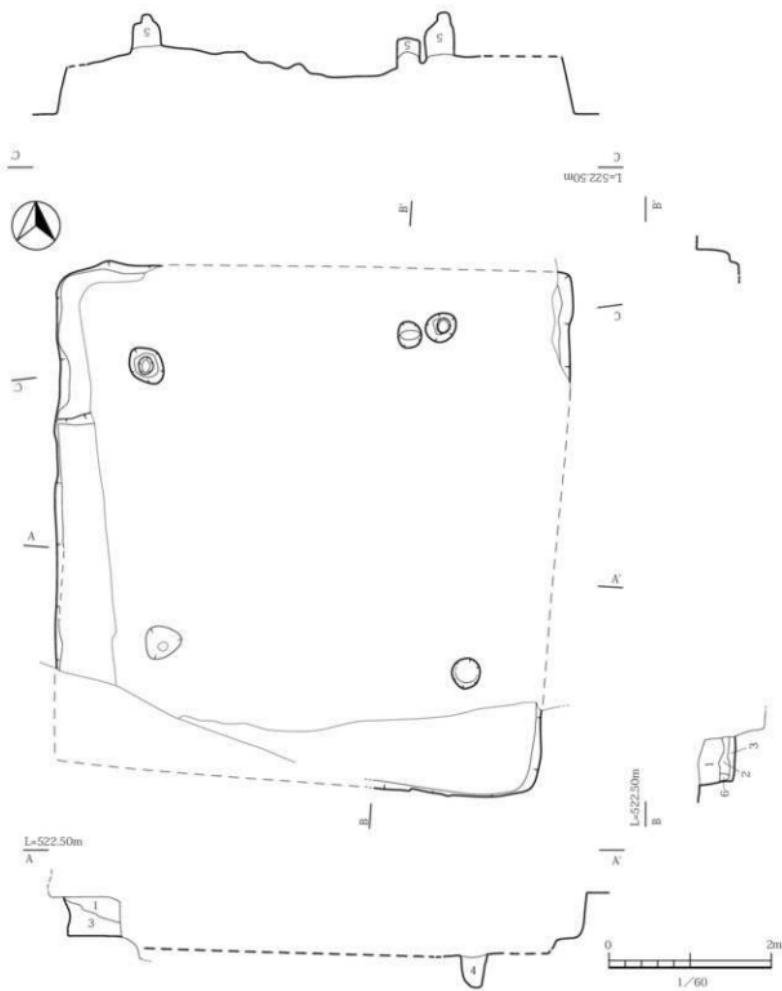


図 233 穹穴建物 (SI33) 実測図

- 炭は 14 と比べて少ない。上面が火床部であろう。
- 16：柱 a 層：黒色（10YR2/1）土。
 - 17：柱 b 層：黒色（10YR2/2）土。
 - 18：柱 c 層：黒色（10YR2/1）土。腐植が多い。
 - 19：柱 d 層：黒色（10YR2/1）土。
 - 20：柱 e 層：黒色（10YR1.7/1）土。
 - 21：柱 f 層：黒色（2.5Y2/1）土。
 - 22：柱 g 層：黒色（7.5YR2/1）土。腐植が多くフカフカしている。
 - 23：柱 h 層：黒色（10YR2/1）土。
 - 24：床 a 層：黒色（10YR2/1）。6 層と 7 層より構成され。6 層をベースとして 7 層が含まれる。
 - 25：床 b 層：黒色（10YR2/1）土。5 層～7 層より構成される。5 層がベースで 7 層は少量含まれる。

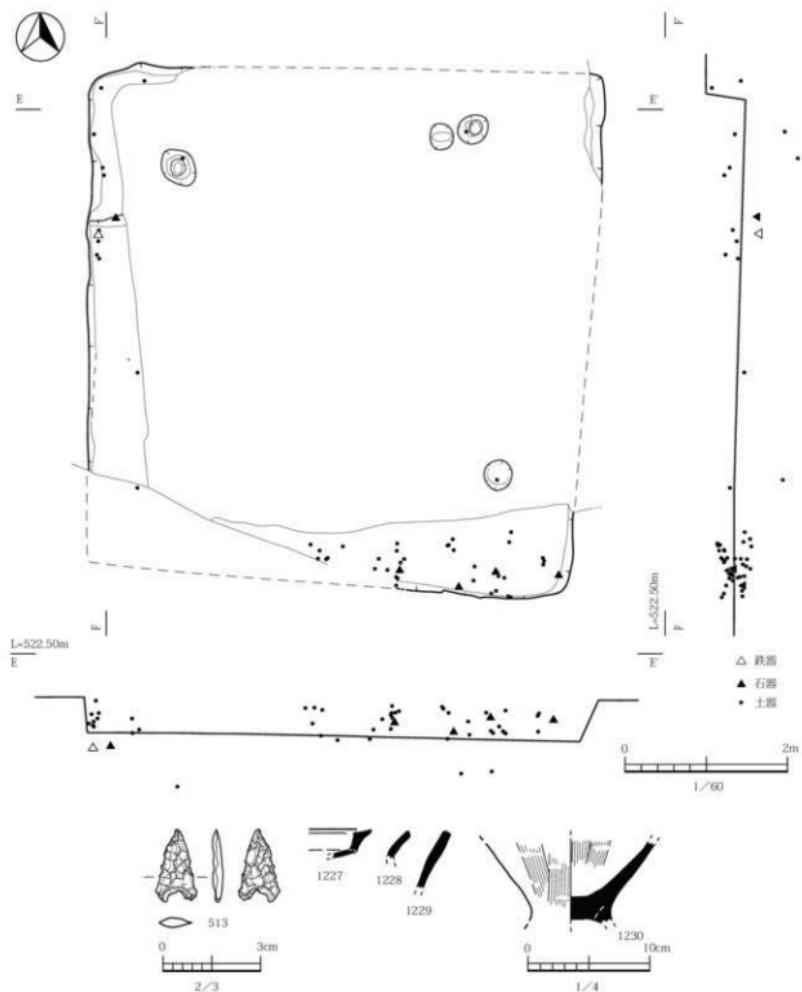


図 234 積穴建物 (SI33) 遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

- 26：床c層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～6層から構成され5層がベースである。
- 27：床d層：黒色（10YR2/1）土。6層～7層から構成され、6層がベースで細粒。
SI32では、菅玉未成品1点が検出された。

SI33

SI33は、調査区12区、497グリッドに位置し、4.2m×5.1mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.7mを測るが、面積の8割以上をSI14に切られているため炉、ベッド状遺構等、施設の概要を知ることができない。SI15、SI17を切り、SI14に切られる。

主柱穴は、現地発掘で南西主柱穴を除く3基を掘削し、直径0.4m、深さ6mを測る。南西主柱穴の候補は、整理段階でSI14掘方実測図から選定できたので、スミ色で図示した。

ベッド状遺構は、平面では検出していない。断面では、南西隅の土層断面で2：床a層がベッド状遺構の貼り床、理a層は側壁溝の埋土である、との観察結果を得ている。このことから、SI33は、四隅にベッド状遺構をそなえ、側壁溝を巡らせた竪穴建物である、と考察することができる。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。褐色（10YR4/6）ブロックを少量含む。
- 2：床a層：にぶい黄褐色（10YR5/3）土。3の黄褐色土中に黒色土を含む。
- 3：床b層：黒褐色（10YR3/2）土。1よりやや明るい土色。黄色（10YR4/6）土ブロックを多量に含む。
- 4：柱a層：黒褐色（10YR2/2）土。柱b層のようないわゆる明黄褐色土ブロックは顕著ではない。
- 5：柱b層：にぶい黄褐色（10YR4/3）土。中に明褐色（10YR6/6）土ブロック（最大2cm径）が混入。
- 6：埋a層：黒色（10YR2/1）土。側壁溝の埋土。

SI38

SI38は、調査区13区、A3グリッドに位置し、4.4m×4.3mの正方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。

検出面からの深さ0.6mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。

主柱穴は、4基を掘削し、直径0.4m、深さ0.7mを測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.7m、深さ0.2mのボウル形を呈している。炉には、幅30cm程の周堤が付設している。周堤の高さは10cm弱と高く、外反しながらなだらかに床面へと続いている。

ベッド状遺構は、発掘作業では検出されていない。なお、竪穴建物の四隅に低いベッド状遺構が設置されていることが附帯設備検出状況写真から判明した。10cmに満たない高さのベッド状遺構が、幅1.0m程の正方形を呈し、建物隅から主柱穴までの空間に配置されている。ベッド状遺構の縁辺は緩やかに床面へと続いている。各主柱穴の周囲は掘り堀められているため、ベッド状遺構の平面形はL字形に近似している。

層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。3層のブロック（直徑3cm未満）が少量含まれる。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層のブロック（直徑5cm程度）が多量に含まれる。長さ2cm程度の炭化物が点在する。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。3層のブロック（直徑3cm程度）が少量含まれる。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。直徑1mm～2mm程度の焼土粒が散在する。
- 5：柱1層：黒色（10YR2/1）土。5層のブロック（直徑1～2cm）が含まれる。
- 6：柱2層：黒色（10YR2/1）土。5層～7a層までのブロックが混在。5層ブロックは直徑3～4cm。引き抜いた後、柱穴内の土が崩落。
- 7：柱3層：黒色（10YR2/1）土。5層ブロック（直徑1～2cm）が含まれる。
- 8：柱4層：黒色（10YR2/1）土。腐植が含まれているためカカフカした感がある。柱痕。
- 9：柱5層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層（アカホヤ）が混在する。柱を引き抜いた後まき上げた土。
- 10：柱6層：黒褐色（10YR2/2）土。腐植が多く含む土の中に5層のブロック（3～5cm）を含む。引き抜いた後ブロックが崩壊して混じりこむ。

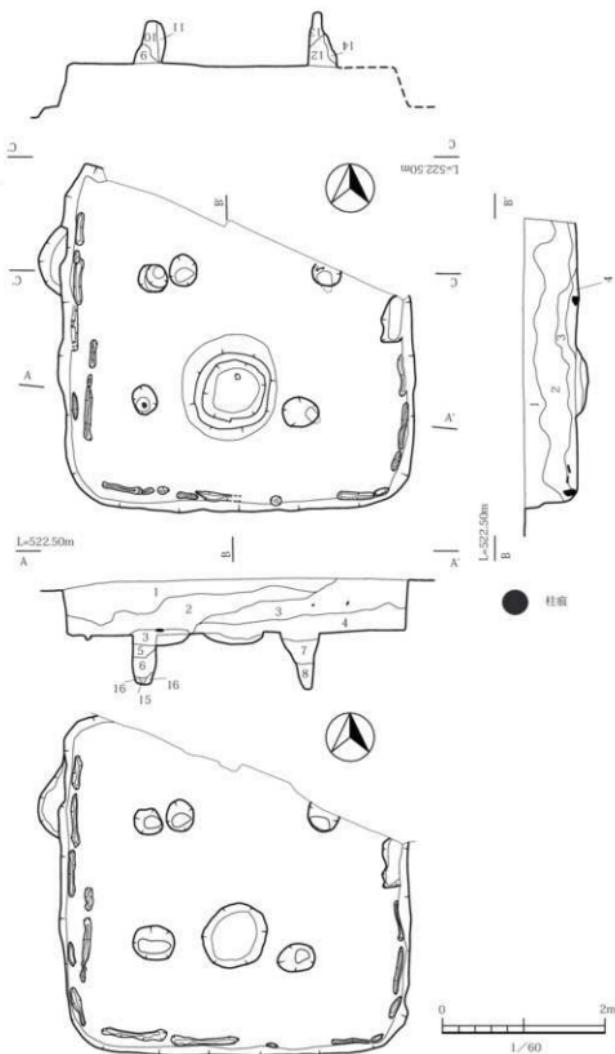


図 235 豊穴建物 (Si38) 実測図

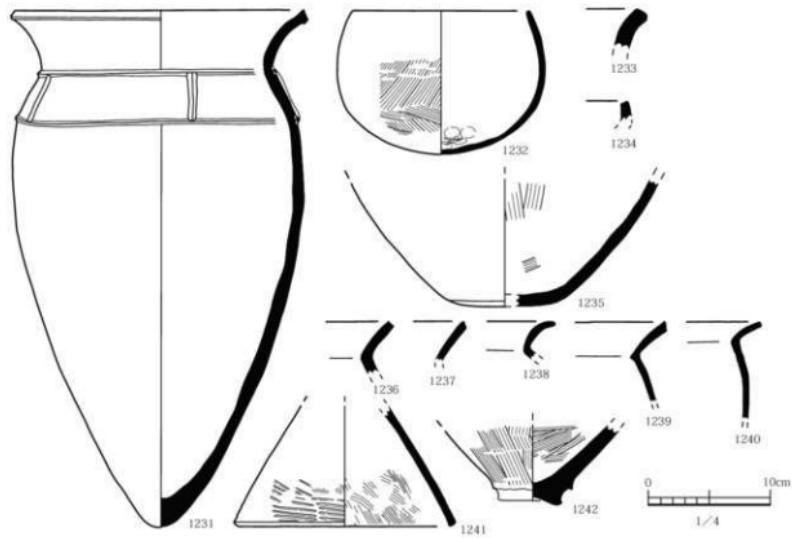
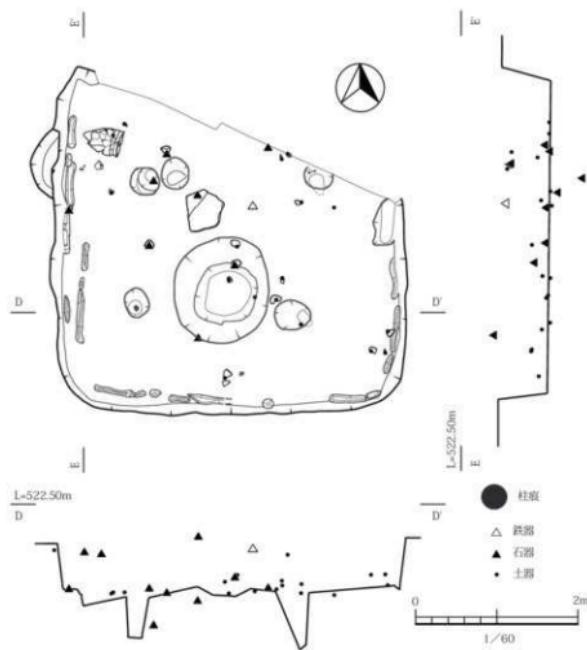


図 236 穫穴建物 (SI38) 遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

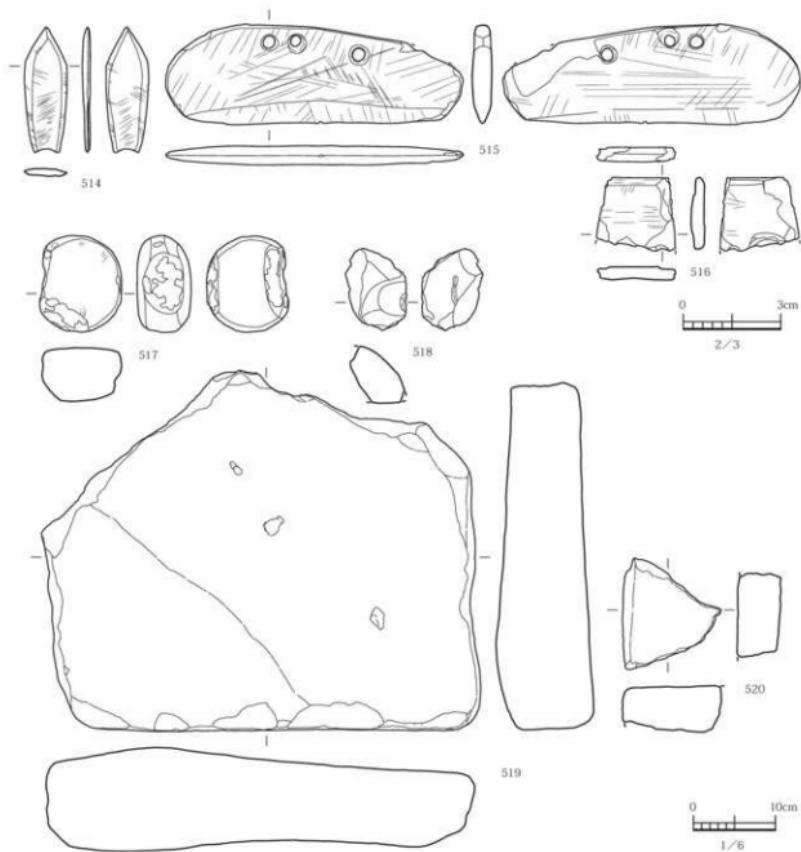


図 237 穫穴建物 (SI38) 出土石器 (RQ) 実測図

- 11：柱 7 層：黒色（10YR2/1）土。4～5 層から構成される。柱の根固め？
- 12：柱 8 層：黒色（10YR2/1）土。6～7 層から構成される。7a 層のアカホヤ直径 3～5cm のブロックが多量に含まれる。柱を引き抜いた後まき上がった土。
- 13：柱 9 層：黒色（10YR2/1）土。腐植を多く含む。5 層のブロック（1～3cm）が混在する。引き抜いた後入れ込む。
- 14：柱 10 層：黒色（10YR2/1）土。5 層のブロック（直径 3～5cm）が点在する。柱の根固め。
- 15：柱 11 層：黒褐色（5YR3/1）土。柱の腐植したものか。抜き取り穴に黒褐色土が入り込んだものと思われる。
- 16：柱 12 層：灰褐色（5YR4/2）土。所々にぶい黄褐色（10YR4/4）土ブロックを含む。

SI39

SI39 は、調査区 13 区、E3 グリッドに位置し、3.5m × 4.9m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。

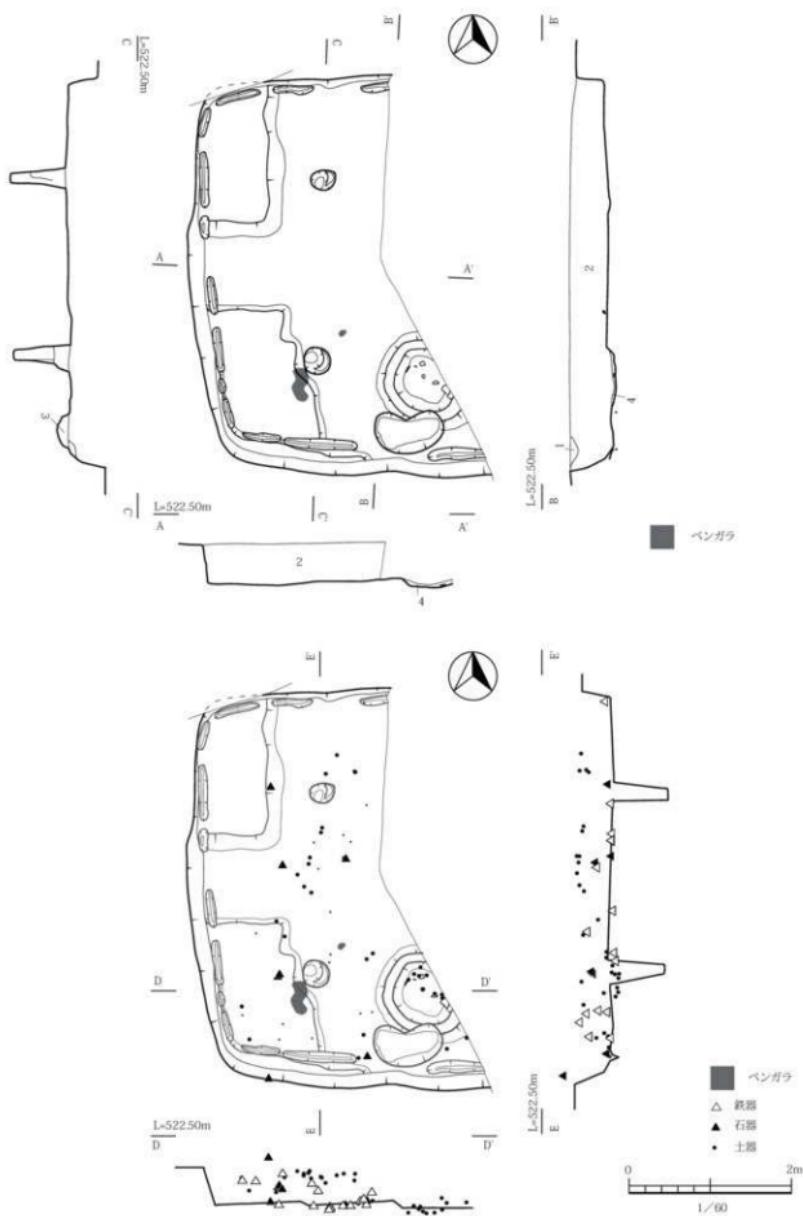


図 238 穂穴建物 (SI39) 実測図・遺物分布図

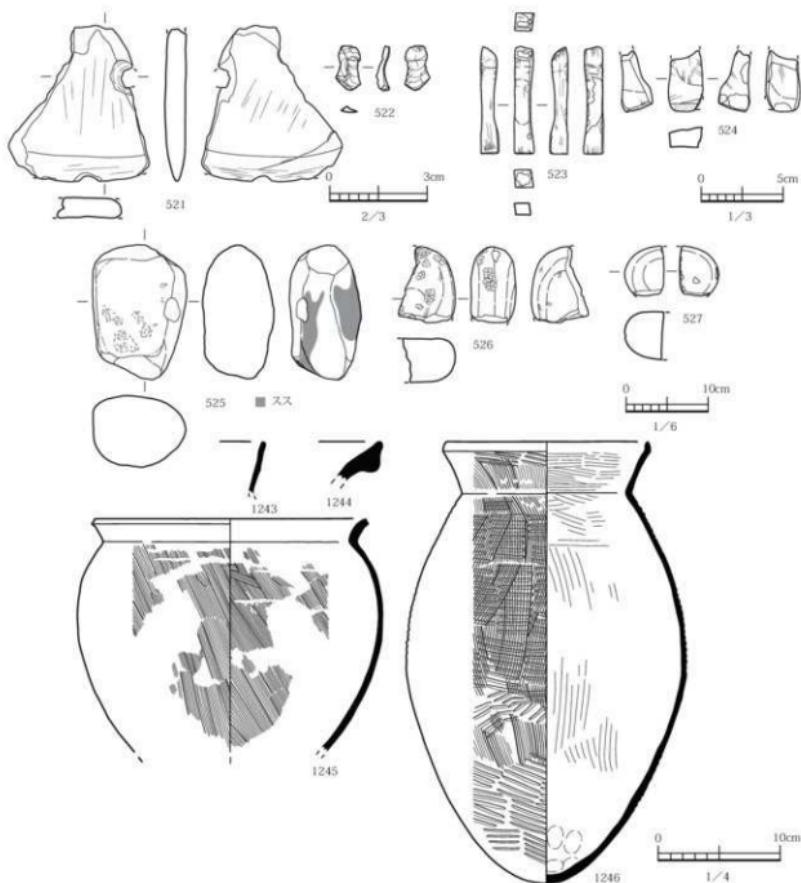


図239 穫穴建物(SI39)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

主柱穴は、北西主柱穴と南西主柱穴の2基を掘削し、直径0.3m、深さ0.7mを測る。

炉は、南西主柱穴の東に位置し、直径0.8m、深さ0.1mの皿形を呈している。炉には、幅20cm程の周堤が付設している。周堤の高さは5cm程で、なだらかに床面へと続いている。なお、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、炉使用時完掘状況写真から判明した。当該写真には、竪穴建物の埋没過程で2：埋2層に包含され炉内に堆積した土器片が、4：炉1層の上位で出土した状況が記録されている。この土器片を取り上げた状態が炉の使用時の構造を示し、通常、

その下層には以前の使用時または構築時の状況が埋蔵されている。しかし、調査対象構造物の「使用時」と「廃棄時」を弁別しない調査担当者は、構造物が構築される前段階の状況を示す掘方の発掘調査を実施していない。SI39の炉は、直径0.8mの規模と周堤を巡らせた構造をもっている。炉には下部構造が存在した可能性が極めて高く、ボウル形、漏斗形の形態であったものと推定するに十分な遺構である。今後、調査区外のSI39遺構残存部を調査する場合には、今次の発掘作業を補完する考古学的方法を探り、結論にいたることが必要である。

南側壁中央部では、深さ 20cm 程の不定形土壌が検出されている。これを「貯蔵穴」として発掘作業担当者は記録しているが、炉を切る貯蔵穴は存在しない。ベッド状遺構は、北西隅、南西隅で検出され、幅 1m、高さ 0.1m を測る。南西隅ベッド状遺構の東辺中位、南西主柱穴の周囲では、ベンガラが検出されている。

硬化面は、記録されていない。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。土質では 2 と同じ。3 層のブロック（直径 5cm）が含まれる。
- 2：埋 2 層：黒色（10YR2/1）土。長さ 1cm 未満の炭化物が点在する。
- 3：貯蔵穴土：黒色（10YR2/1）土。炉内埋土と同じような土であるが、焼土粒が含まれない。長さ 1cm 以内の炭化物を比較的多く含む。
- 4：炉 1 层：黒色（10YR2/1）土。赤褐色（5YR4/6）の焼土（直径 1cm 以内）粒が散在。炭は 1cm を超えるものがある。

SI40

SI40 は、調査区 13 区、F3 グリッドに位置し、7.8m × 5.8m の長方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.6m を測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。

主柱穴は、南東主柱穴を除く 3 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.5m を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 1m、深さ 0.1m 以上のポルタル形を呈している。炉には、幅 20cm 程の周堤が付設している。周堤の高さは 5cm 程で、なだらかに床面へと続いている。炉の周囲では、炭化物が検出されている。

ベッド状遺構は、南東隅を除く三隅で検出され、幅 1m、高さ 0.2m を測る。北西隅、北東隅のベッド状遺構は、北側壁に沿った幅 0.5m 程の狭いベッド状遺構で接続されている。

硬化面は、側壁付近以外の床面全体で検出されている。なお、ベッド状遺構上面では検出されていない。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物の混入少な

く大きさも直径 5mm 以下が殆ど。

- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物は 1 より多く混じる。ブロックも多く見られるようになり、下位ほどその大きさも大きくなる。（直径 2cm ~ 5cm）
- 3：埋 3 層：黒色（2.5YR2/2）土。炭化物や焼土がほかの層より多く混じる。下位には握り拳大のブロックも見られる。
- 4：埋 4 層：黒褐色（10YR2/2）土。上位 3 層より硬くしまる。炭化物等の混じりは一番少ない。
- 5：埋 5 層：黒褐色（10YR3/2）土。
- 6：柱 1 層：黒褐色（7.5YR2/2）土。橙色（7.5YR6/8）のブロックが少量混じる。直径は殆どが 5mm 程度で 1cm 程のものは 1 ~ 3 個位混じる。

SI41

SI41 は、調査区 13 区、E3 グリッドに位置し、5.3m × 4.8m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.6m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。

なお、SI41 の南側壁中央部際には、礫群が掘え置かれていた。

主柱穴は、北西主柱穴を除く 3 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.8m を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.8m、深さ 0.1m の皿形として検出されている。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底には 8：炉 1 層が確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。

K ピットは、炉と南側壁中央との間に位置し、直径 0.6m、深さ 0.2m の円形土壌の西端に、直径 0.3m、深さ 0.4m の支柱穴 1 基が付設されている。さらにその西に直径 0.3m の小穴が検出されている。SI41 では、K ピットと南側壁との間がなだらかに窪んでいることと併せ考えると、なだらかな窪みは新しい K ピット、小穴はその支柱穴である可能性が高い。敢えて付記すれば、新古 2 対の K ピットの東支柱穴は南北ベルトが設置されていた箇所に存在しているであろう。新古 2 対の K ピットと炉は南北軸が一致している。

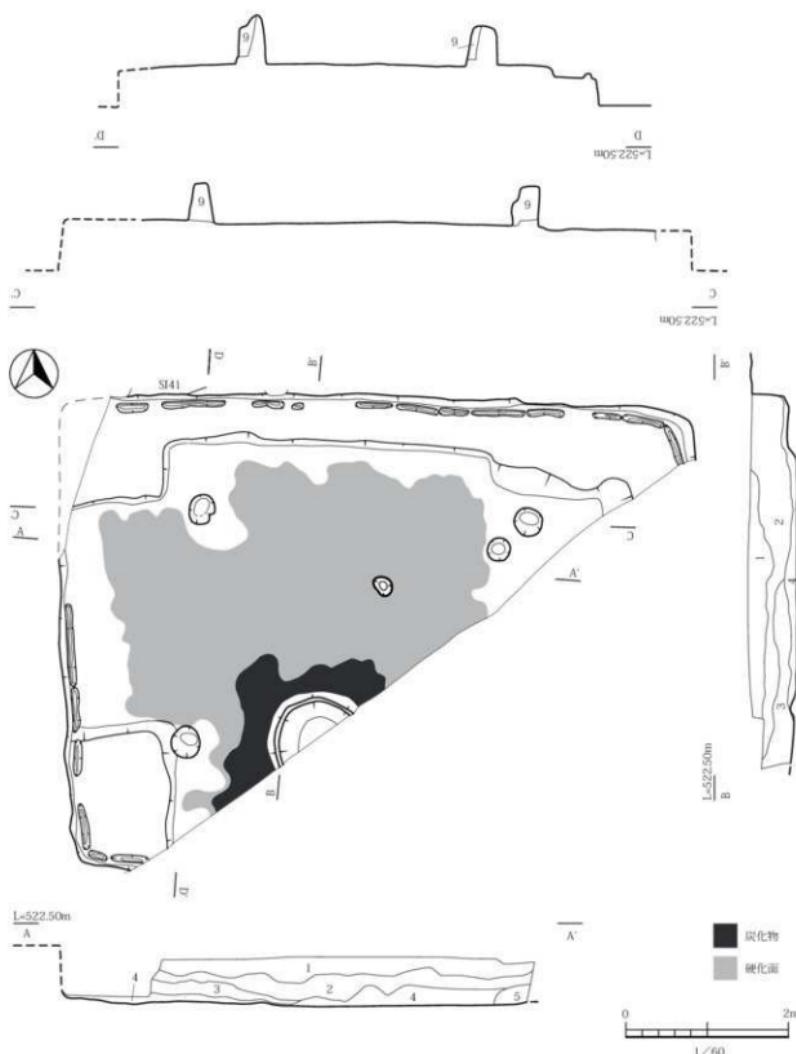


図 240 豊穴建物 (SI40) 実測図

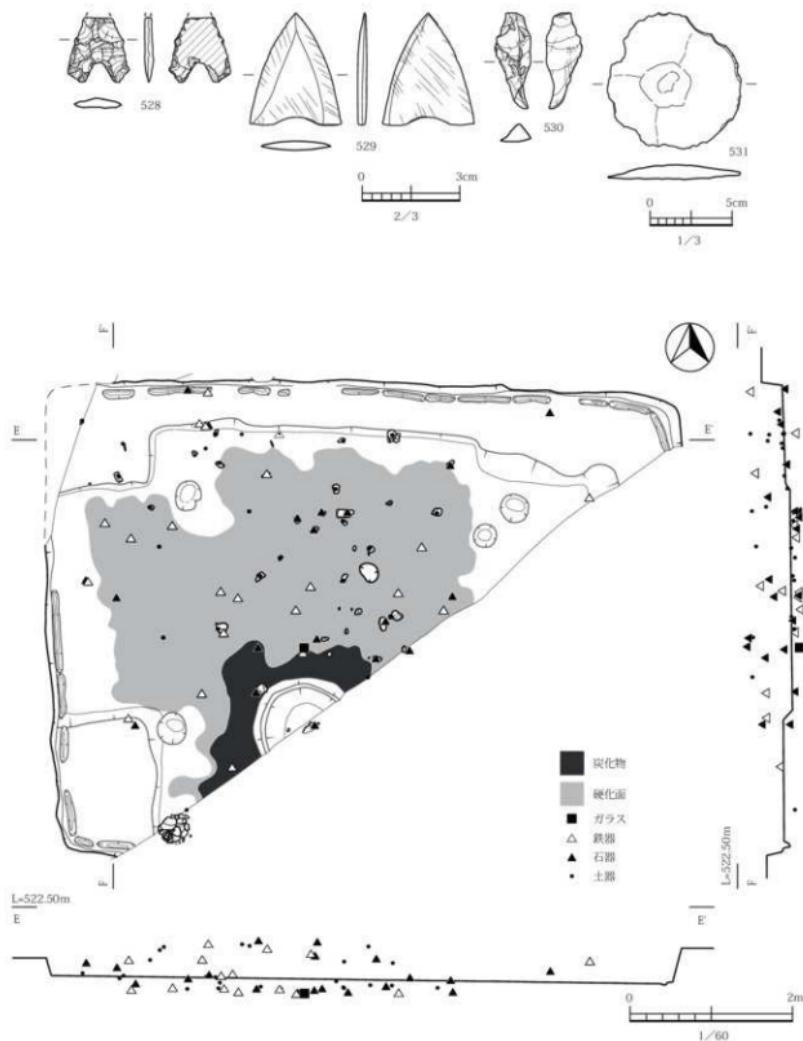


図 241 穴建物 (SI40) 遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

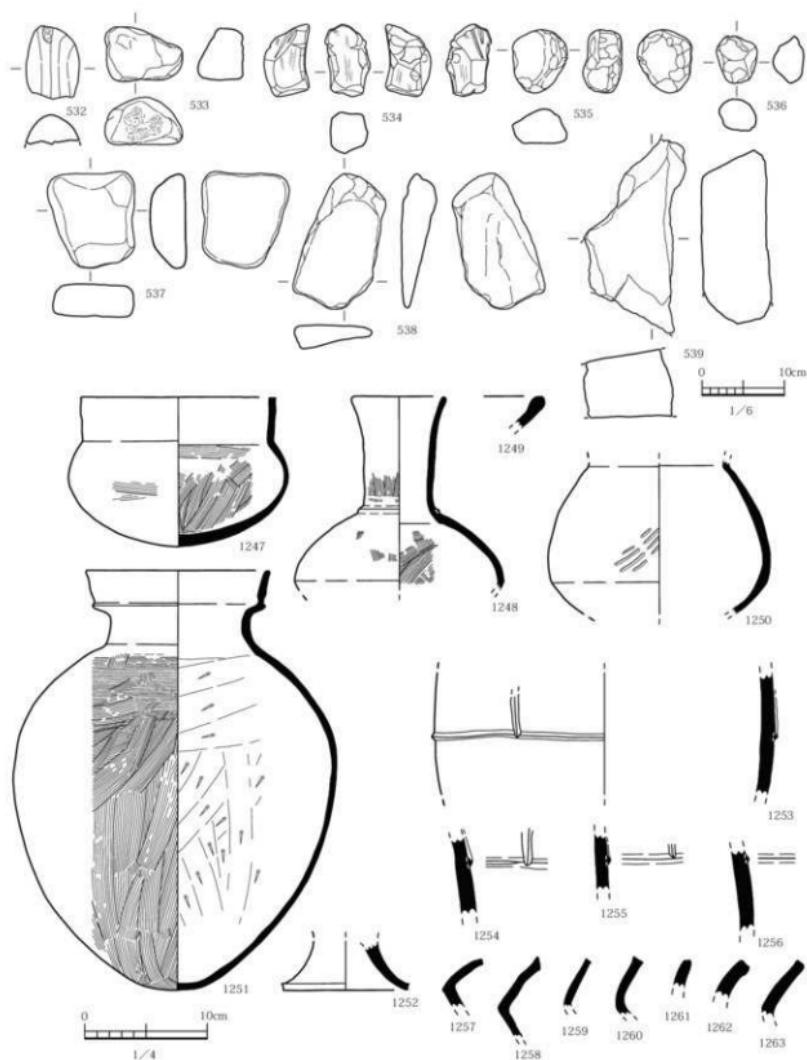


図 242 穂穴建物 (SI40) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

ベッド状遺構は、北西隅を除く三隅で検出され、幅1.2m、高さ0.1mを測る。

硬化面は、記録されていない。

Kピットと南西隅ベッド状遺構との間の南側壁際では、拳大の礫11点が壁に寄せた状態で据え置かれていた。この礫群の出土地点は、先述の新Kピットの中である。

順序は次のとおりである。

1：埋1層：黒色(10YR2/1)土。直径1mm以下の焼土粒が点在。

2：埋2層：黒褐色(10YR2/2)土。長さ1cm未満の炭化物と黄褐色(10YR5/6)焼土を多量に含む。埋めた後焼いている。

3：埋3層：黒色(10YR2/1)土。長さ3cm以上の炭化物を含む。

4：埋4層：黒色(10YR2/1)土。1mm程度の焼土(赤

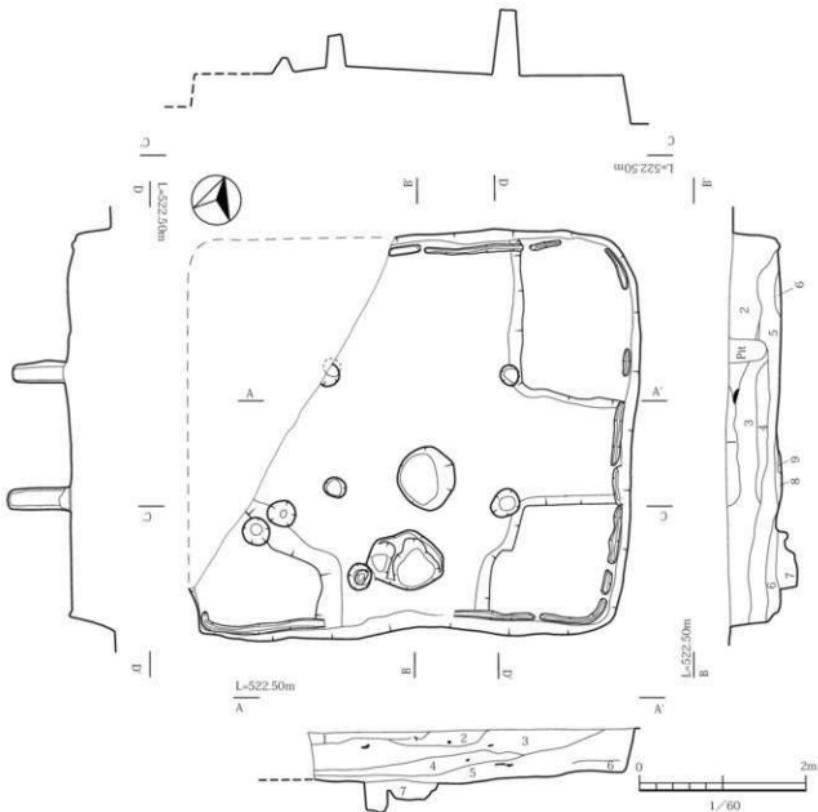


図243 穴穴建物(SI41)実測図

- 褐色 2.5YR4/6) を多量に含む。
- 5: 埋 5 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。焼土の細粒がやや多めに含まれる。
- 6: 埋 6 層: 黒色 (10YR2/1) 土。1mm 程度の炭化物粒を多く含む。
- 7: 埋 7 層: 黒褐色 (10YR3/2) 土。最大径 5cm の黄褐色 (10YR5/6) 土ブロックが散在している。
- 8: 炉 1 層: 暗褐色 (10YR3/3) 土。所々に黄色土のブロックを含む。炉の埋土。
- 9: 炉 2 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炉で生成されたス、炭化物であろう。焼土は見あたらない。

SI42

SI42 は、調査区 13 区、D3 グリッドに位置し、4m

× 3.2m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI37 に切られる。

主柱穴は、2 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.7m を測る。

炉は、0.7m × 0.3m 以上の方形を呈し深さ 0.1m を測る土壤が、調査範囲の南端で検出された。この検出地点は、内陣の南東隅に相当し、建物中心線から東に偏った位置になる。炉の西側から竪穴建物中心の範囲には、炭化物が分布していた。なお、炉の東側辺には幅、高さとも数 cm の周堤が付設しているが、西側辺は床面に続く傾斜となっている。西側辺端部ではベンガラが検出されている。

ベッド状遺構は、北西隅、北東隅で検出され、幅 0.8m



図 244 竪穴建物 (SI41) 遺物分布図

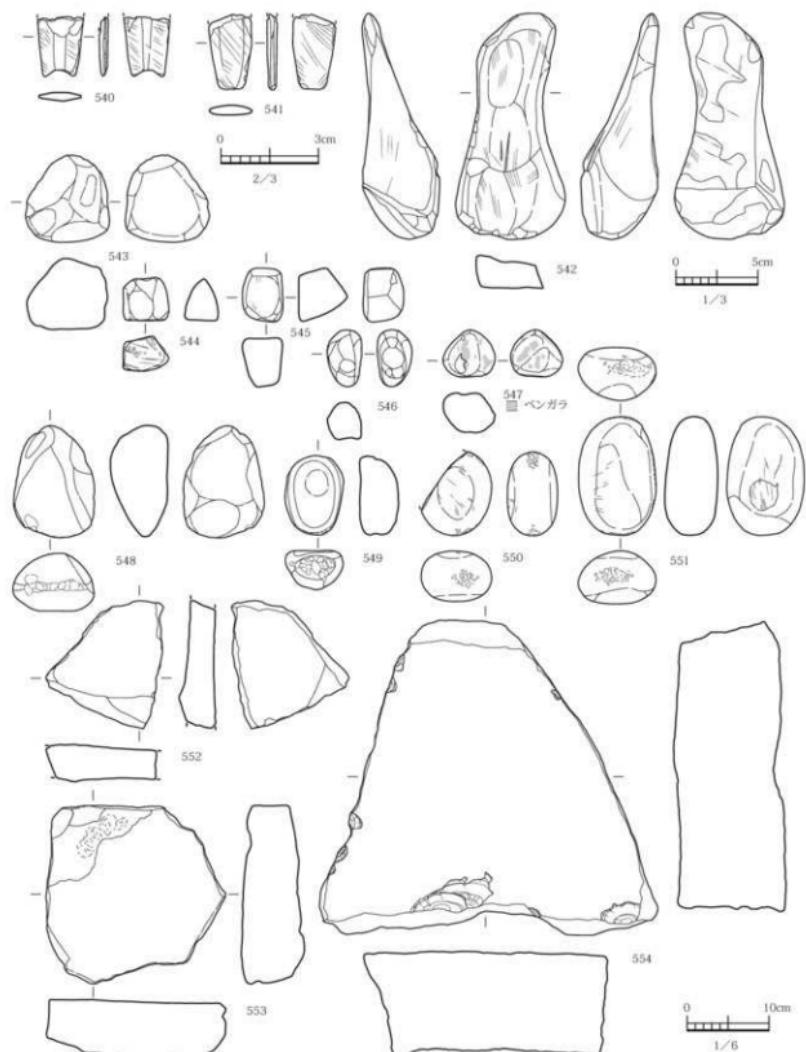


図 245 穹穴建物 (SI41) 出土石器 (RQ) 実測図 (1)

を測る。

硬化面は、内陣で検出され、外陣では検出されていない。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋1層: 黒色(10YR2/1)土。直径3cm程度の炭化物が点々と含まれる。(少量。)
- 2: 埋2層: 黒褐色(10YR2/3)土。埋1層より黄味が強くなり、炭化物の量も多くなる。
- 3: 埋3層: 黒色(10YR2/1)土。遺物が密集する層。
- 4: 埋4層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層のブロック(直径5~6cm)が多く含まれる。埋め戻した土である。

5: 炉1層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を多く含む土(10YR1.7/1)を含む。全体的に黒っぽい。

- 6: 柱1層: 黒色(10YR2/1)土。

SI43

SI43は、調査区15区、563グリッドに位置し、4.8m×5.5mの長方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.5mを測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。SI62を切り、SI65に切られる。

SI43は、鍛冶遺構である。

主柱穴は、南西主柱穴を除く3基を掘削し、直径

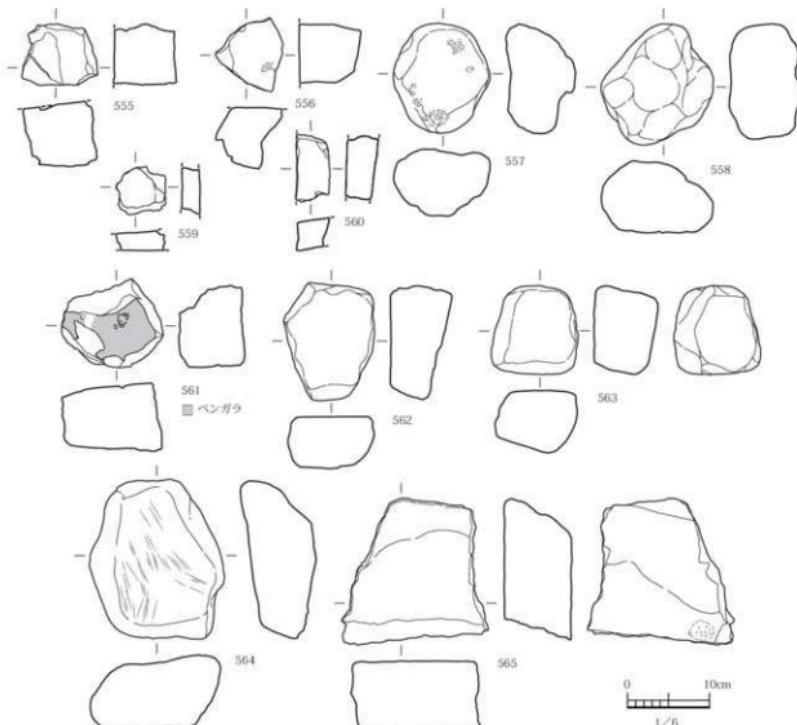


図246 竪穴建物(SI41)出土石器(RQ)実測図(2)

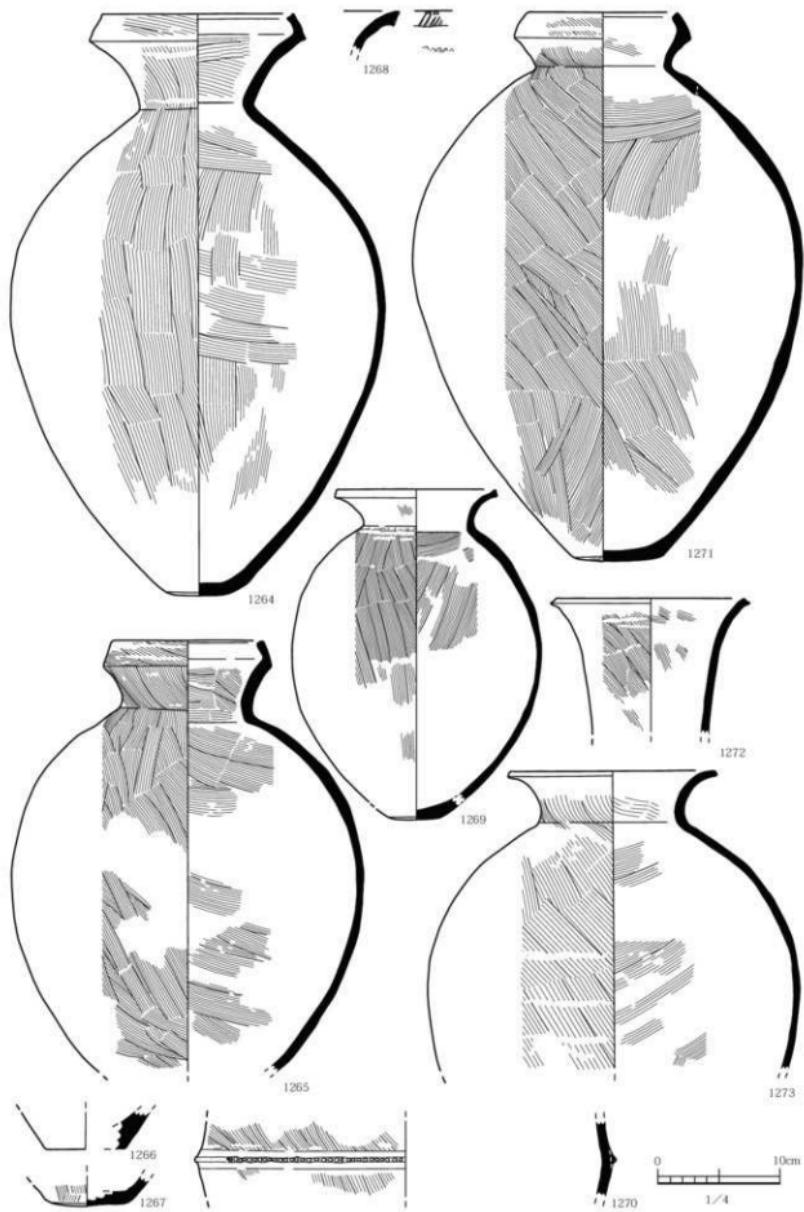


図 247 穹穴建物 (SI41) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

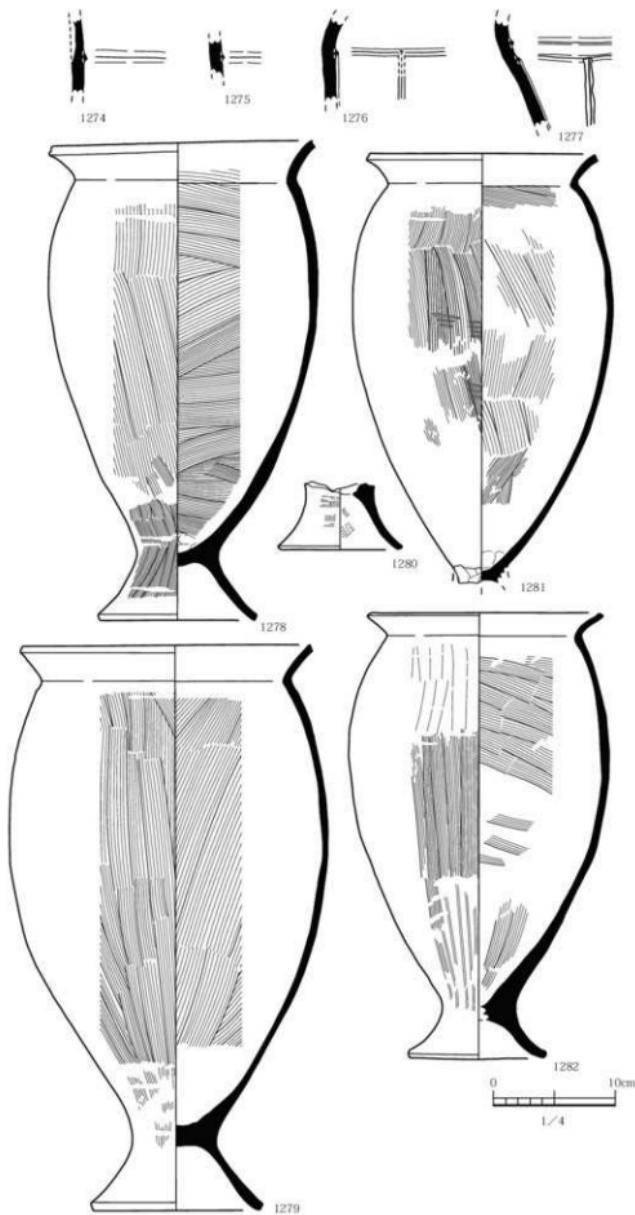


図 248 穹穴建物 (SI41) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

0.3m、深さ 0.8m を測る。なお、これらの主柱穴は、正確には主柱穴抜取り痕である。「主柱穴」周囲の床面では硬化面が検出されず、遺物も分布しない。SI43 完掘 NW 写真他では各主柱穴に抜取り痕が明瞭に確認できるが、発掘作業担当者は掘削していない。柱抜取り痕の範囲を写真から見取り、平面実測図中にスミ色で付記した。

炉は、直径 0.6m、深さ不明の円形土壇として南西主柱の西 1m 程の位置に記載されている。なお、SI43 完掘 NW 写真他では、この「炉」の周囲に、直径 1.3m の範囲で窪みが認められ、かつその底部には 11：炉 a 層と認められる層が分布している。SI43 炉完掘 W 写真では「炉」の底面、側面、土層断面、「炉外床面」

のすべてが同一層である状況が記録されており、発掘作業担当者は「炉」を把握していなかったことが判明する。炉の範囲を写真から見取り、平面実測図中にスミ色で付記した。

ベッド状遺構は南西隅を除く三隅で検出され、幅 1.1m、高さ 0.1m を測る。

硬化面は、内陣・外陣の南北床面で検出され、ベッド状遺構上面では検出されていない。

内陣の北半部では、「高師小僧」が分布する範囲が検出され「酸化区域」と呼称された。この「酸化区域」は、酸化区域検出（高師小僧）写真から、内陣の硬化面直上に酸化鉄が網状に食い込んで分布している状況を表現した、と考えられる。鍛造鉄片、その他の微細鉄片

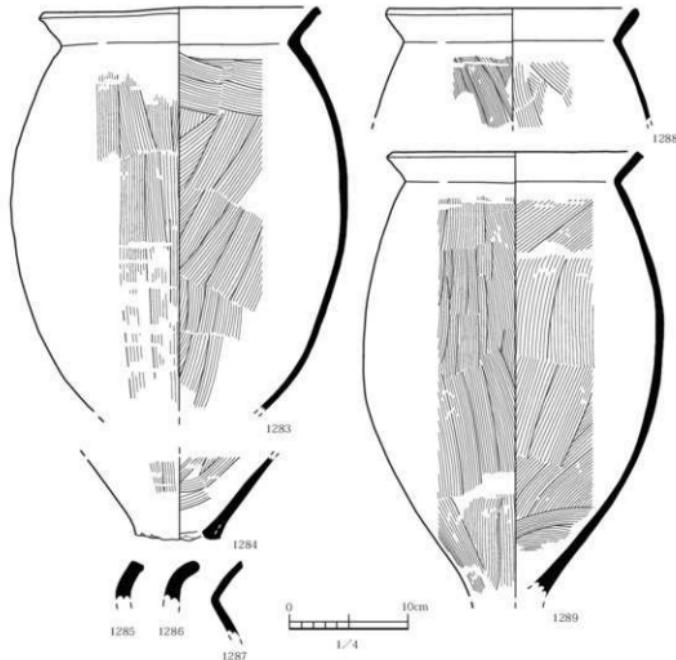


図 249 穹穴建物 (SI41) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

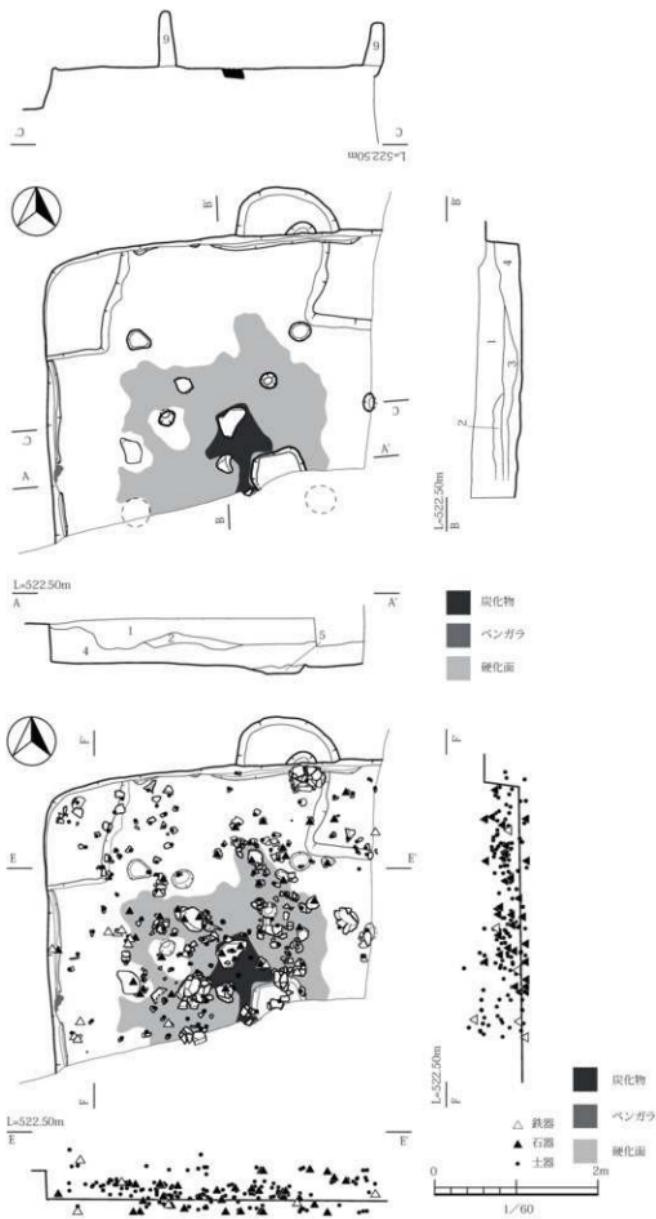


図 250 穂穴建物 (S142) 実測図・遺物分布図

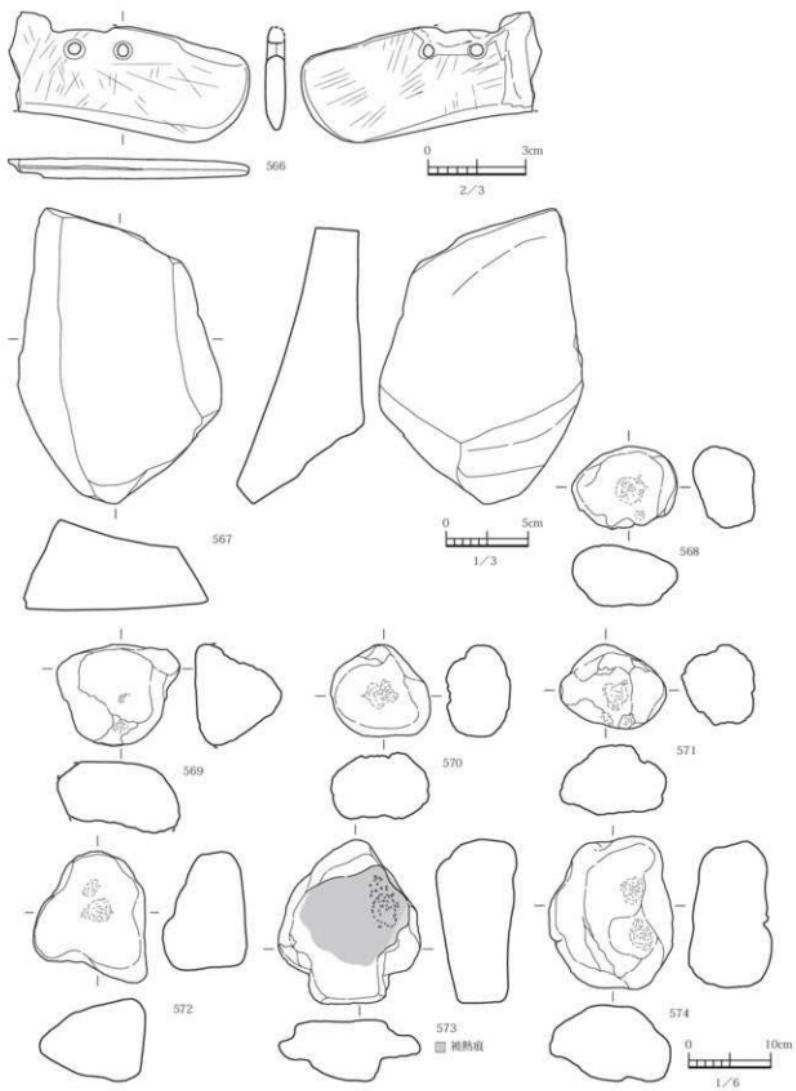


図 251 穹穴建物 (SI42) 出土石器 (RQ) 実測図 (1)

が鉄化し、硬化面上に凝集した現象である。床面の上位層3:埋3層には「高師小僧」が多く含まれていると観察されているが、床面上に鉄化鉄が面として認識されていること、その範囲が内陣に限られることから、埋3層に鉄化作用の供給源を求めるることはできない。内陣、硬化面直上、炉の近傍に分布することから、床面に残存した微細鉄片などの鍛冶副産物が鉄化した結果、としてよい。なお、埋3層に包含された鉄片等の供給源がSI43であるかは、結論を留保する。

微細鉄片などの鍛冶副産物が床面で鉄化していることから、SI43を鍛冶遺構と判断できる。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層

- 名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。
- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物をやや含む。
 - 2: 埋2層: 黒褐色(10YR2/2)土。褐鉄鉱(高師小僧)をやや含む。
 - 3: 埋3層: 黒色(10YR2/1)土。3層ブロック2cm以下を含み、褐鉄鉱(高師小僧)を多く含む。
 - 4: 埋4層: 黒色(10YR2/1)土。3層、5層を2cm以下のブロックで含む。炭化物をやや含む。
 - 5: 埋5層: 黒褐色(10YR2/2)土。焼土粒、炭化物粒をやや含む。ブロックは含まない。
 - 6: 埋6層: 黒色(10YR2/1)土。焼土、炭化物をやや含む。

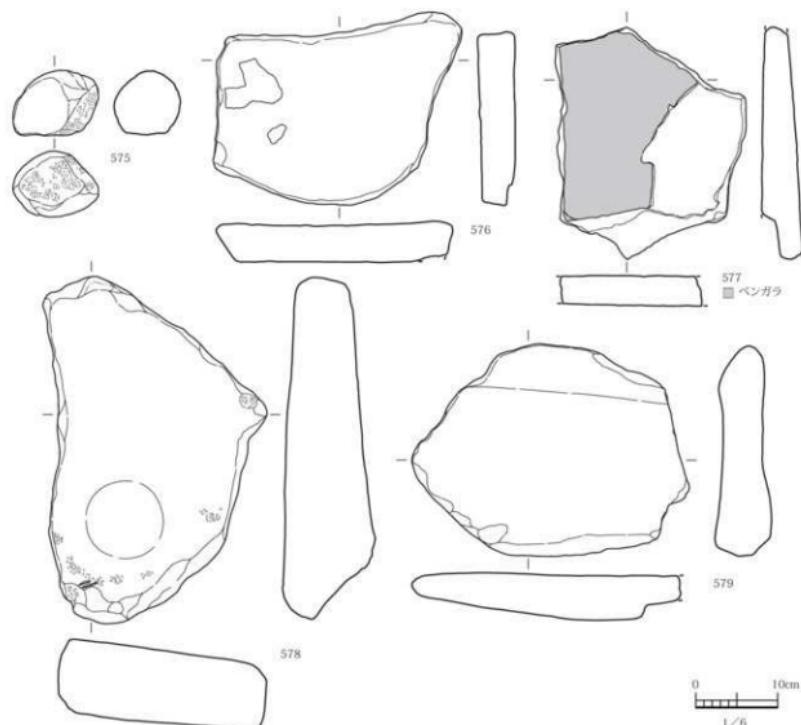


図252 穂穴建物(SI42)出土石器(RQ)実測図(2)

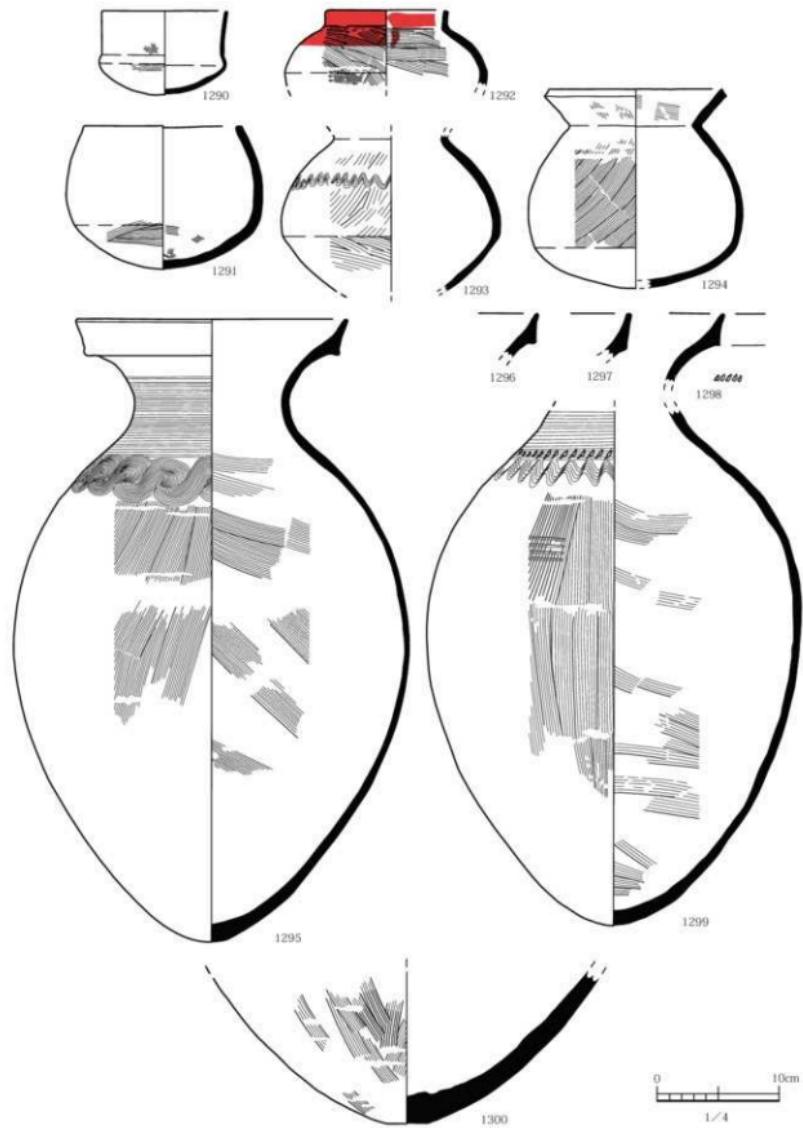


図 253 穹穴建物 (SI42) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

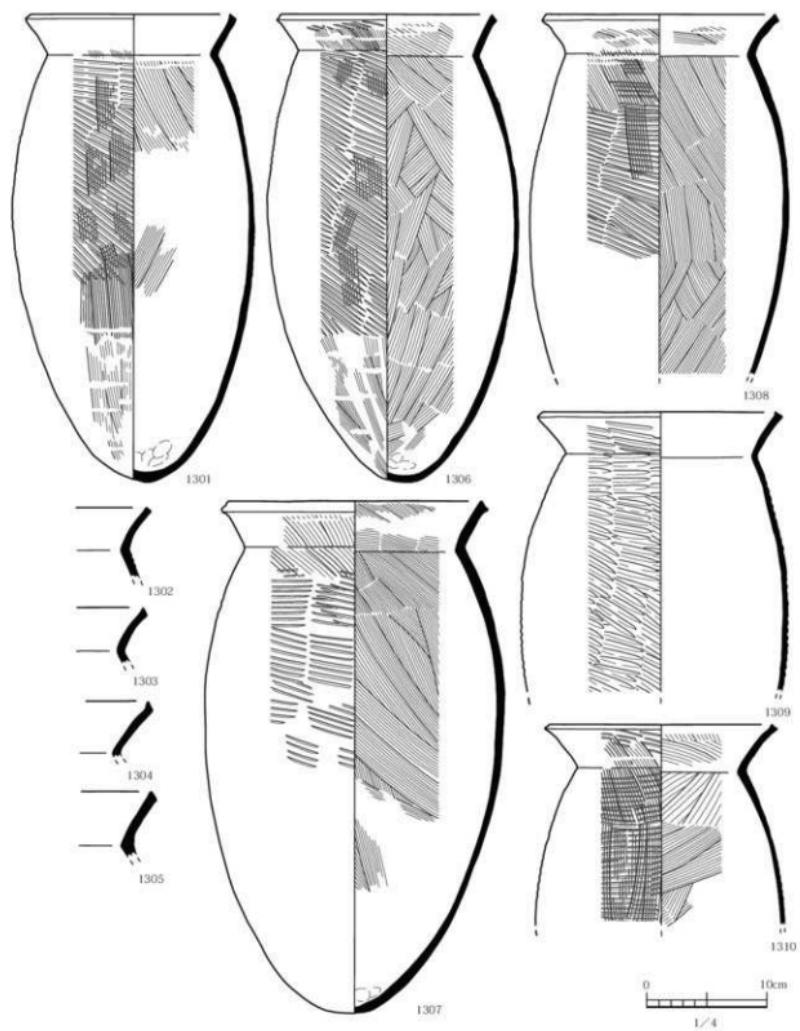


図 254 穹穴建物 (SI42) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

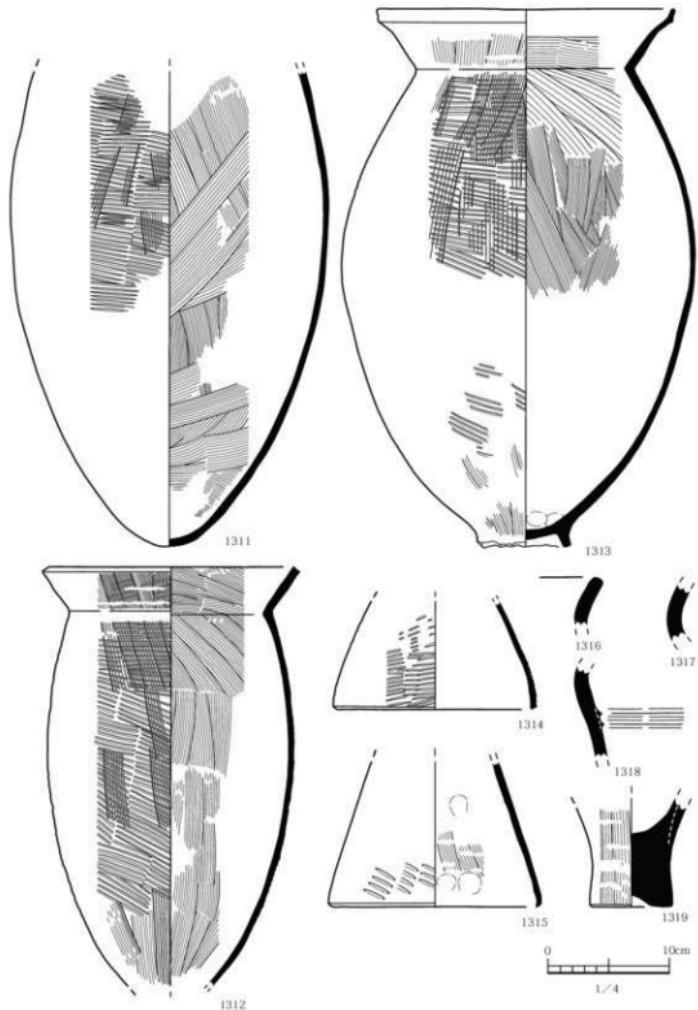


図 255 積穴建物 (SI42) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

- 7: 柱 a 層: オリーブ黒色(5Y3/1)土。3柱穴(No.1 ~ 3)とも、ほぼ同じ土質の土壤が詰まっている。粒子は細かい。ごく微量の焼土粒(2.5YR4/6)が混入している。
- 8: 床 a 層: 黒色(10YR2/1)土。1c 層を主な母材とし、3 層のブロック(直径 5 ~ 10cm)を含み床と同じ埋土。
- 9: 床 b 層: 黒色(10YR2/1)土。1c 層と 3 層が混濁。3 層の粒径は小さくなる。直径 2 ~ 3cm が中心。
- 10: 床 c 層: 黒色(10YR2/1)土。ほぼ黒色土である。炉 a 層: 赤黒色(2.5YR2/1)土。黒色土中に赤褐色(2.5YR4/6)焼土粒、ブロックと灰褐色(7.5YR5/2)ブロックが混入している

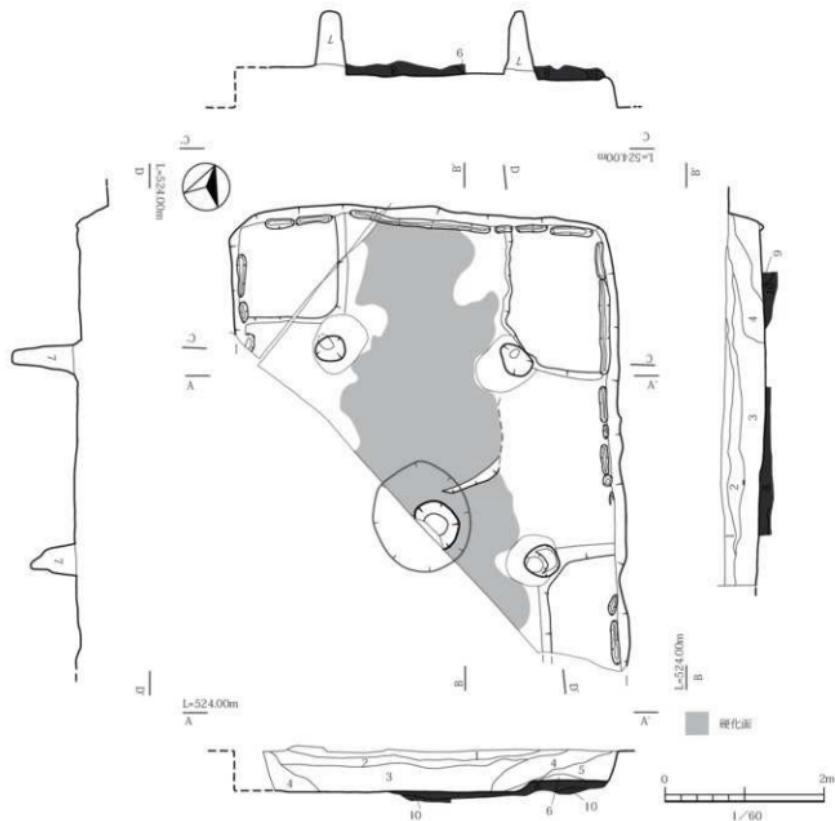


図 256 穴穴建物(SI43) 実測図

SI44

SI44 は、調査区 14 区、556 グリッドに位置し、5.3m × 1.5m が残存する竪穴建物である。検出面からの深さ 0.3m を測る。SI45 と SI46 に切られる。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。少量の炭化物が含まれるもの均一な黒色土である。自然堆積と考える。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR3/2）土。3 層のブロックと黒色土が混濁した土である。埋戻し土である。

SI45

SI45 は、調査区 14 区、560 グリッドに位置し、3.3m × 1.9m が残存する方形を呈する竪穴建物である。検出面からの深さ 0.3m を測り、ベッド状遺構をそなえている。SI44 を切る。

ベッド状遺構は北東隅または東側壁に沿って設置され、幅 1.5m、高さ 0.1m を測る。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。直径 1cm 未満の炭化物が少量ではあるが含まれる。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。直径 2 ~ 3mm



図 257 竪穴建物 (SI43) 遺物分布図

- 程度の焼土粒が含まれ、色がやや明るくなる。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。直径1～2cmの3層ブロックが混入。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。3層と1c層の混濁層である。埋め戻したような堆積。

SI46

SI46は、調査区14区、553グリッドに位置し、5m×2.3mが調査対象となった方形を呈する竪穴建物である。検出面からの深さ0.8mを測り、ベッド状遺構をそなえている。SI44を切る。

主柱穴は、1基を掘削し、直径0.2mを測る。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。黒色層と3層ブロック（直径1cm未満）の混濁層ではある。埋め戻し

- たものであろう。直径1cm未満の炭化物粒が少量。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/2）土。直径10cmを超える3層ブロックが多量に含まれる。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。直径5cm以内の3層ブロックが少量混入している。
- 4：埋7層：黒色（10YR2/1）土。黒色土が多く廃絶後周囲から1c層が流入。にぶい黄褐色（10YR4/3）の焼土が下位部に集中する。
- 5：埋10層：黒褐色（10YR3/2）土。5層のブロック（直径3～5cm）と黒色層の混濁層。
- 6：埋8層：黒褐色（10YR2/2）土。直径2cm以内の3層ブロックをやや含む。
- 7：埋9層：黒色（10YR2/1）土。黒色土にやや炭化物が混じる。
- 8：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。1cm未満の3層ブロックをわずかと1cm未満の焼土粒と炭化物

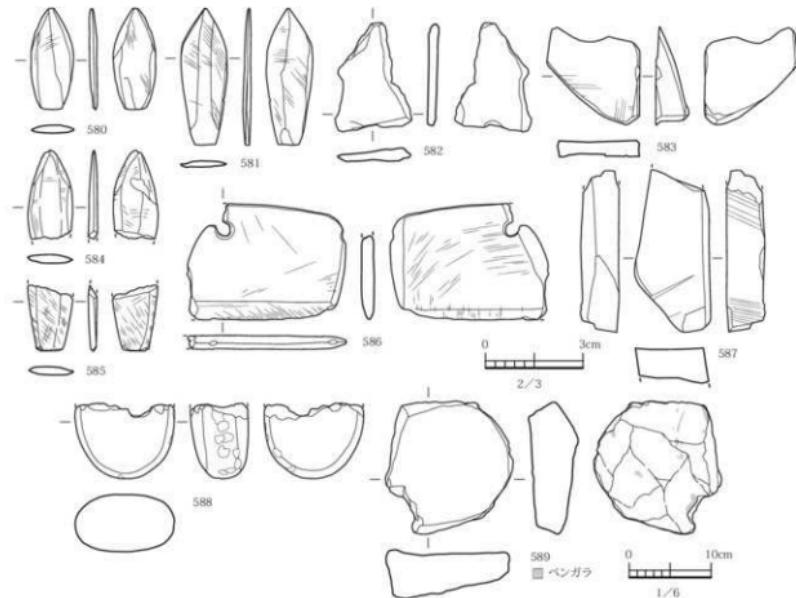


図258 竪穴建物（SI43）出土石器（RQ）実測図

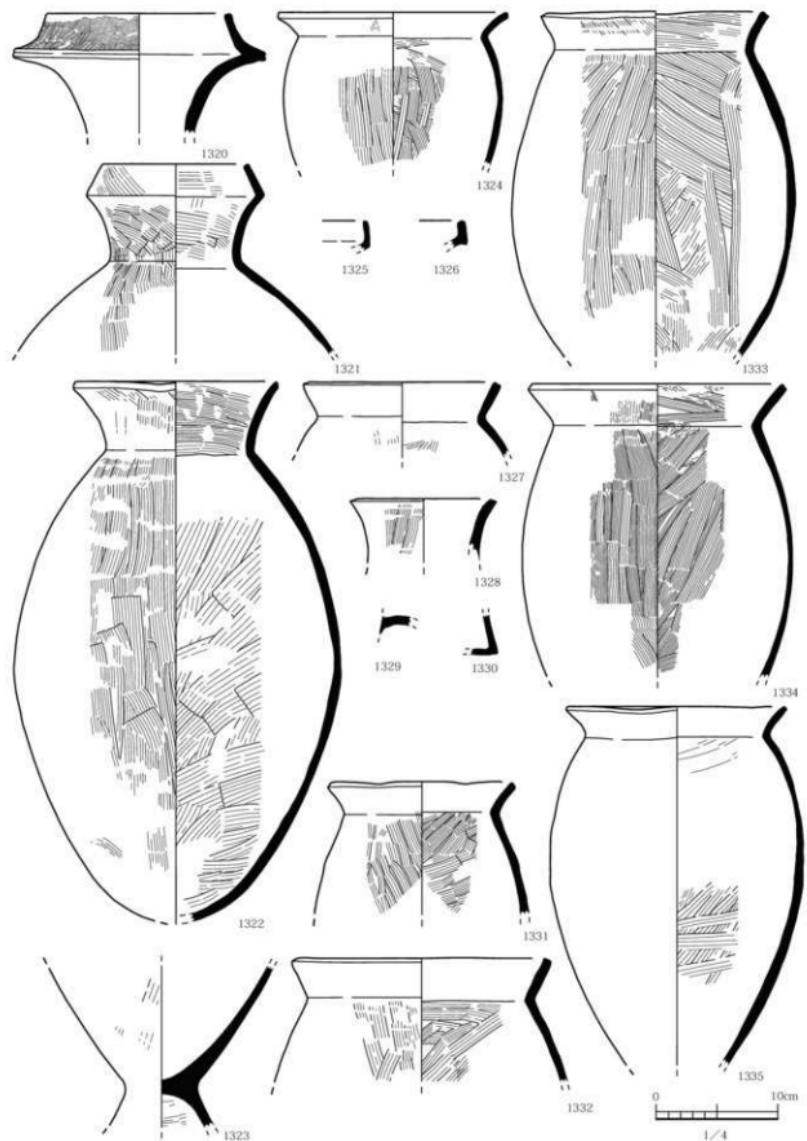


図 259 穹穴建物 (SI43) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

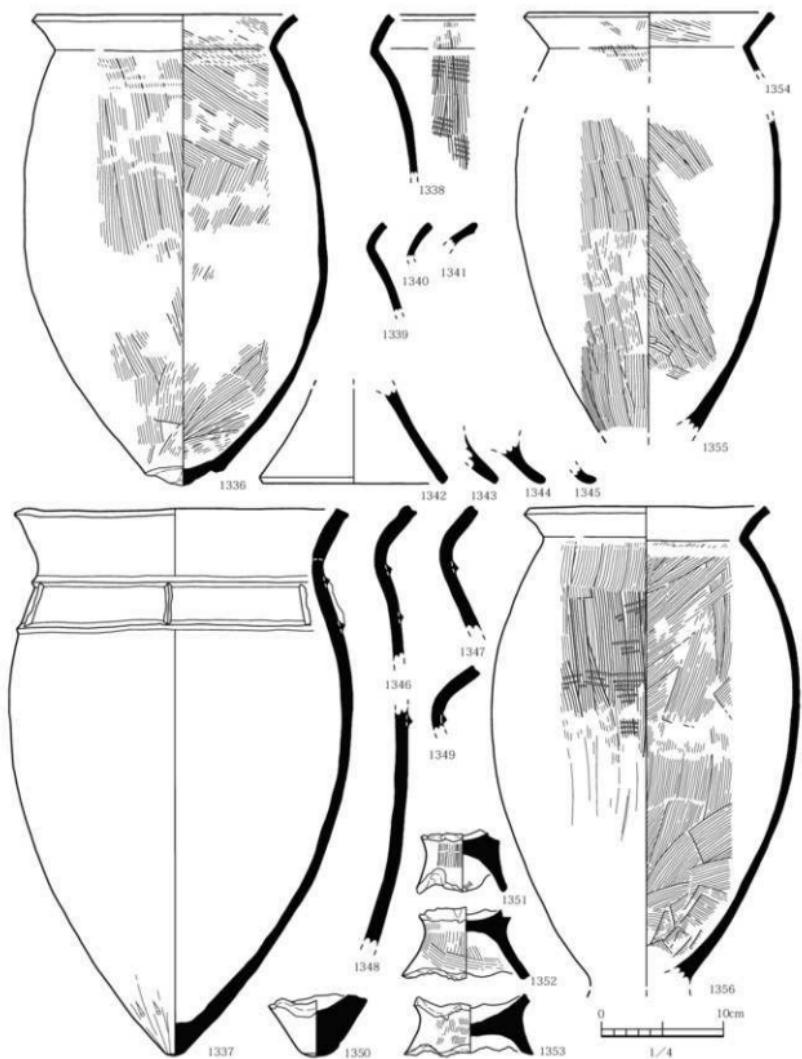


図 260 穹穴建物 (SI43) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

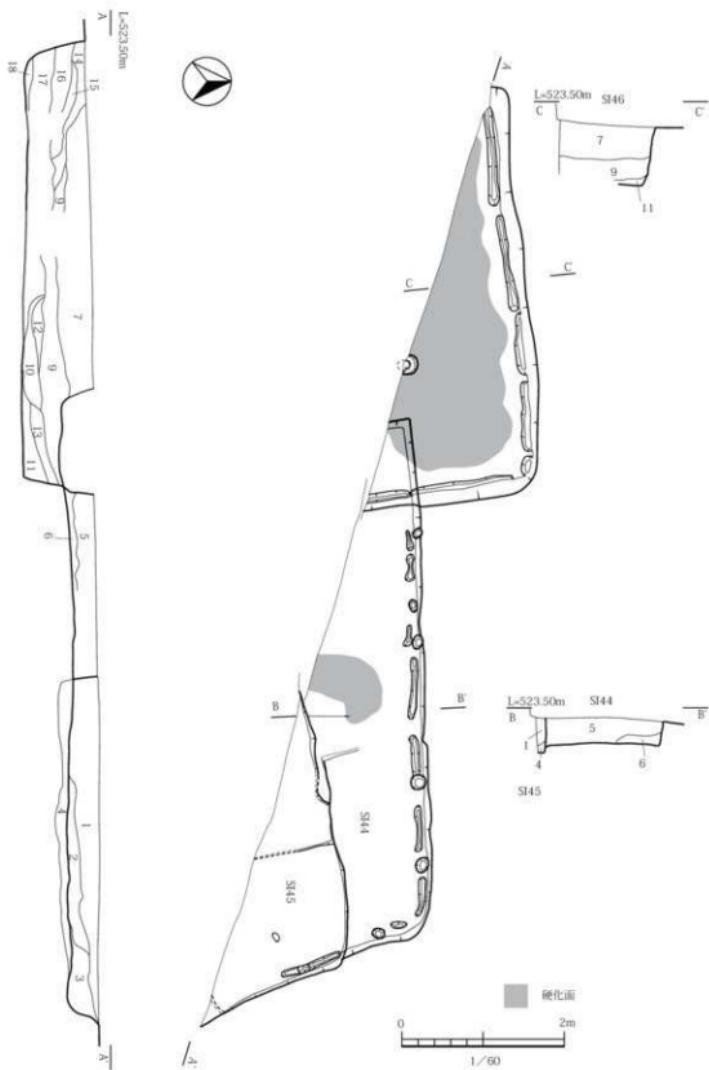


図 261 穂穴建物 (SI44・45・46) 実測図

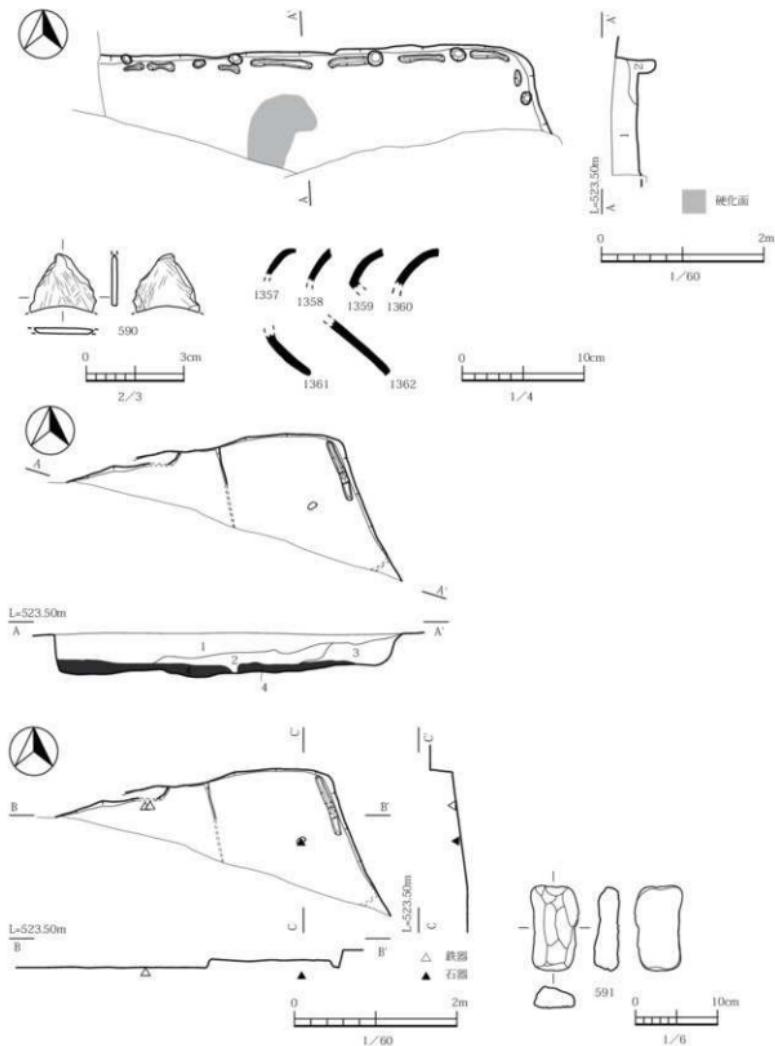


図 262 竪穴建物 (SI44) 実測図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 及び
竪穴建物 (SI45) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

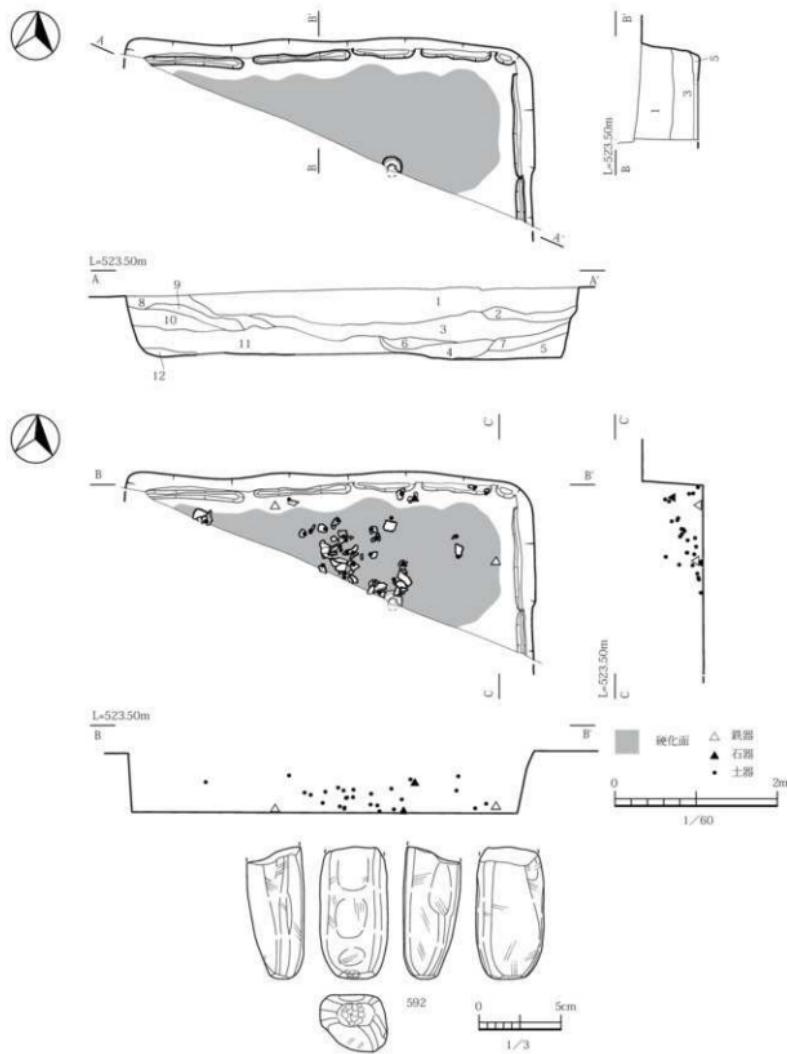


図 263 穹穴建物 (SI46) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

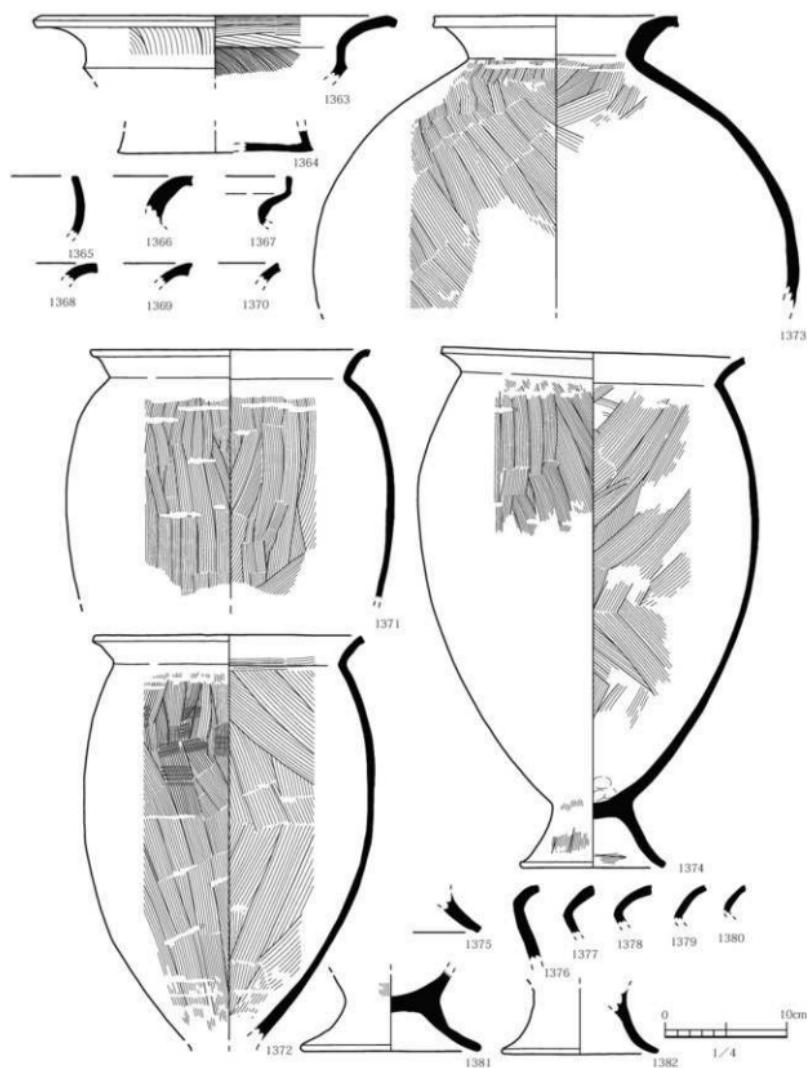


図 264 穹穴建物 (SI46) 出土土器 (RP) 実測図

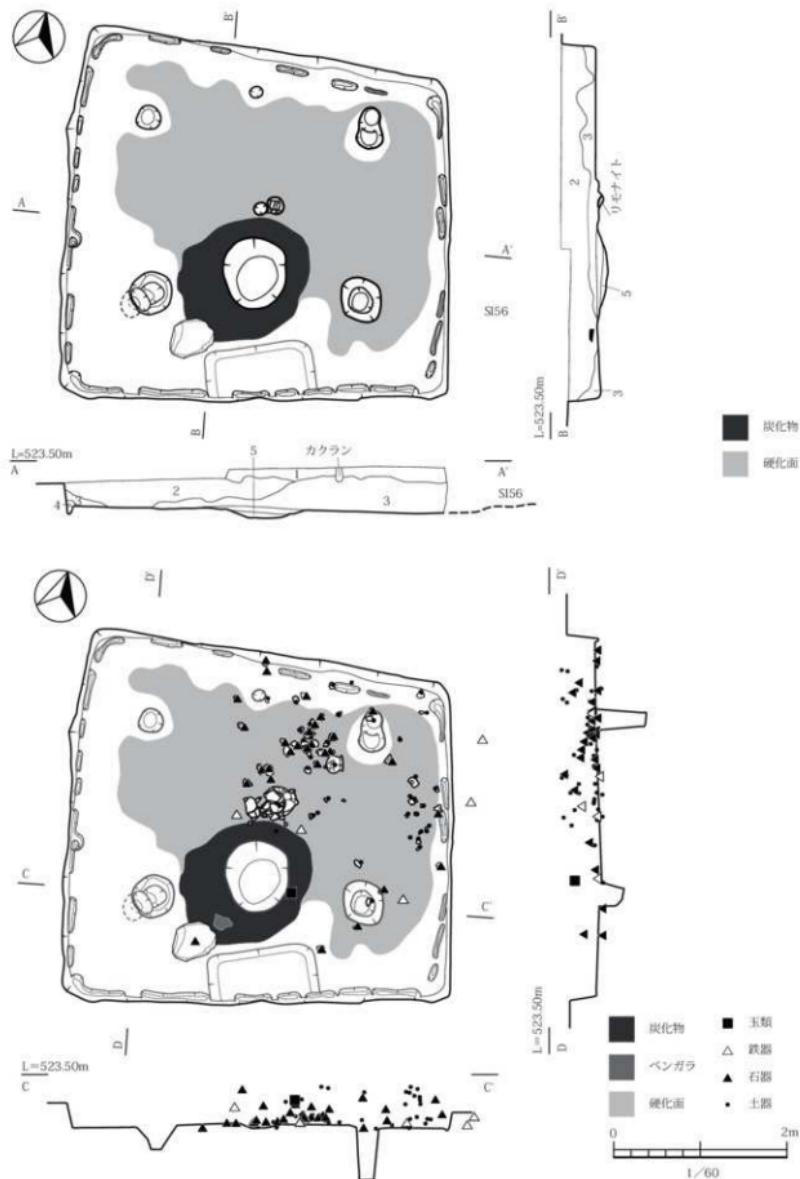


図 265 穂穴建物 (SI47) 実測図・遺物分布図

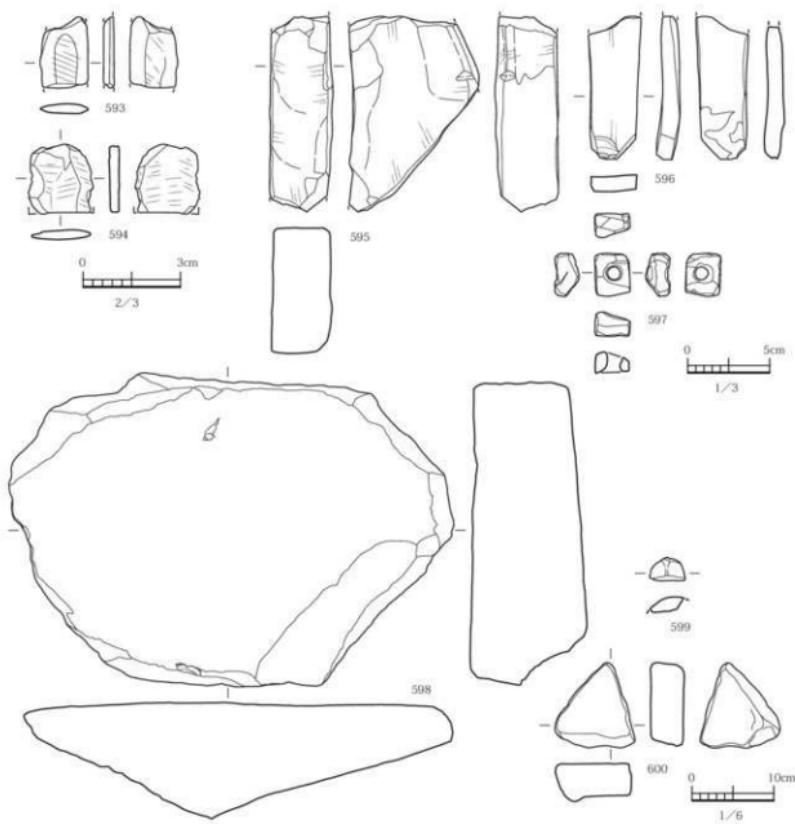


図 266 穫穴建物 (SI47) 出土石器 (RQ) 実測図

- を少量含む。
- 9: 埋 5 層: 黒褐色 (10YR3/2) 土。褐色 (7.5YR4/6) の焼土を多量に含む。
- 10: 埋 6 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3cm 大の 3 層ブロックを少量含み焼土粒、炭化物粒もやや含む。
- 11: 埋 10 層: 黒色 (10YR3/2) 土。
- 12: 埋 11 層: 黒色 (10YR2/1) 土。1cm 未満の 5 層ブロックと炭化物をやや含む。

SI47

SI47 は、調査区 14 区、562 グリッドに位置し、4.4m × 4.1m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、K ピット、ベツ

ド状遺構をそなえている。SI53 を切る。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.7m を測る。南列の主柱 2 基は抜き取られ、抜取り痕が検出されている。なお、北列の主柱 2 基も抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。SI43 と同様、SI47 北列の「主柱穴」周囲の床面では硬化面が検出されず遺物も分布しない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。柱穴抜取り痕の埋土は、黒褐色 (10YR2/3) 土で、直径 1cm 以下の 3 層ブロックを含み、1cm 以下の炭化物、焼土粒を含んでいた。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.7m、深さ 0.2m のボウル形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していることが、完掘状況写真から判明

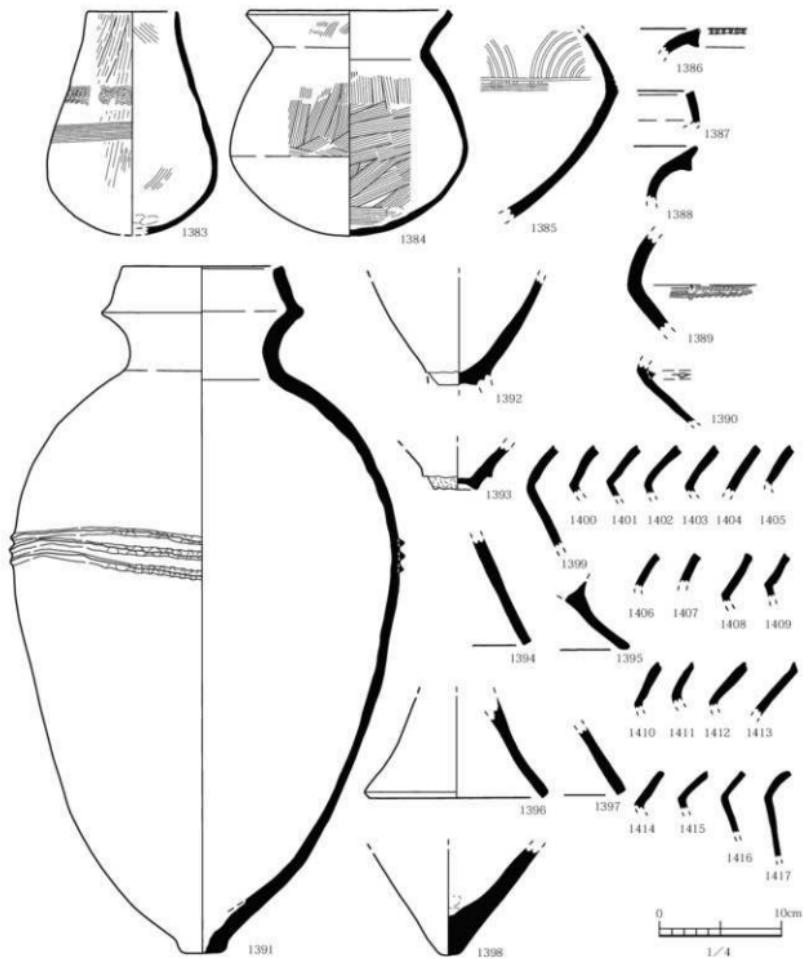


図 267 穂穴建物 (SI47) 出土土器 (RP) 実測図

した。周堤の高さは 5cm 程度、なだらかに床面へと続いている。炉の周囲には炭化物が検出され、炉の南西には炭化物の上位で石皿が出土した。すなわち、この石皿は炉内から炭化物が掘き出され、炉の周間に撒かれた後に、当該位置に据え置かれたのである。

K ピットは、検出されていない。なお、土層断面図には床面が南側壁際で 0.1m 程低くなった状況が記録され、完掘写真には炉と南側壁との間に $1.2 \times 0.6m$

の方形の窪みがあることが記録されている。これは K ピットであり、その範囲を写真から見取り、平面実測図中にスミ色で付記した。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、検出されていない。なお、完掘写真から、少なくとも南西隅に幅 0.9m、高さ 0.1m 程のベッド状遺構があることが判明した。他の三隅にも同規模のベッド状遺構を認めることができるが、低平で

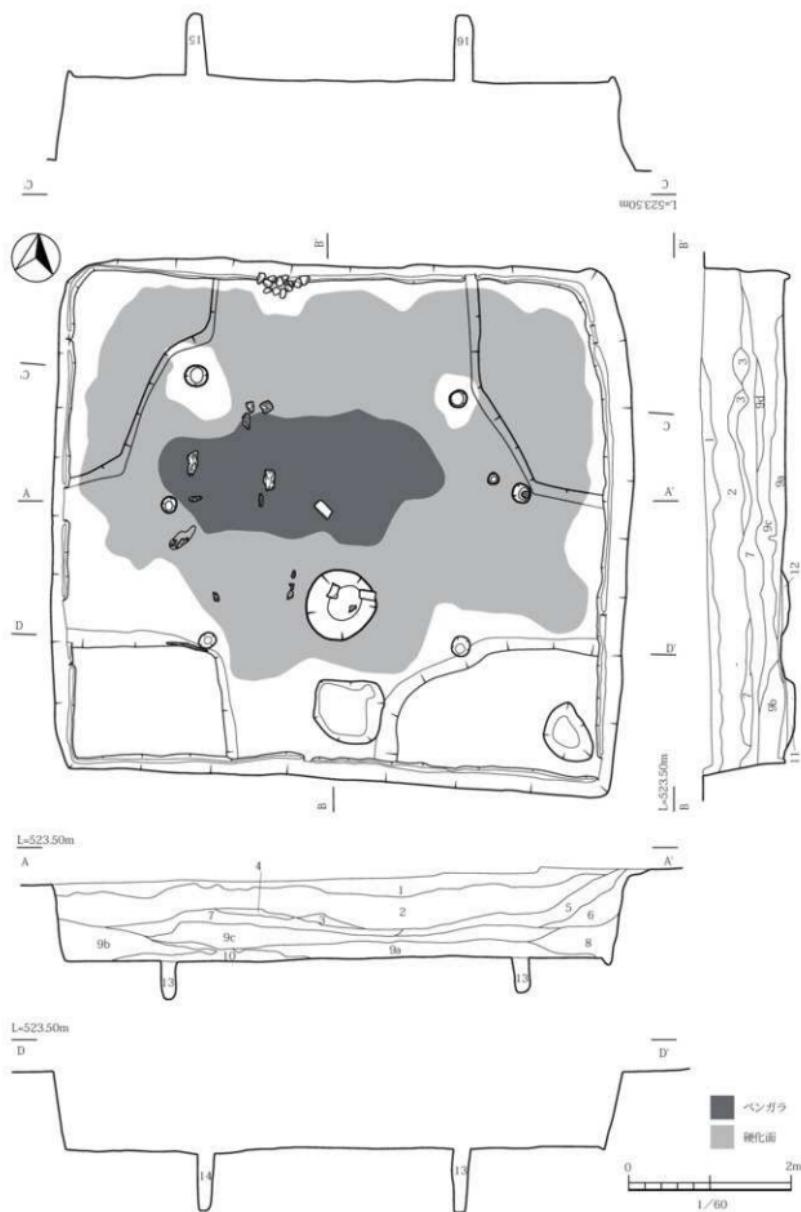


図 268 豊穴建物 (SI48) 実測図

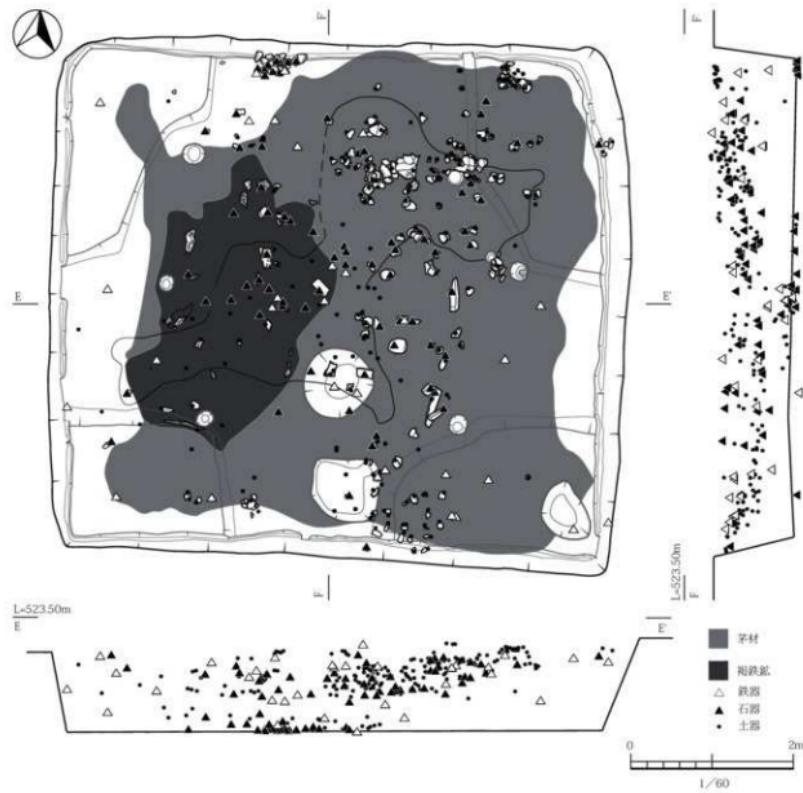


図 269 積穴建物 (SI48) 遺物分布図

あるためその範囲を詳細に把握することができない。

硬化面は、内陣、外陣の北部と東側で検出された。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1: 埋 1 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。
- 2: 埋 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。直径 3cm 以下の 3 層ブロックを多く含む。
- 3: 埋 3 層: 黒色 (10YR2/1) 土。3 層ブロックを直径 1cm 以下で含む。炭化物 (5mm 以下) も含む。
- 4: 埋 4 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。
- 5: 炉 a 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。直径 2cm 以下の 3 層ブロックを含む。炭化物を多く含む。

SI48

SI48 は、調査区 14 区、554 グリッドに位置し、7.1m × 6.3m の方形を呈する 4 本柱建て積穴建物である。検出面からの深さ 1.0m を測り、炉、K ピット、ベッド状構造をそなえている。SI50 を切る。

SI48 は、鍛冶遺構である。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.2m、深さ 0.8m を測る。各主柱穴は、北側壁または南側壁から 1.5m 程内側に配されている。なお、SI48 の主柱 4 基は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。SI43 と同様、SI48 の「主柱穴」周囲の床面では硬化面が検出されず遺物も分布しない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。柱穴抜取り痕の埋土はリモナイト、炭化物を含んでいたが、いずれも積穴建物廃後の堆積層に含まれる成分である。また、SI48 では

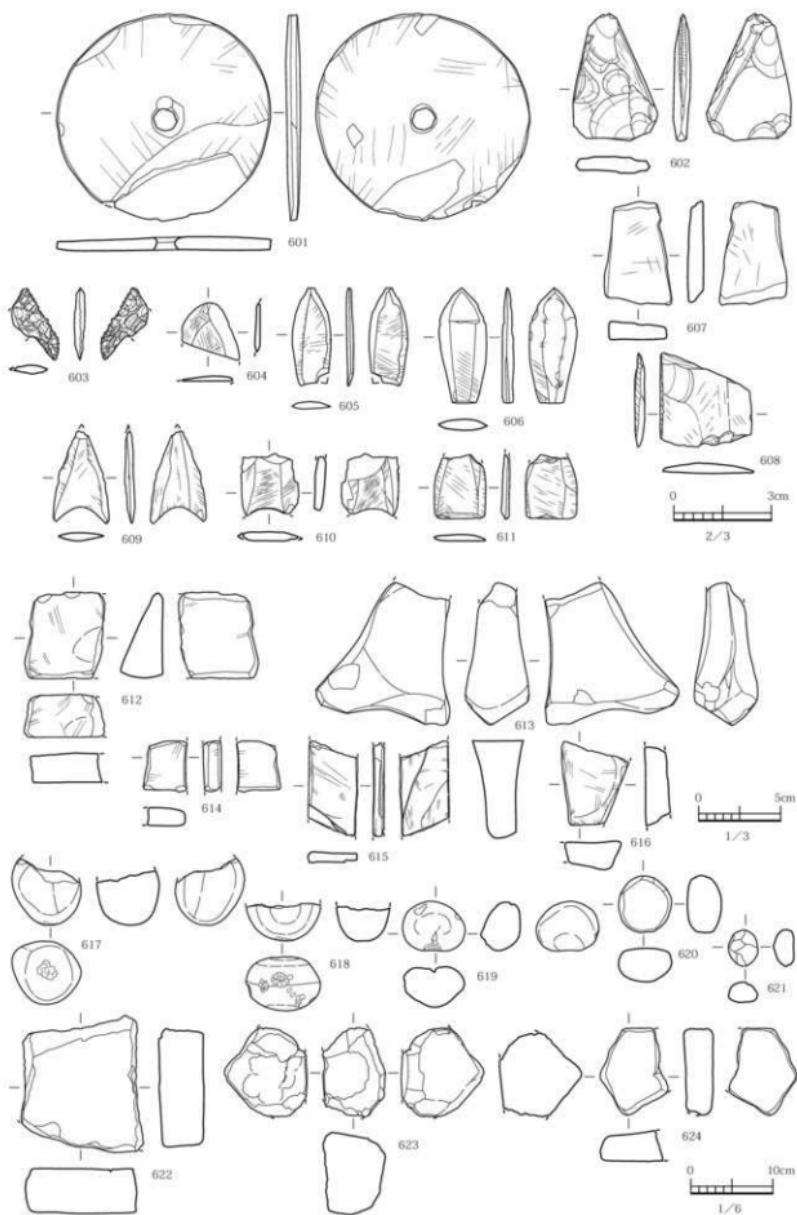


図 270 穴穴建物 (SI48) 出土石器 (RQ) 実測図

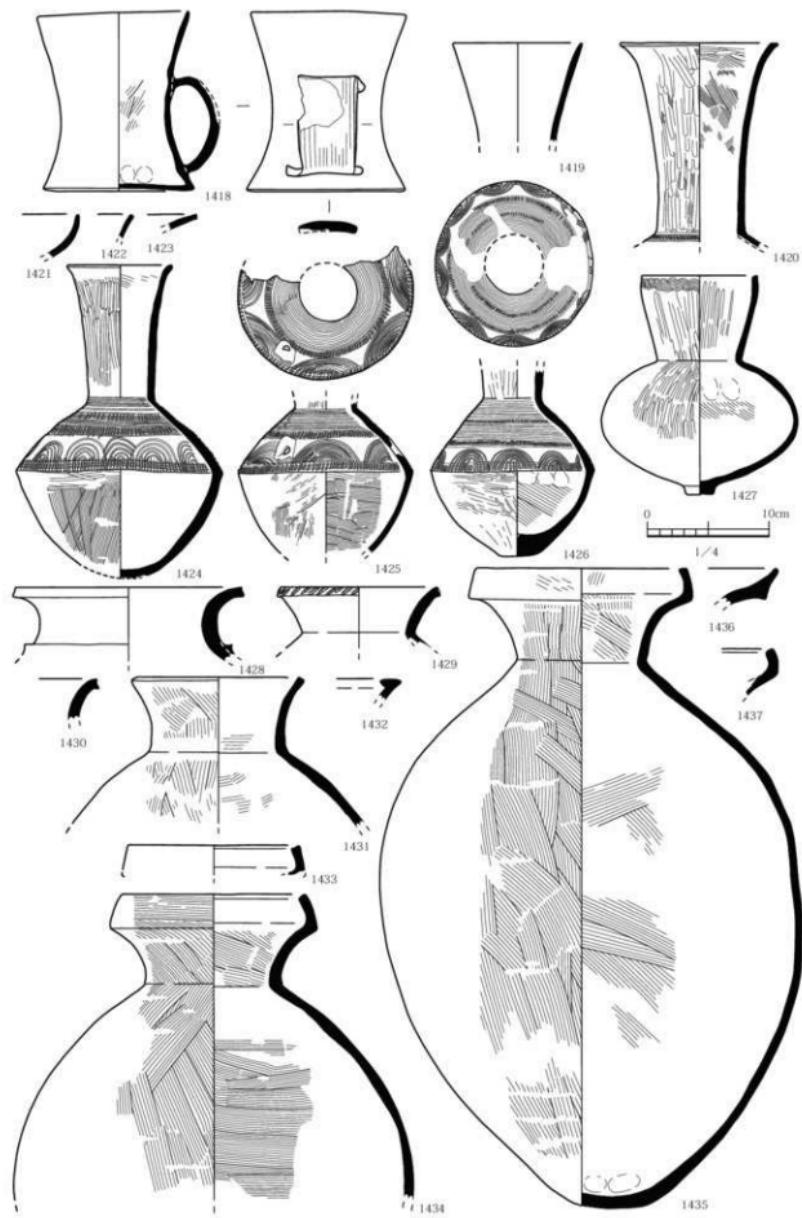


図 271 穹穴建物 (SI48) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

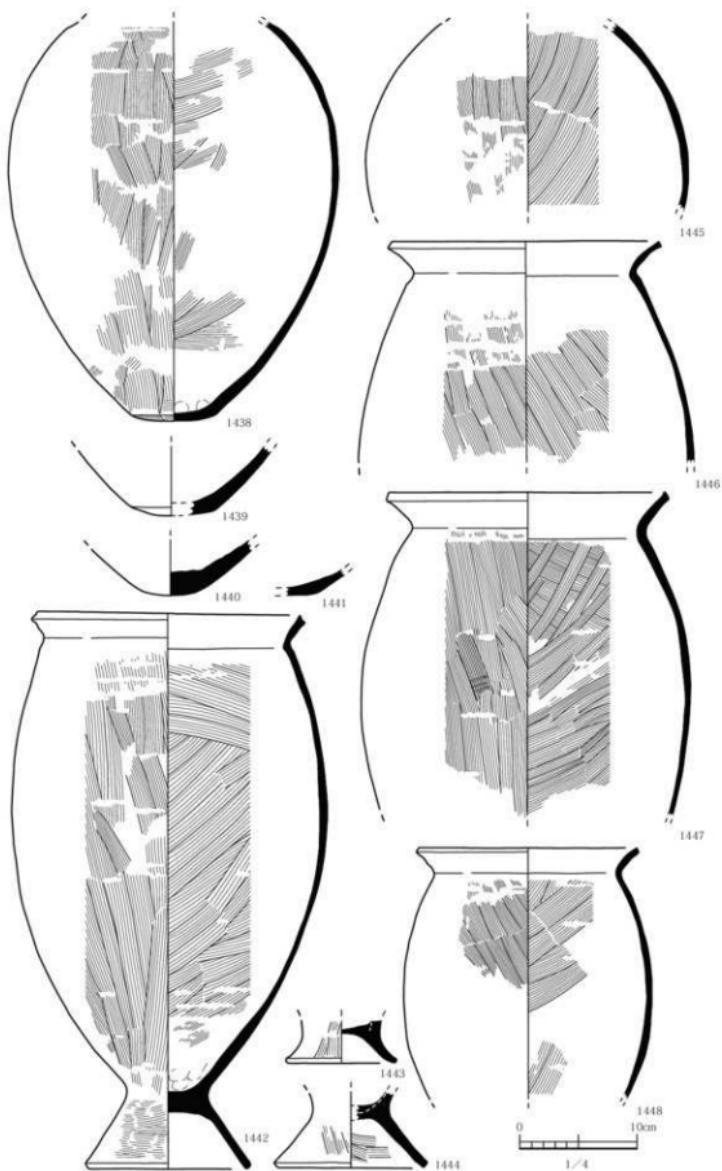


図 272 穹穴建物 (SI48) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

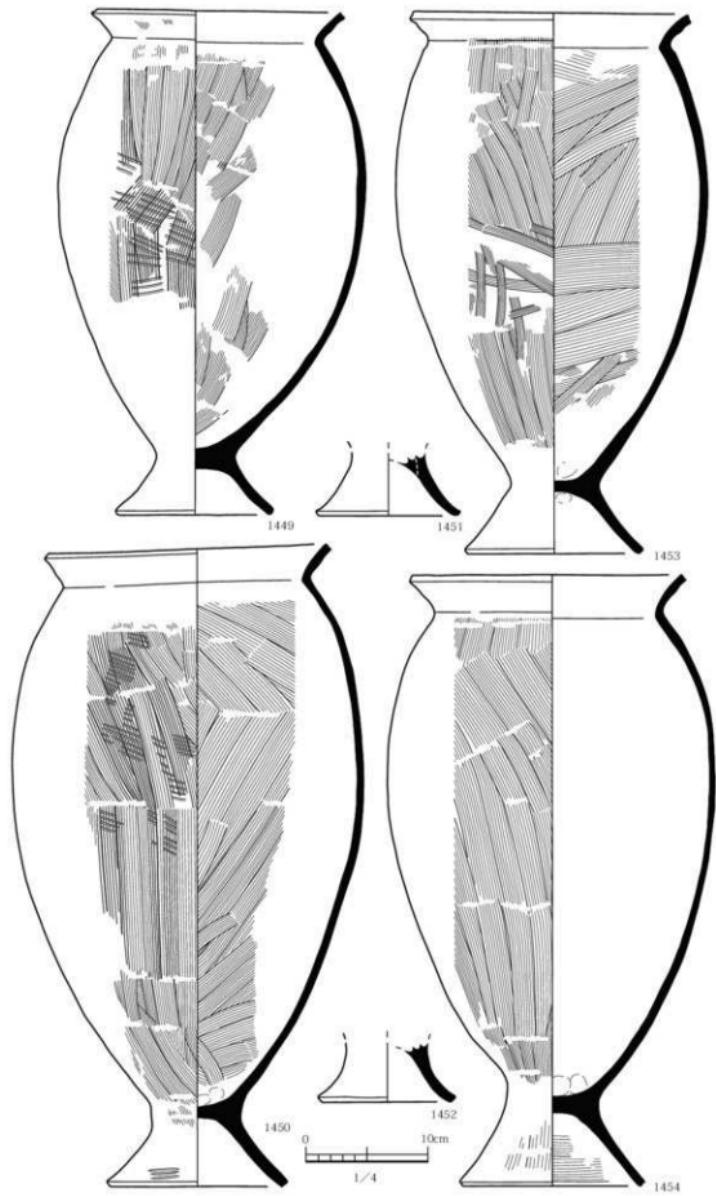


図 273 穹穴建物 (SI48) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

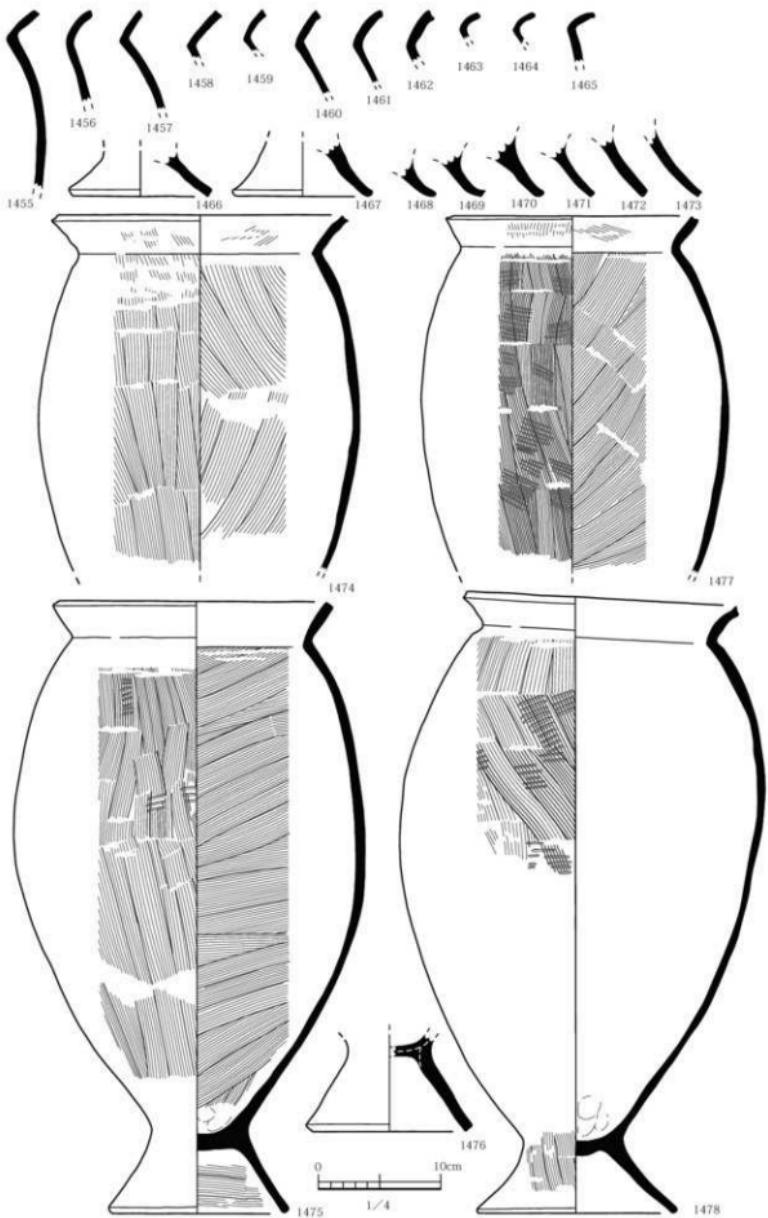


図 274 壁穴建物 (SI48) 出土土器 (RP) 実測図 (4)

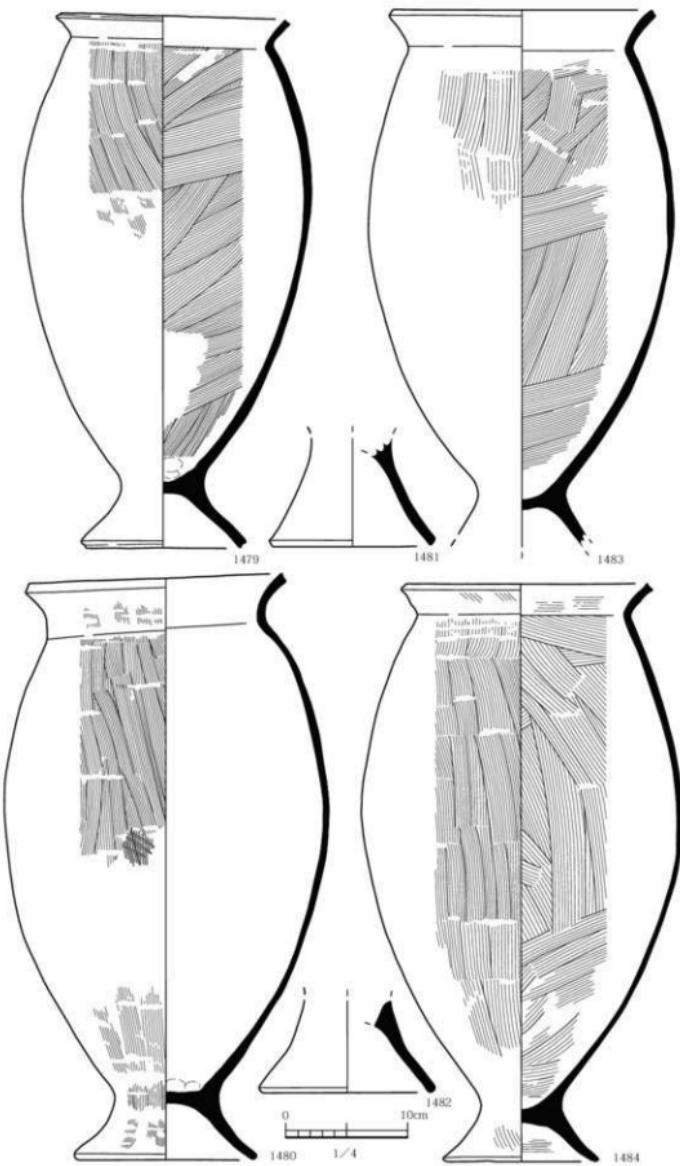


図 275 積穴建物 (SI48) 出土土器 (RP) 実測図 (5)

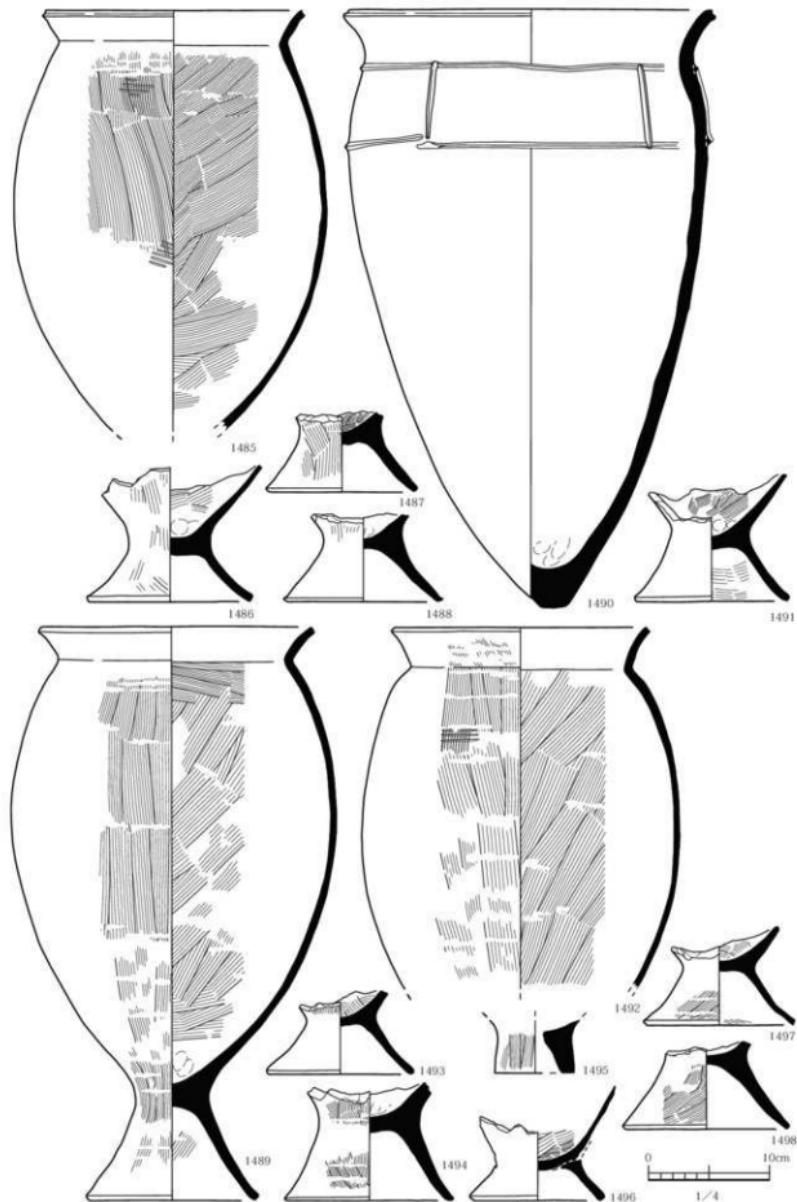


図 276 穹穴建物 (SI48) 出土土器 (RP) 実測図 (6)

建物支柱 1 対 2 基が検出されている。これらの支柱は北西隅ベッド状遺構の南東角、北東隅ベッド状遺構の南西角に配され、直径 0.2m、深さ 0.4m を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.9m、深さ 0.1m の皿形を呈している。炉には幅 30cm、高さ 5cm 程の周堤が付設していることが、B-B' 土層断面図には記録されている。なお、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。完掘状況写真には、炉底には 12：炉 a 層が確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。

K ピットは、0.8m 四方、深さ 20cm 程の方形土壌が南側壁中央に位置している。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は竪穴建物の四隅に設置され、幅 1.4m を測る。南列のベッド状遺構は東西に長辺を配し、北列のベッド状遺構は南北に長辺を配している。ベッド状遺構の高さは記録されていないが、完掘写真からは南列のベッド状遺構は 10cm 程度、北列は数 cm の低いベッド状遺構であることが判明する。

北側壁の中央部では、拳大の礫 12 点が側壁際に寄せた状態で据え置かれていた。この礫群の出土地点は、炉と K ピットの主軸と北西隅ベッド状遺構との間である。

硬化面は、内陣、北半部の外陣、北列のベッド状遺構上面で検出された。硬化面上では、内陣北半部でベンガラ、内陣西半部で褐鉄鉱が検出されている。使用時完掘状況ベンガラ範囲写真には、ベンガラと褐鉄鉱は内陣北西部で共存しており、混在した状態で出土したことが記録されている。リモナイト範囲（断面）写真からはベンガラ、褐鉄鉱とも粉化した状態であることが判明する。ベンガラ、褐鉄鉱の周囲には茅蘿材と炭化物が散在していた。

SI48 では、床面上で鉄器が多数検出され、台石、敲石、砥石などの石器もセットで検出されている。このことから、SI48 を鍛冶遺構と判断できる。

なお、ベンガラと褐鉄鉱の検出と鍛冶遺構と判断できることから、SI48 はベンガラ生産と鉄器生産の双方がおこなわれた遺構となる。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。1mm ~ 2mm

の炭化物粒が少量含まれる。

- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。少量の炭化物と焼土が少量ではあるが含まれる。ブロックの混入がほとんどなく埋め戻しによるものではない。
- 3：埋 3 層：黒色（10YR2/1）土。褐色の焼土を多量に含む。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物層となる。理 3 層と一連の層なのかもしれない。何かしら燃焼を伴う行為がなされている。
- 5：埋 5 層：暗褐色（10YR3/2）土。直径 5cm を超える 3 層ブロックが大量に混入。
- 6：埋 6 層：黒色（10YR2/1）土。1mm ~ 2mm 程度の細い炭化物粒が少量であるが認められる。
- 7：埋 7 層：黒褐色（10YR3/1）土。5mm 程度の炭化物粒と焼土が混濁した層。
- 8：埋 8 層：黒色（10YR2/1）土。1mm ~ 2mm 程度の細い炭化物粒が少量であるが認められる。

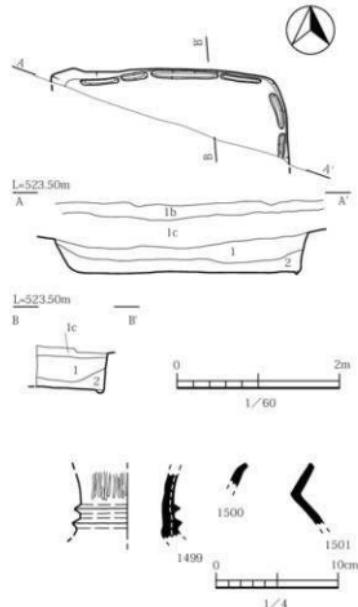


図 277 竪穴建物 (SI49) 実測図・出土土器 (RP) 実測図

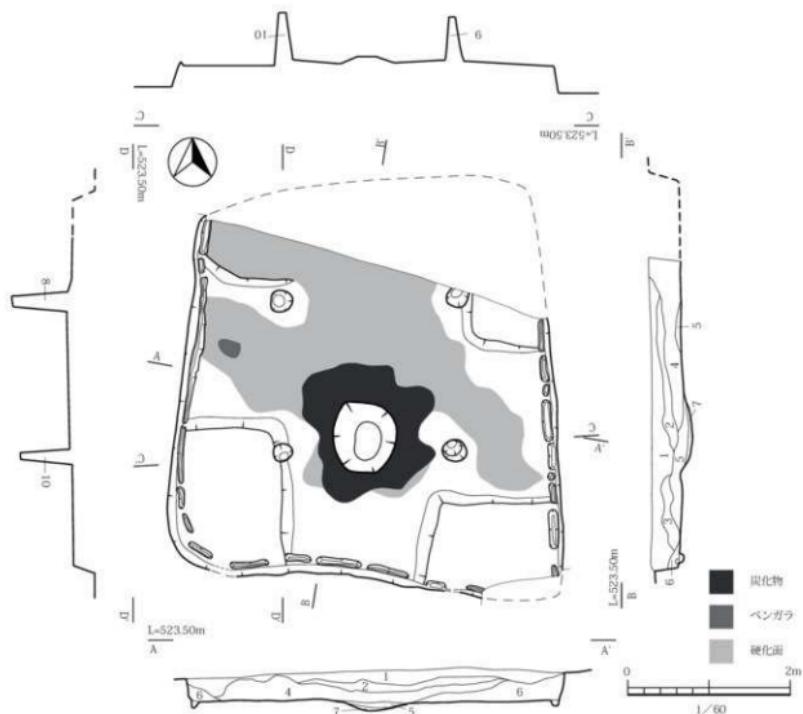


図 278 穹穴建物 (SI50) 実測図

- 度の炭化物粒が少量含まれる。
- 9: 9 層: a: 黒色 (10YR2/1) 土。赤褐色 (2.5YR4/6) の鉄分の硬い粒子を多量に含む。炭化物も多く含む。b: 黒褐色 (10YR2/2) 土。焼土粒、炭化物粒を含む。c: 黒色 (10YR2/1) 土。焼土、炭化物を多く含む。d: 9c 層中に焼土と炭化物が集中する。
- 10: 埋 10 層: 明褐色 (7.5YR5/8) 土。粉化した褐鉄鉱。
- 11: 埋 11 層: 黒色 (10YR2/1) 土。
- 12: 炉 a 層: 黑褐色 (5YR2/1) 土。橙色 (5YR7/6) の焼土、炭化物を含み赤褐色の鉄分の粒子を多く含む。
- 13: 柱 a 層: 暗赤褐色 (5YR3/2) 土。明褐色 (7.5YR5/8) 褐鉄鉱を多量に含む。
- 14: 柱 b 層: 黒色 (10YR2/1) 土。15 に似るが明褐色の粒がやや大きい。
- 15: 柱 c 層: 黒色 (10YR2/1) 土。明褐色 (7.5YR5/8) 褐鉄鉱の粒 1 ~ 2mm と炭化物の粒子を多く含む。
- 16: 柱 d 層: 黒色 (10YR2/1) 土。

SI49

SI49 は、調査区 14 区、539 グリッドに位置し、方形を呈する竪穴建物で 2.8m × 1.2m の範囲が発掘された。検出面からの深さ 0.5m を測る。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋 1 層: 黑褐色 (10YR2/2) 土。3 層を直径 1cm 以下のブロックで含む。炭化物、焼土粒をやや含む。
- 2: 埋 2 層: 黑褐色 (10YR2/2) 土。3 層を直径 5cm 以下のブロックで多く含む。

SI50

SI50 は、調査区 14 区、552 グリッドに位置し、4.7m × 3.9m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.4m を測り、炉、K ピット、ベツ

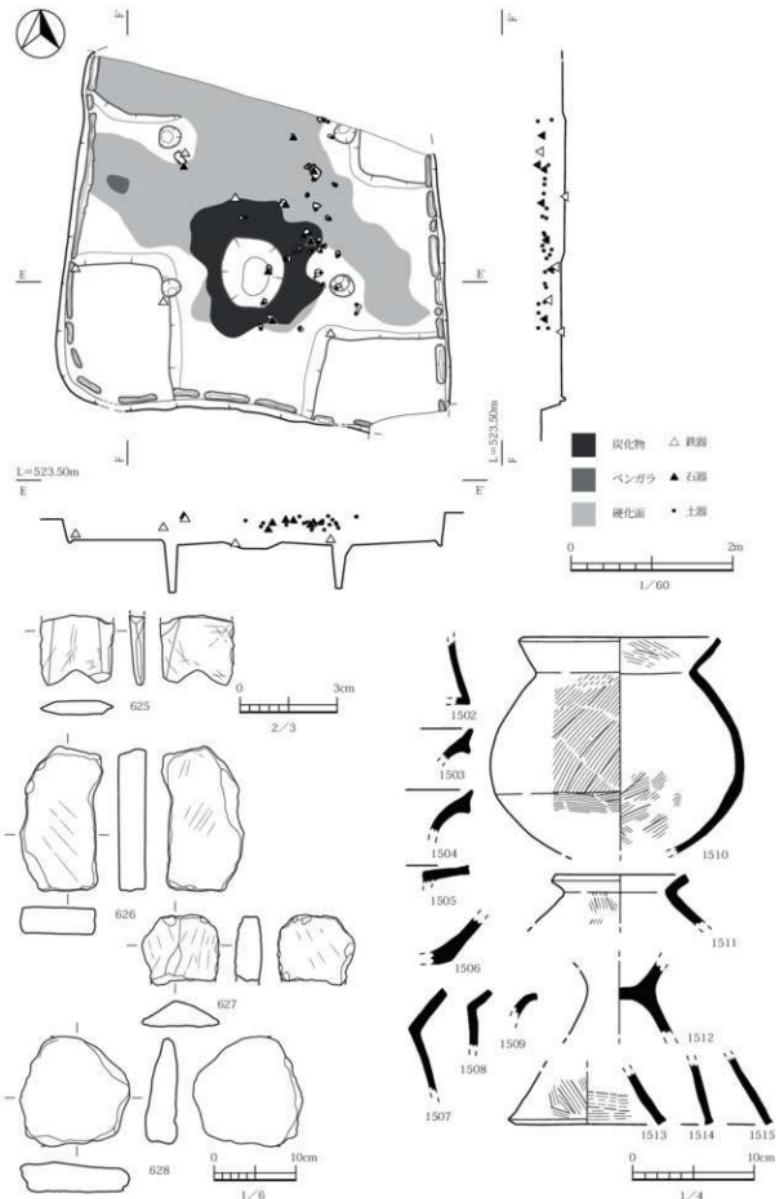


図 279 穹穴建物 (S150) 遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

ド状遺構をそなえている。SI48 に切られる。

主柱穴は、4 基を掘削し、直徑 0.3m、深さ 0.6m を測る。なお、SI50 の主柱 4 基は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。SI43 と同様、SI50 の「主柱穴」周囲の床面では硬化面が検出されず遺物も分布しない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。柱穴抜取り痕の埋土は炭化物、焼土粒を含んでいたが、炭化物は豎穴建物廃棄後の堆積層に含まれていた。

れる成分である。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直徑 0.8m、深さ 0.1m のボウル形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底には 7：炉 a 層が確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。炉の周囲では炭化物が検出された。

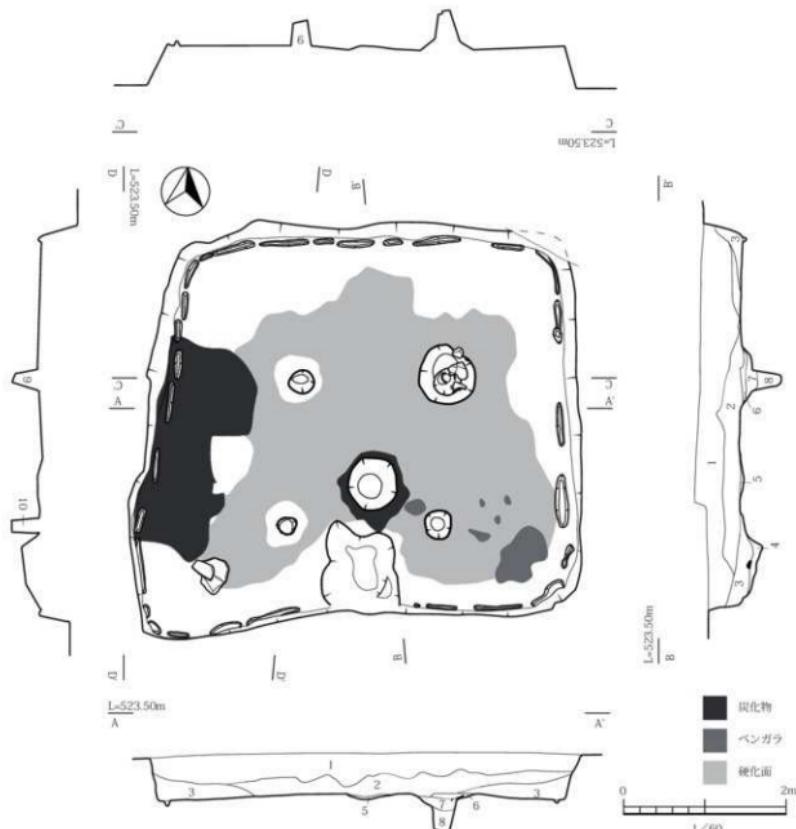


図 280 豊穴建物 (SI51) 実測図

Kピットは、検出していない。なお、炉の南側から南側壁中央にかけて、 1.0×1.0 m、深さ数cmの方形土壤1基があることが判明する。この土壤はKピットである可能性が極めて高く、その場合には炉とKピットは南北軸が一致することとなる。

ベッド状遺構は、竪穴建物の四隅に設置され、幅1.2m、高さ0.1mを測る。北東隅と南西隅のベッド状遺構は南北に長辺をとり、北西隅と南東隅のベッド状遺構は東西に長辺をとる。

硬化面は、内陣、東西北の外陣で検出されている。西外陣ではベンガラが検出された。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。ほとんどブロック

を含まず、炭化物が少量含まれる。

2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。土質自体は1と同じ。直径1cm程度以上の炭化物を多く含む。土器が集中するところが南東にあり、捨て場。

3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。直径2～3cmの3層ブロックをやや多く含む。埋め戻したような堆積状況。

4：埋4層：黒褐色（10YR3/1）土。直径1～5cm程度の3層ブロックを多量に含む。本層の土量及び凹凸のある堆積場強化から、埋戻しがなされていることがわかる。

5：埋5層：黒褐色（10YR2/2）土。直径1cm程度の3層ブロックを少量含む。

6：埋6層：黒褐色（10YR2/2）土。少量の3層ブロック

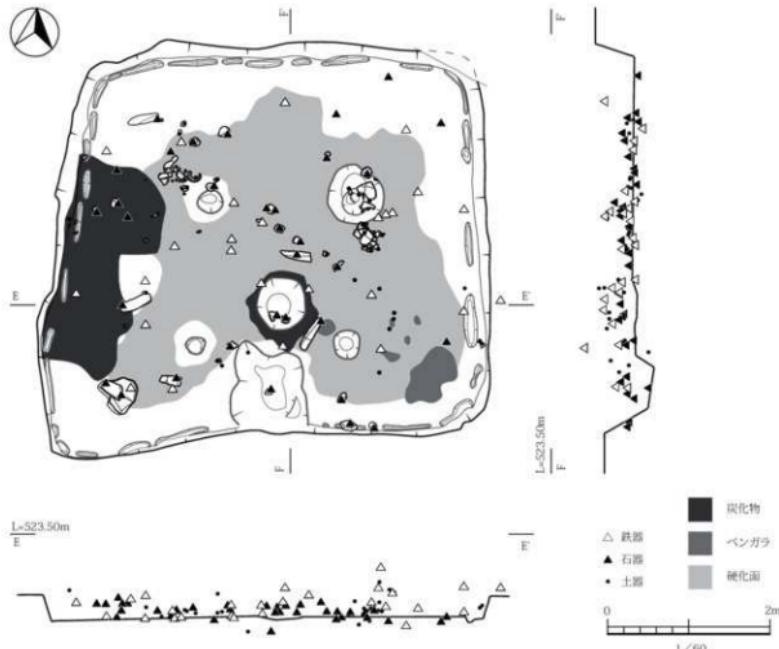


図281 竪穴建物（S151）遺物分布図

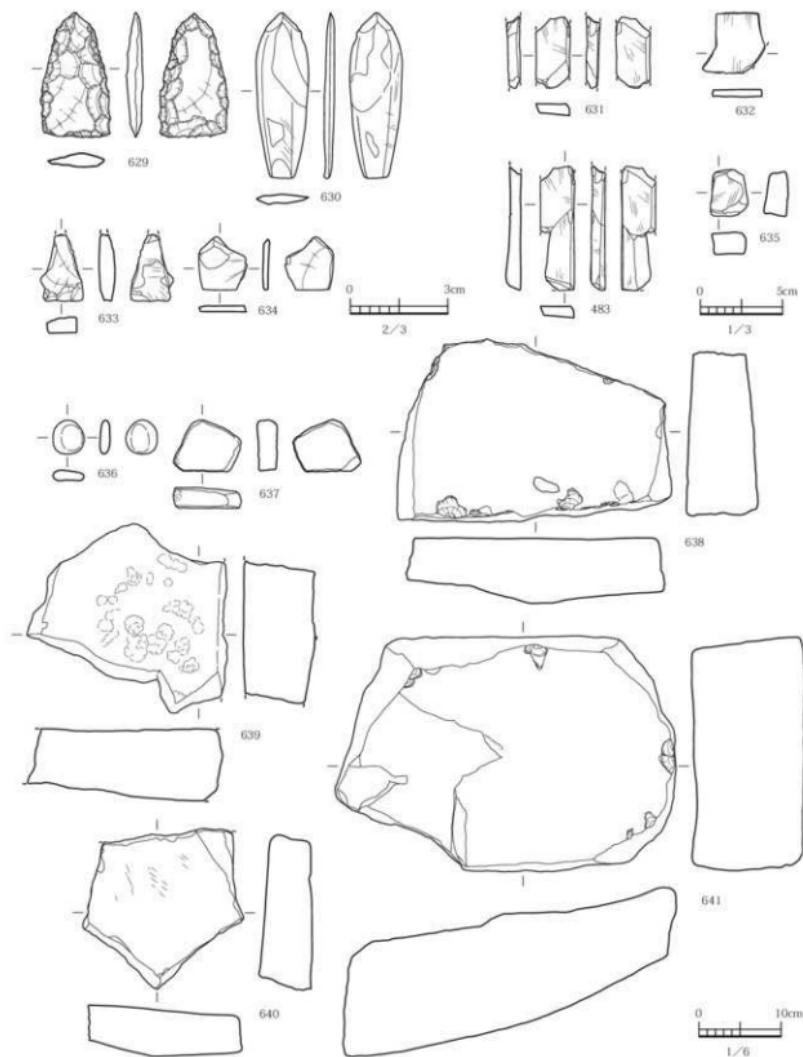


图 282 竖穴建物 (S151) 出土石器 (RQ) 実測図

- クが含まれる。
- 7: 炉 a 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物を多く含む。
 - 8: 柱 b 層: 黒色 (10YR2/1) 土。5cm 以下の炭化物と焼土粒をわずかに含む。
 - 9: 柱 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。5cm 程度の炭化物と焼土粒をやや含む。北東主柱穴の埋土。
 - 10: 柱 c 層: 黒色 (10YR2/1) 土。焼土粒をわずかに含む。
 - 11: 柱 d 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物粒、焼土粒をやや含む。

SI51

SI51 は、調査区 14 区、548 グリッドに位置し、5.3m × 4.8m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、K ピット、ベッタ状遺構、張出し部をそなえている。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.5m を測る。なお、北東主柱、南東主柱は抜き取られ、北東主柱の抜取り痕内からは土器、礫が検出された。なお、西列の主柱 2 基も抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。SI43 と同様、SI51 西列の「主

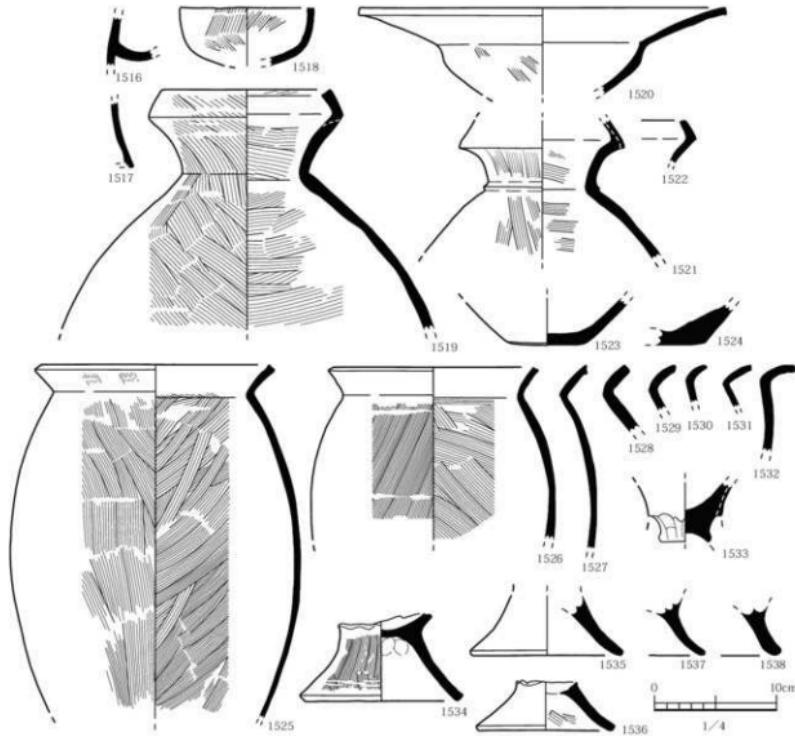


図 283 竪穴建物 (SI51) 出土土器 (RP) 実測図

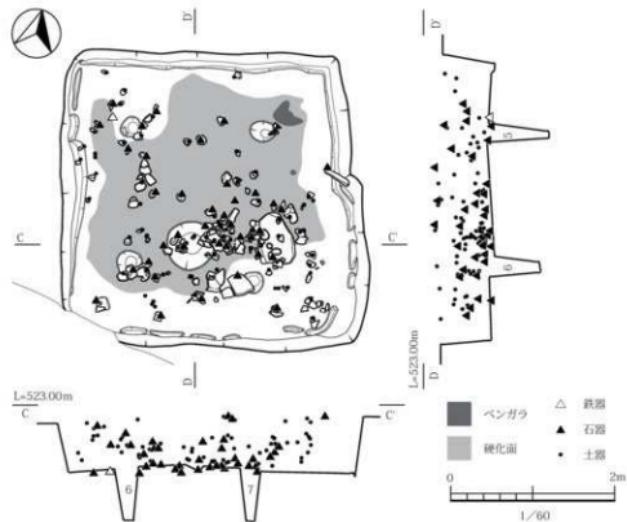
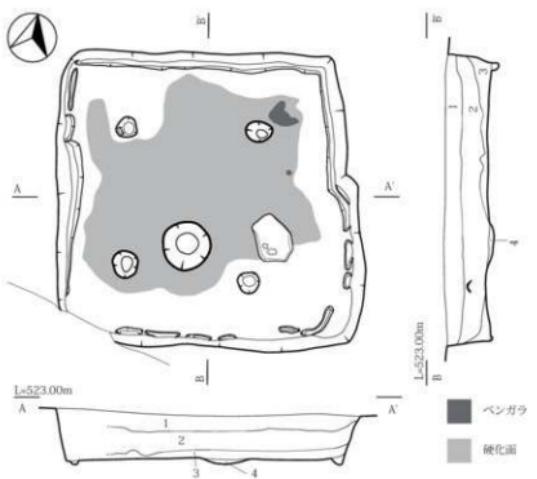


図 284 壁穴建物 (SI52) 実測図・遺物分布図

柱穴」周囲の床面では硬化面が検出されず遺物も分布しない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.6m、深さ 0.1m の皿形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態はボウル形または漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底には 5 : 炉 a 層が確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。炉の周囲では、炭化物が検出された。

K ピットは、0.8m × 1.0m、深さ 0.3m の方形土壙が南側壁中央に位置している。なお、その北端には支柱穴 2 基が付設されていることが、完掘状況写真から判明した。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、検出されていない。なお、幅 0.8m、高さ数 cm を測るベッド状遺構が竪穴建物の四隅に設置されていることが、完掘状況写真には記録されている。SI51 平面実測図には、北東隅、北西隅、南西隅に硬化面が検出されていないことが記録されているが、この L 字形を呈した硬化面がない範囲がベッド状遺構である、と考えてよい。南東隅のベッド状遺構は、南西隅ベッド状遺構を南北主軸に対し反転させた形をとっている。南東隅ベッド状遺構上面では、ベンガラが検出された。

張出し部は、西側壁南半部に設けられている。

硬化面は、内陣、外陣の床面の全域で検出されが、ベッド状遺構上面では検出されていない。炉周囲とは別に、外陣の西部分では炭化物が検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。長さ 5 ~ 10mm 程度の炭化物が認められるが、少量。3 層のブロックは少ない。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR3/1）土。炭化物、焼土とともに埋 1 層より多くなる。直径 5cm 程度の 3 層のブロックが多くなる。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR3/2）土。1 c 層と 3 層の細かいブロックの混潤層。
- 4：貯藏穴土：黒褐色（10YR2/2）土。直径 1cm 程の 3 層ブロックを含む。
- 5：炉 a 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物を多く含む。
- 6：柱 a 層：黒褐色（10YR2/2）土。橙（2.5YR7/6）焼土、炭化物を含む。
- 7：柱 b 層：黒色（10YR2/1）土。焼土をやや含む。
- 8：柱 c 層：黒色（10YR2/1）土。
- 9：柱 d 層：黒色（10YR2/3）土。炭化物、焼土を多量に含む。
- 10：柱 e 層：黒色（10YR2/1）土。

SI52

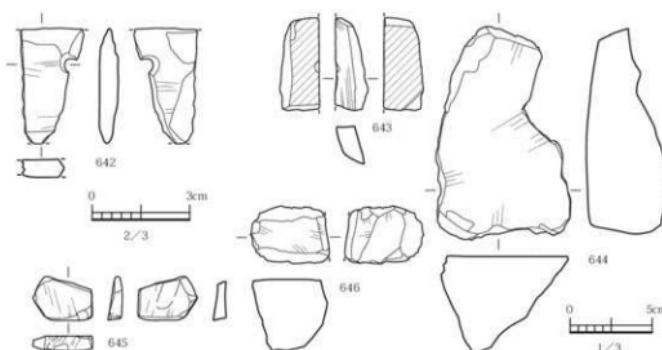


図 285 竪穴建物 (SI52) 出土石器 (RQ) 実測図 (1)



図 286 穹穴建物 (SI52) 出土石器 (RQ) 実測図 (2)

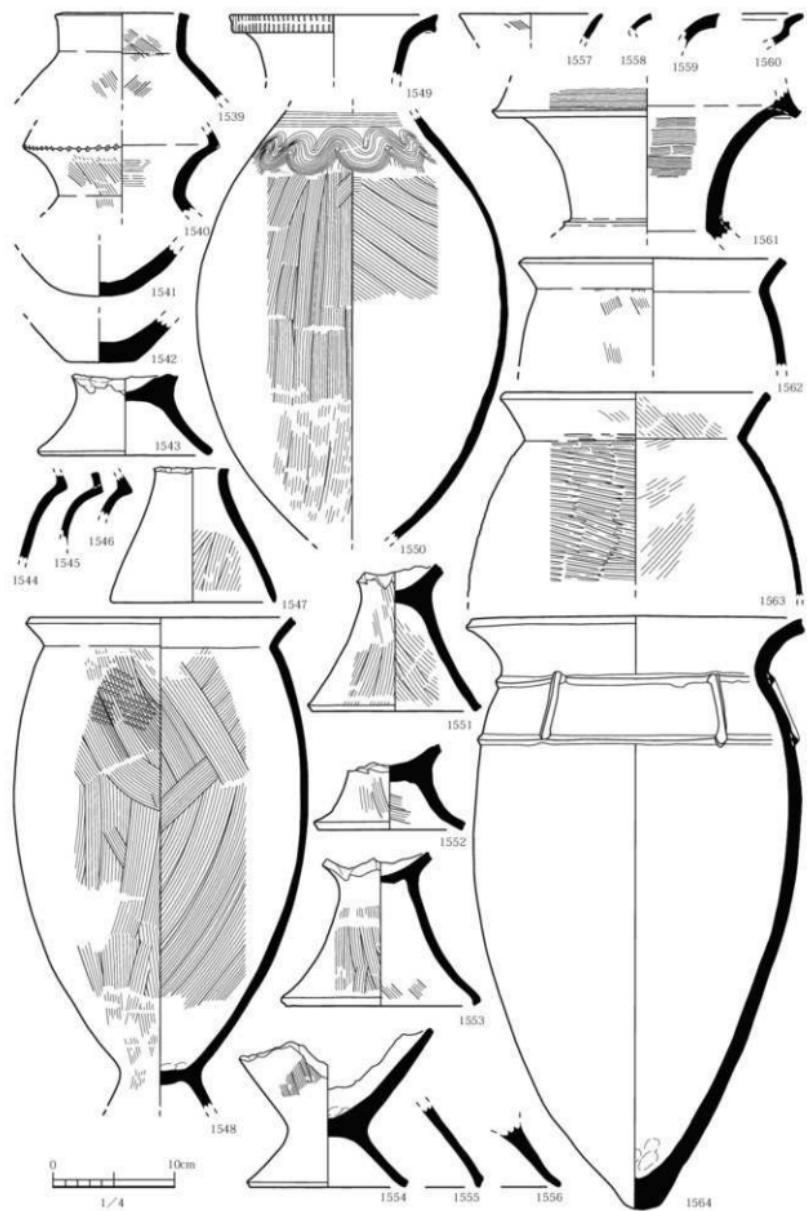


图 287 竖穴建物 (S152) 出土土器 (RP) 実測図



図 288 壁穴建物 (SI53) 実測図・遺物分布図

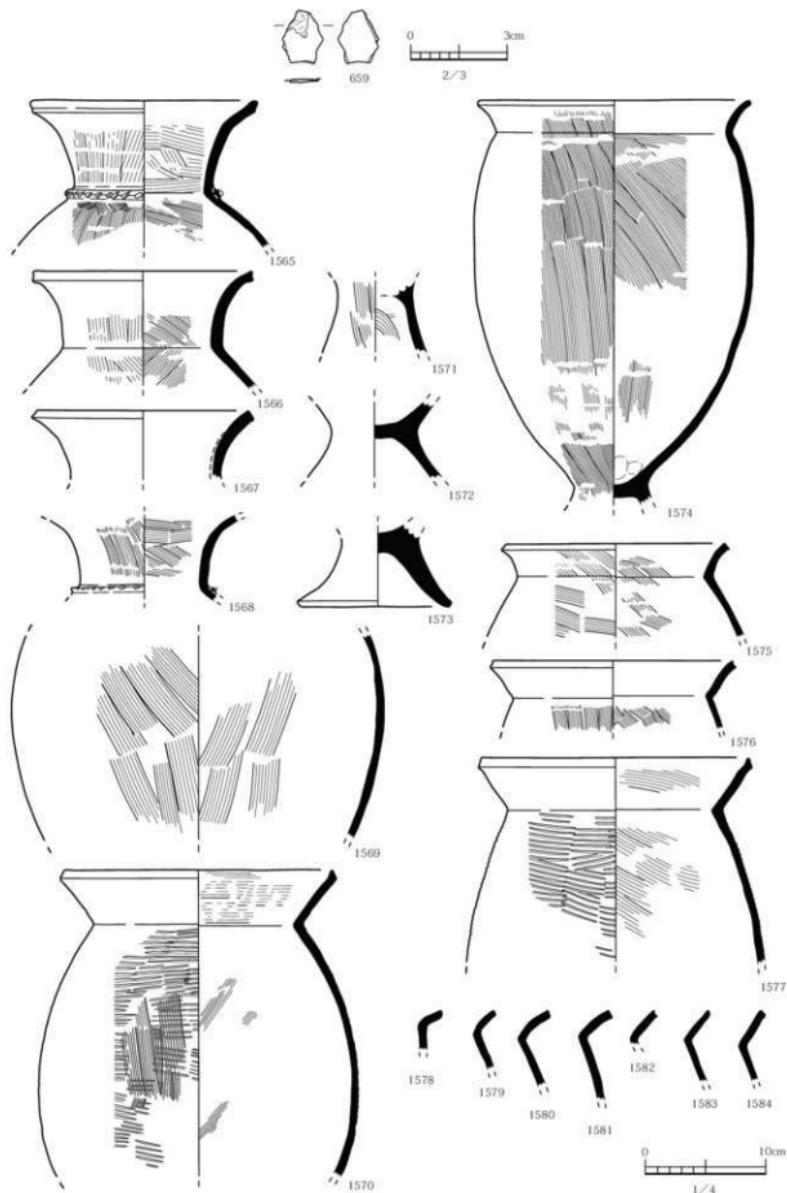


図 289 穂穴建物 (5153) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

SI52は、調査区14区、537グリッドに位置し、3.6m×3.5mの正方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.6mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構、張出し部をそなえている。

SI52は、鍛冶遺構である可能性が高い。

主柱穴は、4基を掘削し、直径0.3m、深さ0.7mを測る。北東主柱穴の埋土は、黒褐色(10YR2/3)土、5mm以下の炭化物を多く含んでいた。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.6m、深さ0.1mの皿形を呈している。なお、炉には、幅30cm程の周堤が付設していることが炉土層断面写真から判明し、炉の形態はボウル形または漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数cmで、なだらかに床面へと続き、炉底には4:炉1層が確認できる。SI39と同様の発掘作業内容の結果である。

SI52では、台石、敲石、砥石などの石器もセットで検出されている。このことから鍛冶遺構である可能性が高いと判断した。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1: 埋1層: 黒色(10YR2/1)土。3層ブロックではなく、自然の流れ込みによる堆積か。
- 2: 埋2層: 黒色(10YR2/1)土。直径1cm以下の炭化物、細かな焼土粒を含む。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層を直径3cm以下のブロックで含む。
- 4: 炉1層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物、焼土粒を含むが量は少ない。
- 5: 柱a層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径2cm以下の3層ブロックをやや含む。
- 6: 柱b層: 黒褐色(10YR3/1)土。5mm以下の炭化物をやや含む。
- 7: 柱c層: 黒褐色(10YR3/1)土。直径1cm以下の3層ブロック、5mm以下の炭化物を含む。

SI53

SI53は、調査区14区、562グリッドに位置し、4.3m×4mの方形を呈する竪穴建物である。検出面からの深さ0.5mを測り、ベッド状遺構、張出し部をそなえ

ている。SI47に切られる。

SI53は、SI53、SI56、SI57、SI58として発掘された遺構を、整理段階で同一遺構と判断し、1棟の竪穴建物として取りまとめた。

SI53では、主柱穴、炉、Kピットは、検出していない。

ベッド状遺構は、南東隅で検出され、高さ10cmを測る。南東隅ベッド状遺構は、幅1.2mで東側壁に沿って北に伸長し、幅0.8mで南壁に沿って西に伸長している。

張出し部は、東西南北の各側辺に付設されている。西側壁、北側壁、東側壁に付設する張出し部は幅0.4m、南側壁に付設する張出し部は幅0.7mを測る。

以上のSI53に付帯する諸施設は、SI53がSI47に切られてはいても、両竪穴建物を掘方まで発掘すれば、その位置と規模を把握できた。SI53の内陣は調査区内に位置するので主柱穴、炉、Kピットは詳細に、ベッド状遺構、張出し部は概要を把握できたのである。調査区外に依存する遺構部分を調査する機会があれば、今次調査の不足を補う調査方法を選択していただきたい。

層序は次のとおりである。なお、下記以外の層序は、記録されていない。

- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)土。
- 2: 埋2層: 黒色(10YR2/1)土。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR3/1)土。2よりやや軟らかく、3層ブロックの数も多い。ベンガラを検出。
- 4: 埋4層: 黒色(10YR2/1)土。直径5cm以下の5層ブロックが多量に含まれる。
- 5: 埋5層: 黒色(10YR2/1)土。4層と5層をまだらに多量に含む。

SI54

SI54は、調査区14区、534グリッドに位置し、4.2m×4.1mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ1.2mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。SD11に切られる。

主柱穴は、南東主柱穴1基を掘削し、直径0.3m、深さ0.8mを測り、南東主柱は抜き取られている。なお、完掘状況(使用時)写真には抜取り痕の炉側壁面に埋土が残存していることが記録されており、抜取り

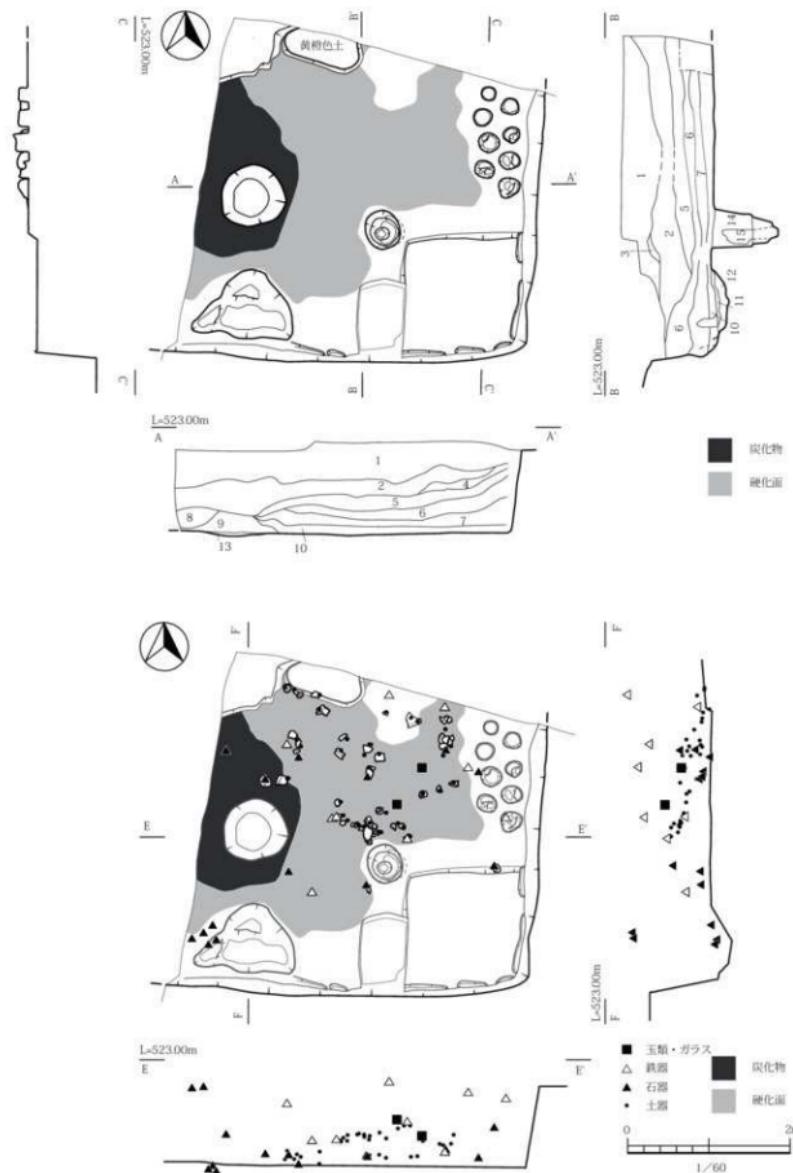


図 290 穹穴建物 (SI54) 実測図・遺物分布図

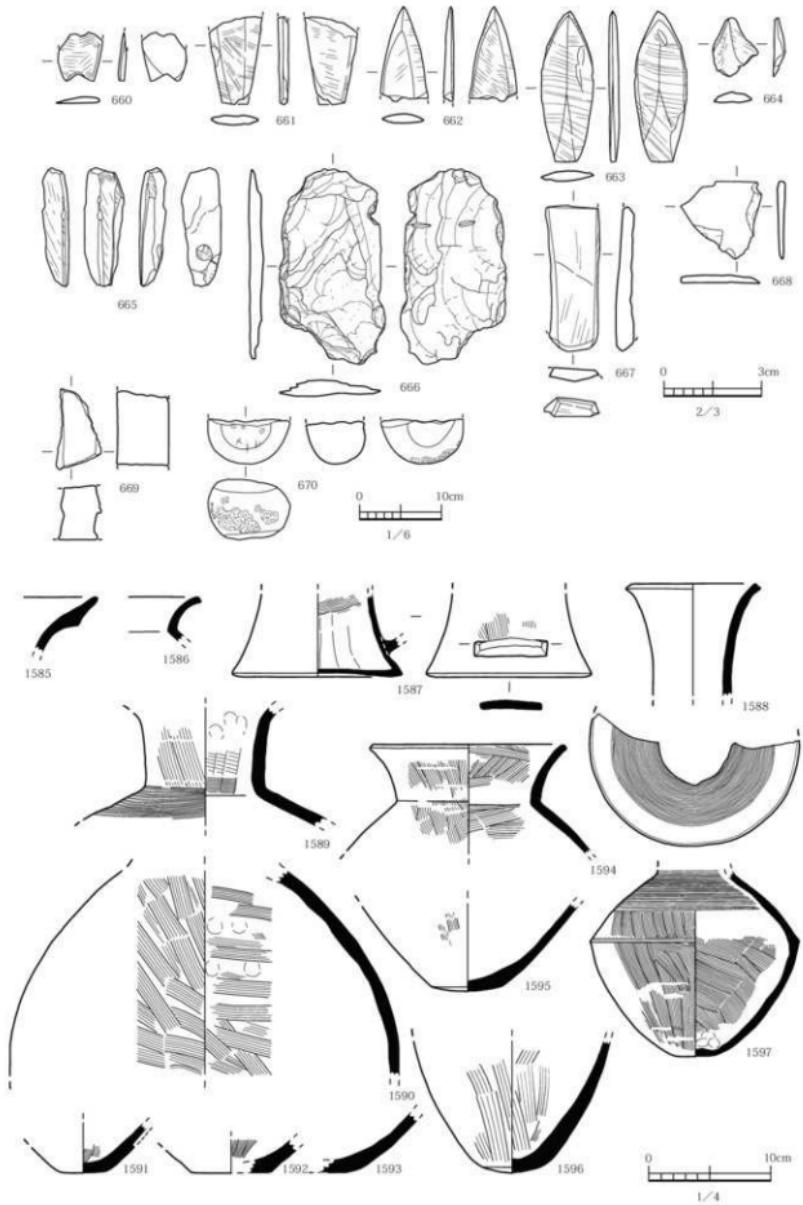


図 291 穂穴建物 (SI54) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

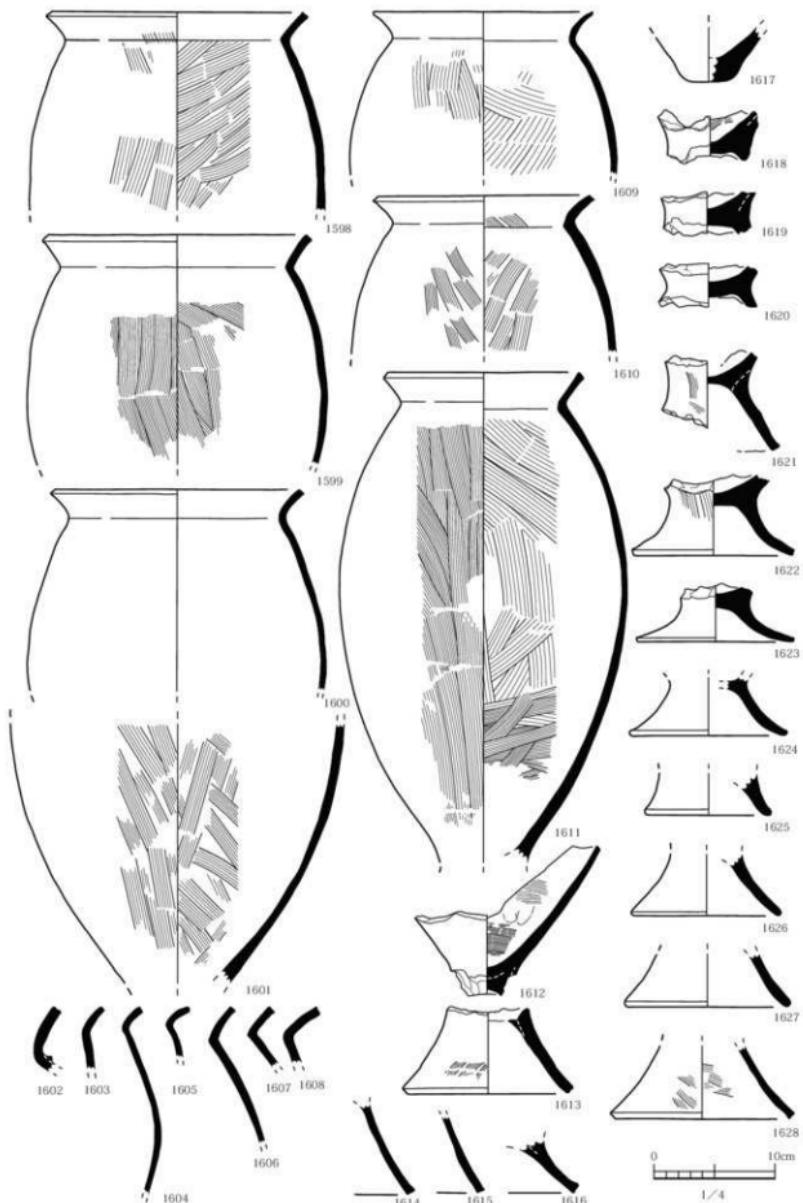


图 292 空穴竖井 (S154) 出土器 (RP) 実測図

痕が完掘されていないことが判明する。炉に向かった方向に抜取り痕は大きいものであった、と判断できる。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.8m、深さ 0.1m の皿形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、炉完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底中央には 13 : 炉 a 層が確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。

K ピットは、0.9 × 0.5m、深さ 30cm 程の方形土壌が、炉の南、南側壁際に位置している。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、南東隅に設置され、幅 1.4m、高さ 10cm を測る。

東側壁沿いの床面では、直径 20cm 程、深さ 10cm 程のピットが 8 基検出された。側壁に平行に 4 基のピットが 2 列に並び、黒色 (10YR2/1) 土で黄橙色 (10YR8/8) 土が混じる土壤が埋土として検出されている。このピット群埋土と同様の土壤は、調査範囲の北端部で「黄色土の集中範囲」として記録されている。なお、付帯設備東側 Pt 群検出写真には、調査区北壁とピット群埋土が記録されており、ピット群埋土が床面上に堆積し西方向に伸長している状況が判明する。また、「黄色土の集中範囲」は柱抜取り痕の廃土塊である可能性が高い。したがって、ピット群は SI54 廃絶時に埋まった、と推定できる。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1 : 埋 1 層 : 黒褐色 (10YR2/2) 土。東側ほど遺物の混入が多い。
- 2 : 埋 2 層 : 黒色 (10YR2/1) 土。明黄褐色 (10YR7/6) 土のブロック (直径 5 ~ 10mm) が混じる。
- 3 : 埋 3 層 : 黒色 (10YR2/1) 土。2 よりややしまり、砂質のブロックが混じる。
- 4 : 埋 4 層 : 黒褐色 (7.5YR2/2) 土。明黄褐色 (10YR7/6) 土のブロック (直径 5mm 前後) が混じるほか、細粒の砂が散在する。
- 5 : 埋 5 層 : 黒色 (7.5YR2/1) 土。2 や 4 に比べ、炭化物や焼土の量が多い (上～中層)。明黄褐色 (10YR7/6) のブロックが混じる。

6 : 埋 6 層 : 黒色 (7.5YR2/1) 土。炭化物はごく微量含まれる。

7 : 埋 7 層 : 黒色 (7.5YR2/1) 土。炭化物が 6 より多く含まれる。

8 : 埋 8 層 : 黒褐色 (7.5YR3/1) 土。炭化物が 7 とほぼ同様含まれる。

9 : 埋 9 層 : 黑褐色 (5YR2/1) 土。焼土 (橙色 5YR6/8) や炭化物が混じる。

10 : 埋 10 層 : 黒色 (10YR2/1) 土。焼土 (橙色 5YR6/8) が多く混じる。

11 : 埋 a 層 : 黑褐色 (10YR2/3) 土。5 層～6 層の細かな土に炭化物を多く含む。7a 層もやや含む。

12 : 埋 b 層 : 黑褐色 (10YR2/3) 土。炭化物は含まれず 7a 層が 3cm 程のブロックで入る。

13 : 炉 a 層 : 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物を多量に含む。

14 : 柱 a 層 : 暗褐色 (10YR3/3) 土。5 層～7a 層がまだらに細かに混じる。

15 : 柱 b 層 : 黒色 (10YR2/1) 土。柱痕。

SI55

SI55 は、調査区 14 区、541 グリッドに位置し、5.6m × 3.4m が調査対象の、方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.7m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SD11 に切られる。

SI55 は、鍛冶遺構である可能性が高い。

主柱穴は、南西主柱穴と南東主柱の 2 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.8m を測る。なお、南列の主柱 2 基は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。SI55 南列の主柱穴は、炉周堤端部からベッド状遺構の内側角隅まで範囲に円形土壌が掘削されており、これが抜取り痕の範囲となる。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.7m、深さ 0.2m のボウル形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していることが炉断面写真から、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが炉土層断面写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底中央部にはピットが確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。

K ピットは、0.7 × 0.7m、深さ 20cm 程の方形土

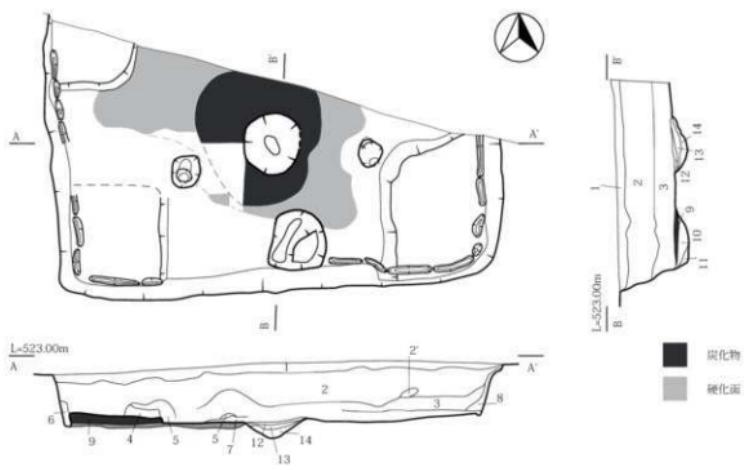


図 293 穂穴建物 (SI55) 実測図・遺物分布図

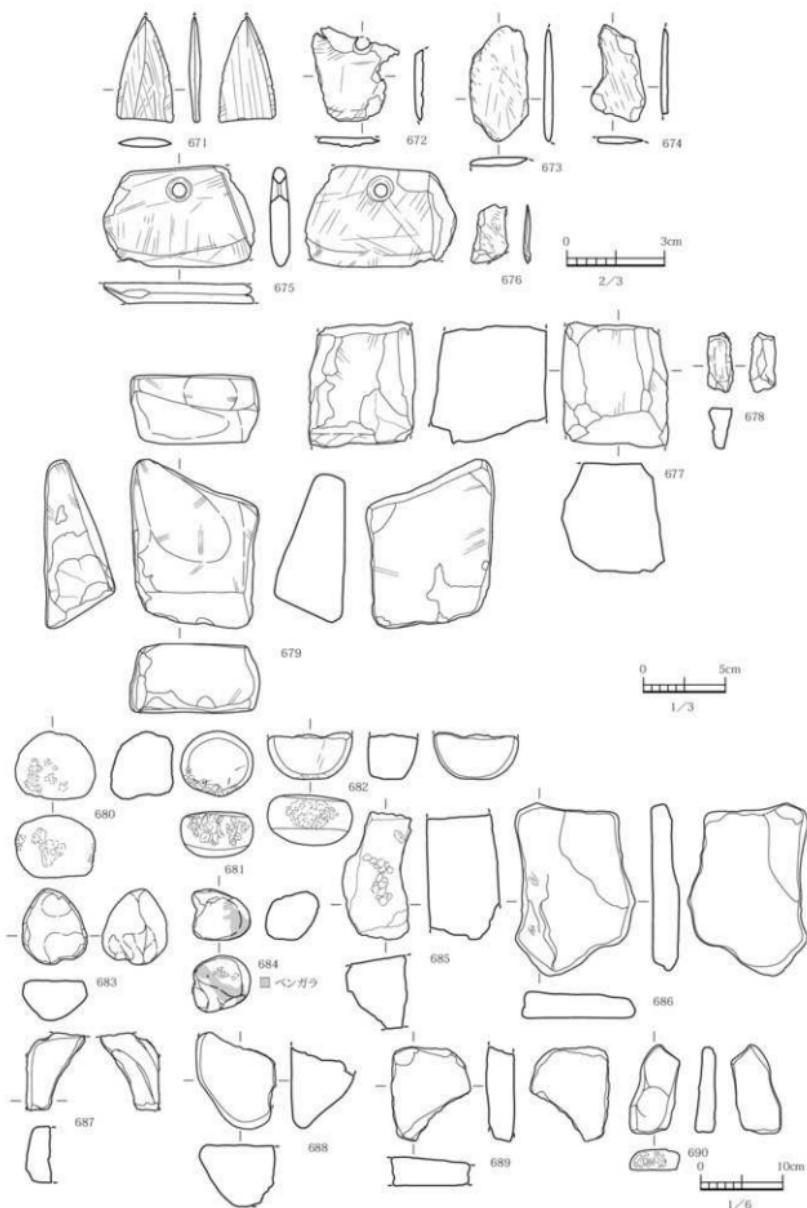


図 294 穹穴建物 (SI55) 出土石器 (RQ) 実測図

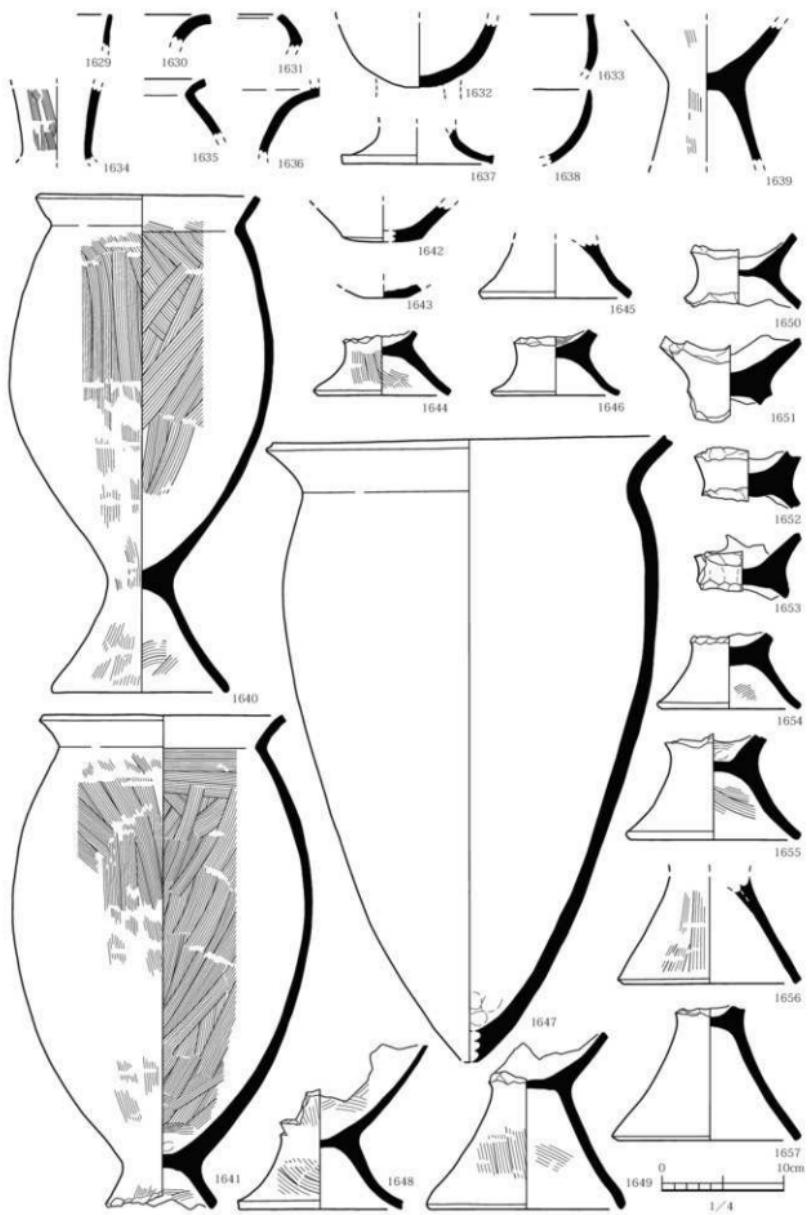


图 295 竖穴建物 (S155) 出土土器 (RP) 実測図

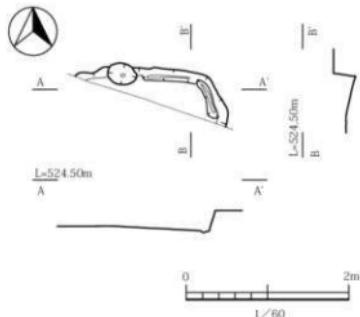


図 296 穫穴建物 (SI59) 実測図

壇が南側壁中央に位置している。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、南西隅、南東隅に設置され、幅1.1m、高さ0.1mを測る。さらに西側壁沿いに北西隅からL字形に伸長してきた幅1.0mのベッド状遺構が検出されている。

SI55では、鉄器とともに台石、敲石、砥石などの石器もセットで検出されている。このことから鍛冶遺構である可能性が高いと判断した。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1: 埋1層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径5mm以下の炭化物を多く含む。
- 2: 埋2層: 黒褐色(10YR3/1)土。1よりやや柔らかく、直径5mm以下の炭化物と焼土粒を多く含む。
2'は埋2層中にぶい赤褐色(5YR4/4)の焼土が集中している。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR3/2)土。直径1cm以下で3層ブロックをやや含む。5mm以下の炭化物も多量に含む。
- 4: 埋4層: 黒褐色(10YR2/3)土。炭化物、焼土をやや含む。柱抜き取り時に出土した土。
- 5: 埋5層: 黒褐色(10YR3/2)土。直径10cm大の5層ブロックを多量に含む。
- 6: 埋6層: 黒色(10YR2/1)土。
- 7: 埋7層: 黒色(7.5YR1.7/1)土。炭化物、灰を多

量に含む。

- 8: 埋8層: 黒褐色(10YR2/2)土。
- 9: 床a層: 黒褐色(10YR2/2)土。こぶし大から1cm大の3層ブロックを多量に含む。
- 10: 埋a層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物粒、焼土粒をやや含む。直径2cm以下の3層ブロックを含む。
- 11: 埋b層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径3~5cmの3~4層ブロックを含む(壁崩落)。
- 12: 炉1層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物を多く含む。
- 13: 炉2層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を多く含む。3~5層を直径2cm以下のブロックでまだらに含む。
- 14: 炉3層: 黒褐色(10YR2/3)土。炭化物を含む。3~5層を直径2cm以下のブロックでまだらに含む。
- 15: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。柱痕。

SI59

SI59は、調査区15区、552グリッドに位置し、方形を呈する竪穴建物である。1.8m×0.7mの範囲が検出され、検出面からの深さ0.3mを測る。

層序は記録されていない。

SI60

SI60は、調査区15区、574グリッドに位置し、4.6m×4.3mの正方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.2mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。SI66、SI63を切り、SI64に切られる。

主柱穴は、4基を掘削し、直径0.3m、深さ0.5mを測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.7m、深さ0.1mの皿形を呈している。

Kピットは、南側壁中央に位置し、深さ20cm程の方形土壇の北端に支柱穴2基が付設されている。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、竪穴建物の四隅に設置され、北東隅、南西隅、南東隅のベッド状遺構が検出され、幅1.2m、高さ0.1mを測る。

- 硬化面は、内陣、北と東の外陣で検出されている。層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。
- 1: 埋1層: 黒色(10YR2/1)土。
 - 2: 埋2層: 黒色(10YR2/1)土。褐色(7.5YR4/6)焼土を多量に含む。
 - 3: 炉a層: 黒褐色(10YR2/3)土。焼土粒、炭化物を含む。暗褐色(7.5YR3/4)灰混じりを5cm大のブロックで含む。
 - 4: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。焼土粒、炭化物をやや含む。
 - 5: 柱b層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を多く含む。柱痕。
 - 6: 柱c層: 黒褐色(10YR2/2)土。5層がブロックで入る。
 - 7: 柱d層: 黒色(10YR2/1)土。焼土粒、炭化物をやや含む。
 - 8: 床a層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径1~10cmの3層ブロックを多量に含む。
 - 9: 床b層: 黒褐色(10YR2/3)土。こぶし大の3層

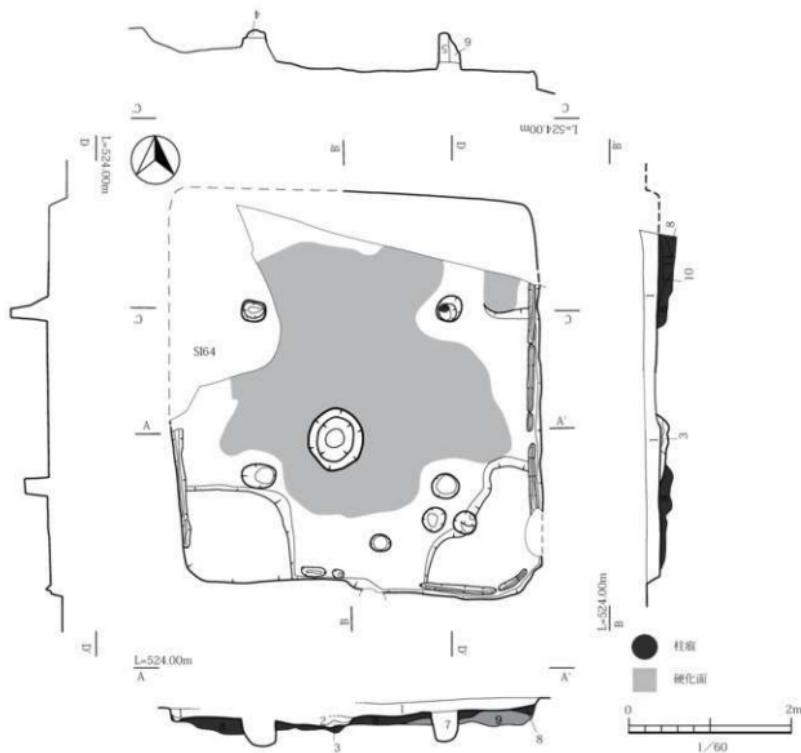


図297 穴穴建物(SI60)実測図

- ブロックを多量に含む。
- 10: 床c層: 黒褐色(10YR2/2)土。上面は硬化している。
- 11: 床d層: 黒褐色(10YR2/2)土。こぶし大の3層ブロックが多量に入っている。10、11は基本的に8と同じだが、3層ブロックが片寄っているため分けた。

SI61

SI61は、調査区15区、568グリッドに位置し、3.4m

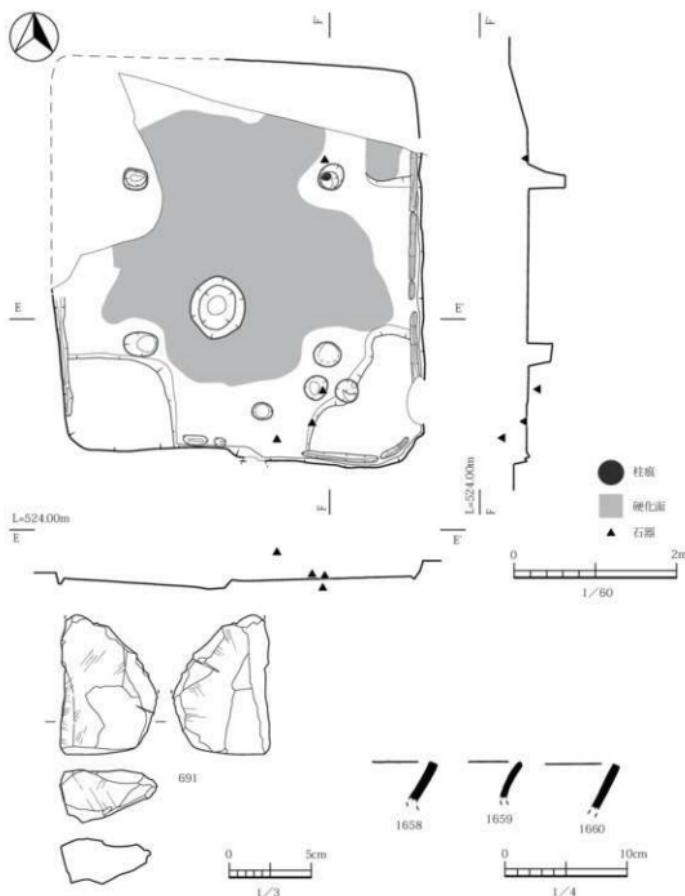


図298 積穴建物(SI60)遺物分布図・出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

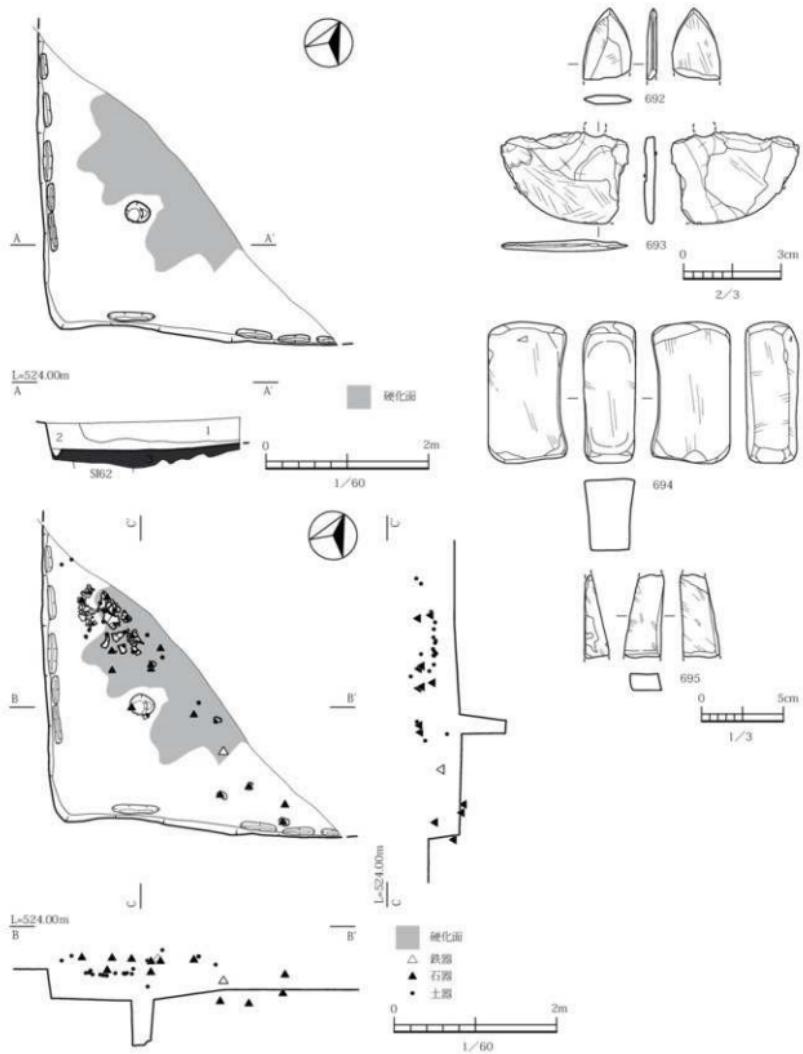


図 299 穹穴建物 (Si61) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ) 実測図

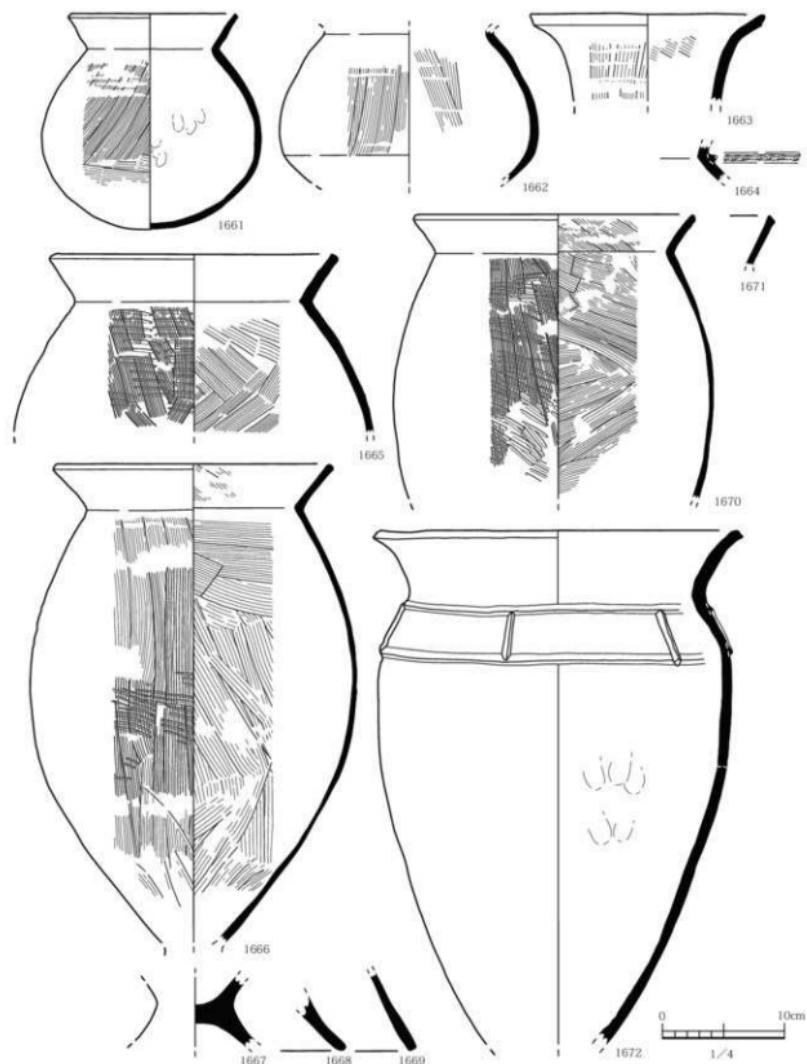


図 300 積穴建物 (SI61) 出土土器 (RP) 実測図

$\times 3.7m$ が発掘された方形を呈する竪穴建物である。検出面からの深さ 0.3m を測る。SI62 を切る。

主柱穴は、南西主柱穴 1 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.6m を測る。なお、南西主柱は抜き取られてお

り、竪穴建物中央に向かって梢円形の抜取り痕があることが判明した。

ベッド状遺構は、検出されていない。なお、完掘状況写真から、低平ではあるが幅 1.0m 程のベッド状遺

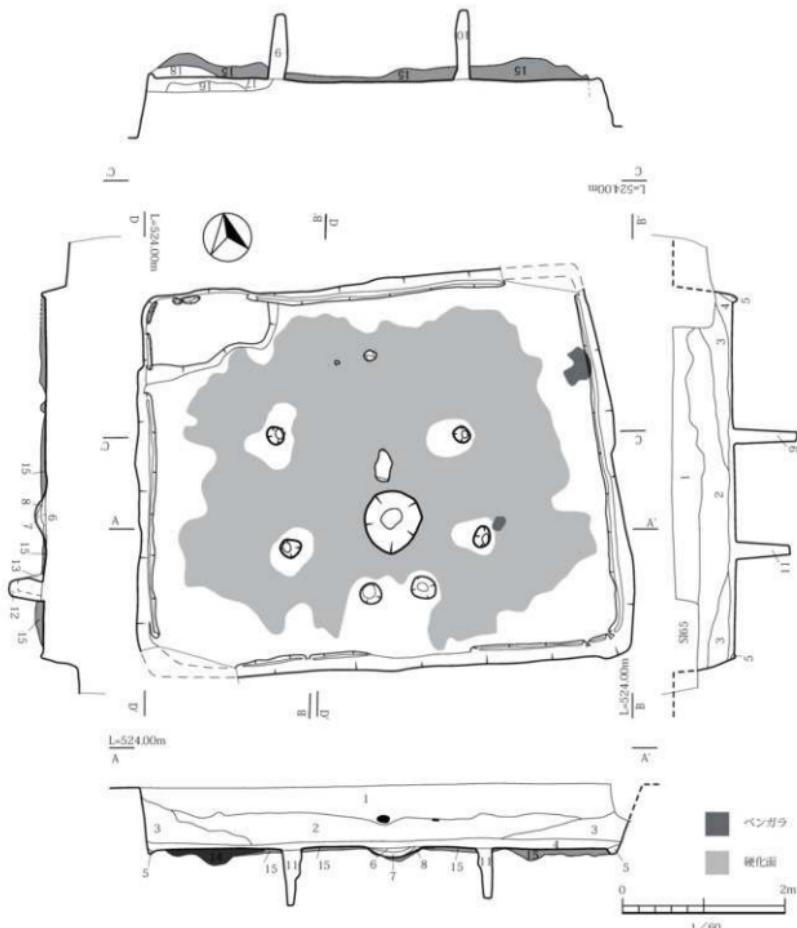


図 301 竪穴建物 (SI62) 実測図

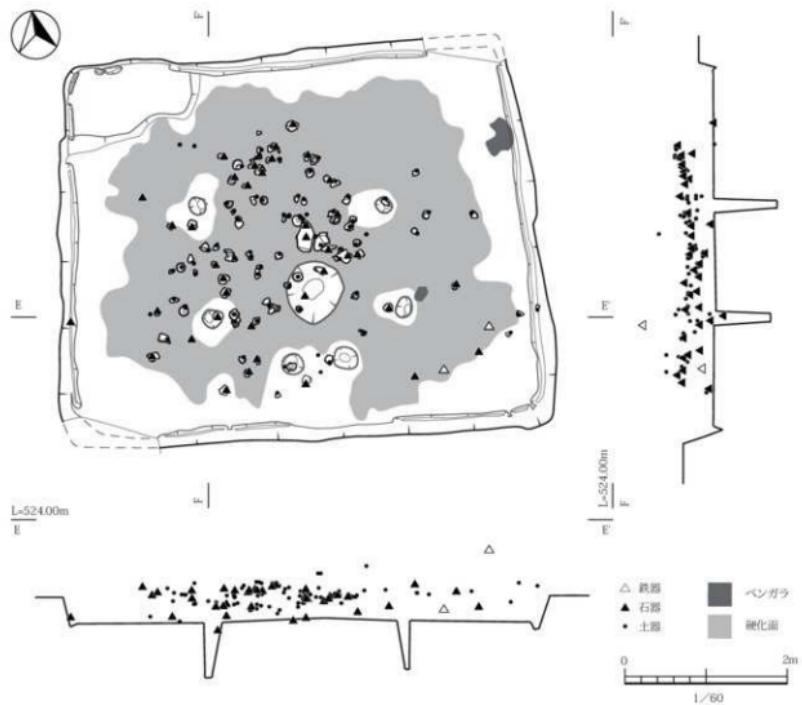


図 302 穹穴建物 (SI62) 遺物分布図

構が南西隅に設置されていること判明した。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋 1 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層を 2cm 以下のブロックでやや含む。炭化物もやや含む。
- 2: 埋 2 層: 黒色 (10YR2/1) 土。3 層ブロックを 1 より多く含み、炭化物、焼土も含む。
- 3: 床 a 層: 黒褐色 (10YR2/3) 土。炭化物をわずかに含む。3 層を 1cm ~ 3cm のブロックで含む。

SI62

SI62 は、調査区 15 区、567 グリッドに位置し、5.9m × 4.7m の方形を呈する 4 本柱建て穹穴建物である。検出面からの深さ 0.7m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI43、SI65、SI61 に切られ、SI63 を切っている。

SI62 は、鍛冶遺構である可能性が高い。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.2m、深さ 0.6m

を測る。なお、4 本の主柱はすべて抜き取られていることが、貼床除去写真から判明する。各主柱穴の周囲には直径 1m 程の土壌が存在し、3: 埋 3 層が堆積していることが確認できる。同様に、貼床下北東柱穴土層断面写真、貼床下北東柱穴土層断面写真では、埋 3 層はこの土壌の中位まで切り込んだ抜取り痕であり、その下位には黒褐色シルト層等が堆積する柱穴が観察できる。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直徑 0.7m、深さ 0.2m の漏斗形を呈している。なお、炉には、幅 30cm 程の周堤が付設していることが、炉掘方・半裁土層断面写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続くことが確認できる。炉の周囲には炭化物が分布し、周辺の床面では褐鉄鉱の付着が観察されている。

K ピットは、炉の南に直徑 0.2m、深さ 0.4m 程の円形土壌 2 基が東西に並び検出された。これは K ピッ

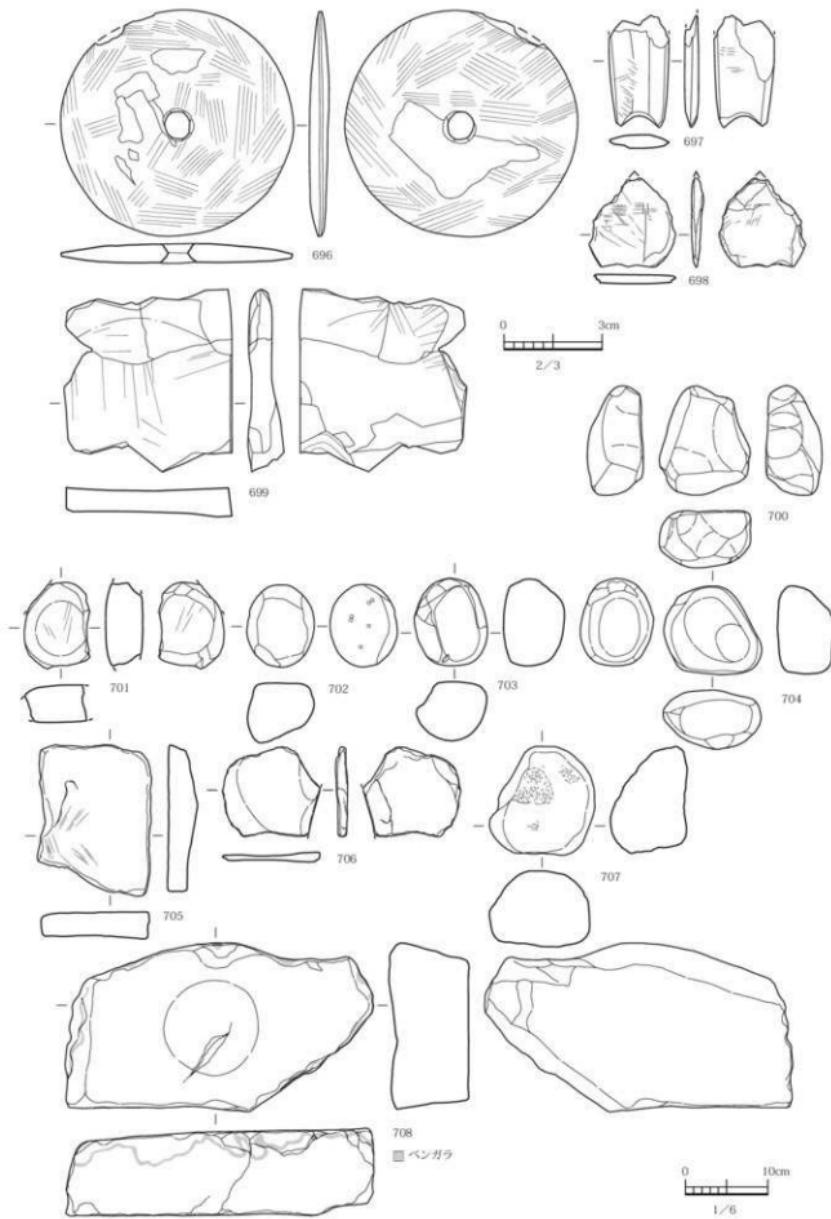


図 303 穹穴建物 (SI62) 出土石器 (RQ) 実測図

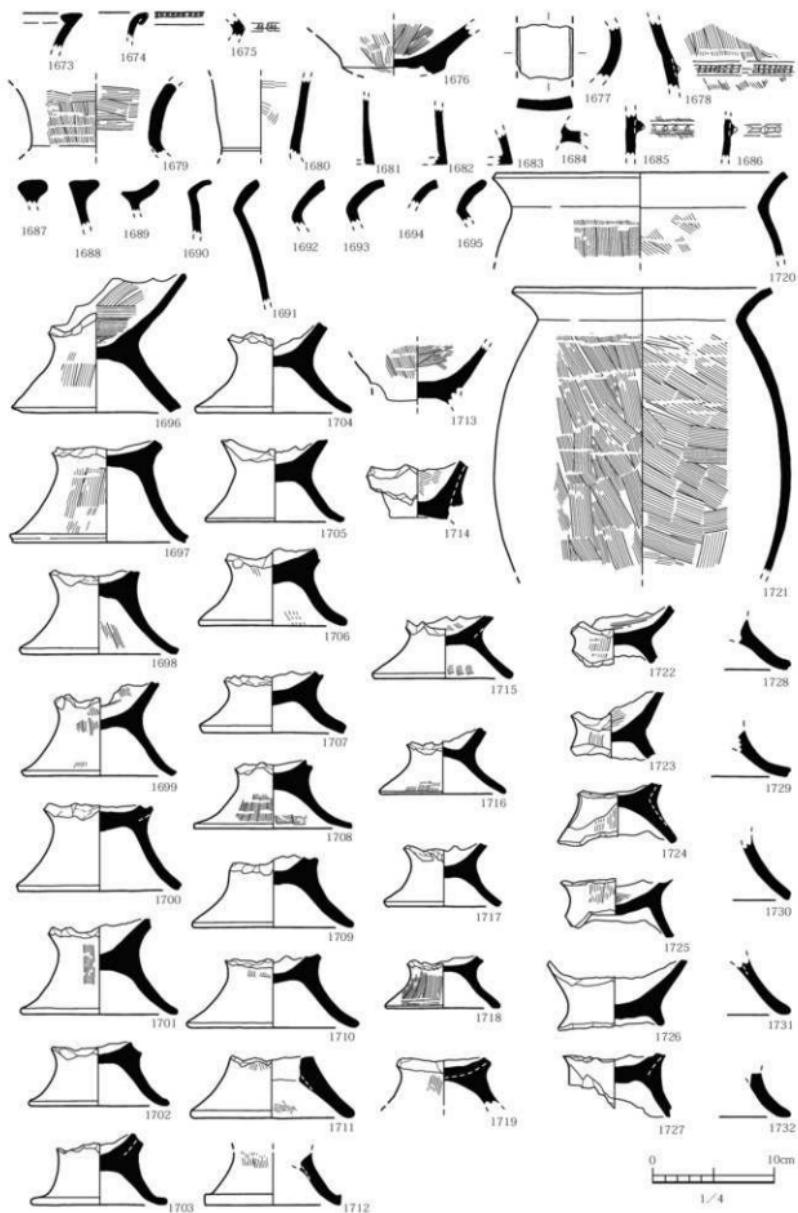


図 304 積穴建物 (SI62) 出土土器 (RP) 実測図

ト支柱穴である。2基1対の支柱穴より南には1.0×0.8mの方形を呈する窪みがある。これはKピット本体で浅い方形土壙となることが、完掘状況写真から判明する。この場合、炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、北西隅で検出され、幅1.5m、高さ0.1mを測る。なお、竪穴建物の他の三隅にもベッド状遺構が設置されていることが、完掘状況写真から判明する。各側壁から主柱穴まで幅1.0m程、低いベッド状遺構が観察でき、北西隅と南西隅のベッド状遺構は幅0.5m程の低いベッド状遺構で接続されている。

硬化面は床面、ベッド状遺構上面を問わず、床面全体で検出された。

SI62では、鉄器とともに台石、敲石、砥石などの石器もセットで検出されている。のことから鍛冶遺構である可能性が高いと判断した。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：理1層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物を含む。
- 2：理2層：黒色（10YR2/1）土。赤褐色（2.5YR4/8）の褐鉄鉱を多量に含む。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。5層、7a層を直径2cm～10cmのブロック状で含む。
- 4：理4層：黒褐色（10YR2/2）土。褐鉄鉱（高師小僧）を細かく多く含む。炭化物を含む。7a層をわずかに含む。
- 5：理5層：黒色（10YR2/1）土。細かい5層を含む。側壁溝の埋土。
- 6：炉1層：黒褐色（10YR2/2）土。
- 7：炉2層：黒色（10YR1.7/1）土。ほとんど炭化物、焼土粒、5層土をやや含む。
- 8：炉3層：黒色（10YR2/1）土。炭化物を多く含む。5層土をブロック状に含む。
- 9：柱a層：黒色（10YR2/1）土。
- 10：柱b層：黒色（10YR2/1）土。炭化物、焼土を含む。7a層をまだらに含む。
- 11：柱c層：黒色（10YR2/1）土。褐鉄鉱（高師小僧）を含む。
- 12：柱d層：黒色（7.5YR2/1）土。7a層を1cm以下でやや含み、焼土、炭化物を多く含む。

13：柱e層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層を3cm以下でやや含み、炭化物をやや含む。

14：床1層：黒色（10YR2/1）土。黒色土にアカホヤが混じる。

15：床2層：黒色（10YR2/1）土。アカホヤが1と比べ少ない。

16：ベッド1層：黒褐色（10YR3/2）土。4層と3層が混濁。

17：ベッド2層：黒褐色（10YR2/2）土。3層のプロックは1cm未満で少ない。

18：ベッド3層：灰黄褐色（10YR4/2）土。ほとんどが3層で、4層が少量含まれる。

SI62では、台付棗の脚部が多数検出された。棗底部を打ち欠き、脚部を分離した例28点を図示した。台付棗の脚部を打ち欠き、台のない棗として使用する例も共伴している。このように台付棗の脚部が多数出土する例は、弥生時代後期の竪穴建物でしばしば調査されている（二子塚遺跡SB212、下扇原遺跡SB11、SB48など）。河川敷において棗を截せた器台への転用例（鹿児島市不動寺遺跡）もあり、竪穴建物の廢絶に伴い加工された可能性が高い。

SI63

SI63は、調査区15区、571グリッドに位置し、3.6m×3.7mの方形を呈する2本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.4mを測り、炉をそなえている。SI66、SI60、SI62、SI64に切られる。

主柱穴は、2基を掘削し、直径0.2m、深さ0.6mを測る。なお、主柱2基は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。SI63の主柱穴周囲の床面では硬化面が検出されず遺物も分布しない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。

炉は、柱穴間に位置し、直径0.6m、深さ0.1mの皿形を呈している。なお、炉の形態はボウル形になる可能性が高いことが、掘方完掘状況写真から判明する。

硬化面は、炉の周辺に検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。炭化物をやや含む。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。炭化物を多量に含む。

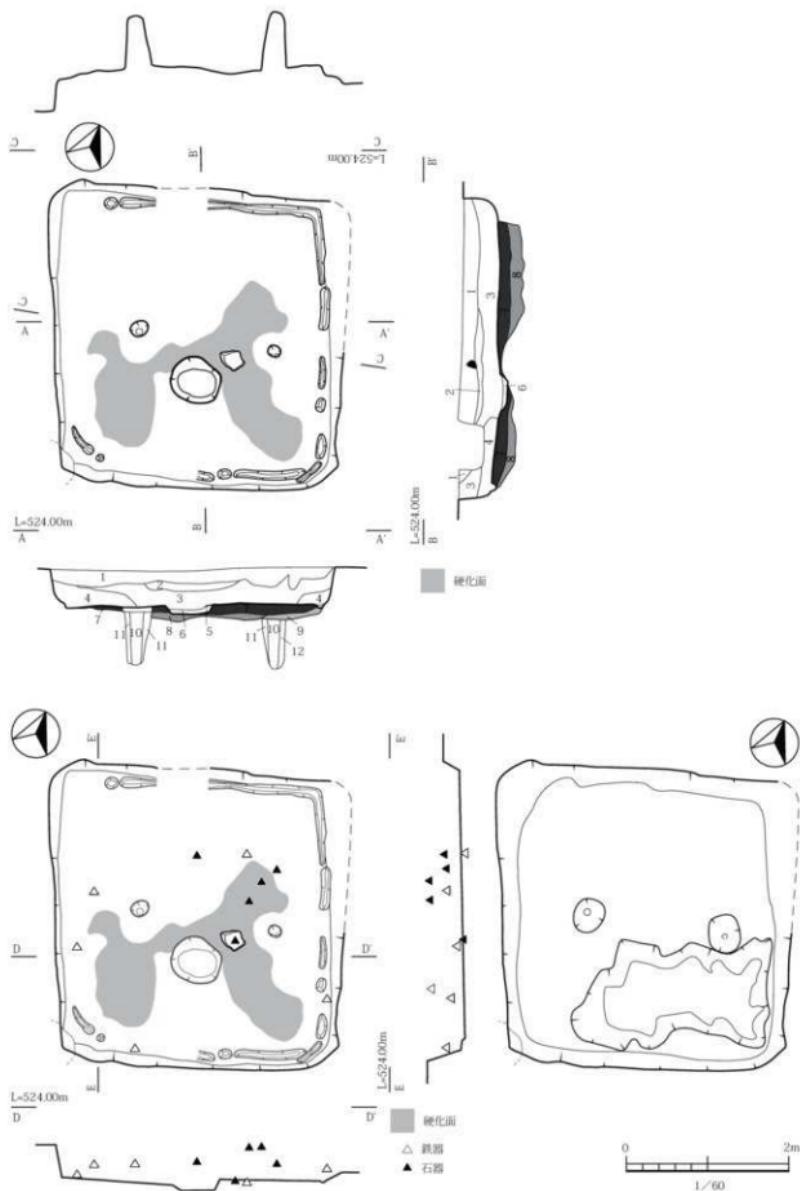


図 305 穂穴建物 (Si63) 実測図・遺物分布図

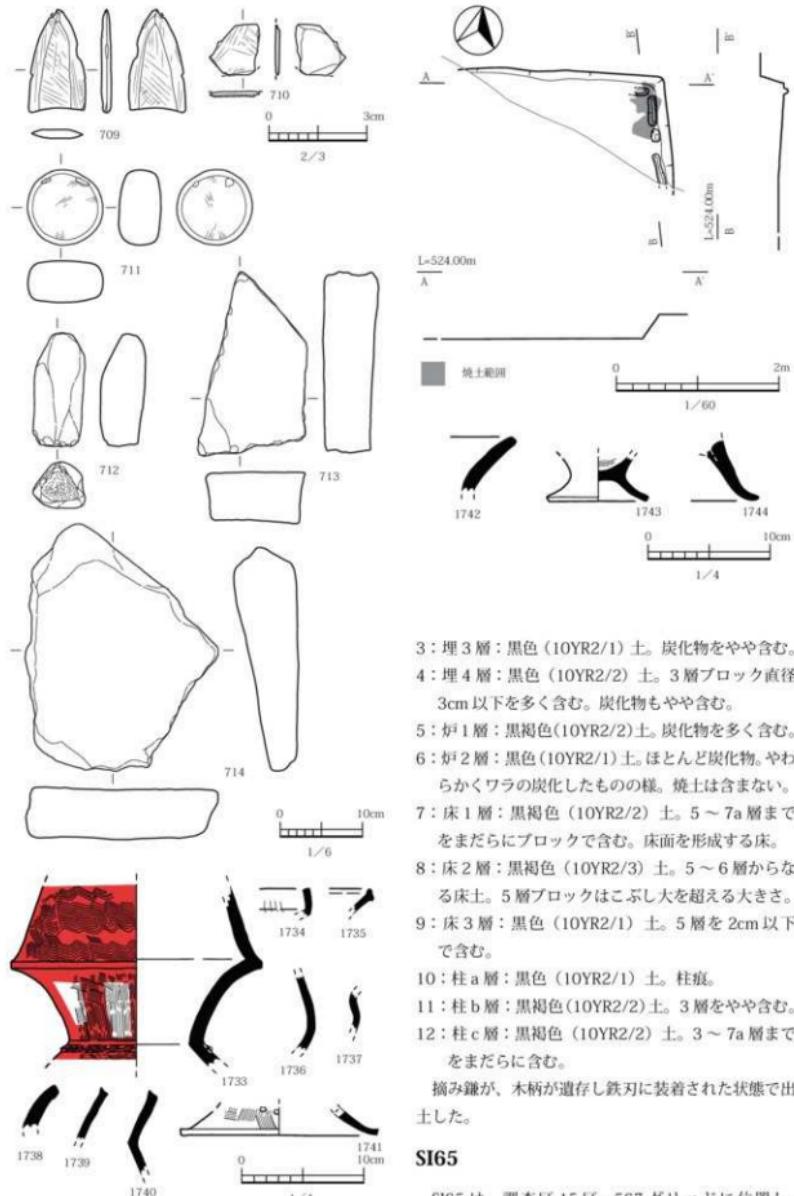


図 306 積穴建物(SI63)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図
及び積穴建物(SI65)実測図・出土土器(RP)実測図

- 3: 埋3層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物をやや含む。
 - 4: 埋4層: 黒色(10YR2/2)土。3層ブロック直径3cm以下を多く含む。炭化物もやや含む。
 - 5: 焼1層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を多く含む。
 - 6: 焼2層: 黒色(10YR2/1)土。ほとんど炭化物。やわらかくワラの炭化したもの様。焼土は含まない。
 - 7: 床1層: 黒褐色(10YR2/2)土。5~7a層までをまだらにブロックで含む。床面を形成する床。
 - 8: 床2層: 黒褐色(10YR2/3)土。5~6層からなる床土。5層ブロックはこぶし大を超える大きさ。
 - 9: 床3層: 黒色(10YR2/1)土。5層を2cm以下で含む。
 - 10: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。柱痕。
 - 11: 柱b層: 黒褐色(10YR2/2)土。3層をやや含む。
 - 12: 柱c層: 黒褐色(10YR2/2)土。3~7a層までをまだらに含む。
- 摘み鎌が、木柄が遺存し鉄刃に装着された状態で出土した。

SI65

SI65は、調査区15区、567グリッドに位置し、方形を呈する積穴建物である。検出面からの深さ0.3m

を測り、 $2.5m \times 1.4m$ が調査対象となった。SI43、SI62 を切る。

北東隅に焼土が検出された。

層序は記録されていない。

SI66

SI66 は、調査区 15・20 区、571 グリッドに位置し、 $5.6m \times 5.3m$ の正方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物

である。検出面からの深さ $0.6m$ を測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。SI63 を切り、SI60、SI75 に切られる。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 $0.3m$ 、深さ $0.8m$ を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 $0.8m$ のボウル形を呈している。

ベッド状遺構は、南東隅で検出され、幅 $1.3m$ 、高

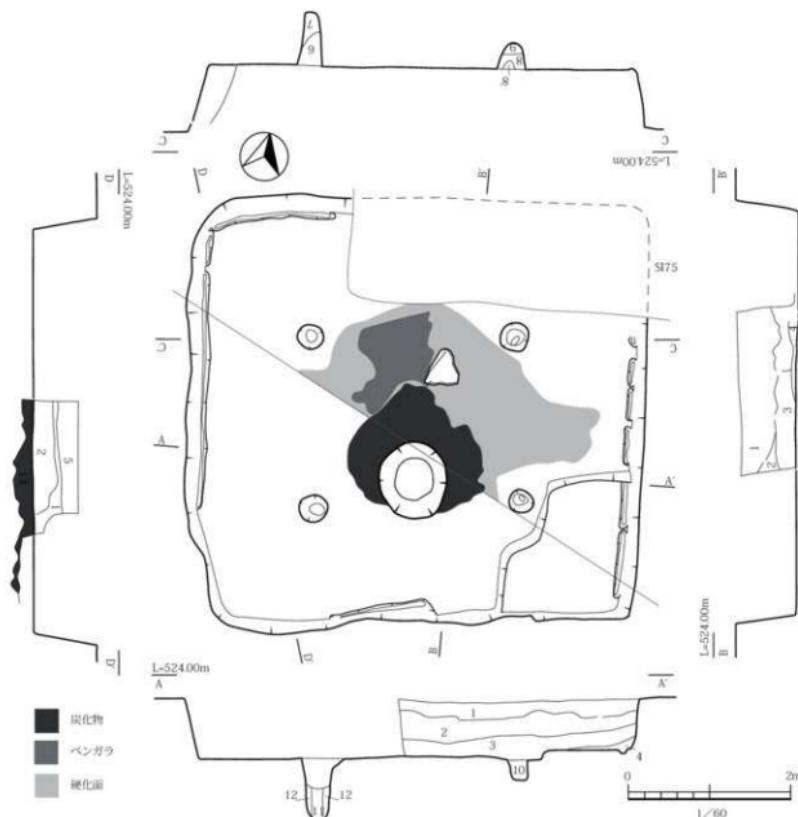


図 307 竪穴建物 (SI66) 実測図

さ0.1mを測る。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。炭化物をやや含む。
2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。炭化物をやや含む。

1cm程度の3層を含む。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物、焼土粒

を多く含む。

4：埋4層：黒褐色（10YR2/3）土。2cm程の3層
ブロックを含む。焼土、炭化物を多く含む。

5：埋a層：黒褐色（10YR2/2）土。直径2cm以下
の3層ブロックと炭化物をやや含む。

6：柱a層：黒色（10YR2/1）土。焼土、炭化物をや
や含む。

7：柱b層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層を多く含む。

8：柱c層：黒色（10YR2/1）土。炭化物粒、焼土粒
を含む。8'はベンガラが集中している。

9：柱d層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層が細かく入る。

10：柱e層：黒褐色（10YR2/2）土。2cm程の3層
をやや含む。

11：柱f層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層をやや含む。
炭化物を多く含む。

12：柱g層：黒褐色（10YR2/2）土。5層～7a層を
まだらに含む。

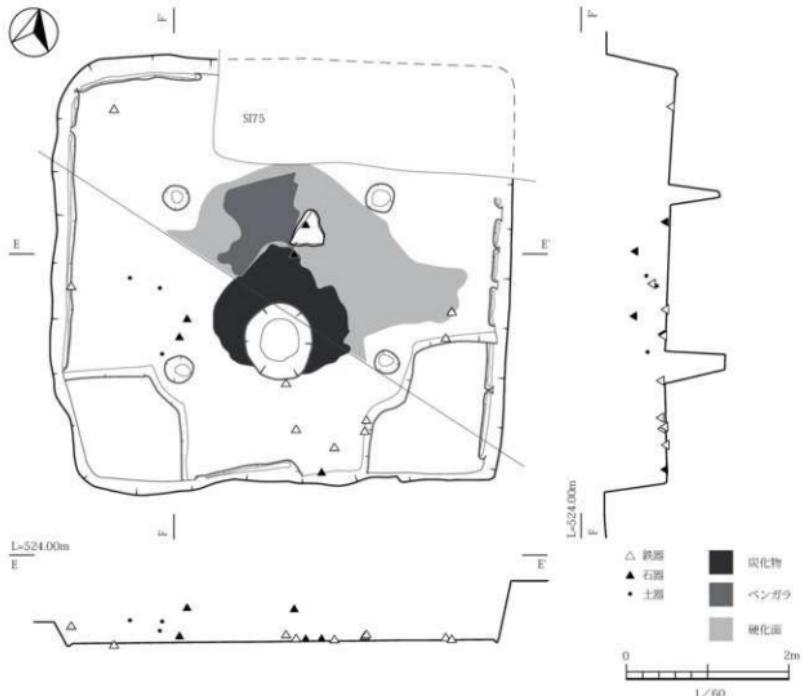


図308 積穴建物（SI66）遺物分布図

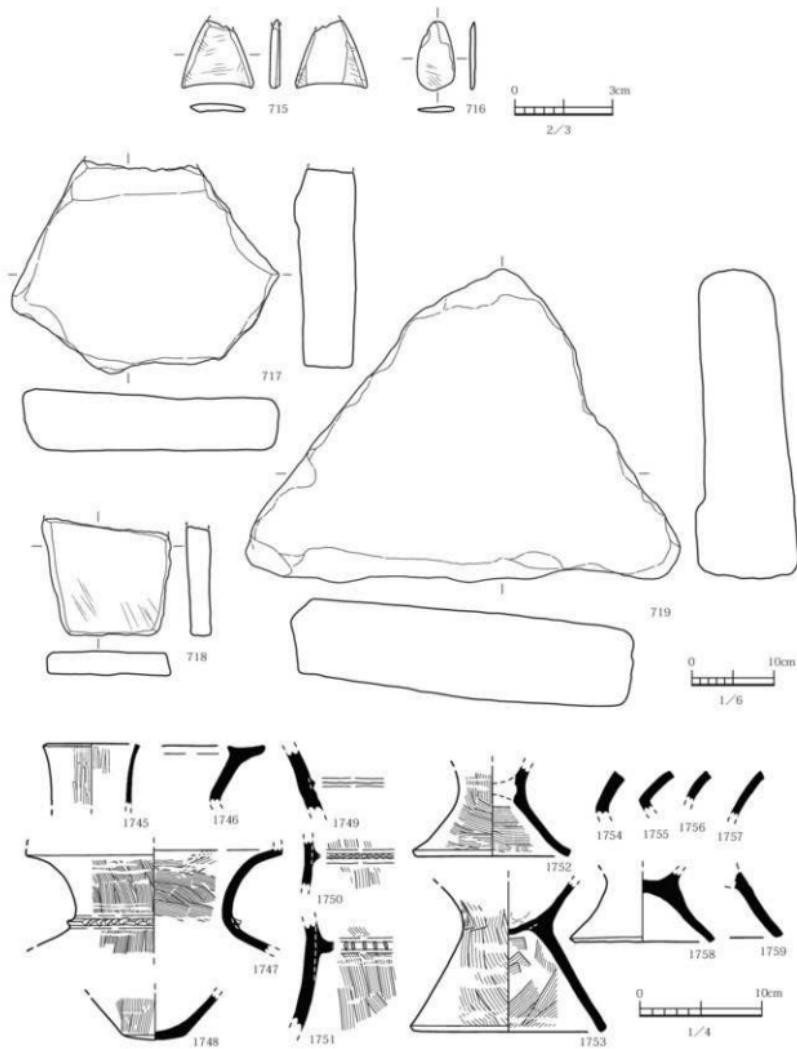


図309 穹穴建物（5166）出土石器（RQ）、土器（RP）実測図

13: 床a層: 黒褐色(10YR2/2)土。炭化物を含む。
5層(暗褐色10YR3/3)を5cm以下のブロックで含む。

SI67

SI67は、調査区17区、622グリッドに位置し、5.6m × 4.7mの方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.5mを測り、ベッド状遺構をそなえている。SI72に切られる。

主柱穴は、2基を掘削し、直径0.3m、深さ0.8mを測る。なお、完掘写真には南西主柱穴が記録されている。

ベッド状遺構は、実測図には記録されていない。なお、完掘写真には北東隅、北西隅、南西隅にベッド状遺構が記録されている。

硬化面は、内陣、北と西の外陣、北西隅ベッド状遺構上面で検出された。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。また、発掘作業担当者は、SI67の上位2層を別遺構SX32として調査している。これはSI67内に土壤が堆積するの埋没過程において形成される土壤様の窪みに、焼土、炭化物、鏽化鉄が多く堆積している状態を「不明遺構」として取り扱ったものである。そのため、土

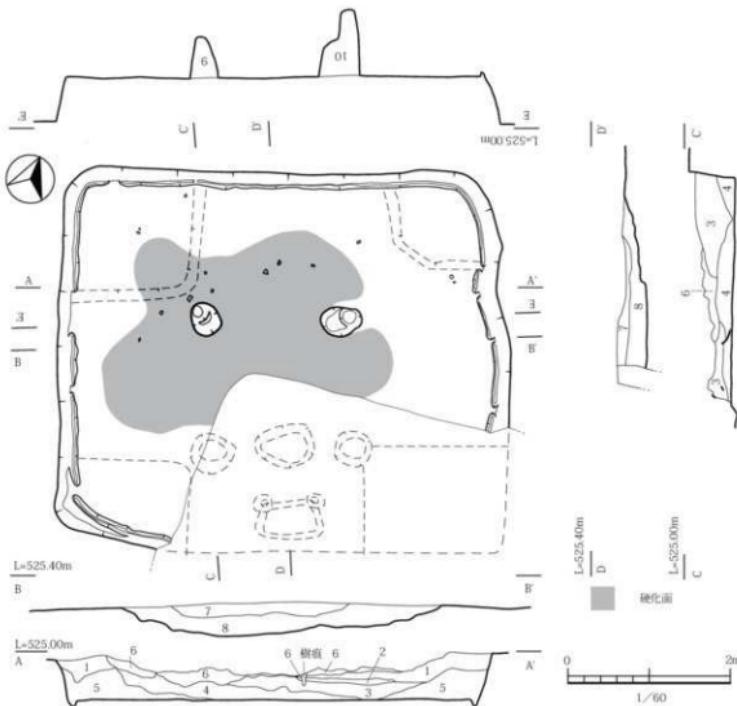


図310 竪穴建物(SI67) 実測図

層断面が上位 2 層は別軸で記録されており、煩雑ではあるが記録のまま掲載する。おって、この現象は、SI67 の廃絶に伴う埋め戻し行為の過程で生じる現象であり、当該遺構の埋土形成過程として一括して捉えるのがよい、と報告者は考える。

- 1：埋 1 層：褐灰色（10YR4/1）土。炭化物を少量含む。
- 2：埋 2 層：褐灰色（10YR6/1）土。少々色の濃い褐灰色土に灰が混じった土壤。灰は水平に断続的、小規模に堆積している様子。
- 3：埋 3 層：褐灰色（10YR4/1）土。1 よりわずかに色が濃い。
- 4：埋 4 層：褐灰色（10YR4/1）土と明赤褐色酸化物層（5YR5/6）。1 や 3 の土壤に酸化物が混在する層。褐灰色土、酸化物、炭化物が互層を成すように堆積している。
- 5：埋 5 層：黒褐色（10YR3/1）土。所々ににぶい黄

褐色ブロック（10YR5/4）が散在している。

- 6：埋 a 層：明赤褐色（5YR5/6）酸化物層。断面図では 3 群に分かれているのは、時期の区分を表している模様。「SX32」酸化物層。
- 7：埋 b 層：黒褐色（10YR2/2）土。やや粗く、焼土粒、炭化物を多く含む。「SX32」埋 1 層。
- 8：埋 c 層：黒色（10YR1.7/1）土。焼土粒とおびただしい炭化物を含む。「SX32」埋 2 層。
- 9：柱 a 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物、褐鉄鉱を含む。
- 10：柱 b 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物粒、細かい 7a 層を含む。

SI68

SI68 は、調査区 17 区、630 グリッドに位置し、5.9m × 2.2m が調査対象の、方形を呈する 4 本柱建て竪穴



図 311 竪穴建物（SI67）遺物分布図

建物である。検出面からの深さ 1.2m を測り、ベッド状遺構をそなえている。

主柱穴は、北西主柱穴 1 基を掘削し、直径 0.2m、深さ 0.6m を測る。なお、北東主柱穴と推定できる小土壙が、完掘状況写真に記録されているので平面図に追記した。

ベッド状遺構は、検出されていない。なお、北西隅にベッド状遺構が設置され、北東隅にも存在する可能性が高い状況が、完掘状況写真に記録されている。北西隅ベッド状遺構については平面図に追記した。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/1）土。

2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。1cm 以下の 3 層ブロックを含む。全体に焼土粒、炭化物を細かくまんべんなく含む。2' は埋 2 層で焼土が集中している。

3：埋 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。3cm 以下の 3 層ブロックを多く含み、炭化物粒も多い。

4：埋 4 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物、焼土を多く含む。3cm 以下の 3 層ブロックも入る。

5：埋 5 層：黒色（7.5YR2/1）土。3cm 以下の 3 層ブロックをやや含む。焼土粒、炭化物粒を含む。

6：埋 6 層：黒色（7.5YR1.7/1）土。焼土粒を多く含む。

7：埋 7 層：黒色（7.5YR2/1）土。5cm 以下の 3 層ブロックを多く含む。

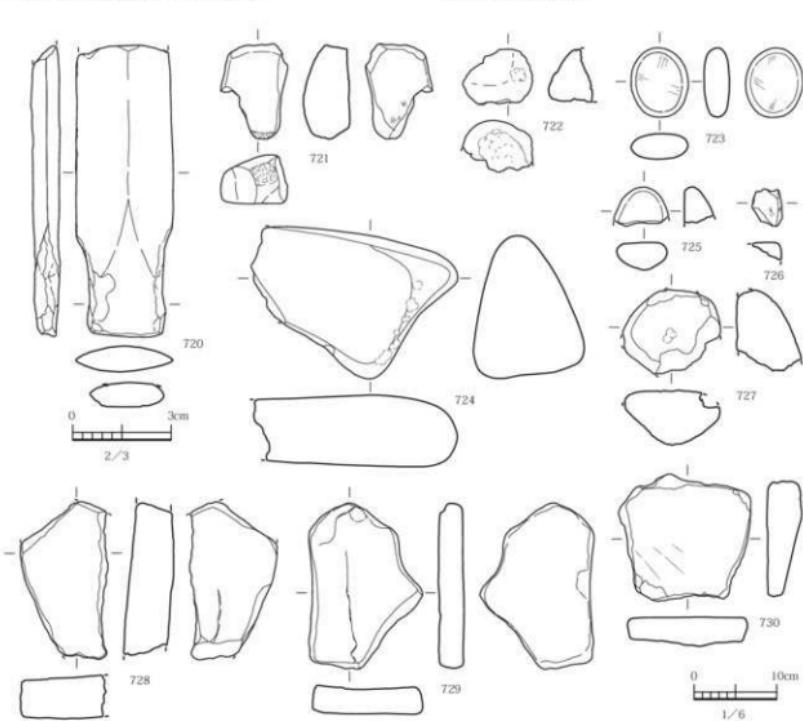


図 312 穴建物 (SI67) 出土石器 (RQ) 実測図

8：柱a層：黒（10YR2/1）土。炭化物をやや含む。

SI69

SI69は、調査区17区、627グリッドに位置し、6.9m×3.5mが調査対象の、方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.5mを測り、炉、Kピット、ベッド状遺構をそなえている。SI77を切る。

主柱穴は、南西主柱穴と南東主柱穴の2基を掘削し、直径0.2m、深さ0.7mを測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.9m、深さ0.2mのボウル形を呈している。なお、炉には、幅20cm程

の周堤が付設していることが、炉使用時完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数cmで、なだらかに床面へと続いている。炉の周囲には炭化物が検出された。

Kピットは、直径1.1m、深さ30cm程の円形土壙が、炉の南側、南側壁中央に位置している。Kピットの西側には、同規模の土壙が検出された。これら2基の土壙からは、土器、礫が検出されている。なかでもKピットでは土器群の上位に拳大の礫、数点が点在していた。炉とKピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、南西隅で検出され、幅0.8m、高さ10cmを測る。ベッド状遺構は、南側壁と東側壁

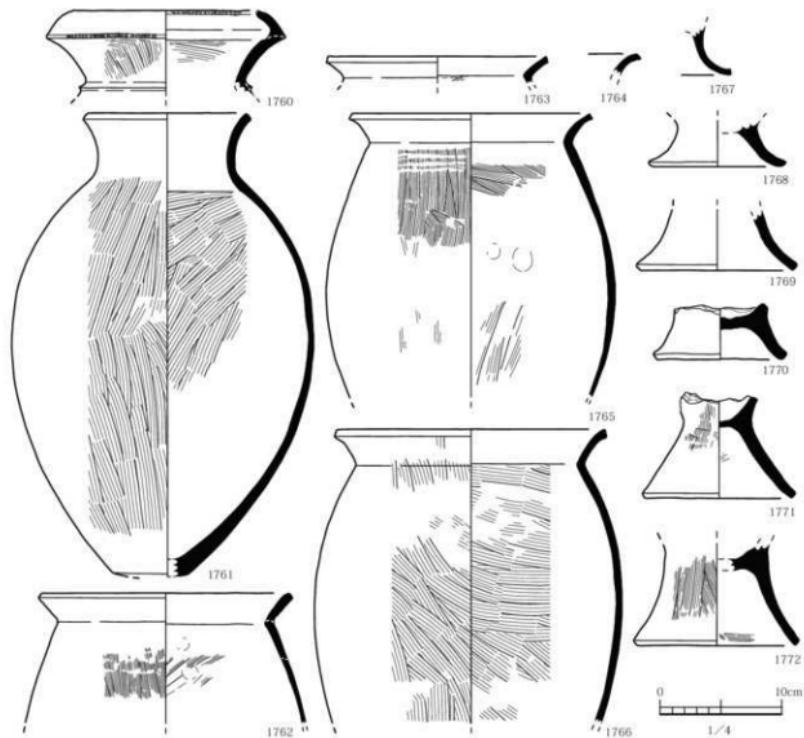


図313 竪穴建物(SI67)出土土器(RP)実測図

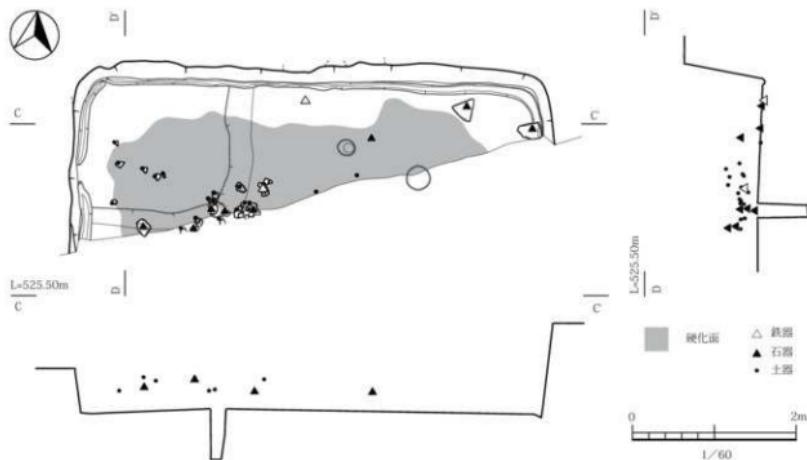
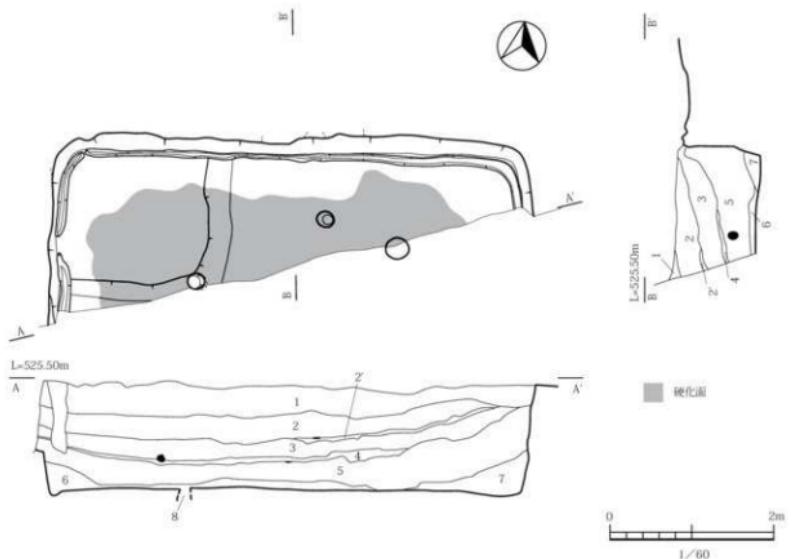


図 314 穂穴建物 (SI68) 実測図・遺物分布図

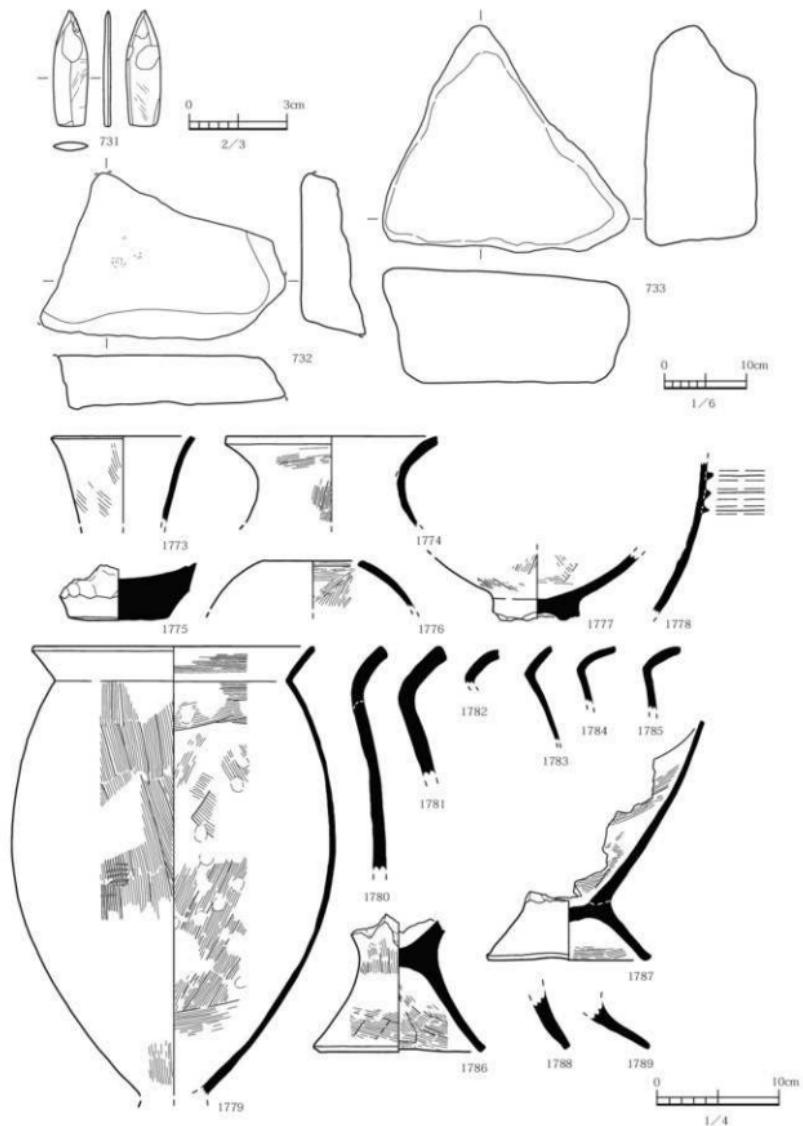


図 315 穂穴建物 (SI68) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図



図 316 穂穴建物 (SI69) 実測図・遺物分布図

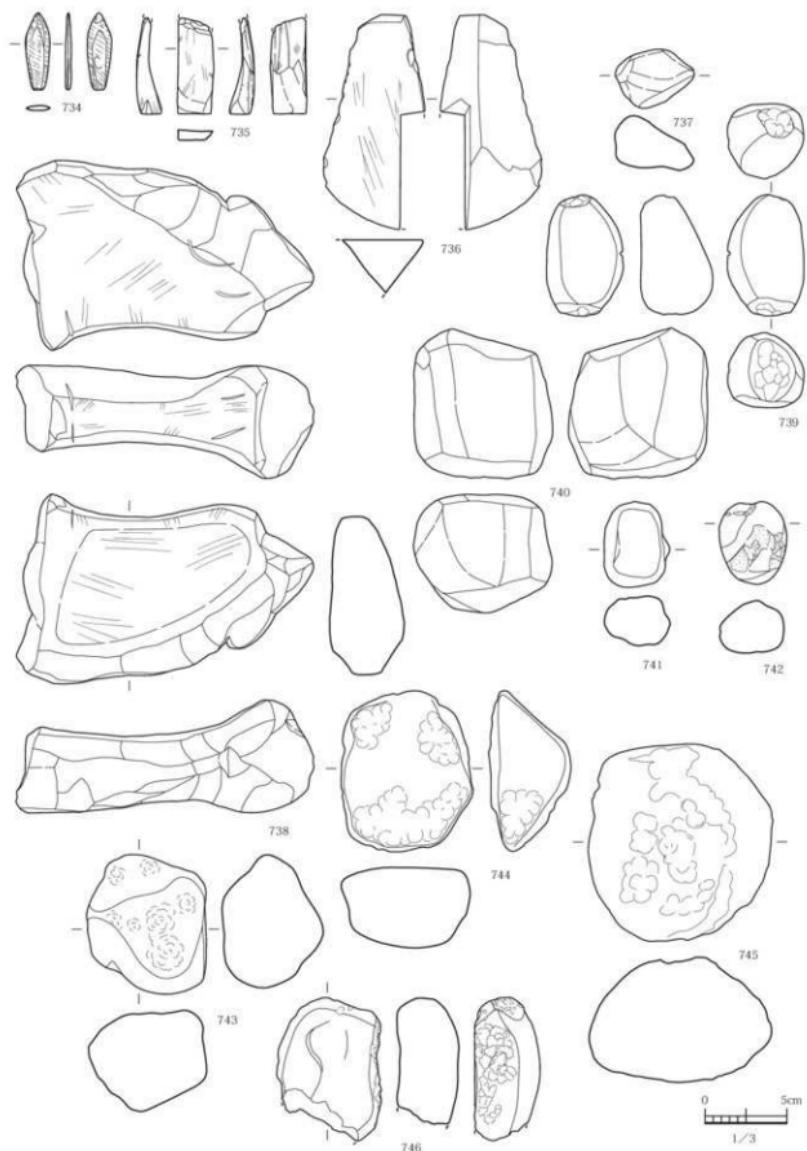


图 317 壁穴建物 (SI69) 出土石器 (RQ) 実測図

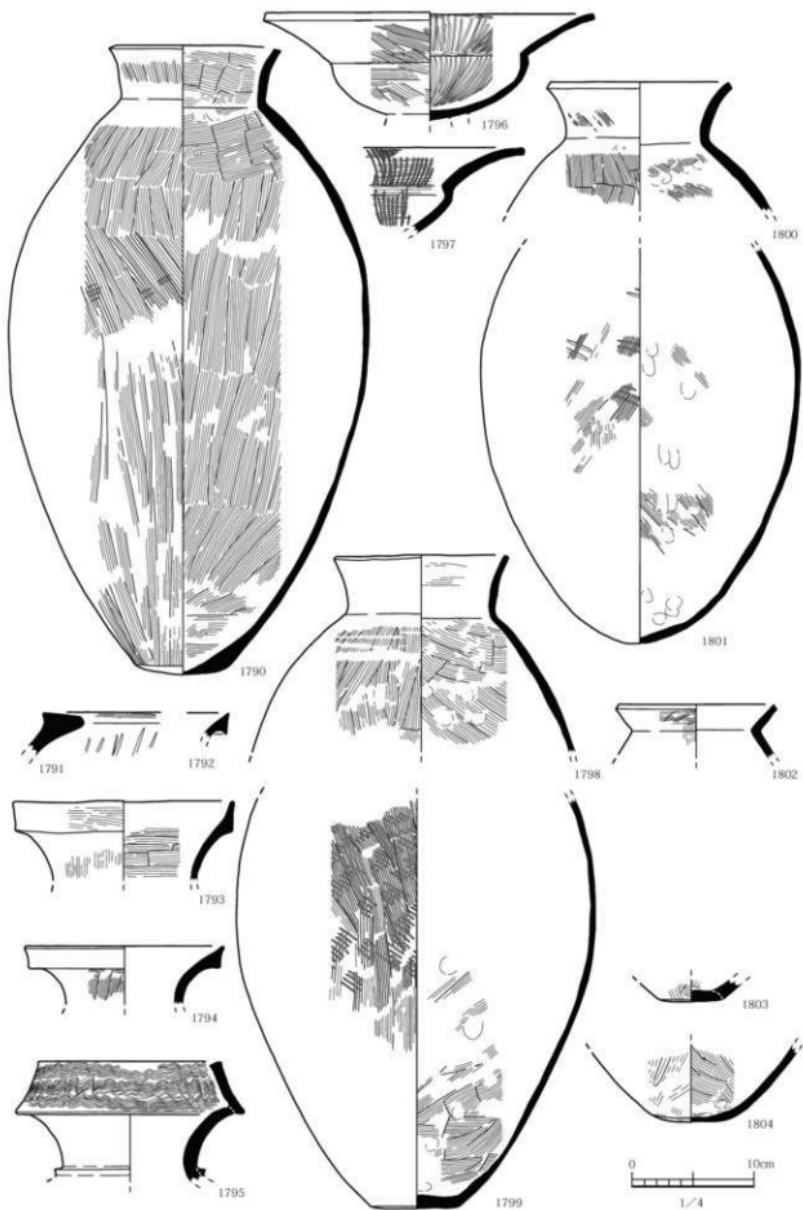


図 318 穹穴建物 (S169) 出土土器 (RP) 実測図 (1)

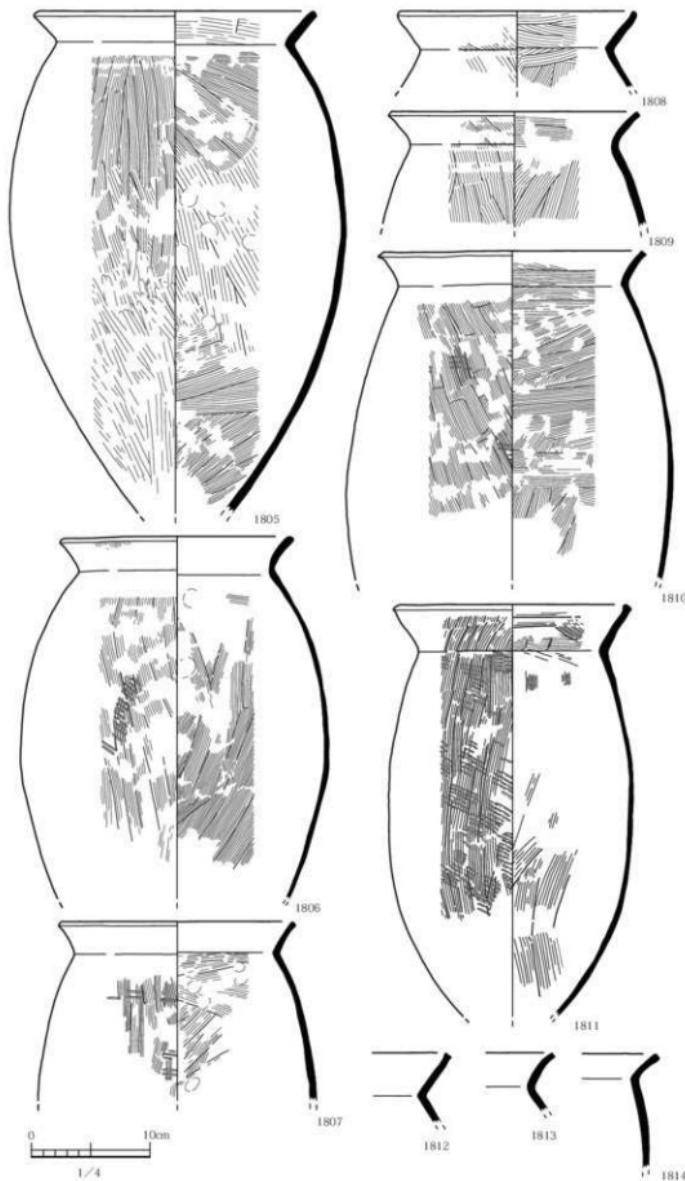


図 319 穹穴建物 (S169) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

に沿って伸長し、L字形の形態となっている。

硬化面は、内陣、炉とKピットの間で検出している。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。混入物はほとんどない。1cの2次堆積土。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。直径5cm大の3層ブロックを含む。細かい炭化物を含む。

3：埋3層：黒色（10YR2/1）土。直径1cm程の3層をやや含む。全体に炭化物をまんべんなく含む。

4：埋4層：黒褐色（10YR2/2）土。3層と細かい炭化物をわずかに含む。

5：炉1層：黒色（10YR1.7/1）土。暗褐色土（3層）をわずかに含み、炭化物を多量に含む。

6：炉2層：黒色（10YR2/1）土。多量の炭化物。

7：炉3層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物を多量に含み、3層ブロックをやや含む。

8：柱a層：黒褐色（10YR2/2）土。暗褐色土（3層）を直径1cm以下で含む。柱痕。

9：柱b層：黒褐色（10YR2/2）土。暗褐色の1cm

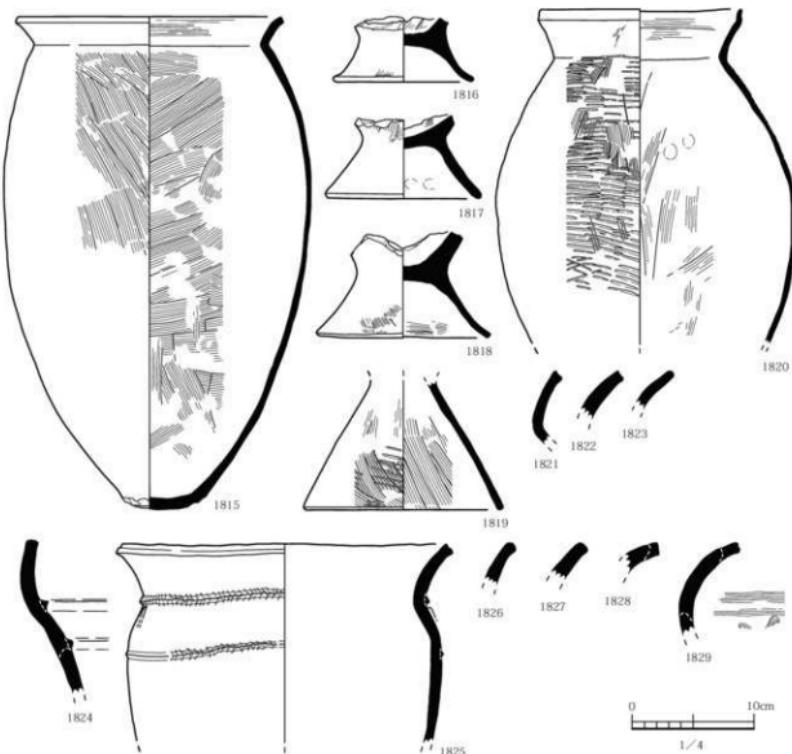


図320 穹穴建物（S169）出土土器（RP）実測図（3）

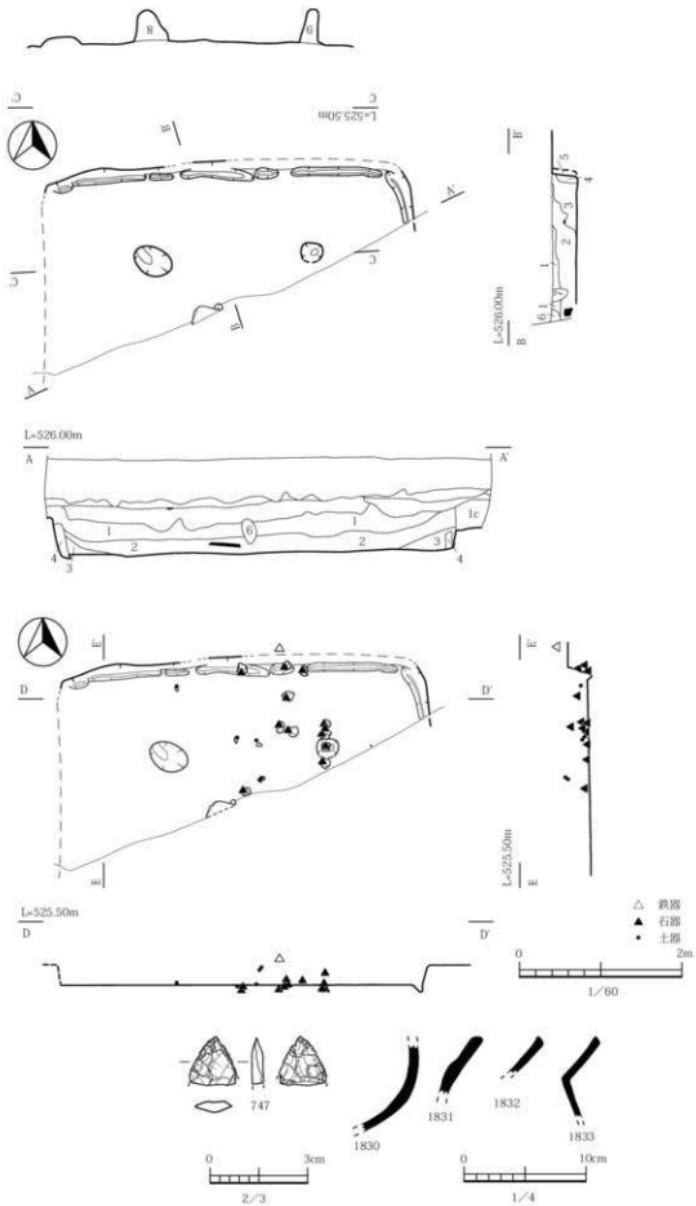


图 321 穹穴建物 (SI70) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

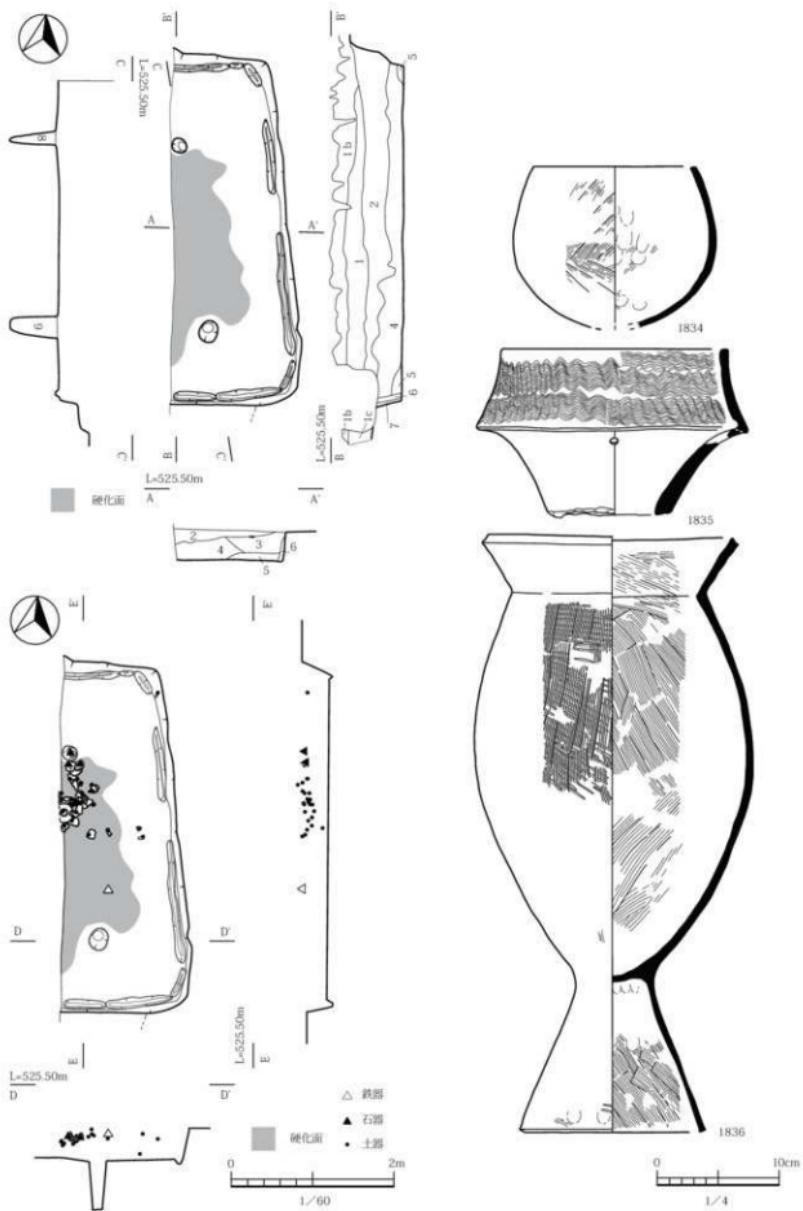


図 322 積穴建物 (SI71) 実測図・遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

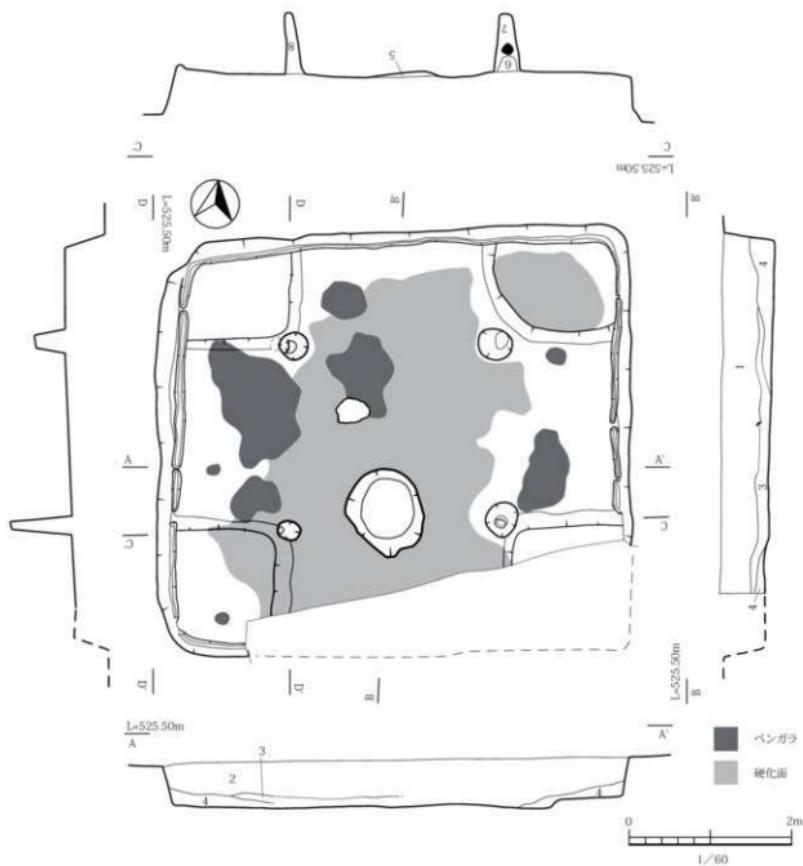


図 323 穫穴建物 (SI72) 実測図

- 以下の硬い土（3層）をやや含み、2mm程の炭化物を含む。柱痕。
- 10：柱c層：黒褐色（10YR2/2）土。3層ブロックを含み、柱b層よりやや明るく見える。
- SI70**
- SI70は、調査区17区、620グリッドに位置し、方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.6mを測り、4.5m×2.3mの範囲が発掘作業の対象となった。SI73を切る。
- 主穴は、2基を掘削し、直徑0.3m、深さ0.4mを測る。
- 層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。
- 1：埋1層：褐色（7.5YR4/3）土。炭化物がごく少量散見できる。
 - 2：埋2層：黒褐色（7.5YR3/1）土。炭化物の含有は1より多い。少量のにぶい褐色土ブロック（最大径3cm位）を含む。
 - 3：埋3層：黒色（7.5YR2/1）土。2より色調が濃い。砂を含む。
 - 4：埋4層：黒色（7.5YR1.7/1）土。黒色土中に炭化物を多く含んでいる。
 - 5：埋5層：黒色（7.5YR2/1）土。にぶい褐色土

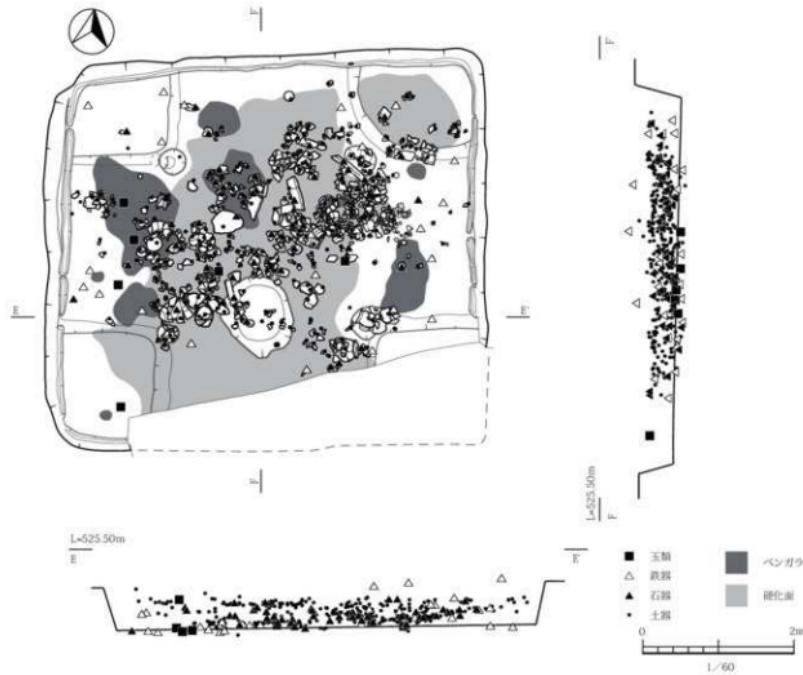


図324 穴建物(SI72)遺物分布図

- (7.5YR5/3) ブロックを含む。
- 6: 摂乱: 暗褐色(7.5YR3/3)土。最大径3cm程度のにぶい橙色土(7.5YR6/4)を多く含んでいる。樹痕。
- 7: 摂乱: 黒褐色(7.5YR3/2)土。小さなにぶい橙色土粒を含んでいる。
- 8: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。焼土粒、炭化物粒をやや含む。
- 9: 柱b層: 黒色(10YR2/1)土。炭化物をやや含む。

SI71

SI71は、調査区17区、623グリッドに位置し、方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.6mを測り、1.4m×4.3mの範囲が発掘作業の対象となった。

主柱穴は、北東主柱穴と南東主柱穴の2基を掘削し、直径0.2m、深さ0.6mを測る。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1: 埋1層: 黒色(10YR2/1)土。きめ細かく混入物も少ない。
- 2: 埋2層: 黒色(10YR2/1)土。1に似るが炭化物を含み、多量の土器が入る。
- 3: 埋3層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径1cm以下の3層を含む。
- 4: 埋4層: 黒褐色(10YR2/2)土。3に似るが3層ブロックが5cm以下で入る。
- 5: 埋5層: 黒褐色(10YR2/2)土。直径2cm程の3層ブロックが入る。3・4よりやや粘性あり。
- 6: 埋6層: 黒色(10YR2/1)土。側壁構の埋土。
- 7: 埋7層: 黒色(10YR2/1)土。1cm以下の3層がやや入る。
- 8: 柱a層: 黒色(10YR2/1)土。1cm大の5層をやや含む。炭化物粒をやや含む。

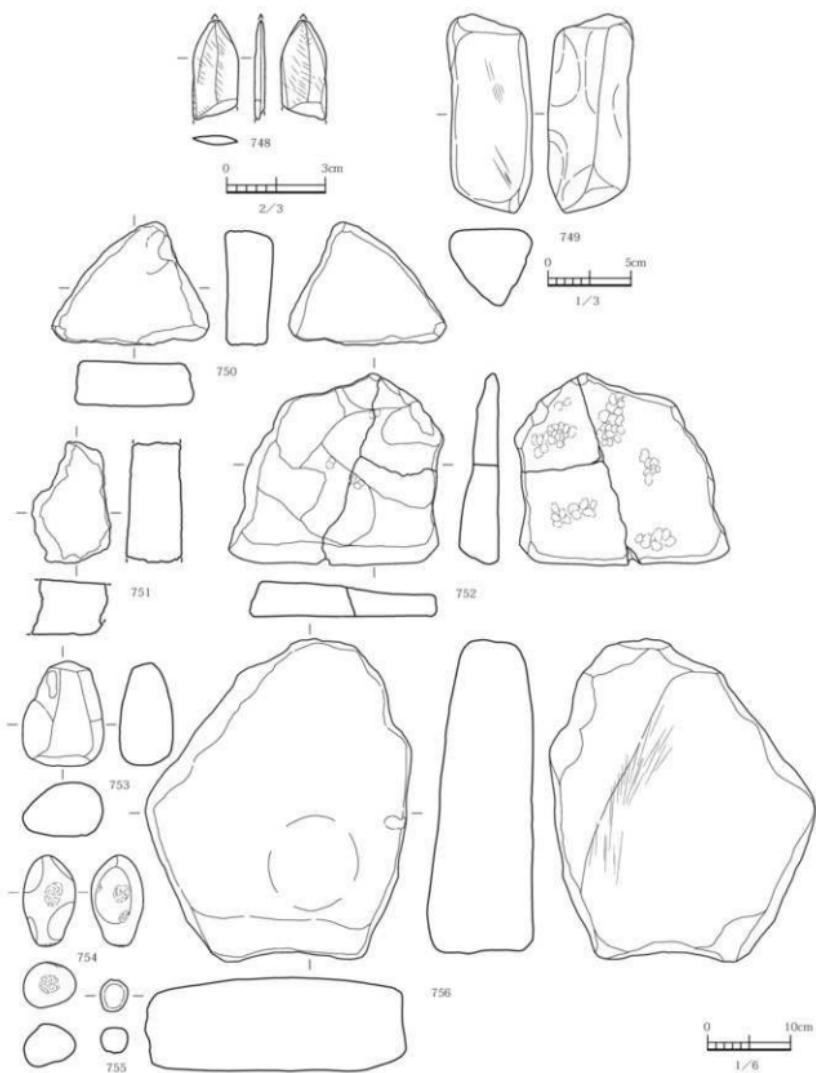


图 325 穹穴建物 (SI72) 出土石器 (RQ) 実測図

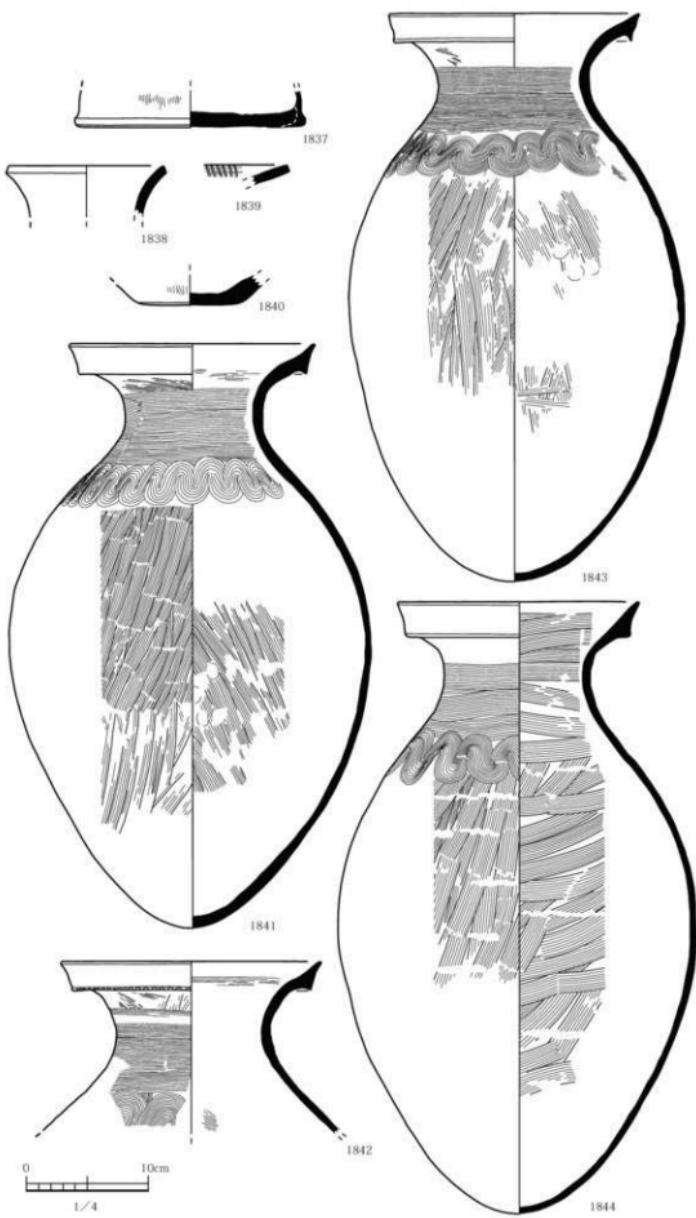
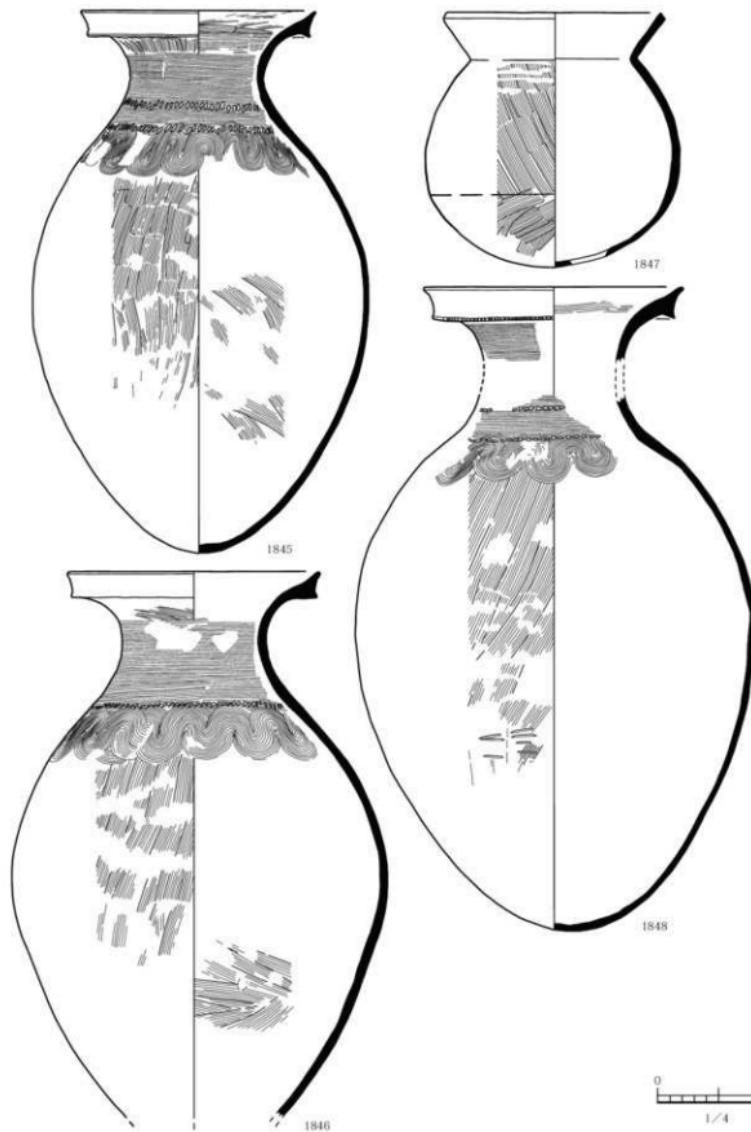


図 326 穹穴建物 (SI72) 出土土器 (RP) 実測図 (1)



0 10cm
1/4

図 327 積穴建物 (SI72) 出土土器 (RP) 実測図 (2)

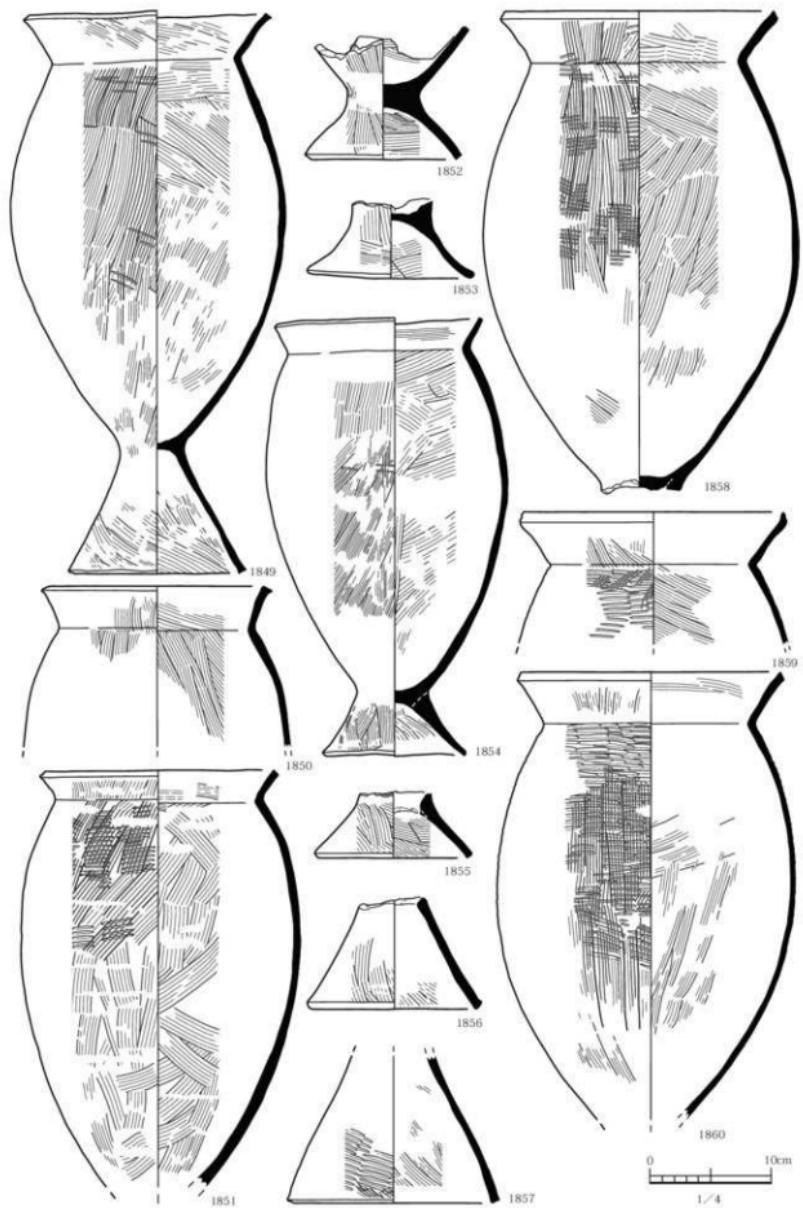


図 328 壁穴建物 (SI72) 出土土器 (RP) 実測図 (3)

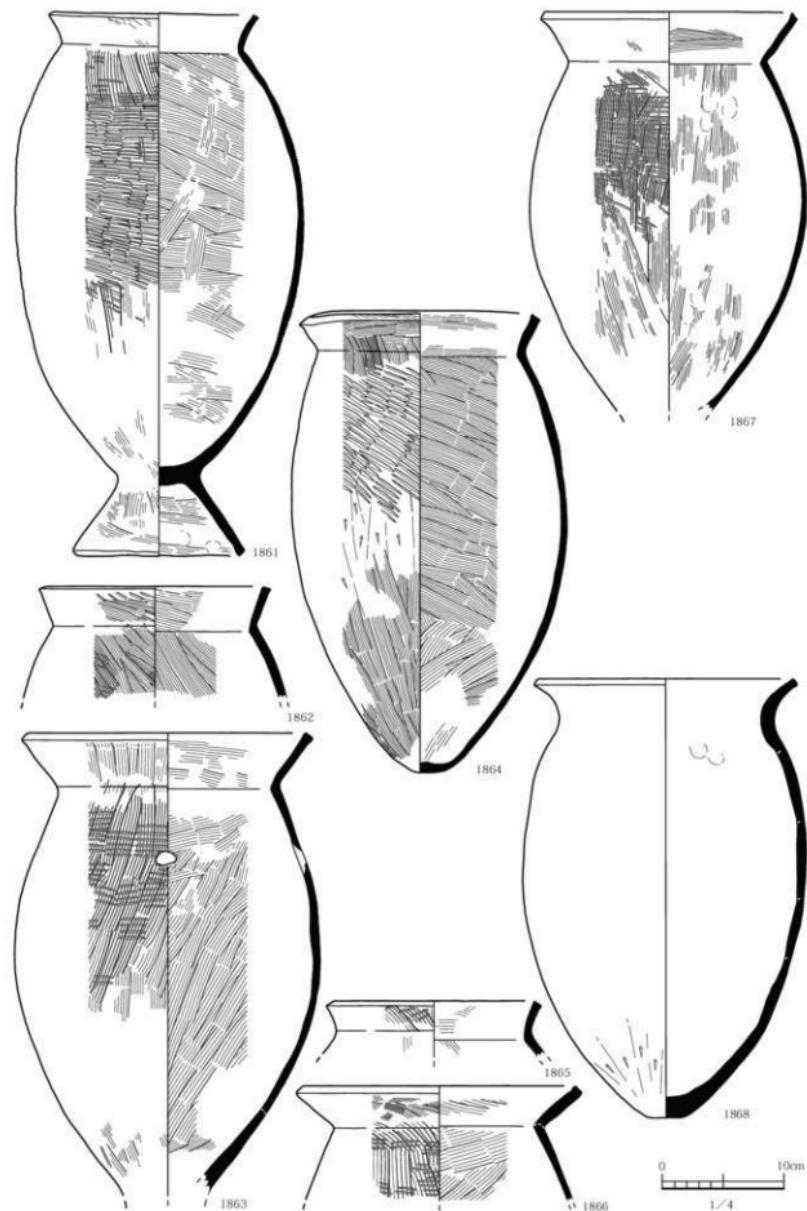


図 329 穹穴建物 (SI72) 出土土器 (RP) 実測図 (4)

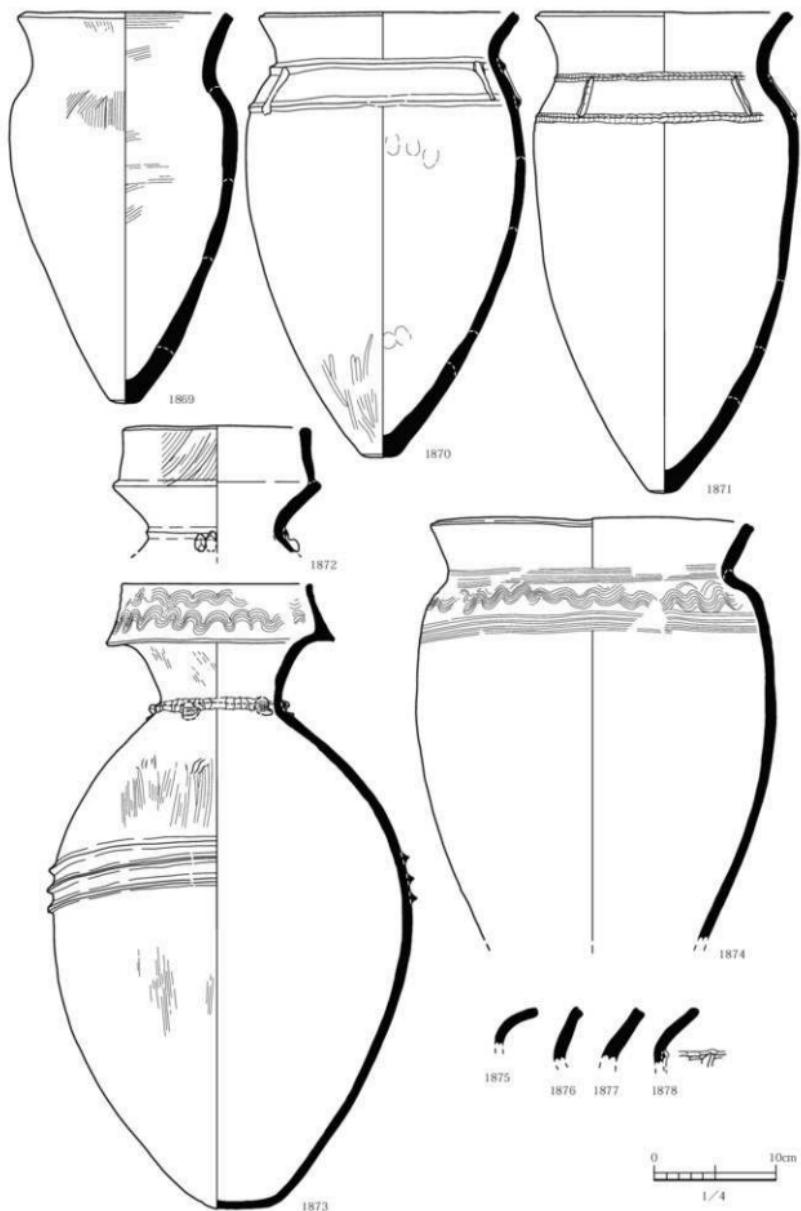


図 330 穴建物 (S172) 出土土器 (RP) 実測図 (5)

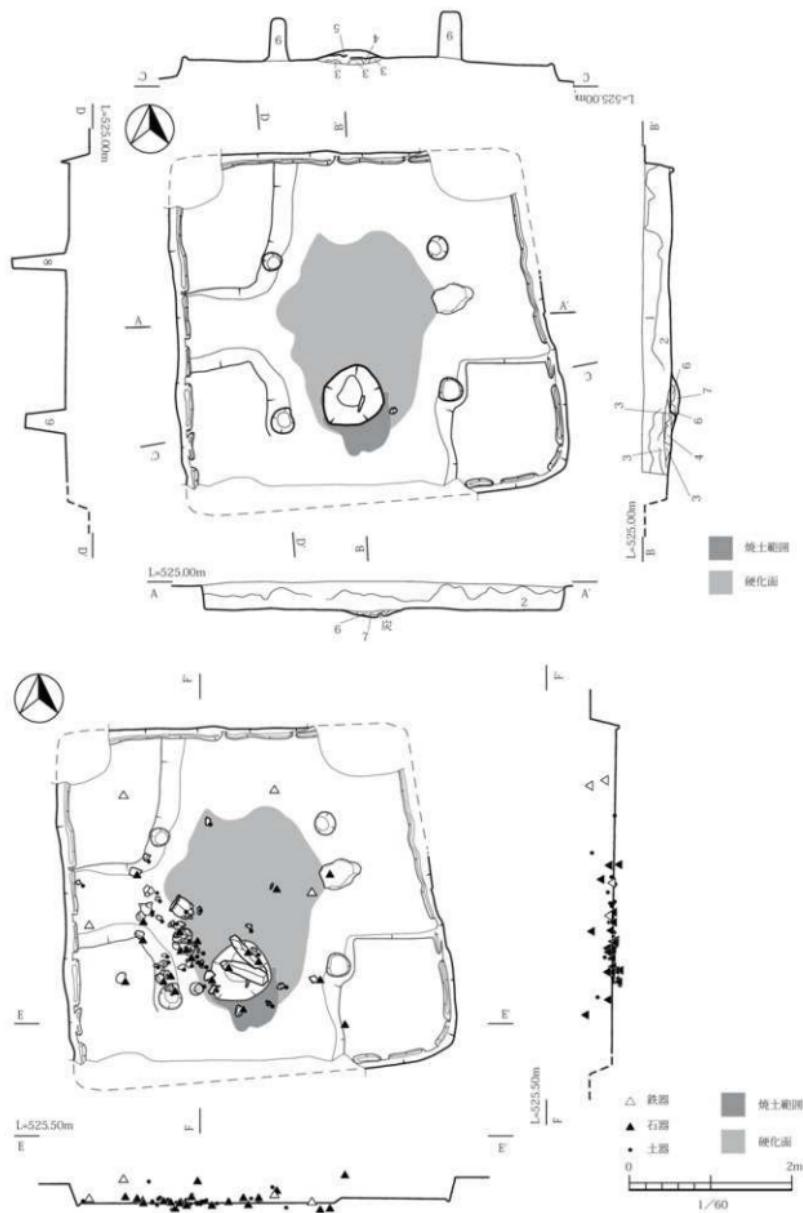


図 331 穂穴建物 (SI73) 実測図・遺物分布図

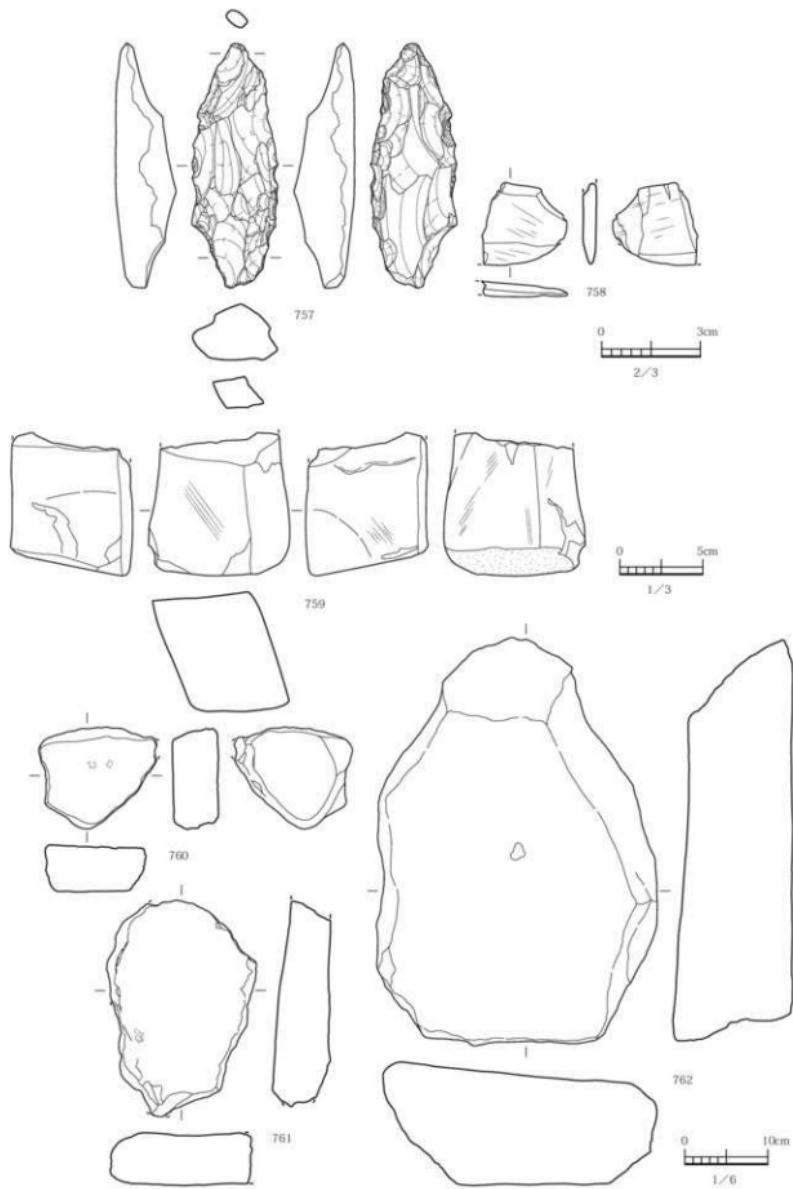


図 332 穹穴建物 (SI73) 出土石器 (RQ) 実測図

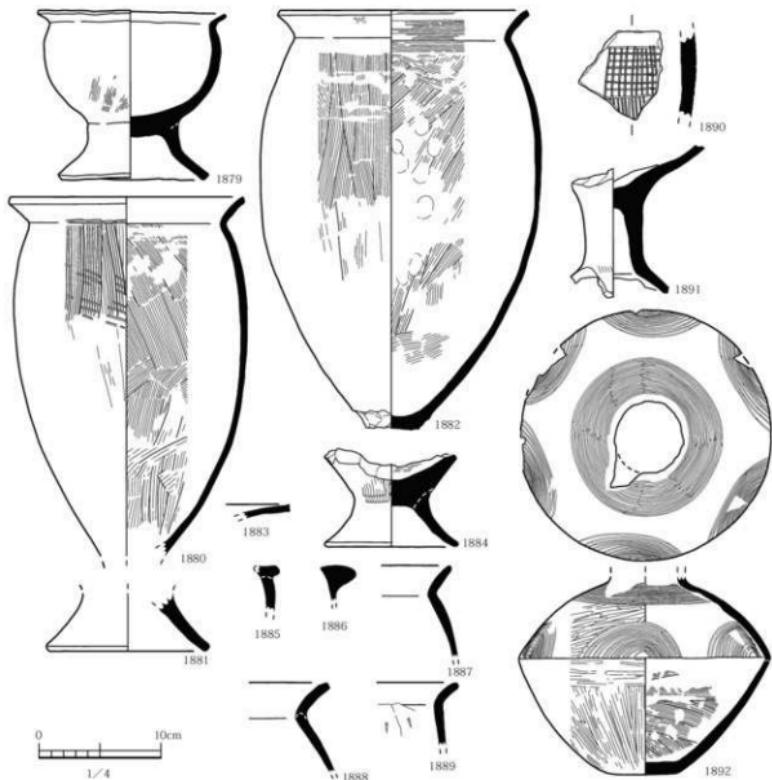


図 333 穫穴建物 (SI73) 出土土器 (RP) 実測図

9: 柱 b 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3cm 以下の 5 層を多く含む。

SI72

SI72 は、調査区 17 区、626 グリッドに位置し、5.9m × 5.1m の方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。SI67、SI73 を切る。

SI72 は、攻玉遺構である。勾玉未成品 2 点、菅玉未成品 1 点が検出されている。

主柱穴は、4 基を掘削し、直徑 0.3m、深さ 0.7m を測る。なお、北西、南西、南東の各主柱は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。主柱穴の周囲床面には硬化面がない範囲があり、これが抜取

り痕の範囲である。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直徑 1m、深さ 0.1m の皿形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは 5cm 以上で、なだらかに床面へと続き、炉底には 5: 炉 a 層が確認できる。SI39 と同様の発掘作業内容の結果である。

ベッド状遺構は、竪穴建物の四隅に設置され、幅 1.2m、高さ 0.1m を測る。

層序は次のとおりである。

1: 1c 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。炭化物、焼土をわずかに含む。

2: 埋 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。炭化物をやや含

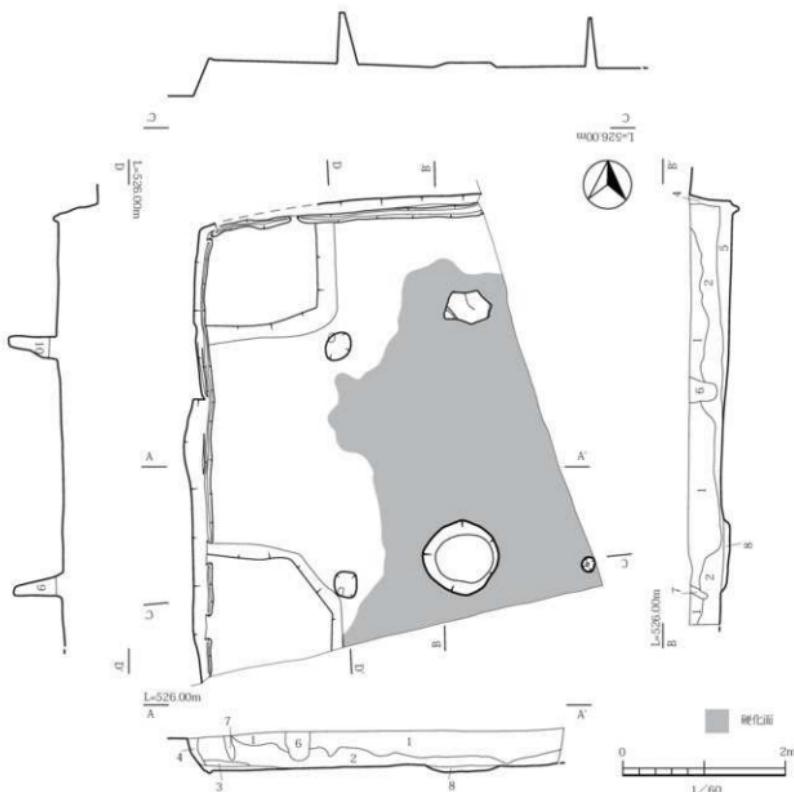


図 334 穹穴建物 (SI74) 実測図

- む。土器を多量に検出。
- 3: 墓 3 層: 黒色 (10YR2/1) 土。焼土、炭化物を多く含む。
- 4: 墓 4 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物をやや含む。
3 層をわずかに含む。
- 5: 炉 a 層: 黒 (10YR2/1) 土。焼土、炭化物を多く含む。
- 6: 柱 a 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物をやや含む。
- 7: 柱 b 層: 黒色 (10YR2/1) 土。1cm 以下の 3 層と細かい 7a 層を含む。
- 8: 柱 c 層: 黒色 (10YR2/1) 土。1cm 以下の 3 層を含み炭化物をやや含む。

SI73

SI73 は、調査区 17 区、621 グリッドに位置し、4.6m × 4.4m の方形を呈する 4 本柱建て穹穴建物である。検出面からの深さ 0.3m を測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。SI70、SI72 に切られる。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.6m を測る。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.7m、深さ 0.1m のボウル形を呈している。

ベッド状遺構は、北西隅、南西隅、南東隅で検出され、幅 1.3m、高さ 10cm を測る。北東隅は SI72 に切られているためベッド状遺構が検出できなかつもの、と考えてよい。ベッド状遺構は、穹穴建物の四隅に設置されていた可能性が高い。

硬化面は、内陣で検出されている。

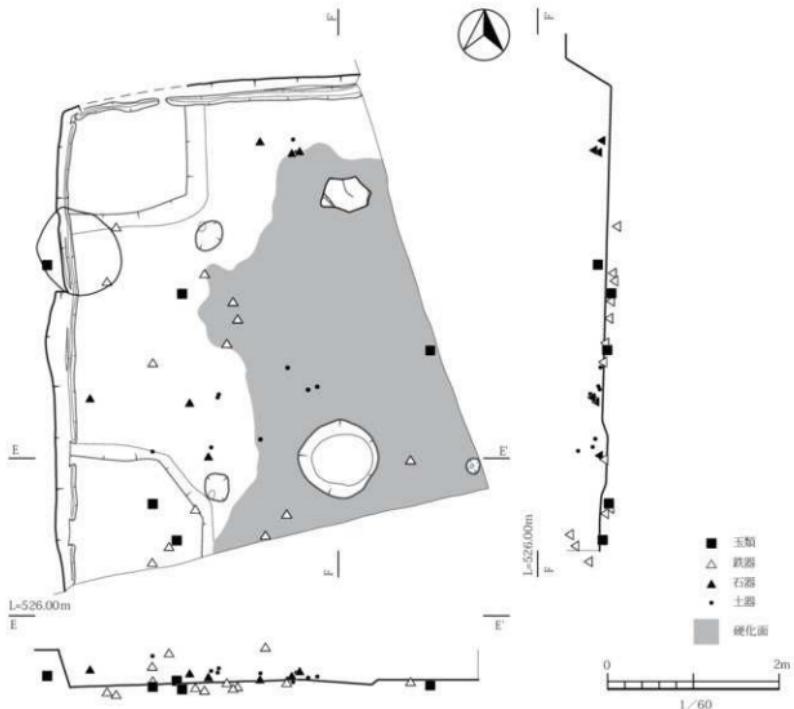


図335 積穴建物(SI74)遺物分布図

- 層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。
- 1: 墓 1 層: 黒色 (10YR2/1) 土。暗褐色土 (3 層) のブロックを直径 1cm 以下でやや含む。
 - 2: 墓 2 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。暗褐色土 (3 層) を直径 1cm 程で全体にまんべんなく含み、オレンジ色の焼土粒、炭化物粒をやや含む。
 - 3: 墓 3 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。焼土を多く含む。焼土 a 層と同一。
 - 4: 焼土 a 層: 褐色 (7.5YR4/6) 土。明褐色の焼土と炭化物を多量に含む。
 - 5: 焼土 b 層: 黒褐色 (7.5YR2/2) 土。焼土を含む。
 - 6: 炉 1 層: 褐色 (7.5YR4/4) 土。焼土、炭化物を多量に含む。
 - 7: 炉 2 層: 黒褐色 (7.5YR2/2) 土。焼土、炭化物を含む。
 - 8: 柱 a 層: 黒色 (7.5YR2/1) 土。焼土粒、炭化物粒

を含み、3 層が 1cm 以下でまんべんなく入る。
9: 柱 b 層: 黒色 (7.5YR2/1) 土。焼土粒、炭化物粒を含み、3 層が直径 2cm 以下で全体に入る。

SI73 の理 1 層から、建物を線描した絵画土器 1 点 (RP1890) が検出された。

SI74

SI74 は、調査区 19 区、651 グリッドに位置し、4.6m × 5.5m が調査対象の、方形を呈する 4 本柱建て積穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、ベッド状遺構をそなえている。

SI74 は、攻玉遺構である。勾玉未成品 2 点が検出されている。

主柱穴は、北東主柱穴を除く 3 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.6m を測る。なお、これらの主柱 3 基は抜き取られていることが、完掘状況写真から判断した。SI74 の主柱穴周囲の床面では硬化面が検出され

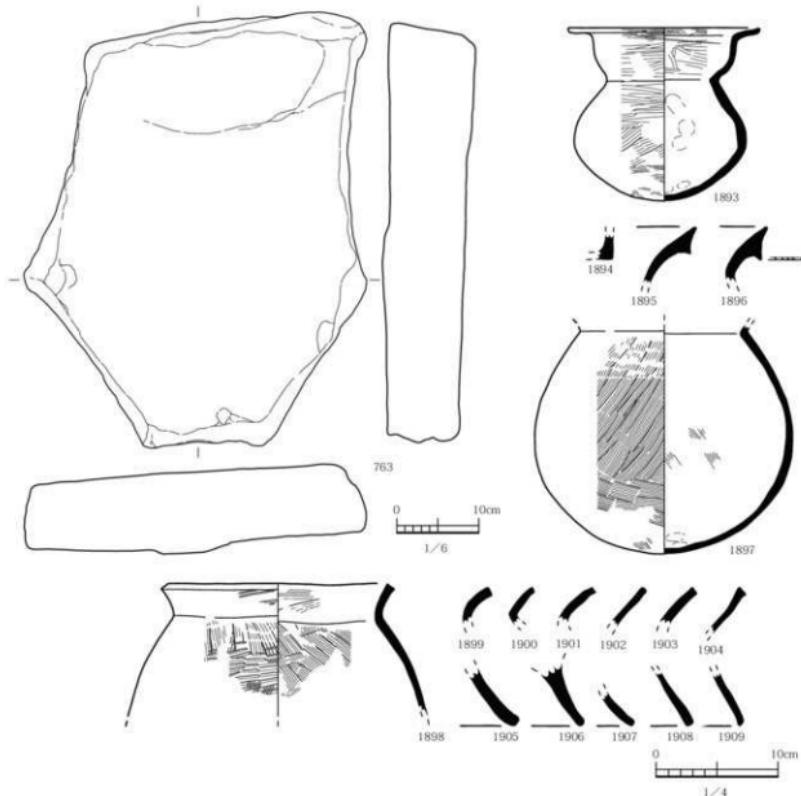


図336 穫穴建物(SI74)出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

ない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。南東主柱穴の周囲には硬化面が図示されているが、床面より一段低まって掘削されており、硬化面が形成されず2：埋2層が堆積している状態であるため、抜取り痕と判断できる。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径0.9m、深さ0.1mの皿形を呈している。なお、炉には、幅20cm程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、炉完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数cmで、なだらかに床面へと続き、炉底には8：炉a層が確認できる。

ベッド状遺構は、北西隅、南西隅で検出され、幅1.4m、高さ0.1mを測る。

硬化面は、内陣、南部の外陣で検出された。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒色(7.5YR2/1)土。きめが細かい土壌。上部では砂が混在する。
- 2：埋2層：黒褐色(7.5YR3/2)土。所々に灰のような土壌が混入している。
- 3：埋3層：暗褐色(7.5YR3/3)土。黒色土中に黄褐色ブロックや粒子が混入している。
- 4：埋4層：明褐色(7.5YR5/6)土。
- 5：埋5層：褐色(7.5YR4/3)土。
- 6：擾乱：黒色(7.5YR1.7/1)土。きめが細かく柱痕は認められない。
- 7：擾乱：黒褐色(7.5YR2/2)土。樹痕。灰、黄褐色土など多様な土壌が入り込んでいる。

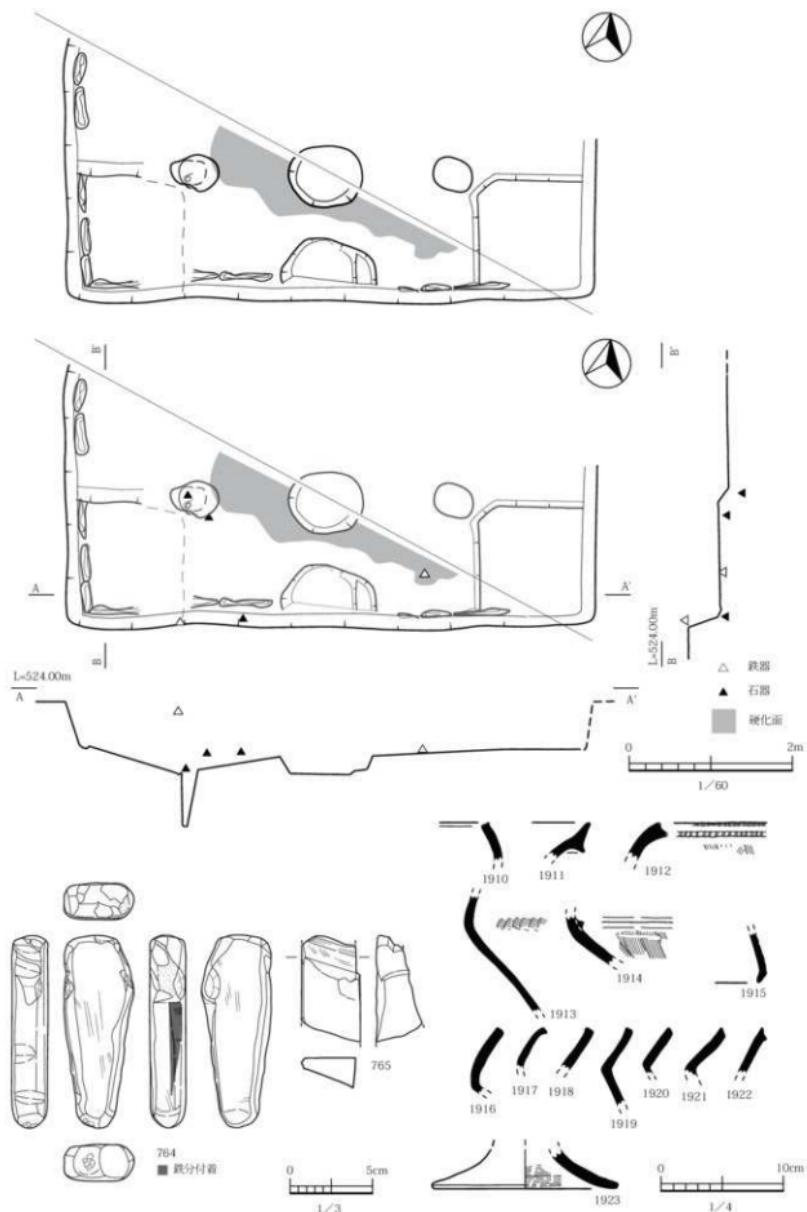


图 337 穹穴建物 (SI75) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

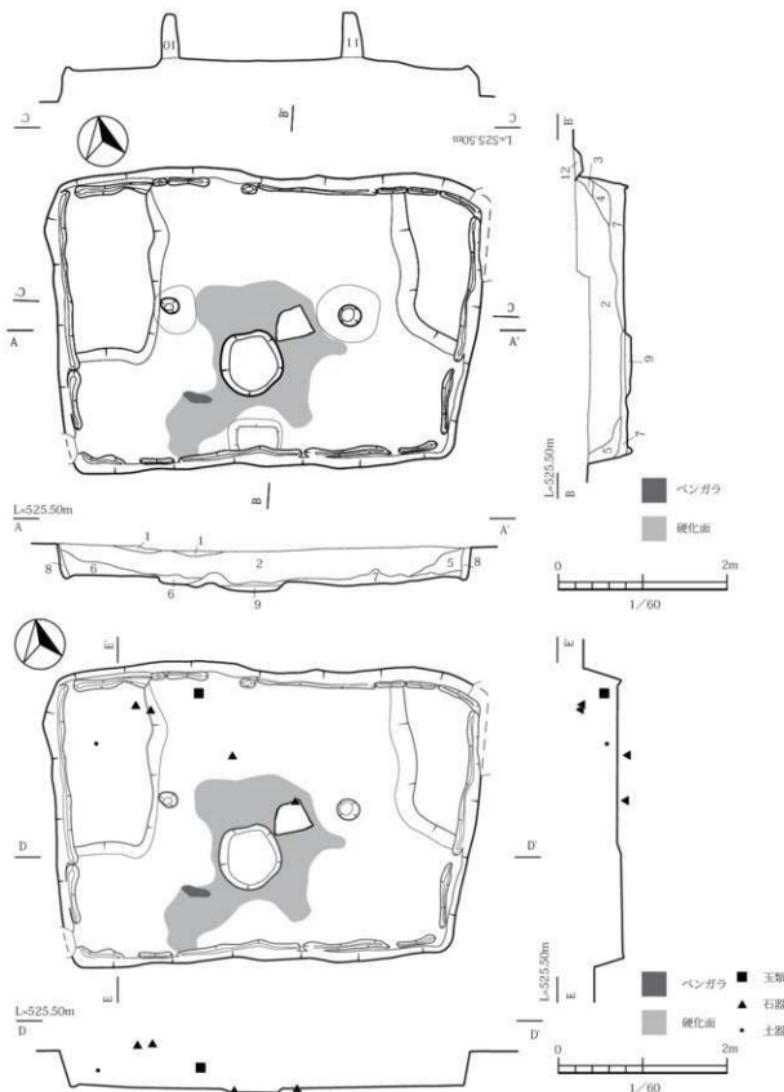


図 338 壁穴建物 (SI78) 実測図・遺物分布図

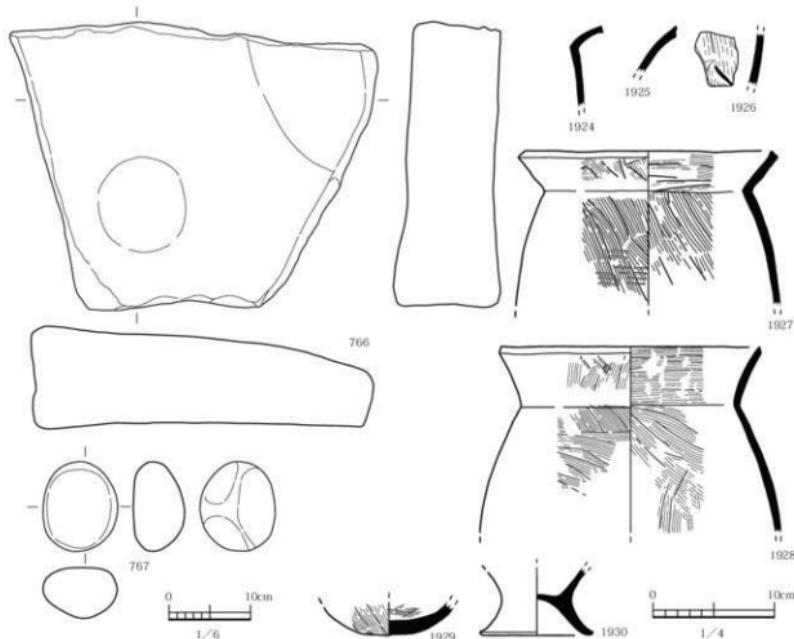


図 339 穴窓建物 (SI78) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

- 8: 炉 a 層: 黒色 (10YR2/1) 土。直径 1cm 以下の炭化物粒や焼土粒をやや含む。直径 2cm 以下のにぶい黄褐色 (10YR5/4) 土のブロックを含んでいる。
 9: 柱 a 層: 黑褐色 (10YR2/2) 土。柱痕。
 10: 柱 b 層: 黑褐色 (10YR2/2) 土。柱痕。焼土粒をやや含む。

SI75

SI75 は、調査区 20 区、572 グリッドに位置し、5.7m × 3.2m が調査対象の、方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.6m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。SI66、SI83 を切る。

主柱穴は、南西主柱穴 1 基を掘削し、直径 0.4m、深さ 0.7m を測る。なお、南西主柱は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。抜取り痕が、トレンチ断面に記録されている。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.9m、深さ 0.3m のボウル形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる

可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底には炭化物を含む黒褐色シルト層が確認できる。

K ピットは、 $1.2 \times 0.6\text{m}$ 、深さ 20cm 程の半円形土壤が南側壁中央に位置している。西側にステップが形成された二段掘り構造となっている。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、南西隅、南東隅で検出され、幅 1.2m、高さ 0.1m を測る。

層序は記録されていない。

SI78

SI78 は、調査区 17 区、634 グリッドに位置し、5m × 3.6m の長方形を呈する 2 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.4m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。円形周溝 SX30 が、北側壁中央で接している。

主柱穴は、2 基を掘削し、直径 0.2m、深さ 0.5m を測る。なお、主柱 2 基は抜き取られていることが、

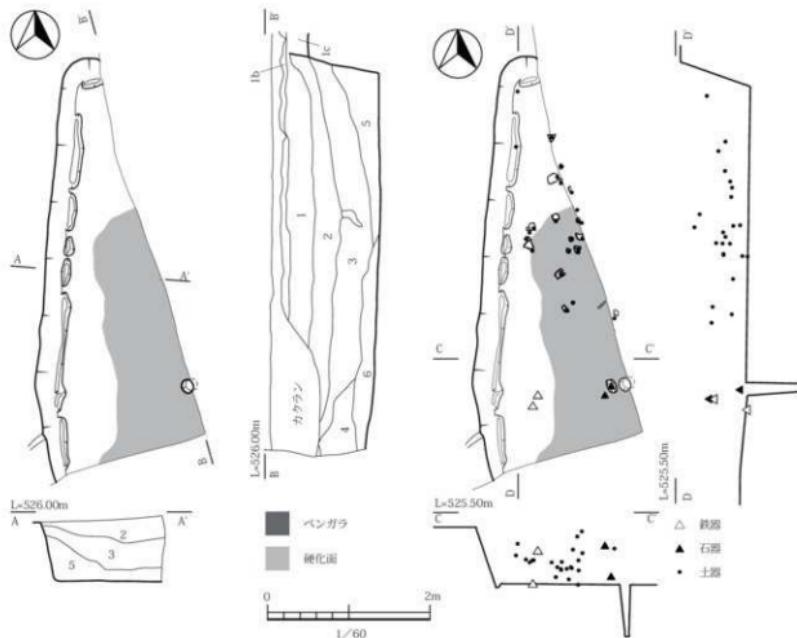


図 340 竪穴建物 (SI79) 実測図・遺物分布図

付帯施設検出状況写真から判明した。ベッド状遺構の内角に接して、硬化面が検出されず遺物も分布しない直径 0.8m 程の円形プランがあり、抜これが抜取り痕の範囲である。

炉は、柱穴間に位置し、直径 0.7m、深さ 0.1m の皿形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していること、炉の形態は漏斗形になる可能性が高いことが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続き、炉底には 9 : 炉 a 層が確認できる。

K ピットは、検出されていない。なお、K ピットが南側壁中央にあることが、完掘状況写真から判明した。K ピットは、南側壁中央に幅 0.8m 程、深さ数 cm の半円形土壤である。炉と K ピットは南北軸が一致している。

以上のとおり復元できる竪穴建物の構造を、平面図にスミ色で追記した。

ベッド状遺構は、東西側壁に沿って、側壁北半部設置され、幅 1m、高さ 0.1m を測る。

硬化面は、炉の周囲で検出された。ベンガラが、炉の西側、K ピットの北側の地点で検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1 : 埋 1 層 : 黒褐色 (7.5YR3/1) 土。細かい炭化物を多く含む。
- 2 : 埋 2 層 : 黒褐色 (10YR2/2) 土。細かい炭化物を多く含む。
- 3 : 埋 3 層 : 黒褐色 (10YR2/2) 土。直径 1cm 程の 3 層土を含む。SX30 の埋土が入り込んでいる。炭化物は入らない。
- 4 : 埋 4 層 : 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物を含む。
- 5 : 埋 5 層 : 黑褐色 (10YR2/2) 土。3 層土を細かく多く含む。
- 6 : 埋 6 層 : 黑褐色 (10YR2/2) 土。直径 1cm 程の 3 層土と炭化物をやや含む。
- 7 : 埋 7 層 : 黑褐色 (10YR2/2) 土。直径 2cm 以下で 3 層ブロックを含む。炭化物を多く含む。
- 8 : 埋 8 層 : 黑色 (10YR2/1) 土。

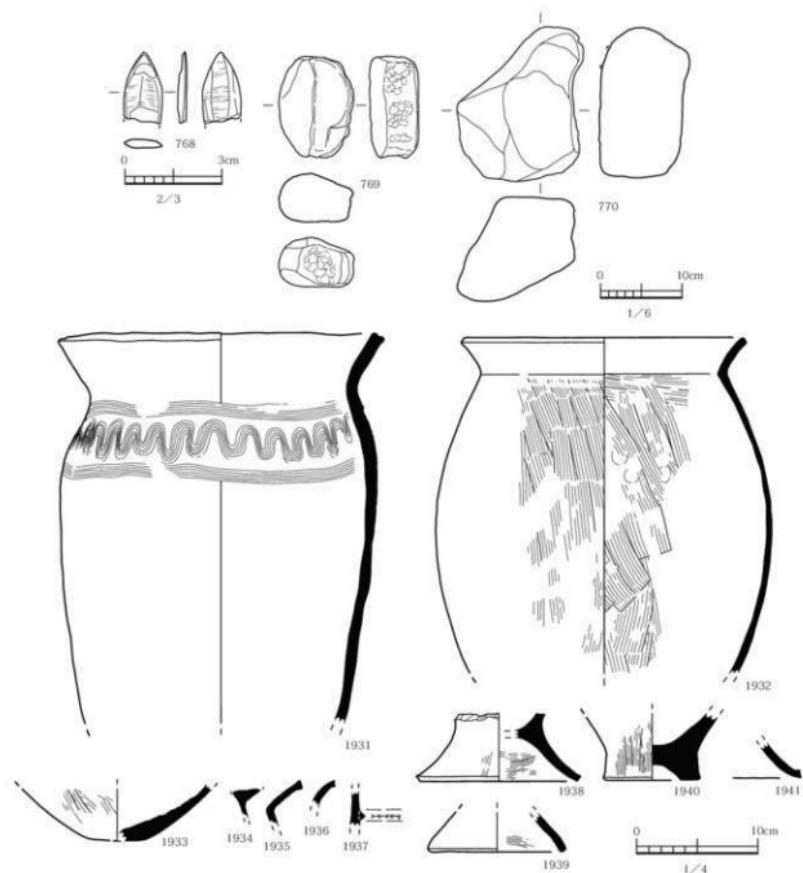


図 341 穂穴建物 (SI79) 出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

- 9: 炉 a 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。炭化物を含む。
 10: 柱 a 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。
 11: 柱 b 層: 黒褐色 (10YR3/1) 土。炭化物をわずかに含む。
 12: SX30 埋土: 黒褐色 (10YR2/2) 土。直径 1cm 以下の 3 層を含む。

SI79

SI79 は、調査区 17 区、637 グリッドに位置し、方形を呈する穂穴建物である。検出面からの深さ 0.8m を測り、1.8m × 5m が発掘作業の対象となった。

主柱穴は、1 基を掘削し、直径 0.1m、深さ 0.6m を測る。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋 1 層: 黒色 (10YR2/1) 土。きめ細かく混入物はほとんどない。1c 層の 2 次堆積。
- 2: 埋 2 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物を多く含む。
- 3: 埋 3 層: 黒褐色 (10YR2/2) 土。3 層を直径 1cm 程のブロックでやや含む。炭化物を含む。ベンガラを検出した。
- 4: 埋 4 層: 黒色 (10YR2/1) 土。炭化物を含む。3 層をやや含む。

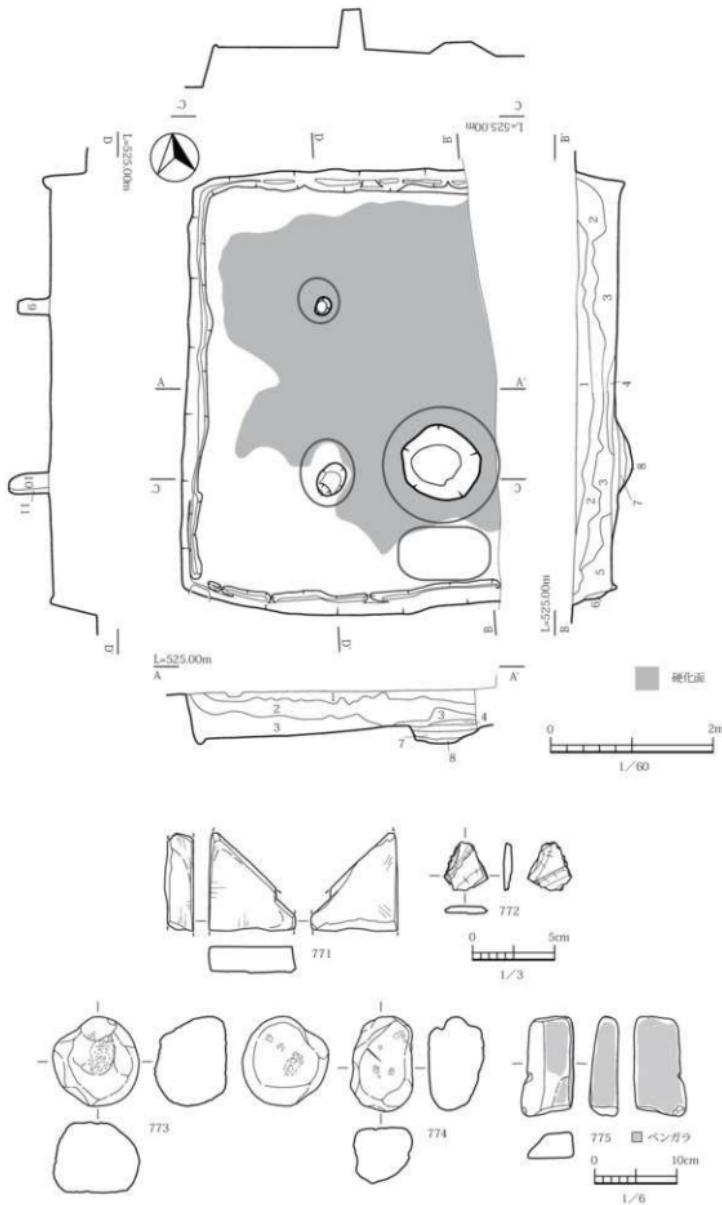


図 342 穂穴建物 (SI80) 実測図・出土石器 (RQ) 実測図

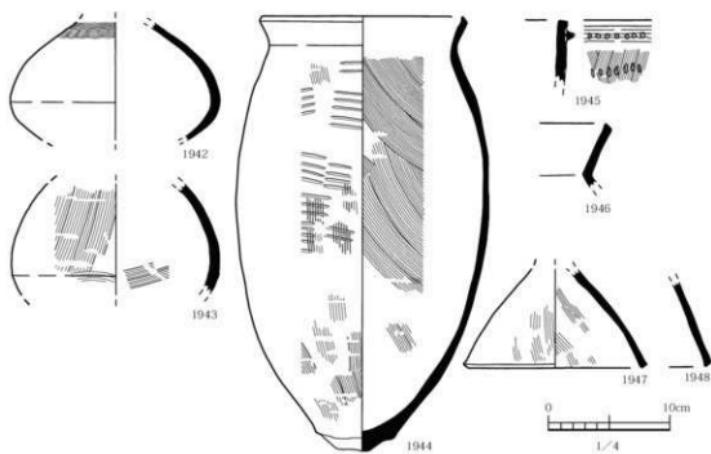


図 343 穂穴建物 (Si80) 遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

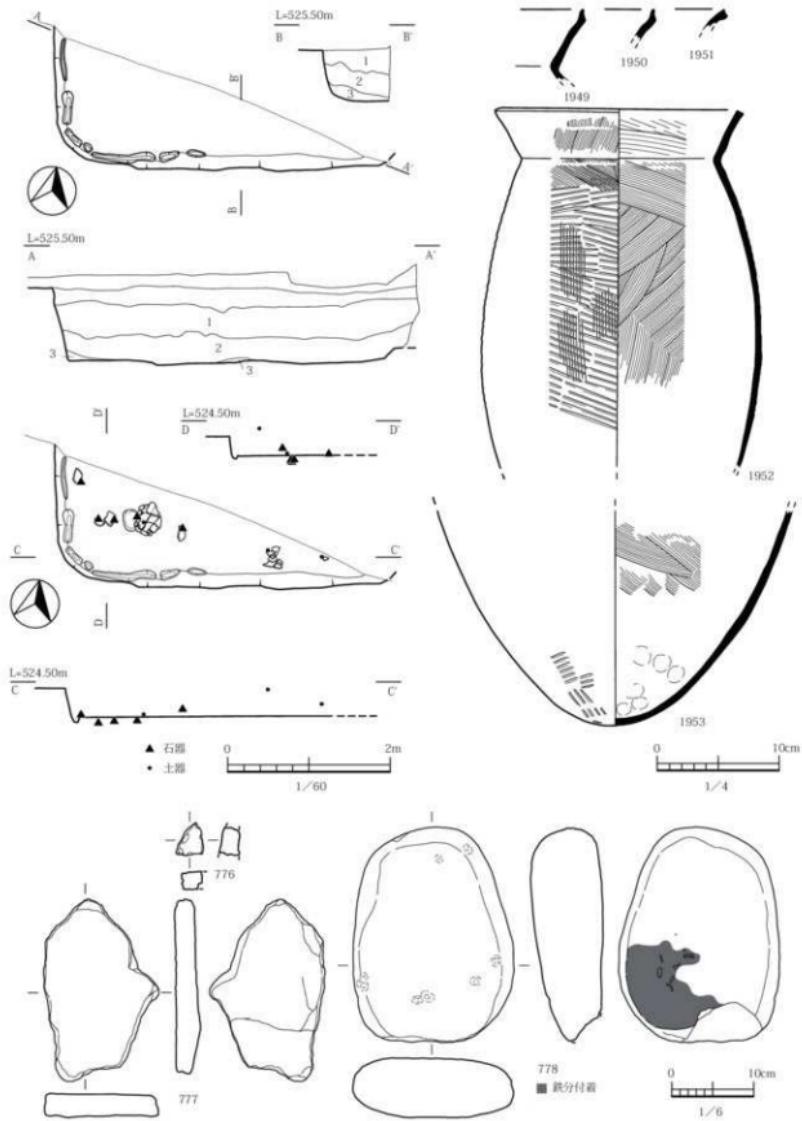


图 344 竖穴建物 (SI81) 実測図・遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

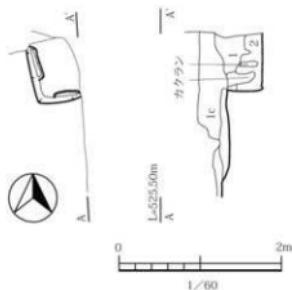


図 345 竪穴建物 (SI82) 実測図

- 5：埋 5 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物、焼土を含む。
- 6：埋 6 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物を多く含む。焼土粒も多く見られる。

SI80

SI80 は、調査区 16 区、613 グリッドに位置し、3.8m × 5.4m が調査対象の、方形を呈する 4 本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ 0.5m を測り、炉、K ピット、ベッド状遺構をそなえている。

主柱穴は、北西主柱穴と南西柱穴の 2 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.5m を測る。なお、これらの主柱 2 基は抜き取られていることが、付帯施設検出状況写真から判明した。北西主柱の抜取り痕は直径 0.5m 程の楕円形、南西主柱の抜取り痕は直径 0.8m 程の円形を呈する。

炉は、南列の柱穴間に位置し、直径 0.9m、深さ 0.2m のボウル形を呈している。なお、炉には、幅 20cm 程の周堤が付設していることが、完掘状況写真から判明した。周堤の高さは数 cm で、なだらかに床面へと続く。炉の周囲には炭化物が検出されている。

K ピットは、検出されていない。なお、炉の南から南側壁にかけて方形土壤があることが、付帯施設検出状況写真から判明する。この方形土壤は K ピットである。炉と K ピットは南北軸が一致している。

ベッド状遺構は、検出されていない。

硬化面は、内陣、炉の周囲で検出されている。

層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物粒をやや含む。
- 2：埋 2 層：黒色（10YR2/1）土。直径 5cm 以下の 3 層ブロックを多く含む。炭化物も入る。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。細かい 3 層がまんべんなく含まれる。
- 4：埋 4 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物を多く含む。焼土粒も入る。
- 5：埋 5 層：黒色（10YR2/1）土。直径 2cm 程の 3 層ブロックを含み、炭化物も多く入る。
- 6：埋 6 層：黒褐色（10YR2/3）土。3 层ブロックを多く含む。
- 7：炉 1 層：黒褐色（10YR3/2）土。1 ~ 2cm の 3 層ブロックを含む。炭化物を多く含む。
- 8：炉 2 層：黒色（10YR2/1）土。炭化物を多量に含む。
- 9：柱 a 層：黒色（10YR2/1）土。
- 10：柱 b 層：黒色（10YR2/1）土。
- 11：柱 c 層：黒色（10YR2/1）土。1cm 程の 3 層ブロックと炭化物を含む。

SI80 では、勾玉未成品 1 点が検出された。

SI81

SI81 は、調査区 16 区、615 グリッドに位置し、方形を呈する竪穴建物である。検出面からの深さ 0.9m を測り、3.9m × 1.8m の範囲が発掘作業対象となった。SI82 を切る。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物をやや含む。
- 2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。直径 3cm 以下の 3 層ブロックを多く含み、炭化物も多く含む。
- 3：埋 3 層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物を多く含む。

SI82

SI82 は、調査区 16 区、615 グリッドに位置し、方形を呈する竪穴建物である。検出面からの深さ 0.4m を測り、0.6m × 0.8m の範囲が発掘作業の対象となつた。SI81 に切られる。

竪穴建物の南西隅が検出され、平坦な床面、側壁溝 2 条が検出されている。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/1）土。

2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。2cm以下の3層ブロックを含む。

SI84

SI84は、調査区20区、599グリッドに位置し、方形を呈する4本柱建て竪穴建物である。検出面からの深さ0.6mを測り、4.8m×2.2mの範囲が発掘作業対象となった。

主柱穴は、北西主柱穴と北東主柱穴の2基を掘削し、直径0.3m、深さ0.6mを測る。なお、主柱2基は抜き取られていることが、完掘状況写真から判明した。主柱穴周囲の床面では硬化面が検出されず遺物も分布しない範囲があり、これが抜取り痕の範囲である。

硬化面は、床面全体で検出されている。
層序は次のとおりである。なお、以下の断面図の層

名と遺物の出土層名とを整合させる記録はない。

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。
- 2：埋2層：暗褐色（10YR3/3）土。5～7層が混濁。7層ブロックは直径10cm。
- 3：埋3層：暗褐色（10YR3/2）土。5層を主としてわずかな7a層を含む。
- 4：埋4層：黒褐色（10YR3/2）土。1c層を主に5層を含む。
- 5：柱a層：黒褐色（10YR2/2）土。5cm大的7a層を多量に含む。
- 6：柱b層：黒褐色（10YR2/2）土。7a層はブロックではなく細かく多く入る。
- 7：柱c層：黒色（10YR2/1）土。炭化物をやや含む。
- 8：柱d層：黒褐色（10YR2/2）土。1cm大的3層をやや含む。

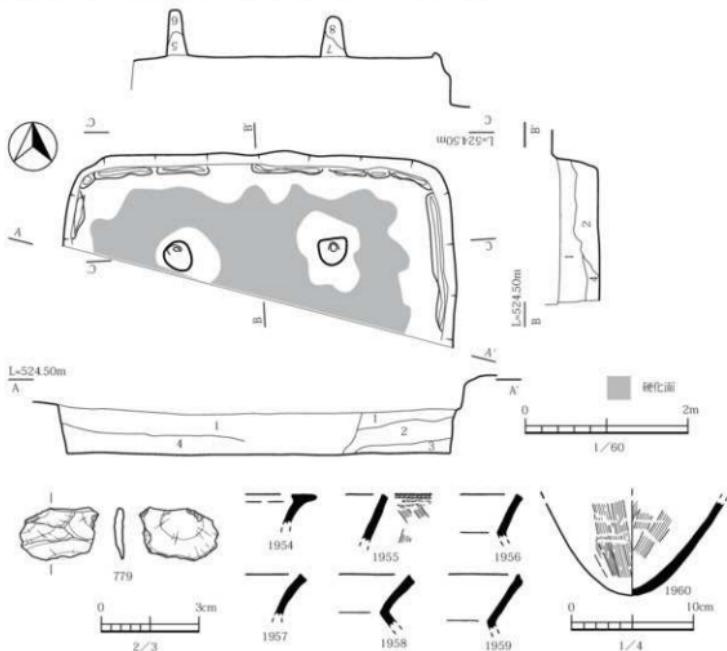


図346 竪穴建物(SI84)実測図・出土石器(RQ)、土器(RP)実測図

1-4 掘立柱建物 (SB)

津留地区では掘立柱建物 7 棟が発掘された。掘立柱建物のうち 4 棟 (SB9 ~ 11) は条溝 SX22 の東に立地して土壙墓 19 基を囲繞し、他の 3 棟は条溝 SX28 の東に位置し竪穴建物群と混在する。建物全体が発掘された掘立柱建物は SB9、SB10、SB13、SB15 の 4 棟であり、すべて桁行 1 × 梁行 1 棟である。建物部分が発掘された例では、2 棟以上の柱列は検出されていない。

SB9

SB9 は、調査区 11 区、479 グリッドに位置し、主軸を南北方向に採る桁行 1 棟 × 梁行 1 棟の掘立柱建物である。桁行 3.7m × 梁行 2.8m を測る。

柱穴は直径 0.6m 程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは 0.6m 程であった。北東以外の柱穴は、底面標高を概ね揃えている。

層序は次のとおりである。

- 1: 柱 a 層：黒色 (5YR2/1) 土。3 ~ 4 層よりなる。
- 2: 柱 b 層：黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 4 層よりなる
が 4 層がやや多い。
- 3: 柱 c 層：黒色 (10YR2/1) 土。4 層をベースにする
が腐植が多くなる。
- 4: 柱 d 層：黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 4 層よりなり、
故意に埋めているのがわかる。
- 5: 柱 e 層：黒色 (2.5Y2/1) 土。
- 6: 柱 f 層：黒色 (10YR2/1) 土。腐植が多くなる。
- 7: 柱 g 層：黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 4 層よりなる。
- 8: 柱 h 層：黒色 (10YR2/1) 土。
- 9: 柱 i 層：黒色 (10YR1.7/1) 土。3 ~ 4 層よりなり、
3 層のブロックが多い。ブロック直径 3 ~ 5cm。
- 10: 柱 j 層：黒褐色 (10YR2/2) 土。硬く硬化している。
- 11: 柱 k 層：黒褐色 (10YR2/2) 土。しまり大、粘性中、
3 ~ 4 層よりなる。故意に埋めている。
- 12: 柱 l 層：黒色 (10YR2/1) 土。しまり中、粘性中、
やや腐植が多くなる。
- 13: 柱 m 層：黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 4 層よりなり、
3 層のブロックが多い。
- 14: 柱 n 層：黒色 (10YR2/1) 土。3 ~ 4 層よりなり、

4 層がやや多い。

SB10

SB10 は、調査区 12 区、491 グリッドに位置し、主軸を南北方向に採る桁行 1 棟 × 梁行 1 棟の掘立柱建物である。桁行 3.6m × 梁行 2.5m を測る。

柱穴は直径 0.4m 程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは 0.5m 程であった。柱穴は、底面標高を概ね揃えている。

層序は次のとおりである。

- 1: 柱 b 層：黒色 (10YR2/1) 土。1c 層を主とする
が 3 層のブロック (直径 1cm 以内) が少量含まれる。
- 3: 柱 c 層：黒色 (10YR2/1) 土。1c 層を母材とする。
- 4: 柱 d 層：黒褐色 (10YR3/1) 土。
- 5: 柱 e 層：黒褐色 (10YR3/1) 土。
- 6: 柱 f 層：黒褐色 (10YR2/2) 土。
- 7: 柱 g 層：黒褐色 (10YR3/1) 土。
- 8: 柱 h 層：黒色 (10YR2/1) 土。直径 1cm 程度の
焼土粒が少量含まれる。
- 9: 柱 i 層：灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。3 層が母
材となる埋土。

SB11

SB11 は、調査区 12 区、494 グリッドに位置し、東西方向に並ぶ 2 基の柱穴を検出した。柱間 3.7m を測る。

柱穴は直径 0.6m 程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは 0.9m 程であった。柱穴は、底面標高を概ね揃えている。

層序は記録されていない。

SB12

SB12 は、調査区 12 区、490 グリッドに位置し、東西方向に並ぶ 2 基の柱穴を検出した。柱間 1.2m を測る。

柱穴は直径 0.6m 程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは 0.4m 程であった。柱穴は、底面標高を概ね揃えている。

層序は記録されていない。

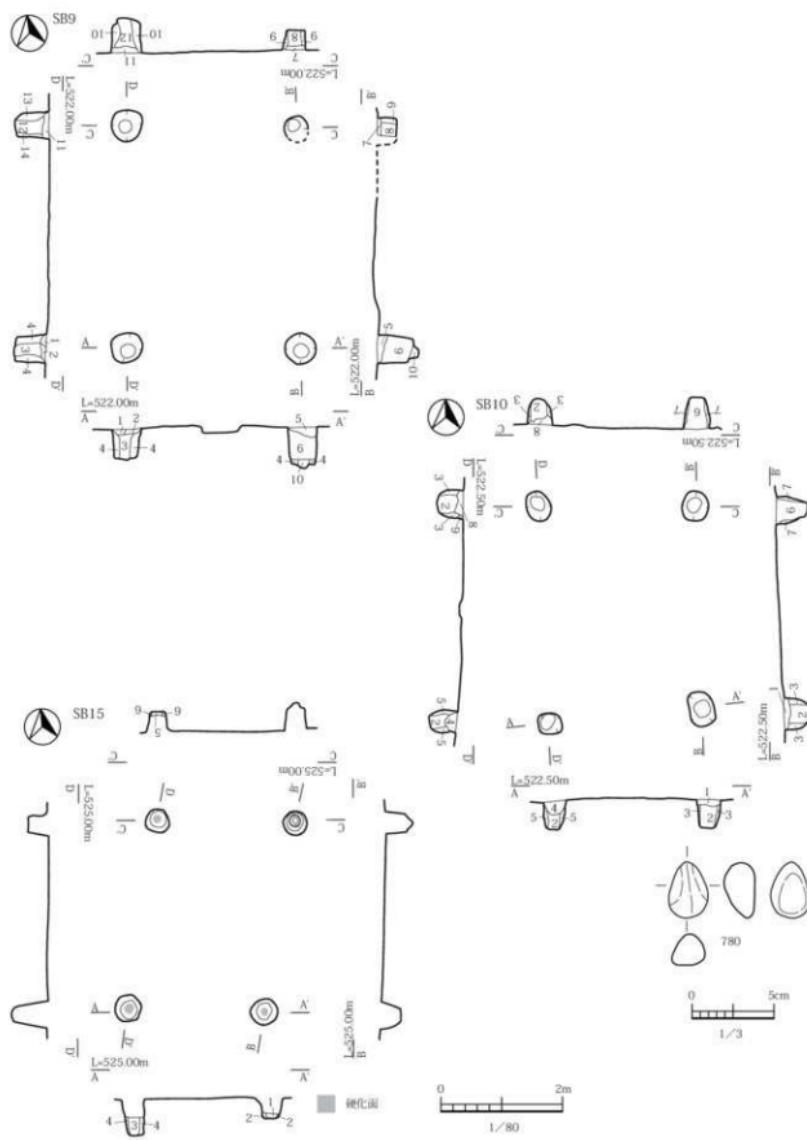
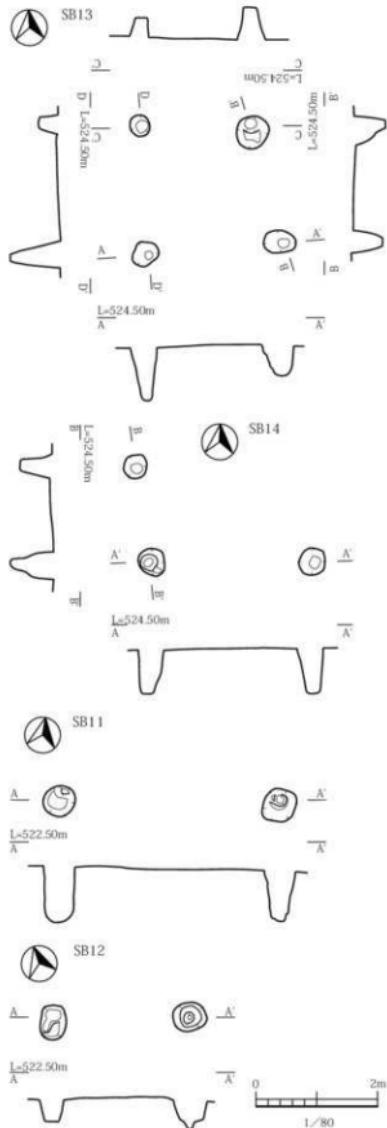


图 347 挖立柱建物 (SB9, SB10、SB15) 実測図・SB10 出土石器 (RQ) 実測図



SB13

SB13は、調査区15区、592グリッドに位置し、主軸を南北方向に採る桁行1間×梁行1間の掘立柱建物である。桁行2.0m×梁行1.8mを測る。

柱穴は直径0.6m程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは0.6m程度であった。柱穴の底面標高は揃わない。

層序は記録されていない。

SB14

SB14は、調査区15区、592グリッドに位置し、主軸を東西方向に採る桁行1間×梁行1間と推定される掘立柱建物である。北東柱が検出されていない。桁行2.6m×梁行1.6mを測る。

柱穴は直径0.5m程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは0.8m程度であった。柱穴は、底面標高を概ね揃えている。

層序は記録されていない。

SB15

SB15は、調査区16区、606グリッドに位置し、主軸を南北方向に採る桁行1間×梁行1間の掘立柱建物である。桁行3.2m×梁行2.2mを測る。

柱穴は直径0.4m程の円形を呈し、遺構確認面からの深さは0.6m程度であった。柱穴は、北東柱と南西柱、北西柱と南東柱の対角で底面標高を概ね揃え、各柱の底面では硬化面が検出された。

層序は次のとおりである。

- 1：柱a層：黒色（10YR2/1）土。1cm程の3層をやや含む。柱痕。
- 2：柱b層：黒褐色（10YR2/2）土。3～5cm程の3層ブロックを多く含む。7a層もやや入る。
- 3：柱c層：黒色（10YR2/1）土。柱痕。
- 4：柱d層：黒褐色（10YR2/2）土。1cm程の3層をやや含む。
- 5：柱e層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒をわずかに含む。柱痕。
- 6：柱f層：黒褐色（10YR2/2）土。

図348 掘立柱建物(SB13、SB14、SB11、SB12)実測図

1-5 土壌 (SK)

津留地区で発掘された土壌のうち13基を図示した。出土遺物は図359に示した。

なお、津留地区には古墳時代以降の土壌が多数存在し、図示した土壌にも弥生時代以外の土壌が混在している可能性がある。また、土壌墓群と混在する土壌もあり、これらの土壌は土壌墓の可能性も有する。

SK48

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。直径2cm未満の3層ブロックを少量含む。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。直径3cm程の3層ブロックをやや含む。炭化物粒をやや含む。

SK54

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。炭化物粒を少量含む。

SK56

- 1：埋1層：黒褐色（5YR2/2）土。しまり中、粘性小。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。しまり中、粘性中、1cm以下の3層ブロックをやや含む。
- 3：埋3層：黒褐色（10YR3/2）土。しまり大、粘性小、3層ブロックが多量に入る。

SK57

- 1：埋1層：黒色（10YR1.7/1）土。直径3～5cmの3層をブロックで含む。炭化物粒（2mm大）をやや含む。

SK63

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR3/1）土。3層を5cm以下のブロックで多く含む。

SK64

- 1：埋2層：黒色（10YR2/1）土。3層を3～4cmのブロックでまだらに含む。

SK67

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。暗褐色の地山（3層）をまだらに含む。

SK214

- 1：埋1層：黒色（2.5Y2/1）土。

SK215

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。3～5層より成る。直径5cm大的3層のブロックを多く含む。7a層まで到達せず、埋土は1層。

SK216

- 1：埋1層：暗褐色（10YR2/2）土。3層5層からなる。ほぼ5層の土だがやや明るく、硬い（直径5cm）ブロックを含む。
- 2：埋2層：暗褐色（10YR2/2）土。5層からなる。

SK217

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/1）土。4層が主。
- 2：埋2層：円礫、砂黒色土を含まない純層である。自然的。
- 3：埋3層：注記なし

SK218

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）土。3層～4層より構成される。ブロックの直径は3cm以下。
- 2：埋2層：暗褐色（10YR3/4）シルト。3層～7a層より構成され細粒化する。

SK219

- 1：埋1層：暗褐色（10YR3/3）土。3層～5層より構成される。

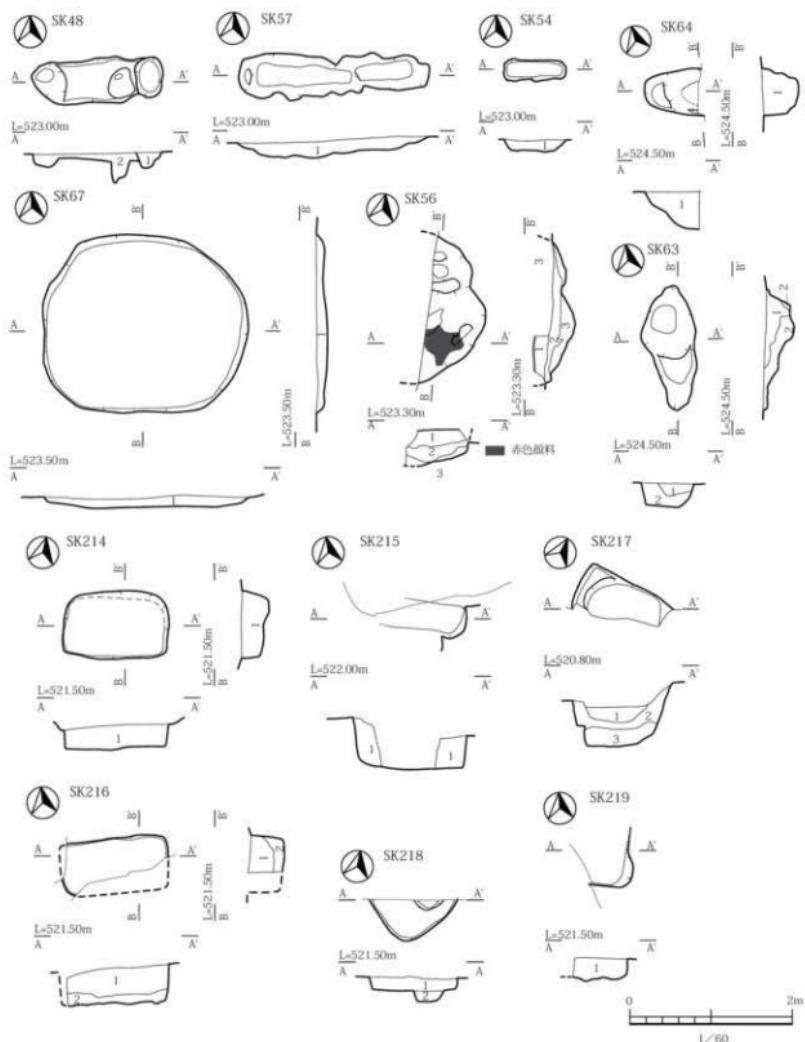


図 349 土壌 (SK) 実測図

2 古墳時代以降の調査

津留地区では古墳時代以降の遺構と遺物も検出されている。遺構検出面は弥生時代と同一であるが、竈の有無など、形式学的な検討により古墳時代以降の遺構とした。

遺構は、竪穴建物と土壙が検出された。遺物は、石器、土器、鉄器が出土している。

2-1 竪穴建物 (SI)

津留地区では竪穴建物 5 棟が発掘された。各竪穴建物は津留地区の東部に位置している。いずれの竪穴建物も主軸を東西に採り、竈を備える 4 例はすべて北竈である。切り合い関係は弥生時代の竪穴建物との 1 例 1 棟である。

古墳時代中期 1 棟 (SI64)、古墳時代後期 2 棟 (SI35, SI37)、古代 2 棟 (SI36, SI76) が散在する状況であり、今後の調査により包含層出土の鉄滓等の遺物、遺跡に隣接する幅横穴群との関連性が具体的に示されることが期待できる。

SI35

SI35 は、調査区 13 区、F3 グリッドに位置し、4.3m × 4.6m の方形を呈する 4 本柱建て竈付き竪穴建物である。検出面からの深さ 5cm 程度である。

主柱穴は、南東主柱穴を除く 3 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.3m を測る。

竈は、北側壁中央に位置し、幅 1.4m、長さ 1.1m を測る。両袖は粘土で構築され、袖間は 0.7m を測り、中央では直径 10cm 程の支脚痕が検出された。この竈は破却されている。

層序は次のとおりである。

- 1：埋 1 層：黒褐色 (10YR3/1) 土。所々に明黄褐色 (10YR7/6) 土ブロックが混在する。
- 2：埋 2 層：暗褐色 (10YR3/3) 土。部分的に黄褐色 (10YR7/8) 土が混入している。
- 3：埋 3 層：にぶい赤褐色 (5YR5/3) 土。住居壁際の三角堆積が固化したものと思われる。
- 4：柱 1 層：黒褐色 (7.5YR3/1) 土。わずかに黄色土ブロックを含む。
- 5：柱 2 層：褐灰色 (7.5YR4/1) 土。黒色土に黄褐色土ブロックが混入したもの。
- 6：柱 3 層：にぶい褐色 (7.5YR5/3) 土。均一な土質。意図的に埋められた粘土か。
- 7：竈 1 層：黒褐色 (5YR3/1) 土。最大径 5mm の橙色 (5YR6/8) 燃土粒を含む。
- 8：竈 2 層：暗赤褐色 (5YR3/3) 土。7 より多量に橙色 (5YR6/8) 燃土粒を含む。
- 9：竈 3 層：明赤褐色 (5YR5/8) 土。黒褐色 (5YR3/1) と混合している。
- 10：竈 4 層：にぶい橙色 (5YR6/4) 土。竈を造形するための粘土と思われる。所々に黒褐色 (5YR3/1) 土を含む。

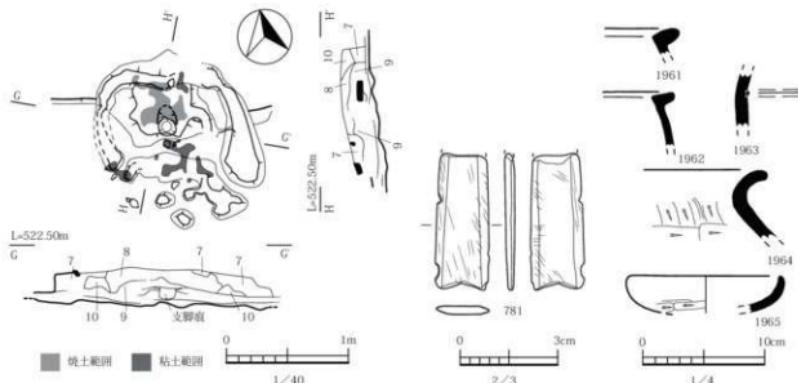


図 350 竪穴建物 (SI35) 竈実測図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

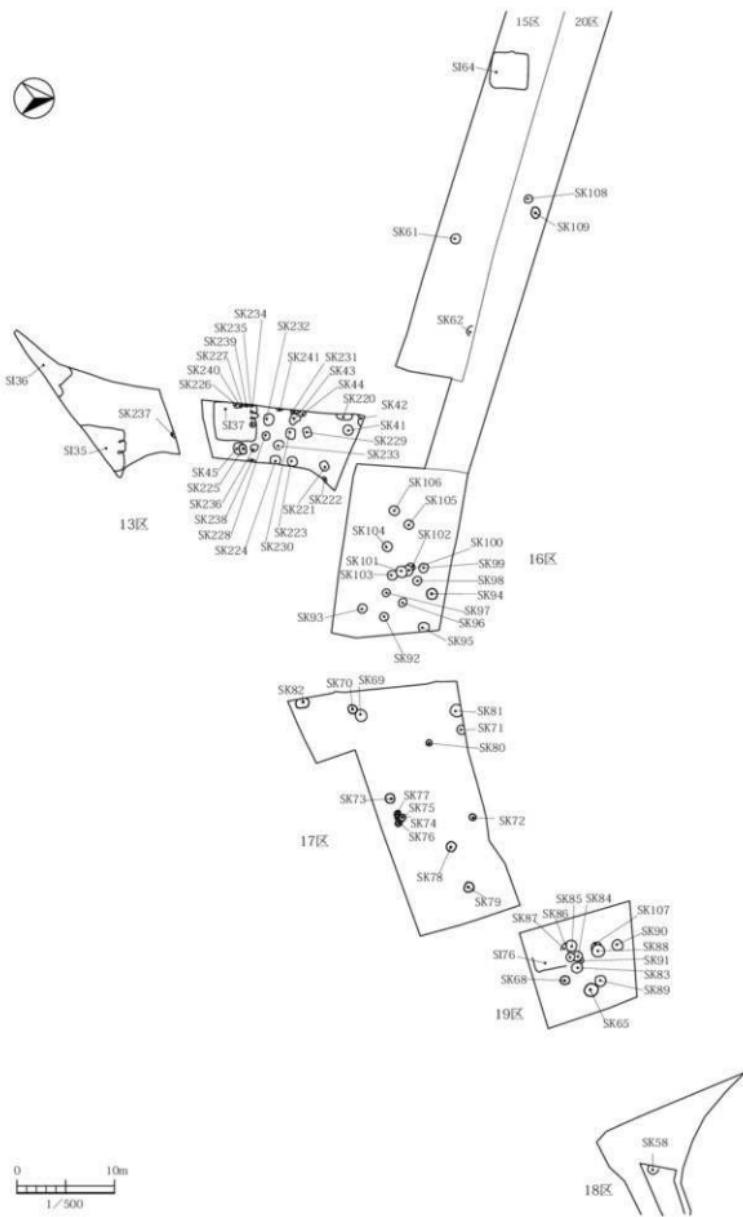


図351 津留地区遺構配置図（古墳時代以降）

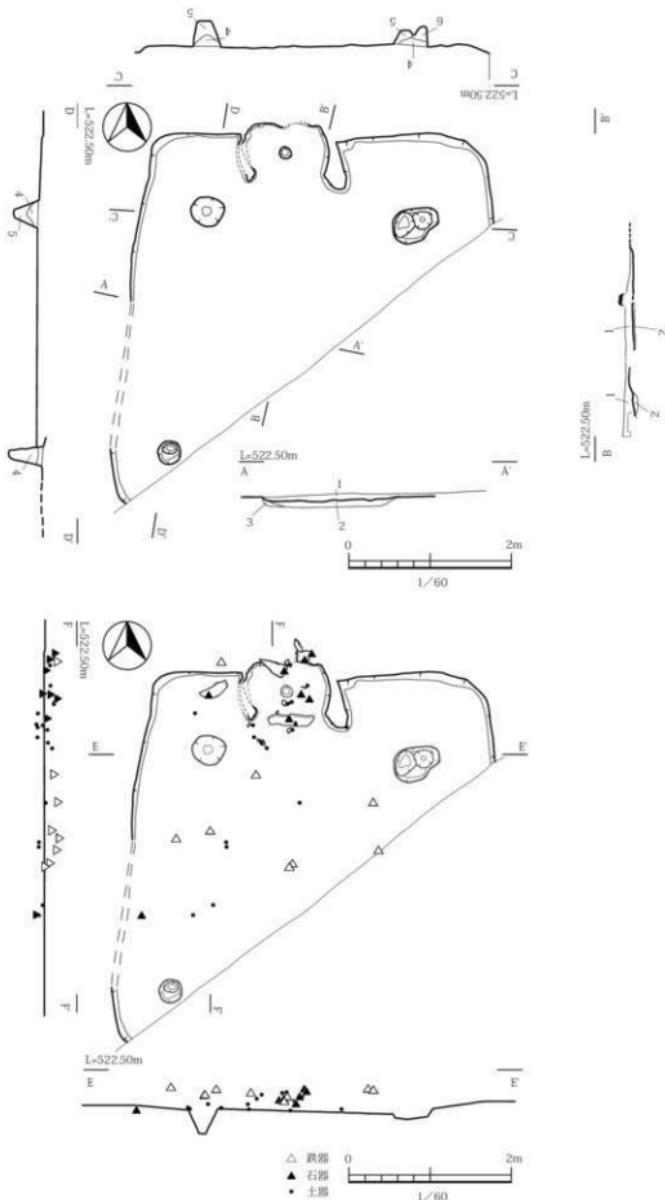


図 352 墓穴建物 (S135) 実測図・遺物分布図

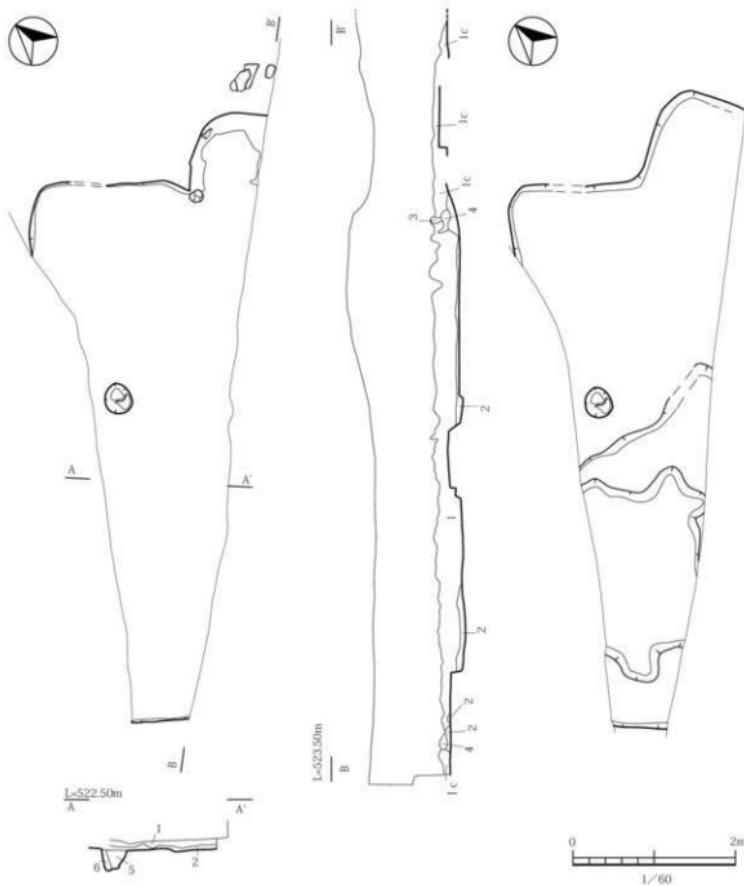
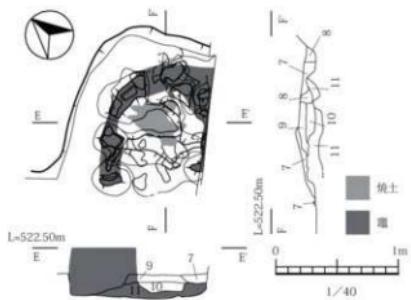


図 353 積穴建物 (SI36) 実測図・竪実測図

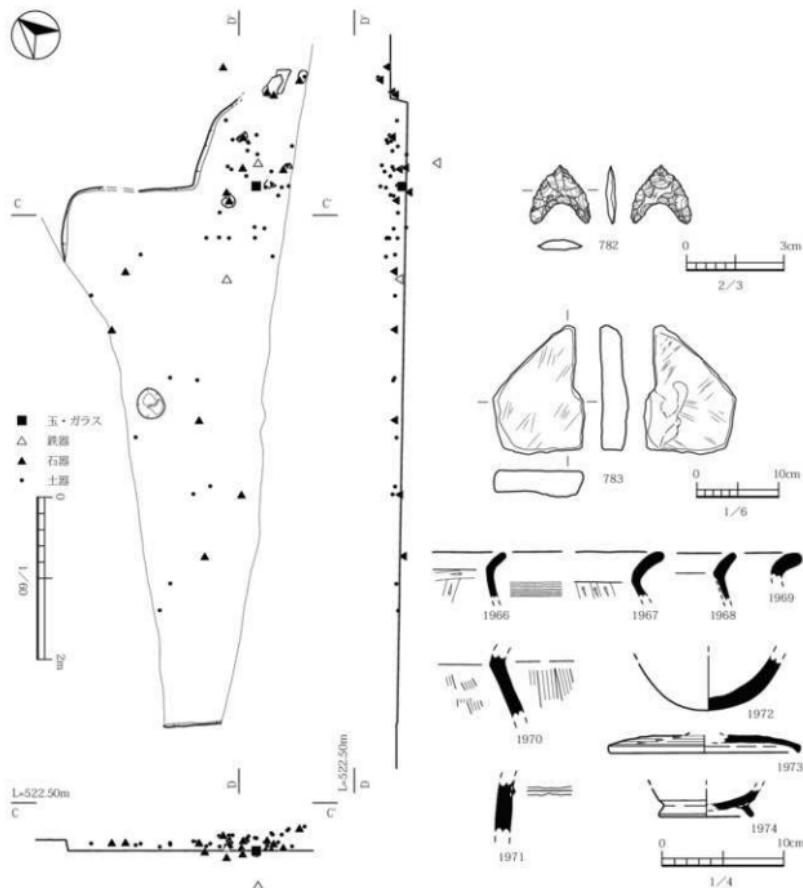


図 354 穫穴建物 (S136) 遺物分布図・出土石器 (RQ)、土器 (RP) 実測図

S136

S136は、調査区13区、G2 グリッドに位置し、2.7m × 7.5mが調査対象の、方形を呈する竪付き竪穴建物である。検出面からの深さ9cmを測る。

主柱穴は、1基を掘削し、直径0.3m、深さ0.3mを測る。4本柱建てになる可能性が高いが、不明である。

竪は、東側壁北寄りに位置し、推定幅1.5m、長さ1.2mを測る。両袖は粘土で構築され、袖間は0.7mを測る。この竪は破壊されている。

層序は次のとおりである。

- 1：埋1層：黒褐色(7.5YR2/1)土。特に上層部に明褐色(7.5YR5/6)土の粒子、ブロックを多く含む。
- 2：埋2層：明褐色(7.5YR3/3)土。少々の凸凹のある薄い堆積を呈している。
- 3：埋3層：褐色(10YR4/6)土。黄橙色(10YR7/8)粘土を含む。
- 4：埋4層：黒褐色(10YR5/8)土。所々に黒色土ブロックを含む。
- 5：柱1層：黒褐色(7.5YR3/1)土。柱穴の埋土。
- 6：柱2層：暗褐色(7.5YR3/3)土。黒色土に黄褐

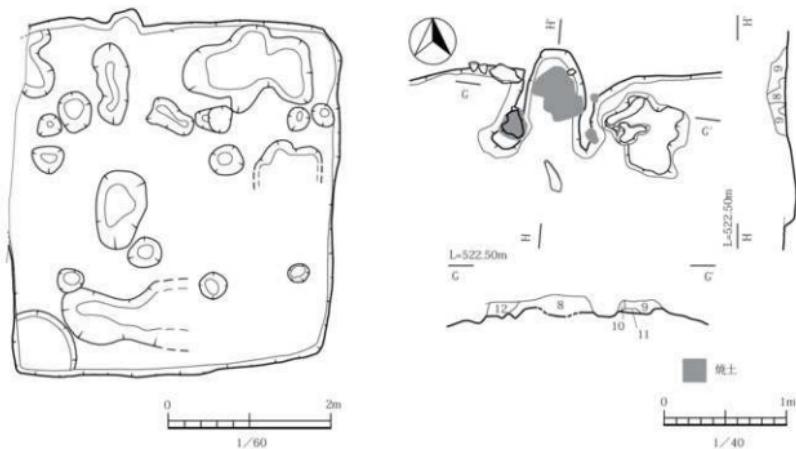
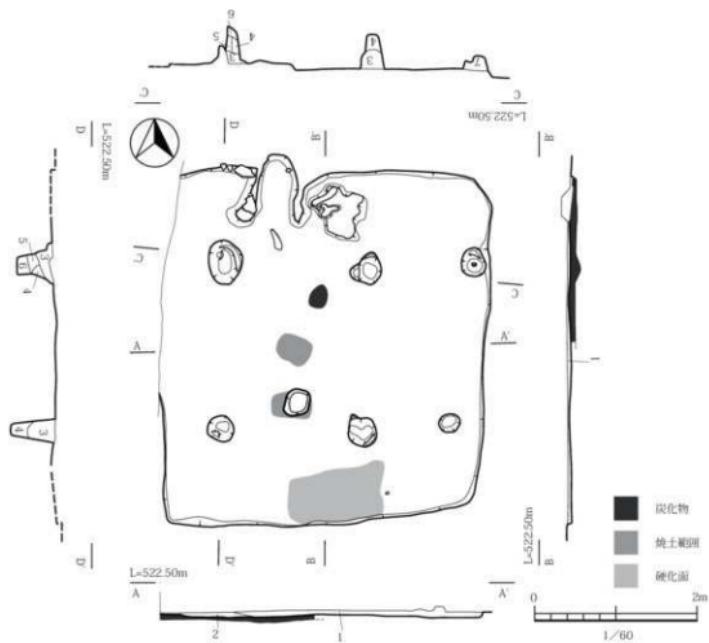


図 355 穹穴建物 (SI37) 実測図・竪実測図

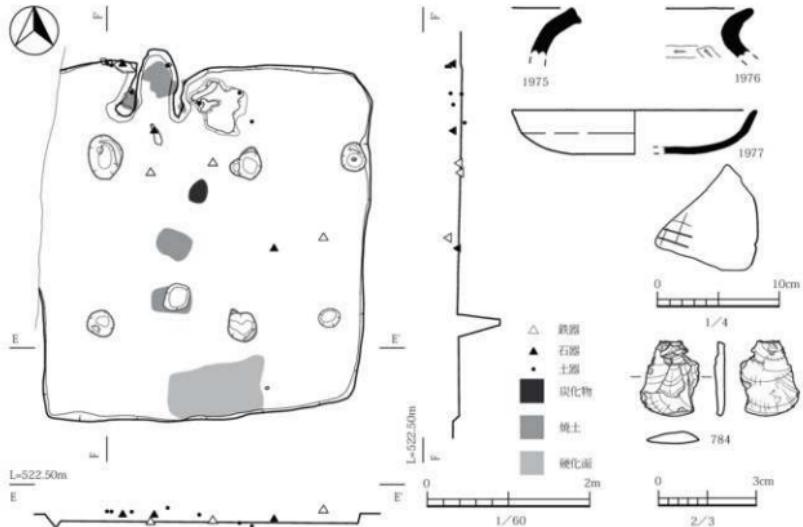


図 356 穹穴建物 (SI37) 遺物分布図・出土器 (RP)、石器 (RQ) 実測図

色土ブロックが混じっている。

- 7: 窟 1 層: 極暗赤褐色 (2.5YR2/2) 土。黒色土と焼土の混合土。
- 8: 窟 2 層: 赤黒色 (2.5YR2/1) 土。所々に焼土粒を含む。
- 9: 窟 3 層: 赤色 (10YR4/8) 土。焼土。所々に黑色土粒を含む。
- 10: 窟 4 層: 赤橙色 (10YR6/6) 土。焼土。特に火熱が強く及ぶ。
- 11: 窟 5 層: にぶい赤褐色 (5YR4/4) 土。焼土と粘土が黒色土に混入している。

SI37

SI37 は、調査区 13 区、C3 グリッドに位置し、4m × 4.6m の方形を呈する 4 本柱建て窓付き竪穴建物である。検出面からの深さ 10cm を測る。

主柱穴は、4 基を掘削し、直径 0.3m、深さ 0.6m を測る。建物支柱が東側壁に沿って 2 基検出されている。

窓は、北側壁西寄りに位置し、幅 1.2m、長さ 1.0m を測る。両袖は粘土で構築され、袖間は 0.8m を測る。

この窓は破壊されている。

層序は次のとおりである。

- 1: 埋 1 層: 黒褐色 (7.5YR3/1) 土。きめの細かい黒褐色土。
- 2: 埋 2 層: にぶい褐色 (7.5YR5/3) 土。所々黄色に近い明るい色を呈す。
- 3: 柱 1 層: 黒褐色 (7.5YR3/1) 土。住居址埋土の最下層。
- 4: 柱 2 層: にぶい褐色 (7.5YR5/4) 土。地山の土に 3 の黒褐色土が混合したもの。
- 5: 柱 3 層: 褐色 (7.5YR4/3) 土。4 の層にさらに多くの 3 の土が混入し、4 よりも暗く見える。
- 6: 柱 4 層: 暗褐色 (7.5YR3/3) 土。黒褐色土 (7.5YR3/1) 土に ぶい褐色 (7.5YR5/4) 土が粒子状、ブロック状に混入している。
- 7: 柱 a 層: 黑褐色 (7.5YR3/1) 土。3 に較べ、全体に ぶい褐色 (7.5YR5/4) 土ブロックや粒子を多く含む。
- 8: 窟 1 層: 明褐色 (5YR5/6) 土。焼土に黒褐色 (5YR3/1) 土が混入している。
- 9: 窟 2 層: にぶい赤褐色 (5YR4/3) 土。1 層の明

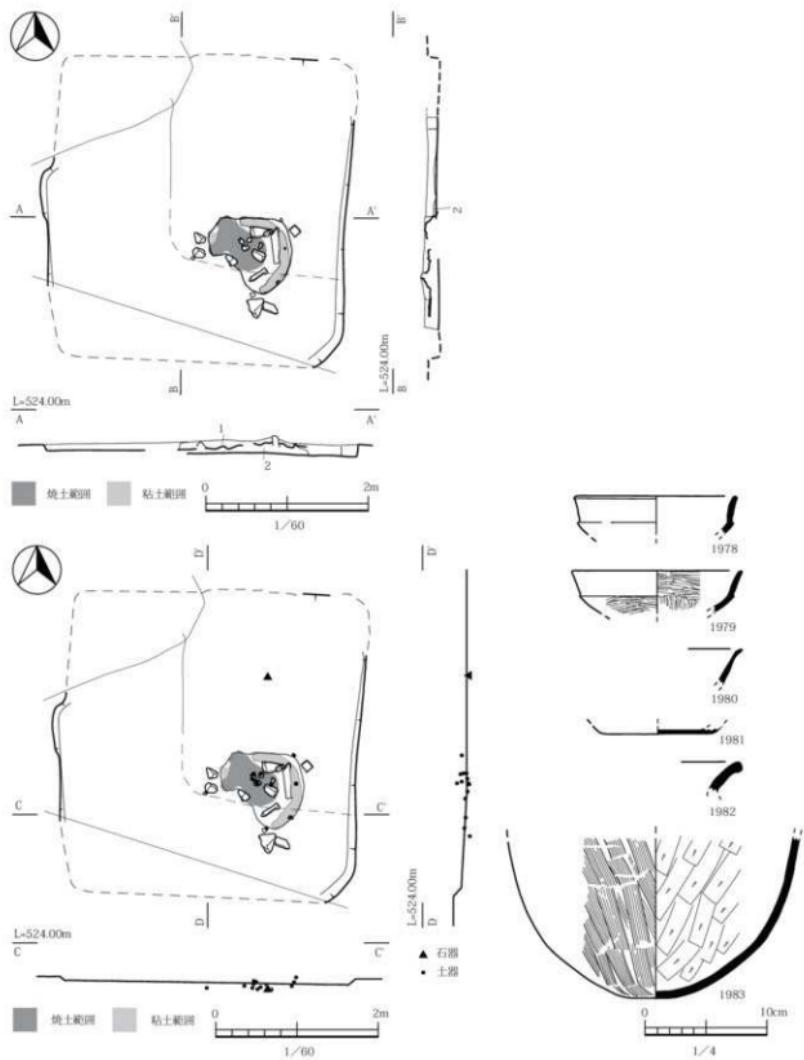


図 357 墓穴建物 (SI64) 実測図・遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

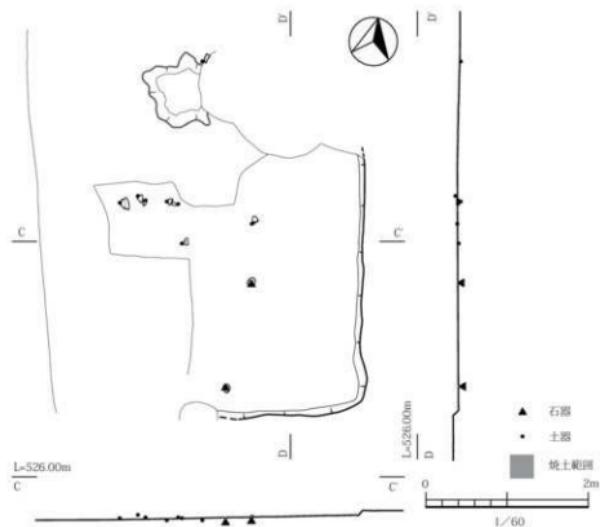
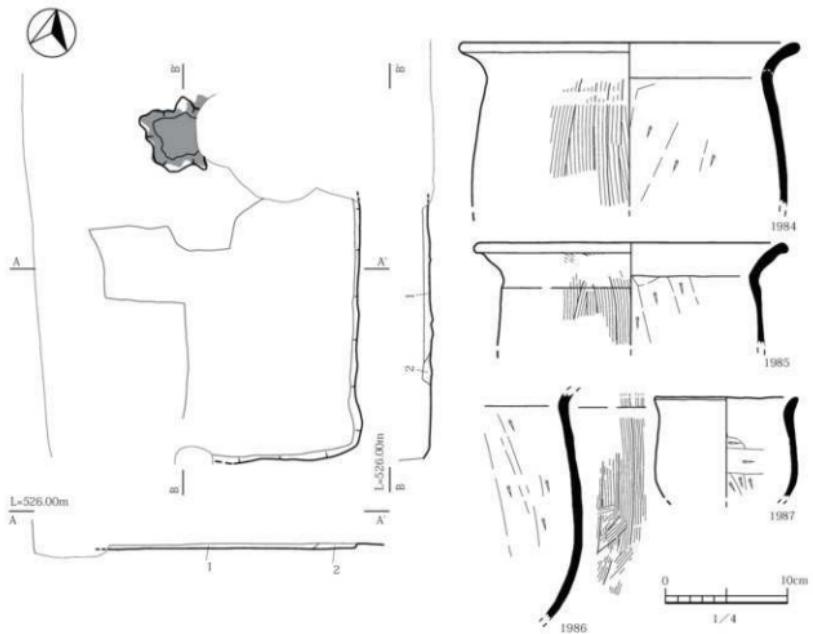


図 358 壁穴建物 (SI76) 実測図・遺物分布図・出土土器 (RP) 実測図

- 褐色(5YR5/6)土に多量の黒褐色(5YR3/1)土が混入している。
- 10：竈3層：にぶい橙色(5YR6/4)土。粘土層。下の4層よりも色が明るい。
- 11：竈4層：灰褐色(5YR4/2)土。3層より色調が暗い。
- 12：竈5層：黒褐色(5YR3/1)土。

SI64

SI64は、調査区15区、573グリッドに位置し、3.4m×3.8mの方形を呈する竈穴建物である。検出面からの深さ20cmを測り、竈をそなえている。SI63、SI60を切る。

主柱穴は、検出していない。

竈は、側壁から独立して床面に位置し、1.0×0.9m、深さ10cmの円形を呈している。この遺構は、竈穴建物に固定式で付設された設備ではない可能性が高い。

層序は次のとおりである。

- 埋1層：黒色(10YR2/1)土。褐色(7.5YR4/3)のしまった粘性のない土を直径1cm以下でやや含む。
- 埋2層：黒褐色(10YR3/1)土。明赤褐色(5YR5/8)焼土と炭化物を多く含み、1に入る褐色土もブロックで入る。

SI76

SI76は、調査区19区、645グリッドに位置し、3.1m×3.1mが調査対象の、深さ0.1mの方形を呈する竈付き竈穴建物である。

竈は、焼土が検出された0.7×0.6mの方形土壙が火床であり、竈穴式建物の北側壁中央につくりつけられている。しかし、竈体を形成する粘土材、石材などは検出されていない。

柱は、小土壙が6基以上検出されているが、いずれも柱穴と認定していない。

層序は次のとおりである。

- 埋1層：黒褐色(10YR3/1)土。灰褐色土が少量混じる黒っぽい土層。
- 埋2層：暗褐色(7.5YR3/3)土。所々に明褐色土(7.5YR5/6)ブロックが混入している。

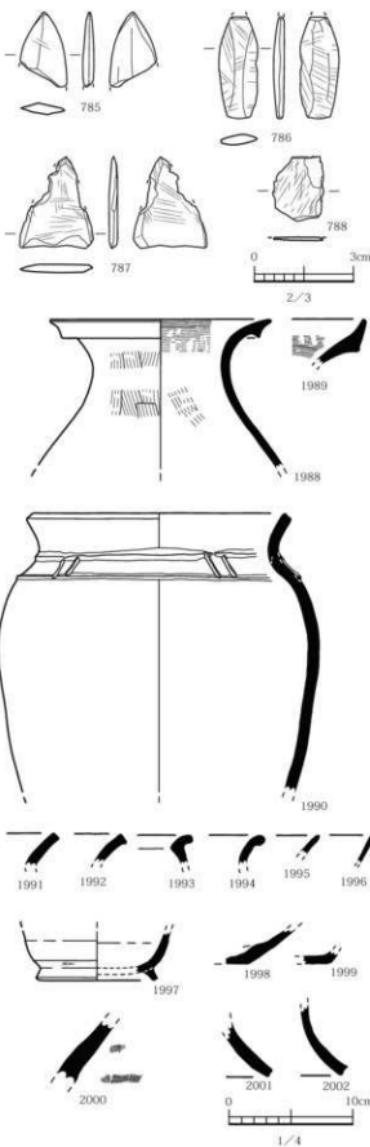


図359 土壙(SK) 出土石器(RQ)、土器(RP) 実測図

2-2 土壌 (SK)

津留地区で発掘された土壌のうち73基を図示した。また、各土壌の層序を記述し、各土壌で検出した石器と土器を左に図示した。

なお、津留地区では弥生時代の土壌13基が検出されており、ここに示す土壌73基にも弥生時代の土壌が混在している可能性がある。一方、明らかに現在の芋穴と称する土壌も、ここに示す土壌に混在している。これらは、発掘作業担当者が分別せずに取り扱っていること、層位的に弁別できない記録内容であること、検出された遺物による弁別も困難なこと、から一括してここに記述した。

SK41

1：埋1層：灰黄褐色（10YR4/2）土。明黄褐色（10YR6/6）土粒が全体に混入する。

SK42

1：埋1層：灰黄褐色（10YR5/2）土。特に底面になるに従い明黄褐色（10YR6/6）土ブロックが多くなる。

SK43

1：埋1層：褐灰色（7.5YR4/1）土。微量の黄褐色土粒を含む。
2：埋2層：にぶい黄橙色（10YR6/4）土。土中に上層の褐灰色土（10YR4/1）を含む。SK44の埋2層とほぼ同じ色調、性質を呈する。

SK44

1：埋1層：褐灰色（10YR4/1）土。最大径2cm程度の黄橙（10YR6/4）土ブロックを含む。
2：埋2層：にぶい黄橙色（10YR6/4）土。土中に上層の褐灰色土（10YR4/1）を含む。

SK45

1：埋1層：黒褐色（5YR2/1）土。所々に明褐色土（7.5YR5/6）ブロックを含む。

SK58

土層注記なし

SK61

1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。2層、3層が

1cm以下のブロックで細かくまんべんなく混じる。炭化物もやや含む。SK62と同じく1b層から掘り込んでいる。

SK62

1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。2層、3層を1cm以下でまんべんなく含む。1b層から掘り込んでいる。

SK65

1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。焼土粒、炭化物をやや含む。

SK68

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。直径2cm以下の3層を全体にまんべんなく多く含み、焼土粒、炭化物もやや入る。

SK69

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭化物をやや含む。

2：埋2層：黒褐色（10YR2/3）土。3層をブロックで含む。

SK70

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒をやや含む。3層を1cm以下のブロックでやや含む。

2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒をやや含む。3層を5cm以下のブロックで含む。

SK71

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。2層を2cm以下のブロックでやや含む。

SK72

1：埋1層：褐灰色（5YR4/1）土。黒色土に灰色がかた土が混合している。密に堆積しているが、土質は柔らかい。所々に明赤褐色（5YR5/6）土の粒子・ブロックを含んでいる。

SK73

1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。炭化物をやや含む。

SK74

1：埋1層：黒褐色（5YR3/1）土。シルト質のきめ

の細かい土壌。特に底面近くは橙色土（7.5YR6/6）ブロックが多く分布する。

SK75

- 1：埋1層：黒褐色（5YR2/1）土。SK75埋土。暗褐色土に炭化物が多量に混入している。もろく崩れやすい、粘性の少ない土壌。
- 2：埋2層：褐灰色（5YR4/1）土。SK75埋土。シルト質で粘性を有する土壌。所々にぶい橙色土（5YR6/4）ブロックを含む。

SK76

- 1：埋1層：褐灰色（7.5YR4/1）微細な褐灰色土が黒色土と混じりあっている。所々に樹痕の空洞に詰まったような黄褐色土ブロックを含んでいる。

SK77

- 1：埋1層：褐灰色（10YR2/2）土。少量の砂が混じるきめ細かい土壌。粘性は普通。下部には明褐色土ブロックが混在する。

SK78

- 1：埋1層：黒褐色（10YR3/2）土。粘性の高い、しまった土。特に底面付近に明黄褐色（10YR6/6）土ブロックを含む。

SK79

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）少量の砂を含む、きめの細かい土質。しまりは良く、粘性は普通。最大径2cmの黄褐色土ブロックが散在する。

SK80

- 1：埋1層：灰黄褐色（10YR4/2）土。上層には黒褐色土ブロックが散在する。

SK81

- 1：埋1層：黒褐色（7.5YR2/2）土。1cm以下の3層ブロックを全体に含む。
- 2：埋2層：黒褐色（7.5YR2/2）土。2cm以下の3層ブロックを全体に含む。焼土粒、炭化物粒をやや含む。

SK82

土層注記なし

SK83

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2～3cm大の3層を含む。

SK84

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。3cm大の3層ブロックを多く含み、やや砂質。細かい炭化物もわずかに含む。

SK85

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。2cm以下の3層をわずかに含む。オレンジ色の焼土粒をやや含む。

SK86

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。直径2cm以下のぶい黄褐色（10YR5/4）土のブロックを含んでいる。
- 2：埋2層：黒色（10YR2/1）土。直径5cm以下の褐色（10YR4/4）土のブロックを含んでいる。

SK87

- 1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭化物をやや含む。

SK88

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。2cm以下の細かい3層を全体にまんべんなく含む。

SK89

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。1～2cm大の3層を全体に多く含む。

SK90

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/2）土。5mm程度の細かい粒から5cm以下のブロックの3層がまんべんなく入る。
- 2：埋2層：黒褐色（10YR2/2）土。こぶし大の3層ブロックを含む壁の崩落によるとと思われる。

SK91

- 1：埋1層：黒褐色（10YR2/3）土。直径3cm以下のぶい黄褐色（10YR5/4）土のブロックを含んでいる。

SK92

1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭化物粒がわずかに入る。

SK93

1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。焼土粒、炭化物粒がわずかに入る。

SK94

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。直径 1cm 以下で 3 層をまんべんなく含む。やや砂まじり、炭化物もやや混じる。

SK95

1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。1cm 程の 3 層がわずかに入る。

SK96

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。1cm 以下の 3 層が多く入る。炭化物粒もわずかに入る。

SK97

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。細かい 3 層がやや入る。炭化物粒も入る。

SK98

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。2cm 以下の 3 層をまんべんなく多く含む。炭化物もわずかに入る。

SK99

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。直径 3cm 程のブロックから細かいものまで 3 層がまんべんなく入る。

SK100

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。直径 3cm 以下の 3 層を含み、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。

SK101

1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。直径 1cm 程の 3 層をまだらに含む。炭化物をわずかに含む。

SK102

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。2cm 以下の 3

層が全体にまんべんなく入る。

SK103

1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/2）土。3 層ブロックを多量に含み、ザクザクしている。

2：埋 2 層：黒褐色（10YR2/2）土。2cm 以下の 3 層をやや含む。

SK104

1：埋 1 層：黒色（10YR2/1）土。1~3cm の 3 層ブロックをまんべんなく多く含む。

SK105

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。2cm 以下の 3 層が全体にまんべんなく入る。

SK106

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。1cm 以下の細かい 3 層をまんべんなく多く含む。

SK107

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/2）土。5cm 大の 3 層ブロックを多く含む。

SK108

1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/2）土。

SK109

1：埋 1 層：暗褐色（10YR3/32/2）土。

SK220

1：埋 1 層：黒色（10YR3/1）土。黒と少し茶色の土が半々で、親指大のブロックで混ざり合っている。

SK221

1：埋 1 層：黒色（7.5YR2/1）土。黒と少し茶色の土が半々で小指大のブロックで混ざり合っている。

SK222

1：埋 1 層：黒褐色（10YR3/1）土。全体のほとんどが少し茶色の土で所々に 2~3mm の黒い土のブロックが混ざっている。

SK223

1：埋 1 層：黒褐色（10YR2/1）土。全体のほとんど

が少し茶色の土で小指大の黒い土のブロックが混ざっている。

SK224

1：埋1層：黒色（10YR1.7/1）土。黒と少し茶色の土が3:7程度で混ざり、一部に拳大の少し茶色のブロックが混ざっている。

SK225

1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。黒と少し茶色の土が2:8程度で混ざり、小指大の黒い土のブロックが混ざっている。

SK226

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。黒と少し茶色の土が半々で親指大のブロックが混ざっている。

SK227

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。黒と少し茶色の土が半々で親指大のブロックが混ざっている。

SK228

1：埋1層：黒色（7.5YR1.7/1）土。黒と少し茶色の土が半々で親指大のブロックで混ざりっている。

SK229

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。ほとんどが少し茶色の土で黒い土のブロックは少ない。

SK230

1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。ほとんどが黒色の土で、所々に親指大の少し茶色のブロックが混ざっている。

2：埋2層：黒色（10YR1.7/1）土。全体が黒色の土で所々に少し茶色の小指大のブロックが点在している。

3：埋3層：黒褐色（10YR2/2）土。全体が明るい茶色の土で混じりは少ない。

SK231

1：埋1層：黒色（10YR2/1）土。黒と少し茶色の土が半々で小指大のブロックが混ざっている。

SK232

1：埋1層：黒褐色土（10YR3/1）全体のほとんどが

少し茶色の土で、所々に親指大のブロックが混ざりっている。

SK233

1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。全体のほとんどが少し茶色の土で、一部に親指大の黒い土のブロックが混ざりっている。

SK234

1：埋1層：黒褐色（10YR3/1）土。所々に少し茶色の土の2~3mmのブロックが混ざっている。

SK235

1：埋1層：黒色（10YR3/1）土。黒と少し茶色の土は半々であり、一部に親指大の黒い土のブロックが混ざりっている。

SK236

1：埋1層：黒色（10YR1.7/1）土。黒と少し茶色の土が半々で、小指大の小さなブロックで混ざりっている。

SK237

1：埋1層：黒褐色（7.5YR3/1）土。黒と少し茶色の土が半々で、所々に黒い土の拳大のブロックが混ざっている。

SK238

1：埋1層：黒色（10YR1.7/1）土。黒と少し茶色の土が半々で、一部に親指大のブロックとこぶし大のブロックが混ざっている。

SK239

1：埋1層：黒色（7.5YR2/1）土。ほとんどが少し茶色の土で所々に5~6mmの黒い土のブロックが混ざっている。

SK240

土層注記なし

SK241

1：埋1層：にぶい黄褐色（10YR5/3）土。黒色土ブロックを含む。

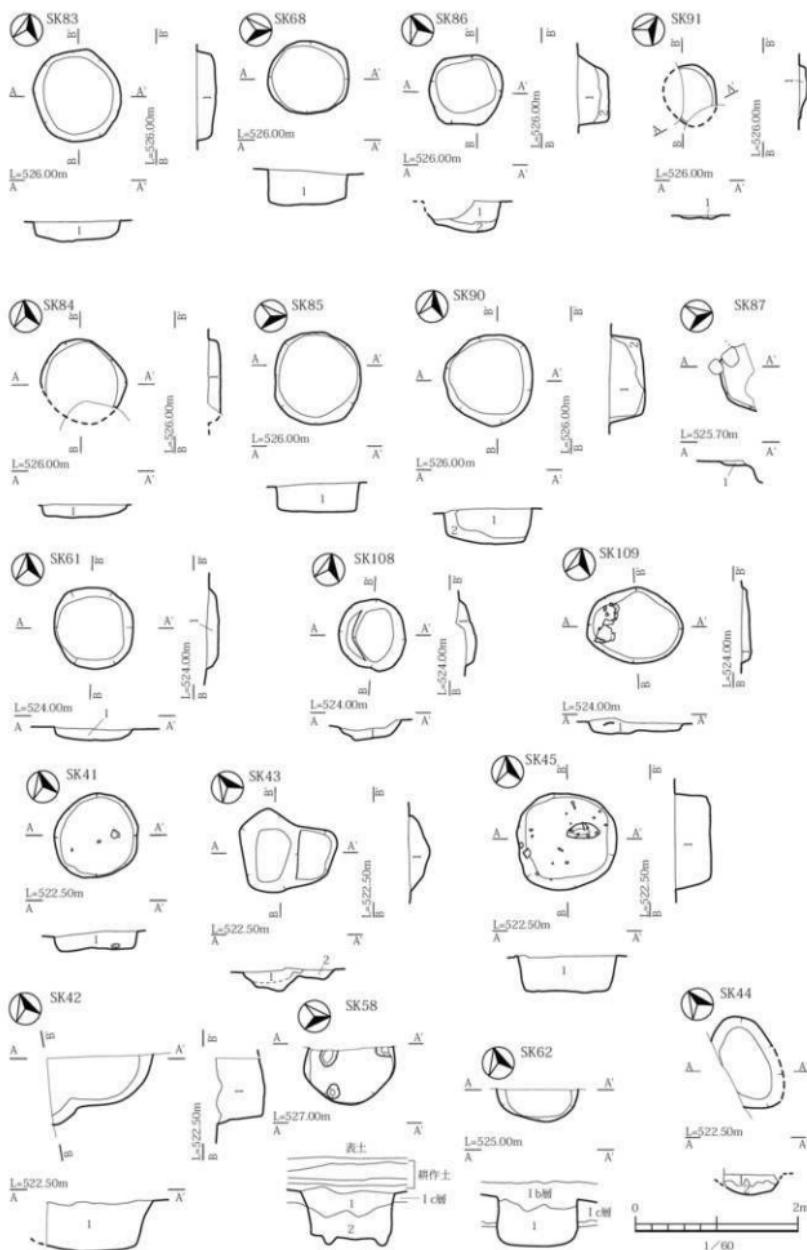


図 360 土壌 (SK) 実測図 (1)

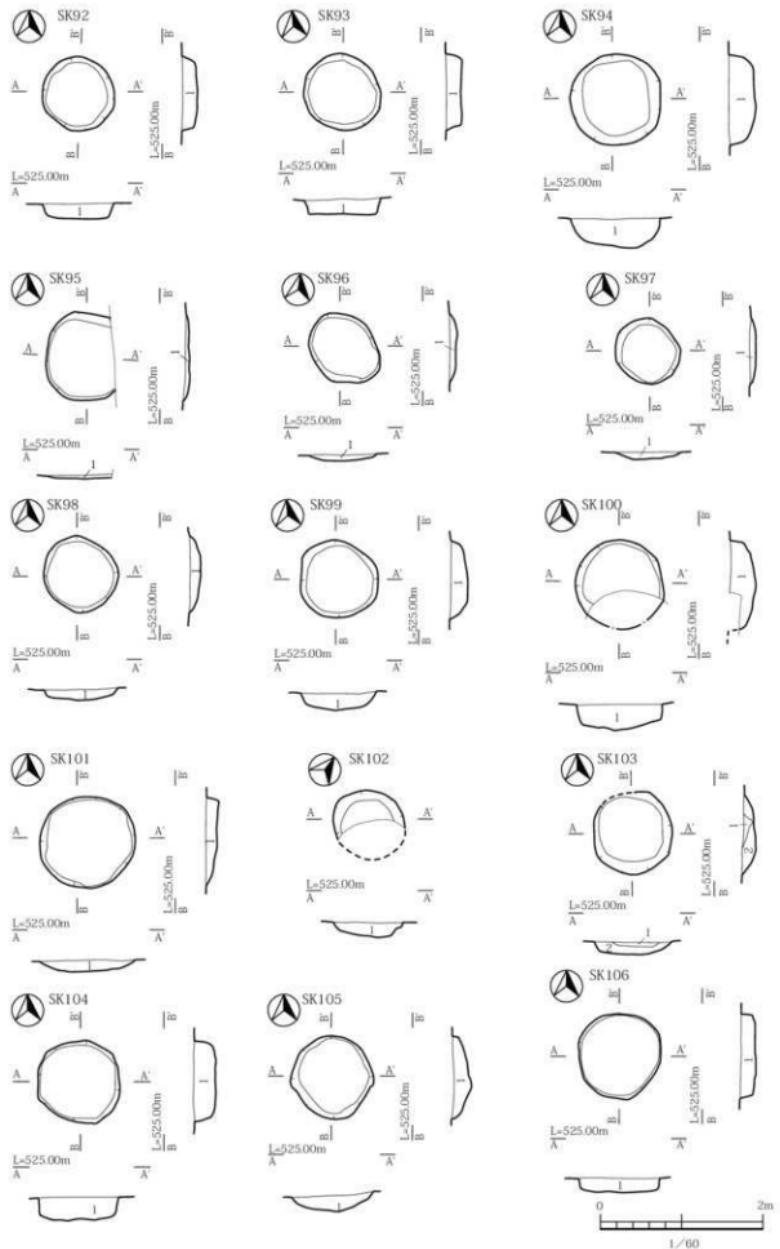


図 361 土壌 (SK) 実測図 (2)

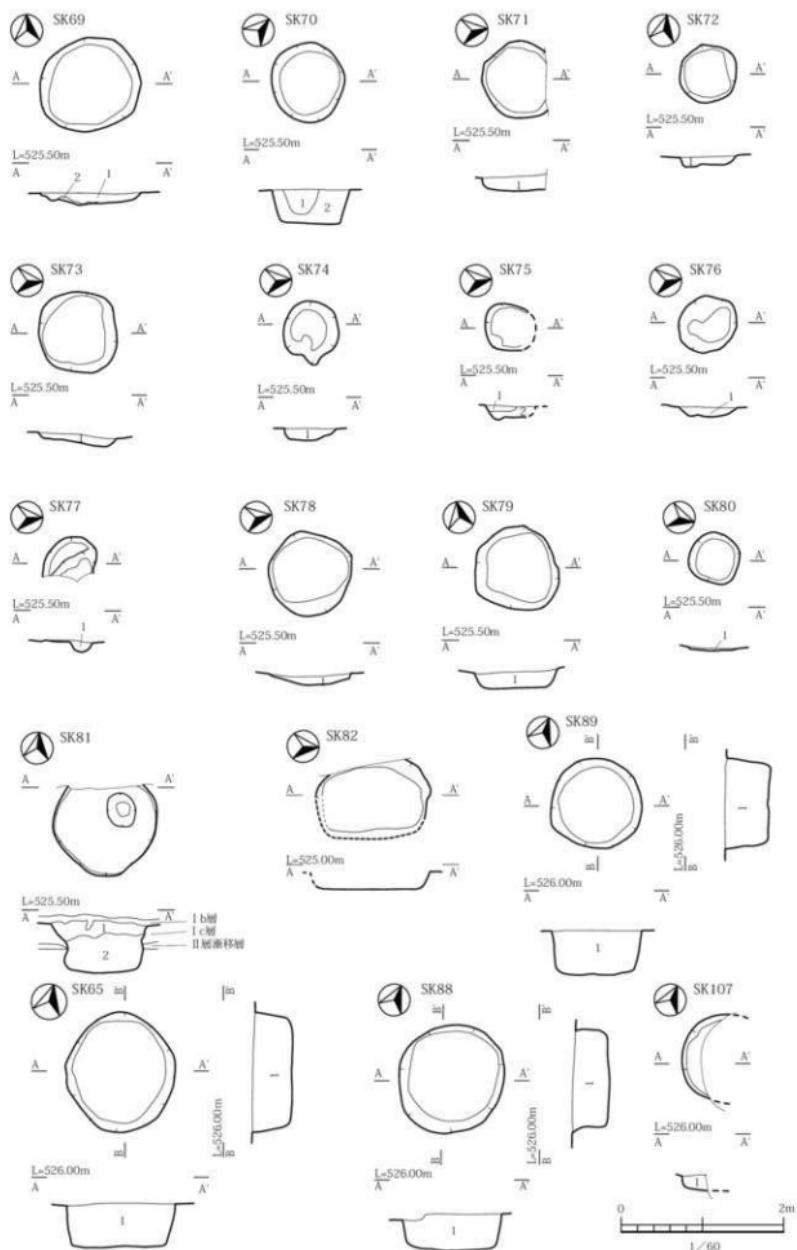


図 362 土壌 (SK) 実測図 (3)

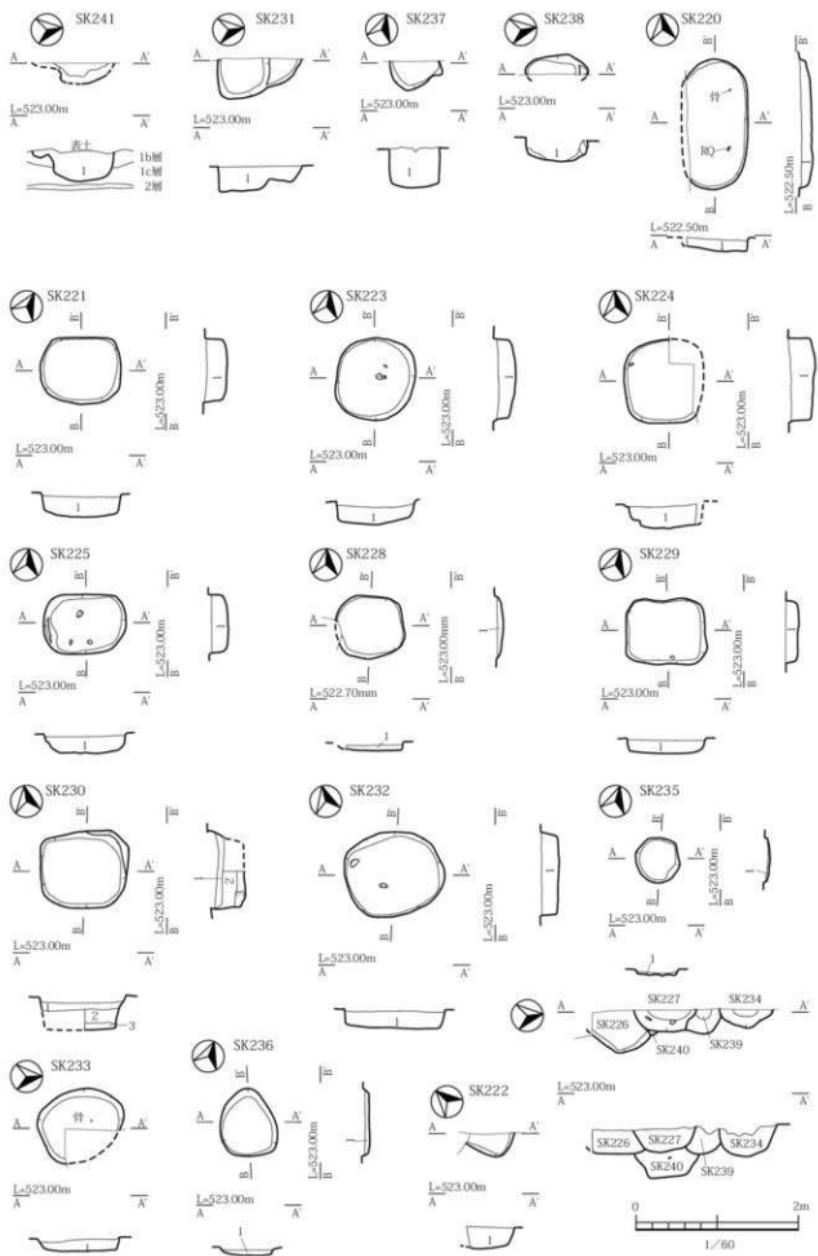


図 363 土壤 (SK) 実測図 (4)

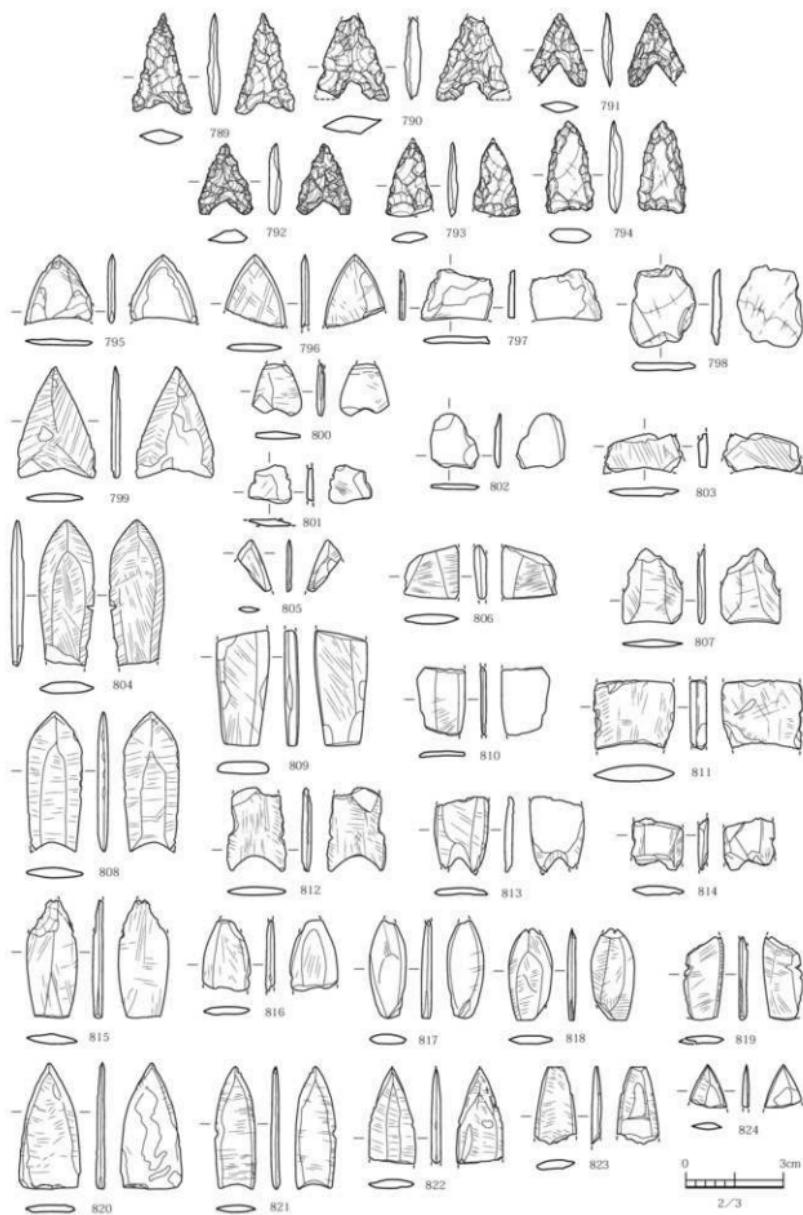


图 364 津留地区包含层出土石器 (RQ) 实测图 (1)

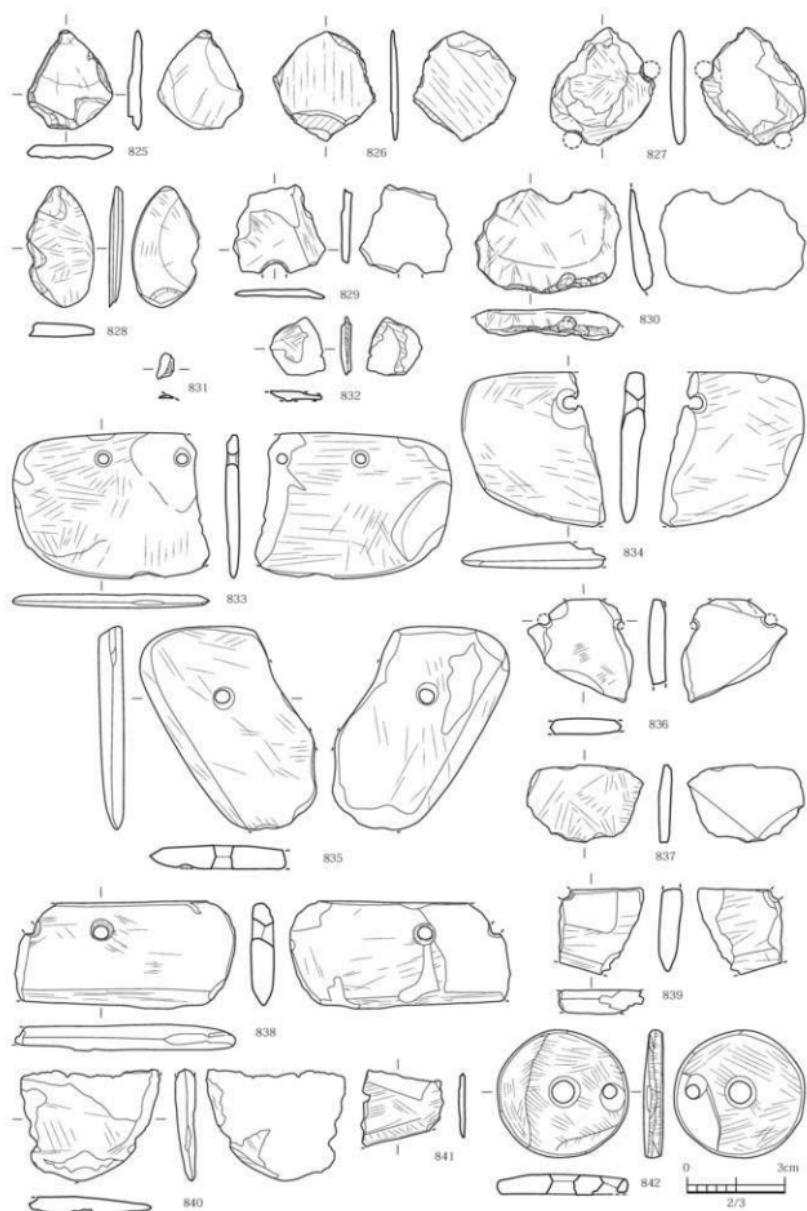


图 365 津留地区包含层出土石器 (RQ) 实测图 (2)

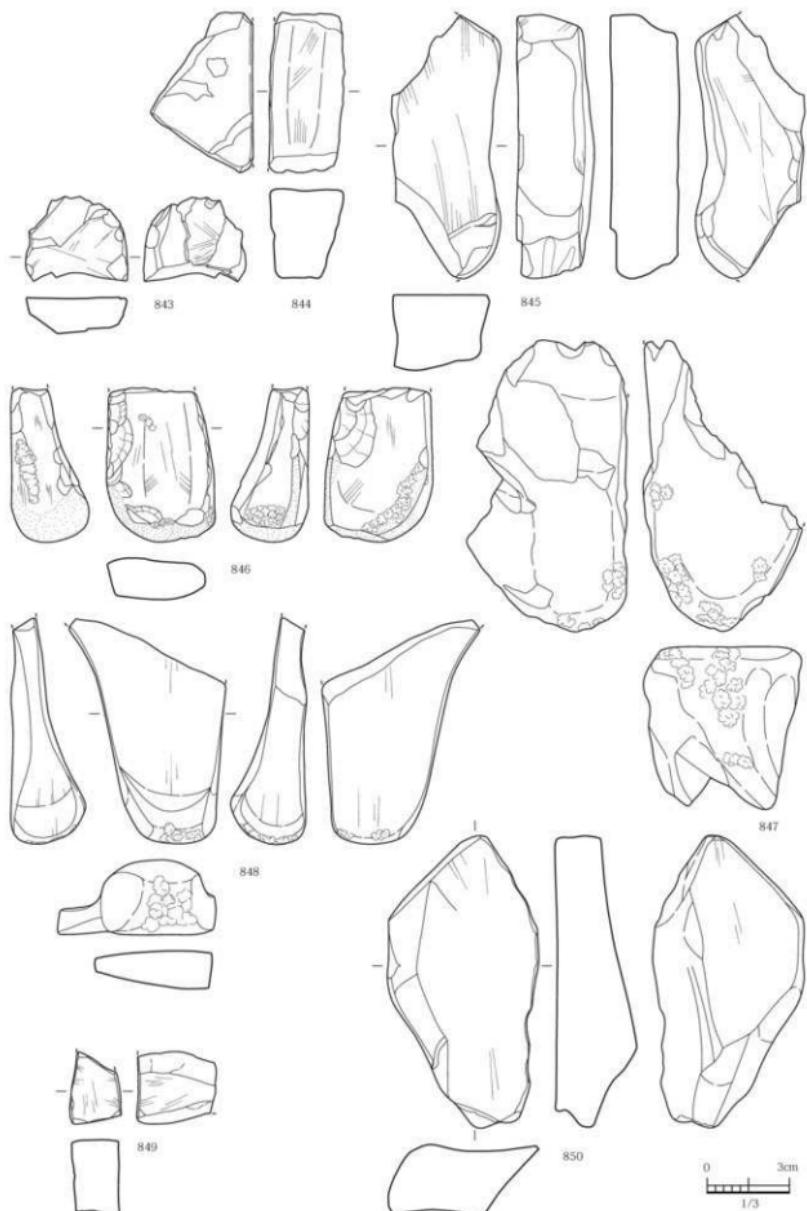


図 366 津留地区包含層出土石器 (RQ) 実測図 (3)



图 367 津留地区包含层出土石器 (RQ) 实测图 (4)

2-3 包含層

津留地区の包含層からは、石器、土器、金属器が出土した。金属器は、1層出土の青銅製の環、有孔円板、寛永通宝について第一分冊で既述している。ここでは古墳時代以降の遺物を中心とした包含層出土遺物を図示した。

石器、土器は、いずれも津留地区の居住域から出土した石器、土器と同様の時期、組成を示している。

石器は、幅地区の包含層出土遺物と対比すると加工具である石器の出現率、なかでも砥石の数量が大きく異なっている。津留地区では、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物が混在して包含層から出土しているため厳密に決することができないものの、砥石の数量と種類は飛躍的に多様性を獲得している。このことは「磨る・研ぐ」という技術が弥生時代後期に伸長し、多用されたことを示唆している。なお、石鏃、石庖丁等、利器は幅地区と同じ様相を示しており、九州各地の使用済み石庖丁が幅・津留遺跡に集積されていたこと、が包含層にもあらわされている可能性も同様に首肯される。したがって、幅・津留遺跡が所在する阿蘇力

ルデラ南郷谷では、弥生時代後期にも石器製作は継続されており、それを基層として鉄器製作が重層的に累重した、と判断される。石器製作遺構には新たに攻玉遺構が加わり、鉄器製作遺構として鍛冶遺構が出現したことが、石器製作と鉄器製作に共通して必要な「磨る・研ぐ」道具である砥石の多様化を促した、と考えられる。

土器には、壺、高杯、甕が認められ、貯蔵、供獻、煮沸の各用途を満たしている。これに、手捏ね土器(RP2003)、ジョッキ形土器(RP2004~2017)、鉢(RP2024~2026、2044)が加わる。RP2010はジョッキ形土器の把手であるが、扁平な板づくりではなく、断面が円形を呈する。このような紐つくりの把手には、陣笠状の柱頭が付される例がある。RP2066、2067は粗製甕であり、脚部を割り取った台付甕の底部(RP2068、2069)、脚部(RP2060~2064、2071、2073)も検出されている。

なお、包含層からは古墳時代以降の遺物も検出されている。

石器には、遙方、穿孔具、連环そして多数の石鏃が検出されている。RQ889は、蛇紋岩製の遙方である。

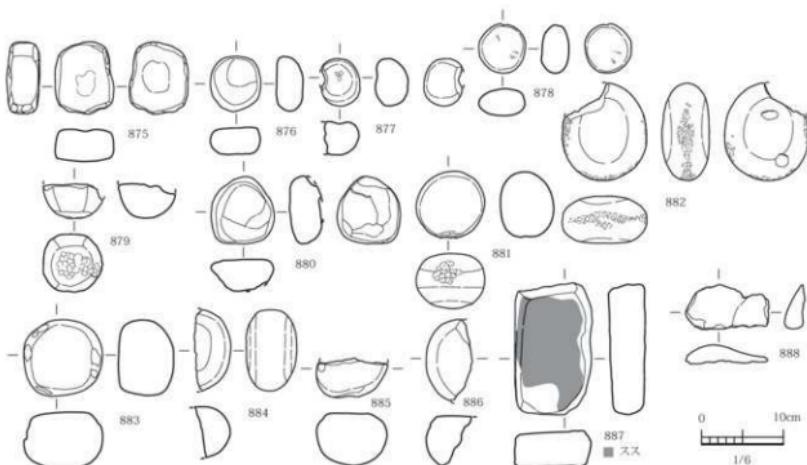


図 368 津留地区包含層出土石器 (RQ) 実測図 (5)

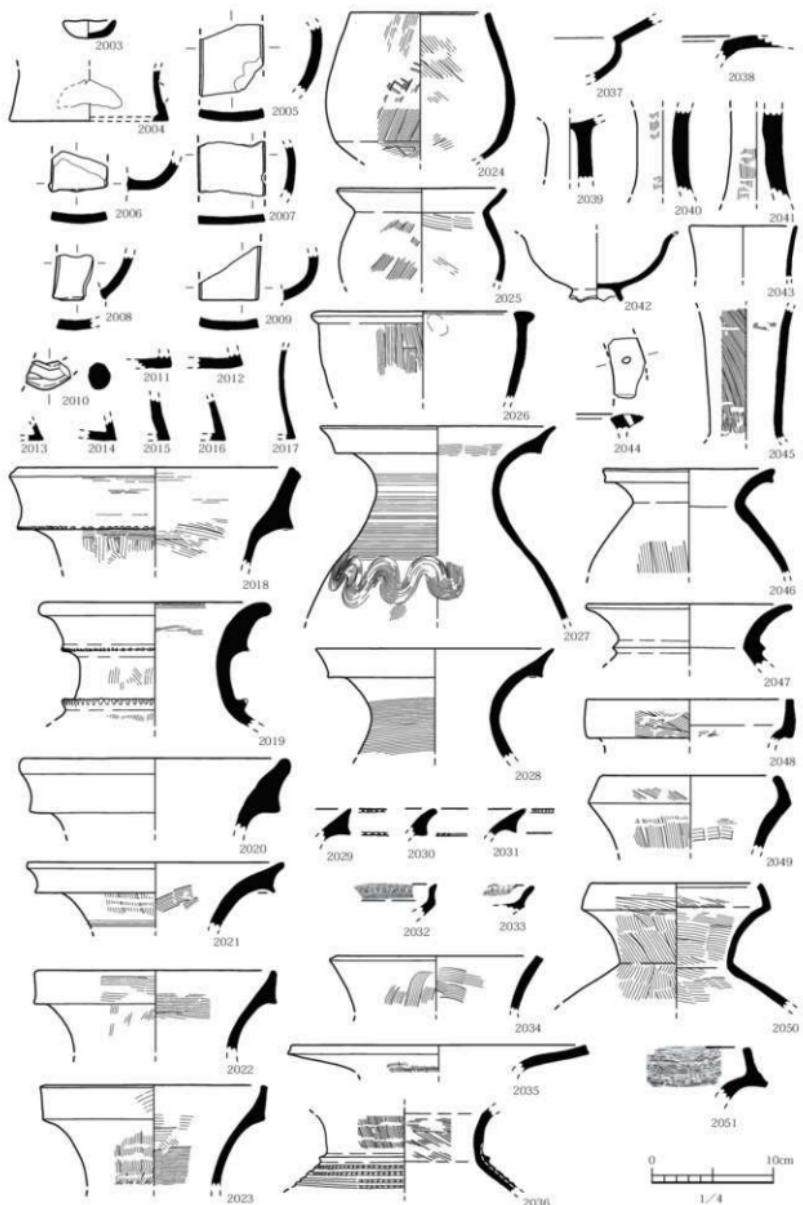


図 369 津留地区包含層出土土器 (RP) 実測図 (1)

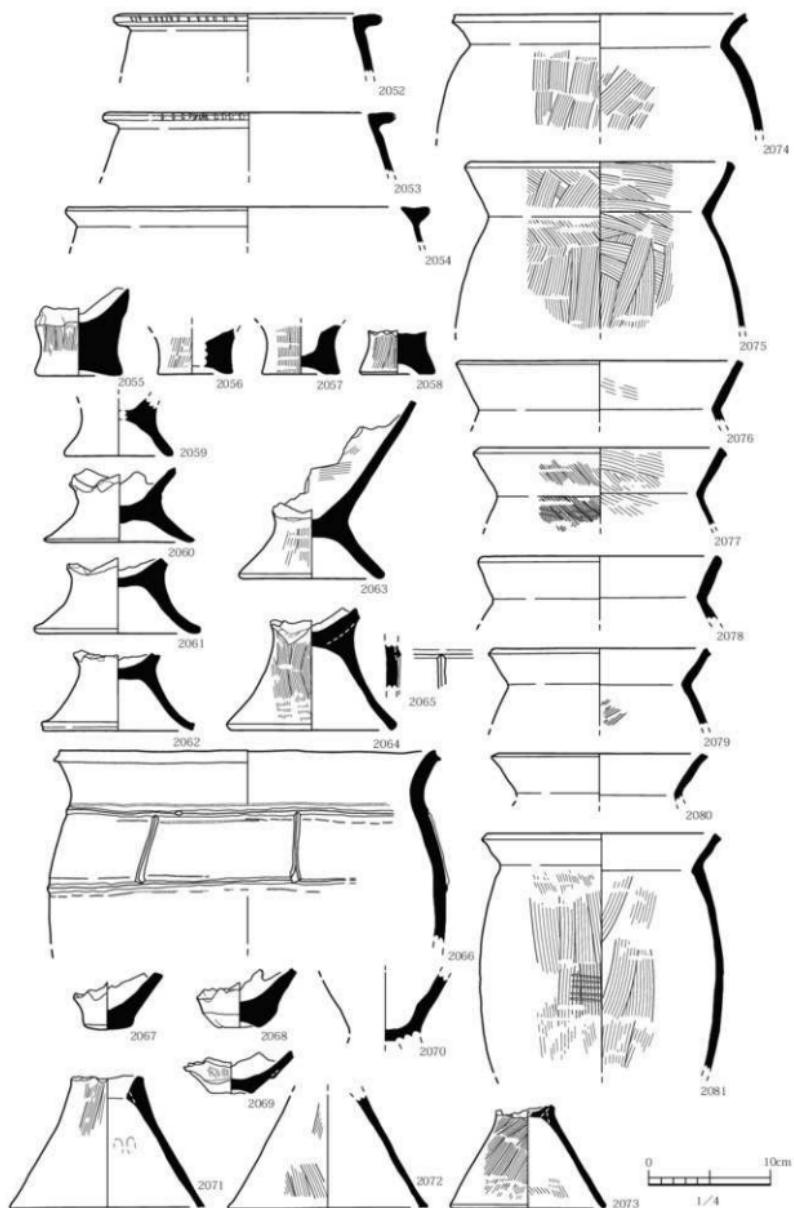


図 370 津留地区包含層出土土器 (RP) 実測図 (2)

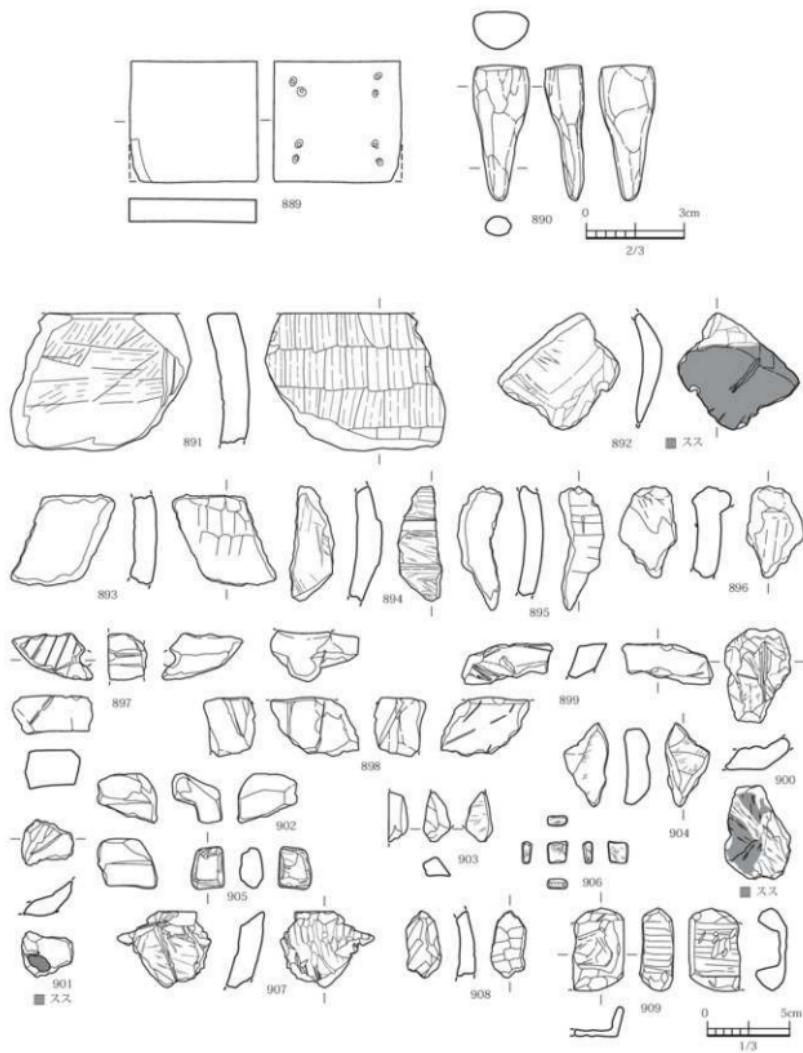


図 371 津留地区包含層出土石器 (RQ) 実測図 (古墳時代以降)

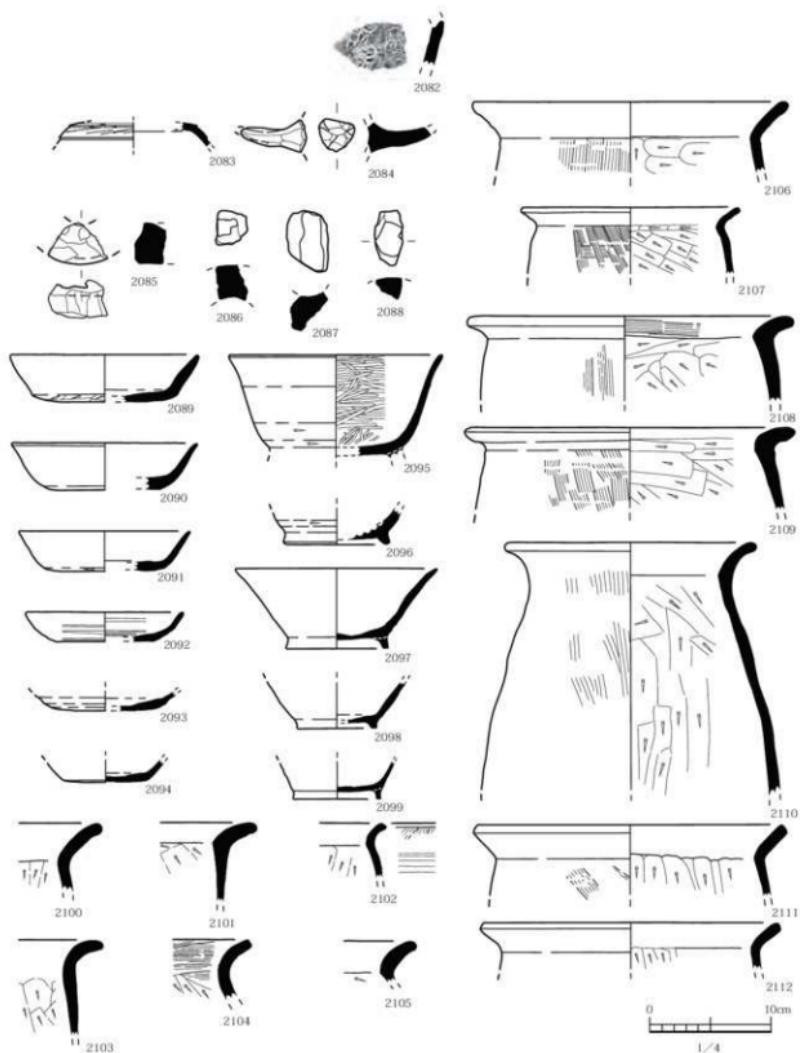
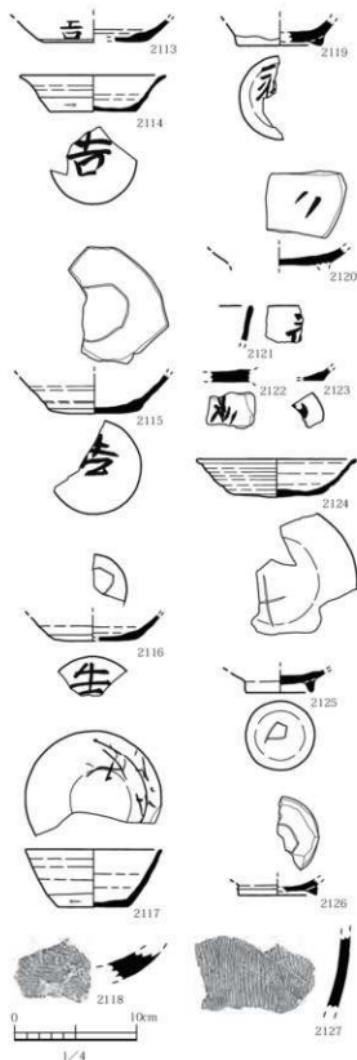


図 372 津留地区包含層出土土器 (RP) 実測図



$3.7 \times 3.9 \times 0.7\text{cm}$ 、 23.7g を計り、石帶に縫い付ける紐の通し穴が裏面四隅に対角線に沿って4孔穿たれている。RQ890は、凝灰岩製の穿孔具と考えられる。ポンチのように間接打撃に用いられていた、と推測している。RQ891～908は滑石製石錠の破片とその再加工品である。いずれも温石として再利用された石器と考えられる。RQ909は、滑石製連環の破片である。

土器には、縄文土器、須恵器、土師器が検出されている。RP2082は押型文が施された縄文土器である。RP2083は須恵器の蓋、RP2084は土師器の瓶把手である。RP2085～2088は輪の羽口である。いずれも小破片であるが、羽口部分は直径 10cm 、孔径 4cm 程と推定復元できる。これらの羽口は、鉄製品に関する分析と考察に掲載している鐵鋤と複合する製鐵関連遺物である。土師器は、壺、瓶、甕が検出されている。甕は、いずれも内面へラ削りの長制甕であり、甕と複合する甕である。

文字または記号を記した土器が検出されている。RP2113は側面、RP2114～2116は底面に「吉」が墨書きされている。なお、RP2115、2116は、見込に線刻された「○」が加わる。RP2117、2119～2123は判読不明な例であるが、RP2117のような習字例が含まれている。RP2124は底面に「×」を線刻した例、RP2125は高台、RP2126は見込に「○」を線刻した例である。RP2118、2127は甕の外間に「井」等を線刻した例である。

以上、包含層から出土した石器、土器は、集落内に遺存していた石器、土器が、表層の耕作などにより露出したもの、とみてよい内容である。

図373 津留地区包含層出土土器（RP）実測図
(古墳時代以降)

分析 と考察

幅・津留遺跡

幅地区における墓域の土器廃棄遺構と出土土器

石田 智子

幅・津留遺跡出土磁石の検討

森 貴教

幅・津留遺跡出土のガラス製品

谷澤 亜里

幅・津留遺跡の玉類とその製作技術

大坪 志子

幅・津留遺跡出土鉄製品の検討

鄭宗鎬、村上 恭通

幅・津留遺跡出土遺物の諸問題

宮崎 敬士

幅地区における墓域の土器廃棄遺構と出土土器

石田 智子

はじめに

阿蘇カルデラ内では弥生時代中期以降に遺跡が増加し、特に阿蘇谷西部には狩尾遺跡群や小野原遺跡群などの弥生時代後期を主体とする集落が密集する。幅・津留遺跡は南郷谷に所在し、弥生時代中期から後期の長期間にわたる集落として非常に重要な遺跡である。

幅地区的墓域は、土坑墓・木棺墓などの墳墓と、その周辺に位置する土坑・溝で構成されている。土坑や溝には、多量の土器が廃棄されている。墳墓周辺の土坑や溝に土器を廃棄する行為は、弥生時代中期を中心とする北部九州地域一帯で共有される葬送儀礼に関わる風習である。

本稿は、幅地区的墓域でみられる土器廃棄遺構および出土土器を検討することで、葬送儀礼に関わる人間行動や地域間交流を明らかにすることが目的である。まず、北部九州地域の墓域・集落における土器廃棄遺構の時期変遷と地域的特徴を把握した上で、幅地区的土器廃棄遺構を評価する。次に、出土土器の特徴を検討する。遺構と遺物の特徴を踏まえた上で、九州全体の弥生社会の動向に幅・津留遺跡を位置づける。

1 幅地区的墓域における土器廃棄遺構の特徴

1-1 幅地区的墓域における土器廃棄遺構

幅地区的墓域で確認された墳墓は、木棺墓、土坑墓、木蓋土坑墓、側面横穴式木蓋土坑墓の4種類がある。土器廃棄遺構は、SD2・SD3・SD9・SX11である。墓域と集落域は溝SX10で明瞭に区分される。土器廃棄遺構の出土土器の時期は、弥生時代中期後半～後期前半が中心である。

墳墓と土器廃棄遺構の関係をみると、両者が重複することはない。土器廃棄遺構と密集する墳墓群の間にわずかに空間が存在することから、墓域の利用が開始された早い段階で土器廃棄遺構が設置された後に墳墓群が周辺で造営されたと推測できる。土器廃棄遺構の設置当初は墓群の外側を区画する意図があった可能性もあるが、墓域範囲が通時に西から東へと拡大するにともない、結果として土器廃棄遺構は墓群の内側に

いしだ・ともこ、鹿児島大学法文学部

位置することになった。また、土器廃棄遺構の床面の凹凸が少ないとから、土坑を複数回掘り返すことはなく、開放された土坑に継続的に土器が廃棄されたと考えられる。

1-2 北部九州地域の墓域における土器廃棄遺構

弥生時代には、日本列島各地で多様な土器祭祀が行われた。墓域における土器祭祀については、①個人墓への小型壺の副葬→②集団に対する儀礼行為と儀器の廃棄→③特定墓域・特定個人墓への高杯を中心とする土器群による供獻行為という3つの様相が弥生時代期間中に漸移的に変化することが指摘されている（古屋2007）。北部九州地域も日本列島全体の動向に呼応して、弥生時代開始期～前期は土器の副葬、中期は土器の廃棄、後期は土器の供獻へと移行する（石田2009）。石田（2009）を基に、時空間変遷を述べる。

[弥生時代前期]

墓域の土坑や溝に土器を廃棄する行為は、弥生時代前期中頃～後半の筑紫地域・佐賀地域ではじまる。具体的には、三国の鼻遺跡（小郡市）、四本黒木遺跡（神埼町）などである。

墳墓周辺に設けた土坑から、1～少数の完形小壺が出土する。これは、弥生時代開始期～前期の個別墳墓に土器を供獻または副葬する行為から、中期以降に墓域にともなう土坑に多量の土器を廃棄する行為へと変わる過渡期にあたる事例である。

[弥生時代中期初頭～中頃]

弥生時代中期初頭には、墓域にともなう土坑や溝からまとまった数量の土器が廃棄または埋置された状態で出土する。佐賀東部地域・筑紫地域・福岡地域に分布中心があり、筑豊地域・周防灘沿岸地域でも少數事例がある。具体的には、弥生時代中期初頭～前半の永岡遺跡（筑紫野市）、陣ノ内遺跡（筑穂町）などがある。

土器は、1～少数の完形小壺を中心とする。無塗彩土器が主体であるが、黒彩土器や赤彩土器も少數みられる。土器は、塗彩の有無にかかわらず、ミガキ調整

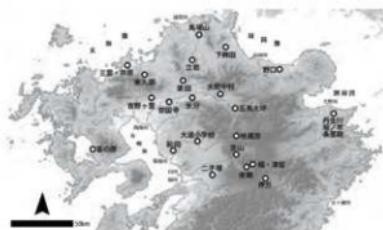


図1 幅遺跡の土器廃棄遺構関連遺跡

などで非常に丁寧に製作されたものである。

土器が廃棄された土坑や溝は、二列理葬墓の両側に平行する位置に設置されている。つまり、墓域に所在する土坑や溝を設置する本来の目的は墓域の区画であり、葬送行為に用いられた土器を廃棄または埋置するのには二次的な利用であるといえる。

弥生時代中期中頃になると分布域が拡大し、甕・高杯・筒形器台などの壺以外の多様な器種や赤彩土器の使用が増加する。

注目されるのが、中期初頭～後半にかけての早良平野の区画墓である。東入部遺跡第2次調査や浦江遺跡第5次調査（福岡市）では、墓域を囲む溝や土坑から、長期間にわたる多量の土器が出土する。特に東入部遺跡では、中期前半の黒彩土器から、中期中頃～後半の赤彩土器へと比重が移る過渡の現象を確認できる（石田2013）。

〔弥生時代中期後半～末〕

弥生時代中期後半～末には、筑紫地域を中心として、筑後川流域の日田地域、周防灘沿岸の宇佐地域など、墓域にともなう土坑や溝に土器を廃棄する行為が北部九州地域一帯で行われる。しかしながら、土器廃棄遺構と墳墓の位置関係、出土土器の器種組成や赤彩土器の出土比率、完形比率などの点で、各地域で多様性が生じる。

筑紫・筑後地域では、基本的に墓域や墓群の外側に土器廃棄土坑や溝を設置する。甕・高杯を中心とする多様な器種の土器を墓群周辺の土坑や溝に大量に廃棄する。出土土器の多数に赤彩やミガキ調整が施され、非常に丁寧なつくりの精製土器を使用する傾向が強ま

る。

また、複数回にわたって小土坑を設けた結果大型土坑となる場合があり、継続的な行為の蓄積による遺構の形成過程を指摘できる。栗田遺跡（筑前町）や安国寺遺跡（久留米市）などでは、土器廃棄遺構出土土器と墓坑内出土土器との間で破片が接合する事例が確認されている。これらの遺跡では、土器廃棄遺構が墓群の外側だけでなく内部に位置する場合もある。弥生時代中期前半までは土坑や溝によって墓域を区画していたが、中期後半以降は墓域ではなく墓群を区画する目的へと変化したことがうかがえる。

筑紫・筑後地域の様相は、筑後川を介して、上流の日田盆地でも共有される。しかしながら、さらに上流の山間部では、五馬大坪遺跡（日田市）のように、明確な掘り込みをもたない土坑に、少数の土器が単発的に廃棄される現象が認められる。筑紫・筑後地域から距離が離れるにつれて、土器廃棄行為が変化している。

福岡平野や早良平野では、群集墓において複数回にわたって土器を廃棄する大型土坑を墓域に設けることは一般的ではない。長期間にわたる非常に多数の甕棺墓群が調査された吉武遺跡群（福岡市）でも、土器廃棄遺構の検出事例は少なく、一回だけ土器を廃棄した小土坑がみられる程度である。

中期後半～末で注目されるのが、糸島地域の様相である。三雲南小路遺跡（糸島市）のような、区画墓の周溝に時期差をもって土器を廃棄する事象が確認できる。出土土器は、壺（大型広口壺、袋状口縁壺）・甕・高杯が主体である。

以上のような墓域に土器廃棄遺構を設置する行為は、基本的には弥生時代中期の北部九州地域を中心とする甕棺墓分布圏の習俗である。大型専用甕棺を埋葬に用いる風習は、北部九州地域から南方向には、熊本平野部や宇土半島基部までは面的に、薩摩半島西岸部までは点的に広がる。しかしながら、墓域に土器廃棄遺構を設置する事例は、上祇杷遺跡（みやま市）や羽山台遺跡（大牟田市）など、有明海沿岸の筑肥山地付近が南限である。

一方、甕棺墓が墳墓の主体ではない地域でも、墓域に土器廃棄遺構が設置されることがある。薩摩沿岸・周防灘沿岸の馬場山遺跡（北九州市）や下种田遺

表1 土器廃棄遺構の特徴

地域	西北九州		北部九州		東九州			中九州
	大村	糸島	筑紫・佐賀	日田	宇佐	別府湾	阿蘇	
代表的遺跡	富の原	三雲・井原 ヤリミゾ	栗田、安国寺、 吉野ヶ里など	大肥中村、 五馬大坪	樋尻道、 野口など	丹生川阪ノ市 条里跡	幅・津留	
時期	中期後半 ～後期前半	中期後半 ～後期前半	中期前半 ～後期前半	中期後半	中期後半	後期後葉 ～終末期	中期後半 ～後期前半	
墳墓	種類	甕棺墓 石棺墓 土坑墓	甕棺墓	甕棺墓 木棺墓 石棺墓 群集	土坑墓 石蓋土坑墓	石棺墓 土坑墓	土坑墓 木棺墓	
	密集度	群集 +特定個人	群集	群集	群集	群集	群集	
廃棄遺構	形態	不定形 (浅い土坑・ 礫混じり)	不定形 (土坑、溝)	不定形 (土坑、溝)	不定形 (土坑、溝)	不定形 (土坑)	不定形 (溝)	
	位置	墓群の外側	墓群の外側 (一部墳墓重複)	墓群の外側 (一部墳墓重複)	墓群の外側 (一部墳墓重複)	墓群の周辺 (一部墳墓重複)	墓群の内側	
土器	様式	須玖式(西) +黒髮式	須玖式(西)	須玖式(西)	須玖式(西・東) +黒髮式	安国寺式	須玖式(西) +黒髮式	
	器種組成	甕、壺、高杯 壺、壺(広口壺) 高杯	多種。甕、壺(広口壺)、 高杯、鉢、 器台、筒形器 台、特殊器形 土器など。	甕、壺、高杯 高杯、 筒形器台	甕、壺(複合 口縁型、直口 壺、長頸壺)、 高杯、鉢、脚 付鉢、器台		甕、壺(袋状口 縁型、広口壺、 長頸壺)、高杯	
	数量	多量	少量	多量	少量	多量	多量	
	完形率	低い(細片)	高い	高い	高い	高い	高い	
	赤彩率	須玖式:高 黒髮式:低	高い	須玖式:高	須玖式:高	低い	須玖式:高 黒髮式:低	
	破碎行為	なし	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠	穿孔、打欠	
	破碎頻度	低い	低い	低い	低い	高い	非常に高い	
	廃棄回数	複数回	一回?	複数回	一回?	複数回	複数回	

跡(行橋市)では、在地墓制の主体は土坑墓であるが、墓群の外側を区画する位置に土器廃棄土坑が設置される点で、甕棺墓分布域と共通する。一方で、宇佐地域の野口遺跡(宇佐市)や樋尻道遺跡(宇佐市)では、主体の墳墓は土坑墓や石蓋土坑墓である。これらの遺跡では、墳墓と土器廃棄土坑の重複が大きく、区画の意味が不明瞭である。また、大村湾沿岸の富の原遺跡(大村市)では、甕棺墓も數基確認されるが、在地墓制の中心は石棺墓である。当遺跡では、墓域の外側を区画する位置に大きな土坑があり、土坑内からは赤彩土器を含む多数の土器の小破片や石礫が出

土する。墓域における土器廃棄遺構の設置規則や使用方法が確固たるものではなく、在地墓制の状況に合わせて柔軟に変化している状況が分かる。

弥生時代中期後半以降の北部九州地域における土器廃棄遺構および出土土器の特徴を第1表、関連遺跡を第1図に示す。

[弥生時代後期～終末期]

弥生時代後期以降になると、北部九州地域全域で墓域の土坑や溝に土器を廃棄する事例が減少するが、井原ヤリミゾ遺跡(糸島市)や井原上学遺跡(糸島市)、

二塚山遺跡（上峰町）など、糸島地域・佐賀地域では継続する。二塚山遺跡では、後期前半まで土器廃棄土坑を墓列外側に設置するが、対象が特定少數の墓群に絞られている。また、高島遺跡（北九州市）では、後期後半～終末期にかけて、墓域内の土坑や溝の複数回の掘削や、土器を複数回廃棄した痕跡が認められる。

弥生時代終末期になると、瀬戸内～近畿と共通する器種である有段高杯を中心とする埴輪の土器祭祀が糸島地域から早良平野以東の博多湾沿岸域へ、さらには東北部九州に拡大する（森本 2018）。

東九州では墓域での土器廃棄遺構の事例は少ないが、別府湾沿岸の丹生川坂ノ市条里跡第13次調査で後期後葉～終末期の遺構が確認されている。まず土坑を掘削した後に、土坑に重複しながら複数の箱式石棺が築造されるのと併行して土器廃棄が行われる。壺・高杯・脚付鉢や器台を中心に、スカフ付した甕も多く出土する。多くの土器に焼成後穿孔が行われる（井・坪根 2018）。

1・3 集落域における土器廃棄遺構

[北部九州の土器廃棄遺構]

土器廃棄行為が確認されるのは墓域が多いが、地域によっては集落域でも出土する。出土遺構の種類は、土坑・井戸・溝・住居跡（竪穴住居跡・掘立柱建物跡）などがある。

集落域の土坑での土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期前半～中頃の筑紫・佐賀地域である。定形的な土坑に多量の土器が廃棄される点が特徴である。赤彩土器だけでなく、無塗彩土器や黒彩土器も多く出土する。具体的には、大板井遺跡（小郡市）、天建寺南島遺跡（みやき町）などがあげられる。後期～終末期にかけては、比恵遺跡（福岡市）や以来尺遺跡（筑紫野市）などで、円形や方形の周溝状遺構に土器がまとめて廃棄される事例が確認される。

井戸における土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期後半～後期初頭の福岡平野に集中する。具体的には、比恵遺跡（福岡市）、本堂遺跡（大野城市）などがある。器種組成としては、赤彩の袋状口縁壺や瓢形土器、双孔広口壺が特徴である。層位的な出土状

況を踏まえると、井戸設置時や廃絶時における土器廃棄が多い。モモの種子なども出土することから、祭祀儀礼的行為であると考えられる。

溝や河川における土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期後半～末が中心である。福岡地域、霧島沿岸地域、壱岐、島原半島など、北部九州一帯の広い地域で確認できる。多種多様な器種が多量に廃棄される点が特徴である。那珂遺跡（福岡市）や久保園遺跡（福岡市）のように、溝内に小区画を設置して土器を廃棄する事例もある。糸島地域の元岡桑原遺跡群（福岡市）では、弥生時代中期後半～古墳時代前期前半の長期間にわたって、河道への多量の土器廃棄が行われた。日常土器だけでなく外来系土器や、ミニチュア土器や特殊器形の土器なども多数出土している。

住居跡における土器廃棄行為が確認できるのは、弥生時代中期後半の福岡地域・筑紫地域である。筑紫地域では、下高橋馬屋元遺跡（大刀洗町）で検出された竪穴住居のように、焼失住居に対する土器廃棄行為が確認できる。また、高木遺跡（古賀市）のように、掘立柱建物跡の柱穴の中に多量の土器が詰め込まれている事例があり、建物廃絶時の祭祀行為と考えられる。

[中九州における土器廃棄遺構の特徴]

中九州では住居跡を中心とする集落域で土器廃棄行為が確認されることが多い。宮山遺跡（阿蘇市）では、弥生時代中期～後期初頭の竪穴住居跡の主柱穴に、赤色の縦縞文様を施した壺を二つに割って各柱穴に入れている。前田遺跡（玉名市）では、弥生時代中期後半～後期前半の竪穴住居跡から多数の赤彩土器が出土しており、住居廃絶儀礼にともなう土器廃棄行為であると考えられる。出土土器には、黒髮式土器の甕・壺・鉢・高杯・器台だけでなく、須歎式土器の赤彩された甕・壺・高杯・筒形器台がある。地蔵原遺跡（南小国町）では、遺構の性格は不明であるが、弥生時代中期後半～後期前半の集落域から多数の赤彩土器が出土している。黒髮式土器の甕・壺だけでなく、遠賀川以西系須歎式土器の赤彩された甕・高杯・筒形器台・袋状口縁壺・鉢、遠賀川以東系須歎式土器の赤彩長頸壺や多条突広口壺など、九州北半部一円に由来する土器が出土している点が特徴である。

一方で、墓域における土器廃棄行為はみられない。新南部遺跡群第11次調査地点（熊本市）では、弥生時代中期前半～後半の区画墓と考えられる喪棺墓群を区画する溝状遺構が検出されたが、多量の土器を廃棄する行為は確認できない。大道小学校（山鹿市）では、成人用喪棺の周辺からまとまつた土器群が出土した。黒髪式土器の壺・高杯と須玖式土器の赤彩の壺・袋状口縁壺・高杯である。出土状況が不明な点が多いが、中九州では少ない墓域における土器廃棄行為として注目される事例である（隈1983）。

なお、北部九州地域に分布中心をもつ大型専用喪棺は熊本平野部では出土する¹³が、阿蘇カルデラ内では現時点では確認されていない。

1-4 小結

北部九州地域の概要を踏まえた上で、幅地区的墓域における土器廃棄遺構の位置づけを検討する。

まず、墓域における土器廃棄遺構の設置は北部九州地域全域で確認できるが、時期や地域ごとに様相が異なる。弥生時代中期段階は筑紫・佐賀地域を中心であるが、後期以降になると糸島地域や東北部九州に比重が移る。中九州では、大型専用喪棺とともに葬送儀礼としての墓域における土器廃棄行為は受容しておらず、集落域における土器廃棄行為のみが確認できる。つまり、墓域の土坑や溝から多量の土器が廃棄された状態で出土する幅地区のような状況は、白川下流域の熊本平野、白川中流域の菊池盆地、阿蘇外輪山などの阿蘇カルデラ周辺地域では、現時点では類例を確認できない。隣接地域間の情報伝達や風習の共有というよりも、遠隔の北部九州地域との直接的関連を想定する必要がある。

墳墓と土器廃棄遺構の位置関係を検討すると、幅地区では両者が重複せずに設置されることから、弥生時代中期後半以降の筑紫・佐賀地域や日田地域との類似性が高い。宇佐地域・別府湾沿岸地域などの東九州の土器廃棄遺構は墳墓との重複が大きく、区画の意識が明瞭ではない。幅地区的場合は、土器廃棄遺構が墓群の内側に位置する点が他地域とは異なるが、これは墓域の形成過程における結果であり、基本的には墓群を区画する意識が強いと考えられる。また、特定個人墓

ではなく集団墓を対象とする点も特徴である。

したがって、遺構の特徴からは、北部九州地域の中でも特に筑紫・佐賀地域や日田地域との関連が指摘できる。これらの地域をつなぐのは筑後川であり、河川や山間部を介した北部九州地域と阿蘇カルデラの地域間交流を示唆するものである。

2 幅地区的墓域から出土した土器の特徴

2-1 時期と器種組成

土器廃棄遺構の出土土器の時期は、弥生時代中期後半～後期前半が中心である。

出土土器は、中九州を中心に分布する黒髪式土器と、北部九州を中心に分布する須玖式土器で構成される（表2）。黒髪式土器は、無塗彩の壺と壺（広口壺・長頸壺・短頸壺）、赤彩および無塗彩の長頸壺である。須玖式土器は、赤彩の壺、高杯、袋状口縁壺である。特殊な器形の土器はなく、基本的な器種で構成される。白川下流域の熊本平野部では蓋や器台が確認できるが、幅地区では確認できない。また、須玖式土器の筒形器台は、地蔵原遺跡・前田遺跡など周辺地域では確認されるが、阿蘇カルデラ内での出土事例はない。

須玖式土器は、福岡平野や筑紫・佐賀平野に分布中心がある遠賀川以西系須玖式土器であり、東北部九州に分布中心をもつ遠賀川以東系須玖式土器は出土しない。須玖式土器がほぼ赤彩土器に限定される点も注意される。なお、日田地域では、遠賀川以西系須玖式土器と以東系須玖式土器が、無塗彩土器と赤彩土器の両方で併存する。また、阿蘇外輪山北側に所在する地蔵原遺跡（南小国町）で出土する土器は、基本的には遠賀川以西系須玖式土器と黒髪式土器で構成されるが、直口縁で口縁下に一条の三角突帯をもつ赤彩長頸壺と

表2 廃棄遺構出土土器の器種と塗彩の関係

	壺	壺 広口壺 袋状口縁壺	壺 長頸壺 短頸壺	高杯	鉢
黒髪式	○ ○	○	○ ○	○ ○	△
須玖式	○ △	○			○

出土量：○多 △少 ■赤彩

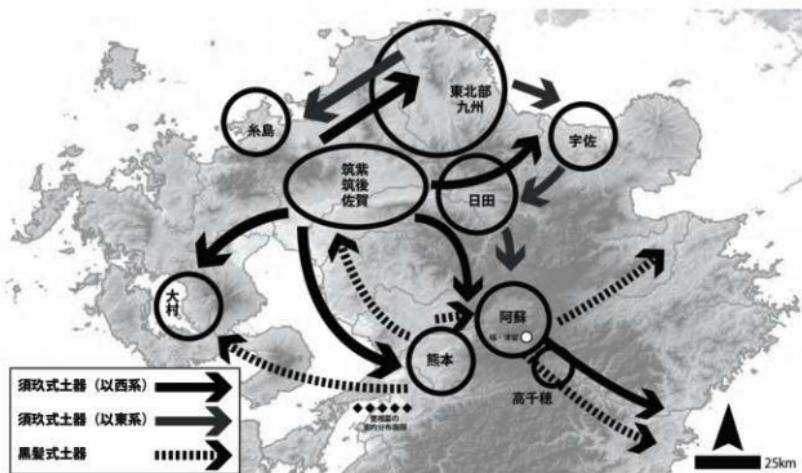


図2 土器からみた地域間関係

多条突帯広口壺に遠賀川以東系須玖式土器の影響を確認できる。しかしながら、阿蘇カルデラ内においては遠賀川以東系須玖式土器が出土しないことから、地理勾配に応じた器種の減少が確認できる（図2）。

幅地区で出土する須玖式土器は、形態的特徴は北部九州地域に由来するが、黒味が強い赤色顔料や、全面塗彩だけでなく文様状塗彩などの赤色顔料の塗彩方法の点から判断する（石田2010）と、搬入品ではなく、阿蘇在地または近隣地域で製作されたものと考えられる。ただし、茶褐色系胎上に明るい発色の橙色系赤色顔料が薄く塗彩されている赤彩甕（SD3-RP162）など、他とは異なる特徴をみせる資料もあることから、一部は搬入された可能性もある。より正確な土器の製作地については、胎土分析による検討が今後必要である²⁾。

幅地区的墓域出土土器は、北部九州（SD2-RP135、SD3-RP207など）や東九州（SD3-RP208、SX11-RP333など）の土器が少量含まれる程度であり、他地域からの搬入土器が少ない。在地製作と考えられる甕・壺などの基本器種組成で構成されている点が特徴である。

2.2 赤彩上器からみた地域間交流

弥生時代中期後半～末の須玖式土器の赤彩甕は形態の規格性が高い。特に、痕跡部突帯の施文位置が、口縁部直下に一条突帯、胴部最大径付近の胴部中位に一～三条突帯をつける点で共通している。赤彩甕については、胴部中位の突帯本数に応じて分布中心地域が異なることが指摘されている（下條1991）。具体的には、一条突帯が福岡・筑紫地域、二条突帯が東北部九州・筑豊地域、三条突帯が宇佐・大分地域である。すべての種類が出土するのは日田地域である。幅地区では、一条突帯・二条突帯・三条突帯の多様な突帯本数の赤彩甕が出土している。各分布中心地域からそれぞれ流入してきたと考えるよりも、複合的に共存している日田地域から南小国を経て阿蘇カルデラ内に入るルートで赤彩甕または土器製作情報が流入した可能性が高い。

須玖式土器を細かく検討すると、筑後川下流域の土器と類似する要素を見出すことができる。具体的には、2～3本単位の暗文の施文（SD3-RP176）、高杯脚部中位のM字状突帯（SD3-RP171）などの点は、筑紫・

筑後・佐賀地域の特徴である。

一方で、赤彩袋状口縁壺の袋状口縁下位に三角突帯を一条つけたり、頸胴部境界や肩部に2~4条の三角突帯をつけたりする資料(SX11-RP309・310・312など)は、北部九州地域の袋状口縁壺では確認できない。肩部に多条突帯を付す方法については、黒髮式土器の長頸壺との関係が想定される。赤色顔料の塗彩方法についても、多くの赤彩土器は全面塗彩で丁寧なミガキ調整を施すものであるが、赤色顔料を縞模様状に施す資料(SD3-RP188、SX11-RP314など)がある。つまり、これらの資料は、基本的な形態的特徴は須玖式土器に基づくものの、突帯や塗彩などの装飾については阿蘇地域独自の要素を加えて製作された土器であるといえる。

また、九州島のはぼ中央部に位置する阿蘇が九州東西をつなぐ重要な場所に位置する点は從来から注目されてきた。特に、阿蘇山を中心にして、東側の大野川流域と西側の白川川流域は弥生時代を通じて相互の影響があり、前期は後者から前者へ、中期は両者、後期は前者から後者へと各時期ごとに影響関係が変化することが指摘されている(島津1980)。このような影響関係は、中九州を中心に分布する黒髮式土器や免田式土器の分布から指摘されることが多かった。須玖式系の赤彩瓈も、五ヶ瀬川上流域の高千穂での出土が確認されている(沢1972)。高千穂方面への黒髮式土器や須玖式土器の移動に関しては、阿蘇カルデラ内の最南東端に位置する幅・津留遺跡が山間部の交通の結節点として重要な位置を占めたと考えられる。

2.3 意図的破砕行為(図3)

幅地区の土器廃棄遺構から出土する土器は、穿孔や打ち欠きなどの意図的破砕行為の頻度が非常に高い点が特徴である。器種ごとに破砕パターンが明瞭である。

赤彩の袋状口縁壺・長頸壺は底面全体を打ち欠くものが多数を占める(SX11-RP310・323など)。打ち欠きの周縁部を細かく打ち欠いて調整する場合もある。底面の一部や胴部下位、頸部に穿孔を施すものもあるが少数である。底面に穿孔した短頸壺もみられる(SD3-RP185など)。

また、高杯の杯部に穿孔を施すものが一例確認でき



図3 土器の破砕行為

る(SD3-RP177)。北部九州地域では、長頸壺の頸部、高杯や筒形器台の脚部など、長い部位を持つ器種は該当箇所で折り割る破砕行為が多いが、幅地区では折損

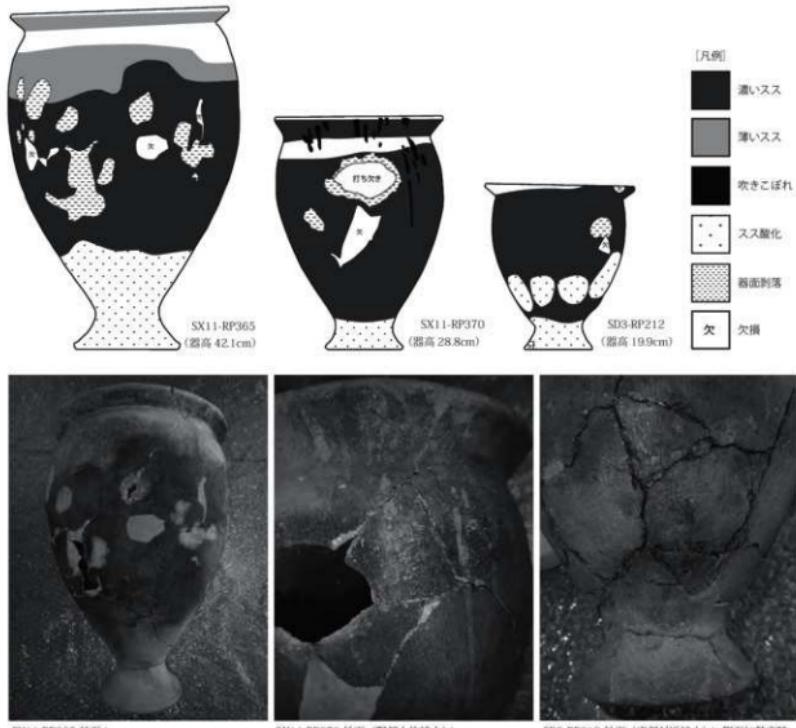


図4 土器の使用痕跡

行為は確認できない。

無塗彩の黒髮式土器の甕や壺は、胸部上位～中位を打ち欠くものが多い（SX11-RP372など）。いずれも大きく削られており、打ち欠き周縁部を細かく調整することはない。なお、黒髮式土器の台付甕の中には、脚台部を打ち欠いた資料がある。ただし、打ち欠いた断面にススが付着していることから、煮沸使用時にすでに打ち割ったものであると考えられ、葬送儀礼にともなう行為ではないと判断できる。

また、土器廐棄遺構から出土した土器は完形率が非常に高い。土器の一部を破砕することはあって

も、基本的には完形の状態で土器を廐棄していると考えられる。

2-4 煮沸痕跡からみた土器の使用方法（図4）

幅地区の土器廐棄遺構から出土する黒髮式土器の無塗彩甕の特徴として、器表面にススやコゲが付着し、煮沸使用頻度が非常に高いものが多く含まれる点があげられる。具体的には、SD3-RP212・239・240、SD5-RP409、SX11-RP337・354・359・361・365・370・371・372・375などである。使用頻度が高く、外側にススが顕著に付着しているため、使用回数の検

討は困難である。内面のコゲの付着も激しく、複数回の煮沸行為によるコゲの重なりが確認できる。吹きこぼれ痕が残る資料も多く、具体的にはSX11-RP337・354・370などがあげられる。吹きこぼれ痕が残る甕は器高20cm程度の小型甕が中心である。小型甕SD3-RP212には側面加熱痕跡も確認できる。このことから、炊飯に小型甕、その他の煮沸調理に中型甕を用いる器種の使い分けをしていた可能性が高く、他地域の土器の使い方と共通する（小林編2011ほか）。

特に、器面の剥落が激しい資料が多い点が注目される。ただし、剥落部位がスス付着範囲に限られること、剥落部位の上にススなどの付着は見られないことから、意図的な破損の痕跡ではない。使用頻度の高さにともなう被熱ストレスの蓄積による器面劣化（小林編2011）が要因として考えられる³⁾。住居跡から出土した甕の使用痕を観察したところ、墓域の土器廐棄遺構出土土器と同様に使用頻度が高いことから、土器を使いこむスタイルが幅・津留遺跡の特徴と言える。

甕のスス・コゲ付着状況を観察したところ、胴部上位にススが付着し、脚台部はスス酸化部となるのが、基本的パターンである。幅地区の土器の器種組成に器台や支脚は含まれず、支持物を使用した痕跡もないことから、甕の脚台部付近に薪を直接あてたと考えられる。住居跡内部で検出された炉の壁面が被熱していることから、灰穴炉ではなく、炉の内部で直接薪を燃焼させたと思われる。これは土器に残る痕跡と整合性が高い。

器表面のススと意図的破碎痕跡の切り合い関係を確認すると、スス→破碎行為の順番で施されている。土器廐棄時に破碎行為をしたことは指摘できるが、最後の煮沸行為が日常生活か、葬送時なのかは不明である。ただし、幅地区では、埋葬にともなう葬送儀礼の際に未使用の新しい土器を用いたのではなく、日常生活で何回も煮沸に使用した土器を廐棄したことが推測できる。墓域の土器廐棄遺構で出土する煮沸痕跡のある土器は、葬送行為の一環で実施される共飲共食で用いた土器を片付ける目的で廐棄したものと解釈されることが多いが、幅地区的事例は異なる。

なお、幅・津留遺跡では、脚台部を打ち欠いた甕や甕も煮沸に用いた痕跡が確認できる。

3 考察

3.1 幅地区の墓域における

土器廐棄遺構の検討

墓域に土器廐棄遺構が設置される事例としては、中九州において幅地区は特異な存在である。墳墓形態として表柏墓は導入していないが、表柏葬に付随する葬送時における土器廐棄行為は導入している。埋葬にかかる行為をセットで導入するわけではなく、在地の状況に合わせて柔軟に対応していることが分かる。

墓域における土器廐棄遺構の位置については、墓域設定後の早い段階で土坑や溝を設置していることから、当初は何らかの区画の意図があったことが想定できる。土器廐棄遺構内の土器群のまとまりと個別墳墓の対応関係については、墳墓の時期を判断できる根拠が少ない幅地区においては検討が困難であるが、特定個別墳墓と対応するというよりも、集団墓あるいは墓群に対応すると考えられる。また、墓域や墓群の外縁ではなく、墓群の内部に土器廐棄遺構が配置される点は、弥生時代中期後半期における筑紫・筑後地域の集塊状の墓地の状況と類似する。

筑紫・筑後地域と阿蘇地域の間に位置する筑後川上流域の日田地域では、大型専用表柏や副葬品の状況を踏まえると、筑紫・筑後地域に準じる形で、弥生時代中期以降に表柏葬が受容されている。また、日田地域では、弥生時代中期後半以降に小単位の河川流域や矮小な谷部に大小集落が展開する状況が指摘されている（渡邉編2014）。日田盆地南方の山間部に所在する五馬大坪遺跡（日田市）では、墓域の端に小規模な土器廐棄遺構を設置する事例が確認されている。集落域における上器廐棄行為が確認できる地蔵原遺跡（南小国町）の位置を考慮すると、日田盆地から南方向に、筑後川最上流域から杖立川を経て阿蘇カルデラ内へと小河川流域を介して地域がつながるルートを想定できる。

阿蘇カルデラ内の弥生時代諸遺跡の基本的な生活様式は、白川流域を通じて西方から阿蘇カルデラ内につながるルートを主軸として、両地域間の共通性が生じている。しかしながら、白川下流域の熊本平野部や菊

池・山鹿地域で大型専用甕棺や須玖式土器は出土するが、墓域で土器廃棄行為を実施した痕跡は認められない。したがって、幅地区で確認された墓域における土器廃棄行為は、白川流域を通じて西方から導入された可能性は考えられない。

幅地区的墓域における土器廃棄遺構の存在は、日常生活と祭祀儀礼のそれぞれの活動レベルで、異なる地域から多様な影響を受けてきた阿蘇地域の独自性が表出したものといえる。

3-2 土器廃棄遺構出土土器の検討

墓域における土器廃棄遺構から出土した土器は、弥生時代中期後半～後期前半が主体である。黒髮式土器と須玖式土器で構成され、器種組成は甕・壺・鉢・高杯を主体とする。塗彩の種類に応じて、無塗彩土器は黒髮式土器、赤彩土器は須玖式土器が多いが、黒髮式土器の赤彩長頸壺が多数出土することから、土器様式に応じて明確に区別できるわけではない。また、黒髮式土器の短頸壺は、無塗彩ではあるが、器面全体を丁寧にミガキ調整し、細かな暗文を施文するなど、非常に丁寧なつくりの土器である。土器様式に応じて精粗が明確に区別できるわけでもない。

須玖式土器の赤彩土器の器種組成が甕・高杯・袋状口縁壺を中心とする点は、筑後川流域の様相と類似する。しかしながら、筒形器台を含まない点が異なる。中九州では、阿蘇外輪山北側の地藏原遺跡（南小国町）や菊池川流域の前田遺跡（玉名市）では筒形器台が出土するが、阿蘇カルデラ内での出土は確認できない。地理勾配に応じて器種が欠落する事象の一つである。

幅地区的墓域における土器廃棄遺構出土土器の最も大きな特徴が、土器の意図的破砕行為の頻度の高さと、煮沸行為に複数回使用された壺形土器の使用頻度の高さである。土器の意図的破砕行為は、対象となる器種や部位、破碎方法がパターン化しているため、葬送とともに祭り儀礼の行為の一環として破碎が行われたと考えられる。祭祀儀礼専用土器として器種分化する傾向が認められないため、日常生活で使用する土器を祭祀儀礼の行為に用いた「仮器」へと変換するために必要な行為といえる。そのような破碎行為が存在しているため、日常生活で複数回煮沸に用いられた甕であっ

ても、祭祀儀礼的脈絡で使用できるのだと考える。

おわりに

集団墓の墓群周辺に土器廃棄遺構を設置する事例としては、幅地区は最南端に位置している。弥生時代中期の甕棺墓制にともなう墓域における土器廃棄行為としては、最も遅い時期まで実施している事例のひとつであり、最終焉の状況を示す点で非常に重要である。

しかしながら、幅地区的状況をみると、特に筑後川を介した筑紫地域や日田地域の様相との類似性が確認できるが、他地域の要素をそのまま単純に取り入れているわけではない。阿蘇在地の状況に合わせて変化させた、幅地区独自の要素が多数みられる。墓域における土器廃棄行為を構成する要素は転換しつつも、墓域で土器廃棄を長期間にわたって継続的に実施する葬送行為が実践される点は、北部九州全体の動向と共通する。

九州全域に及ぶ地域間交流は、弥生時代中期後半期以降に活発化する。特に、九州の南北に中九州系土器が拡大する現象が認められる。幅地区で出土した土器から判断すると、弥生時代中・後期に中九州系土器が拡大する現象の前段階で、すでに阿蘇を中心とする山間部を介した広域の地域間交流の存在を確認できる。従来は青銅器・鉄器などの金属器やガラスなどの稀少品で指摘されることが多かったが、より日常的な交流を反映する土器のレベルや、モノの移動だけではなく葬送儀礼に関わる精神活動のレベルでも同様の事象を指摘できる。特に祭祀儀礼に使用される頻度の高い赤彩土器からは、日常的に使用された無塗彩土器以上に広域の地域をつなぐ状況を読み取ることができる。

近年は、筑後・八女地域の弥生時代中期後半期における須玖式土器と黒髮式土器の共伴関係にかかる資料や、筑後川中流域の水分遺跡（久留米市田主丸町）における弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけてのジョッキ形土器や多量のガラス小玉・金属器類の出土や赤色顔料生産の痕跡など、中九州と北部九州の密接な関係を示す資料が増加しつつある。また、大野川を媒介とする中九州と東九州の関係についてもさらなる検討が必要である。幅・津留遺跡では弥生時代中期後半～終末期にかけての豊富な資料が出土したことか

ら、今後はより詳細な土器編年を構築することで、河川や峠を介した山間部の交流の具体相が明らかになることを期待したい。

註1 新南部遺跡群（熊本市東区）で出土した甕棺を薄片観察による岩石学的手法で分析した結果、遺跡周辺の白川流域の堆積物は使われておらず、花崗岩を主体とする玉名市北部周辺あるいは福岡県下の堆積物が用いられたことが指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 2016）。なお、目張り粘土については、遺跡近傍の粘土を使用したとの結果が得られた。つまり、正確な搬出元は不明であるが、遠方から甕棺が持ち込まれ、在地の粘土を用いて目張りしたと考えられる。熊本平野部の甕棺に関しては、胎土分析データのさらなる蓄積と詳細な検討が必要である。

註2 地蔵原遺跡では、須玖式土器の赤彩土器および黒髪式土器の無塗彩土器の胎土分析が実施された。岩石学的分析の結果、いずれも在地（南小国付近）で製作された可能性が指摘されている（藤根・小村 2004）。前田遺跡（玉名市）の分析でも同様の結果が出ている（パリノ・サーヴェイ株式会社 2005）。須玖式系の赤彩土器に関しては、一部は北部九州地域から搬入された可能性もあるが、須玖式土器の形態を模して在地で製作した土器が多数を占めると考えられる。

註3 甕棺体の出土位置で器表面が剥落した破片も出土することから、器表面の剥落が埋没後に生じたことが分かる。

参考文献

参考文献（五十音順）

- 石田智子（2009）「北部九州弥生時代中期の土器祭祀：九州大学筑紫地区8B区SK101土坑の位置付け」、『奴国の南』、64-83、九州大学総合研究博物館。
- 石田智子（2010）「須玖式土器における赤彩土器の意義：色彩の時間空間動態の観点から」、『九州考古学』85、21-47、九州考古学会。
- 石田智子（2013）「北部九州地域における黒彩土器の展開」、『九州考古学』88、1-20、九州考古学会。
- 井大樹・坪根伸也（2018）「東九州の土器祭祀」、『平成30年度瀬戸内海考古学研究会第8回公開大会予稿集』、1-18、瀬戸内海考古学研究会。
- 岡本真也（編）（2005）『前田遺跡』、熊本県文化財調査報告 225、熊本県教育委員会。
- 隈昭志（1983）「熊本県山鹿市大道小学校出土の弥生土器」、『考古学雑誌』69-1、74-80、日本考古学会。
- 熊代昌之（編）（2016）『水分遺跡』久留米市文化財調査報告書 364、久留米市教育委員会。
- 小林正史（編）（2011）『土器使用痕研究：スス・コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元』。
- 土野雄貴（2016）「熊本県における弥生時代埋葬遺構集成：白川流域編I」第1.1稿、廣田静学・宮本大・尾崎潔久・福田匡朗（編）『新南部遺跡群（10次・11次）・吉原遺跡』熊本県文化財調査報告 320、附論1-37、熊本県教育委員会。
- 沢尻臣（1972）「宮崎県西臼杵郡高千穂町押方神社周辺の遺跡」、『九州考古学』45、6-13。
- 島津義昭（1980）「山の考古学」、「國分直一博士古稀記念論集：日本民族文化とその周辺：考古篇」、53-116、新日本教育図書株式会社。
- 島津義昭（編）（1992）『二子塚』熊本県文化財調査報告 117、熊本県教育委員会。
- 下條信行（1991）「北部九州弥生中期の『国』家間構造と立岩遺跡」、『古文化論叢』、77-106、児島隆人先生喜寿記念事業会。
- 高谷和生（編）（1987）『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告 88、熊本県教育委員会。
- 玉永光洋（1982）「豊後における肥後型土器について」、『九州考古学』57、11-19、九州考古学会。
- 常松幹雄（2016）「北部九州からみた新南部遺跡群（11次）の墓制」、廣田静学・宮本大・尾崎潔久・福田匡朗（編）『新南部遺跡群（10次・11次）・吉原遺跡』熊本県文化財調査報告 320、399-410、熊本県教育委員会。
- 西健一郎（1982）「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」、「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」上巻、445-470、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会。
- 西健一郎（1983）「黒髪式土器の基礎的研究」、『古文

- 化談叢』12, 77-104, 九州古文化研究会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (2005)「前田遺跡出土遺物の自然科学分析」, 岡本真也 (編)『前田遺跡』熊本県文化財調査報告 225, 377-392, 熊本県教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (2016)「新南部遺跡群 11 次及び吉原遺跡の胎土分析」, 廣田静学・宮本大・尾崎潔久 (編)『新南部遺跡群 (10 次・11 次)・吉原遺跡』熊本県文化財調査報告 320, 371-386, 熊本県教育委員会。
- 古屋紀之 (2007)『古墳の成立と葬送祭祀』, 雄山閣。
- 弘中正芳 (2010)「小野原遺跡群出土の土器」, 宮崎敬士 (編)『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告 257, 167-179, 熊本県教育委員会。
- 藤根久・小村美代子 (2004)「地蔵原遺跡出土土器の胎土分析 (薄片法)」, 山下義満 (編)『地蔵原遺跡』熊本県文化財調査報告 220, 65-71, 熊本県教育委員会。
- 宮崎敬士 (編) (2010)『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告 257, 熊本県教育委員会。
- 森本幹彦 (2018)「北部九州の土器祭祀: 弥生時代後半期の玄界灘沿岸地域を中心に」, 『平成 30 年度瀬戸内海考古学研究会第 8 回公開大会予稿集』, 95-114, 瀬戸内海考古学研究会。
- 山下義満 (編) (2004)『地蔵原遺跡』熊本県文化財調査報告 220, 熊本県教育委員会。
- 笠健 (編) (2002)『南鶴遺跡』白水村文化財調査報告 1, 白水村教育委員会。
- 渡邊隆行 (編) (2014)『吹上 VI』日田市埋蔵文化財調査報告書 112, 日田市教育委員会。

幅・津留遺跡出土砥石の検討

森 貴教

もり・たかのり、新潟大学研究推進機構超域学術院

はじめに

熊本県阿蘇郡南阿蘇村および阿蘇郡高森町に所在する幅・津留遺跡からは計100点を超える砥石が出土している。一遺跡からの出土数量として多量であり、弥生時代における砥石の消費形態を定量的に分析するうえで非常に貴重な資料といえる。

これまで筆者は、北部九州地域を対象として、弥生時代の後半期における農工具の材質変化（鉄器化）について、加工工具である砥石の消費形態の時期的変遷に着目して検討を進めてきた（森2016, 2018）。分析の結果、弥生時代中期後半における鉄器研磨の頻度の高まり、後期前半以降の器物の生産・消費システムの変化が明らかになった。しかしながら、北部九州の地域的特質について相対的に評価し、時期的変化の歴史的意義を考察するためには、周辺地域との比較検討が課題として残されている。

熊本県を中心とする中九州地域は、弥生時代における鉄器の導入と展開を考えるうえで北部九州と並んで注目される地域の一つである。幅・津留遺跡の所在する阿蘇地域は、弥生時代後期中葉以降、鍛冶遺構が数多く検出されるとともに、豊富な鉄製品が出土することでも知られる。さらに、中広形銅戈、中広形銅矛、舶載鏡片、小形偽製鏡が地域内に集中し、北部九州との交易関係が示唆されている。

そこで本稿では、幅・津留遺跡を対象として砥石の消費形態を検討し、中九州地域（阿蘇・南郷谷）における鉄器化の在り方について、北部九州の事例と比較しつつ考察してみたい。

1 資料と方法

1-1 対象資料

対象とするのは幅・津留遺跡出土の砥石146点である。ただし発掘調査者により「手持ち砥石」として取り上げられた、軽石や輝石安山岩の小型円盤、砂岩や泥岩の碁石状の小型石材はこれに含めない（幅地区23点、津留地区6点）。また、接合した同一個体資料（津留地区出土遺物番号RQ483、698）については、接合状態で1点として集計した。

幅・津留遺跡は遺構のまとまりと集落の構造から、西側に位置する幅地区（1区～8区）と東側に位置する津留地区（9区～20区）に分けられる。そこで本稿では、幅地区と津留地区とで砥石の消費形態に差異があるかを比較する。幅地区が弥生時代中期後葉～中期末、津留地区が弥生時代後期中葉～後期後葉を主体とする集落のようであり、大きくみれば中期後半から後期にかけての時期的変遷を示している可能性がある。幅地区出土の砥石は28点、津留地区出土の砥石は118点である。

1-2 分析方法

砥石のもつ属性には形態・重量・使用痕などがあるが、本稿では砥石目（砥石粒度）を主な分析対象として検討する。砥石目は村田裕一の方法（村田2002, p.199）にならい、サンドペーパー（研磨紙）との比較によって分類する。分類の指標として用いたサンドペーパーは、JIS規格#40（番目、以下省略）、#60、#80、#100、#120、#150、#180、#240、#320、#400、#600、#800、#1000、#1500、#2000の15種類（三共理化学株式会社製）で、#40が最も粗く#2000が最も細かい。また、砥石目の同定を行うために、手持ちルーペ（Vixen製M13）および携帯型顕微鏡（Kenko Tokina製Do-Nature STV-40M）により20倍～40倍の範囲で相互に粒径を比較した。また、ワイヤレスデジタル顕微鏡（スリー・アールシステム株式会社製Anyty3R-WM401PC）による写真撮影を行った。便宜上、#40

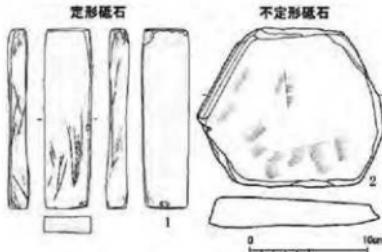


図1 砥石の形態分類 ($S=1/4$)

* 1・2ともに長崎県志賀市カラカミ遺跡出土

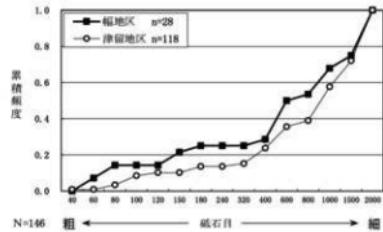


図2 砥石目の累積頻度

から#120までを粗砥、#150から#400までを中砥、#600以上を仕上砥として区分した。砥石目によって研磨対象物に形成される凹凸の深さに差異があり、おおむね粗砥・中砥・仕上砥の区分に対応するといわれる（村松1973, pp.194-195）。

またその他の属性として、形態（定形・不定形）・使用石材・使用痕（溝状痕、光沢、錯状付着物）・重量について観察・計測した。定形砥石は「平坦面が互いに棱をなして接しているもの、または加工痕がみとめられるもの」（土屋2010, p.410）と定義し、それ以外のものを不定形砥石とする（図1）。ただし平坦面が互いに棱をなして接する砥石のうち、すべての面上に自然面（顛面）が認められるものは不定形砥石に含まれた。

砥石の分析と解釈にあたっては、以下の諸点を前提として論を進める。① 砥石は石器にも鉄器にも使用される加工工具であること、② 鉄器の相対的な量が増加するほど、目的細かい砥石が増加すると推定できること、③ 溝状痕の存在は、その砥石が金属器を研いだことを示すものであっても、金属器のみを研いだことを示すものではないこと、④ 砥石自体が流通したのであれば、形態、砥石目といった属性にある程度の規格性が生じること、である（土屋2010, p.404）。

2 分析

2-1 砥石目と形態

図2は砥石目の累積頻度を地区間で比較したものである。幅地区出土砥石は砥石目#600と#2000に二極化しているため、比較的なだらかな累積頻度グラフとなっている。また、全体的に数量は少ないもの

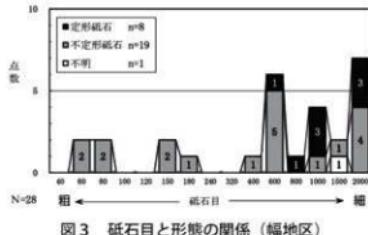


図3 砥石目と形態の関係（幅地区）

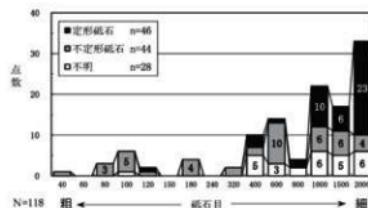


図4 砥石目と形態の関係（津留地区）

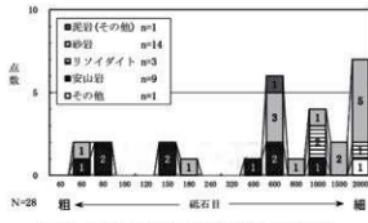


図5 砥石目と使用石材の関係（幅地区）

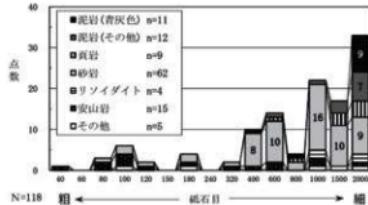


図6 砥石目と使用石材の関係（津留地区）

の粗砥、中砥が一定量構成される。一方、津留地区出土砥石は数量が多く、砥石目 # 2000 に一極集中しており、砥石目の細かいものが多い傾向が認められる。累積頻度グラフでは砥石目 # 800 から # 2000 にかけて勾配が急であり、仕上砥が非常に多いことを示している。

形態との関係をみると、幅地区は定形砥石が 28 点中 8 点 (28.6%) であるが (図 3)、津留地区は 118 点中 46 点 (38.9%) を占め砥石目 # 1000 ~ 2000 に集中している (図 4)。定形砥石 46 点中 23 点 (50.0%) が砥石目 # 2000 のものである。津留地区出土の形態不明の砥石も、後述する使用石材に着目すれば、その多くは定形砥石の破片であるとみられる。

以上をまとめると、不定形砥石が主体であり砥石目のバリエーションが認められる幅地区と、定形砥石が非常に多く相対的に砥石目の細かい砥石で構成される津留地区とで差異があるといえる。

2-2 使用石材

幅地区の使用石材は、砂岩が 28 点中 14 点 (50.0%)、安山岩 (輝石安山岩) が 9 点 (32.1%) を占める (表 1)。砂岩およびリソイダイト (無斑晶質流紋岩) に定形砥石がみられるが、他の石材のものは不定形砥石である。輝石安山岩のものは板状の不定形砥石である。

津留地区的使用石材は、幅地区ではみられない青灰色泥岩が 11 点 (9.1%)、頁岩が 9 点 (7.4%) 認められる (表 2)。青灰色泥岩を含め泥岩製の砥石は砥石目が細かく、青灰色泥岩製のものは 11 点中 9 点 (81.8%) が砥石目 # 2000 である (図 6)。

2-3 使用痕

砥石表面 (砥面) の使用痕 (溝状痕、光沢、錆状付着物) の有無を確認する。

まず溝状痕について検討する。溝状痕とは砥面に認められる、幅 2mm 以下で横断面形が V 字状あるいはレ字状を呈する痕跡である。実験による生成過程の検証はされていないが、鉄器を仕上げる際、刃先が接触することにより生じた痕跡と考えられている (村田 2002)。

表 1 使用石材と形態の関係 (幅地区)

石材	形態			計
	定形砥石	不定形砥石	不明	
泥岩(青灰色)				
泥岩(その他)		1		1
頁岩				
砂岩	5	8	1	14
リソイダイト	3			3
安山岩		9		9
その他		1		1
計	8	19	1	28

表 2 使用石材と形態の関係 (津留地区)

石材	形態			計
	定形砥石	不定形砥石	不明	
泥岩(青灰色)	9		2	11
泥岩(その他)	7	1	4	12
頁岩	4	2	3	9
砂岩	20	26	19	65
リソイダイト	3	1		4
安山岩	2	12	1	15
その他	2	3		5
計	47	45	29	121

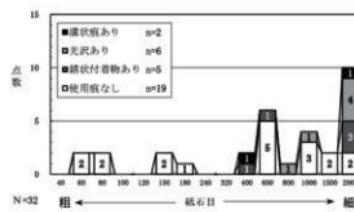


図 7 砥石目と使用痕の関係 (幅地区)

* 使用痕ごとに重複集計

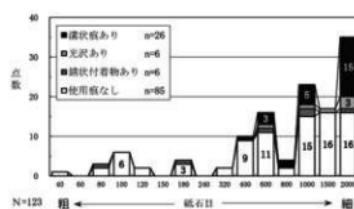


図 8 砥石目と使用痕の関係 (津留地区)

* 使用痕ごとに重複集計

幅地区出土砥石では砥石目# 400と# 2000に1点ずつ、計2点に認められる(図7)。津留地区出土砥石では、溝状痕のみられるものが多く、26点に認められる(図8)。このうち15点(57.7%)が砥石目# 2000である。

砥面の光沢は村田(2002)のいう使用痕分類Hである。研磨対象物との接触によって反対に砥石の構成鉱物が摩耗し、光沢を帯びたものと考えられ、仕上砥に特有の痕跡といえる。幅地区、津留地区それぞれで6点ずつ確認される。砥石目が細かいものに集中する。この痕跡によって類推される研磨対象物は金属器に限定されず、石器も含むと考える。

最後に鋸状付着物をみる。これは砥石の表面にみられる赤錆状の物質である。埋没した土壌中の鉄分ではなく、鐵器を研磨する際に付着したものといえる。鐵器表面に生じたバリや鉄分が砥石を構成する鉱物に絡め取られ、水や酸素と反応することで鋸状に錆化したものと考える。幅地区で5点、津留地区で6点にみられる。

なお、幅・津留遺跡ではタール状付着物〔註1〕がみられる砥石は出土していない。

2-4 重量

最後に砥石の重量について検討する(図9・10)。砥石は基本的に破損しており、完形品が少ないため厳密に製作時の砥石重量を推定するのは困難だが、破片によってもおよその傾向を把握することが可能であると考える。微小な破片はここでは除外した(津留地区8点)。

幅地区、津留地区ともに手持砥と推定される100g未満のものが多く、置砥と考えられる1000g以上の砥石は非常に少ない。1000g以上のものは幅地区、津留地区でそれぞれ3点ずつ出土している。輝石安山岩製の不定形の粗紙がこうした大型置砥の主体である。幅地区は300~500gのものが一定量みられる。

津留地区で多く認められる定形砥石は46点中39点(84.8%)が100g未満のものである。また、100g未満のもののうち61点中56点(91.8%)が砥石目# 600以上の仕上砥である。

表3 使用痕と形態の関係(幅地区)

使用痕	形態			計
	定形砥石	不定形砥石	不明	
溝状痕あり		2		2
光沢あり	3	3		6
鋸状付着物	1	4		5
使用痕なし	5	13	1	19
計	9	22	1	32

表4 使用痕と形態の関係(津留地区)

使用痕	形態			計
	定形砥石	不定形砥石	不明	
溝状痕あり	14	7	5	26
光沢あり	3	2	1	6
鋸状付着物	2	4		6
使用痕なし	31	34	23	88
計	50	47	29	126

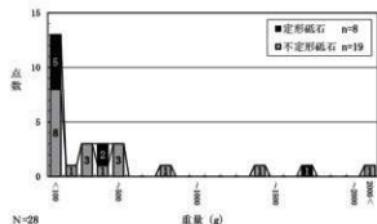


図9 砥石重量の度数分布(幅地区)

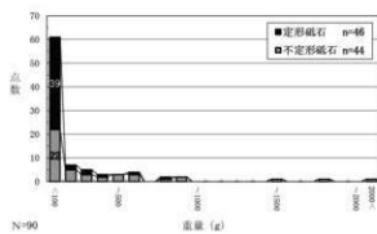


図10 砥石重量の度数分布(津留地区)

3 考察

3-1 幅・津留遺跡における砥石の消費形態と鉄器化

幅地区は砥石目組成にバリエーションがある一方、津留地区は極細粒の仕上砥が多いことが分かった。また、使用石材にも差異があり、青灰色泥岩製の砥石は津留地区にしか認められない。砥石目と石材、形態はそれぞれ相互に密接な関係にあり、砥石目の細かなものは小型の定形砥石が多くを占め、石材も泥岩や頁岩で占められる傾向が認められる。

幅地区と津留地区的地区間に時間差を認めるならば、弥生時代中期後葉から後期にかけての砥石の消費形態の変化を示しているといえる。具体的には、①小型の定形砥石の増加（定型化）、②砥石目の細粒化（構成鉱物が極細粒の泥岩・頁岩の採用）、③鉄器の研磨と関連すると考えられる使用痕（溝状痕）の増加、という時期的変化である。

砥石形態は砥面形態と結びつき、砥面形態は研磨方法と密接な関連があるため、定形砥石には鉄器を使用したものが多く含まれると考えられる（村田 2002, p.198 参照）。さらに、砥石目の細粒化や溝状痕の増加は鉄器の研磨の頻度が相対的に高まったことを示しているといえる。

3-2 青灰色泥岩製定形砥石の中九州地域への流入

幅・津留遺跡（津留地区）からは計 11 点の青灰色泥岩製砥石が出土している。砥石全体に占める割合としては 1 割に満たないものの、北部九州との関連を考えるうえで非常に重要な石材である。

この青灰色泥岩製砥石は弥生時代中期後半以降、長崎県壱岐市カラカミ遺跡、佐賀県唐津市中原遺跡、福岡県糸島市御床松原遺跡、福岡市野方久保遺跡、飯倉 D 遺跡、春日市ナライ遺跡、鞍河 A 遺跡などで出土している。形態は基本的に定形砥石である。筆者は砥石の形態的特徴、表面に残る穿孔性貝類による痕跡や江戸時代の地誌類などの記述を参考し、砥石に用いられた青灰色泥岩が対馬島などの海岸部で採取された可

能性が高いことを指摘した（森 2016）。なお、弥生時代中期前半以前の石器石材としては用いられておらず、中期後半以降の砥石にのみ用いられている〔註 2〕。

石材採取地は現状では不明な点が多いものの、幅・津留遺跡出土の青灰色泥岩製砥石は、少なくとも北部九州方面から搬入されたといえる。北部九州の弥生時代の遺跡において未成品や砥石の製作痕跡が確認されていないことから、製品（完成品）として遺跡に搬入された可能性が高い。研究史上、阿蘇地域に分布する青銅器について北部九州との関連性が示唆されているが（下條 1991, 村上 2002）、青灰色泥岩製砥石もこうした交易物資に含まれていたと考える。

北部九州と地域間関係を維持している背景として、阿蘇地域におけるベンガラの大量生産があるものと思われる。また、小形仿製鏡と赤色顔料に関連する遺物の分布傾向から、北部九州と阿蘇地域をつなぐ交流の結節点として菊池川流域の役割が注目されている（田尻 2011）。青灰色泥岩製砥石の阿蘇地域への流入や北部九州との交流ネットワークを考察するうえで、菊池川流域や日田地域における弥生時代の集落遺跡出土砥石の検討が今後重要なものと考える〔註 3〕。

なお、北部九州において青灰色泥岩製砥石は弥生時代中期後半に出現するが、幅・津留遺跡では津留地区でのみ確認される点にも注意が必要である。このことは、北部九州から中九州への青灰色泥岩製砥石の流入に時間差が存在していたことを示唆する。

おわりに

本稿では幅・津留遺跡出土の砥石を対象として、砥石目・形態（定形・不定形）・使用石材・使用痕（溝状痕、光沢、錆状付着物）・重量について分析し、砥石の消費形態に幅地区と津留地区との差異があることを指摘した。出土様相の空間的な差異を時期差と捉えられるのであれば、弥生時代中期後半から後期にかけての鉄器化の一端を示しているといえる。また、津留地区出土砥石に青灰色泥岩製のものが認められ、北部九州から搬入されたものと考えられる。

註 1 タール状付着物とは、砥面に面的に付着した黒色で粘着質の物質であり、砥石は被熱を受けてい

るものが多い。タール状付着物がみられる砥石は長崎県壱岐市カラカミ遺跡、唐津市中原遺跡、福岡市野方久保遺跡など、鍛冶関係遺構が検出されている遺跡で主に確認されることから、鍛冶作業との関係が示唆される。

註2 例外的に福岡市比恵遺跡144次調査の方形竪穴建物SC29出土品に、青灰色泥岩製砥石を小型の石錘に加工・転用した例がみられる（古墳時代前期初頭）。

註3 こうした観点をふまえ、筆者は現在、熊本県玉名市大原遺跡出土砥石について分析中であり、別稿を予定している。

九州大学人文学叢書13、九州大学出版会。
渡辺亮志（2007）「砥石から見た弥生時代鉄器化への諸段階：比恵・那珂遺跡群出土資料より」、『九州考古学』82, 77-88. 九州考古学会。

謝辞 本稿の作成にあたり宮崎敬士氏をはじめ、熊本県文化財資料室幅・津留遺跡整理棟の皆様の御協力を仰ぎました。末筆ではありますが、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 下條信行（1991）「青銅器文化と北部九州」、『新版古代の日本：九州・沖縄』3, 77-100. 角川書店。
- 田尻義了（2011）「菊池川流域における弥生時代小形仿製鏡と赤色顔料について」、春田直紀（編）『菊池川流域の景観史研究』、26-44. 総合地球環境学研究所NEOMAP 北部九州WG。
- 土屋みづほ（2010）「砥石からみた弥生時代の社会変化」、『遠古登攀：遠山昭登君追悼考古学論集』、401-423. 遠古登攀刊行会。
- 村上恭通（2002）「鉄器の普及と生産・流通」、『季刊考古学』80, 59-3. 雄山閣。
- 村田裕一（2002）「工具：砥石」、北條芳隆・櫻井田佳男（編）『考古資料大觀』9, 197-200. 小学館。
- 村松貞次郎（1973）『大工道具の歴史』、岩波書店。
- 森 貴教（2016）「低石の消費形態からみた鉄器化とその意義：弥生時代北部九州を対象として」、『考古学は科学か：田中良之先生追悼論文集』上、467-485. 中國書店。
- 森 貴教（2018）『石器の生産・消費からみた弥生社会』

幅・津留遺跡出土のガラス製品

谷澤 亜里

はじめに

幅・津留遺跡からは、第1表に示すガラス製品が出土している。いずれも玉類で、15点のうち1点がガラス管玉、残りはガラス小玉である。本稿では、これらのガラス製品の内容を報告し、その考古学的な位置づけを考えるために若干の検討を行う。

以下では、まず資料の観察所見と、蛍光X線分析法による材質調査結果を報告する。そのうえで、資料の分類的位置づけを述べる。最後に、近隣の遺跡でのガラス製品の出土傾向から、本遺跡におけるガラス製玉類出土の意義を考える。

1 資料の概要

ガラス管玉は全体的に風化が進行しているが、風化が弱い部分のガラスは青緑色を呈す。管玉全体の形状は、両端面が欠損しているものの、胴部の膨らむエンタシス状を呈す。

ガラス小玉は、合計14点が出土している。全ての資料に孔と平行する気泡の配列が確認でき、引き伸ばし技法で製作されたことがわかる。色調は、淡青色透明のもの8点、青緑色透明のもの6点となる。青緑色の番号6のみ直径7.8mmと大型だが、残りの個体

たにざわ・あり、九州大学総合研究博物館は直径5.0mm以下に収まる小型品である。また、ほとんどの個体では両端面が表面張力で丸みを帯びているが、青緑色の番号6と淡青色の番号9は、両端面が平坦に研磨されている。

2 ガラスの材質分析

素材に用いられたガラスの種類と着色剤を明らかにするため、以下の条件で蛍光X線分析を行った。

分析装置：堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置・MESA-500W／X線管ターゲット：Rh／検出器：半導体検出器／管電圧：15kV・電流：任意／測定範囲：真空／測定範囲：5mm ϕ ／測定時間120秒

今回の分析では、分析条件上の制約から定量値の算出は行っていない。定性分析で得られたスペクトルとともに、先行研究で設定されているガラスの種類のいずれに当たるかを判断した。

分析結果からは、4種類のガラスが確認された。資料の外観とも対応しており、以下で順に内容を述べたい。

(1) 鉛バリウムガラス

ガラス管玉1点が該当する。鉛の高いピークとバリウムの安定したピークから、鉛バリウムガラスと判

表1 幅・津留遺跡出土ガラス製品一覧

番号	遺構	層位	製作技法	基礎ガラス	着色剤	直径	全長
1	SI15	理2層	包み巻き	鉛バリウム	Cu	5.90	13.70 (残存)
2	SI15	理3層	引き伸ばし	カリ	Cu	4.20 (残存)	3.00
3	SI15	理3層	引き伸ばし	カリ	Cu	4.00	2.80
4	SI16	埋2層	引き伸ばし	カリ	Cu	3.35	2.00
5	SI20	炉2層	引き伸ばし	カリ	Co(Mn+)	1.90 (残存)	1.10 (残存)
6	524G	1c層	引き伸ばし	植物灰	Co	7.80	4.60
7	SI32	埋1層	引き伸ばし	カリ	Co(Mn+)	4.40	3.60
8	SI32	炉埋土	引き伸ばし	カリ	Cu	4.20	3.70
9	SI40	理2層	引き伸ばし	カリ	Cu	4.30	2.50
10	SI48	理9層	引き伸ばし	カリ	Cu	4.20 (残存)	3.00 (残存)
11	SI48	理9層	引き伸ばし	カリ	Co(Mn+)	3.70	2.80
12	SI48	埋9層	引き伸ばし	カリ	Co(Mn+)	3.70	2.60
13	SI48	9層	引き伸ばし	カリ	Co(Mn+)	3.20	2.70
14	SI51	理2層	引き伸ばし	カリ	Cu	3.80	2.70
15	SI54	埋2層	引き伸ばし	カリ	Cu	3.20 (残存)	3.20

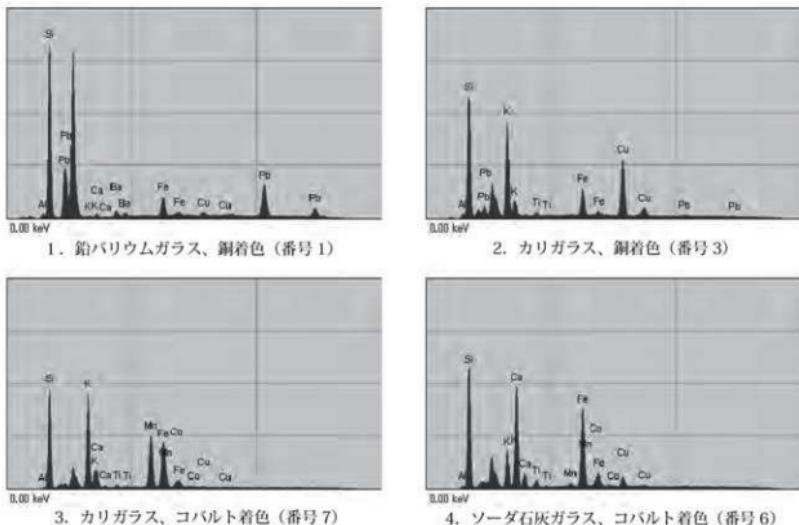


図1 ガラス製品の蛍光X線分析結果

断した（第1図-1）。弱いピークとして確認される銅が着色因子とみられる。

(2) カリガラス（銅着色）

淡青色のガラス小玉すべてが該当する。カリウムの高いピークから基礎ガラスがカリガラスであることがわかる。着色剤に関連する元素として、銅、鉄、鉛が検出される（第1図-2）。以上は、弥生時代後期における一般的な銅着色カリガラスの特徴と共に通する。最近のガラスの分類では、Oga and Tamura (2013) のGroup PII [註1]に相当すると考えられる。

(3) カリガラス（コバルト着色）

青紺色のガラス小玉のうち、小型品すべてが該当する。カリウムの高いピークから基礎ガラスがカリガラスであることがわかり、着色剤に関連する元素として、コバルト、マンガン、鉄が検出される（第1図-3）。以上は、弥生時代後期における一般的なコバルト着色のカリガラスの特徴と共に通する。Oga and Tamura (2013) のガラス材質の分類では、Group PIに相当すると考えられる。

(4) ソーダ石灰ガラス（コバルト着色）

青紺色のガラス小玉のうち、大型品1点（番号6）が該当する。カリウムよりもカルシウムのピークが高いことからソーダ石灰ガラスと判断される。着色にはコバルトが関与しているとみられ、併せて鉄のピークも確認できるが、マンガンのピークはごく弱い。また、僅かに銅のピークも確認できる（第1図-4）。以上のように、本資料は青紺色を呈するが、カリガラスのものとは基礎ガラスだけでなく着色剤の種類も異なることがわかる。

先行研究をふまえると、弥生～古墳時代にみられるソーダ石灰ガラスは、さらにいくつかのグループに細分することができます。Oga and Tamura (2013) では、Group SI～SVまでの5種類が設定されているが、このうち、マンガンを伴わないコバルトで着色されるのは、Group SIII（植物灰ガラス）のみである。そのため、本資料もGroup SIIIに相当する可能性が高い。この点は、後述するようにガラス小玉としての肉眼的特徴からも支持される。

3 資料の分類的位置づけ

以上の検討をふまえ、ここで幅・津留遺跡出土ガラス製品の分類的内容をまとめたい。

まずガラス管玉は、鉛バリウムガラスを素材とし、全体的な形状がエンタシス型を呈するという特徴から、既存のガラス管玉の分類では、小寺（2006）のEW東山タイプ、大賀（2010）のTYⅢ型に該当する。次にガラス小玉だが、番号6を除いた小型の13点は、製作技法・法量・材質から、Indo-Pacific Beads（以下IPB）（Francis 1990）の範疇で理解できる。筆者の分類では、銅着色カリガラスのものがIPB-①、コバルト着色カリガラスのものがIPB-②と呼ぶタイプにあたる（谷澤2015）。

以上のガラス管玉・ガラス小玉は、埋葬遺構では弥生時代後期前半～中頃に主体となる種類である（大賀2003、2010、谷澤2011、2015）。

なお、幅・津留遺跡出土のIPB-①では、番号9のみ端面が平坦に研磨されている。IPB-①は弥生時代後期後半～終末期を前後する時期から、端面が平坦に研磨されるようになるため〔註2〕（大賀2003）、番号9は相対的に新しく位置付けられる可能性もある。ただし1点のみの出土であるため、偶発的に研磨された可能性も捨てきれず、判断は保留しておきたい。

ガラス小玉のうち、青緑色大型品の番号6のみは、マンガンを伴わないコバルト着色のソーダ石灰ガラスで、植物灰ガラスと考えられた。コバルト着色の植物灰ガラスを素材とする引き伸ばしガラス小玉は、日本列島では古墳時代中期後半以降に多く確認され、直径6mmを超える大型品であること、ガラス管の製作に吹き竿を用いていることなどから、Indo-Pacific Beadsとは別系統のガラス小玉と考えられている〔註3〕（田村2012）。番号6の肉眼的特徴はこのようなガラス小玉と合致しており、包含層から1点のみの出土であることからも、弥生時代の集落に伴うというより、遺跡の埋没過程で古墳時代中期後半以降の資料が混入したと考えたい。

4 弥生時代後期の阿蘇カルデラ地域とガラス製品

以上、幅津留遺跡出土ガラス製品の内容を検討してきた。第2表に示すように、幅・津留遺跡では、IPB-①もしくは②が各住居から数点ずつ出土し、SI15ではTYⅢ型ガラス管玉も伴う。ここでは、このようなガラス小玉の出土傾向の位置づけを考えたい。

弥生時代後期～終末期におけるガラス製玉類の消長は大賀（2003、2010）で大枠が整理されており、弥生時代後期後半を画期として主体となる種類が変わることが指摘されている。また、谷澤（2011）は、後期後半を境に単純に種類が交代するというよりも、北部九州地域では、後期前半～中頃に多量に流通していたIPB-①・②が、後期後半に大幅に減少し、その後にIPB-③・④・⑤〔註4〕などの種類が相対的に増加する変化であることを指摘した。ただし、以上は副葬品として出土する玉類を中心とした検討であり、集落出土のガラス製品の出土傾向は未だ不明瞭な部分も多い。そこで今回は、本遺跡の位置する阿蘇カルデラ地域を中心にガラス製品の出土傾向を検討することとした。

阿蘇カルデラ内でガラス製品を出土した弥生時代後期～終末期の主要な遺跡として、小野原遺跡群、狩尾遺跡群、下山西遺跡が挙げられる。いずれも、幅・津留遺跡とは中央火口丘をはさんで北側の、阿蘇谷に位置する（第2図）。第3表に、これらの遺跡で出土したガラス製品の内容を整理した。

最も多くガラス製品が出土しているのは小野原遺跡群の下扇原遺跡で、包含層を除くと12の竪穴住居からガラス小玉が出土している。各住居のガラス小玉の構成としては、IPB-①・②を主体に〔註5〕構成される例と、IPB-⑤・⑦などのソーダ石灰ガラスのものを含む例の二者がみられる。谷澤（2010）では、これを「入手機会」の差を示すものとして注目した。今回あらためて、出土土器の検討（広中2010）を参照し、各住居の時期をみると、IPB-①・②を主体とする住居のうち、特に出土点数の多いSB150、SB161の時期が小野原編年2段階に比定され、弥生時代後期前半に遡ることを確認できた。一方、ソーダ石灰ガラス

のものを含むSB84、SB108は小野原編年4段階で、後期後半に位置付けられる。なお、IPB-①もしくは②が数点で構成される住居は、時期の判断が困難なものも含まれるが、隣接する小野原A遺跡を含めた小野原遺跡群全体で、弥生時代後期前半から後期後半以降まで広い時期幅で確認できる。

以上、小野原遺跡群では、集落において後期前半にIPB-①・②を主体とするまとまったセットがみられ、その後IPB-①・②は数を減じ、ソーダ石灰ガラスのものの出現頻度が相対的に高くなる現象が確認できる。このような変遷は、玄界灘沿岸の諸地域を主体とする北部九州の埋葬遺跡での様相（谷澤2011）と調和的であり、弥生時代後期を通じて、小野原遺跡群に継続的にガラス製玉類が搬入されていたことを示すと考えられる。ただし、後期後半以降にカリガラス数点のみが出土する事例は、後期前に搬入されたものが滞留しているのか、後期後半以降に新たに少量が持ち込まれたのか絞り込むことが難しく、両方の可能性を考えておきたい。なお、下原遺跡では包含層から鉛バリウムガラス製の勾玉1点も出土している。

小野原遺跡群の西に位置する狩尾遺跡群（木崎編1993）でも住居からのガラス小玉の出土が確認されている。具体的には、池田・古國遺跡17号住居跡、狩尾・前田遺跡4号住居跡、6号住居跡、7号住居跡が挙げられる。各住居1~2点の出土で、IPB-①もしくはIPB-③からなる。また、狩尾遺跡群で注目されるのは、狩尾・湯の口遺跡で2号石棺墓からガラス小玉が出土している点である。内容としては、IPB-③とIPB-⑤が主体であり〔註6〕、弥生時代後期後半～終末期に典型的なセットといえる。以上の狩尾遺跡群での出土事例はいずれも弥生時代終末期に位置付けられる。

下山西遺跡（高谷編1987）でも、埋葬と住居の両者からガラス製玉類の出土が確認できる。1号石棺墓、15号住居からガラス小玉各1点が出土しており、いずれもIPB-①である。また、14号住居からは鉛バリウムガラス製の勾玉が1点出土している。下山西遺跡の事例も、時期的には弥生時代後期後半～終末期に位置付けられよう。

以上の各遺跡の様相から、阿蘇カルデラ内では、少

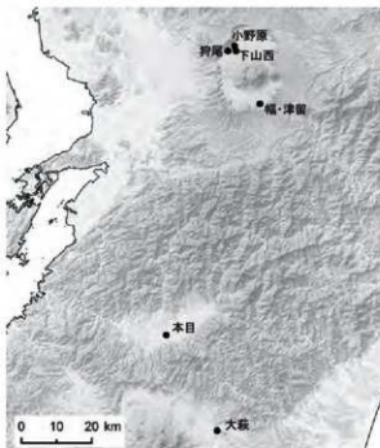


図2 本稿で言及する九州中・南部の
ガラス製玉類出土遺跡

量のガラス小玉の住居への廃棄は、主要な集落では弥生時代後期から終末期を通じてみられることがわかる。また、下原遺跡の様相から、後期後半以降にIPB-①・②のみで構成される事例があることもわかる。幅・津留遺跡におけるガラス製品の出土は、阿蘇カルデラ内における拠点的集落の、一般的な特徴として位置づけられよう。ただし、阿蘇谷側では、ガラス勾玉の出土や（下山西遺跡、下原遺跡）、後期前半段階での多量のガラス小玉の廃棄（下原遺跡）などが確認できるのに対し、幅・津留遺跡の所在する南郷谷側では、現状ではそのような事例は確認されていない。阿蘇カルデラ内における集落の展開や、鉄器やベンガラの生産、青銅器の搬入動向などとも連動した現象と考えられよう。

阿蘇カルデラ内全体の傾向として、ガラス小玉の出土点数でいえば弥生時代後期前半が多いが、住居への廃棄事例の数自体は弥生時代後期後半～終末期のほうが多く、墓への副葬も終末期の段階ではじめてみられるようになる。ここで注意されるのが、同じく弥生時代後期後半～終末期の段階で、熊本県あさぎり町本目遺跡SK14土壇墓（佐古編2011）、宮崎県野尻町大荻遺跡4号土壇墓、同6号土壇墓（寺原・岩

表2 幅・津留遺跡出土ガラス製品の遺構別出土点数

出土地点	遺構	TYⅢ型	IPB		その他	合計
			①	②		
			淡青色	青紺色		
			カリ	ソーダ		
12区	SI15	1	2			3
	SI16		1			1
	SI20			1		1
	SI32		1	1		2
	包含層				1	1
13区	SI40		1			1
	SI48		1	3		4
	SI51		1			1
	SI54		1			1
合計		1	8	5	1	15

表3 弥生時代における阿蘇カルデラ内の主要なガラス製品出土事例

遺跡		時期	IPB						その他	統計
			①	②	③	⑤	⑦	その他		
下扇原	SB150	小野原 2段階	8	48	1					57
	SB161	小野原 2段階	36	301	6					343
	SB156	小野原 3段階	2	3						5
	SB1	小野原 4段階	1							1
	SB6	小野原 4段階		1	1					2
	SB84	小野原 4段階	8	1		2	1	淡緑色 1		13
	SB108	小野原 4段階	3	3		2	1	淡緑色 1		10
	SB95	小野原 5段階		2						2
	SB80	—	2	1						3
	SB82	—	2	3						5
小野原A	SB105	—		1						1
	SB167	—		1						1
小野原A	SB57	小野原 2段階		2						2
	SB3001	小野原 5段階		4						4
池田・古園	17号住居	狩尾 第V期	1		1					2
	狩尾・前田	4号住居			1					1
	6号住居	狩尾 第V期	1							1
	7号住居	狩尾 第V期～			1					1
下山西	2号箱式石棺墓	狩尾 第V期～			7	8			判断保留 7	22
	14号住居	後期後半～終末期	1							1
	15号住居	後期後半～終末期							ガラス勾玉 1	1
	1号石棺墓	後期後半～終末期	1							1

*「時期」欄は、小野原遺跡群は広中(2010)、狩尾遺跡群は木崎編(1993)の編年を用いた。広中(2010)の2段階が後期前半、3段階が後期中頃に相当すると考える。

永 1974) のように、九州南部でガラス製玉類の副葬が点的にみられるようになることである。本目遺跡では IPB-⑤が主体、大荻遺跡では IPB-①が主体となる構成で、内容としては両遺跡で違いが大きい。とはいっても、これらのガラス小玉が舶載品であることは確実で、特に本目遺跡のセットは、種類構成から弥生時代後期後半～終末期に入手されたものと考えられる〔註7〕。このような現象は、弥生時代後期後半から終末期にかけて、ヨッキ形土器や免田式土器の分布から看守されるような、九州中・南部の諸地域に展開するネットワークを通じ、ガラス製玉類が流通していた可能性を示唆している。幅・津留遺跡出土のガラス製玉類も、その一端をなしていると考えたい。

最後になりましたが、調査・報告の機会を与えていただいた熊本県教育庁 宮崎敬士氏に感謝申し上げます。また、本稿で言及した資料の実見にあたっては、あさぎり町教育委員会、宮崎県立西都原考古博物館にもお世話になりました。記してお礼申し上げます。

註1 Oga and Tamura (2013) はカリガラスを CaO と Al₂O₃ の含有量から二つのグループに細分している。Group PI は CaO₂ と Al₂O₃ の含有量が中間的なもので、Group PII は Al₂O₃ が多く CaO が少ないものである。今回の分析では、CaO と Al₂O₃ の含有量を算出していないが、列島出土のカリガラスでは、Group PI のほとんどがコバルト着色、Group PII のほとんどが銅着色であるという指摘 (Oga and Tamura 2013) をふまえて基礎ガラスの種類を推測した。

註2 大賀 (2003) では、端面の研磨は弥生時代後期後半からみられるようになるとされている。ただし、筆者の観察のかぎりでは、北部九州では弥生時代後期後半段階で IPB-①の出土数自体が少なく、端面の研磨が顕著に認められるようになるのは終末期新段階以降である。

註3 植物灰ガラスはササン朝ペルシアをはじめとするメソポタミア周辺地域で特徴的なガラスとされる。ただし、コバルト着色の引き伸ばしガラス小玉に関しては、中央アジアまで含めた生産地が想

定されている、(Oga and Tamura 2013)。このようなガラス小玉はガラス容器等とともに陸のシルクロードを通じてユーラシアを流通したと考えられており、海のシルクロードを経由したと考えられる IPB と対比される。

註4 以下、ガラス小玉の分類名称は谷澤 (2015) で使用したもの用いる。IPB-③はコバルト着色でカリガラスもしくは「ナトロン主体ガラス」の大型品、IPB-④はコバルト着色カリガラスで紫味の強い色調の極小型品、IPB-⑤はコバルト着色の高 Al ソーダ石灰ガラスでやや淡くすんなり色調を呈するものにあたる。

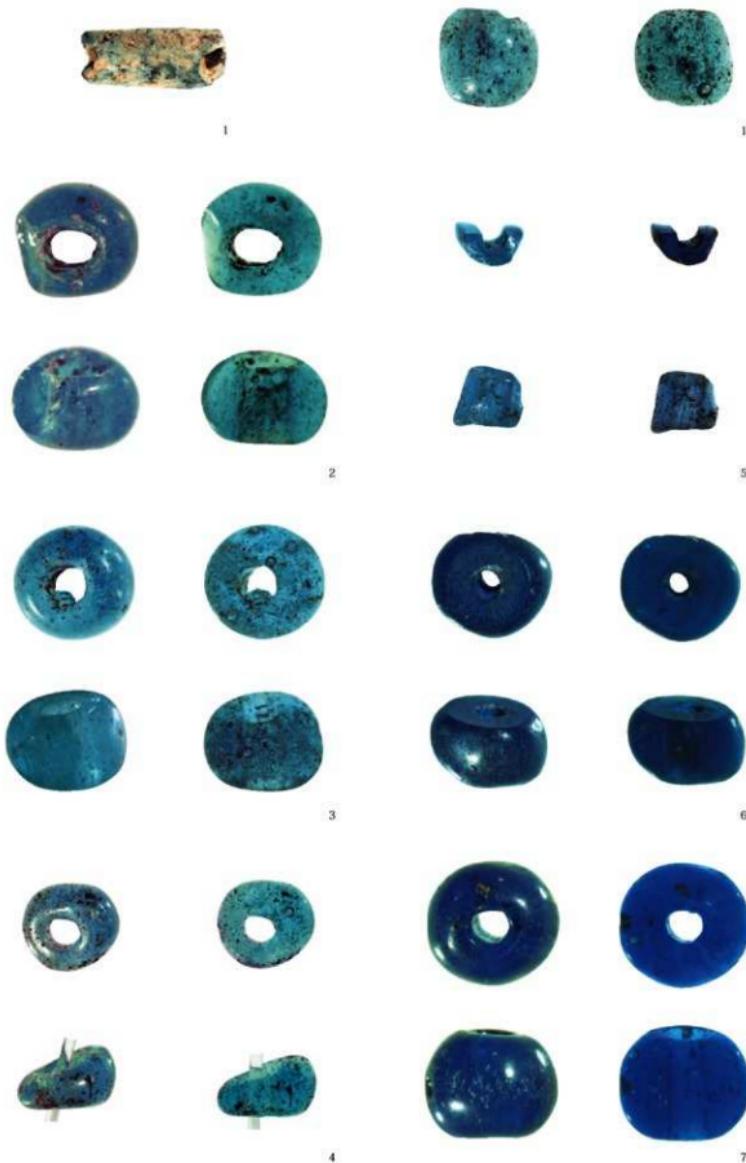
註5 下扇原遺跡ではコバルト着色の IPB には大型品が混在している。第3表では、大型品が含まれることを示すため、直径 5.0mm 以上のものを機械的に IPB-③に分離したが、直径のヒストグラムは連続的で、大型品がまとまったセットをなすわけではない。

註6 第3表で判断を保留した 7 点のうち 2 点は大型品で、目視からの判断だが着色剤がカリガラスに普遍的なコバルト着色とは異なる可能性がある。残りの 5 点はコバルト着色の小型品で、劣化が著しく、鋳型による製作の可能性があると判断した。

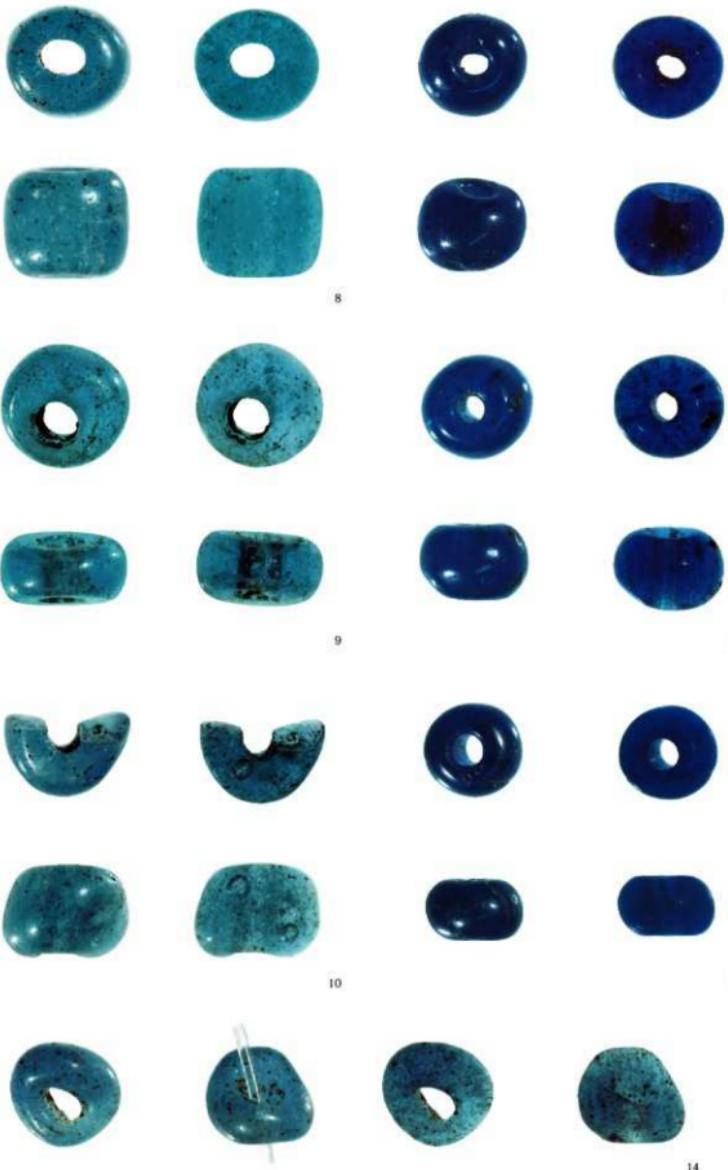
註7 大荻 4 号土壤墓、6 号土壤墓で主体を占める IPB-①はいずれも端面の研磨がそれほど顕著ではなく、舶載時期が弥生後期前半～中頃に遡る可能性もある。ただし、6 号土壤墓には連珠法によるとみられるガラス小玉が 1 点混在し、埋葬構造には伴わないガラス小玉のなかには IPB-⑤がまとまってみられる。これら 2 種は、後期後半以降に舶載されたものである可能性が高い。

参考文献

- 大賀克彦 (2003)「紀元3世紀のシナリオ」古川登(編)『風巻神山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書7, 72-90. 清水町教育委員会。
- 大賀克彦 (2010)「弥生時代におけるガラス製管玉の分類的検討」, 古川登(編)『小羽山古墳群の研究: 研究編』, 213-230. 福井市郷土歴史博物館・小羽山古墳群研究会。
- 木崎康弘 (編) (1993)『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告131, 熊本県教育委員会。
- 小寺智津子 (2006)「弥生時代のガラス製品の分類とその副葬に見る意味」, 『古文化談叢』55, 47-79. 九州古文化研究会。
- 佐古一枝 (編) (2001)『本目遺跡: 第3次~5次調査報告書』免田町文化財調査報告3, 免田町教育委員会。
- 高谷和生 (編) (1987)『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告88, 熊本県教育委員会。
- 谷澤亜里 (2010)「小野原遺跡群出土のガラス製品」, 宮崎敬士(編)『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告257, vol. 2, 181-206. 熊本県教育委員会。
- 谷澤亜里 (2011)「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通: 北部九州地域を中心に」, 『九州考古学』86, 1-39. 九州考古学会。
- 谷澤亜里 (2015)「古墳時代開始期前後における玉類の舶載」, 『物質文化』95, 49-61. 物質文化研究会。
- 田村朋美 (2012)「日本列島における植物灰ガラスの出現と展開」, 『文化財論集4: 奈良文化財研究所創立60周年記念論文集』奈良文化財研究所学報92, 1367-1384. 奈良文化財研究所。
- 寺原俊文・岩永哲夫(編) (1974)『大秋遺跡』1, 宮崎県教育委員会。
- 弘中正芳 (2010)「小野原遺跡群出土の土器」, 宮崎敬士(編)『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告257, vol. 2, 167-179. 熊本県教育委員会。
- Peter Francis, Jr. (1990). Glass beads in Asia Part two. Indo-Pacific beads, Asian Perspectives, 29-1, 1-23.
- Katsuhiko Oga. & Tomomi Tamura. (2013). Ancient Japan and the Indian Ocean interaction sphere: chemical compositions, chronologies, provenances and trade routes of imported glass beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). Journal of Indian Ocean Archaeology, 9, 35-65.



図版1 幅・津留遺跡出土のガラス製品（左：落射光、右：透過光）縮尺不統一



図版2 幅・津留遺跡出土のガラス製品（左：落射光、右：透過光）縮尺不統一

幅・津留遺跡の玉類とその製作技術

大坪 志子

おおつぼ・ゆきこ、熊本大学埋蔵文化財調査センター

はじめに

九州において弥生時代の石製玉の研究は、ヒスイや碧玉などの石材産地と製作遺跡を擁する山陰や北陸など本州を中心に進められてきた。玉の製作遺跡から出土する製品や未成品、加工工具からは、様々な製作工程や製品の特徴が解明されている。また、石材の科学分析も行われ、産地と製品の分布の様子も追跡されている。一方、九州は本州で製作された製品を入手する側である。石材に恵まれない九州では製作遺跡が盛興することは難しく、製作遺跡は極めて少ない。したがって、九州における玉の製作がどの程度、どのような製作技術を用いておこなわれたのか、製品の特徴はどのようなものかなど、実態はいまだ不明といつてもよい。

こうしたなか、幅・津留遺跡からは、石製の玉と素材（本稿では未加工の原石を含め玉の材料とされたと考えられるものは素材とする）が堅穴建物を中心とする遺構から多数出土した。未成品や素材が含まれることから、幅・津留遺跡で玉の製作をおこなっていたことは明らかだ。幅・津留遺跡の年代からすれば、九州のなかでも最も古い玉の製作遺跡の一つであろう。出土資料からは、玉の製作に関する新たな発見もあった。

以下、本遺跡出土玉の形や石材、製作技術について、それぞれ所見を記す。

1 形態的特徴

幅・津留遺跡からは勾玉 20 点と管玉 15 点（いずれも未成品を含む）、素材 33 点の他、切子玉、小玉各 1 点出土している。

1-1 勾玉

幅・津留遺跡出土の勾玉は、弥生時代中期に出現した勾玉の象徴的な形態である定形勾玉の丸い頭部、筆者が「顎」と呼ぶ頭部と胸部の明確なくぎれ、断面形態が円形で緩やかな曲線を描く胸部・尾部といった特徴は失われている。頭部は丸くなく、嘴のように尖つており、顎がなく胸部と一続きである。胸部は、厚みはあるが、断面形態は円形ではなく扁平になっている。尾部との境も明確でない。腹部は大きくひらく「コ」の字（もしくは台形）か V 字、あるいは半円形に抉

れている。頭部が尖り、古墳時代以降の勾玉の形態に近いが、胸部はまだ間延びした体ではない。これらは、形態的に大きく 4 つに分けることができる。

① 13 区 SI41 出土の図 1-8 は、頭部が尖り、腹部は大きく開く「コ」の字状の抉りである。上半身とほぼ対称の胸部・尾部である。12 区 SI19 出土の図 1-5 も、これに近い。胸部・尾部が頭部に比して小さく、バランスが悪い。17 区 SI72 出土の図 1-12 は、胸部の途中から欠損しているが、頭部が尖りこれら 2 点に近い形態であったと考えられる。19 区 SI74 出土の図 1-20 は、頭部が尖り、腹部は V 字の抉りである。胸部に相当する部分がほとんどなく、頭部をそのまま反転させたような形態をしている。製作途中で尾部が折れ、修正した可能性も考えられる。

この 4 点に共通するのは、顎に相当する部分がなく、直線状でそのまま腹部の「コ」の字あるいは V 字の抉りにつながっている点である。

② 9 区 ST239 出土の図 1-3 は、本遺跡出土の勾玉の中ではもっとも整った形態である。頭部は尖り顎がないが、胸部から尾部の先にむかって緩やかな曲線を描きつつ次第に細くなっている。腹部は、C 字もしくは梢円形の緩やかな曲線である。17 区 SI78 出土の図 1-17 は、ST239 出土の勾玉と同様に、頭部が尖り顎がなく、腹部は半円に近い曲線である。垂下用の孔がある付近の幅が広く、胸部・尾部にかけてやや急に細くなり、また短いことから、頭部が大きくバランスがやや悪い。12 区 SI22 出土の図 1-7 も、頭部が尖り顎はない。腹部は胸部や背中の大きさに比して半径の小さい半円の抉りで、胸部・尾部が極端に短くなっている、円盤の一部を削いたかのようである。

この 3 点に共通するのは腹部の抉りが曲線であることである。これ以外は、全体のバランスは悪く、形態的差異も大きい。

③ 12 区 SI19 出土の図 1-6 は、垂下用の孔を確保するために先端部の幅がやや広く、以下はわずかに屈曲するが、ほぼ棒状の勾玉である。長さは 1.1cm と非常に小さい。17 区 SI72 出土の図 1-13 は、半月形で特別頭部の作り出しがない。垂下用の孔が全体の大半を占める。本来、もう少し大きな重飾等であった可能性がある。13 区南 F4 グリッド出土の図 1-10 は、背が

曲線ではなく直線で、ヘラ状の垂飾の片方側辺に抉りを入れたような形態である。ヘラ状垂飾品の再加工品である可能性が考えられる。

これらの3点は、①や②のグループの勾玉とは、頭部・尾部・抉りの形態がかなり異なり、勾玉や別の垂飾であったものを再加工した勾玉である可能性が高い。

④このグループは、他に類事例がないものである。12区SI15出土の図1-4は、上部を欠損しているが勾玉の尾部である可能性がある。本品は、動物の牙のように円錐状の尖った形態をしている。他の勾玉の尾部は尖り気味ながら断面形態が扁平であり、本品は幅・津留遺跡の勾玉のなかでは特異である。17区SI72出土の図1-14も、上部を欠損しており下半部のみである。勾玉としては腹部らしい明確な抉りではなくヘラ状の垂飾である可能性もあるが、ここでは勾玉としておく。

このほか、13区SI37出土の図1-9、16区SI80出土の図1-11、17区SI72出土の図1-15、19区SI74出土の図1-18・19は未成品である。9は全体を研磨で丸く整えており、これから頭部・胴部・尾部を形成するものである。19も厚みのある板状の素材を研磨し、半月形に整えており、これから各部部位を形成するもので、15も同様である。11・18も大略勾玉の形に整えているが、頭部と尾部の区別ができるおり、9よりも具体的に成形が進んだ段階である。

以上、幅・津留遺跡出土の勾玉を概観すると、形は一様ではなく、完成形の全体的なイメージが統一されていないよう、「頭」「胴」「尾」のバランスはさほど良くないものがほとんどである。また、非常に小さく、再加工の可能性を考えさせる勾玉も数点ある。共通するのは、「頭」「胴」「尾」があればよい程度の意識のもとに製作されているようで、弥生時代中期の定形勾玉からの形態化の進行を感じさせる点である。

1-2 管玉

管玉の形態は、縄文時代のものは中央部分が膨らむエンタシス形で、弥生時代のものはストローを適當な長さにカットしたような直線的な形態であることはよく知られている。幅・津留遺跡出土の管玉は、いずれもこの直線的な形態を程している。

19区SI74出土の図1-35は、太さが約7mm、長さは約16.5mmである。他の管玉は太さが3mm前後で長さは太さの3~5倍である。このため、35は、管玉群のなかで唯一太く短い管玉である。13区SI36出土の図1-29は、非常に小さな管玉である。太さと長さがほぼ同じで、管玉というよりはガラス製の小玉に近い形態である。片側の端部の孔周辺は、研磨されていない面が残る。管玉を片側から穿孔し、最後に突いて貫通させた場合、いわゆる「富士石」という、円錐形の破片が剥離する。この痕跡の可能性もあるがやや乱れており、折損したものを再研磨した際に研磨が不十分であった可能性が考えられる。

図1-24・25・27・34は未成品である。27は穿孔作業が残されている程度で、成形も研磨もほぼ完了に近い状態である。玉の製作では穿孔作業が工程上もつとも失敗(破損)する可能性が高いため、多角柱もしくはそれから荒砥した段階で穿孔し、仕上げの研磨は穿孔が無事に終了したのちにおこなわれる。研磨の程度は他の勾玉も含めた仕上がりからみて、27はほぼ完成の状態で穿孔待ちであったと考えられる。片方の端部は明らかに折損の痕跡を残しており、本来はもっと長かったと予想される。24・34は、素材を管玉にするためにある程度成形した段階で、25はそれより一段階すすめ、より管玉としての整形をおこなっている段階のものである。

1-3 その他の玉

図2-54は、ほぼ厚さが均一で円盤状を呈している。玦状耳飾の中央孔に相当する曲線部や切目に相当する直線部もあり、位置関係も顕著がなく、玦状耳飾の破片のようである。しかしながら、周縁部相当する部分がかなり歪である。他の部分と同程度の摩耗具合からすれば、完成後の破損や調査時のガジリで生じた歪みではない。また、破損部に相当する部分の摩耗もやはり顕著である。切目相当部分は、擦り切りなどの切断痕がなく、若干窪むような平滑な面である。縄文時代に、破損後に再研磨をしたと仮定するとそれは玦状耳飾や垂飾として再利用するためであり、そうであれば補修孔や垂下用の孔が施されるはずであるが、54にはそれがない。摩耗部分は、擦痕が観察されず、研磨とす

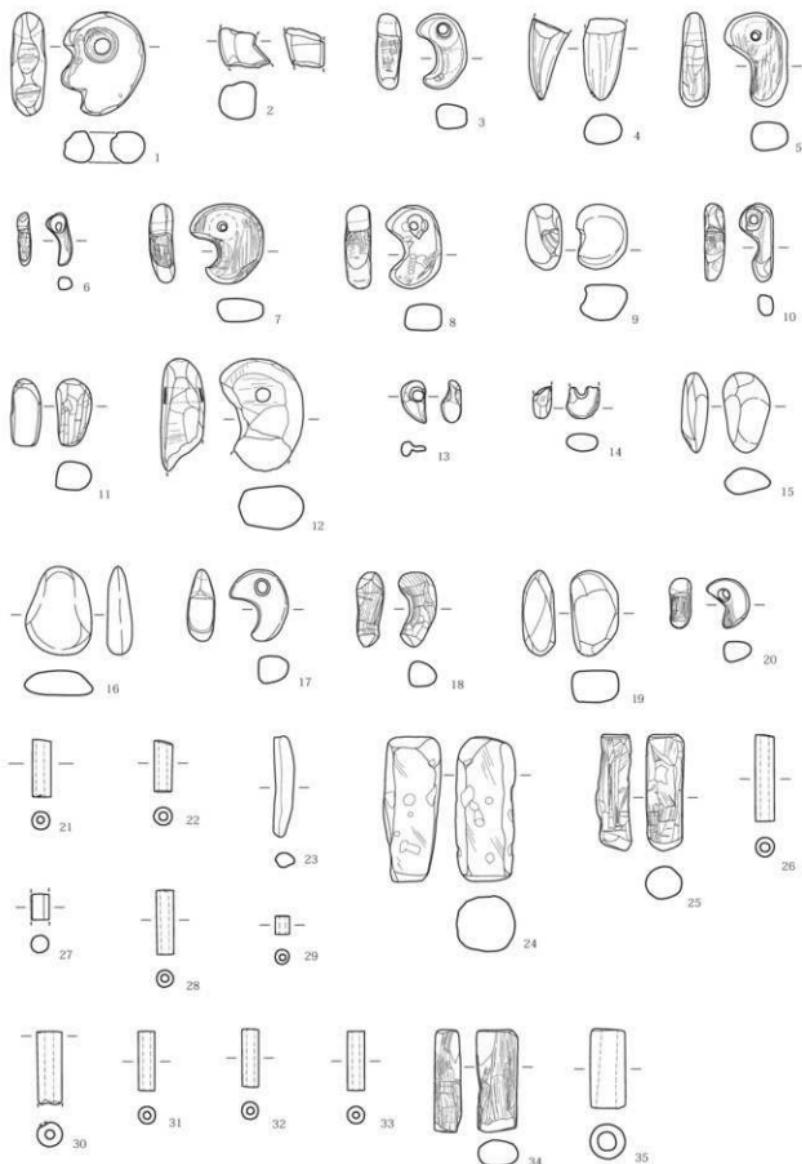


図1 幅・津留遺跡出土玉類（1）

れば相当細やかな研磨を施している。幅・津留遺跡の人々が、加工を加えてこのような形態・状態になったものか、判断は難しい。

図 2-59 の小玉は、滑石製である。縄文時代の小玉と変わらず、厚みや丸みがある。

縄文時代の小玉の多くは、両側から断面形態が V 字状になるよう穿孔されるが、本品は直線状に穿孔されている。弥生時代はガラス製小玉が主流となり、幅・津留遺跡でも小玉を製作した形跡はうかがえないと、縄文時代の小玉を後述の獸形勾玉とともに採集・持ち込んだものか。

1-4 その他の特徴

勾玉の製品のうち、図 1-3・5・6・7・10・20 の孔の周囲には、玉同士が擦れ合った玉ズレの跡があり、何かしらの玉と連結して実際に使用していたと考えられる。図 1-12 も、孔の周囲の研磨が顕著で、玉ズレの可能性がある。図 1-8・17 は、玉ズレは観察できないが、孔に紐ズレによる変形が生じており、これらは単独で使用されたと考えられる。縄文時代の獸形勾玉と考えられる図 1-1 は、孔の周囲が広く擦れており、特に上部に顕著な紐ズレが観察できる。弥生時代に幅・津留遺跡の人々により採集され持ち込まれたようであるが、再び使用されたのかは不明である。このほか、8 は貫通した孔の横(図では右側)に、穿孔途中の小さな瘤があり、穿孔箇所を一度変更したことが分かる。

このように、幅・津留遺跡から出土した勾玉製品は、遺跡内で実際に使用されていたものが遺されている。

管玉も、多くは製品の両端が良く擦れており、使用されていたと考えられる。特に、21・22・26・28・35 は片側の端部が変形しており、玉ズレによる痕跡を顕著にのこしている。31・32・33 は、他の製品と比較すると擦れは無いように見えるが、使用されていないのか、あるいは使用時間が短かったか、いずれかと考えられる。

2 石材

幅・津留遺跡出土の玉類に使用されている石材は、多種多様で、色彩もまた多様である。玉の個別の石材については表 1 を参照されたい。

2-1 同定の方法

幅・津留遺跡出土の玉類・素材について、携帯型蛍光 X 線分析機ハンドヘルド(イノベックス社)を利用して、蛍光 X 線分析を実施した。蛍光 X 線分析は、検出された元素と傾向・特徴から該当する石材を判断せねばならない。筆者の場合、石製装身具に使用される青・緑色系の石材 10 種については、自動的に判定できる計算式シートを利用しているが、これら以外については目視・経験に基づくものであることを、お断りしておく。特に、石英・玉髓は基本組成がともに SiO_2 で、玉髓は石英の微小結晶の集合体である。玉髓は色が均質で不透明の緑色や紅色は碧玉、美しい紅色や縞模様を持つものを瑪瑙などと、色や模様などで多様に区別される(青木・砂川 1996, Chris 1997)。このため、組成が SiO_2 のものは筆者が使用する判定法の「碧玉」に一括される。ここでは、石英質・碧玉・玉髓質に分けた。

2-2 石材の特徴

まず、主要な石材について説明をしておこう。

石製の玉類の石材として普遍的な石材で、幅・津留遺跡でも勾玉を中心で使用されているのが滑石である。色は、暗緑色・乳白色・薄い乳白緑色・茶などである。図 3-①は、勾玉図 1-20 の分析結果である。Si・Fe・Mg・Al が主に検出されている。Ca の検出は試料による。滑石に近い石材として蛇紋岩があり、本遺跡では 2 点の蛇紋岩製の勾玉が出土している。図 3-②は、勾玉図 1-3 の分析結果で検出される元素は滑石と変わらない。

次に多かったのは、石英質・玉髓質の石材で、素材の多くがこれであった。図 3-③は、素材図 2-39 の分析結果である。これらの色彩はそれぞれ異なるが、いずれも硬質感や透明感があり、特に素材図 2-39・40 は瑪瑙のようである。

次いで、管玉の石材として多かったのが碧玉である。図 3-④は、管玉図 1-22 の分析結果である。主成分は Si で Al・Fe・Mg が検出されている。

図 3-⑤は、管玉図 1-27 の分析結果である。Si・Al・K・Ca・Ti・Fe などが検出されている。碧玉のような硬

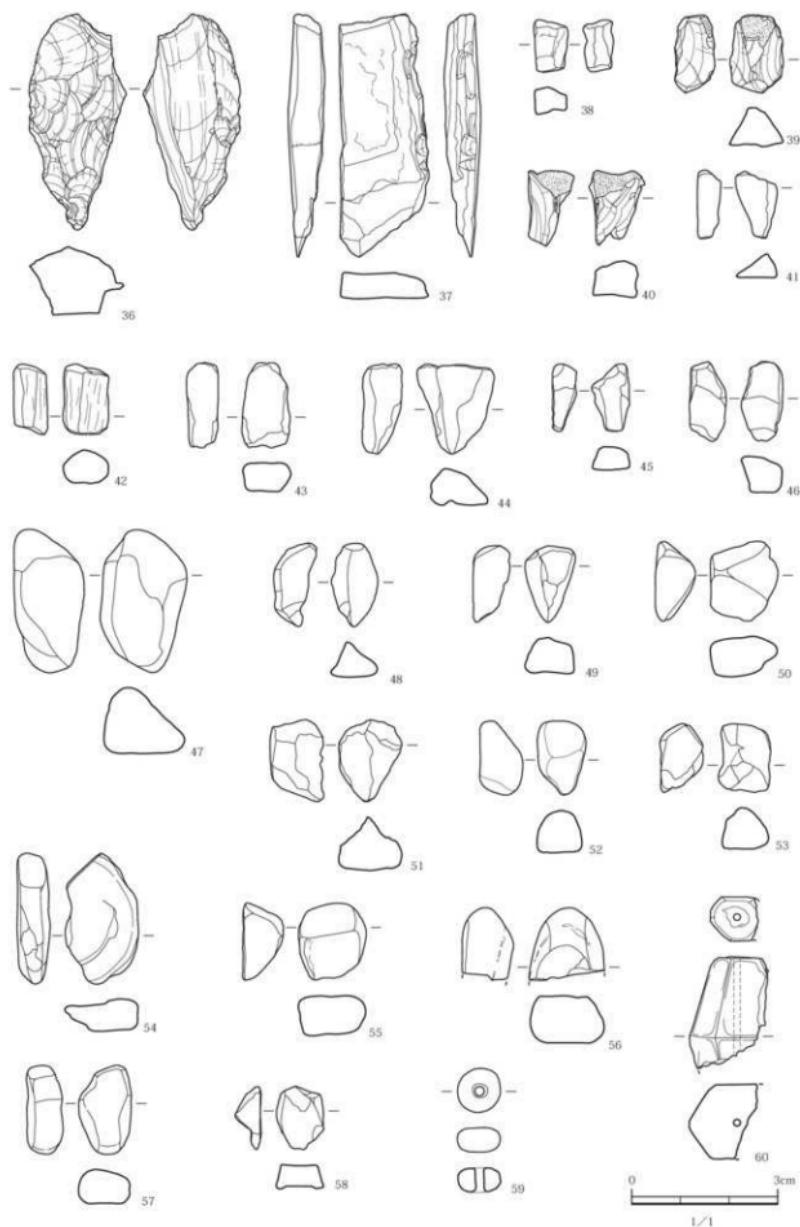


図2 幅・津留遺跡出土玉類（2）

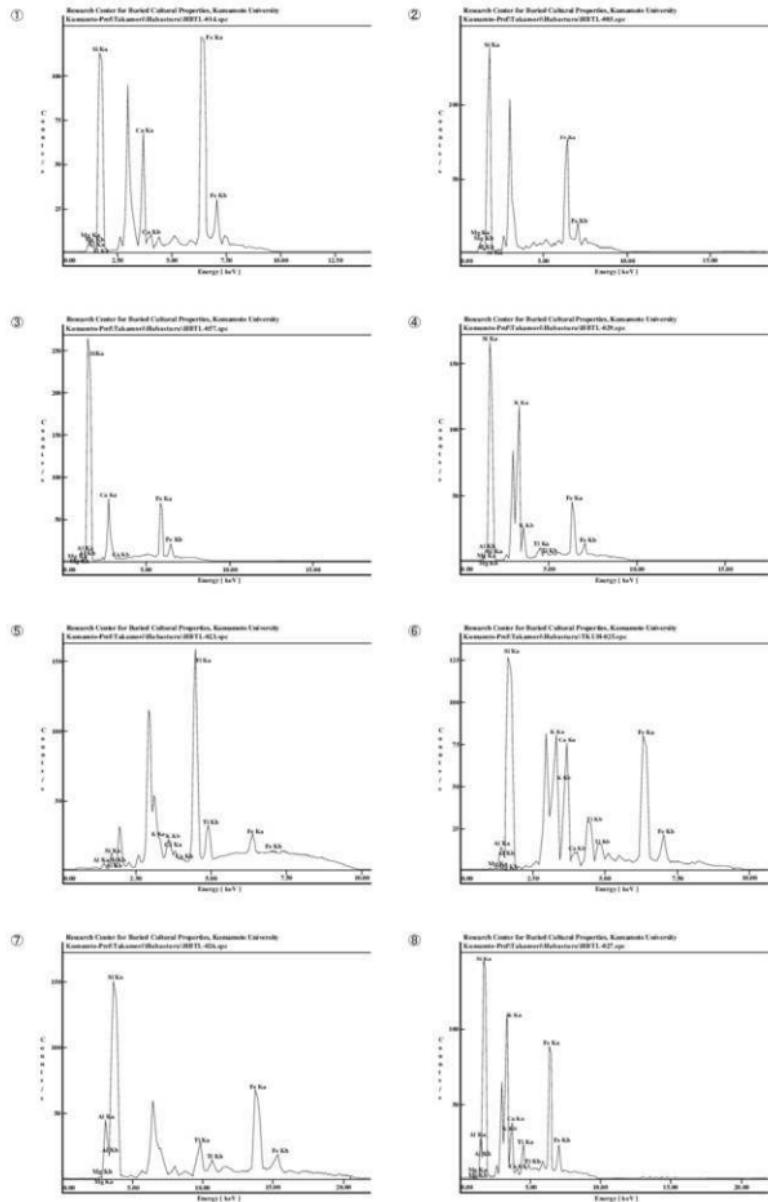


図3 蛍光X線分析によるスペクトル図

質で、不透明の淡いベージュ～乳白色である。石材は不明である。

図3-⑥は、管玉図1-30の分析結果である。Mg・Si・Al・K・Ca・Ti・Feなどが検出されている。判定では不明であるが、過去の事例からは、グリーンタフと考えられる。管玉図1-28も同様である。

図3-⑦は、管玉図1-25の分析結果である。Si・Alが主成分でMg・Ti・Feも検出されている。ヒスイに似るが比重が2.8で翡翠としては軽く、筆者の判定の中では「翡翠類似岩」である。質感は玉髓に似る。

図3-⑧は、管玉図1-24の分析結果である。Mg・Si・Al・K・Feが大きなピークをし、Ca・Tiも検出されている。表面には大小の気泡の跡が無数にあり、軽い。軽石である。

このほか、勾玉図1-4の材質も白色で軽いものであるが、軽石のような気泡はない。断面は密につまっており、骨とも判断はできない。

2-3 玉の種類と石材

玉の種類ごとに石材と特徴をまとめると、以下のとおりである。

勾玉は、完成品も含めほぼ滑石製であった。蛇紋岩は滑石と近縁の石材で、同じ産地で採取できる。当時の人々にとっては「同じ石」という認識で、玉の石材として集落に持ち込んだものであろう。

管玉は、製品はほぼ碧玉製・グリーンタフ製である。完成品には、象牙色の不明石材の図1-27、玉髓的な石材の図1-25、軽石の図1-24、滑石の図1-34、グリーンタフか細粒の砂岩のような図1-23など管玉にはあまり使用しない石材製がある。管玉用の素材と考えられるものには、玉髓的な褐色や半透明乳白、灰白の石材もある。碧玉製・グリーンタフ製の管玉は、当該期の石材産地や製作遺跡と流通などに関する既往の研究から、九州外からもたらされたものと考えられる。勾玉とは異なり、管玉の完成品や管玉用と考えられる石材に玉髓的な石材が用意されているのは碧玉のような硬質で美しい管玉を製作するためであったと考えられる。

素材は、多くが赤褐色の玉髓の素材、長石のような石材、乳白茶の石材、滑石、頁岩、水晶などがある。色は緑色ではなく、茶色・褐色・白色・半透明の乳白

色など多様である。色にこだわりはなく、他よりは硬質で美しい石材を利用しようとしたのであろう。しかしながら、これらの石材による完成品はない。この点は、工具・技術と係ると考えられ、後述する。

3 推定される製作工具 と製作工程

幅・津留遺跡出土の玉には、成形作業において金属製の刃物のような工具を使用した可能性を示唆する痕跡がある。以下、この点について考察してみよう。

3-1 製作工具

勾玉製品の腹部や背に、幅1ミリほどの面取りが長々と明確に残されている（図版1）。また、うろこ状の面取りもある。管玉の未完成品の中にも、この面取りの跡が残っているものがある。また、勾玉の製品には、研磨後であっても、この痕跡を把握することができるものもある。

この面取りの跡の特徴は、

- ①幅や一つの単位がとても細い、小さい。
- ②この筋が平面的になっておらず、曲面のまま続く。凹んでも続くものもある。
- ③面取りの方向（長軸）に対して深い擦り痕があるのと同時に、垂直（横方向）にいくつも段ができる。
- ④一定の方向に、段を付けて止まっている。

このような特徴を総合して考えると、砥石による研磨で残ったとは考えにくい痕跡である。特に、この痕跡が凹んでも続くこと、作業をおこないにいく勾玉の腹部において、頭部から尾部にかけてこの痕跡が連続しているのは、小さな砥石のほうを動かしたと考えても、両側に明瞭に稜が残るほどの力を入れて砥石を動かすとは考え難い。砥石で擦って腹部の抉りを成形するならば、勾玉の長軸に対して垂直方向に動かすほうが自然である。「削り取れる工具」を使うからこそその動作と痕跡を考えるのが妥当であろう。

また、砥石の場合は、段差をもって研磨面が止まることはない。一定の方向に段差をもって止まっているのは、力が入りすぎたときに、対象物に刃が深く入りすぎ、刃物が止まってしまった痕跡と考えられる。面取りの長軸方向に対して横（垂直方向）に段が付くの

も、砥石では起きない現象である。

このようなことから、この面取りの跡は、刃物で果実や根菜の皮を剥くような動作で形成された痕跡であろうと考えられる。

幅・津留遺跡の玉の製作では、成形時に金属製の刃物のような工具が使用されたと考えられる。この工具を使用して、形を削り出していく作業は、研磨よりもより簡単に、意図する形を具現化できる。金属製の工具の使用は、合理的といえる。玉の製作をおこなったと考えられる堅穴建物 SI72・SI74などを主として未完成等玉に関する遺物が出土している堅穴建物からは、鉄製品が出土しており、可能性は高い。対象物自体が小さく、狭い腹部を細工することや、面取りの筋の幅が非常に細いことなどを考えると、筆者は、用いられた金属製の工具は先がとがった小さな小刀状のもの（通常の刀子よりは格段に小さいもの）、あるいはそのような鋭角をもつ三角形の破片のようなものを想定している。

3-2 製作工程

勾玉の未完成のなかで、まだ素材に近く勾玉用かと予想できるものは、研磨が全面に施されており、細かな面取りは見られない。つまり、素材から研磨によっておおまかに整形されている。

これよりも頭部や尾部などがつくりだされ、より勾玉らしい形に整えられたものは、先述した金属製の刃物によると考えられる面取がある。

管玉も同様で、管玉を作ろうとしている管玉図 1-24 は、砥石によると思われる広い平面の研磨痕が観察できる。管玉図 1-25・34 は、金属製の刃物によると考えられる面取があり、細く整形していく段階で、研磨で細くするのではなく金属製の刃物で整えていったようである。

以上をまとめると、①素材の形を製作しようとする玉の形に研磨によっておおまかに整え（大きな素材は、敲打などで適当な大きさに整えたと考えられる）。擦切りなどをおこなった跡は確認できない）、②より具体的な形を、刃物を利用して削り出して整形、③穿孔を行い、仕上げの研磨をおこなう、という製作工程が想定できる。

3-3 製作技術と素材

幅・津留遺跡では、前項で検討したような製作工具と製作工程によって、玉類の製作をおこなっていたと考えられる。また、玉の種類と使用される石材の特徴も捉えられた。そのなかで、3 項の素材のところで触れたが、玉の素材として遺跡に持ち込まれ、残された石材がほとんど玉髓系である一方で、この石材製の製品は出土していないという現象がある。

そこで、石材と製作技術の関係性から、この点について検討してみる。

理由としては、次の二つのことが考えられる。

一つは、素材として持ち込んだものの、利用せずに残された、という考え方である。

勾玉用と考えられる素材は残されていないが、加工途中の未完成があり、そこに残された金属製の工具による加工痕と製品に残る加工痕が同様であるから本遺跡で勾玉を製作していることは間違いない。滑石は、硬度が低く加工しやすい点は、金属製の工具による成形に適している。

管玉未完成品にも金属製の工具を利用している。しかし、未完成品と同じ玉髓系の石材の製品は、本遺跡からは出土していない。管玉未完成品図 1-34 のような滑石製は金属製の工具による加工に適するが、弥生時代に通有の管玉と同様の細さで仕上げると、折損の可能性は高く、管玉としては耐久性に問題がある。管玉未完成品図 1-25 は、やや硬質の石材と考えられ、管玉としての耐久性には問題ないが金属製の工具による加工には適ないと考えられる。かろうじて金属製の工具による加工が可能であったようだが、刃が止まった痕跡があること、その後放置されていることからは、力加減が難しかったと想像される。管玉未完成品図 1-24 は軽石製で、やはり加工はしやすいが耐久性と、何より見た目の美しさが問題である。もう少し踏み込むと、幅・津留遺跡では、管玉が製作したのか、現状では不明である。

残された素材はいずれも、玉髓系の硬質の石材であり、金属製の工具による加工は困難である。

このようにみると、玉の製作においてポイントとなるのは、技術と石材の性質（硬度）、石材の性質（色

彩・美しさ・耐久性)と目的とする玉、これらがうまく適合するかいなかである。幅・津留遺跡では、玉の成形時に金属製の工具を使用するという技術的な特徴があり、この技術に適する石材が選ばれたと考えられる。勾玉は滑石を用いて積極的に製作している。一方、管玉は多様な石材で製作を試みてはいるが、他地域から持ち込まれたと考えられる碧玉製の管玉以外の製品がないということは、金属製の工具を使用するという技術と、石材の性質、管玉としての見栄え、が上手く適合しなかったためであろう。玉髓系の素材は、玉としての見栄えには適しているが、やはり金属製の工具を使用するという技術と石材の性質は適合せずに、結果として使用されずに残されたものと考えられる。

もう一つの考えは、硬質の素材で金属製の工具を用いずに完成にいたった玉の製品は、幅・津留遺跡の外に搬出され、残された素材は製作の残滓や未使用素材という考え方である。ただし、幅・津留遺跡の人々が、この硬質の素材で金属製の工具を用いずに玉を製作したのかについては、現在の資料から言及することは難しい。

玉髓は、玉の製作においては玉の素材でもあるが、石錐の材料でもある。幅・津留遺跡から出土した玉髓系の石材が石錐用であった可能性について検討しておかなくてはならない。出土した「玉髓質」の素材は、見かけは実に多様であり、実際には瑪瑙などの3点以外は石錐に適しているとは考えがたい。幅・津留遺跡からは、鉄錐が出土しており、必ずしも石錐が必要であったわけではない。

筆者は、玉髓系の石材が遺跡に残された理由は一つ目の理由による可能性が高いと考える。しかしながら、この点については、まずは幅・津留遺跡の周辺、阿蘇外輪山の内外の地域において、出土している玉の集成と石材の照合などの検証作業が必要である。

4 まとめ

幅・津留遺跡の人々は、碧玉製やグリーンタフ製の管玉製品を他地域から入手する一方で、滑石を中心にも多様な石材を調達し、自身も玉の製作をおこなった。本遺跡の玉の製作をもっとも特徴づけるのは、その製作において、成形・整形に金属製の工具を使用すると

いう、他ではみられない技術を用いたことである。

幅・津留遺跡からは、弥生時代中期後半～末に出現し、山陰や丹後、北陸で製作され、西日本に分布する水晶玉が出土しており、幅・津留遺跡の人々は、管玉とともに水晶玉や瑪瑙を日本海側の地域から入手し、同時に玉の加工技術に関する情報や知識も得ていたと考えられる。そこには、穿孔技術と鉄錐に関する情報も含まれていただろう。さらに、幅・津留遺跡の人々は、玉の製作において穿孔以外にも鉄製の工具の活用を見出した。石材の硬度を知る我々は、金属製品を滑石などの柔らかい石材を加工するさいに道具として利用するのは有効な手段と理解できるが、弥生時代後期の人々が「石に金属の刃を当てる」という発想を持ち、実行されたことは驚きである。

幅・津留遺跡出土の鉄製品の詳細については別稿村上恭通論文のとおりで、その出土量や種類の豊富さは特筆される。幅・津留遺跡の人々は、鉄製品の性能・威力を十分に熟知していたことだろう。また、筆者が加工工具として想定する形態に近い鉄製品もあるようで、玉の加工に適する鉄製品を製作する技術があったようである。そして、普通ならば刃こぼれを恐れることを、貴重な鉄製品を石の加工に実際に用いることができた背景には、鉄製品の卓越した供給力があつたことにはかなならない。

筆者は、幅・津留遺跡で製作した玉は基本的には遺跡内で消費されたのではないかと推定している。玉の規格があまりにも不揃いで、遺跡の外に出すことを意識してそれなりの量を生産した感がないためである。ただし、幅・津留遺跡における玉の製作と消費の様子やその意義を解明するには、先に述べたとおり、まずは周辺遺跡の資料の精査と動向の検討が必要である。

玉類の実測とトレースは、熊本県文化財資料室の堀章子氏に担当していただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 青木義和・砂川一郎 (1996)『新版地学事典』, 327, 平凡社。
Chirs Pellatt. (1997)『岩石と鉱物の写真図鑑』, 86-89, 日本ヴァーグ社。

表1 幅・津留遺跡 出土玉類一覧

No.	分析番号	出土位置			点上付No.	種類	石材	法規(cm)				備考	
		調査区	遺構略号	グリッド				長さ	幅・径	厚さ	孔径		
3	HBTL-018	1	ST34	—	—	御所山K	滑石	2.10	1.70	0.70	0.80	3.79	
2	HBTL-019	3	S14	上層	1440	勾玉(側面)	滑石	0.80	1.05	0.80	—	0.70	
3	HBTL-003	9	ST239	理3層	6612	勾玉	蛇紋石	1.55	1.00	0.55	0.35	1.00	
4	HBTL-012	12	S115	理2層-1層	—	勾玉(底部)	不明	1.70	0.90	0.85	—	0.60北東	
5	HBTL-013	12	S119	理1層	7005	勾玉	滑石	1.90	1.30	0.60	0.23	1.80	
6	HBTL-015	12	S119	理1層	6979	勾玉	滑石	1.10	0.50	0.30	0.38	0.10	
7	HBTL-016	12	S122	理4層	7055	勾玉	滑石	1.60	1.30	0.55	0.24	1.70	
8	HBTL-009	13	S141	理4層	10124	勾玉	滑石	1.70	1.30	0.50	0.50	1.50	
9	HBTL-010	13北	S137	理1層上部破砕面	—	勾玉未成品	滑石	1.30	1.05	0.70	—	1.50	
10	HBTL-017	13南	F4	1c層	—	勾玉	滑石	1.60	0.70	0.40	0.48	0.50	
11	HBTL-004	16	S180	理3層	12658	勾玉未成品	滑石	1.35	0.75	0.60	—	1.00	
12	HBTL-002	17	S172	理4層	12599	勾玉(底部)	滑石	2.30	1.75	0.90	0.35	4.10	
13	HBTL-004	17	S172	理4層	13099	勾玉	滑石	0.90	0.50	0.40	0.30	0.20	
14	HBTL-005	17	S172	床面	13354	勾玉(表面?)	蛇紋石	0.65	0.70	0.40	0.26	0.20孔径は残存部最大	
15	HBTL-011	17	S172	理4層	13241	勾玉未成品	滑石	1.65	1.00	0.60	—	1.10	
16	—	17	S172	理4層	13243	勾玉未成品	滑石	1.80	1.40	0.50	—	1.80	
17	HBTL-006	17	S172	理4層	12279	勾玉	滑石	1.50	1.20	0.60	0.42	1.20	
18	HBTL-007	19	S174	理2層	12875	勾玉未成品	滑石	1.50	0.80	0.55	—	0.90	
19	HBTL-008	19	S174	理2層	12876	勾玉未成品	滑石	1.75	1.00	0.70	—	1.90	
20	HBTL-014	19	S174	理2層	12873	勾玉	滑石	1.00	0.90	0.45	0.27	0.50	
21	HBTL-028	2	S12	理1層	558	鉢玉	滑石	1.20	0.60	0.40	0.15	0.27	
22	HBTL-029	3	—	147G	1c層-1d層	—	鉢玉	1.05	0.60	0.40	0.17	0.25	
23	HBTL-034	3	S12	理1層	1477	棒状石製品	ガーランタフカ	2.05	0.40	0.30	—	0.20	
24	HBTL-027	3	S12	ベルト部	—	鉢玉未成品	軽石	3.00	1.20	1.20	—	1.10	
25	HBTL-026	4	—	カクラン	—	鉢玉未成品	セスイ樹脂質	2.40	0.60	0.75	—	2.27	
26	HBTL-022	12	S130	理1層	6980	鉢玉	滑石	1.80	0.40	0.40	0.20	0.50	
27	HBTL-023	12	S132	理1層	7050	鉢玉未成品	不明	0.50	0.35	0.35	—	0.10	
28	HBTL-021	12	—	5136	表土-1d層	—	鉢玉	1.30	0.35	0.35	0.15	0.18	
29	HBTL-024	13	S136	理1層かまど内	10067	鉢玉	滑石	0.40	0.30	0.30	0.13	0.10	
30	HBTL-025	14	S147	理2層	10842	鉢玉	ガーランタフカ	1.50	0.50	0.50	0.20	0.30	
31	HBTL-030	17	S169	理3層No.3南	12272	鉢玉	滑石	1.20	0.35	0.35	0.15	0.20	
32	HBTL-031	17	S169	理3層No.2西	12271	鉢玉	滑石	1.20	0.35	0.35	0.15	0.30	
33	HBTL-032	17	S169	理3層No.3東	12270	鉢玉	滑石	1.20	0.35	0.35	0.15	0.20	
34	HBTL-033	17	S172	理1層	12289	鉢玉未成品	滑石	2.10	0.85	0.55	—	2.00	
35	HBTL-020	19	S174	理2層	12887	鉢玉	滑石	1.65	0.70	0.70	0.47	1.20	
36	HBTL-059	3	S12	理1層	2199	素材	水晶	4.45	2.00	1.40	—	11.20	
37	HBTL-056	3	S12	理1層	2253	素材?	寶石か	5.00	1.80	0.75	—	8.30	
38	HBTL-055	3	S12	理1層	3401	素材	石英質	1.10	0.70	0.65	—	0.60	
39	HBTL-057	3	S13	理2層	4049	素材?(側面)	玉髓	1.60	1.10	0.85	—	1.20	
40	HBTL-058	3	S13	理1層下層	2597	素材?(側面)	玉髓	1.50	1.15	0.95	—	1.00	
41	HBTL-035	12	S119	理1層	7103	素材	不明	1.40	0.85	0.50	0.40	玉髓質の乳白色の外見	
42	HBTL-054	12	S119	理3層	7998	素材	玉髓質	1.45	0.95	0.70	—	1.60	
43	HBTL-037	12	S124	理1層	7068	素材	不明	1.75	1.00	0.65	—	2.00(石英のような乳白色の外見	
44	HBTL-036	12	S127	理1層	9033	素材	玉髓質	1.85	1.60	0.80	2.40と同種	—	
45	HBTL-038	12	S130	中間ベルト理1層-1d層	—	素材(側面)	玉髓	1.40	0.80	0.50	0.60	オニックスのよう平滑	
46	HBTL-053	12	S132	内ベルト理2層-1d層	—	素材	石英質	1.65	0.90	0.75	—	1.40	
47	HBTL-039	12	S132	北西 理1層	—	素材	玉髓質	2.90	1.80	1.45	—	9.70	
48	HBTL-040	12	S132	北西 理1層-1d層	—	素材	玉髓質	1.70	0.95	0.90	—	1.20	
49	HBTL-041	12	—	514G	1c層	6944	素材	玉髓質	1.55	1.00	0.75	—	1.40
50	HBTL-042	12	—	514G	1c層	6945	素材	玉髓質	1.60	1.40	1.30	—	2.20

No.	分析番号	出土位置			点上:TNs	種類	石材	法線(cm)			重さ(g)	備考	
		調査区	道標順号	グリッド				長さ	幅・径	厚さ			
51	HBTL-043	14	S48		理8層	—	木材	石英質	1.70	1.30	1.10	2.40	石英のような乳白色の外見
52	HBTL-044	14	S51		理2層	—	木材	石英質	1.50	1.00	0.90	1.70	石英のような乳白色の外見
53	HBTL-045	14	S51		理2層	—	木材	玉髓質	1.40	1.10	0.90	1.60	
54	HBTL-046	14	S54		理2層	—	木材	凹凸か	2.70	1.50	0.70	3.60	斑状・斜状
55	HBTL-047	14	S54		理2層	10639	木材	玉髓質	1.60	1.40	0.80	2.90	
56	HBTL-048	14	S55		理2層	—	木材	玉髓質	1.50	1.55	1.10	3.10	灰水色の小円錐
57	HBTL-049	14		533G	1b層	—	木材	玉髓質	1.80	1.10	0.80	2.10	褐色の小圓錐
58	HBTL-050	14		543G	1c層-1g	—	木材(樹皮)	玉髓質	1.30	1.00	0.55	0.60	
59	HBTL-052	17	S27		理4層	13246	小木	滑G	0.80	0.80	0.50	0.32	0.70
60	HBTL-051	19	SK680374f0		理1層	12874	切子玉	水晶	2.25	1.60	1.55	0.15	6.50



図版1 幅・津留遺跡出土石製玉類の加工痕

幅・津留遺跡出土鉄製品の検討

鄭宗鎬、村上恭通

チョン・ジョンホ、愛媛大学大学院

むらかみ・やすゆき、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

はじめに

幅・津留遺跡では総20区の遺構、包含層より総数813点の鉄器と40点の鉄滓が出土した。うち鉄器は、竪穴建物(SI)61棟から719点、条溝(SD、SX)5条から68点、土壙墓(ST)23基から29点が検出された。また、包含層から鉄器159点、鉄滓29点が検出された。ここでは、弥生時代の鉄製品として664点、古代以降の鉄製品として8点、弥生時代の鉄滓1点、古代以降の鉄滓16点を図示して報告する。

また、幅・津留遺跡の弥生時代の鉄器の特徴を抽出し、阿蘇カルデラ内の北半にある阿蘇谷の遺跡群、阿蘇カルデラ外の遺跡群と比較する。そのなかで、鉄器、砥石等の遺物と攻玉、鍛冶等、専業性が高いと考えられている活動についても検討を加え、南郷谷の幅・津留遺跡における弥生時代鉄製品の特質を記述していく。

1 出土した鉄製品

弥生時代の鉄器は、遺跡東部(すなわち津留地区)の12~17区、19区、20区の竪穴建物から多くが出土している。うち鍛冶遺構は14区に3棟(SI48、52、55)、その東の15区西端に1棟(SI43)ある。道路幅の細長い調査区のなかで、東西40mの範囲で連なっている状況である。SI48は51点の鉄器、鉄片類を出土しているが、他の鍛冶遺構では鉄関係遺物の出土量が少ない。また、この鍛冶遺構群を東西からはさむように攻玉遺構が4棟発見されている。12区にSI32、17区にSI72、SI74、19区にSI80があり、各工房では鉄器14点、51点、5点、44点が検出された。攻玉遺構特有の小型鉄器が多く、阿蘇地域で初めて発見された攻玉用鉄器群として注目される。土壙墓出土鉄器は遺跡西部の幅地区(1区、2区)での出土量が多く、20基から27点が検出された。他方、津留地区では9区、12区で各1点である。ST92で5点、ST183で3点、ST153、163でそれぞれ2点出土している以外は、全て1点の出土である。幅地区では東西に長く広がる墓域のなかでも1区と2区の境に鉄器出土墓が集中している。鉄器は小型鉗、針を除く

と器種を確定できない破片が多い。以上のように用途が明確な遺構以外にも多数の鉄器が出土した竪穴建物がある。20点以上の鉄器が検出された竪穴建物はSI13(25点)、SI15(25点)、SI30(48点)、SI51(35点)、SI69(29点)があげられる。これらのなかには小型刀子、鉗、尖端工具を豊富に有する遺構もある(SI13、30、51)。

古墳時代以降の鉄器は、遺構から検出された資料が少なく、多くは包含層から出土している。これらは弥生時代の鉄器と比較すると、劣化の状態が異なり、鍛造品であっても細かい亀裂が無数に走り、針状に崩壊する例が少なくない。ちなみに弥生時代の鉄器の遺存状態は、阿蘇谷地域の遺跡に比較して鉄分の溶脱が著しく、クリーニングの際に錆と鉄地との境が曖昧であったり、鉄地直下が空洞になっている例も多く存在した。これは阿蘇谷の土壙が褐鉄鉱を豊富に含みかつ保水性に優れているという、鉄器を包含した環境の差異による現象なのかもしれない。

弥生時代の鉄製品は、鉄器は鉄鏃(無茎鏃・有茎鏃)、斧・鑿、刀子、鉗、穿孔具を含む尖端工具、棒状鉄器、船底形鉄器、方形板鰐先、鎌、摘鎌、鉄器生産に伴う副産物は各種鉄片、鉄塊、鉄滓がある。古代以降の鉄製品には、鉄鏃、刀子、楔、釘、鉄滓がある。

2 弥生時代の鉄器

2-1 鉄鏃(無茎鏃)

無茎鏃は三角形鏃を主体とし、わずかに五角形鏃が認められ、両者の中間的な形態を呈する例もある。いずれにも平基、凹基があり、全長1~5.3cm、幅0.8~3.1cmと大きさにも多様性がある。全長2cm以下を小型品、2~3cmを中型品、3cm以上を大型品とすると、三角形鏃には大型・中型・小型があり、五角形鏃には大型品がない。また平基鏃は小型品にしかない。

三角形鏃 RM1~3、5、7は平基三角形鏃である。最小のRM1、3の刃部は直線であり、RM2、5、7の刃部はわずかに曲線をえがく。RM7は中軸に根拠みあるいは矢柄の痕跡を両面に残している。RM6、10、

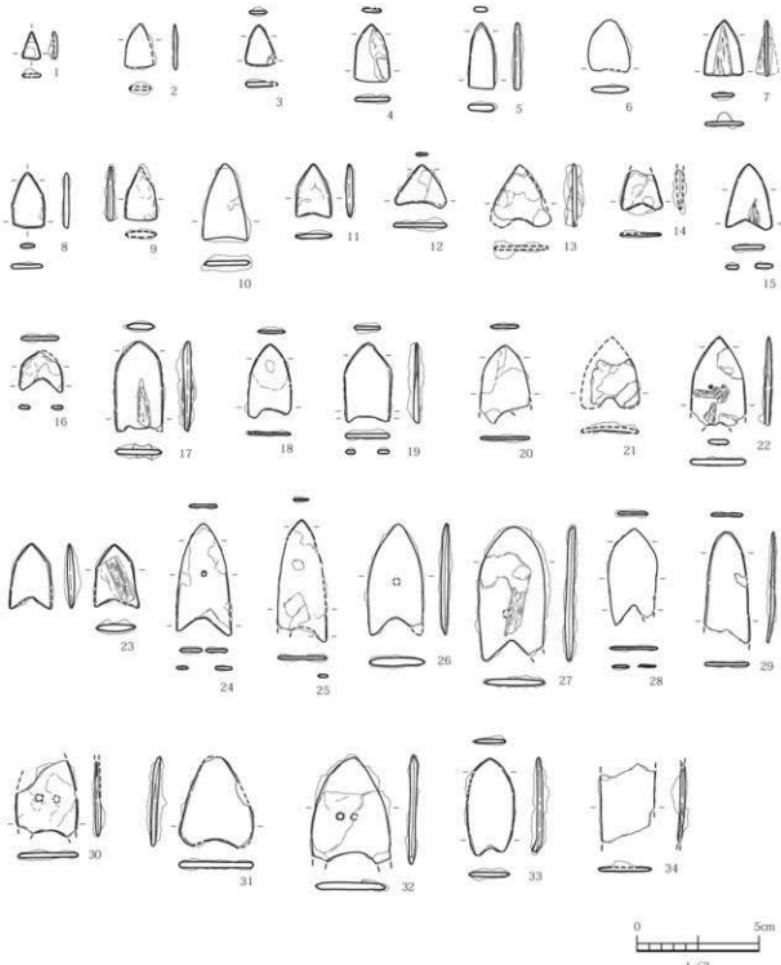


図1 無茎鉄鎌実測図

12～15、17、18、20、21、24～33は凹基三角形鎌である。RM12、13が幅広である以外は、全長に対して幅の狭い縱長を呈する。RM10、12、13～15、18のように小型、中型品の基部の抉りは浅く、弧状あるいは三角形である。大型品は両側縁が平行で、ふくらのある鋒をもつ17を除くと、鋒から基部まで刃部が曲線を呈する。抉りの形状はRM24が台形、

RM25、30～32が弧状、RM26、27、29が三角形である。大型品のうち、RM24～27、30、32は根挿みあるいは矢柄の緊縛孔をもち、RM24、26は中軸上に一孔、RM30、32は二孔を穿つ。RM27はソフトX線写真により、中軸よりずれて位置する一孔を確認した。

五角形鎌 RM16、19、22は凹基五角形鎌である。

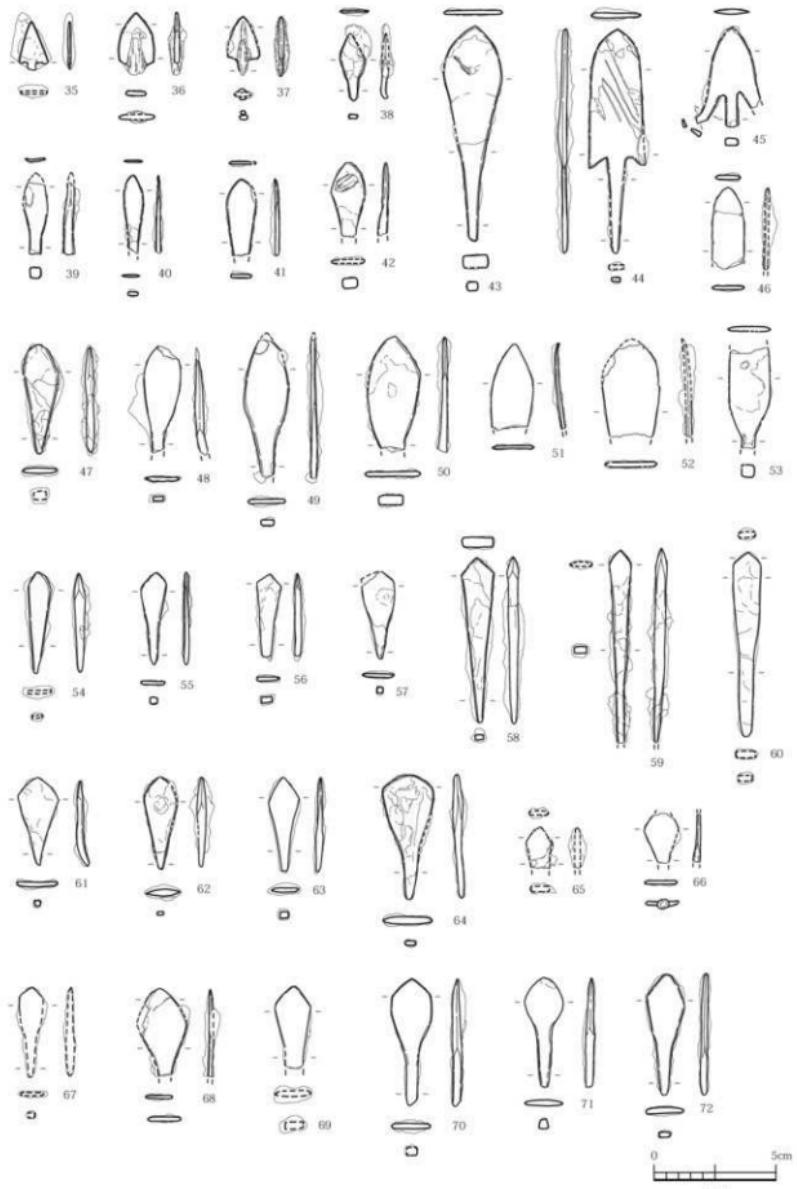


图 2 有茎铁燧实测图

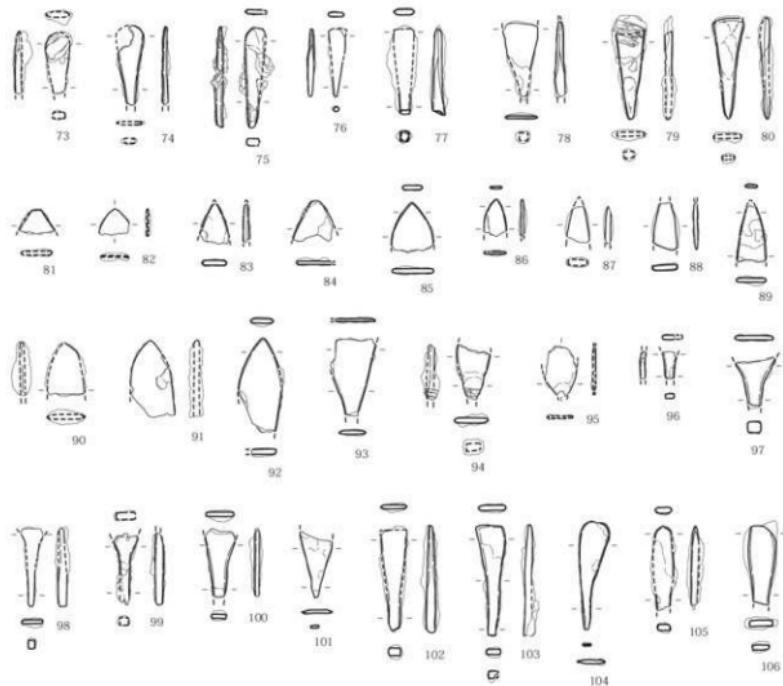


図3 鉄礫片実測図

RM16は幅広で、全長に対して深い三角形の抉りをもち、RM19は浅い弧状の抉りを有する。RM22は弧状の抉りをもち、鐵身の中位に横位に並ぶ二孔がある。その他 RM4、8、9、11、23は中軸に対して非対称形で、三角形鐵、五角形鐵の中間的な形態を呈する。一側縁は緩やかな弧状であるのに対し、他方は鋒から側縁にかけてわずかに屈曲している。RM28は最大幅を鋒よりもち、基部に向けて緩やかにすぼまっている。RM33は柳葉系を呈し、最大幅を鐵身の中位にもち、三角形の浅い抉りがある。なお RM81～91は鋒部の破片であるが、無茎鐵、有茎鐵いずれの破片であるかは判断できない。

2-2 鉄鐵（有茎鐵）

有茎鐵は鐵身が三角形、柳葉形、圭頭形、圓頭形の4種類があり、莖部は薄い短莖（RM35～37）を除くと全て長莖である。長莖鐵はRM44、45の2点が閑部に脇抉をもつ以外は無闇が多く、わずかになで閑が認められる。

短莖鐵 RM35、37は鐵身が三角形であり、RM36は三角形と五角形の中間的な形態をもつ。いずれも鐵身と莖部の厚みは同じである。RM35は直線的な刃部をもち、RM37はわずかに弧状を呈する刃部を有する。RM36、37は両面に中軸上に根拠みもしくは矢柄の木質の痕跡を遺す。

長莖鐵 鐵身はRM39～42、46～53、92、94、

95、105が柳葉形、RM44、45が三角形、RM38、54～72が主頭形、RM73～75が方頭形ないしは円頭形を呈する。関部は三角形鐵が脇抉をもち、柳葉鐵のRM53、主頭鐵のRM71がナデ関である以外は無関である。

柳葉鐵 鐵身の形態が多様であり、左右非対称形も少なくない。RM39～42は鐵身長が3cm未満、それ以外は3cm以上の鐵身をもつ。RM43は完形品であり、鐵身は鋒によりに最大幅をもち、茎部はわずかに幅を減じながら端部にいたる。鐵身と茎部の厚みの差は明確である。RM39、42、50、53も鐵身と茎部の厚みに較差がある。RM49はほぼ完形品であり、左右がやや非対称形であり、鐵身と茎部の厚みはほぼ同じである。身と茎の厚みの差という点ではRM40、41、48も同様である。

三角形鐵 RM44は鐵身が長三角形を呈し、関部に脇抉をもち、わずかに先がすぼまる長い茎部を有する。RM45は脇抉が外反しながら長く伸び、その端部を四角く收めている。いずれも鐵身と茎部の厚みはほぼ同じである。

主頭鐵 主頭鐵は鐵身部の形態、幅が多様であり、鋒部を除くと鐵身部と茎部の厚みはほぼ同じである。RM54～56、58～60は細身で、鋒が短い。RM61～63は長さに対してやや幅広である。RM54～64は鋒のみに刃部を有し、RM68、70～72は鋒から関部まで刃部を有している。RM101は鐵身上半部を欠いている。

円頭鐵 RM73～75は鐵身、茎部の形態がほぼ主頭鐵と同じであるが、刃部が弧状を描いている。

その他 RM76、77、79、80、102～104は茎部の形態がほぼ主頭鐵と同じであり、刃部が直線を呈する。一見、方頭鐵のようにもみえる。前者は茎部の断面形が円形で、後者は極端に厚くなっている。RM102、103はそれぞれ鍛治構のSI55、SI48から出土しており、主頭鐵の未製品とも考えられる。また、のちに説明する平刀の鑄の可能性もある。RM96～100は長茎鐵の関から茎部にかけての破片である。RM106は円頭とも評価できるが、左右非対称形である。

2-3 斧・鑿

袋状斧・鑿 RM107～110は斧であり、膝柄を装着して、横斧として使用されたと考えられる。RM107は袋幅より刃部幅がわずかに広く、刃部は弧刃である。袋端部は8mmほど外側に折り曲げられており、段が見えないほどに圧着し、袋部の強化が図られている。袋部の横断面は梢円形を呈している。折り返し部は左右非対称であり、4mm離れている。袋部から刃部に向けてやや厚みを増しているが、明確な段は認められない。RM108は一側縁が中位でやや広がり、袋部幅より刃部幅がやや広い。刃部は一部を欠いているが、直刃と推測される。袋の折曲げは短く、その端縁は8mm離れている。袋部の横断面形は隅丸方形である。袋部と刃部の厚みはそれぞれ2mm、4mmであり、厚みの差はわずかである。RM109は刃部を欠いており、袋部は基部から刃部に向けてわずかに広がっている。袋部はほぼ左右対称に丁寧に折り曲げられており、端縁は4mm離れている。袋部の横断面は略長方形を呈する。RM110は刃部を欠いている。袋端部は7mmほど外側に折り曲げられており、107に比べれば圧着しておらず、明瞭な段をのこす。折り返し部は非対称であり、その端縁は8mm離れている。袋部の横断面は梢円形を呈する。RM111は形状が袋状斧と同形であるが、全長2.8cm、刃幅1.9cmと小型であり、直柄を装着して平衡のように使用されたと考えられる。袋端部から刃部に向けてわずかに広がり、刃は直刃である。袋部の折り返しは基部で短く、刃部で長くなってしまい、その下端は刃部に密着している。刃部は錆ぶくれのために厚みを増しているが、旧状は袋部の厚みとほぼ同じであったと推測される。ソフトX線調査では袋端部から約6mmの幅で帯状の影がみられるが、折り返しであるかどうかの判断は困難である。RM112は袋部を有する小型の工具であり、刃部は身に対して斜めにのこる。棒状の直柄を装着して、刀子に近い切削具であったと考えられる。RM113は袋状壁であり、刃部は薄い直刃（平刃）が想定される。袋部の下端から刃部に向けてわずかに幅を減じておらず、袋部の厚みはほぼ同じである。袋部はその端縁が密着しており、断面形が長方形を呈し、丁寧な作りであ

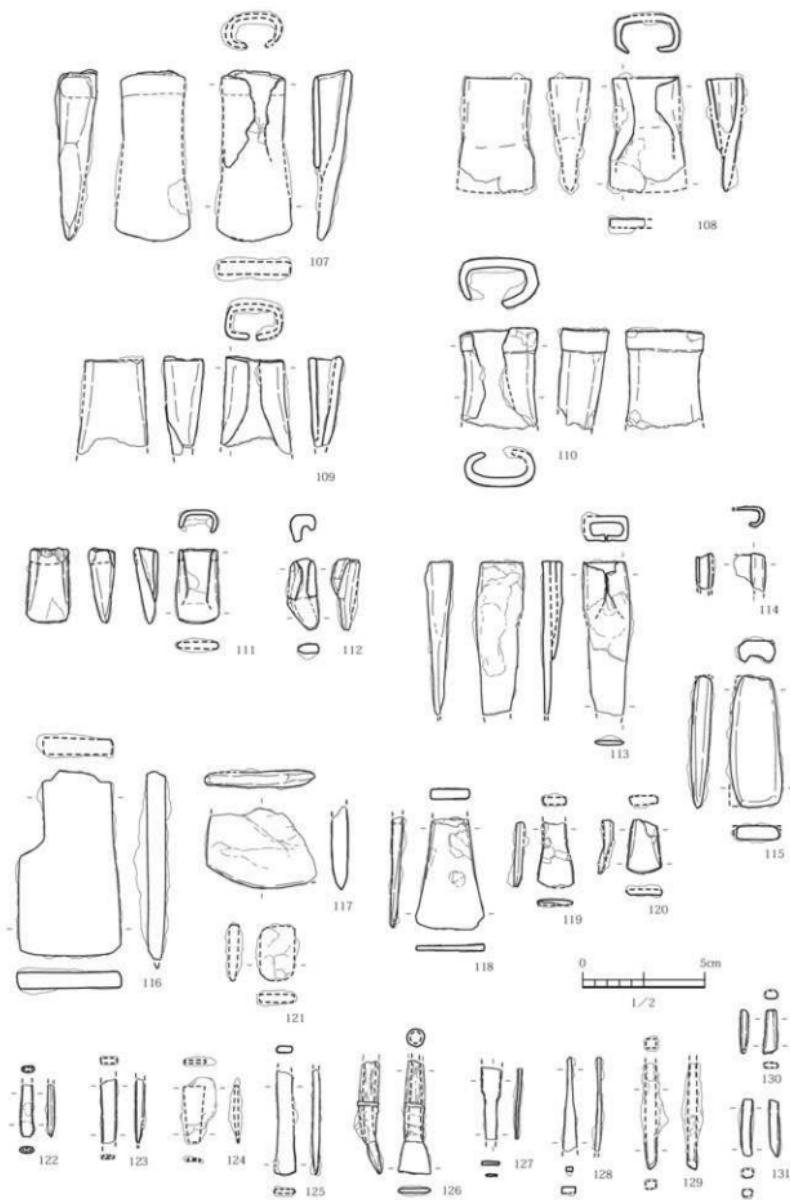


図4 鉄斧・鑿実測図

る。RM114は袋部の折り返し部の破片である。折り返し部の長さが摘鍬よりも短いため、RM111のような小型工具の破片とみているが、摘鍬の可能性もある。RM117は弧刃をもつ刃部の破片である。刃先に向けてやや広がりをみせ、刃幅は約5cmに復元される。熊本県内ではこのような刃部をもつ板状斧は確認されておらず、また山鹿市方保田東原遺跡や嘉島町二子塚遺跡出土の類例から袋状斧の刃部片と考えられる。旧状はRM107～110よりも大型の袋状斧が想定できる。ただし、刃部の厚みに欠けるのが通例である。板状斧・鑿 RM115は基端部より刃部がやや広く、また基端部をわずかに湾曲させている。RM116は一側縁にのみ肩部を有する板状鉄斧である。刃部は片刃であり、刃縁をわずかに欠いている。厚みが7～8mmと厚く、幅・津留遺跡出土鉄器のなかで最も厚みのある鉄器である。舶載の板状鉄斧を作りかえた可能性も考えられる。RM118は基部から刃部に欠けて撥状に広がっており、基端部を欠いている。RM119はRM118の小型品であり、基端部を欠いている。RM120、121はさらに小型の板状鉄器であり、いずれも弧刃を有する。RM119～121は直柄を装着して鑿として使用されたと考えられるが、RM118は横斧、鑿のいずれの用法であったのか判断ができない。RM122～131は細い板状あるいは棒状の素材に、そのまま刃を付けたり、やや端部を広げて刃を施した小型鉄器であり、彫刻刀でいえば平刀のような用法が想定される。RM122～125は薄い長条形の鉄板に刃部を備えている。RM127、128は茎部が形成されている。いずれも刃部を欠いているが、同市内の下扇原・小野原遺跡出土に薄い平刃をもつ類例があり、鑿状の工具であると推測される。RM129～131は細い角棒の先端に片刃が施されている。下扇原・小野原遺跡では木柄に装着された状態で同様の鉄器が出土しており、平刀のような機能を想定できる。RM126は木柄、口巻をのこす鉄製品である。台形状の身に茎部を有し、身と茎の境で緩やかに湾曲している。方頭有茎鍬の可能性もあるが、刃が偏刃になっていること、またこの型式の鉄鎌が幅・津留遺跡や周辺遺跡では存在しないことなどから、あえて工具として報告する。

2.4 刀子

刀子は形状、大きさ、厚みのいずれをとっても多様である。とくに阿蘇地域あるいは熊本県内でこれまで出土した刀子と比較すると、小型品が多い点が注目される。完形品の測定値によれば、無茎刀子の最小品の全長が2.2cm (RM171)、有茎刀子の最小品の全長が3.3cm (RM140)、最大品の全長が15.5cmを測る (RM157)。また半月形、三角形などの薄い鉄片の一長辺に刃を設けた例も多く、これも刀子として取りあげる。

RM132、140、141、144、145、165、171は完形で4cm未満の小型刀子であり、RM132、140、141、144、165、171が有茎、RM145が無茎である。RM132は反りがなく、ふくらの枯れた鋒と角闘をもち、鋒から間に向けて細くなる。茎の端部は四角くおさめられている。RM140、165は三角形の鋒をもち、棟に反りがなく、それぞれナデ闘、角闘をもつ。茎の端部はそれぞれ四角、三角におさめている。RM141も三角形の鋒をもち、棟は反りがなく、弧状の刃部はそのまま直線上に茎にいたる。RM144はやや反りがあり、ふくらの付いた長い鋒、直線的な刃部とナデ闘をもつ。茎にはそれと平行した目をもつ木質が付着している。RM145はやや反りをもち、ふくらの枯れた鋒は身の中程までおよんでいる。身は幅を減じながら四角い端部にいたる。RM171は三角形の鋒をもち、棟、刃ともにわずかに湾曲している。身と茎の境にはわずかに段差が認められ、茎端部に向けて細くなる。RM133、135、137～139、142、143、146～149、178は復元長が4cm以下となる刀子である。RM133、135は反りがなく、鋒の長い細身の刀子である。RM137～139、142、143、146は反りがなく、長い鋒は最大幅の身の中程までおよび、そのまま茎端部に向けてすぼまる。先に説明したRM144、145も棟の形状を除けば同様の形態であり、この遺跡における小型刀子の特質である。RM178はソフトX線撮影の結果、ふくらの付いた鋒と角闘をもつ有茎刀子であることがわかった。このほか棟に反りがなく、弧刃のRM148、多角形の短い刃身をもつRM149、全体形が杏仁形のRM166、茎が刃部側に屈曲するRM167、

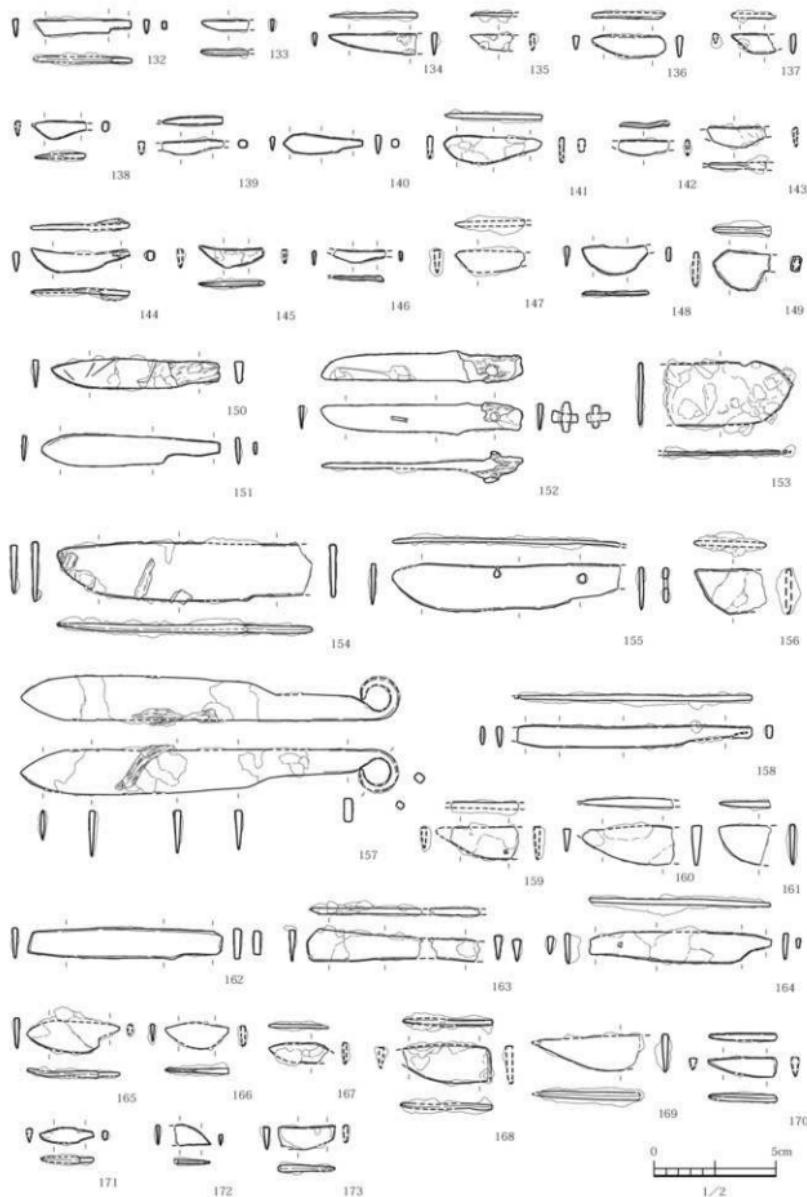


図5 刀子実測図 (1)

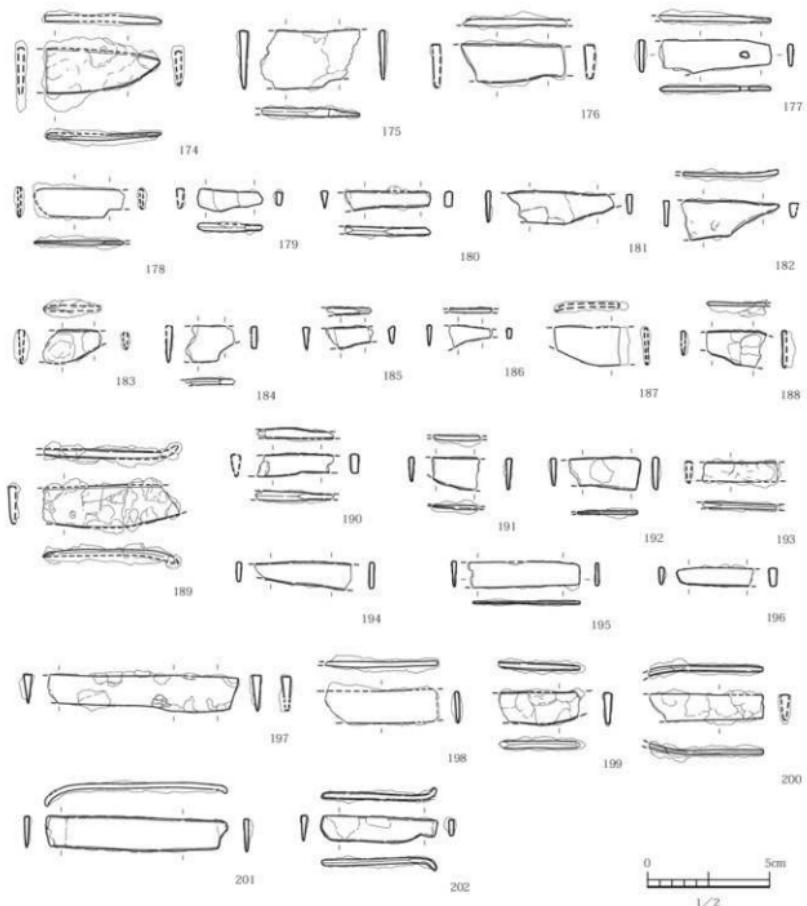


図6 刀子実測図（2）

棟が弧状を呈し、直刃をもつRM172などがある。また三角形の鉄板の長辺に刃部をもつRM168、170、長条形の鉄板に刃を設けたRM173も刀子に類する刃器としてあげておく。

RM150～152、162、164は全長が4cm以上、10cm未満の刀子である。RM150、151は三角形の鋒をもち、それぞれナデ闇、角闇を有する有茎刀子である。RM150は茎部に木質をのこし、その木質の方向は茎の軸とやや斜交している。RM152はふくらの付いた鋒と尖った両闇をもち、茎には有機質素材

の目釘と柄の木質を残している。RM162は刀身の端部が方形であり、浅い角闇をもつ。身の関部付近は断面形が方形を呈する。RM164も刀身の端部が不整形を呈し、刀身の長さに比して茎部が短い。闇はナデ闇である。RM134の鋒片はこのサイズの刀子片と考えられる。

RM154、155、157、158は全長10cm以上の刀子である。RM154はふくらの付いた鋒をもつ反りのない幅広の有茎刀子であり、茎端部を欠損する。現存長は10.4cm、身幅が2.5cm、茎幅が2.2cmを測り、

浅い角闘がある。RM155 もふくらの付いた鋒とナデ闘をもち、わずかに反りのある薄手の有茎刀子であり、茎端部を欠損する。現存長は 9.4cm であり、身幅が 2.0cm、茎幅が 1.6cm を測る。刃部には使用痕と思われるわずかな湾入が認められる。棟に接する箇所と茎部に二つの穿孔がある。素材である鉄板の薄さと穿孔のあり方から摘鑑を再利用したものと判断される。RM157 は鋒が両刃作りの素環頭刀子である。全長 15.5cm、刃身長 9.8cm を測り、鋒の長さは 2cm である。闘はナデ闘であり、1.2cm 幅の茎端部を 4mm 幅で鍛延し、ほぼ正円形に環頭を形成している。茎端部は細く尖っており、茎には密着していない。RM158 は現存長 9.7cm、刃幅 8mm、茎幅 4mm の細身の有茎刀子であり、鋒を欠く。棟に反りはなく、闘はナデ闘である。茎端部を細く鍛延し、下方に折り曲げて茎に密着させ、最終的に茎端部を方形におさめている。ソフト X 線写真の観察の結果、密着部にはわずかに空隙が認められる。素環頭の形成を意識したつくりなのか、端部を方形におさめることが意識された結果なのかは判断できない。このほか鋒片である RM153、159、160、161、169、174 と刃身部である RM163、197 は全長 10cm 以上となる刀子の破片と考えられる。RM153 はその幅と薄さから RM155 と同じく摘鑑の再利用品か摘鑑用の素材を用いて製作されたものと判断される。また闘部をのこす RM175、176、莖部に穿孔をもつ RM177 もこの大きさに属するものと推測される。このほか刀子の各部位の破片が出土している (RM178 ~ 196、198 ~ 202)。RM189、200 は身がわずかに湾曲しており、RM201、202 は端部を折り曲げている。

なお RM137 の小型刀子と RM194 はそれぞれ攻玉道構 SI80 と SI72 から出土している。RM149、150、162、166 は鍛治道構 SI48、RM164、196 は鍛治道構 SI43 から出土している。RM135 は土壌墓 ST167 から出土した。

2-5 鉈

鉈は完形品による限り、鋒から基端部まで裏すきをもっているが、破片資料によれば基端部付近が平板である例、鋒付近のみに裏すきをもち、身が平板である

例や全体に裏すきのない例も認められる。

RM203 は完形品であり、全長 14.8cm、幅 1.6cm を測り、鋒の中軸上に鍋が認められる。RM204 はわずかに鋒を欠き、現存長 9.8cm、幅 1.2cm である。RM205 は完形品であり、全長 9.2cm、幅 1.3cm である。鋒はわずかに沿っており、その表面には「人」字状の鍋が認められ、裏すき側には木柄が残存している。鋒部がおよばない身部の断面は徐々に裏すきを失い、基端部付近ではほぼ平板となっており、熊本県域ではきわめて希な例である。RM207、208 も完形品であり、鋒から基端部にまで裏すきを有する。それぞれ全長が 7.2cm、7cm、幅が 1.5cm である。RM207 の先端部は使用によって裏すきの棱が消えるほど薄くなっている。先端も丸くなっている。

破片資料によると、裏すきを有する鉈のなかには RM220、221 のように幅が 9mm ~ 1cm の細身を呈する例があり、いずれも鋒付近は平板である。222、223 は幅それぞれ 7mm、6mm とさらに細身であり、身は鋒付近も平板である。これらは鋒にわずかな反りが認められる。

なお攻玉道構出土品は RM204 (SI72)、RM214、230 (SI80)、RM229 (SI32) であり鍛治道構出土品は RM207、210 (SI55)、RM208、225 (SI48) である。RM223 は土壌墓 ST101 から出土した。

2-6 尖端工具

一端あるいは両端が尖った細い棒状工具、角錐状の鉄器や先端を有する多様な形態の鉄器を尖端工具として報告する。RM231 ~ 254 はその代表的な鉄器であり、原寸で示した。

RM231 ~ 234 は全長 1 ~ 1.3cm、幅 1 ~ 2mm の錐である。RM231、234 は身の中央部付近に最大幅があり、RM232、233 は頭部に最大幅をもつ。RM235 は木柄に装着された状態で出土した錐であり、現存長 1.5cm、直線的な鉄の身は幅 1.5mm を測る。木柄は断面円形であり、直径 4mm である。RM236 ~ 238 のような鉄の身が装着されたと考えられる。RM230 ~ 244 は最大の幅、厚みが 3 ~ 4mm の棒状鉄器が素材となっている。RM239 は最大幅を身の中程にもち、両端が尖っており、RM240、242 は頭部

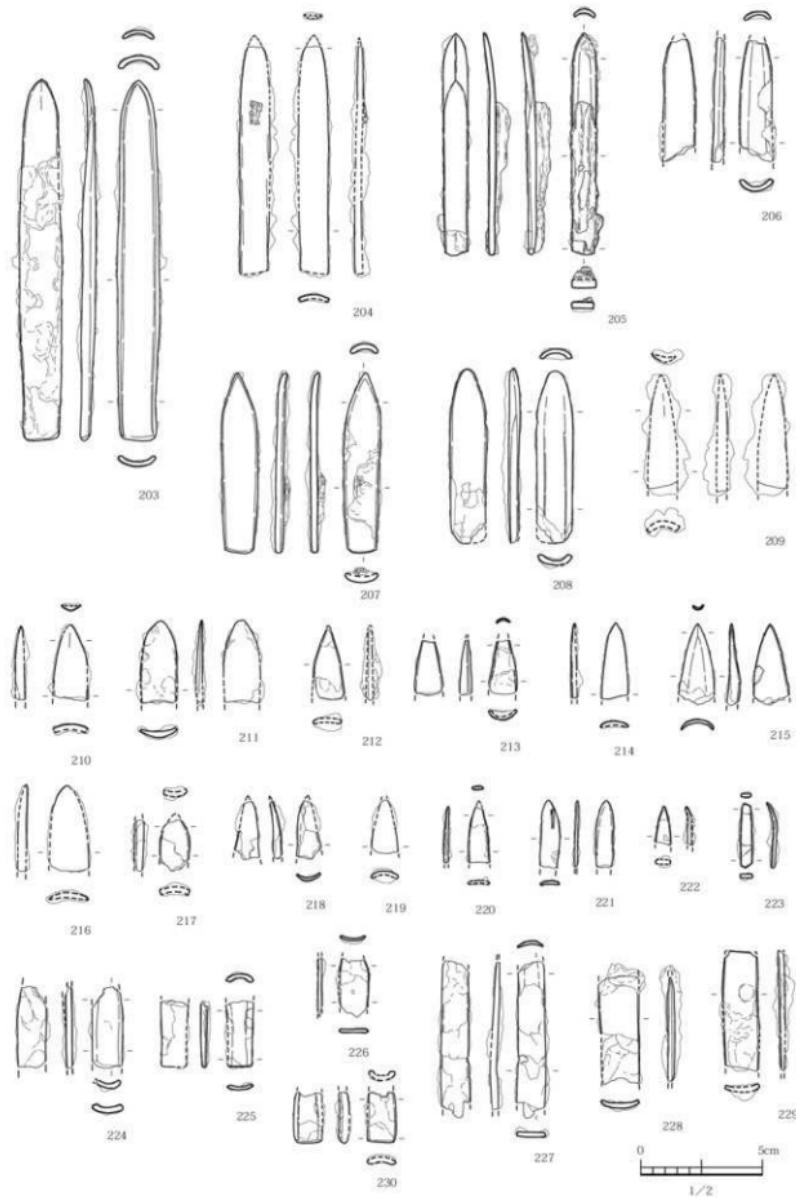


図7 鉱実測図

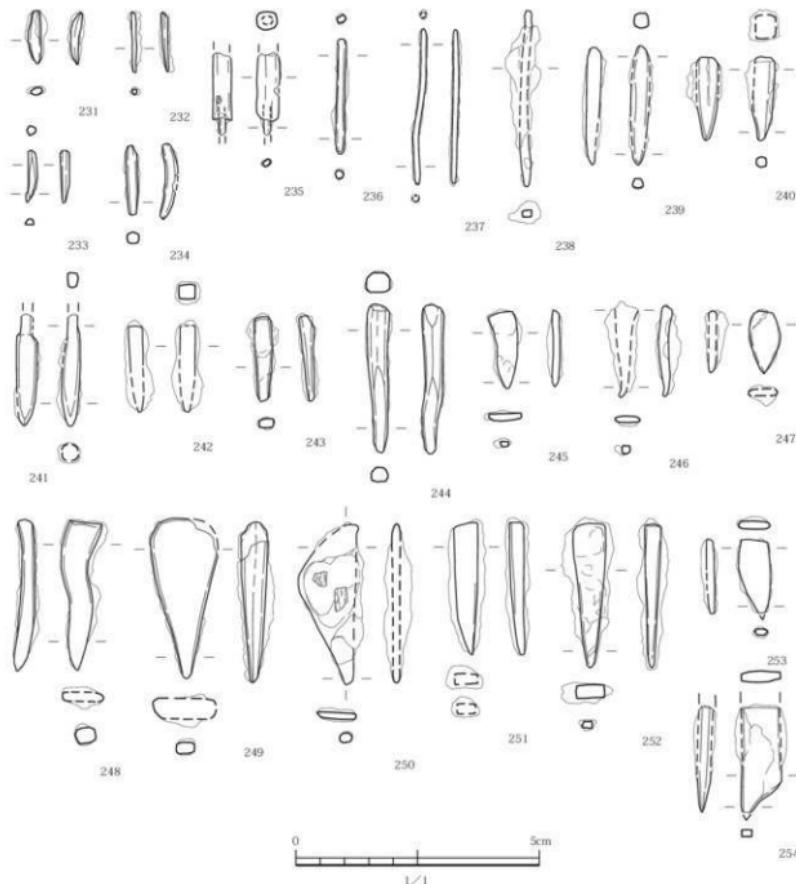


図8 尖端工具実測図(1)

に最大幅をもち角錐状を呈する。RM241のように茎部を有する例もある。RM243は頭部に最大の幅と厚みをもち、RM244は頭部から先端にかけて徐々にせばまり、使用痕跡と思われる尖端付近の湾曲が観察される。以上の工具は角棒を素材として加工されている。RM232は攻玉遺構SI72、RM235、239も同じく攻玉遺構のSI80から出土している。

一方、RM245～254は身が板状で、先端部をもつ以外は大きさ、形状ともに多様である。攻玉遺構

SI80から出土したRM249や攻玉遺構SI74から出土したRM252は方頭の有茎鐵と評価される可能性があるが、側面の形状や頭部の厚みが鐵とは異なっている。また左右非対称形の身に尖端を施した例がRM245、248、250、251、253、254である。これらのうちRM245は攻玉遺構SI32、RM251は攻玉遺構SI72の出土である。RM250は鐵器生産の際に生成される三角形鉄片を素材としたものと考えられ、端部の断面は円形を呈している。

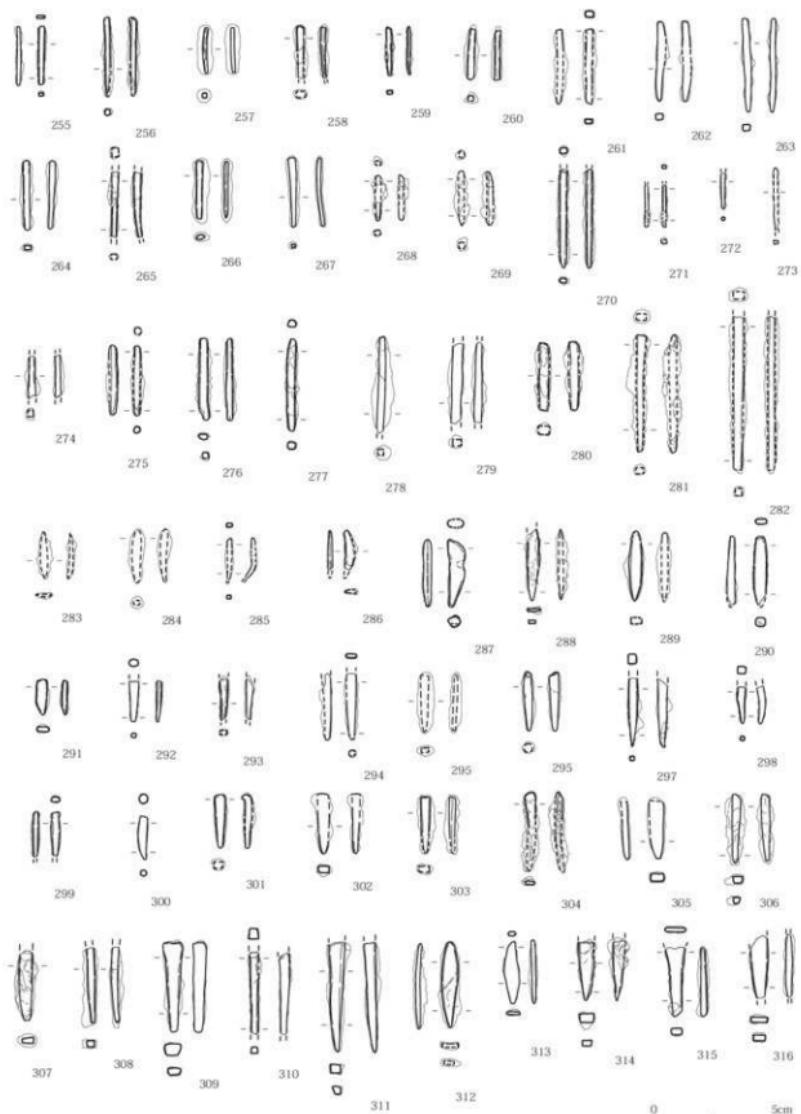


図9 尖端工具実測図(2)

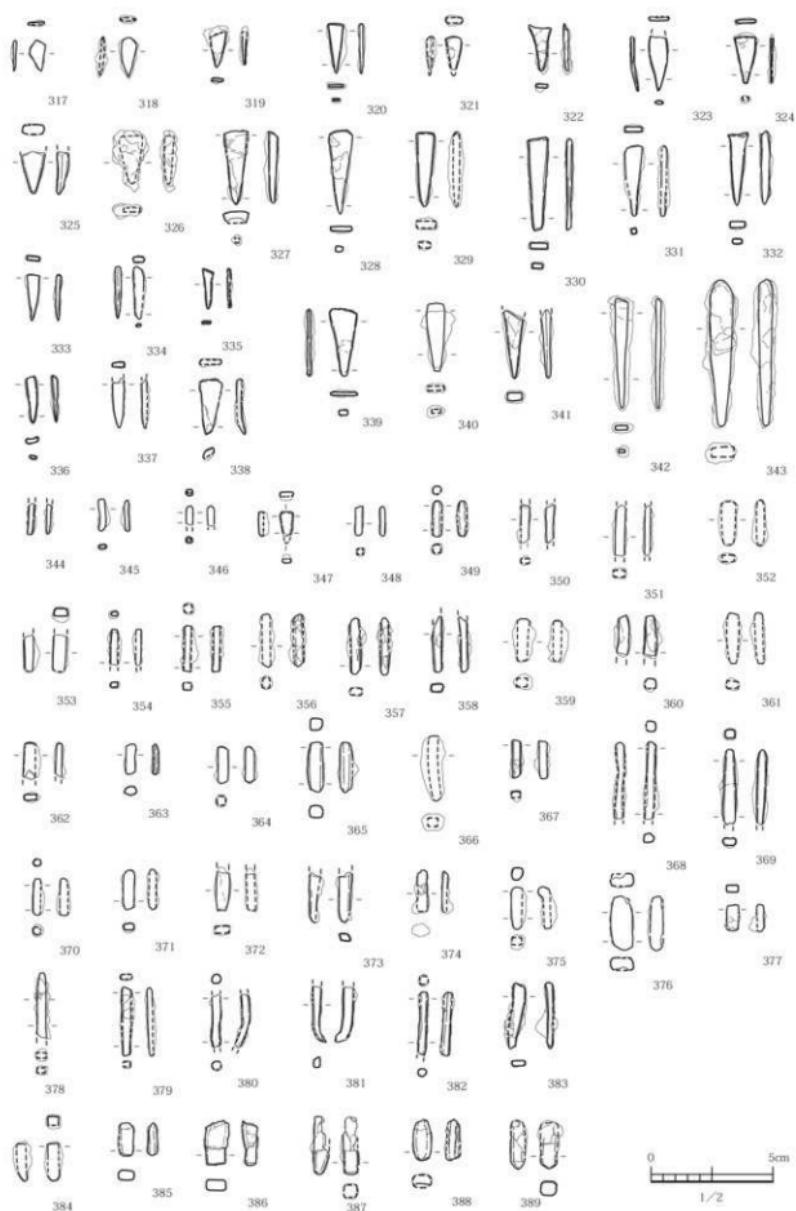


图 10 尖端工具・棒状铁器実測図

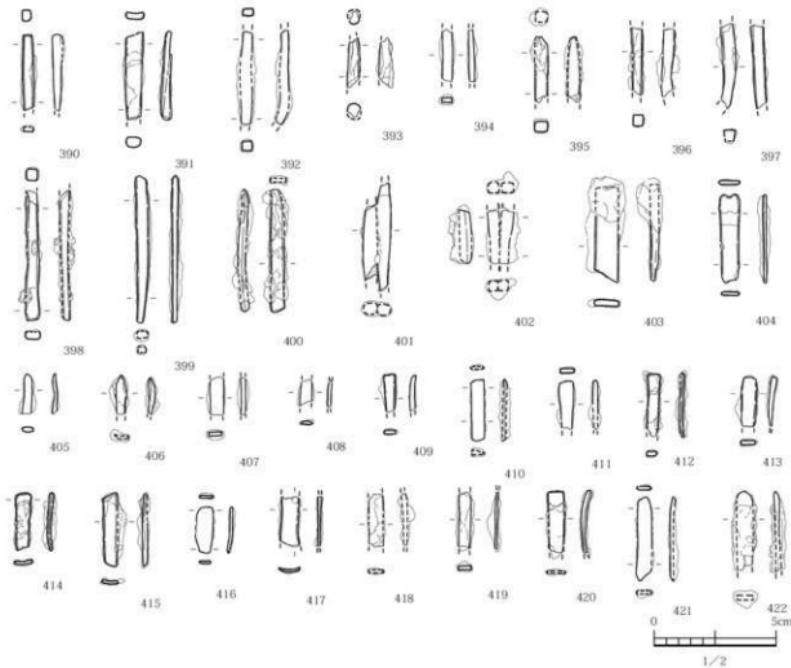


図11 棒状・長条形板状鉄器実測図

このように多様な尖端を有する工具がRM255～343であり、その破片がRM344～422である。これらのなかで攻玉造構から出土した鉄器は、RM249、260～262、286、309、317、321、338、342、346、347、379、389、394、405、407、421（以上、SI80）、RM263、277、292、294、299、313、359、362、370、371（以上、SI72）、RM311、328、365、417（以上、SI74）、RM285、305、384（SI32）である。また鍛冶造構から出土した鉄器はRM255、283、284、301、315、341、404、420（SI48）である。なおRM404～422の薄い長条形の鉄器については必ずしも尖端をもつとは限らない。RM414や417のように端部が湾曲し、すでに説明した薄刃の平刀状の鑿や小型鎌と同じような切削具である可能性も考えられる。

2-7 船底形鉄器

薄い鉄板の一側縁をわずかに折り曲げ、反対側の側縁に刃部を設ける鉄器である。RM423はその典型

例であり、長条形鉄板の長辺が折り曲げられている。これを船底形鉄器と呼んだが（村上2010）、幅・津留遺跡では短い例が多い。RM423、426は鍛冶造構SI48から出土した。

2-8 方形板鋤先

いずれも一方の袋部をのこす破片である。RM431～433は摩耗して、刃部が袋の下端部に接しており、鋤先としての機能を終えていたと考えられる。

2-9 鎌

RM435は完形の曲刃鎌であり、刃先は三角形状にすぼまる。RM436、437は折り返し部をのこす破片であり、RM437は折り返し部も折損してわずかにのこる程度である。RM438～441は小型鎌の身部の破片である。

2-10 摘鎌

RM442～450、452は完形品であり、その他はす

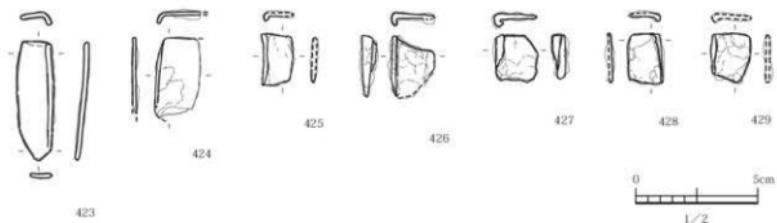


図 12 船底形鉄器実測図

べて一方の袋部をのこす破片である。最大は RM442 で全長 9.9cm、幅 3.0cm、最小は RM447 で全長 7.2cm、幅 2.7cm を測る。上辺は直線を呈するもの (RM443 ~ 446, 449, 452)、内湾するもの (RM442, 447, 450)、曲線を呈するもの (RM448) があり、素材の形状を表している。刃部は外湾するもの (RM442, 446)、ほぼ直線を呈するもの (RM444, 449) を除くと、曲線的である。刃部は RM443, 445 が左折り曲げ部により内湾が認められ、RM452 が左折り曲げ部付近から右折り曲げ部まで広く減り、RM447, 448, 450 が中央部付近が目減りしている。袋部は上部が木柄の装着のために空間を確保されているに対し、その叩き締めて身に密着している。

RM442 は木柄の遺存状態が良好であり、その長さが 9.9cm、幅 3.0cm を測る。袋部に板が 1.5cm 程度挿入されている。木柄は袋部の左右にも延びており、旧状はさらに大きかったと想定される。木柄は摘鑑の上辺付近に二つの穿孔をもち、4.8cm 離れている。これに対し、RM447 は摘鑑そのものに二つの穿孔があり、その距離は 3.0cm である。RM449 は袋内部全体にわたって木質が付着しており、木柄の挿入の深さが 1.1cm と推測される。このほか RM444, 445, 448 も袋部内にわずかな木質片が残存している。

なお、SI14 では 3 点の摘鑑 (RM443, 444, 449) が出土している。

3 弥生時代の副産物

3-1 三角形鉄片

三角形鉄片は、鉄器製作の際、盤で鉄板を切断する

際に生じる端切れである。図示した鉄片のうち、鍛冶構出土品は RM461 (SI52)、RM481 (SI48)、RM509 (SI43) であり、多くは攻玉構 (RM462, 472, 496 は SI80, RM463, 511 は SI74, RM507 は SI72 から出土) を含む他の遺構や包含層で出土している。三角形鉄片の再利用については二子塚遺跡、小野原遺跡群 (宮崎編 2010) の発掘調査報告書でその可能性がすでに指摘されているが、幅・津留遺跡はそれらを凌駕する量の三角形鉄片が一般の堅穴建物で検出されたこととなる。

三角形鉄片の形状は多様であり、角が一部切断されて四角形を呈するものや一辺が内湾あるいは外湾するものがある。また一端が折れ曲がったり、波打つ例もあり、尖端工具として前述した三角形鉄片のように再利用の痕跡を示す可能性がある。

RM458 は土壙墓 ST183、RM506 は ST121 より出土している。

3-2 鉄片および鉄塊

RM516 ~ 664 は、多様な形態の鉄片および不定形で厚みのある鉄塊である。これらのなかには、すでに説明した小型尖端工具に加えるべき鉄器もあり、RM518, 524, 525, 534 ~ 536, 554 などがそれに当たる。なお、RM550, 551, 556 なども小型の切削具の可能性がある。また、鍵状を呈する 576 ~ 578 は、そのうちの 2 点が攻玉構出土品であることからも特殊な小型工具であるとみられる (RM577 は SI32、RM578 は SI80 から出土)。

RM561 ~ 563 は鉄器生産時に生ずる又状鉄片という裁断片であるが、これらは通常の堅穴建物から

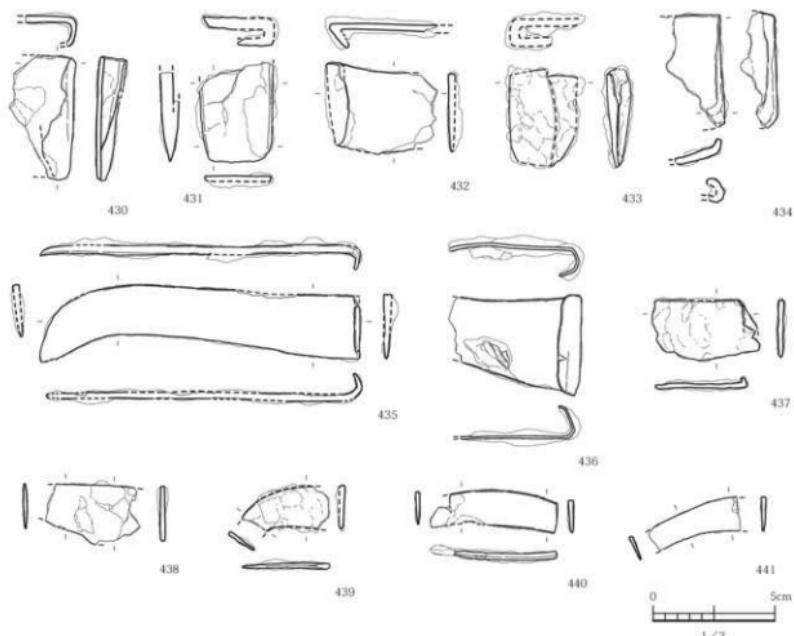


図13 方形板鋸先・鉄鎌実測図

の出土である (RM561はSI42、RM562はSI15、RM563はSI24から出土)。このほかにも切断されたと考えられた縁をもち、多角形を呈する鉄片が多数認められる。またRM566、601のような大型の鉄板やRM592、593のような長条形の鉄板は鉄器製作時の素材とも考えられる。RM598～600は鉄塊である。RM598、599はSI54、RM600はSI23で検出されているが、これらの遺構は鍛冶遺構の集中する空間にあり、鉄素材として考える余地を高める。

RM602～664は薄板状の鉄片で、その形態は長条形、多角形、不整形とさまざまである。

この他、攻玉遺構のSI72からRM543、544、549、550、SI74からRM636、643が出土した。また、鍛冶遺構のSI48からRM520、531、565、587、

SI43からRM559が出土した。なお、土壙墓からも鉄片が出土しており、RM519(ST243)、RM553(ST157)、RM585(ST183)、RM630(ST153)がある。

4 古代以降の鉄製品

4.1 鉄器

古代以降と判断された鉄器は、出土後崩壊し、細片化したものが多い。その中でRM665～672は団化できた鉄器である。RM665は有頭の柳葉式鉄鎌である。頭部は断面が長方形を呈し、台形闇をもっており、茎部の断面はほぼ正方形である。RM666も有茎式鉄鎌の鎌身から頭部にかけての破片であるが小片であり、詳細は不明である。RM667は両闇式の刀子であ

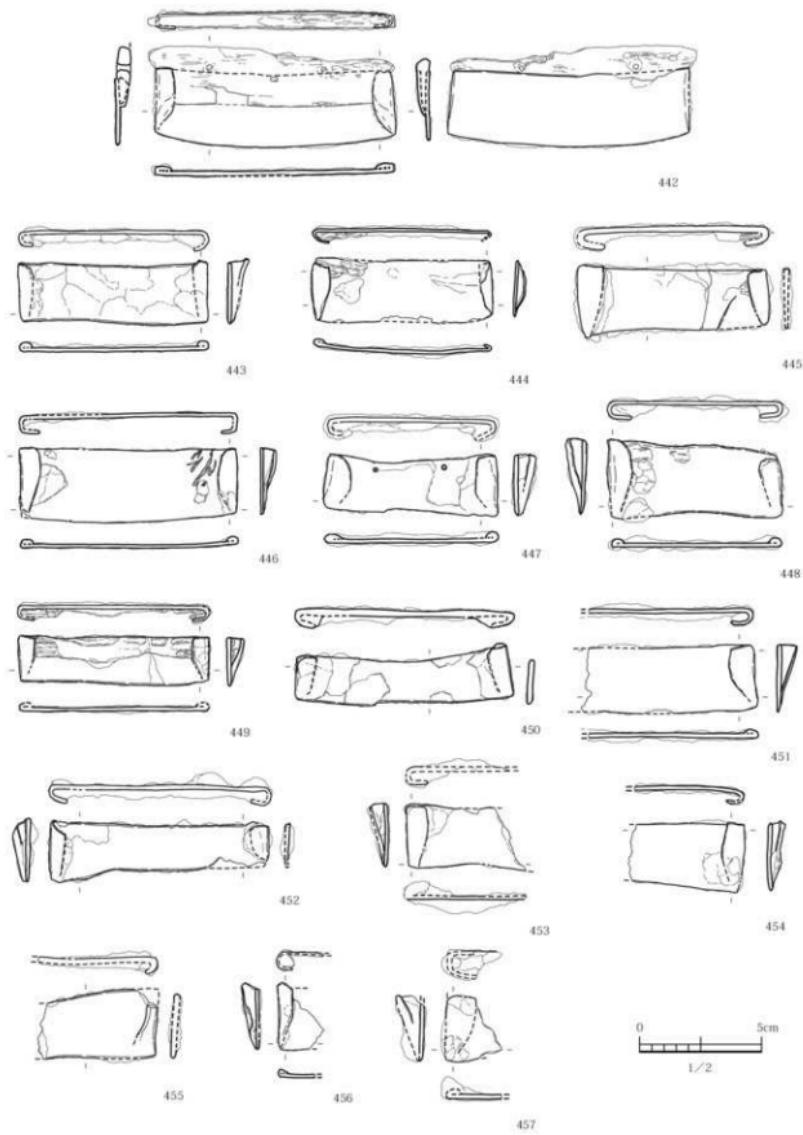


図14 捕鎌実測図

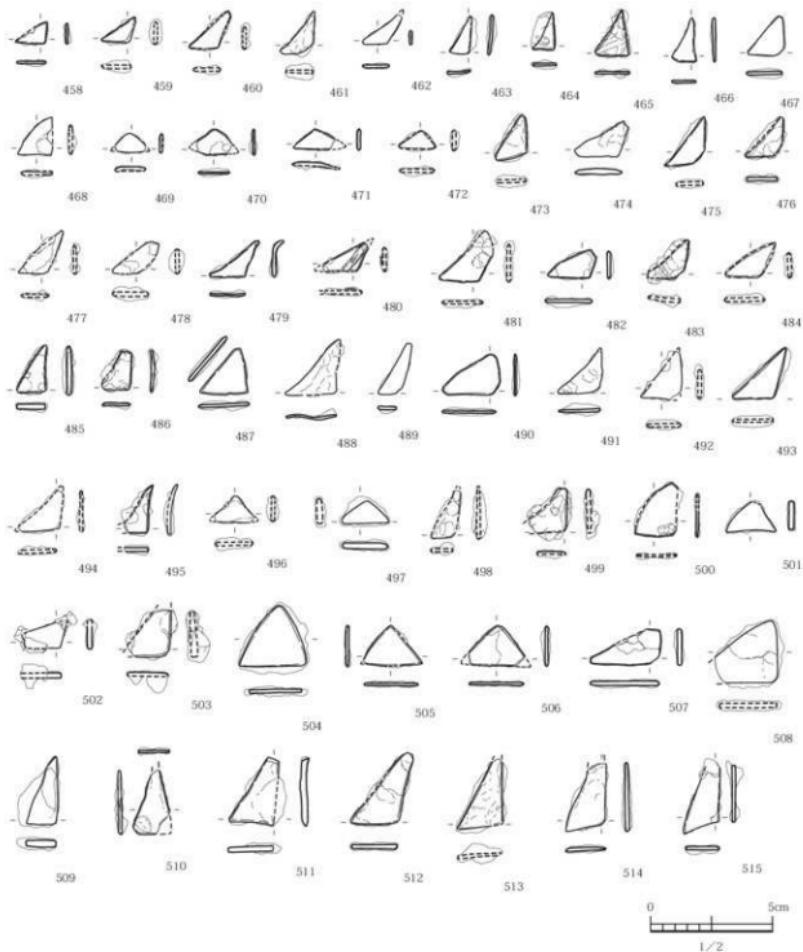


図15 三角形鉄片実測図

る。鋒がなく、直線的に刃間にいたる。刀身、茎の断面はそれぞれ楔形、台形である。RM668は整もしくは楔、RM669は棒状の鐵器片である。RM671、672は細身の釘である。

4.2 副産物

铁津（RM673～689）は、弥生時代の攻玉造構SI80からも2点出土しており、そのうち1点をここに図示している（RM673）。それ以外は全て包含層より出土した。すべて鍛治津である。RM673～676は

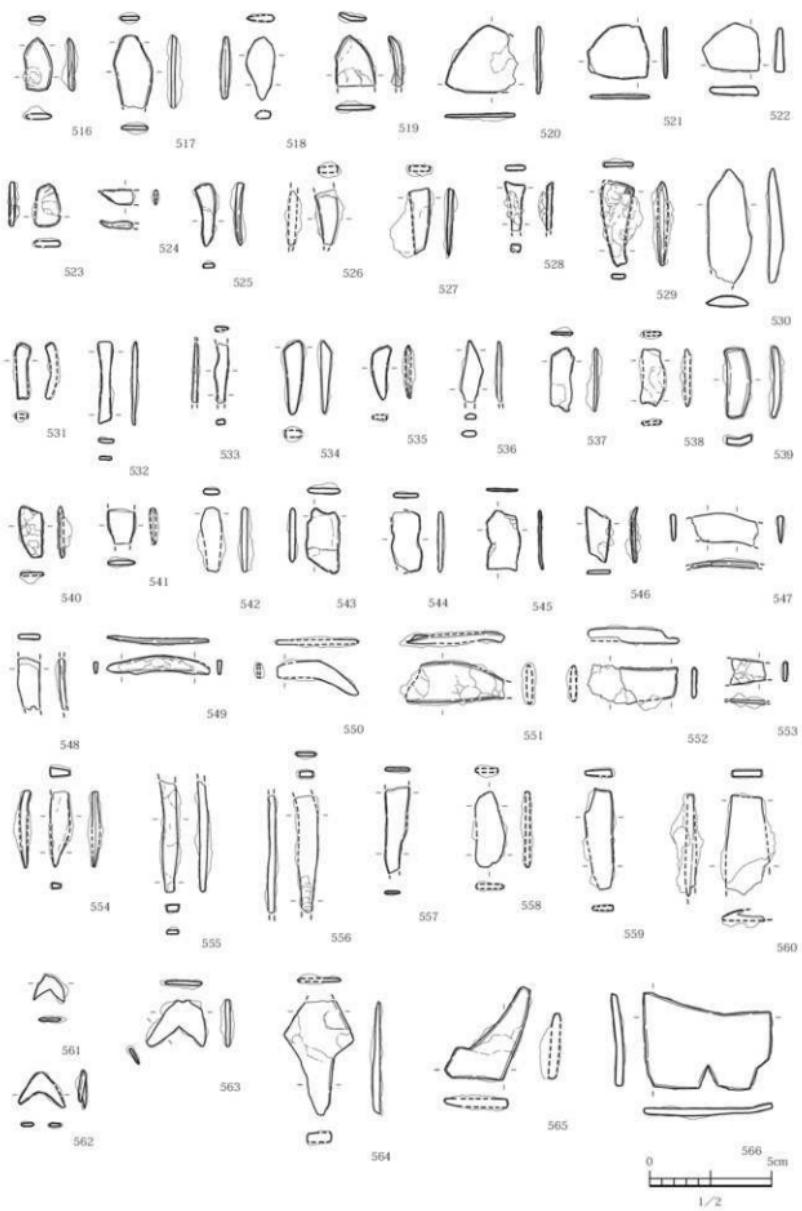


図 16 各種鉄片実測図

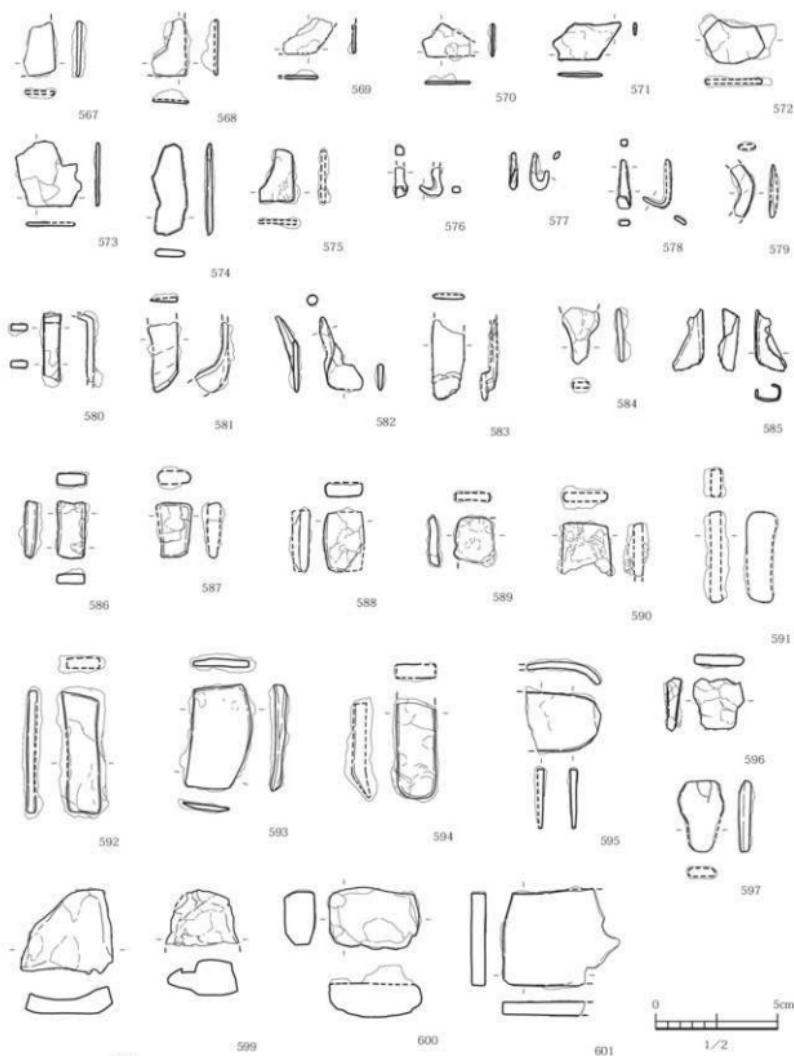


図 17 各種鉄片・鉄塊実測図

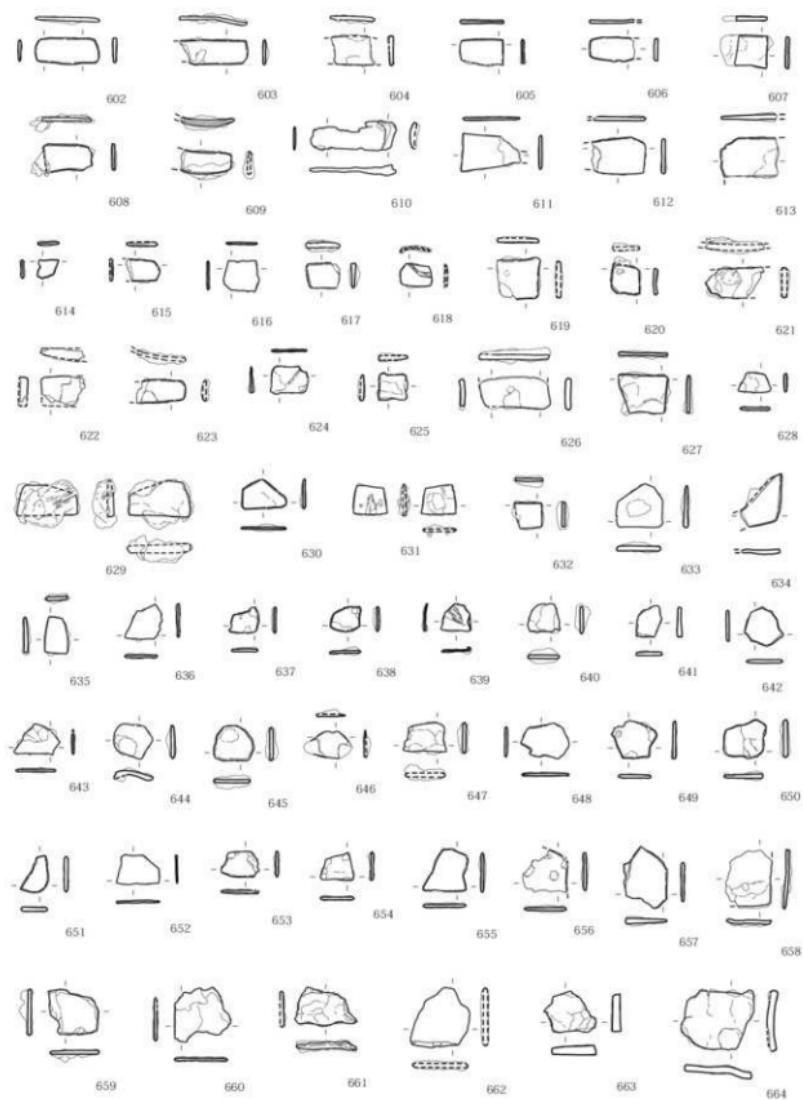


図 18 鉄片実測図

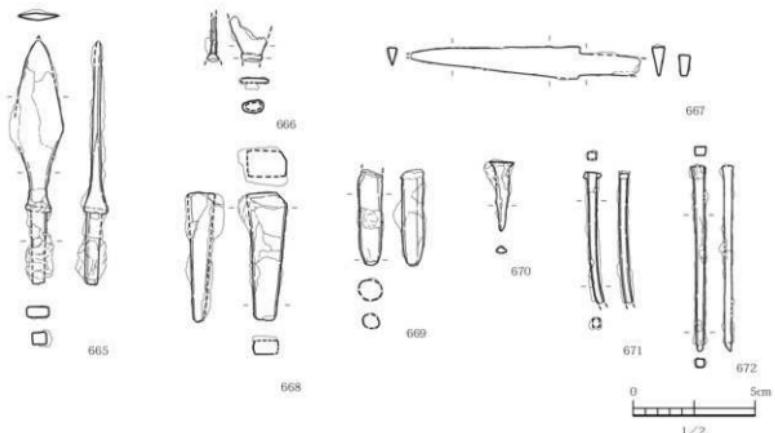


図19 古代以降の鉄器実測図

塊状の鉄滓であり、それ以外は楕円形滓あるいはその破片である。RM687は小削面を有する鍛冶滓である。RM689は重量感があり、鉄素材より溶出した鉄分が多く内包していると思われる。

5 弥生時代の鉄器の検討

5-1 検討の目的

阿蘇カルデラの麓には阿蘇五岳を遠望するように火山灰台地が展開しており、その台地上に弥生時代の遺跡が形成されている。なかでも北部の阿蘇谷地域と南の南郷谷地域は集落遺跡の集中地域である。そして阿蘇谷地域は下扇原遺跡・小野原A遺跡・池田・古園遺跡、狩尾・前田遺跡、狩尾・方無田遺跡、狩尾・湯ノ口遺跡、下山西遺跡などを擁し、弥生時代後期の鉄器が日本列島で最も集中的に出土する地域として知られている。一方、南郷谷地域では柏木谷遺跡・小無田鶴遺跡、西一丁田遺跡、南鶴遺跡が知られているが、鉄器の出土は知られていても阿蘇谷地域の様相とはかけ離れていることから、鉄器の保有における阿蘇谷地域の優位性が指摘されていた（村上 2007, 2010）。しかしながら、幅・津留遺跡の発掘調査によってその指摘はもうろく崩れることとなった。

阿蘇地域における一般的な狩猟具・武器、農工具などの鉄製品の多さは、元来、阿蘇に鉄器が多かったことを物語っている。近年の阿蘇地域における弥生時代

集落の発掘調査では、鉄器の検出のために磁石を利用したり、遺構埋土の水洗作業がルーティン化されている。この手法により小型の無茎鐵鍔などよりさらに小さい鉄器が大量に検出されていることが、阿蘇地域の鉄器に対する評価の基礎となっていることは間違いない。そして、多角的な弥生鉄器研究を可能としているのだ。このような幅・津留遺跡の調査成果を既往の調査・研究成果と対比することによって、南郷谷地域の幅・津留遺跡における弥生時代の鉄器の特質も浮き彫りになるであろう。紙幅の掣肘もあるため、簡潔にこの点を論じてみたい。

5-2 鉄器の出土数と組成

幅・津留遺跡の発掘は道路建設に伴うものであるため、その調査範囲は狭く長い。集落が道路幅に収まるはずではなく、遺構の大半を調査範囲外に残す竪穴建物も実際に多数みられることから、幅・津留遺跡全体に限ったであろう弥生時代の鉄器の数は想像ができない。阿蘇谷地域で鉄器出土量がもっとも多い遺跡は下扇原遺跡である（宮崎編 2010）。ここでは 152 棟の竪穴建物と包含層から約 1,500 点の鉄器が出土した。幅・津留遺跡では 62 棟の竪穴建物から約 700 点の鉄器が出土しており、各竪穴建物の埋土最上層から出土遺物を後世の可能性があるものとして差し引いて数えても約 600 点は弥生時代の鉄製品である。そうすると約 2.5 倍すれば下扇原遺跡の竪穴建物軒数と近似

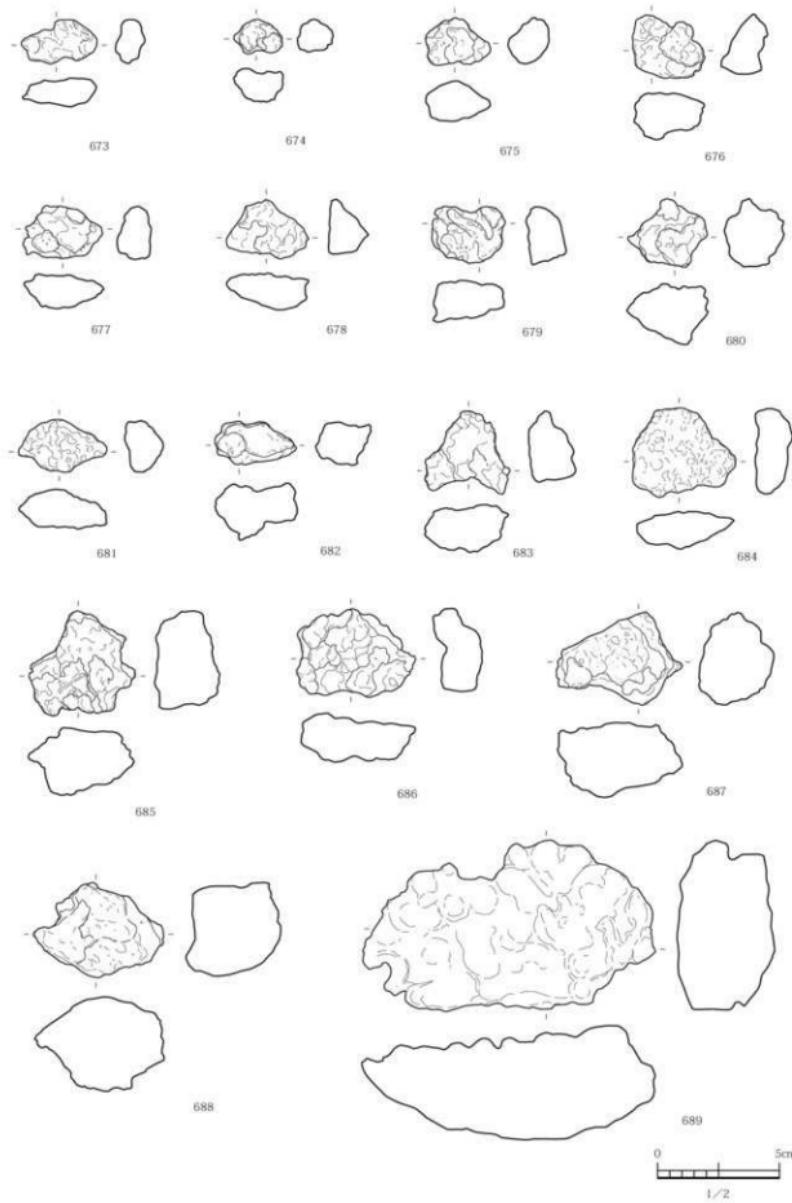


図 20 鉄滓実測図

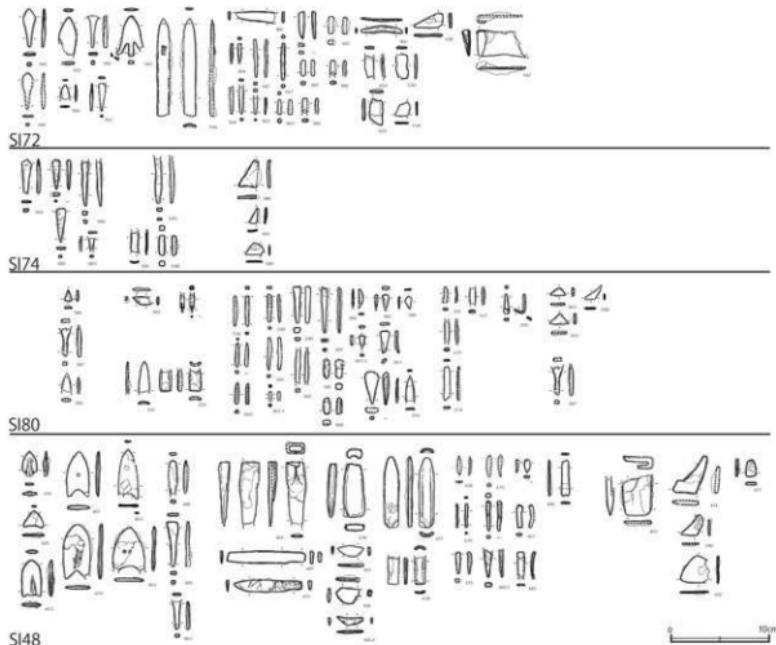


図21 攻玉遺構 (SI72・SI74・SI80)・鍛冶遺構 (SI48) 出土鉄器組成

するが、鉄器の点数もほぼ同様の動向を示す。しかしながら鉄器の組成という点では大きく異なる。下扇原遺跡には鍛冶関連製品が620点あるので、約900点が鉄器であり、そのうちの442点が器種がわかる鉄器である。その内訳は鐵鑄75点（無茎鑄49点、有茎鑄26点）、短劍状鉄器1点、斧9点、刀子19点、穿孔具を含むその他の工具113点、鎌18点、摘鍬18点、その他86点である。これに対し、幅・津留遺跡では鑿、刀子、穿孔具が下扇原遺跡に比較して格段に多く、とくに刀子、穿孔具を含む尖端工具の多さは際立っている。刀子については10cmを超えるサイズの例は他遺跡と共に通るので、小型鉄器が多いというのが幅・津留遺跡の特質である。

5-3 各器種の特徴

幅・津留遺跡出土の鉄器のうち、鐵鑄、斧、鑿、鎌、刀子、穿孔具については阿蘇谷地域の鉄器との間に相違点がある。幅・津留遺跡の無茎鐵鑄は全長5cm大を大型とするが、この大きさは阿蘇谷の下扇原遺跡、

池田・古園遺跡、池田遺跡では中型にあたる。また阿蘇谷に多い抉りの深い三角形凹基鑄は幅・津留遺跡では1点しかみられない。しばしば根抜みの緊縛孔を有するこの型式の鑄は刃部の曲線が滑らかであり、脚部も長く伸び、丁寧な作りである。また有茎鑄となると阿蘇谷では全長7cm以上で、莖を断面正方形で丁寧に細く鍛延した柳葉式鑄が一定量を占めるが、幅・津留遺跡はこれらを欠いている。一方、小型の三角形有茎鑄は阿蘇谷、そして熊本県域ではみられず、幅・津留遺跡、南郷谷の特徴である。

斧については、袋状斧は両地域で共通性をもつが、重厚な板状斧あるいは刃部が撥形に聞く薄刃の盤状鉄器等、折り返しをもたない工具が幅・津留遺跡には一定量存在する点も類のない様相である。鎌は九州の特徴である裏すきをもちながら幅5mm程度の小型品があることに注目したい。阿蘇の東、大野川中流域にある大分県豊後大野市千歳町の高添遺跡でも裏すきをもつ極細鎌が出土しているが、同遺跡内での型式的な変化をみると前型式の弛緩形態であり、これとの関係を

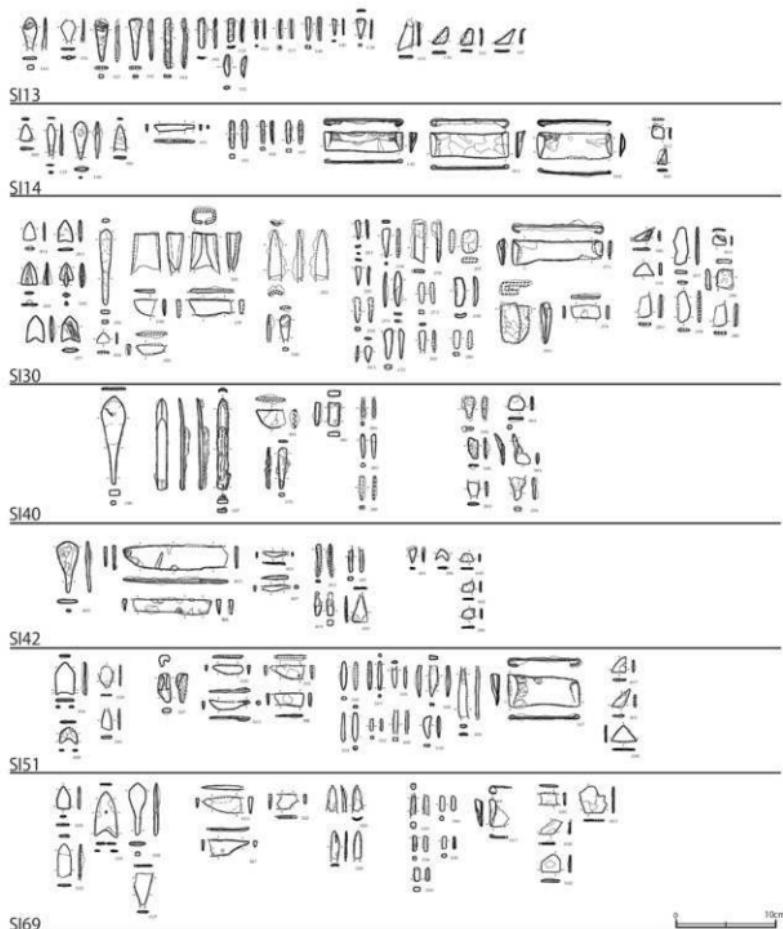


図 22 積穴建物出土鉄器組成

考慮する必要はない。刀子は、大型品である両刃鋒の素環頭刀子や幅広薄型の大型有茎刀子が阿蘇谷や西の白川流域と同じ様相をもつ一方、3~4cmの小型刀子は、その多さも併せて他地域に類例を見いだすことはできない。小型鉄片の一辺に刃を設けた刃器も、今回、刀子として扱ったが、その多様性も他の遺跡にはない様相である。さらに、穿孔具とした錐、針を含む

尖端をもつ小型工具は、大きさ、形態の多様性、数量のいいずれにおいても現状では類例がない。幅・津留遺跡の小型の鉈、刀子、尖端工具といった小型工具の存在は異彩を放っている。

5-4 玉生産と鉄器生産

幅・津留遺跡において多様かつ多数の小型工具が存

在する理由の一つが、この遺跡で行われた玉生産にあることは間違いない。道路幅の細長い調査範囲のなかで、北から南へSI32、SI72、SI74、SI80の4基の攻玉遺構が連なっていた。SI80はこの遺跡でもっとも鉄器の出土数の多い遺構の一つであるが、小型刀子、穿孔具、鍵状工具が描っている。幅・津留遺跡で製作された勾玉の素材は硬度が低い滑石、蛇紋岩であり、その外形を荒削りするに小型刀子は機能を発揮したであろう。また攻玉に限らず、鉄器の特殊な使用法をものがたる遺物としてSI24よりもまとまって出土したイノシシ形石製品も注目される。この岩津(スコリア)製品は、その表面に鉄刃の痕跡を明瞭に残しており、多様な刀子や鑿がその製作を担ったと考えられる。祭具生産であれ、何らかの具象化の活動であれ、この遺跡の地勢や環境を共感させる石製品の生産に鉄器が関与した点はきわめて興味深い。さて、攻玉遺構に話をもどすと、SI80以外の3基の竪穴建物も各種穿孔具や刀子を出土しており、攻玉遺構の必要条件は満たしている。ただ、SI80のように他の生産や生業活動を想起させる鍬、鍛、摘鍬が共存する様子は、攻玉活動の専業的性を希薄化させているかのようである。

この専業的性格の希薄さは鍛冶遺構にもうかがえる。SI48、SI52、SI55という3基の鍛冶遺構のなかで最も鉄製品の出土量が多いSI48は、鉄板の裁断片、鉄鍬の未製品等が出土して鍛冶遺構としての必要条件を満たしながら、同時に、鍬、鑿、刀子、鍔等、通常の竪穴建物で出土する日用鉄器ももっている。鍛冶遺構から出荷される前の製品という仮説もあり得るが、阿蘇谷の下扇原遺跡の鍛冶遺構でも同じ様相がみられることから、他の生業から完全には分離されない、相対的に専業性の低い鉄器生産が行われていた、とも仮説できる。このことは阿蘇以外の集落遺跡の鍛冶遺構、例えば熊本県玉名郡和水町江田の諏訪原遺跡や熊本県上益城郡嘉島町甘木の二子塚遺跡の鍛冶遺構と比較すると対照的となる。これらの鍛冶遺構では日用鉄器は少なく、微小鉄片、鉄板の裁断片、未製品あるいは素材が卓越している。また、阿蘇地域ではベンガラ生産についても考慮する必要がある。当時、ベンガラは阿蘇谷の特産品であり、各遺跡に隣接する明神山・鶴山の褐鉄鉱がその素材になった。阿蘇谷から褐鉄鉱を得て、

幅・津留遺跡でもベンガラ生産が行われた可能性が考えられるが、そうなるとなおのこと一つの工房における生産部門が増え、専業性の希薄化を指摘せざるを得ない。したがって、阿蘇地域における鉄器生産の専業性は、有明海沿岸に近い地域よりも相対的に低かったと考えられるのである。ただし、このことによって阿蘇地域の鉄器生産や消費の様態が未熟であったことを説いているわけではない。鉄器の生産と維持、使用に深く関連する砥石を例に挙げれば、幅・津留遺跡も、下扇原遺跡も100kmの懸隔を経た天草地域からリソイダイタ(天草砥石)を交易で獲得し、仕上げ砥として使用する鉄器の生産と維持が行われているのだ。弥生時代の阿蘇が鉄器を熟知した地域であったことは間違いない。

5-5 まとめ

幅・津留遺跡の発掘調査と既往調査の成果を対比することによって、ともに阿蘇カルデラ内に在り、中央火口丘群でも15km程度の隔たりしかない南郷谷地域と阿蘇谷地域の弥生時代の鉄器に共通点と相違点を見いだすことができた。また、鍛冶遺構出土品の特徴に差異が認められることから、阿蘇カルデラ内と阿蘇カルデラ外では鍛冶活動への専業性が異なる可能性を示した。

かつて阿蘇谷地域の弥生時代後期集落における鉄器の大量生産・消費の背景に、この地域に産する褐鉄鉱を素材として特産品として生産されるベンガラの存在を想定した(村上2000、2007)。船載鏡鏡片や小型偽装鏡の獲得、そして先述したリソイダイタ(天草砥石)の入手を促進した背景も同じくベンガラであろう。では、幅・津留遺跡を擁する南郷谷地域においては、鉄器の大量保有の背景として何が想定されるであろうか? 交易の対価物資を想定するならば小型加工工具を活かした生産物である玉、あるいは皮革製品や布製品も候補にあげてもよいだろう。通常の竪穴建物でも各種の工具類が出土しており、このことを物語っている。しかし、それだけで果たして十分なのかどうか? 南郷谷地域は、阿蘇外輪山を南に越えると高千穂に至り五ヶ瀬川流域との交易が可能となるため、宮崎側との交易の窓口としての強みをもった可能性がある。宮崎

県川南町にある尾花 A 遺跡では弥生時代後期後半の住居址から 200 点近い鉄製品が出土している（松林・竹田編 2011）。鉄製品には袋端部折り曲げ鉄斧、有茎鉄鎌など形態・構造的な特徴が熊本の鉄器と極めて類似しており、際立つ小型鉄器は幅・津留遺跡出土品と区別が付かないほどである。阿蘇・南郷谷から高千穂、五ヶ瀬川、延岡平野と伝わり、沿岸平野を南下する伝達ルートが想定される。今はその可能性を羅列するにすぎないが、鉄器の生産・消費における南郷谷と阿蘇谷との質的差違について何らかの説明を準備しなければならない。

本稿は、1～4 を村上恭通の指導のもと鄭 宗鎧が執筆し、5 を村上が執筆した。なお、鉄器実測に際しては鄭、品川愛（愛媛大学大学院）を中心に進め、持永壯志朗（愛媛大学大学院・愛媛県教育委員会）、青木聰志、松尾麻未、鄒 媛（愛媛大学法文学部）、田中謙（今治市村上水軍博物館）も参画した。

参考文献

種別	点数	遺構数	遺構番号(うち埋1層)
	51	2	48(5)、72(16)
	48	1	30(9)
	44	1	80(1)
	35	1	51(6)
	29	1	69(7)
	26	1	24(7)
	25	2	13(4)、15(4)
	23	3	14(8)、40(7)、66(3)
	22	1	22(7)
	21	1	39(3)
堅穴建物	18	1	19(5)
(S)	17	1	42(1)
I	14	1	32(4)
()	13	2	20(4)、54(4)
	12	2	17(3)、43(4)
	11	2	23(2)、68(2)
	10	1	63(1)
	9	1	10(0)
	8	3	50(1)、55(0)、79(1)
	5	3	62(1)、73(1)、74(1)
	4	5	3(0)、41(0)、47(0)、49(2)、53(1)
	3	6	4(0)、21(1)、45(1)、52(1)、61(1)、67(1)
	2	7	2(0)、12(0)、18(1)、26(0)、29(0)、38(1)、46(0)
	1	7	9(0)、16(0)、33(0)、70(0)、71(0)、75(0)、78(0)
土壙墓	5	1	92
(S)	3	1	183
T	2	2	153、163
()	1	17	91、93、94、97、101、104、108、116、121、141、147、157、161、165、167、243、316

表1 遺構別鉄器出土分類表

松林豊樹・竹田亨志（編）（2011）『尾花 A 遺跡Ⅱ：弥生時代以降編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 195、宮崎県埋蔵文化財センター、
宮崎敬士（編）（2010）『小野原遺跡群：黒川広域基幹河川改修事業にともなう埋蔵文化財調査報告』熊本県文化財調査報告書 257、熊本県教育委員会、
村上恭通（2000）「鉄器生産・流通と社会変革：古墳時代の開始をめぐる諸前提」、『古墳時代考古を見なおす：成立過程と社会変革』、青木書店、
村上恭通（2007）『古代国家成立過程と鉄器生産』、青木書店、
村上恭通（2010）「肥後・阿蘇地域における弥生時代後期鉄器の諸問題：下扇原遺跡を中心として」、『小野原遺跡群：黒川広域基幹河川改修事業にともなう埋蔵文化財調査報告』熊本県文化財調査報告書 257、熊本県教育委員会、

表2 幅・津留遺跡出土鉄器観察表

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
1	S180	3層	無茎鍔	平基三角形	1.20	0.80	0.20	12972
2	S130	-	無茎鍔	平基三角形	1.90	1.20	0.10	-
3	S114	埋1層	無茎鍔	平基三角形	1.80	1.10	0.20	-
4	S166	埋3層	無茎鍔	三角形	2.40	1.60	0.20	12265
5	S123	1c層	無茎鍔	平基三角形	2.80	1.20	0.30	6972
6	S122	1c層	無茎鍔	四基三角形	2.10	1.70	0.25	-
7	S130	埋1層	無茎鍔	平基三角形	2.30	1.60	0.15	6992
8	S169	埋2層	無茎鍔	三角形	2.30	1.40	0.20	13323
9	S155	埋3層	無茎鍔	三角形	2.20	1.20	0.25	-
10	S120	埋1層	無茎鍔	四基三角形	3.10	1.80	0.18	8907
11	S130	埋3層	無茎鍔	三角形	2.10	1.50	0.20	8272
12	S148	埋2層	無茎鍔	四基三角形	1.80	2.20	0.20	-
13	SD10	礫下	無茎鍔	四基三角形	2.60	1.30	0.20	-
14	S115	埋1層	無茎鍔	四基三角形	(1.50)	1.78	0.30	9532
15	S14	埋2層	無茎鍔	四基三角形	2.70	1.90	0.15	-
16	S151	埋1層	無茎鍔	四基五角形	1.70	1.80	0.15	10748
17	S148	埋1層	無茎鍔	四基三角形	3.70	2.00	0.22	10734
18	S154	埋2層	無茎鍔	四基三角形	1.90	3.10	0.10	10420
19	S151	埋1層	無茎鍔	四基五角形	3.30	2.00	0.20	-
20	S147	埋3層	無茎鍔	四基三角形	2.70	2.00	0.10	10847
21	SX10	最下層	無茎鍔	四基三角形	(2.00)	(2.00)	0.20	-
22	498G	1c層	無茎鍔	四基五角形	(3.80)	2.20	0.30	6885
23	S130	埋2層	無茎鍔	三角形	2.20	1.75	0.30	7106
24	S169	埋3層	無茎鍔	四基三角形	4.30	2.25	0.20	12319
25	S148	埋2層	無茎鍔	四基三角形	5.10	2.00	0.15	10742
26	S148	埋2層	無茎鍔	四基三角形	4.60	2.25	0.30	10766
27	S148	埋8層	無茎鍔	四基三角形	5.50	2.60	0.30	10773
28	S171	-	無茎鍔	四基三角形	3.90	1.90	0.15	12280
29	S163	埋4層	無茎鍔	四基三角形	(4.50)	2.00	0.10	11543
30	S162	埋2層	無茎鍔	四基三角形	(3.10)	2.30	0.20	-
31	S162	埋1層	無茎鍔	四基三角形	3.70	3.00	0.30	11543
32	S148	埋2層	無茎鍔	四基三角形	(4.50)	3.10	0.30	10739
33	S155	埋2層	無茎鍔	四基三角形	4.00	2.00	0.20	10770
34	S122	埋1層	無茎鍔	-	(3.20)	3.20	0.12	7308
35	S123	埋3層	有茎鍔	短茎三角形	2.10	1.20	0.10	7080
36	S148	埋8層	有茎鍔	短茎三角形	2.60	1.50	0.20	10728
37	S130	埋3層	有茎鍔	短茎三角形	2.45	1.30	0.20	7233
38	S117	埋6層	有茎鍔	長茎主頭式	2.70	1.10	0.20	9919
39	528G	1c層	有茎鍔	長茎柳葉式	(2.90)	1.10	0.40	-
40	S114	埋1層	有茎鍔	長茎柳葉式	(3.30)	0.90	0.20	6995
41	SD11	埋6層	有茎鍔	長茎柳葉式	(3.10)	1.10	0.15	10437
42	S113	埋3層	有茎鍔	長茎柳葉式	(3.05)	1.40	0.20	7734
43	S140	埋1層	有茎鍔	長茎柳葉式	8.80	2.30	0.15~0.5	10480
44	S154	埋5層	有茎鍔	長茎三角形	9.20	2.25	0.30	-
45	S172	埋1層	有茎鍔	長茎三角形	4.15	2.00	0.40	12283
46	S169	埋3層	有茎鍔	長茎柳葉式	(3.20)	1.30	0.20	12443
47	S148	埋8層	有茎鍔	長茎柳葉式	4.50	1.40	0.2~0.4	11391
48	S172	埋1層	有茎鍔	長茎柳葉式	(4.30)	1.50	0.30	12291
49	528G	1c層	有茎鍔	長茎柳葉式	(5.90)	1.80	0.20	-
50	S129	埋2層	有茎鍔	長茎柳葉式	(4.50)	2.10	0.2~0.4	12706
51	SX32	埋2層	有茎鍔	長茎柳葉式	(3.40)	1.70	0.20	13146
52	S154	埋1層	有茎鍔	長茎柳葉式	(3.80)	2.35	0.20	10419
53	501G	1c層	有茎鍔	長茎柳葉式	(4.15)	1.70	0.2~0.5	6891
54	S115	埋7層	有茎鍔	長茎主頭式	4.30	0.90	0.10	9885
55	S173	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	3.80	1.10	0.20	13274
56	S174	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	3.65	0.96	0.2~0.25	12889
57	S122G	1c層	有茎鍔	長茎主頭式	3.60	1.30	0.30	-
58	S163	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	6.70	1.30	0.2~0.4	12024
59	S137	埋1層	有茎鍔	長茎主頭式	7.70	0.90	0.2~0.3	9766
60	S130	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	8.50	1.15	0.2~0.3	-
61	S175	柱穴	有茎鍔	長茎主頭式	3.60	1.70	0.20	7307
62	S114	埋6層	有茎鍔	長茎主頭式	3.70	1.20	0.1~0.3	12282
63	S172	埋1層	有茎鍔	長茎主頭式	3.90	1.30	0.20	10411
64	S142	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	5.10	2.10	0.2~0.3	12687
65	S180	埋3層	有茎鍔	長茎主頭式	(1.80)	1.10	0.2~0.3	9164
66	S113	床1層	有茎鍔	長茎主頭式	(2.05)	1.40	0.2~0.3	7232
67	S172	埋1層	有茎鍔	長茎主頭式	3.50	1.20	0.40	12287
68	S155	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	(3.50)	(1.80)	0.20	-
69	S120	埋1層	有茎鍔	長茎主頭式	(3.30)	1.50	0.2~0.3	7423
70	S169	埋2層	有茎鍔	長茎主頭式	5.20	1.70	0.4~0.5	12630

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
71	509G	1c層	有茎蕨	長茎主頭式	4.50	1.55	0.50	6912
72	SI55	埋3層	有茎蕨	長茎主頭式	4.90	1.50	0.2~0.3	10762
73	SI30	床1層	有茎蕨	長茎円頭式	(2.40)	1.00	0.30	9292
74	220G	1c層	有茎蕨	長茎円頭式	(3.10)	(1.10)	0.20	—
75	SI40	埋1層	有茎蕨	長茎円頭式	4.10	0.70	0.30	9810
76	SI72	埋1層	有茎蕨	その他	2.60	0.70	0.30	—
77	SI50	埋2層	有茎蕨	その他	3.50	1.10	0.40	10767
78	SI66	埋3層	有茎蕨	その他	(3.10)	1.40	0.50	13460
79	SI13	埋3層	有茎蕨	その他	(3.40)	1.15	0.30	7366
80	SI13	埋2層	有茎蕨	その他	(3.95)	1.30	0.20	7316
81	578G	1b層	蕨	—	(1.10)	1.60	0.20	—
82	SI30	埋3層	蕨	—	(1.00)	(1.00)	0.10	—
83	SX10	下層	蕨	—	(1.60)	1.10	0.20	1389
84	SX10	中層	蕨	—	(1.60)	1.40	0.15	—
85	SI15	埋1層	蕨	—	(2.20)	(1.80)	0.20	8051
86	SI72	埋4層	蕨	—	(1.50)	0.90	0.10	13247
87	SI80	埋3層	蕨	—	(1.40)	1.00	(0.20)	12689
88	SI51	埋2層	蕨	—	(2.00)	(1.00)	0.20	10757
89	SI14	埋1層	蕨	—	(2.30)	(2.30)	0.20	7027
90	500G	トレンチ	蕨	—	(2.10)	(1.50)	(0.20)	—
91	SI20	埋1層	蕨	—	(3.20)	1.80	0.20	7994
92	SI72	埋3層	有茎蕨	長茎柳葉式	(3.90)	1.80	0.20	12317
93	SI69	埋2層	有茎蕨	—	(4.10)	1.40	0.20	12629
94	SX21	—	有茎蕨	長茎柳葉式	(2.40)	1.30	0.30	—
95	SI51	埋1層	有茎蕨	長茎柳葉式	(2.30)	1.10	0.20	—
96	SI74	埋2層	有茎蕨	—	(1.00)	0.40	0.20	12883
97	12IK	攪乱	有茎蕨	—	(1.90)	1.60	0.40	—
98	SI72	埋4層	有茎蕨	—	(3.20)	0.90	0.40	13242
99	SI80	埋3層	有茎蕨	—	(2.80)	1.00	0.30	12677
100	SI17	埋1層	有茎蕨	—	(2.90)	1.20	0.20	9460
101	ST153	埋1層	有茎蕨	長茎主頭式	(2.70)	1.20	0.20	3081
102	SI55	埋2層	有茎蕨	その他	4.30	1.20	0.30	10761
103	SI48	埋2層	有茎蕨	その他	4.60	1.20	0.30	11068
104	SI24	埋1層	有茎蕨	その他	4.30	1.20	0.20	7049
105	SI48	炉	有茎蕨	長茎柳葉式	(3.40)	0.80	0.25	11488
106	SX10	下層	有茎蕨	その他	3.10	1.10	0.20	1713
107	523G	1c層	袋状斧	—	6.90	3.10	0.20	6970
108	SI54	埋1層	袋状斧	—	4.70	3.10	0.40	10775
109	SI30	埋3層	袋状斧	—	(3.80)	3.00	0.30	8094
110	SI70	—	袋状斧	—	(4.00)	3.15	0.30	12044
111	SI47	埋2層	袋状斧	—	3.10	1.75	0.20	11259
112	SI51	埋2層	袋状斧	—	2.40	1.30	0.40	10754
113	SI48	埋2層	袋状斧	—	(6.85)	1.90	0.20	10741
114	SI32	埋1層	袋状斧	—	(1.60)	(1.30)	0.15	—
115	SI48	埋1層	板状斧	—	6.30	2.20	0.80	10735
116	SK34	—	板状斧	—	7.10	4.00	0.60	1204
117	SI54	埋1層	袋状斧	—	(3.30)	(4.20)	0.70	10570
118	C3G	1b層	板状斧	—	(4.50)	2.80	0.40	9658
119	SX10	最下層	板状斧	—	(2.70)	1.50	0.35	5776
120	SX10	下層	板状斧	—	2.20	1.50	0.40	1371
121	SI30	床直	板状斧	—	(2.30)	(1.80)	(0.40)	7162
122	SI39	埋2層	板状斧	小型	2.10	0.50	0.40	—
123	C3G	1b層	板状斧	小型	(2.50)	0.65	0.20	9654
124	SI52	埋1層	板状斧	小型	(2.30)	(0.85)	(0.10)	—
125	585G	1b層	板状斧	小型	(4.40)	0.90	0.30	—
126	499G	1c層	板状斧	小型	(4.60)	1.40	0.20	—
127	SI75	埋1層	板状斧	小型	(2.90)	0.70	0.10	13361
128	SI68	埋2層	板状斧	小型	(3.80)	0.55	0.30	—
129	SI35	—	板状斧	小型	(4.30)	0.40	0.40	9868
130	SI39	埋2層	板状斧	小型	2.30	0.70	0.40	9820
131	SI43	埋4層	板状斧	小型	2.30	0.70	0.35	11514
132	SI14	埋2層	刀子	—	3.95	0.65	0.25	7549
133	SI39	埋3層	刀子	—	(1.90)	0.40	0.15	10276
134	SI35	埋1層	刀子	—	(3.60)	0.85	0.20	9778
135	ST167	埋1層	刀子	—	(1.80)	0.80	0.20	3354
136	SI51	埋2層	刀子	—	(3.00)	0.80	0.25	10752
137	SI80	埋4層	刀子	—	(1.80)	0.80	0.20	12668
138	SI73	埋2層	刀子	—	2.10	0.80	0.20	13273
139	SI42	埋2層	刀子	—	(2.60)	0.70	0.30	10478
140	SI68	埋3層	刀子	—	3.30	0.80	0.20	—

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
141	SI67	理1層	刀子	—	4.00	1.40	0.20	—
142	SI39	埋2層	刀子	—	(2.10)	0.60	0.10	10027
143	SX22	理1層	刀子	—	(2.30)	0.80	0.20	—
144	SI51	理3層	刀子	—	4.10	0.90	0.20	11379
145	SI48	理9層	刀子	—	2.50	0.70	0.30	—
146	SI42	理2層	刀子	—	(2.00)	0.55	0.10	10353
147	SI30	床1層	刀子	—	(2.35)	0.90	0.20	—
148	SX11	理2層	刀子	—	(2.60)	1.20	0.15	4883
149	SI48	理2層	刀子	—	(2.40)	1.50	0.40	—
150	SI48	埋2層	刀子	—	6.90	1.20	0.30	11343
151	SI23	理3層	刀子	—	7.35	1.40	0.20	7088
152	SI19	埋2層	刀子	—	8.35	1.30	1.20	7020
153	SI45	理1層	刀子	—	(5.20)	2.60	0.10	10609
154	SI42	埋2層	刀子	—	(10.40)	2.50	0.30	10355
155	SI22	理1層	刀子	—	(9.40)	2.00	0.20	6977, 6978
156	SI40	理1層	刀子	—	(3.00)	1.80	0.20	—
157	SI15	埋2層	刀子	素端頭	15.50	1.90	0.30	6951
158	SI55	埋2層	刀子	—	(9.70)	0.80	0.20	10760
159	SI51	理3層	刀子	—	(2.80)	1.40	0.20	10745
160	SI69	Kピット	刀子	—	(3.30)	1.60	0.40	12631
161	SI30	理1層	刀子	—	(2.15)	1.90	0.20	6986
162	SI48	Pit2	刀子	—	8.00	1.40	0.20	—
163	SK45	理1層	刀子	—	(7.10)	1.40	0.30	9807
164	SI43	理4層	刀子	—	(7.40)	1.70	0.20	11513
165	SI45	埋2層	刀子	—	3.80	1.80	0.20	—
166	SI48	埋2層	刀子	—	2.70	1.00	0.20	10730
167	SI24	理3層	刀子	—	(2.40)	0.90	0.20	7218
168	SI23	理4層	刀子	—	3.40	1.60	0.30	—
169	SI39	理3層	刀子	—	(4.30)	1.60	0.30	9895
170	SI68	埋5層	刀子	—	2.80	0.80	0.30	12922
171	SI10	理5層	刀子	—	2.20	0.70	0.30	3729
172	SI51	埋2層	刀子	—	(1.50)	0.80	0.20	10747
173	SX10	最下層	刀子	—	2.30	1.00	0.30	—
174	SI15	床直	刀子	—	(4.70)	1.70	0.20	9644
175	大トレ2	表土	刀子	—	(4.05)	2.40	0.40	—
176	SI30	埋2層	刀子	—	(4.10)	1.60	0.40	7160
177	SI41	理5層	刀子	—	(4.60)	1.80	0.20	10151
178	SI75	埋2層	刀子	—	(3.70)	1.15	0.10	13462
179	SX10	最下層	刀子	—	2.70	0.90	0.30	5763
180	585G	1b層	刀子	—	(3.50)	0.80	0.50	—
181	SI15	理1層	刀子	—	(4.30)	1.30	0.20	8054
182	SI69	埋2層	刀子	—	(9.80)	1.50	0.30	—
183	520G	1c層	刀子	—	(2.15)	1.40	0.20	6960
184	SI69	理1層	刀子	—	(2.00)	1.50	0.20	—
185	SK45	理1層	刀子	—	(2.00)	1.00	0.30	10195
186	76G	—	刀子	—	(1.80)	0.80	0.20	1476
187	147G	1c層	刀子	—	(3.05)	1.65	0.15	—
188	499G	1c層	刀子	—	(2.50)	1.50	1.50	6888
189	SK59	理1層	刀子	—	(5.50)	1.80	0.30	11510
190	17[K]	表土	刀子	—	(3.10)	0.90	0.40	—
191	522G	1c層	刀子	—	(2.10)	1.25	0.20	—
192	SI50	埋2層	刀子	—	(2.90)	1.80	0.20	10768
193	SI36	理1層	刀子	—	(2.95)	0.70	0.20	9862
194	SI72	1c層	刀子	—	(4.00)	1.00	0.20	12048
195	5区	表土	刀子	—	(4.50)	1.00	0.10	—
196	SI43	理3層	刀子	—	(3.20)	1.20	0.30	—
197	SI42	理4層	刀子	—	(7.80)	1.50	0.40	10471
198	SI30	埋1層	刀子	—	(4.70)	1.70	0.20	6994
199	SI79	埋1層	刀子	—	(3.30)	1.40	0.30	12313
200	G3G	1b層	刀子	—	(4.65)	1.05	0.20	—
201	SX11	—	刀子	—	8.40	1.40	0.20	740
202	74・75G	1c層	刀子	—	4.80	1.10	0.30	—
203	SI66	埋3層	鉈	—	14.80	1.60	0.20	12268
204	SI72	理4層	鉈	—	(9.80)	1.20	0.20	12598
205	SI40	理4層	鉈	—	9.20	1.30	0.30	10487
206	SI73	1c層	鉈	—	7.00	1.50	0.20	12045
207	SI55	埋2層	鉈	—	7.20	1.50	0.30	10759
208	SI48	理8層	鉈	—	(4.90)	1.30	0.20	10733
209	SI30	埋3層	鉈	—	(4.80)	(1.20)	0.20	8498
210	SI55	埋2層	鉈	—	(3.20)	1.40	0.20	—

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
211	SI67	床直	鉈	—	(3.30)	1.55	0.30	13458
212	SI24	埋3層	鉈	—	(1.80)	1.20	0.40	7065
213	SI61	埋1層	鉈	—	(2.20)	1.20	0.15	—
214	SI80	埋2層	鉈	—	(3.10)	1.10	0.15	—
215	220G	攪乱	鉈	—	(3.40)	1.40	0.20	—
216	560G	1c層	鉈	—	(3.50)	1.60	0.20	—
217	514G	表土	鉈	—	(2.10)	1.20	0.20	—
218	SI69	埋2層	鉈	—	(2.20)	0.75	0.10	12323
219	SI20	埋2層	鉈	—	(3.20)	1.10	0.20	8545
220	SI80	埋2層	鉈	—	(3.10)	0.90	0.10	12674
221	SI69	埋2層	鉈	—	(2.80)	1.00	0.10	12301
222	SI38	1層	鉈	—	(1.50)	0.70	0.20	9922
223	ST101	—	鉈	—	2.60	0.60	0.20	—
224	563G	1c層	鉈	—	(3.20)	1.00	0.30	—
225	SI48	埋1層	鉈	—	(2.80)	1.20	0.20	10772
226	523G	1c層	鉈	—	(2.30)	1.30	0.15	—
227	SI19	埋1層	鉈	—	(6.45)	1.20	0.25	—
228	614G	1c層	鉈	—	(4.10)	1.70	0.20	—
229	SI32	埋1層	鉈	—	(4.70)	1.45	0.30	6966
230	SI80	埋3層	鉈	—	(2.10)	1.30	0.20	12665
231	SI13	床直	尖端工具	—	1.05	0.20	0.15	7995
232	SI17	—	尖端工具	—	1.25	0.10	0.10	—
233	SI20	埋2層	尖端工具	—	1.10	0.20	0.10	8350.1
234	SI46	埋10層	尖端工具	—	1.30	0.30	0.30	10424
235	SI80	埋3層	尖端工具	—	1.60	0.50	0.10	12675
236	SI66	埋3層	尖端工具	—	2.40	0.20	0.20	13459
237	SI48	埋9層	尖端工具	—	3.20	0.15	0.10	—
238	SI72	埋1層	尖端工具	—	3.60	0.25	0.20	—
239	SI80	埋5層	尖端工具	—	2.60	0.50	0.30	12836
240	509G	1c層	尖端工具	—	1.70	0.70	0.50	—
241	572G	1c層	尖端工具	—	(2.40)	0.50	0.50	—
242	SI22	Pit	尖端工具	—	1.75	0.30	0.30	—
243	SI39	埋2層	尖端工具	—	1.70	0.30	0.20	10029
244	SI48	埋9層	尖端工具	—	3.00	0.60	0.30	—
245	SI32	埋1層	尖端工具	—	1.70	0.60	0.20	7309
246	SI22	埋3層	尖端工具	—	1.80	0.50	0.20	7414
247	SI48	埋2層	尖端工具	—	1.30	0.70	0.15	10771
248	SI79	埋2層	尖端工具	—	3.10	0.70	0.30	—
249	SI80	埋3層	尖端工具	—	3.55	1.40	0.50	12673
250	SI20	埋2層	尖端工具	—	3.35	1.40	0.20	8350.1
251	SI72	埋1層	尖端工具	—	2.70	0.50	0.30	—
252	SI74	埋2層	尖端工具	—	2.90	0.60	0.25	12881
253	SI24	埋1層	尖端工具	—	1.70	0.70	0.15	7038
254	SI39	埋2層	尖端工具	—	2.20	0.80	0.20	10030
255	SI48	埋8層	尖端工具	—	2.50	0.30	0.20	11390
256	557G	1c層	尖端工具	—	3.30	0.30	0.30	—
257	SI13	埋1層	尖端工具	—	1.95	0.20	0.20	6976
258	SI14	埋3層	尖端工具	—	(2.15)	0.30	0.30	7015
259	SI13	床1層	尖端工具	—	1.95	2.00	0.15	9202
260	SI80	埋6層	尖端工具	—	2.20	0.25	0.20	12678
261	SI80	埋3層	尖端工具	—	3.00	0.30	0.20	12688
262	SI80	埋2層	尖端工具	—	3.15	0.40	0.30	—
263	SI72	埋1層	尖端工具	—	3.70	0.30	0.20	12288.1
264	SI22	埋3層	尖端工具	—	2.95	0.30	0.20	7416
265	SI37	埋1層	尖端工具	—	(2.60)	0.30	0.25	10102
266	SI16	—	尖端工具	—	2.35	0.25	0.20	9876
267	SI17	埋6層	尖端工具	—	2.90	0.30	0.10	9920
268	214G	1c層	尖端工具	—	1.80	0.40	0.30	—
269	SI10	埋1層	尖端工具	—	2.20	0.30	0.30	—
270	4IK	攪乱	尖端工具	—	(4.00)	0.30	0.20	—
271	ST92	主体部	尖端工具	—	(1.80)	0.15	0.15	5
272	229G	表土	尖端工具	—	(1.50)	0.15	0.15	—
273	G5	攪乱	尖端工具	—	(2.40)	0.15	0.15	—
274	SI40	埋3層	尖端工具	—	(1.70)	0.30	0.25	10484
275	SI51	埋2層	尖端工具	—	2.80	0.30	0.30	11065
276	SI47	埋2層	尖端工具	—	3.30	0.35	0.30	11258
277	SI72	埋1層	尖端工具	—	3.80	0.30	0.30	12288.2
278	SI19	埋3層	尖端工具	—	(3.90)	0.30	0.25	8248
279	SI80	埋5層	尖端工具	—	(3.30)	0.40	0.30	12838
280	SI14	埋1層	尖端工具	—	2.75	0.40	0.35	7029

RM 出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
281 SI26	埋2層	尖端工具	—	4.70	0.35	0.20	8349
282 572G	1c層	尖端工具	—	(7.40)	0.50	0.30	13360
283 SI48	埋2層	尖端工具	—	(2.90)	(0.25)	(0.10)	10426
284 SI48	埋7層	尖端工具	—	(2.20)	(0.35)	(0.20)	11328
285 SI32	埋2層	尖端工具	—	(1.70)	0.20	0.10	—
286 SI80	埋6層	尖端工具	—	(2.00)	0.40	0.10	—
287 SI35	焼土層	尖端工具	—	2.70	0.90	0.40	9775
288 557G	1c層	尖端工具	—	(2.70)	0.45	0.10	10271
289 SI51	埋3層	尖端工具	—	(2.80)	(0.50)	0.30	10769
290 SI51	埋2層	尖端工具	—	(2.80)	(0.50)	0.20	10746
291 SK56	埋2層	尖端工具	—	1.45	0.45	0.15	11182
292 SI72	埋2層	尖端工具	—	(1.70)	0.40	0.25	12585
293 13[K]	1b層	尖端工具	—	(1.80)	0.30	0.20	—
294 SI72	埋4層	尖端工具	—	(2.60)	0.50	0.20	12601
295 SI40	埋4層	尖端工具	—	(2.50)	(0.21)	(0.20)	10491
296 SI40	埋2層	尖端工具	—	2.40	0.35	0.30	10483
297 B3G	1b層	尖端工具	—	(2.80)	0.30	0.40	9671
298 A4G	1b層	尖端工具	—	(1.50)	0.30	0.30	9673
299 SI72	埋1層	尖端工具	—	(1.90)	0.40	0.20	12310
300 SI68	埋3層	尖端工具	—	1.80	0.30	0.40	13366
301 SI48	埋2層	尖端工具	—	2.15	0.40	0.30	11181
302 SI30	床1層	尖端工具	—	2.50	0.45	0.30	9283
303 SI13	埋3層	尖端工具	—	2.30	0.30	0.30	—
304 SI42	埋1層	尖端工具	—	3.20	0.45	0.20	10103
305 SI32	埋5層	尖端工具	—	2.40	0.60	0.25	—
306 SI21	床1層	尖端工具	—	2.80	0.31	0.25	—
307 SI19	床1層	尖端工具	—	(2.90)	0.55	0.20	9375
308 SI37	埋1層	尖端工具	—	3.05	0.35	0.30	9767
309 SI80	埋3層	尖端工具	—	3.70	0.80	0.50	12666
310 A4G	1b層	尖端工具	—	3.30	0.35	0.40	9656
311 SI74	埋1層	尖端工具	—	(4.40)	0.65	0.40	12880
312 SI30	埋1層	尖端工具	—	3.40	0.60	0.20	6993
313 SI72	埋4層	尖端工具	—	2.60	0.60	0.20	13240
314 SI24	埋3層	尖端工具	—	(2.40)	0.60	0.40	7063
315 SI48	埋2層	尖端工具	—	(2.60)	0.80	0.30	10423
316 SI66	柱穴	尖端工具	—	(2.40)	0.70	0.30	—
317 SI80	埋3層	尖端工具	—	1.30	0.70	0.10	12679
318 SI30	柱穴	尖端工具	—	1.70	0.60	0.15	—
319 SI42	埋2層	尖端工具	—	1.75	0.45	0.10	10351
320 SI2	埋1層	尖端工具	—	2.05	0.60	0.10	—
321 SI80	埋3層	尖端工具	—	1.40	0.70	0.20	12669
322 SH41	埋3層	尖端工具	—	1.78	0.90	0.15	9988
323 ST189	埋1層	尖端工具	—	(2.30)	0.80	0.20	4884
324 SI13	埋1層	尖端工具	—	1.85	0.90	0.10	6975
325 SX10	中層	尖端工具	—	(1.70)	1.10	0.40	—
326 SH40	埋4層	尖端工具	—	(2.00)	(0.90)	(0.15)	10485
327 SI29	トレンチ	尖端工具	—	3.00	1.10	(0.50)	—
328 SI74	埋1層	尖端工具	—	3.41	0.95	0.20	12878
329 613G	1c層	尖端工具	—	3.00	0.70	0.25	12467
330 SI35	埋1層	尖端工具	—	3.75	0.90	0.25	9779
331 SI30	埋4層	尖端工具	—	2.85	0.70	0.20	8250
332 605G	1c層	尖端工具	—	2.85	0.70	0.20	—
333 SI30	埋4層	尖端工具	—	1.90	0.50	0.15	8352
334 SI40	埋1層	尖端工具	—	2.10	0.50	0.20	10481
335 SI13	床1層	尖端工具	—	1.55	(0.40)	0.10	9312
336 SI30	埋3層	尖端工具	—	2.00	0.30	0.20	8271
337 SI51	埋2層	尖端工具	—	(2.05)	0.45	0.20	11067
338 SI80	埋4層	尖端工具	—	2.30	1.00	0.25	12667
339 SI61	埋1層	尖端工具	—	2.80	1.10	0.20	11526
340 SI19	埋2層	尖端工具	—	2.80	0.60	0.20	7666
341 SI48	埋9層	尖端工具	—	(2.90)	1.00	0.30	—
342 SI80	埋3層	尖端工具	—	4.45	0.50	0.20	12692
343 7区	表土	尖端工具	—	6.10	0.90	0.35	—
344 SI15	—	棒状鉄器	—	1.20	0.30	0.20	—
345 SI68	埋4層	棒状鉄器	—	1.30	0.50	0.20	—
346 SI80	埋3層	棒状鉄器	—	0.80	0.20	0.20	12684.1
347 SI80	埋3層	棒状鉄器	—	(1.10)	0.50	0.15	12684.2
348 SI51	埋2層	棒状鉄器	—	1.20	0.30	0.20	10422
349 514G	1c層	棒状鉄器	—	1.50	0.50	0.50	—
350 SI78	埋4層	棒状鉄器	—	(1.60)	0.40	0.30	—

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
351	SI51	理1層	棒状鉄器	—	2.10	0.40	0.20	10749
352	SI30	埋3層	棒状鉄器	—	1.80	0.55	0.30	8273
353	SI63	1c層	棒状鉄器	—	(1.55)	0.60	0.30	11512
354	SI20	床1層	棒状鉄器	—	(1.50)	0.25	0.20	—
355	SI32	理1層	棒状鉄器	—	1.80	0.30	0.30	—
356	SI10	理1層	棒状鉄器	—	2.20	0.40	0.40	—
357	SI14	床1層	棒状鉄器	—	2.35	0.40	0.30	8815
358	SI42	理2層	棒状鉄器	—	2.30	0.50	0.30	10347
359	SI72	理4層	棒状鉄器	—	1.90	0.40	0.30	13047
360	A4G	1b層	棒状鉄器	—	(1.70)	0.42	0.40	—
361	SI30	理1層	棒状鉄器	—	2.10	0.50	0.30	7663
362	SI72	理4層	棒状鉄器	—	(1.70)	0.40	0.20	12931
363	SI69	埋3層	棒状鉄器	—	1.20	0.40	0.35	12297
364	SI69	理1層	棒状鉄器	—	1.60	0.40	0.40	12302
365	SI74	理2層	棒状鉄器	—	2.10	0.50	0.50	12882
366	SI19	理1層	棒状鉄器	—	2.70	0.30	0.30	7296
367	SI69	床直	棒状鉄器	—	1.50	0.40	0.20	13353
368	515G	1c層	棒状鉄器	—	(3.20)	0.40	0.40	6950
369	SI50	理5層	棒状鉄器	—	(3.10)	0.50	0.20	—
370	SI72	理4層	棒状鉄器	—	1.50	0.30	0.30	13239
371	SI72	理4層	棒状鉄器	—	1.60	0.50	0.30	13048
372	SI62	埋2層	棒状鉄器	—	1.55	0.56	0.30	12148
373	504G	表土	棒状鉄器	—	(2.05)	0.50	0.45	—
374	SI19	理2層	棒状鉄器	—	2.80	0.40	0.25	7665
375	SI19	理1層	棒状鉄器	—	1.70	0.40	0.30	—
376	613G	1c層	棒状鉄器	—	2.20	1.00	0.55	—
377	SI75	—	棒状鉄器	—	1.10	0.50	0.20	13363
378	SI74	理3層	棒状鉄器	—	2.70	0.40	0.25	12916
379	SI80	理3層	棒状鉄器	—	2.80	0.30	0.20	12680
380	13IK	1b層	棒状鉄器	—	(2.10)	0.40	0.40	—
381	H2G	1c層	棒状鉄器	—	(2.25)	0.40	0.40	—
382	622G	1c層	棒状鉄器	—	(2.60)	0.30	0.30	—
383	SI41	床直	棒状鉄器	—	2.70	0.45	0.20	10417
384	SI32	埋土	棒状鉄器	—	1.50	0.40	0.35	6967
385	SI69	理2層	棒状鉄器	—	1.50	0.80	0.50	12294
386	630G	1c層	棒状鉄器	—	1.80	0.90	0.45	—
387	SI42	理2層	棒状鉄器	—	(2.30)	0.50	0.70	10354
388	SI80	理3層	棒状鉄器	—	1.70	0.70	0.50	—
389	SI80	理3層	棒状鉄器	—	1.90	0.70	0.60	12691
390	13IK	1c層	棒状鉄器	—	(3.00)	0.40	0.45	—
391	SI79	—	棒状鉄器	—	(3.60)	0.80	0.40	—
392	508G	—	棒状鉄器	—	(3.80)	0.45	0.40	—
393	SI69	理1層	棒状鉄器	—	(2.10)	0.70	0.50	12299
394	SI80	理2層	棒状鉄器	—	(2.10)	0.40	0.20	—
395	17IK	1c層	棒状鉄器	—	(2.70)	0.50	0.40	—
396	G3G	1b層	棒状鉄器	—	(2.80)	0.40	0.40	—
397	19IK	1b層	棒状鉄器	—	(3.50)	0.60	0.40	—
398	578G	1b層	棒状鉄器	—	(6.30)	0.60	0.50	—
399	SI75	柱穴	棒状鉄器	—	6.00	0.70	0.30	—
400	SI13	理3層	長条形鉄器	—	4.90	0.60	0.20	7405
401	142G	1c層	尖端工具	—	(4.30)	1.10	0.15	—
402	501G	埋1層	棒状鉄器	—	(2.40)	1.40	0.40	—
403	SI30	埋2層	棒状鉄器	—	3.75	1.05	0.30	7159
404	SI48	埋2層	長条形鉄器	—	3.50	0.90	0.20	10758
405	SI80	埋3層	長条形鉄器	—	1.70	0.30	0.10	12683
406	SI39	理1層	長条形鉄器	—	(1.60)	0.40	0.10	9818
407	SI80	理2層	長条形鉄器	—	1.50	0.70	0.20	—
408	SI49	埋1層	長条形鉄器	—	1.00	0.50	0.10	10273
409	SI72	理4層	長条形鉄器	—	1.50	0.80	0.25	12584
410	F 3 G	1b層	長条形鉄器	—	2.50	0.55	0.20	9540
411	SI30	理3層	長条形鉄器	—	(1.95)	0.60	0.20	8357
412	SI17	理1層	長条形鉄器	—	(2.60)	0.40	0.15	9462
413	SI72	理4層	長条形鉄器	—	(1.60)	(0.50)	(0.20)	12933
414	SI13	床1層	長条形鉄器	—	2.30	0.60	0.10	9286
415	SI13	埋3層	長条形鉄器	—	3.00	0.65	0.20	7993
416	SI24	埋3層	長条形鉄器	—	1.90	0.80	0.10	7140
417	SI74	埋2層	長条形鉄器	—	(2.10)	0.70	0.10	12888
418	15IK	1c層	長条形鉄器	—	(2.10)	0.70	0.20	—
419	SI63	埋3層	長条形鉄器	—	(2.30)	0.45	0.10	11532
420	SI48	埋9層	長条形鉄器	—	(2.40)	0.65	0.15	11407

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
421	SI80	理3層	長条形鉄器	—	3.40	0.60	0.10	12664
422	11IK	表土	長条形鉄器	—	(3.20)	0.95	0.20	—
423	SI48	理9層	船底形鉄器	—	4.90	1.60	0.20	11394
424	SI22	理3層	船底形鉄器	—	3.30	1.85	0.15	7007
425	540G	1c層	船底形鉄器	—	2.10	1.25	0.15	—
426	SI48	理2層	船底形鉄器	—	2.55	1.80	0.20	10425
427	518G	1c層	船底形鉄器	—	2.00	1.70	0.25	—
428	537G	1c層	船底形鉄器	—	2.10	1.50	0.15	—
429	535G	1c層	船底形鉄器	—	2.00	1.60	(0.20)	—
430	SI22	埋1層	鍔先	方形板	5.10	(2.70)	0.20	6983
431	SI48	埋2層	鍔先	方形板	(3.90)	3.00	0.50	10740
432	SD11	埋5層	鍔先	方形板	4.60	(4.00)	0.20	10578
433	SI30	埋3層	鍔先	方形板	4.00	(2.90)	0.30	8294
434	SI43	埋1層	鍐・鍔先	—	(2.40)	(4.50)	0.30	—
435	517G	1c層	鍐	—	13.20	2.55	0.30	6958
436	514G	1c層	鍐	—	5.50	(4.10)	0.10	—
437	534G	1c層	鍐	—	(4.20)	2.50	0.20	—
438	523G	1c層	鍐	—	(3.80)	(2.50)	0.20	—
439	14IK	表土	鍐	—	(3.65)	(2.00)	0.20	—
440	SI15	理3層	鍐	—	(5.20)	1.20	0.20	8370
441	SI35	理1層	鍐	—	(3.90)	1.50	0.20	9777
442	SI63	埋4層	摘鍐	—	9.90	3.00	0.15	11542
443	SI14	理3層	摘鍐	—	7.80	2.60	0.20	7317
444	SI14	埋1層	摘鍐	—	7.60	2.60	0.15	7014
445	SI43	理4層	摘鍐	—	8.20	3.25	0.20	11771
446	SI23	埋1層	摘鍐	—	8.90	3.00	0.10	7085, 7086
447	SI54	埋6層	摘鍐	—	7.20	2.70	0.15	11377
448	SI51	埋3層	摘鍐	—	7.20	3.30	0.15	10848
449	SI14	埋1層	摘鍐	—	7.90	2.00	0.20	6990
450	SI53	—	摘鍐	—	8.95	2.20	0.20	—
451	SI18	埋1層	摘鍐	—	(7.30)	2.70	1.50	9884
452	SI30	埋1層	摘鍐	—	9.20	2.70	0.20	7780
453	SI72	理1層	摘鍐	—	(4.90)	2.65	0.20	12281
454	SI19	埋2層	摘鍐	—	(4.70)	2.90	1.50	7312
455	552G	1b層	摘鍐	—	(4.75)	3.00	0.25	10275
456	SI69	理1層	摘鍐	—	(1.90)	2.80	1.50	12292
457	SI19	埋2層	摘鍐	—	(2.70)	2.50	0.20	7157
458	ST183	埋1層	三角形鉄片	—	1.20	1.00	0.30	—
459	SX22	埋1層	三角形鉄片	—	1.50	1.50	0.15	—
460	SI54	理5層	三角形鉄片	—	1.60	1.25	0.15	11246
461	SI52	理3層	三角形鉄片	—	1.40	1.10	0.10	10805
462	SI80	埋3層	三角形鉄片	—	1.50	1.00	0.10	12676
463	SI74	理2層	三角形鉄片	—	1.50	0.70	1.00	12886
464	SI14	埋1層	三角形鉄片	—	1.40	1.00	0.10	—
465	SI15	理3層	三角形鉄片	—	1.90	1.40	0.10	8368
466	525G	1c層	三角形鉄片	—	1.80	0.90	0.10	6964
467	SI66	理3層	三角形鉄片	—	1.60	1.25	0.10	12266
468	SI51	埋1層	三角形鉄片	—	1.60	1.40	0.15	10567
469	SX10	最下層	三角形鉄片	—	1.30	0.90	0.20	—
470	SX10	下層	三角形鉄片	—	1.00	1.50	0.10	RP1385
471	SX10	下層	三角形鉄片	—	0.80	1.70	0.15	RP1385
472	SI80	埋3層	三角形鉄片	—	0.80	1.50	0.15	12670
473	SI15	埋3層	三角形鉄片	—	1.91	1.40	0.10	8372
474	514G	1c層	三角形鉄片	—	1.49	1.90	0.21	—
475	SI24	埋1層	三角形鉄片	—	1.50	1.85	0.10	6996
476	SI13	埋1層	三角形鉄片	—	1.50	1.12	0.15	7301
477	SI51	埋2層	三角形鉄片	—	1.80	1.30	0.15	10750
478	SI53	埋3層	三角形鉄片	—	1.20	1.20	0.15	10844
479	SI13	埋3層	三角形鉄片	—	1.50	1.40	0.10	7735
480	SI30	埋5層	三角形鉄片	—	1.50	1.00	0.15	7146
481	SI48	埋2層	三角形鉄片	—	2.10	1.80	0.15	—
482	SI39	埋3層	三角形鉄片	—	2.10	1.20	0.15	10277
483	SI15	埋3層	三角形鉄片	—	1.60	1.50	0.15	8369
484	SI24	埋2層	三角形鉄片	—	1.60	1.50	0.20	—
485	SI41	床直	三角形鉄片	—	2.00	1.10	0.20	10418
486	SI13	床1層	三角形鉄片	—	1.60	1.15	0.10	9173
487	大トレ9	表土	三角形鉄片	—	1.50	2.50	0.20	—
488	SI15	床直	三角形鉄片	—	2.20	2.00	0.20	9645
489	SI22	埋1層	三角形鉄片	—	2.05	0.75	0.12	6988
490	SI44	埋2層	三角形鉄片	—	2.40	1.70	0.40	—

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
491	SI15	埋2層	三角形鉄片	—	1.60	1.60	0.10	9538
492	SI73	埋2層	三角形鉄片	—	1.60	1.50	0.15	12602
493	SI47	埋3層	三角形鉄片	—	2.10	1.70	0.10	10846
494	SX11	—	三角形鉄片	—	1.60	1.60	1.00	—
495	SI15	埋2層	三角形鉄片	—	2.00	1.00	0.15	7996
496	SI80	埋3層	三角形鉄片	—	1.10	1.60	0.15	12686
497	SI50	埋1層	三角形鉄片	—	2.10	1.00	0.20	10840
498	SI24	埋1層	三角形鉄片	—	1.85	0.90	0.10	7062
499	518G	1c層	三角形鉄片	—	1.60	1.25	0.10	—
500	550G	1c層	三角形鉄片	—	2.10	1.80	0.10	—
501	SI30	埋3層	三角形鉄片	—	1.15	2.05	0.20	8356
502	595G	1c層	三角形鉄片	—	2.60	1.10	0.20	—
503	547G	1b層	三角形鉄片	—	2.00	1.80	0.30	—
504	SD11	埋5層	三角形鉄片	—	2.90	2.70	0.30	10606
505	SI51	埋2層	三角形鉄片	—	1.60	2.50	0.10	10753
506	ST121	埋1層	三角形鉄片	—	2.20	(1.60)	0.10	5079
507	SI72	埋4層	三角形鉄片	—	2.90	1.60	0.15	13046
508	SI50	—	三角形鉄片	—	2.50	(2.60)	0.20	—
509	SI43	埋1層	三角形鉄片	—	2.80	1.60	0.30	—
510	SI42	埋4層	三角形鉄片	—	2.45	1.30	0.10	10474
511	SI74	埋2層	三角形鉄片	—	2.70	1.80	0.20	12879
512	554G	1c層	三角形鉄片	—	2.90	2.00	0.15	—
513	SI23	埋4層	三角形鉄片	—	2.60	1.80	0.10	—
514	SI75	埋2層	三角形鉄片	—	2.50	1.50	0.15	—
515	SI13	埋1層	三角形鉄片	—	3.10	1.30	0.10	7000
516	SI20	埋2層	鉄片	—	2.10	1.30	0.20	—
517	SI54	埋2層	鉄片	—	(3.00)	1.60	0.20	10763
518	SI43	埋1層	鉄片	—	2.55	1.20	0.30	—
519	ST243	主体部	鉄片	—	(2.10)	1.60	0.10	6956
520	SH48	埋9層	鉄片	—	2.90	2.80	0.10	—
521	SI2	埋1層	鉄片	—	2.40	2.20	0.10	—
522	SI15	埋1層	鉄片	—	2.40	2.10	0.30	8053
523	SI48	埋2層	鉄片	—	1.80	1.00	0.20	11180
524	SI39	埋3層	鉄片	—	(1.30)	0.60	0.20	—
525	SI33	床1層	鉄片	—	2.60	0.50	0.30	9494
526	SI24	埋2層	鉄片	—	2.30	1.00	0.25	8557
527	13IK	1c層	鉄片	—	2.50	0.85	0.20	—
528	SI39	埋3層	鉄片	—	(2.00)	0.80	0.30	9915
529	SI15	埋2層	鉄片	—	3.25	1.35	0.20	8970
530	563G	1c層	鉄片	—	4.60	1.75	0.30	—
531	SI48	埋1層	鉄片	—	2.20	0.50	0.20	10738
532	SI75	柱穴	鉄片	—	3.30	0.50	0.20	—
533	ST163	主体部	鉄片	—	(2.40)	0.60	0.20	3348
534	SI30	埋1層	鉄片	—	3.00	0.70	0.30	7070
535	SI51	埋1層	鉄片	—	2.20	0.70	0.20	—
536	SI50	埋4層	鉄片	—	(2.50)	0.60	0.20	10841
537	SI24	埋1層	鉄片	—	2.60	1.00	0.10	6991
538	E3G	1c層	鉄片	—	2.20	0.70	0.20	—
539	SI30	埋3層	鉄片	—	2.79	0.95	0.30	8057
540	SI40	埋4層	鉄片	—	1.80	1.00	0.10	10486
541	SI40	埋4層	鉄片	—	1.40	1.15	0.20	10490
542	SI24	埋2層	鉄片	—	2.70	1.10	0.20	7134
543	SI72	埋1層	鉄片	—	2.70	1.50	0.20	—
544	SI72	埋1層	鉄片	—	2.40	1.20	0.20	—
545	76G	1c層	鉄片	—	2.40	1.20	0.10	—
546	G2G	1c層	鉄片	—	2.40	0.90	0.18	—
547	SI9	埋1層	鉄片	—	(2.70)	1.30	0.30	4232
548	SI72	埋1層	鉄片	—	2.20	0.85	0.20	—
549	SI72	埋1層	鉄片	—	4.20	0.80	0.15	12290
550	SI75	柱穴	鉄片	—	3.30	0.65	0.10	—
551	SI22	埋1層	鉄片	—	(4.20)	1.60	0.20	6999
552	SI79	埋2層	鉄片	—	(3.70)	1.50	0.20	—
553	SI157	埋1層	鉄片	—	(1.40)	1.10	0.15	—
554	SI51	埋3層	鉄片	—	(3.08)	0.70	0.35	—
555	SI74	埋2層	鉄片	—	(4.50)	0.65	0.20	12877
556	SI51	埋1層	鉄片	—	(4.80)	(0.70)	0.20	10421
557	SI3	—	鉄片	—	(3.60)	0.90	0.10	1291
558	SI30	埋3層	鉄片	—	3.10	1.10	0.20	7737
559	SI43	埋1層	鉄片	—	4.20	1.30	0.15	11528
560	SI75	トレンチ	鉄片	—	(4.10)	(1.80)	0.25	13364

RM	出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
561	SH42	埋2層	鉄片	—	0.70	1.10	0.10	10348
562	SI15	埋2層	鉄片	—	1.40	2.00	0.10	8338
563	SI24	埋1層	鉄片	—	1.90	2.00	0.15	7037
564	522G	1c層	鉄片	—	(4.70)	2.90	0.30	6953
565	SH48	埋6層	鉄片	—	3.80	2.45	0.40	11018
566	SK39	—	鉄片	—	3.85	5.30	0.25	1203
567	SI30	埋2層	鉄片	—	(2.30)	1.40	0.15	7163
568	SK34	—	鉄片	—	(2.30)	1.50	0.15	1204
569	SI69	埋2層	鉄片	—	(2.00)	1.20	0.10	—
570	502G	1c層	鉄片	—	(2.00)	1.40	0.10	—
571	SI3	上層	鉄片	—	2.7	1.60	0.10	1762
572	A3G	1b層	鉄片	—	2.3	1.50	0.20	9672
573	SI69	埋1層	鉄片	—	2.8	2.70	0.15	12307
574	SI30	埋1層	鉄片	—	3.7	1.30	0.25	6982
575	7IK	表土	鉄片	—	2.15	1.40	0.10	—
576	SI23	埋1層	鉄片	—	(1.40)	0.35	0.30	7087
577	SI32	埋1層	鉄片	—	1.55	0.30	0.20	7008
578	SI80	埋3層	鉄片	—	2.0	0.50	0.20	12681
579	SI39	埋2層	鉄片	—	2.2	0.50	0.20	—
580	15IK	1c層	鉄片	—	(4.75)	3.00	0.25	—
581	501G	1c層	鉄片	—	(2.90)	1.20	0.20	6887
582	SI40	埋2層	鉄片	—	3.2	1.70	0.20	10488
583	SI68	埋1層	鉄片	—	(3.30)	1.30	0.30	—
584	SI40	埋1層	鉄片	—	(2.30)	0.60	0.25	9773
585	ST183	埋1層	鉄片	—	(2.50)	1.50	0.15	4118
586	SI40	埋1層	鉄片	—	2.3	1.30	0.55	10482
587	SI48	埋9層	鉄片	—	2.2	1.50	0.50	—
588	48G	1a層	鉄片	—	2.6	1.80	0.55	—
589	SI30	埋3層	鉄片	—	1.6	1.40	0.40	8340
590	SX27	埋2層	鉄片	—	(2.20)	2.00	0.40	6952
591	434G	攢乱	鉄片	—	3.8	1.30	0.50	—
592	SD11	埋5層	鉄片	—	5.3	1.70	0.30	10596
593	14IK	表土	鉄片	—	4.4	2.70	0.30	—
594	SI4	埋2層	鉄片	—	4.0	1.70	0.50	—
595	SI63	埋3層	鉄片	—	(3.00)	2.30	0.30	11572
596	138G	1c層	鉄片	—	2.0	2.05	0.40	—
597	SD10	礫下	鉄片	—	1.9	1.90	0.40	—
598	SI54	—	鉄塊	—	3.8	3.60	1.10	10569.1
599	SI54	—	鉄塊	—	3.0	2.30	1.50	10569.2
600	SI23	埋5層	鉄塊	—	3.9	2.20	1.30	7605
601	7IK	表土	鉄片	—	(4.90)	4.00	0.60	—
602	SX10	最下層	鉄片	—	2.60	1.20	0.20	5811
603	SI24	トレンチ	鉄片	—	(2.70)	0.30	0.15	7004
604	SI69	埋1層	鉄片	—	1.80	(1.30)	0.15	12300
605	13IK	1b層	鉄片	—	1.80	0.90	0.10	—
606	13IK	1層	鉄片	—	1.78	0.90	0.13	—
607	13IK	1b層	鉄片	—	2.15	1.30	0.10	—
608	E4G	1b層	鉄片	—	2.48	1.10	0.10	—
609	F4G	1b層	鉄片	—	(2.08)	0.90	0.13	—
610	SI53	埋1層	鉄片	—	3.35	1.20	0.35	10845
611	SD8	2層	鉄片	—	(2.35)	1.60	0.15	—
612	497G	1c層	鉄片	—	1.55	(2.20)	0.10	6886
613	142G	1c層	鉄片	—	2.30	1.55	0.30	—
614	SI39	埋2層	鉄片	—	0.70	0.85	0.10	10028
615	SI39	埋1層	鉄片	—	1.40	(1.30)	0.20	9817
616	SX10	中層	鉄片	—	1.40	1.20	0.15	—
617	SI39	埋3層	鉄片	—	1.50	1.10	0.20	9916
618	SI30	埋3層	鉄片	—	1.40	0.85	0.10	—
619	11IK	表土	鉄片	—	1.60	1.70	0.10	—
620	SI14	埋3層	鉄片	—	1.10	1.10	0.10	—
621	SD10	埋3層	鉄片	—	(1.80)	0.70	0.20	9171
622	509G	表土	鉄片	—	(1.80)	(1.20)	0.50	—
623	SX10	最下層	鉄片	—	(2.00)	1.00	0.15	—
624	76G	1c層	鉄片	—	1.50	1.20	0.10	—
625	SX10	最下層	鉄片	—	1.20	1.20	0.20	—
626	SI30	埋1層	鉄片	—	2.90	1.30	0.20	7662
627	G2G	1c層	鉄片	—	2.05	1.56	0.10	—
628	SI42	埋2層	鉄片	—	1.30	0.90	0.20	10350
629	SX22	埋1層	鉄片	—	2.50	1.50	0.30	—
630	SI153	埋1層	鉄片	—	1.90	1.60	0.10	—

RM 出土地点	層位	形式	細別	長さ(cm)	幅	厚さ	取上番号
631 SI69	埋2層	鉄片	—	1.20	1.45	0.20	12293
632 E4G	1b層	鉄片	—	1.10	1.00	0.10	—
633 SI69	埋3層	鉄片	—	1.70	1.90	0.20	—
634 SI3	—	鉄片	—	1.80	1.70	0.20	—
635 SI22	床1層	鉄片	—	1.60	1.10	0.20	9186
636 SI72	埋1層	鉄片	—	1.50	1.50	0.10	12284
637 SI42	埋2層	鉄片	—	1.10	1.20	0.10	10352
638 SI42	埋2層	鉄片	—	1.20	1.00	0.30	10349
639 SI19	埋4層	鉄片	—	1.60	1.25	0.10	—
640 567G	1c層	鉄片	—	1.40	1.30	0.15	—
641 508G	1b層	鉄片	—	1.30	1.10	0.20	—
642 SI75	柱穴	鉄片	—	1.60	1.50	0.10	—
643 SI74	埋2層	鉄片	—	1.20	1.60	0.10	12884
644 SI24	埋1層	鉄片	—	1.60	1.35	0.15	—
645 SI40	埋1層	鉄片	—	1.45	1.65	0.10	—
646 SI23	埋3層	鉄片	—	1.10	2.00	0.10	9150
647 SX10	下層	鉄片	—	1.80	1.30	0.20	RP1385
648 SI68	埋1層	鉄片	—	1.90	1.40	0.10	—
649 SX10	最下層	鉄片	—	1.90	1.50	0.15	—
650 499G	1c層	鉄片	—	1.60	1.65	0.15	—
651 SI79	—	鉄片	—	1.50	1.10	0.20	—
652 111K	表土	鉄片	—	1.20	1.80	0.10	—
653 76G	1c層	鉄片	—	1.40	1.00	0.15	—
654 SX10	上層	鉄片	—	1.30	1.20	0.15	5242
655 SI3	上層	鉄片	—	1.80	1.70	0.10	1735
656 SX10	下層	鉄片	—	(1.80)	1.80	0.20	—
657 524G	1c層	鉄片	—	2.60	1.60	0.20	—
658 SI72	埋1層	鉄片	—	2.20	1.70	1.50	12285
659 SX10	中層	鉄片	—	1.90	2.00	0.16	—
660 21K	埋1層	鉄片	—	2.30	2.00	0.15	—
661 522G	1c層	鉄片	—	2.60	1.50	0.20	6963
662 SI66	埋1層	鉄片	—	2.50	2.30	0.20	—
663 SI10	埋1層	鉄片	—	2.10	1.60	0.50	—
664 221G	1c層	鉄片	—	3.00	2.10	0.30	—
665 SI48	—	鉄織	—	—	—	—	—
666 463G	1c層	鉄織	—	—	—	—	—
667 大トレ12	表土	刀子	—	—	—	—	—
668 SX10	下層	鑿・楔	—	—	—	—	1392
669 141K	擾乱	棒状鉄片	—	—	—	—	0.00
670 大トレ2	—	鉄片	—	—	—	—	—
671 SI35	埋1層	釘	—	—	—	—	9782
672 C3G	1b層	釘	—	—	—	—	9655
673 SI80	埋3層	鉄滓	—	3.10	1.80	—	12695
674 597G	1c層	鉄滓	—	2.10	1.40	—	—
675 SI10	埋1層	鉄滓	—	2.80	1.80	—	—
676 556G	1c層	鉄滓	—	3.10	2.60	—	—
677 539G	1b層	鉄滓	—	3.30	2.10	—	—
678 589G	1c層	鉄滓	—	3.40	2.40	—	13357
679 553G	1c層	鉄滓	—	3.10	2.30	—	—
680 544G	1c層	鉄滓	—	3.20	2.70	—	—
681 547G	1c層	鉄滓	—	3.60	2.10	—	—
682 597G	1c層	鉄滓	—	3.40	1.60	—	—
683 A4G	1b層	鉄滓	—	3.50	2.70	—	—
684 131K	1c層	鉄滓	—	4.40	3.70	—	—
685 171K	1c層	鉄滓	—	4.40	4.20	—	—
686 171K	擾乱	鉄滓	—	4.90	3.50	—	—
687 466G	1c層	鉄滓	—	5.40	3.40	—	—
688 466G	1c層	鉄滓	—	5.50	3.40	—	—
689 A4G	1b層	鉄滓	—	14.30	4.90	—	9762

幅・津留遺跡出土遺物の諸問題

宮崎 敬士

はじめに

幅・津留遺跡から検出された石製品（RQ）のうち、阿蘇地域に固有の石製品が2種類ある。一つは竪穴建物、土壌から検出された角礫であり、「標柱石」として取り扱われていた角礫を含む。もう一つは竪穴建物、溝から検出されたイノシシ形石製品であり、子孫繁栄を願う「祭祀遺物」として取り扱われていた石製品である。これらの石製品に若干の検討を加え、発掘調査の成果報告とする。

また、幅・津留遺跡から検出された土製品（RP）のうち、赤彩土器、粗製表の出土量を検討し、その結果を記述する。

1 角礫

阿蘇地域の弥生時代後期の竪穴建物では、しばしば、竪穴建物から角礫が検出される。これらは安山岩が板状節理にそって破碎した礫であり、板状、柱状の形態を呈している。長さは60cm前後、幅10~20cmに収まる場合がほとんどであり、敲打、研磨など、加工痕は認められない。検出状況はさまざまであるが、竪穴建物埋土に含まれた角礫群であり、竪穴建物の内陣に散在している。竪穴建物が廃絶された後、竪穴の埋め戻し過程で遺棄された土器群に複合する例が多く、廃絶に伴い火が用いられることが多いため煤などが付着し被熱痕を有する例もある。

この角礫は、かつては、炭化材、煤、被熱痕を作らる群であることから、茅葺き、板葺きの屋根を構成する屋根石（屋重）が住居焼失により崩落、堆積した可能性が検討された（例：狩尾遺跡群の発掘調査）。その後、竪穴建物の埋め戻しは竪穴外縁部から中央に向かい進行し、途中、竪穴中央に形成された土壌状の残存空間に向かって土器などが遺棄されることが示され（例：小野原遺跡群の発掘調査）、遺棄された文物の一つとして捉えることが可能となった。小野原遺跡群では、竪穴建物の埋土が基本層序の下位層が擬疊となり混在したシルト層であることから、竪穴は人為により埋め戻され、かつ文物の遺棄を含めた全作業が短期間にうちに完了している、と分析されている。

幅・津留遺跡の発掘作業でも、いくつかの竪穴建物

みやざき・たかし、熊本県立装飾古墳館

から角礫群が出土している。そこで、取り上げられた角礫すべてを対象として、接合作業を実施した。その結果、竪穴遺構17棟（SI13、17、18、19、20、27、30、35、36、48、51、52、53、55、69、72、78）、土壤1基（514グリッドの「標柱石」柱穴）において、角礫31個体（RQ910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、923、924、926、929、930、933、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949）が接合した。最も接合例が多いのはSI48の10個体であり、SI72の5個体、SI30、51の3個体、SI18、20、55の2個体、その他1個体となる。異なる遺構間で接合した角礫は7個体あり、SI48とSI55（RQ912）、SI48とSI52（RQ914）、SI48とSI51（RQ918）、「標柱石」とSI13とSI20（RQ919）、SI27とSI30（RQ933）、SI69とSI78（RQ937）、SI18とSI17（RQ946）である。長さなどの比較参考とするため、接合しない角礫の一部、9例（RQ922、925、927、928、931、932、934、935、936）も併せて図示した。

接合の結果、柱状の角礫は長さ60cm程度まで幅は20cm程度までの法量に収まり、規格性をもつ礫群あるいは選択的に搬入された礫群となる可能性が高くなった。この法量に一致する構造物を竪穴建物の付帯施設から探せば、Kピット支柱穴が第一候補となる。2本1対の角礫がKピット支柱となった場合、同一主軸状に隣接する炉とも関連した構造物も想定、検討していく必要性があると考える。

なお、外れ値を示す一群（RQ945~949）を石皿と判断できることも可能となった。接合の結果、板状の角礫のうち、RQ945は法量から、RQ946は全体的にベンガラの沈着が認められるため、RQ948は広範囲で使用痕が認められ一部には敲打痕があるため、RQ949は全体に使用痕が認められ角は丸みを帯びていているため、法量、形態、使用痕跡から石皿と確定できたのである。

また、12区514グリッドに位置する「標柱石」がSI13、SI20から検出された角礫と接合する例（RQ919）が確認された。角礫の接合面には、摩滅、風化などはない。SI13、SI20とも長脚化した台付脚、櫛掛け流水

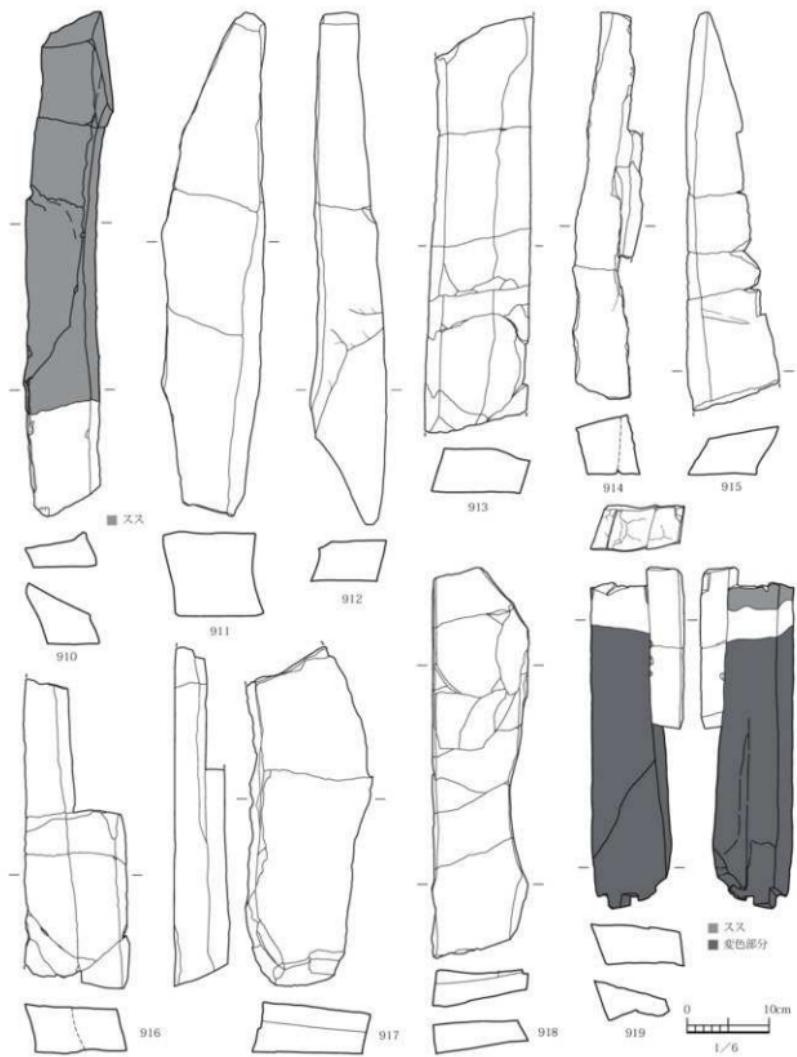


図 374 角砾実測図 (1)

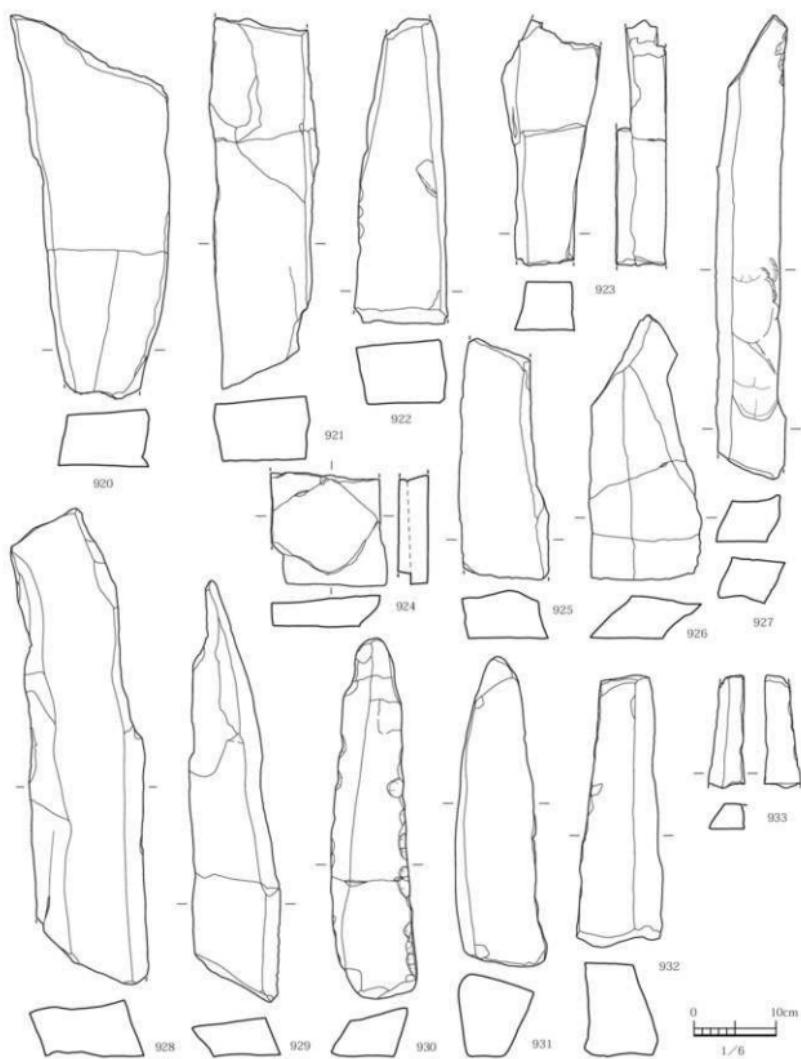


図 375 角砾実測図 (2)

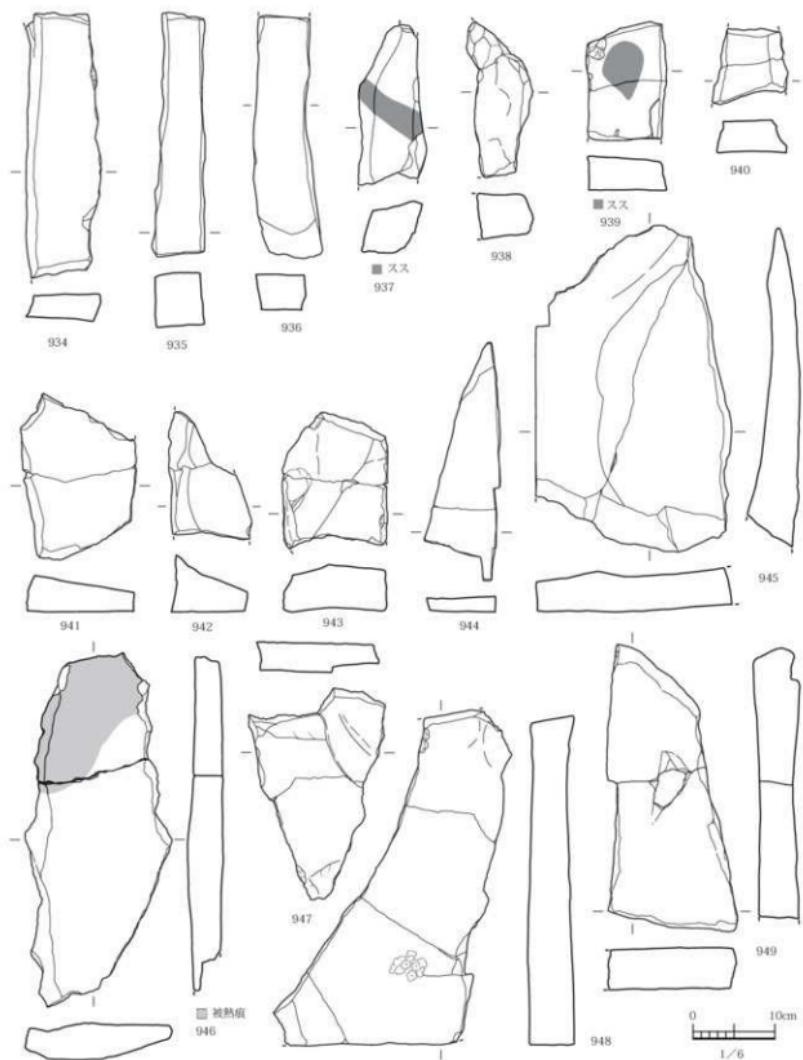


図 376 角砾実測図 (3)

表5 幅・津留遺跡出土角礫観察表

RQ	区	遺構名	層	形式	石材	長さ(cm)	幅	厚さ	重さ(g)	接合	取上番号	備考
910	14	SI48	埋2層	角礫	安山岩	61.80	9.30	7.40	4,500	接合	10889 10890	スス付着 一面に剥ぎ取ったような痕跡あり
911	14	SI48	埋9層	角礫	安山岩	61.90	12.60	10.40	12,100	接合	11418 11503	一部にスス付着
912	14	SI48 SI55	埋2層	角礫	安山岩	62.70	9.30	5.10	3,960	接合	10894 11089	
913	14	SI48	埋2層 埋3層 埋1層	角礫	安山岩	41.30	12.40	6.50	6,500	接合	10891 10892 11350	
914	14	SI48 SI52 大トレ8	埋9層 埋1層 表土	角礫	安山岩	47.60	8.50	7.30	3,750	接合	11403 10641 10646	一部に茶褐色の変色部分あり
915	14	SI48	埋2層 埋1層	角礫	安山岩	49.00	11.20	5.90	2,900	接合	10888 10948	
916	14	SI48	埋2層	角礫	安山岩	37.90	13.00	6.10	4,025	接合	10886 10887 10907	
			埋1層 埋7層								10949 11253 11254	
917	14	SI48	埋2層 埋9層	角礫	安山岩	41.70	15.60	6.90	5,900	接合	11062 11401	
918	14	SI48	埋2層	角礫	安山岩	48.20	11.90	4.00	3,700	接合	10885 10910 10912 10914 10915 10916 10981	
		SI51	埋2層								11022 11023 11024	
919	12	東のムラ SI13 SI20	角礫	安山岩		42.10	11.50	5.70	3,960	接合	9669 7515 8946	標準石 上端部に幅3cm程度の黒変がある 上端部から4~7cmにかけて変色ラインあり 下端部は土に埋めた際に折られた
920	17	SI72	埋2層	角礫	安山岩	47.10	19.30	7.05	7,450	接合	12537 12538	集石
921	17	SI72	埋2層	角礫	安山岩	45.60	13.30	7.90	7,850	接合	12508	集石
922	17	SI72	埋4層	角礫	安山岩	37.40	11.50	7.90	5,589		12925	集石
923	17	SI72	埋4層	角礫	安山岩	30.20	12.10	6.50	2,930	接合	12992 12999	集石
924	17	SI72 大トレ2	埋3層	角礫	安山岩	13.90	14.30	3.90	843	接合	13045	集石
925	17	SI72	埋3層	角礫	安山岩	29.60	11.10	6.90	2,977		12926	集石
926	17	SI72	埋2層 埋4層	角礫	安山岩	32.60	13.90	5.20	2,989	接合	12471 13001	集石
927	17	SI72	埋3層	角礫	安山岩	56.90	8.60	5.60	3,900		12927	集石 部分的に剥ぎ取痕跡あり
928	13	SI35	埋2層	角礫	安山岩	58.70	14.10	7.00	8,950		10116	
929	14	SI51	埋2層	角礫	安山岩	5.80	10.80	4.70	3,804	接合	11031 11032	
930	14	SI51	埋2層	角礫	安山岩	44.30	10.60	6.00	3,650	接合	11025	石を割る為のノミ痕が見られる
931	14	SI51	埋2層	角礫	安山岩	38.10	11.20	10.10	4,860		11052	平滑な使用面あり
932	14	SD11	埋3層	角礫	安山岩	33.40	10.60	11.50	6,100		10576	平滑な使用痕あり
933	12	SI27 SI30	埋1層	角礫	安山岩	13.85	4.50	3.10	310	接合	9032	

RQ	区	遺構名	層	形式	石材	長さ(cm)	幅	厚さ	重さ(g)	接合	取上番号	備考
934	14	SI55	理2層	角礫	安山岩	32.60	9.30	3.40	1,580		11090	
935	14	SI52	理3層	角礫	安山岩	29.90	6.60	6.70	1,952		10800	
936	14	SI53	理3層	角礫	安山岩	29.70	8.60	4.30	1,850		11424	
937	17	SI69	理1層	角礫	安山岩	19.70	8.40	6.40	1,240	接合	12304	スス付着
		SI78	理1層								12312	
938	12	SI20	理1層	角礫	安山岩	19.20	8.20	7.60	1,250	接合		
		505G	1c層									
939	14	SI48	理9層	角礫	安山岩	1460.00	10.00	4.20	1,130	接合	11486	スス付着
											11489	
940	14	SI55	理2層	角礫	安山岩	9.40	9.30	4.00	500	接合	11095	
		大トレ9西	表土									
941	14	SI53	理2層	角礫	安山岩	20.40	14.20	4.40	1,800	接合	11423	スス付着
		理3層									11431	
942	12	SI18	理1層	角礫	安山岩	15.70	10.20	7.00	1,100	接合	9426	
											9458	
943	12	SI30	理1層	角礫	安山岩	16.80	13.00	5.80	2,000	接合	8201	
		理3層										
944	12	SI30	理1層	角礫	安山岩	29.20	9.40	1.90	750	接合	8173	
945	13	SI35	理1層	角礫	安山岩	39.90	24.10	6.40	7,000	接合	10114	
		理2層									10146	
946	12	SI18	理1層	角礫	安山岩	43.60	18.00	4.50	4,250	接合	9921	節理面で剥離した大きな
		SI17	理1層								9422	剥片を石皿として使用したもののか、表面には全体的にベンガラの沈着が認められる
947	12	SI19	理1層	角礫	安山岩	26.00	16.80	3.70	1,900	接合	9166	
		理3層									8010	
948	14	544G	1c層	角礫	安山岩	41.20	29.10	5.60	7,650	接合	11509	広い面に使用痕あり
		545G									11507	表面の一部に敲打痕らしい痕跡あり
949	13	SI36	理2層	角礫	安山岩	35.30	16.10	5.60	5,130	接合	10260	表面の全体に使用痕が認められ、角は(欠損部分を除いて)丸みを帯びている。裏面の上部のくぼみは裏面を平坦にする目的で打ちいた痕跡

文を肩部に施した白川型口縁甌が組成する土器群が検出されている。この土器群は、弥生時代の幅・津留遺跡では新しい段階に属するため、SI13とSI20は弥生集落の終期に廃絶された堅穴建物となる。集落終期の遺物と、集落が営まれた時期にこそ機能する「標柱石」とが接合することは、いずれかが誤っていることを示している。報告者は、「標柱石」との解釈が誤りである、と考える。阿蘇地域の弥生時代後期の堅穴建物には、柱穴内から礫が検出される例（古くは下山西遺跡の発掘調査）があり、柱を支持する底石、小土壤を埋め戻す際の埋土、などの理解がなされている。「標柱石」は後者に含まれる可能性が非常に高い。

以上のように、堅穴建物から出土する角礫群は、接合作業により、規格性をもつ柱状の角礫と石皿の破片とに分離できることが明らかになった。接合率を高めれば、異なる遺構間の接合例の要因、柱状の角礫の用

途も解明されよう。今後の幅・津留遺跡の発掘調査において、類例が蓄積されることが必要である。

2 イノシシ形石製品

板状の円礫を、径の1/4程度で裁頭した切断面を底として、円弧の一端に抉りを入れた石製品を21点図示した。この抉り部が猪鼻に似ている石製品は、底面が平滑であることが特徴であり、その法量は高さ2cm～18cm、幅2cm～14cm、重さ2g～700gと幅広い在り様をみせている。ただ、底面の法量に着目すれば、底幅2cmまでの小型品、5cm程の大型品、その中間の中型品に弁別することもできる。小型品ほど板状にきっちりと加工され、底面の平滑具合も高く、大型品ほど側面が膨らみ、底面の平面形が乱れてくる。主に多孔質の岩津（スコリア）を素材としており、安山岩製の1点（RQ968）を含め、幅・津留遺跡の近



図 377 イノシシ形石製品実測図

表 6 幅・津留遺跡出土イノシシ形石製品観察表

RQ	区	遺構名	層	形式	石材	長さ(cm)	幅	厚さ	重さ(g)	取上番号	備考
950	12	SI19	埋1層	イノシシ形 石製品	スコリア	1.5	2.2	1.1	1.5	8047	全ての面が磨り面で形成されている
951	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	2.2	2.8	0.7	2.1	7016	右部欠損 その他の面に磨り面が見られる
952	12	SI24	埋1層	イノシシ形 石製品	スコリア	2.3	3.7	1.3	6.8	7192	すべての面が磨り面で形成されており、特に表・裏・下面が顕著である
953	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.0	4.3	1.8	15.0	7194	すべての面が顕著な磨り面で形成されている
954	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.1	4.7	1.4	10.9	7017	すべての面が磨り面で形成されている
955	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.8	5.9	1.6	19.2	7018	すべての面が顕著な磨り面で形成されている
956	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.2	5.6	1.7	16.5	7044	すべての面が顕著な磨り面で形成されている
957	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.6	5.4	1.7	14.7	7199	右側面を除くすべての面に磨り面あり、特に表・裏面下部・下面が顕著である
958	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.0	5.4	1.8	15.5	7193	ほぼすべての面が磨り面で形成されており、特に上面以外の面が顕著である
959	12	SI20	埋1層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.8	5.3	1.8	20.0		全面に磨り面あり、裏面に刃物が当たったと思われる痕がある
960	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.9	5.7	2.3	21.2	7019	すべての面が磨り面で形成されている
961	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.9	6.0	1.7	20.8	7191	すべての面が顕著な磨り面で形成されている
962	16	SI29	埋1層	イノシシ形 石製品	スコリア	4.0	6.3	1.4	29.3	12707	左端欠損 全体的に擦り痕あり、磨り面といはうほど面は形成されていない
963	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	3.7	3.4	1.6	11.2	7043	左部欠損、欠損部以外のすべての面に磨り面がみられる
964	15	SX28	埋5層	イノシシ形 石製品	スコリア	5.8	9.5	4.3	98.1	11623	すべての面に磨り面があるが、平らな磨り面は形成されていない
965	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	4.9	9.0	3.9	104.8	8375	すべての面に磨り面があるが、特に表・裏・下面が顕著である
966	15	SI43	埋1層	イノシシ形 石製品	スコリア	7.2	9.8	4.4	150.9		磨り面は表面のみみられる表裏とともに刃物が当たった痕がある
967	15	SX28	埋1層	イノシシ形 石製品	スコリア	7.4	10.2	3.6	195.1	11573	全面に磨り面があるが、平らな磨り面は形成されていない
968	20	SX28	砂層下	イノシシ形 石製品	安山岩	5.7	8.1	1.8	126.5	13515	すべての面に磨り痕があるが、他のイノシシ形石製品のように平らな磨り面は形成されない
969	12	SI24	埋3層	イノシシ形 石製品	スコリア	4.7	6.3	3.2	43.7	7190	すべての面に磨り面が見られる。裏面に刃物が当たった痕らしいものが見られる
970	15	SX28	埋6層	イノシシ形 石製品	スコリア	13.9	17.7	6.4	693.0	11838	磨り痕はあるが、平らな磨り面は形成されていない。表面に刃物が当たった痕がある

邊で容易に入手できる石材を用いている。

出土地点は、竪穴建物 SI24 が 13 点 (RQ951 ~ 958, 960, 961, 963, 965, 969)、居住域内の条溝 SX28 が 4 点 (RQ964, 967, 968, 970) であり、SI19, SI20, SI29, SI43 から 1 点ずつ検出された。SI24 出土資料は小型品と中型品 12 点が理 3 層から出土しており、この石製品がまとめた数量といくつかの種類をそろえて用を足す種類の道具であることを示唆している。

この石製品の特徴である平滑な底面は、この道具の機能部位に相当する、と見込まれる。きっちりと平滑面が保持されていることから、対象に底面を押圧しながら長軸方向に反復移動させる行為が道具の用途と維持に高い関連性をもっている、と考えてよい。例えば、金属材、石材などに平面をつくりつけるための研磨用品（砥石）、皮革、樹皮などに熱変形をほどこすための押圧用品（鎌）、などが候補となるであろう。

この石製品の類例を、日本列島内では知らない。対象を土製品にまで広げると、大分県の大野川流域に分布する土器片加工品がある。土器片加工品は、土器片を弦長 2 ~ 8cm 程度の半円形に再加工した土製品である。弥生時代後期末から古墳時代初めにかけて大野川中流域を中心に分布し、主に竪穴建物から出土する。I 遺構から 100 点以上が出土する例（舞田原遺跡、二本木遺跡、ともに豊後大野市所住）もあるが、用途や性格は不明である。周縁部に研磨が施された例が多い点、長さ 5cm 以下のサイズが多数を占める点が特徴である。

イノシシ形石製品と土器片加工品とは、形態、法量、時期が近似し、分布地域も隣接している。異なるのは、素材、厚さ、重さ、機能部位が特定できるか否か、の諸点である。今後の幅・津留遺跡の発掘調査において、類例が蓄積されることが必要である。

3 赤彩土器

赤彩土器は、ベンガラなどの赤色顔料を用いて彩色した土器である。遺構から出土した赤彩土器の破片量を、その重さを計ることにより比較した。計量の対象は図化できなかった土器片であり、図示した資料は除外している。これは、土器廃棄遺構は完形（復元）率

が高いため既に図示されていること、今次調査が道路事業に伴ったため遺構の一部発掘例が大半であること、を主な理由としている。

赤彩土器片の出土量は、土器廃棄溝 (SD2) の 1kg 近い出土量が最高であり、土壤墓 (ST8) の 1.0g (1 片) 出土例が最低である。遺構の種類別に出土量をみると、土壤墓 (ST) 19 基から 289.4g、溝 (SD, SX) 8 条から 1610.1g、竪穴建物 (SI) 53 棟から 2344.0g、土壤 (SK) 5 基から 70.0g が出土した。

土壤墓からの出土量は、幅地区 16 基 221.4g、津留地区 3 基 68.0g である。地区を問わず同程度の出土量であり、土壤墓埋土が埋め戻しにより形成される際、周辺の破片が混入したと判断できる。

溝のうち、土器廃棄遺構からの出土量は SD2 から 997.5g に上り、条溝からの出土量は SX22 から 131.5g、SX21 から 71.5g と僅少となる。

竪穴建物からの出土量は、幅地区 12 棟 1,000.6g、津留地区 45 棟 1,343.4g である。100g 以上を出土した竪穴建物はすべて幅地区に位置しており、赤彩土器は幅地区の集落存続時期に盛行したことが判明する。その一方で、津留地区でも多数の竪穴建物から出土していることから、赤彩土器が使用されなくなったわけではないことも判明しよう。

幅地区、津留地区とも土壤墓、竪穴建物の出土量に比して、条溝の出土量が（若干とはいえ）高い現象が認められる。これは遺構埋土の形成過程に要因を求めることができる。土壤墓は埋葬時に、竪穴建物は廻旋後に、埋め戻されるのに対し、条溝は集落存続期間に近い年月をかけて埋土が形成されてゆく。すなわち、それぞれ土壤墓は時間、竪穴建物は日、条溝は年を単位として堆積過程の進行する、との差異が存在し、堆積期間が長いほど包含物が累重し、増加する結果となるのである。

赤彩土器の出土量は、遺構の用途と堆積過程に規定されている。

4 粗製甕

粗製甕は、暗い褐色の胎土で厚手の器壁をつくり、砲弾形の体部に短い頸部を形成し、肩部に突帯を「工」字状に貼りつける例が多い甕である。弥生時代後期後

半に、大野川の上流域、中流域及び五ヶ瀬川の上流域に分布する。その胎土と厚さから、破片であっても弁別が容易い。粗製甕の出土量を、その重さを計ることにより比較した。計量の対象は図化できなかった土器片であり、図示した資料は除外している。

粗製甕の土器片は、64 遺構から 35,872.2g 出土している。その特徴は、幅地区では土器廃棄溝 (SX11) 1 条から 760.8g、竪穴建物 (SI) 2 棟から 32.1g の出土に限られ、その他すべてが津留地区から出土していることである。

津留地区における遺構種類別の出土量は、土壙墓 1 基 (ST307) から 9.0g、条溝 1 条 (SX28) から 11,252.2g、溝 1 条 (SD10) から 462.2g、竪穴建物 (SI) 51 棟から 23,309.8g、土壙 (SK) 4 基から 78.2g である。墓域には含まれず、居住域から検出されていることが判明する。居住域を囲繞する条溝からの出土量が最多となる現象は、赤彩土器と同様、条溝埋土の堆積過程が長期間なため包含物が累重し増加することに原因を求めることができよう。なお、土壙からは 1 片単位の出土量であり、粗製甕が建物内で用いられる傾向が高かったことを示唆している。竪穴建物の出土量は、SI72 の 3,101.8g から SI75 の 1 片 9.4g まで幅広い分布であるが、竪穴内に含まれている土器量の多寡と調査面積の広狭が影響していると考えられる。

粗製甕に共伴する土器群には、長脚化した台付甕、無脚化した甕が組成する。これらの甕は熊本の菊池川、白川、緑川、球磨川の各流域を包括した熊本地域に分布する土器であるので、ここでは在地甕と記述する。SI72 では、在地甕が長脚化した RP1849、無脚化した RP1864 が、粗製甕 RP1869 ~ 1871、1874 と共に検出されている。SI69 では、長脚化した RP1819、脚部を打ち欠くことにより無脚化した RP1815 が、粗製甕 RP1824 ~ 1829 と共に検出されている。SI23 では、長脚化した脚部をその中位まで打ち欠いた RP1108 が、粗製甕 RP1101 と共に検出されている。これらの事例は、在地甕と外來の粗製甕とが各々の変容形を複数揃えて複合している現象を示している。在地甕には、長脚化した甕、脚部を打ち欠いた甕、無脚化した甕の 3 形態が存在し、脚部の中位まで打ち欠く例と、脚部すべてを打ち欠く例等、細別することも

できる。この在地甕の 3 形態は、台付甕の長脚化とそれに続く無脚化の形態的な変遷として捉えることができるが、複数の遺構で共伴例が検出されるため時期差を認めることはできない。粗製甕には、無文、貼付文、沈線文の 3 形態が存在し、貼付文を突帯、ミミズ腫れ状突帯等に細別することもできる。なお、粗製甕には、完形品は 1 遺構、1 形態、1 個体の出土傾向が存在する。以上の内容は SI20 例で端的に示すことができよう。SI20 では、長脚化した甕 6 個体以上、脚部の中位まで打ち欠く甕 2 個体以上、脚部すべてを打ち欠く甕 2 個体以上、無脚化した甕 1 個体が、粗製甕の貼付文 (突帯) 1 個体 (RP1041)、貼付文 (ミミズ腫れ状突帯) 1 個体 (RP1039)、沈線文 2 個体 (頸部までの RP1040、体部上半までの RP1042) と共に検出されている。完形の粗製甕が共伴しなくなるのは、口縁径と最大径 (体部上半) の差が僅少化した砲弾形の形態となり、法量が小型化するとともに口縁部にもタタキが残存する在地甕 (RP1301、1306) が組成する SI42 の例であり、ここに時期的な段階を設定することができよう。

粗製甕は、主に竪穴建物から出土し墓域では検出されないこと、弥生時代後期の土器群に共伴することの 2 点が幅・津留遺跡の発掘調査で判明した。

表7 幅・津留遺跡赤彩土器出土量一覧

地区	区	遺構	重量(g)	地区	区	遺構	重量(g)
幅	1	遺構以外	1229.7	津留	17	SI70	27.4
津留	17	遺構以外	1165.1	幅	3	SI7	26.8
幅	1	SD2	997.5	津留	12	SI23	24.0
幅	2	遺構以外	789.0	幅	1	SD5	23.2
幅	3	遺構以外	565.1	津留	10	遺構以外	19.8
幅	4	遺構以外	451.6	津留	12	SI17	19.2
津留	14	遺構以外	385.7	幅	1	ST102	17.4
津留	15	SX28	338.0	津留	14	SI51	16.9
津留	15	遺構以外	311.3	幅	2	ST173	16.2
幅	3	SI2	307.4	津留	15	SI62	14.9
津留	16	遺構以外	287.5	津留	14	SI52	14.5
津留	13	遺構以外	236.3	津留	12	SD10	13.5
幅	3	SI3	147.1	津留	15	SI60	13.4
津留	9	SX22	131.5	幅	1	ST13	11.8
幅	4	SI10	128.7	津留	9	ST200	11.5
津留	9	遺構以外	123.5	幅	2	SI1	10.6
幅	3	SI8	107.1	津留	17	SI69	10.1
幅	5	遺構以外	106.9	幅	1	SK7	9.6
津留	12	遺構以外	101.3	津留	15	SI43	9.2
津留	12	SI30	96.7	津留	19	SK65	8.8
津留	20	遺構以外	89.8	津留	15	遺構以外	8.3
津留	16	SI80	80.7	津留	12	SI18	8.1
幅	7	SX21	71.5	幅	2	ピット	8.1
幅	3	SI5	71.2	津留	14	SI53	8.0
津留	12	SI19	71.1	津留	12	SI32	7.8
津留	12	SI14	66.7	幅	3	SI6	7.5
津留	13	SI36	65.7	幅	2	SK33	6.8
津留	12	SI20	63.7	津留	17	SI71	6.7
津留	12	SI13	60.9	幅	2	ST152	6.7
幅	2	ST175	60.2	津留	13	SI35	6.2
津留	12	SI15	60.1	津留	14	SI50	6.2
幅	3	SI4	57.2	津留	13	SI37	5.6
津留	13	SI41	57.1	津留	17	SI68	5.6
幅	4	SI9	55.7	津留	14	SI47	5.4
幅	2	ST171	54.2	幅	1	ST84・85	5.4
津留	9	SK216	51.9	津留	20	SI66	4.7
津留	14	SI48	51.6	津留	9	ST246	4.6
津留	17	SI73	49.4	津留	17	SI78	4.4
津留	14	SI54	48.8	幅	1	ST20	4.4
津留	14	SI55	47.2	幅	2	SD9	4.3
幅	4	SI11	46.5	津留	15	SI63	4.0
津留	12	SI16	45.5	津留	16	SK94	4.0
津留	15	SI61	42.9	津留	17	SI72	3.9
幅	3	SK34	40.8	津留	17	SI75	3.3
津留	12	SI24	39.6	幅	2	ST156	3.3
津留	12	SI22	37.6	幅	1	ST100	2.6
津留	13	SI39	36.1	幅	1	ST94	2.6
津留	19	遺構以外	35.9	津留	12	SI26	2.5
幅	4	SI12	34.8	幅	2	SR21	2.5
津留	13	SI40	33.1	幅	1	ST93	1.9
津留	11	遺構以外	32.0	幅	2	ST174	1.6
幅	1	SD1	30.6	幅	1	ST92	1.6
幅	2	ST159	30.5	幅	1	ST8	1.0
津留	15	SR75	29.2				
津留	12	SI21	28.5				
津留	13	SI42	28.4				

表8 幅・津留遺跡粗製甕出土量一覧

地区	区	遺構	重量(g)	備考	地区	区	遺構	重量(g)	備考
津留	15	SX28	11252.2		津留	17	SI73	31.8	
津留	14	遺構以外	6876.1		津留	16	SI29	31.0	
津留	12	遺構以外	5024.2		津留	12	SI17	26.3	
津留	17	SI72	3101.8		津留	14	SI49	25.8	
津留	15	遺構以外	2644.5		津留	13	遺構以外	25.4	ST1017
津留	17	SI69	2332.1		津留	12	SI28	25.2	
津留	20	遺構以外	1804.2		津留	13	SI35	24.5	
津留	12	SI23	1677.9		幅	4	SI12	19.3	
津留	14	SI53	1632.6		津留	15	SI62	18.8	
津留	17	遺構以外	1367.4		津留	17	SI76	18.1	
津留	17	SI68	1266.6		津留	12	SI18	15.6	
津留	14	SI47	1193.2		津留	14	SI44	14.8	
津留	14	SI48	925.4		幅	4	SI11	12.8	
津留	13	SI41	892.5		津留	16	SK106	12.0	
津留	13	遺構以外	791.7		津留	15	SI64	11.8	
津留	14	SI55	785.7		津留	20	SK108	10.6	
津留	17	SI79	774.4		津留	13	SI36	10.3	
幅	2	SX11	760.8		津留	17	SI75	9.4	
津留	16	遺構以外	696.6		津留	11	ST307	9.0	
津留	12	SI30	696.5		津留	19	SK68	5.7	
津留	15	SI43	677.0						
津留	12	SI20	671.0						
津留	13	SI40	666.9						
津留	15	SI63	626.2						
津留	20	SI75	593.7						
津留	14	SI54	559.8						
津留	14	SI50	512.2						
津留	15	SI61	394.2						
津留	14	SI51	345.9						
津留	19	SI74	325.3						
津留	14	SI52	311.8						
津留	16	SI80	308.1						
津留	12	SI14	272.3						
津留	12	SD10	268.9						
津留	12	SI22	247.1						
津留	14	SD10	193.3	SD11					
津留	12	SI19	189.0						
津留	11	遺構以外	177.5						
津留	17	SI78	175.2						
津留	12	SI24	143.4						
津留	10	遺構以外	116.5	SX26					
津留	17	SI67	108.9						
津留	20	SI66	95.8						
津留	19	遺構以外	88.7						
津留	12	SI13	87.4						
津留	15	SI60	87.3						
津留	12	SI16	78.5						
津留	17	SI71	78.1						
津留	17	SI70	57.6						
津留	16	SK94	49.9						
津留	20	SI84	47.5						
津留	9	遺構以外	43.0						
津留	12	SI32	42.2						
津留	9	遺構以外	37.0	ST284					
津留	16	SI81	33.2						

報告書抄録

ふりがな	はば・つるいせき							
書名	幅・津留遺跡							
副書名	熊本県道28号熊本高森線道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告							
巻次	第2分冊							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第336集							
編集者名	宮崎敬士							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒 862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 TEL 096-383-1111(内線6716)							
発行年月日	西暦 2019年 3月 31日							
ふりがな 所収遺名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号							
くまもとけんあそぐんみのみあそむらおおさがりよしらへいあざわは、せもとじんあそぐんたんじんじゆうじゆうあおあきたかもあがづる はば・つるいせき 熊本県阿蘇郡南阿蘇村大字面俣字幅、熊本県阿蘇郡高森町大字高森字津留	43429	019	32度 48分 34秒	131度 6分 58秒	2006/5/01 ~ 2019/2/27	8.748	道路整備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
幅・津留遺跡	集落	弥生	弥生時代 土塁墓 271基 竪穴建物 70軒 集溝 3条 円形周溝 1基 他 古墳時代以降 竪穴建物 5棟	弥生時代 土製品:土器、絵画土器片 石製品:勾玉、管玉、石斧、 打製石器、磨製石器、 石砲丁、石皿、磨石、 台石、イソジン形石製品 骨製品: 骨器、骨治 理遺物、青銅器 その他 ガラス小玉、 ガラス管玉、ベンガラ 古墳時代以降 鐵滓、鐵器、遜方、滑 石製石鍋(破片)	弥生時代 土塁墓が組成する。中期集落には 伴う台地縁辺部で発掘された。 両集落は、居住域を各溝が囲 繞し、発溝外に墓域が位置して いる。 墓域には、木棺土壙墓、直葬 土壙墓が組成する。中期集落に 伴う墓域には、土器陶葉漿(土 漿)が配置され、多量の赤鉄土 器が出土した。 後期遺跡には、攻玉造構(2棟以 上)、鍛冶遺構(2棟以上)が伴 う。鐵製品には、鐮、刀子、矛、ヤ リガシナ、小型工具、尖頭工具、 鍛冶用具、鍛冶用土器、鍛冶用薪等があり。 骨器・骨製品、鐵器、鐵製品等が組成 する。骨器群となる、三角鉄片等。 鍛冶関連遺物も出土した。 ガラス製品はすべて玉様で、カ リガラス小玉3点、ソーダ石灰ガ ラス小玉1点、船ハリウムガラス 製管玉1点が出土した。 攻玉造構では勾玉未成品が複 数出土し、攻玉造構の可能性が 高い遺構では管玉未成品も出土 した。 ベンガラが出土した。 出土土器には、北部九州、東 部九州の土器が含まれる。	弥生時代の集落と弥生時 代後期の集落が、阿蘇カルデラ 内の台地縁辺部で発掘された。 両集落は、居住域を各溝が囲 繞し、発溝外に墓域が位置して いる。 墓域には、木棺土壙墓、直葬 土壙墓が組成する。中期集落に 伴う墓域には、土器陶葉漿(土 漿)が配置され、多量の赤鉄土 器が出土した。 後期遺跡には、攻玉造構(2棟以 上)、鍛冶遺構(2棟以上)が伴 う。鐵製品には、鐮、刀子、矛、ヤ リガシナ、小型工具、尖頭工具、 鍛冶用具、鍛冶用土器、鍛冶用薪等があり。 骨器・骨製品、鐵器、鐵製品等が組成 する。骨器群となる、三角鉄片等。 鍛冶関連遺物も出土した。 ガラス製品はすべて玉様で、カ リガラス小玉3点、ソーダ石灰ガ ラス小玉1点、船ハリウムガラス 製管玉1点が出土した。 攻玉造構では勾玉未成品が複 数出土し、攻玉造構の可能性が 高い遺構では管玉未成品も出土 した。 ベンガラが出土した。 出土土器には、北部九州、東 部九州の土器が含まれる。		

熊本県文化財調査報告 第336集

幅・津留遺跡（第2分冊）

熊本県道28号熊本高森線道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

平成31年（2019年）3月31日 第1刷発行

編集 熊本県教育廳教育総務局文化課

発行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 ホーブ印刷株式会社

〒861-8007 熊本市北区龍田弓削1丁目4番12号

Printed in Japan.

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第336集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：幅・津留遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2020年4月10日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>